

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 (20)

中國縦貫自動車道
建設に伴う発掘調査

10

1977・6

岡山県教育委員会

中國縦貫自動車道 建設に伴う発掘調査

10

序

岡山県教育委員会では、中国縦貫自動車道の建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を、昭和44年以来実施してきましたが、昭和51年10月をもって終了しました。発掘調査は開始して以来、約8年におよび、75の遺跡を調査しました。

本書はこの発掘調査に係る報告の第10分冊目にあたり、落合町以西の第二次整備区間に所在する桑原遺跡、新見庄関連遺跡（祐清塚、二日市調査区）、岩屋城址、中林遺跡、西江遺跡、土井遺跡、大倉遺跡の7遺跡について収録したものであります。本報告書は限られた期間のなかで整理、執筆したために不充分な点もあろうかと思いますが、本書が県北の歴史究明のための素材として幾分でも御活用いただければ望外の幸せであります。

末筆ながら、発掘調査の実施にあたりましては、日本道路公団ならびに中国縦貫自動車道埋蔵文化財保護対策委員会をはじめとして、関係地元各市町教育委員会、その他関係各位からひとかたならぬご協力とご指導を賜ったことに対し厚くお礼を申し上げます。

昭和 52 年 6 月

岡山県教育委員会

三 眇 野 小 長 教 育

例　　言

1. 本調査報告書は、日本道路公団の委託により、岡山県教育委員会が実施した中国縦貫自動車道建設用地にかかる埋蔵文化財の緊急発掘調査の概要である。
2. 岡山県内の発掘調査は、第一次整備区間と第二次整備区間に分かれ、第一次整備区間には25遺跡あった。発掘調査は昭和44年3月久米郡久米町久米廃寺に着手して以来、昭和48年6月30日英田郡作東町高本遺跡の調査終了まで4年3ヶ月を要した。この調査に係る報告書は5分冊に分けて刊行した。
3. 第二次整備区間は50遺跡あった。発掘調査は昭和51年10月に終了し、報告書も逐次刊行の予定である。本報告書は通巻第10分冊である。
4. 中国縦貫自動車道埋蔵文化財保護対策委員会の設置については、昭和42年5月、岡山県考古学研究者の会からの申し入れに基づいて設置した。昭和51年3月現在、対策委員に下記の諸氏を委嘱している。

勝央中学校教諭　　浅野克己（昭和47年11月～）
岡山大学教授　　近藤義郎（昭和47年11月～）
津山みのり学園　　植月壮介（昭和44年4月～）
院庄小学校教諭　　土居徹（昭和44年4月～）
津山高等学校教諭　　宗森英之（昭和47年11月～）
津山市文化財保護委員　　渡辺健治（昭和44年4月～）

5. 調査は、岡山県教育委員会文化課が、埋蔵文化財保護対策委員会の助言をうけて実施した。
6. 報告書作成については、中国縦貫自動車道埋蔵文化財保護対策委員会の諸先生方に有益な助言をうけた。

以下、昭和52年度の構成員をあげる。昭和44年度～51年度については既刊第1～9分冊を参照されたい。

昭和52年度

収蔵庫は正式に文化課分室となり、本格的な機能をもつようになった。しかしながら、報告書の作成に従事する調査員は6名となり、残りの調査員は文化課デスク担当、百間川遺跡の調査、教員へ復職、他県へ転職、そして退職するなど各方面に散っていった。そのため、報告書作成に専従する者と自分の勤務の間隙をぬって執筆する者が互いに連絡しあって完成させるという方法で行わなければならなくなつた。

文化課

課長　飛田真澄
課長補佐　塩見篤

文化主幹 小川佳彦（文化係長事務取扱）
文化財二係長 光吉勝彦
文化財保護主査 河本清
文化財保護主事 正岡睦夫 山磨康平
主事 岡本寛久

文化課分室

文化財主幹 難波進
文化財保護主査 葛原克人
文化財保護主事 伊藤晃 井上弘 下沢公明 松本和男 岡田博
主事 浅倉秀昭 竹田勝 福田正継 中野雅美 内藤善史 藤井守雄

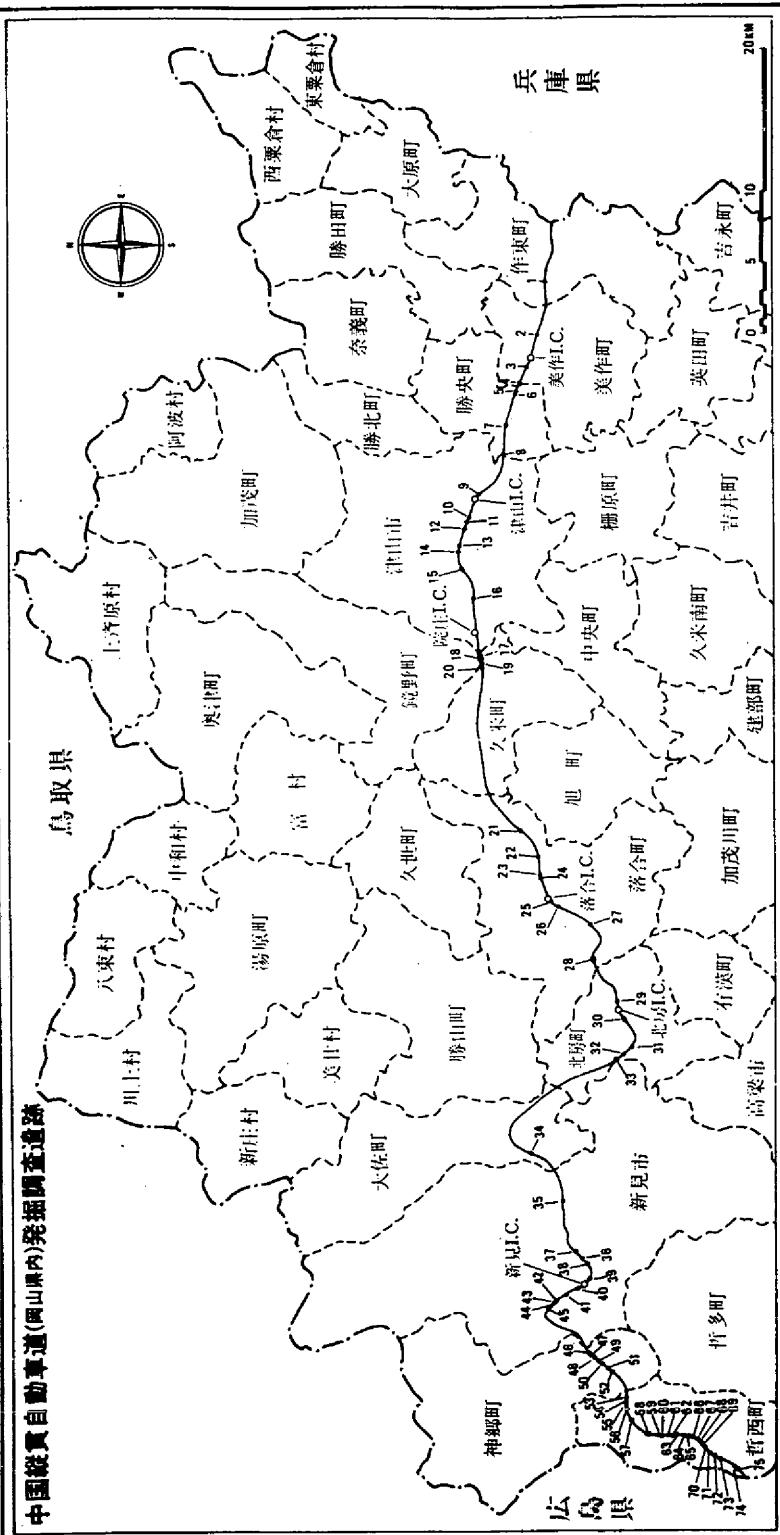
7. 本書に用いたレベル高は海拔高である。
8. 本書に用いた地形図は、国土地理院発行の地形図（承認済）、哲西町教育委員会提供の地形図及び日本道路公団作成図である。
9. 本報告書に用いる時代区分は一般的な政治区分に準拠し、それを補うため文化史区分と世紀を併用した。
10. 各遺跡調査地周辺の地元の人々、また新見市、神郷町、哲西町の各教育委員会には有形無形の協力を得た。

なお、陶磁器については九州歴史資料館の亀井明徳氏の御教示を得た。

11. 本報告書に公表した出土遺物は岡山県教育庁文化課分室（岡山市西古松265）において保管している。

なお、中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査（75遺跡）で出土した遺物は全て岡山県教育庁文化課分室に保管している。但し、津山市関係の出土遺物（天神原遺跡、押入飯綱神社古墳群、押入西遺跡、野介代遺跡、志戸部調査区、沼古墳群、美作国府跡、二宮大成遺跡）は津市教育委員会が保管している。

中國機械自動車道(岡山県内)整備計画



総 目 次

序

例 言

総 目 次

I 調査及び遺跡保護の経緯と問題点	7
II 発掘調査の概要	
1. 桑原遺跡 (38)	13
2. 新見庄関連遺跡	27
祐清塚 (45)	41
二日市庭調査区 (41)	46
3. 岩屋城址 (岩屋経塚) (49)	87
4. 中林遺跡 (56)	157
5. 阿哲郡哲西町の地理的、歴史的環境	167
6. 西江遺跡 (58)	173
7. 土井遺跡 (61)	463
8. 大倉遺跡 (67)	527

I. 調査及び遺跡保護の経緯と問題点 (昭和51年度)

中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は、昭和44年3月久米庵寺の発掘調査に始まり、本年度で、足掛8年を数え、ようやくにして、最終年次をむかえるに至った。

岡山県西北端にあたる阿哲郡哲西町・神郷町は、生活に良好な南面する低丘陵がつづき、それを縦走する建設ルート30Km内に34遺跡が密集し、丘陵全体が遺跡であるといつても過言ではない実状にある。

したがって、工事中において、新たに遺跡が発見される可能性もあり得るものと予想されていたが、それが現実となり、多数の問題を生じた。

1. 工事中発見遺跡の対応

昭和51年度の発掘調査の調査対象遺跡は、19遺跡を数えた。道路公団の工事発注は、既に50年9～12月にされ、工事の進捗は著しいものがあり、発掘調査期間も昭和51年7月に終了することを公団から強く要望されたが、再々の調査期間延長の協議を重ね、最終的に2ヶ月延長し、9月が限度となつた。したがって、調査体制においても、調査員1名を増員し14名（7班編成）とすることにした。この様な事態において、工事中に遺跡が新発見された場合、その対応には困難が伴うことは云うまでもない。

その対策として、再度にわたる現地踏査を実施し、工事中発見を最小限にとどめるよう対策を講じた。しかしながら、埋蔵文化財の性質上、その可能性はあり得るものとして、遺跡の破壊を最小限にとどめる必要上事前に道路公団担当者に対し、工事中に埋蔵文化財を発見した場合は、直ちに工事を中止し、報告することを徹底するとともに早期発見に努めた。

工事中発見遺跡

所 在 地	名 称	種 類	調査対象面積	発見年月日
阿哲郡哲西町二本松	二本松遺跡	弥生～古墳前期・住居址 平安・鎌倉・建物群	500m ²	昭和51年4月28日
“ ” 岸本下	岸本下遺跡	古墳前期・住居址	800m ²	昭和51年4月28日
新見市下熊谷	古 墳	箱式石棺	50m ²	昭和50年10月29日

以上が工事中に新たに発見された遺跡であるが、発端は機材・資材の搬入運搬に使用する工事用道路を建設するため、ブルドーザーにより掘削中に発見されたものである。現地は、すでに工事道路部分だけは掘削されていたため、未着手地の遺跡の範囲を繩張り、公団との覚書にもとづき工事実施計画の延長変更を求めた。しかしながら、現地はいずれも既設道路に隣接し、工事用道路出入口にあたるため、工事の延長は他の地域にも影響を及ぼすため交渉は難行したが、調査期間は3ヶ月とし、7月末までとなった。

問題は、調査体制で、前述のとおり調査員14名（7班編成）調査作業員約120名をもって、9月末

まで19遺跡を調査する過密スケジュールで対応しているため、新規発見遺跡を調査する余裕は皆無の現状である。

したがって、窮屈の策として、調査員は、文化課において保護行政全般を担当している専門職員4名のうち2名を急遽派遣し、作業員も地元住民からは雇用の余地がないため、道路公団から道路建設作業員の提供を受け、背水の陣で発掘調査の実施にこぎつけた。

調査にあたっては、工作物（ボックス・排水管等）付設が急がれるため、付設区域から調査を着手する等、臨機の措置をとりながらも、全面発掘調査を行い記録保存措置をとった。

文化財保護法が昭和50年10月に改正され、工事中新規発見遺跡の取扱について、細部にわたり規定され、遺跡の保護の側に、調査期間等に制限条件が付せられているが、実際の運用にあたっては、遺跡の所在する土地所有者、その他関係者と十分話し合い、その協力を得て適切な措置を執ることが肝要であり、土木工事等の停止等の命令（法にもとづくもの）は、そのような話合いで、事実上の協力が得られない特殊な事態における最終手段として運用すべきものである。

したがって、今回の場合においても、双方、（文化財保護側・道路建設側）お互に協力し、最善の方法と云えないまでも、遺跡の保護に努力した。しかし、今後、埋蔵文化財保護対策の課題として検討を要する問題である。

2. 調査遺跡の保存保護対策

日本道路公団の建設工事に伴う埋蔵文化財の保護については、開発計画策定段階において、事前に開発予定地内の遺跡分布調査を実施し、その資料にもとづき協議のうえ、次の各号に区分して必要な措置をとることになっている。

- 1) 事業区域に含めないもの——埋蔵文化財包蔵地をはずして、ルートを策定する
- 2) 事業区域に含めるが保存をはかるもの——工事工法（トンネル・高架・緑地帯）により保存する
- 3) 発掘調査を行って記録を残すもの——事前協議段階で上記1)2)等により最少限にとどめるよう措置する。

上記のことがらについては、ルートが決定される事前の協議として行われるものである。特にここでは、3)にもとづき発掘調査の段階で、埋蔵文化財の性質から、保存を計るべき重要な遺跡であることが判明した場合の保存保護の対応策について述べるものである。

現状保存を要望した横見墳墓群（新見市上市地区）

1. 現状保存を要望するに至るまでの経緯

横見墳墓群は、建設ルート策定資料の埋蔵文化財包蔵地に記載されてなく、当初は同尾根末端に所在する横穴式石室墳1基が調査対象となっていた。昭和50年3月に岡山県5ヶ年埋蔵文化財分布調査により確認され、更に同年4月県教委において再調査の結果、墳墓13基のマウンドが確認されたため発掘調査に入った。発掘調査の初期の段階で次のことがらが判明した。

1. 弥生時代後期～古墳時代前期の方墳13基、石棺墓、木棺直葬墓等の墳墓群であり、弥生時代後期から古墳時代にわたる墓制の変遷を解明する重要な遺跡である。
2. 備中の国北端に位置し、出土遺物等からも山陰（出雲東部）と交流がうかがえるため、貴重な資料となる。

昭和50年6月28日に開催された中国縦貫自動車道埋蔵文化財保護対策委員会において、遺跡の現状保存の意見が提案され、現状保存が可能であれば、発掘調査はこれ以上に進めることは好ましくない旨の指示を受けた。直ちに、日本道路公団に遺跡の現状保存の検討を要請し、次の回答を受けた。

横見墳墓群現状保存に係る縦貫道路計画変更の技術的検討（回答）

古墳を現況保存したうえで縦貫道を施工するためには、大巾な計画変更を行う必要がある。また計画から地元協議、詳細計画、用地買収に至る間は、この古墳は小規模（横穴式石室1基）なもので記録保存とされていたため、住民にはこの事は知らされてなかった。

これらの観点から住民に対して、影響を少なくすべく技術検討を行なったが、次のことにより、住民に莫大な影響を及ぼすこととなる。

1. 上り線は、トンネルでさけることが可能である。
2. 下り線は、トンネル施工の技術条件である施行可能なトンネル断面が安全基準を上廻る。
(土質及び土被り厚さが少ないとにより施工不可能である)
3. 下り線をオープンカット方式つまり土止め方式で施工する工法は、切土高さ30mとなり、土圧抑制が不可能であり、また開通後の安全性を考慮すれば、とうてい採用出来ない。
4. 1～3の理由により、上り線はトンネル施工・下り線は西側に寄せ一部片面カット施工の計画変更となる。変更により新しく縦貫道敷地として、家屋7戸、田畠16,000m²が必要となる。

よって、狭少な上市地区平地を費やすことは、地元住民におよぼす影響が大きく困難なことと判断される。

遺跡の現状保存を検討するとき、地元住民に及ぼす影響と保存に対する理解を得ることが最も重要な課題である。

- イ. 横見墳墓群は、昭和50年3月にはじめて遺跡の所在が確認され、地元住民にも知られていなかった。したがって、道路公団の地元協議から設計・土地買収に至るまで、住民は全く知らなかつたため、保存のコンセンサスを得るには難しい条件が多い。
- ロ. 現状保存のための設計変更をするには、山間の貴重な平野又多数の家屋の立退が必要であり、地元に対する影響が非常に大きい。

昭和50年8月28日開催の対策委員会で、道路公団提出の保存検討資料等を説明し、対策委員から今後更に一部保存を含めて検討することの要望があった。しかしながら、最終的には、発掘調査期間を延長（3ヶ月）し、充分の記録調査することとなった。

中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査対象遺跡は、75遺跡となつたが、現状保存がなされたのは、久米郡久米町の久米廃寺（白鳳期）が建設工事を高架橋に設計変更し保存が講ぜられた一例にすぎず

その困難性がうかがえる。

終りに、土盛工事区間に出土した、縄文時代後期の住居址（阿哲郡哲西町佐藤遺跡）、及び縄文時代晚期の貯蔵穴群（真庭郡落合町宮の前遺跡）の遺構に川砂を被覆保護し土盛工事を実施したことをお記しておきたい。

なお、昭和51年度対策委員会記録は、次のとおりである。（文責 光吉勝彦）

資料1 遺跡現状保存に要する経費積算（日本道路公団回答）

工種		単位	数量	単価	金額(千円)	摘要
伐開除根		m ²	△ 5,000	200	△ 1,000	トンネルによる数量の減
道路掘削	土砂	m ³	△ 24,500	700	△ 17,150	"
	軟岩	"	△ 40,000	1,100	△ 44,000	"
	硬岩	"	△ 45,000	2,000	△ 90,000	"
	法面工	m ²	△ 6,000	1,000	△ 6,000	"
トンネル		m	170	2,000,000	340,000	
C-B×9×6		"	21	1,000,000	21,000	
C-B×5×4 ⁵		"	7	400,000	2,800	
C-B×6 ⁵ ×5 ⁵		"	22	600,000	13,200	
C-B×4 ⁵ ×4 ⁵		"	29	350,000	10,150	
C-B×4×4		"	30	300,000	9,000	
C-P×φ10		"	22	40,000	880	
ブロック積み工		m ²	200	12,000	2,400	
河川付替 W50		m	250	60,000	15,000	
工事費	計				256,280	
補償費	家屋	戸	7		70,000	
	宅地	m ²	1,000		20,000	
	水田	"	11,000		110,000	
	畠地	"	5,000		50,000	
	山林	"	10,000		10,000	
	計				260,000	
	合計				520,000	

中国縦貫自動車道埋蔵文化財保護対策委員会

(昭和51年度)

月 日	場 所	審 議 事 項	指 摘(要望)・そ の 他
51. 6. 5	新 見 市 哲 西 町	昭和51年度調査スケジュール説明 発掘調査現地指導 宗金遺跡・西江遺跡 横田遺跡・大倉遺跡 清水谷遺跡・四日市古墳 塚の峯遺跡・二本松遺跡 岸本下遺跡	1) 横田遺跡等調査期間を充分検討指示 2) 清水谷遺跡・四日市古墳・岸本下遺跡調査終了
51. 8. 6	新 見 市 神 郷 町 哲 西 町	発掘調査現地指導 桑原遺跡・宗金遺跡 山根屋遺跡・佐藤遺跡 西江遺跡・横田遺跡 藤木城址・忠田山遺跡 御供川遺跡・塚の峯遺跡 二本松遺跡	1) 佐藤遺跡・縄文後期住居址遺構等の川砂被覆保護指示 2) 山根屋遺跡・御供川遺跡 塚の峯遺跡・二本松遺跡調査終了
51.10. 5	新 見 市 神 郷 町 哲 西 町	発掘調査現地指導 宗金遺跡・門前中屋遺跡 佐藤遺跡・西江遺跡 横田遺跡・藤木城址 忠田山遺跡・岸本城址 発掘調査現地最終反省討議	8年間にわたる中国縦貫道埋蔵文化財現地調査を10月末をもってすべて終了した。
52. 1.29	岡山市西古松 文化課分室	調査報告書 8 分冊原稿討議 岩倉遺跡・岩倉古墳群・谷内遺跡 安信古墳群・塚谷古墳 旦の原遺跡	報告書頁数の制約をしないように配慮すること。
52. 3.30	岡山市西古松 文化課分室	調査報告書 9 分冊原稿討議 横見古墳群・横見墳墓群 迫三方塚遺跡・新市谷遺跡 古坊遺跡・光坊寺古墳群 二野遺跡 昭和52年度調査報告書作成計画	表示・縮尺等、出来るだけ統一すること。

桑原遺跡 (38)

桑原遺跡(38)

本文目次

1. 桑原遺跡の概要	16
位置	16
経過	16
2. 日誌抄	17
3. 遺構	17
4. 出土遺物	18
土器	18
古銭	20
石仏	22
5. まとめ	22

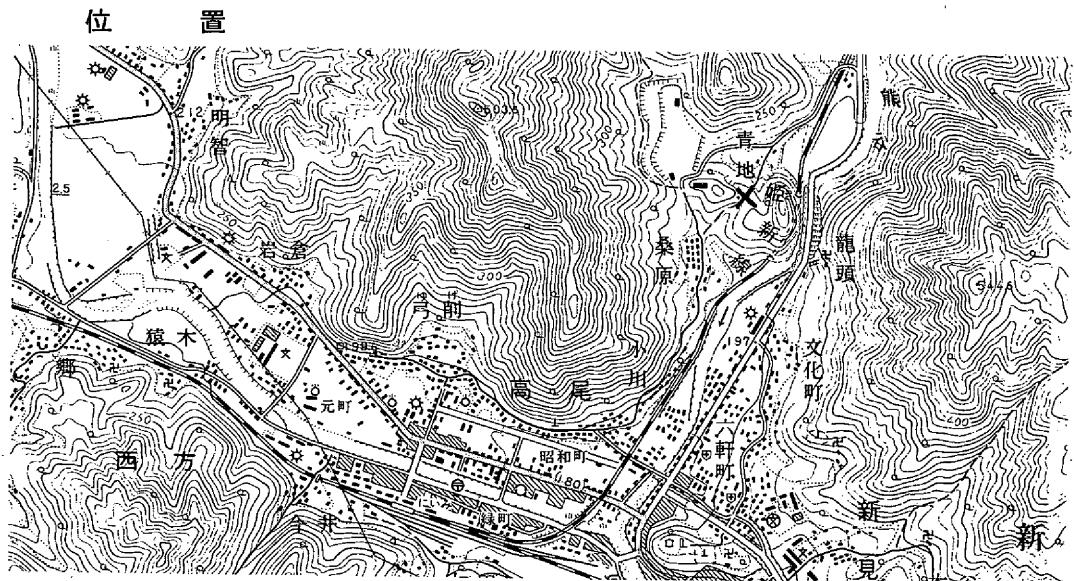
図目次

第1図 桑原遺跡付近地形図(S=1:25000)	16
第2図 遺構平面図(S=1:50)	16~17
第3図 遺構断面図(S=1:50)	16~17
第4図 出土土器実測図(S=1:4)	18
第5図 出土土器実測図(S=1:3)	19
第6図 出土古銭拓影(S=1:2)	21

図版目次

- 図版1-1 調査前の状態(北西より)
- 図版1-2 調査前の状態(西より)
- 図版2-1 調査状況
- 図版2-2 境界石
- 図版3-1 石積遺構(東より)
- 図版3-2 積石除去後の状況(東より)
- 図版4-1 出土石仏

1. 桑原遺跡の概要



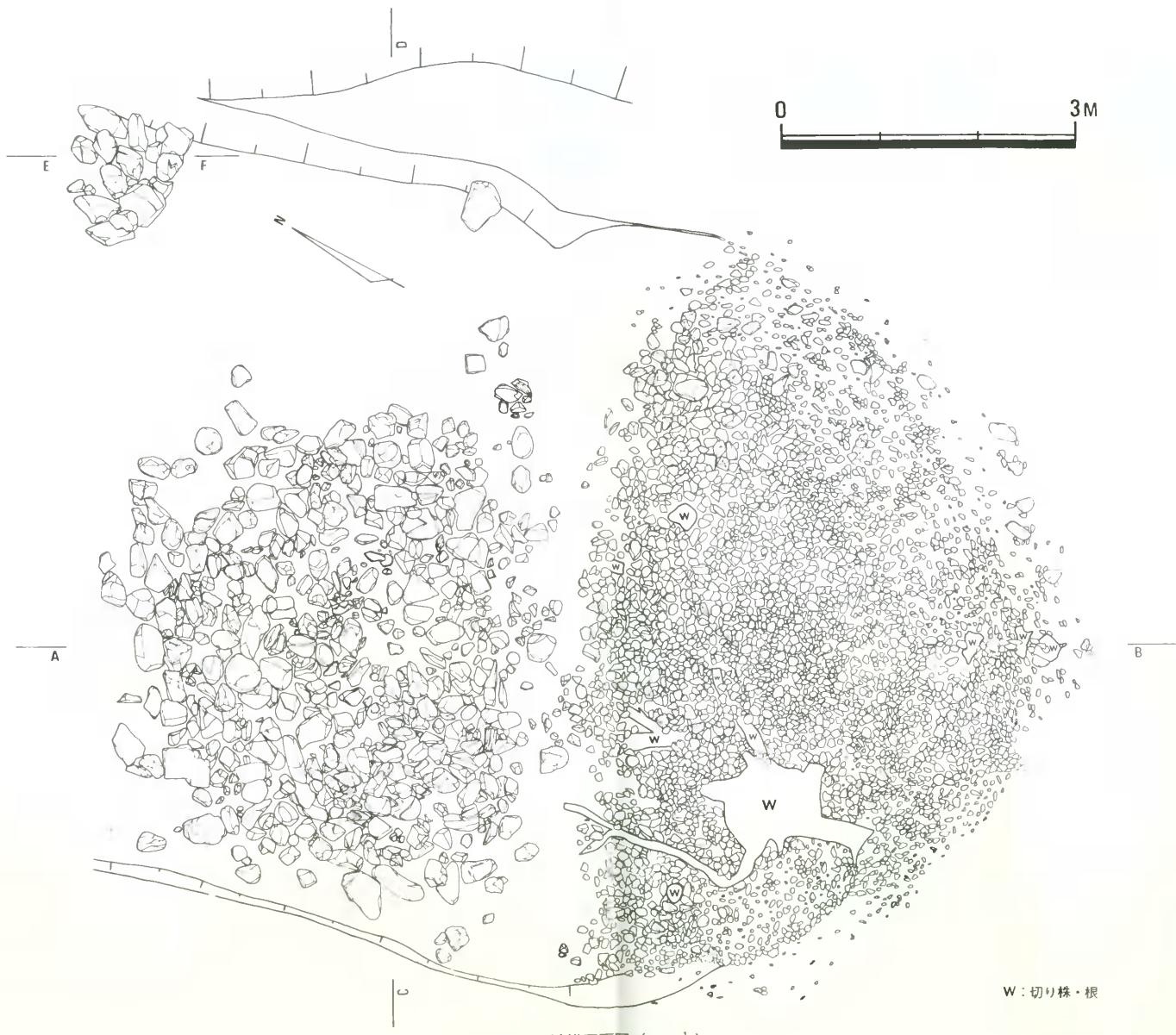
第1図 桑原遺跡付近地形図 ($S = \frac{1}{25000}$) (X印)

桑原遺跡は、新見市桑原と同市下熊谷青地の境界線上（新見と勝山方面を結ぶ旧街道の北側）に位置している。この街道は、新見で高梁川に注ぐ熊谷川に沿っているが、市街地から出ると山沿いに桑原の部落を通り、さらにゆるやかに上って桑原遺跡の存在する峠に至り、これより青地の部落に向ってだらだら下りて行くことになる。この道は、現在の県道が開通するまで、この方面への唯一の幹線道で、利用度の高いものであった。その後は、青地とを結ぶ生活道として利用されていたが、従前程の意義をもたなくなり、さらに近年この道の北側に自動車の通る道ができるからは、たまにしか利用される事のない道となっている。なおこの峠は哲多郡と英賀郡の郡境にあり、境界線としての性格が非常に強いものである。この峠は標高240mで、川からは50m以上高いところにある。

経過

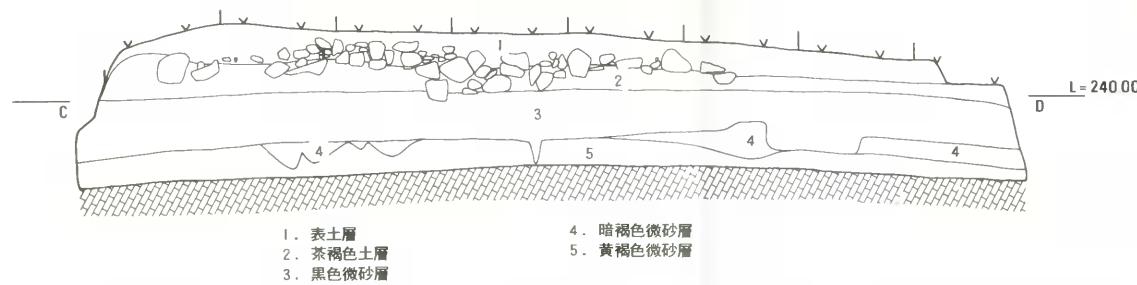
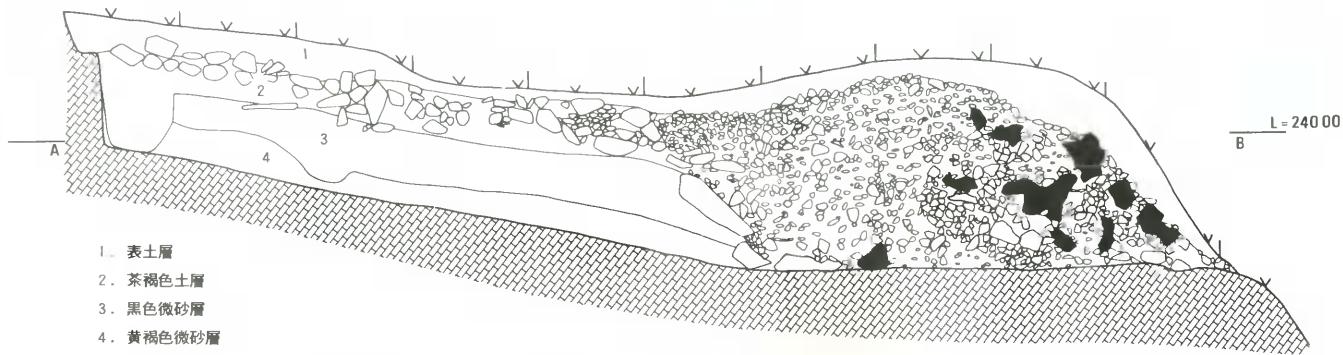
桑原遺跡は、事前の分布調査等で確認されていなかったが、中国縦貫道の当遺跡周辺における工事が始まっていた昭和49年9月頃に、地元地権者等より、「ジャリ石がたくさんあるところから、お地蔵さんが出て来た。」との通報があり、県教委文化課で調査を行った結果、小石積みの塚状遺構を確認した。様子からみて経塚遺跡の可能性が強いとし、発掘調査を行うこととした。しかし当用地が未買収地であった為、用地買収の終了した昭和50年7月より、調査員1名、作業員2名で調査に入った。

調査前における地形測量は、現地の工事区を担当している西松建設に依頼した。また作業員2名も



第2図 遺構平面図 ($S = \frac{1}{50}$)

W: 切り株・根



第3図 遺構断面図 ($S = \frac{1}{50}$)

桑原遺跡(38)

提供を受け、7月19日より宗金遺跡を調査中の内藤が、調査に従事した。現場付近は工事がかなり進んでおり、ダンプ・重機の行き交う中で、発破作業時には、一時避難をするというような悪条件下での調査となった。

調査は、まず石積上に堆積している土・根・枯れ葉等を取り除き、石積遺構の平面実測を行い、次に西側半分の積石を取り除いて断面の実測を行ったが、石は一つ一つを手で取り上げていく方法しかなく、石積の塚に根をはっていた切り株の取り除きにも手間取り予想外の時間を要する結果となった。小石積の遺構については、すべての石を取り除き、地山面まで遺構の確認を行った。また小石積遺構に北接してみられた石敷の遺構においては、平面・断面の実測を行い、石を取り除いて遺構の検出を試みた。石敷の下から地山までは東西・南北のトレンチにて調査を行ったが遺構は確認できなかった。最後に、遺跡内及び遺跡北側の重機による土砂取り除きに立ち合ったが、小石積・石敷遺構以外の遺構検出および遺物を確認する事は出来なかった。

発掘調査に際し作業員として、小谷光久・松永里美・山本光三郎・小谷百代氏らの協力を得た。また調査中、大塚基氏をはじめとして西松建設には多大の協力を得た。なお、発掘調査、報告書作成にあたり、井上弘氏をはじめ、調査員諸氏の助言を得た。記して感謝の意を表します。

報告書の作成は昭和52年6月までに内藤善史が行った。

2. 日誌抄

1976年7月19日(月) 器具搬入 全体写真の撮影 表土層めくり

7月20日(火) 表土層めくり

7月21日(水)~23日(金) 表土層めくり 小石積遺構平面実測

7月26日(月)~27日(火) 表土層めくり 清掃 小石積・石敷遺構平面実測

7月28日(水) 清掃・写真撮影 小石積遺構西半分削除 石敷遺構平面実測

7月29日(木) 小石積西半分削除 石敷遺構実測

8月3日(火)~7日(土) 小石積遺構西半分削除 石敷遺構実測

8月10日(火)~11日(水) 小石積遺構西半分削除 断面写真撮影・実測

8月12日(木)~13日(金) 小石積遺構断面実測 石敷遺構の石除去

8月17日(火)~21日(土) 石敷遺構下にトレンチをいれる 小石積遺構の石除去 小石積遺構下の遺構確認。

8月24日(火) 除去後全体の実測

8月25日(水) 遺構付近の重機による土砂取りに立ち合い。器具の撤収。

3. 遺構

峠の北側と南側には、かなり急な斜面をもつ山が迫っているが、北側の尾根端部は10m程傾斜が

ゆるやかになって、街道に突出している。その突出した部分のうち、もっとも低くなっている道から5~6mのところまでに、自然の地形をほとんどそのまま利用して、南北5~6m。東西6~7mの楕円形状に、直径10cm前後の川原石を中心とした石を、高さ1.5~1.7mまでに積み上げて、塚状の遺構が形成されている。小石積の最下部の周囲何個所かには、50~60cmの山石が配置されており、あらかじめ決まった範囲を聖地とし、その内に構築されたものであろう。10cm前後の川原石がこの塚の大半を占めており、塚構成の要素的意味を有しているが、この小石積の塚をかかえる様にして根をはっている杉の大木、そして石積の中に、立ち枯れの幹としてその残骸を残すのみとなっていた古木も、塚構成の要素の一つと考えられる。特に、枯れていて樹齢を知ることの出来ない古木は、積石下に根をはっていたもので、積石塚の形成はこれを基準にしていたとも考えられる。一方積石塚の西端部近くに根をはっている杉の木は、年輪から樹齢200年を数えるものであるが、これは明らかに積石塚がある程度形成された後からのもので、この積石塚形成の年代を知る手掛りともなっている。積石塚中からは、74枚の古銭と、数片の弥生式土器片、土師式土器片が採集された。

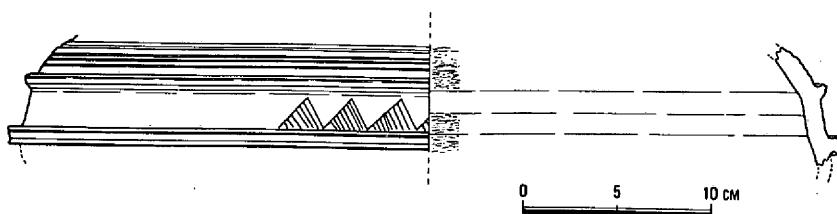
この小石積塚状遺構の北側には、南北4m・東西5mの長方形の範囲内に、主に30~40cmの山石が地形に沿って1~2重に敷かれている集石(石敷)遺構がみられた。この敷石は自然のものではなく、意図的に敷かれたものであるが、その上に建物等の存在していた形跡はない。また敷石積下部からも遺構を検出することはできなかった。

4. 出土遺物

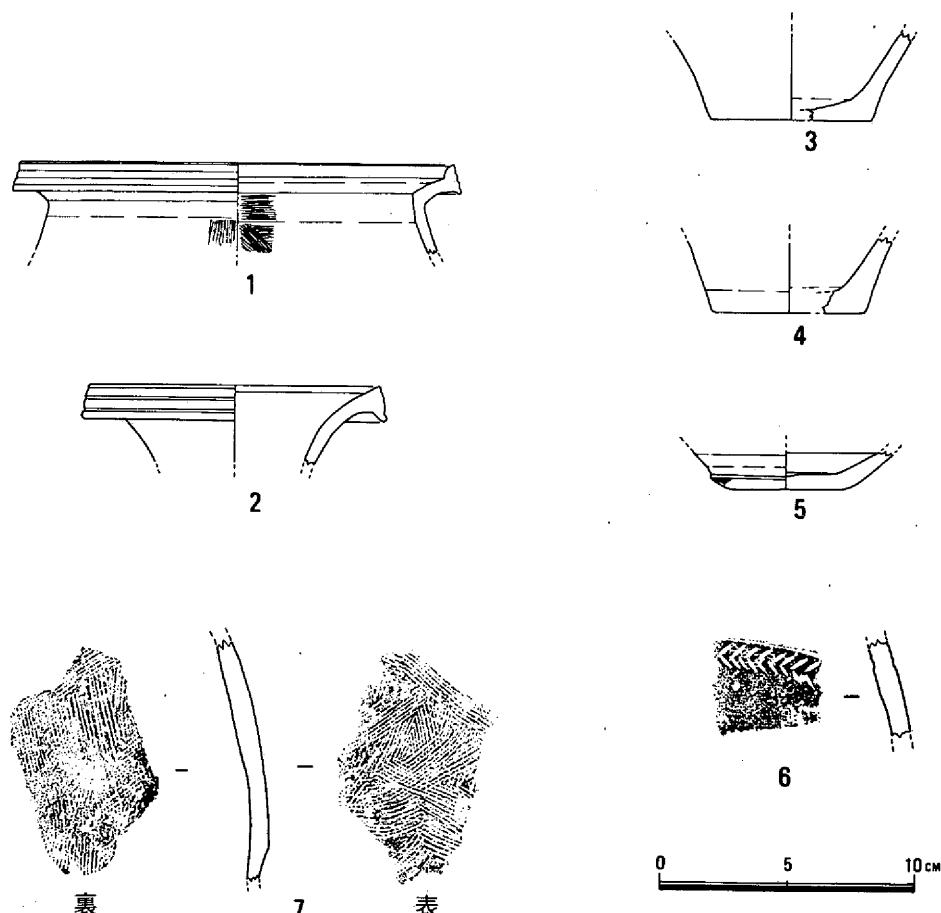
土 器 (第4図、第5図)

第4図の土器は小石積の遺構中より出土した土器片で、肩部に貼り付け凸帯をもつ壺形の土器の一部である。2本の凸帯の間は、横方向の刷毛による調整の上へ、上方に向う鋭い切り込みの鋸歯文が施されている。上側の凸帯の上方には数本の沈線文が施されている。内面はヘラケズリ調整がなされているが、上方凸帯内面は指圧による調整がみられる。外面は丹塗りが施されている。胎土は細砂を含んでおり、焼成は良好である。色調は赤褐色を呈している。この土器片は、特殊壺と呼ばれている土器の一部である。

第5図の土器は、小石積の遺構から出た土器片で、1は甕形土器の口縁片とみられ、口径17cmを測



第4図 出土土器実測図 ($S = \frac{1}{4}$)

第5図 出土土器実測図 ($S = \frac{1}{3}$)

る。「く」の字形に外反する頸部をもち、口縁端部が上下にのびている。端面には凹線が施されている。体部外面は左斜めに、内面頸部は横方向の、また横方向の上側を右斜めの方向に刷毛目調整がなされている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。外面は、淡い赤褐色をまた内面は明るい黄褐色を呈している。2は壺の口縁片で、口径11.5cmを測る。口縁端部は下にのび、端面に沈線が施されている。体部はナデにより調整されている。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である明るい黄褐色を呈している。3、4はいずれも土器の底部片で、それぞれ6.4cm、6.0cmの底部径を測る。4の内側は刷毛目による調整がなされている。砂粒を含む胎土で焼成は良好である。3は明るい黄褐色を呈している。4は内側が赤茶褐色、外側が淡黄褐色を呈している。5は白っぽい土器の底部片で、底部の径は4.5cmを測る。内側は刷毛目による調整が、外側はヘラケズリがなされているあまりきれいな仕上げではない。胎土も米粒大の石を含むなどやや荒く、焼成も普通である。乳白色を呈している。6は外面に「く」状の模様を帶状に配した土器片で、砂粒を含んでいるが、焼成は良好である。外面には丹塗りが施されている。7は内外面に櫛描きの模様の施された、やや荒い胎土の土器片である。内側は淡黄褐色と外側は淡い赤褐色を呈している。

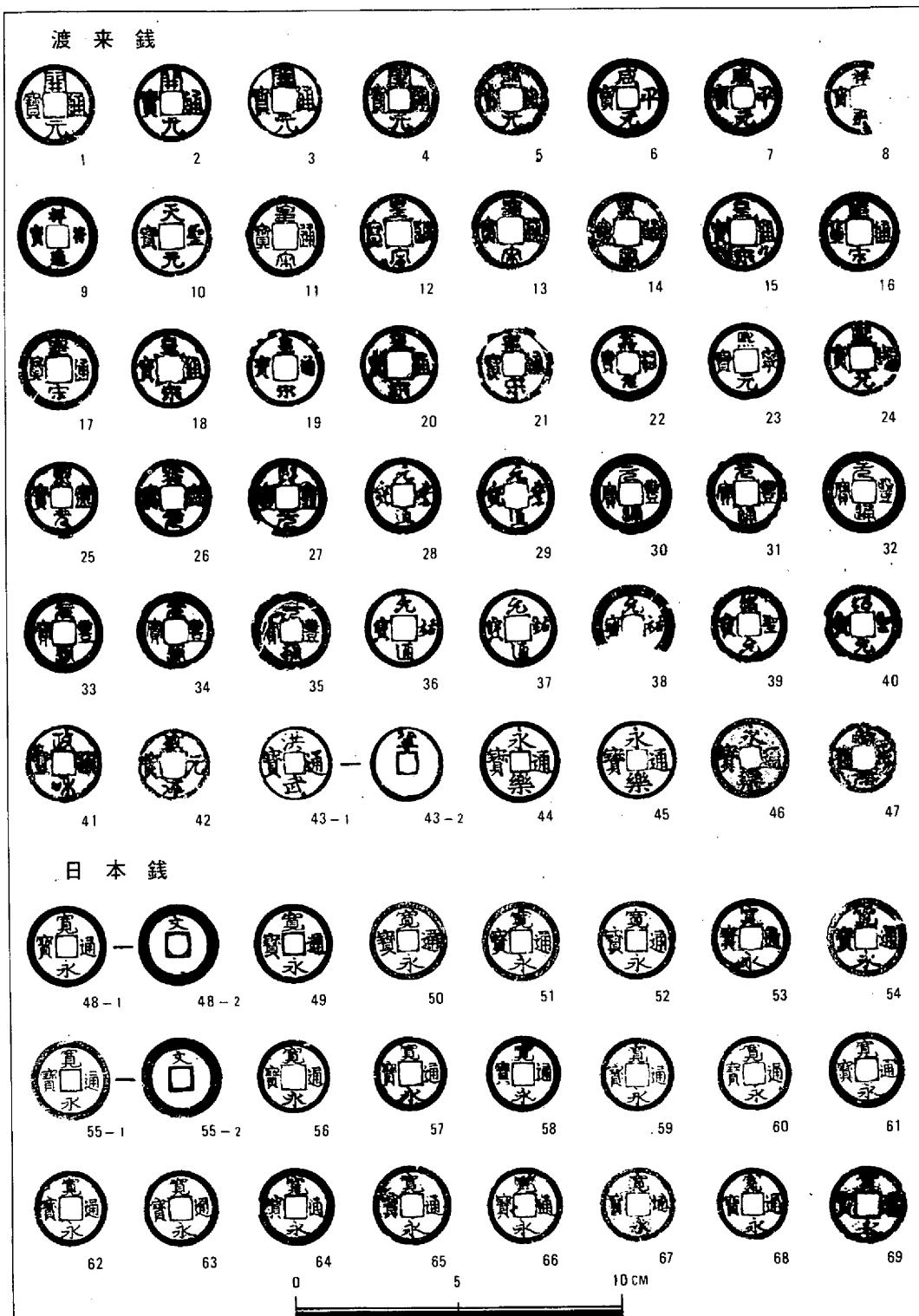
古銭(表、第6図)

小石積の遺構中より、総数74枚の古銭を採集している。種類別にみると、渡来銭(1~47)では、宋銭(南宋銭一例を含む)が11種類37枚と大半を占めている他は、明銭が2種4枚と開通元宝(開元通宝)5枚を数えている。宋銭37枚のうちでは11枚の皇宋通宝と8枚の元豊通宝が多く、それぞれ2字体に分かれている。また5枚ある熙寧元宝には3種類の字体がみられる。また紹聖元宝、元祐通宝も2種の字体がみられる。渡来銭は大体において遺存状態が悪いが、特に南宋銭の咸淳元宝は悪い。渡来銭でも明銭は状態がよい。北宋銭にも、咸平元宝・天聖元宝等に状態よく出ているものがある。なお19の皇宋通宝は穴を穿っている。日本銭(48~70)では、21枚の銅銭寛永通宝と、4枚の鉄銭(2枚は寛永通宝、残り2枚は判読不能)を採集した。寛永通宝は幾種類にも分類できるが、背文字のあるのは2枚で、いずれも「文」である。これらの古銭から、遺跡の時期決定は不可能であるが、渡来銭の多くは、小石積遺構の中央底に近い部分から、寛永通宝は外側に近い部分で採集され、中心部・底部に皆無であること、はこれらの古銭が、川原石を手向けると同様の意図をもっていたであろうことから、古銭の埋没にある程度の時期差を示していると思われる。

出土古銭一覧表

錢貨名			初鑄年代	出土数	拓影図
開元通寶 (開通元寶)	銅銭	唐	武德4(618)年	5	1~5
咸平元寶	"	北宋	咸平2(999)年	2	6~7
祥符通寶	"	"	大中祥符2(1009)年	2	8~9
天聖元寶	"	"	天聖元(1023)年	1	10
皇宋通寶	"	"	寶元2(1039)年	11	11~21
嘉祐元寶	"	"	嘉祐2(1057)年	1	22
熙寧元寶	"	"	熙寧元(1068)年	5	23~27
元豊通寶	"	"	元豊元(1078)年	8	28~35
元祐通寶	"	"	元祐8(1093)年	3	36~38
紹聖元寶	"	"	紹聖元(1094)年	2	39~40
政和通寶	"	"	政和元(1111)年	1	41
咸淳元寶	"	南宋	咸淳元(1265)年	1	42
洪武通寶	"	明	洪武元(1368)年	1	43
永樂通寶	"	"	永樂6(1408)年	3	44~46
寛永通寶	"	日本		21	48~68
寛永通寶	鉄銭	"		2	69
判讀不明	銅銭			3	47
判讀不明	鉄銭			2	

桑原遺跡(38)



第6図 出土古銭拓影 ($S = \frac{1}{2}$)

石 仏 (図版4-1)

高さ33.4cm、幅25.2cm程の非常に拙い、浮彫りの双体像である。磨滅が激しく判然とはしないが、男女の区別を示しているのか、左右異形（右側の像は太目でやゝ背が高く、頭は無髪と思われる。一方左側の像は、細目に背も幾分低く彫られている。頭髪はみられないが、頭上に冠の様なものがみられる。）の坐像で、手は合掌しているようである。着衣も簡単な僧衣とみられ、仏像的要素の強い道祖神像であろう。

磨滅の為か、銘を確認することができないので、時期決定をし難いが、像の彫り方が幼稚であること、像が神像というよりは仏像であること、モチーフが比較的単純であることからみて、江戸時代初期に属するものではないかと思われる。

5. ま と め

桑原遺跡は、確認された積石塚中に、経塚等の遺構の存在が考えられていたが、積石塚中からそのような遺構は検出できなかった。また、積石塚のすぐ北側に石敷の集石遺構がみられたものの、経塚等は存在しなかった。ところで、この小石積の塚は、川原石の積み重ねによって築かれているものであるが、この遺跡の周囲からはこの種の川原石は得られず街道の約50m下側を流れている熊谷川や新見市街を流れている高梁川の河原等から、一つ一つを携えて手向けられたもので、長い年月の間にこの塚ができあがったものである。この遺構は、賽の河原に準じた、「境意識が高揚され、他界との境を連想されるような峠」（註）に築かれた、信仰を対象とした遺構である。しかし、小石積の中から道祖神像一体が出土したことは、賽の神信仰と道祖神信仰とを考える上で一つの問題点である。この小石積の塚に、どのような形で道祖神像が存在していたのかが不明で、道祖神像に対して川原石が手向けられていたのか、或いは小石積の遺構に対して道祖神像が祀られることになったのか判然としない。小石積の塚から採集された古銭と、200年の樹齢を数える杉の木との存在状態から、この積石塚のできはじめた時期は江戸時代前期（寛永通宝初鋳年の1626年）以前で、おそらくは渡来銭が流通貨幣の中心であった時に、すでに存在していたであろう。しかし、これだけの塚が現在に云い伝えられていない事から、この街道が主要街道としての機能を失なうと軌を一にして、信仰対象としての機能を失ったものであろう。しかし、小石積の塚の上に置かれている一つの少し大き目な石（図版2-2）が今でも、新見市桑原と同市下熊谷青地との境界を示すものとして生きている。

(註) 野本寛一著「石の民俗」雄山閣 1975年



1. 調査前の状態（北西より）



2. 調査前の状態（西より）

図版2



1. 調査状況



2. 境界石



1. 石積遺構（東より）



2. 積石除去後の状況（東より）

図版4



1. 出土石仏

新見庄関連遺跡の調査

祐清塚 (45)

二日市庭調査区 (41)

例　　言

1. この報告書は中国縦貫自動車道建設に伴って、一部破壊もしくは歴史的景観をそこなうこととなった新見庄関連遺跡すなわち新見市谷内（にいみし　たにうち）所在の祐清塚（ゆうせいづか）推定地ならびに、新見市上市（かみいち）所在の二日市（ふつかいち）調査区にかかる文献調査・発掘調査の報告書である。
2. 文献調査は昭和49年8月16日～18日（第1次調査　3日間）、昭和49年11月28日～30日（第2次調査　3日間）、昭和50年12月16日（第3次調査　1日）の3次にわたって実施した。この文献班による調査成果については、岡山県立博物館主任三好基之氏にまとめていただき玉稿を賜わった。記して感謝の意を表するものである。なお、文献班の調査員・協力者については各次調査ごとに35～36ページに氏名を記させていただいた。
3. 発掘調査は文献調査班の意をうけて、昭和51年1月15日～2月9日にかけて実施し（26日間），祐清塚推定地についてはその期間内の2月3日～5日（3日間）にかけて実施した。両調査区の発掘にあたっては、岡田　博・浅倉秀昭の2名の調査員が、下記の現地発掘作業員の方々の協力を得て実施担当した。とりわけ浅原公章氏（郷土史家）には、現地作業員として参加していただきながら、御自身の研究成果の御教示を賜わった。なお、発掘調査の実施については日本道路公団ならびに該当遺跡所在の工事区施工業者であるフジタ工業K・Kの御好意に負うところが多い。記して謝意を表する次第である。

〈作業員名簿〉（順不同・敬称略）

山崎春恵　松永里美　山本光三郎　平山政夫　小谷光久　浅原公章　小林武夫　三村寛雄　岡本清治　小谷百代　吉国朝代　渡辺益恵　吉国とみ子　吉国辰代　和田恵美子　小林恵美子　岡本静子（事務・遺物整理担当）

4. 本報告書の作成および執筆は下記の分担によっている。

三好基之……第1章第1節・第2節、第2章第1節、第3章第1節

岡田　博……第1章第3節、第2章第2節

岡田　博・浅倉秀昭……第3章第2節

5. 出土遺物の整理は発掘調査中に、岡本静子事務担当員の協力を得て一部終了していたが、大半は西古松文化課分室にて行った。報告書の作成は4月～6月にかけて西古松文化課分室にて行った。

6. 周辺地形図等に用いた路線図は道路公団の $\frac{1}{1000}$ 路線設計図を使用した。位置図については国土地理院発行の $\frac{1}{50,000}$ 図（上石見）を用いた。（掲載承認済）第2図　新見庄関係図については、三好基之氏の作成になるものを山尾真由美が製図したものである。第5図二日市周辺字名については郷土史家浅原公章氏の調査研究成果を岡田が製図し、掲載させていただいた。遺構図については岡田

新見庄関連遺跡（祐清塚・二日市）（45・41）

・浅倉が実測・測量したものを岡田が製図した。遺物の実測はその大半を浅倉が行い、補足ならびに拓本・製図については岡田が行った。写真撮影については遺構を岡田・浅倉が分担し、遺物についてはすべて岡田が撮影したものである。遺構写真の一部は三好基之氏撮影のものを掲載させていただいた。なお、航空写真（図版1・図版2—1）は昭和49年秋、セスナ機から撮影したものである。

7. 二日市調査区出土陶磁器の一部については九州歴史資料館亀井明徳氏の御教示を得た。記して感謝の意を表するものである。

本文目次

第1章 調査の目的と経過	
第1節 問題の所在	34
第2節 文献調査の経過	35
第3節 発掘調査の経過	40
第2章 祐清塚の調査	
第1節 文献調査の概要	41
第2節 発掘調査の概要	44
第3章 二日市庭の調査	
第1節 文献調査の概要	46
第2節 発掘調査の概要	49
結語	63

挿図目次

第1図 新見庄関連調査遺跡位置図 ($\frac{1}{50,000}$)	34
第2図 新見庄関係図 ($\frac{1}{150,000}$)	39
第3図 祐清塚・石塔群周辺地形図 ($\frac{1}{1500}$)	41
第4図 祐清塚全体図 ($\frac{1}{100}$)	43
第5図 二日市調査区周辺字名 ($\frac{1}{3000}$)	46~47
第6図 二日市調査区域図～1区・2区～ ($\frac{1}{2000}$)	50
第7図 二日市調査区域図～3区～ ($\frac{1}{2000}$)	51
第8図 1区第2トレンチ北端区平面図 ($\frac{1}{100}$) 断面図 ($\frac{1}{50}$)	52
第9図 1区地2トレンチ中央区平面図 ($\frac{1}{100}$) 断面図 ($\frac{1}{50}$)	52~53
第10図 1区第2トレンチ南端区平面図 ($\frac{1}{100}$) 断面図 ($\frac{1}{50}$)	53
第11図 1区南調査区グリッド平面図 ($\frac{1}{100}$) 断面図 ($\frac{1}{50}$)	54
第12図 2区グリッド平面図 ($\frac{1}{100}$) 土層断面図 ($\frac{1}{50}$)	55
第13図 2区南北トレンチ北端区平面図 ($\frac{1}{100}$) 断面図 ($\frac{1}{50}$)	56~57
第14図 3区第1トレンチ・第2トレンチ、第3トレンチ土層断面図 ($\frac{1}{50}$)	56~57
第15図 錢貨・土錘・砥石 ($\frac{1}{2}$)	56

新見庄関連遺跡（祐清塚・二日市）(45~41)

第16図 須恵質土器・土師器 ($\frac{1}{3}$)	57
第17図 備前焼擂鉢・備前焼片 ($\frac{1}{3}$)	58
第18図 南宋代白磁・明代青磁・白磁・染付 ($\frac{1}{2}$)	60
第19図 灰釉陶器他 ($\frac{1}{2}$)	61

図版目次

図版1 新見庄中心部俯瞰（新見市上空から北西西方をのぞむ）

図版2—1 祐清塚俯瞰（南東上空から）

2 祐清塚近景（南西から）

図版3—1 祐清塚に祭られた祠（左）と剣のミサキ（右）（南から）

2 祠内部（南西から）

図版4—1 祐清塚発掘状況（南西から）

2 祐清塚発掘終了後（南西から）

図版5—1 祐清塚東方の石塔群（西から）

2 同上近景

図版6—1 二日市調査区遠景（南東から）

2 二日市調査区と横見墳墓・古墳群（南から）

図版7—1 1区第1トレント（東西）発掘状況（東から）

2 1区第2トレント南端区柱穴検出状態（北西から）

図版8—1 1区第2トレント南端区遺構検出状態（南から）

2 1区第2トレント南端区柱穴検出状態（東から）

図版9—1 1区第2トレント中央区遺構検出状態（南から）

2 1区第2トレント北端区遺構検出状態（南から）

図版10—1 1区第2トレント中央区南柱穴出状態（北から）

2 1区南調査区（グリッド）土壤検出状態（南から）

図版11—1 1区南北トレントより北西方をのぞむ（南東から）

2 1区五輪塔残欠（南から）

図版12—1 1区南調査区五輪塔残欠付近（南から）

2 同上調査状況（南から）

図版13—1 2区トレント北半部柱穴検出状態（南から）

2 2区トレント南半部遺構検出状態（北から）

図版14—1 3区第2トレント土層断面（南西壁）

2 3区第2トレント土層断面（北西壁）

図版15—1 3区第2トレント土層断面（南西壁）

新見庄関連遺跡（祐清塚・二日市）(45・41)

2 3区第2トレンチ土層断面（北西壁）

図版16—1 3区第2トレンチ土層断面（南西壁）

2 3区第2トレンチ（北西壁）

図版17—1 銭貨

2 砥石

3 土鍤・土師器

図版18—1 土師器片

2 須恵質土器片

図版19—1

2

図版20—1 備前焼擂鉢片

2 備前焼擂鉢片（1区南調査区土壤出土）

図版21—1 南宋代白磁・明代染付

2 明代青磁・白磁

図版22—1 灰釉陶器

2 伊万里系染付他

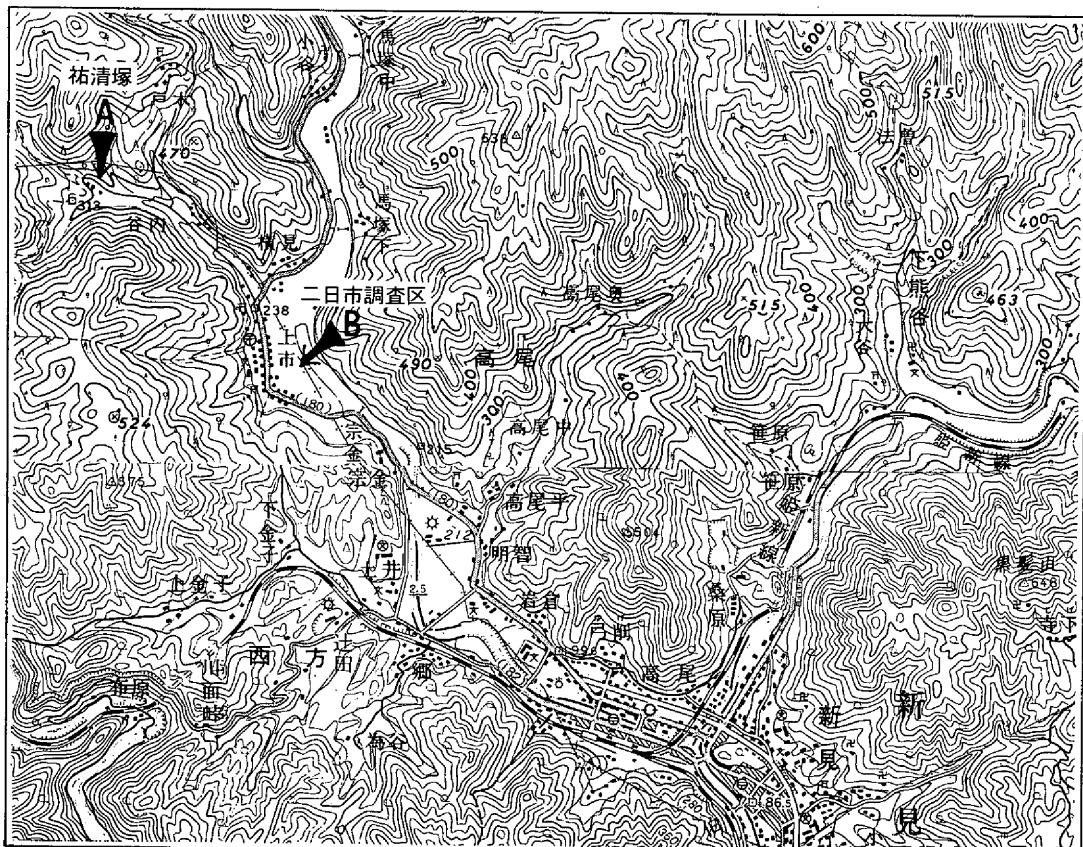
第1章 調査の目的と経過

第1節 問題の所在

大阪府吹田市を起点として、山口県下関市に至る中国縦貫道は、岡山県の西部新見市の地域において、かつての東寺領庄園備中國新見庄の庄域の一部を横断する。該当する区域は推定庄域（註1）のうち、現在の高尾・宗金・上市を経て、横見・谷内・舞尾に至る区間である。

東寺領新見庄は、はじめ本所職を最勝光院、領家職を官務家の小楓家に伝領されていた。鎌倉時代末期に領家職が、つづいて南北朝時代初期に本所職が東寺に寄進され、以後戦国時代の終りまで、東寺庄による庄園支配が持続した（註2）。

新見庄は、その構造、歴史的経過を物語る史料が数多く残存していることで全国でも有名な庄園である。それらの史料は東寺百合文書をはじめ教王護国寺文書、東寺文書に包摂され、今日まで伝來さ



第1図 新見庄関連調査遺跡位置図 ($\frac{1}{50000}$)

新見庄関連遺跡（祐清塚・二日市）（45・41）

れている（註3）。特定の庄園について、その庄園の歴史のはば全期間にわたり、かつ多量多質（註4）の史料が残存している例は、全国の庄園全体のなかでも数少い。また、今日の新見市、神郷町にわたる地域は、新見庄存立期の景観や遺跡・伝承を、今に至るまでよく伝えている。明治以後の我国近代化の過程で、鉄道の敷設等によって、新見庄の遺構の一部も破壊変形を余儀なくされているが、なお今日まで新見庄の景観の多くが残存しているのは稀有のことである。このように新見庄の歴史を物語る多くの史料と、その舞台となった現地の景観遺構がよく残されており、両者の有機的な関連による研究を深めることによって、新見庄研究はわが国の中世史解明の上に、絶大な寄与をなすといえよう。

このようにみると、庄域内での縦貫道の敷設は、新見庄の該当地域の景観遺構の破壊変貌はもちろん、その周辺もまた附隨した諸開発によって、同様の姿となる危険性を胎んでいる。（事実、縦貫道完成後の調査指定地域は、その周辺を含めて、かつての面影を全く留めていない）このことは、わが国の中世史解明の重要な資料を失うことを意味し、国民の貴重な文化遺産の一つを現在及び将来にわたって、永久に失うことになるのである。岡山県教育委員会は、かかる見地に立って、新見庄に関する現地資料を少しでも後世に残すため、調査団を結成し事前調査に当った。

しかし調査を開始するにあたって次のような問題があった。調査団員は大学教授級による県内外の中世史研究者、県内の地方史研究者、地元の郷土史家を中心に構成されたが、団としての権限も明確でなく、団長も任命されないというように、組織体として形を成しているものでなかった。したがって縦貫道敷設に対して、団としての公式の意志表示はなされないままに終った。第2に、調査開始の決定は、縦貫道路線の決定後に行われたため、路線の変更等を含む敷設計画の変更改廢を要求することは不可能であった。また指定した地域の調査のための大巾な調査日程の変更延長も出来なかった。したがって第3に、調査実現地点は、調査希望地域の一部分に終った。

一般的にいって、原始・古代の遺跡に対する「考古学者」（註5）の取組み方に相違して、庄園遺構への調査保存の取組が遅れている原因は次のように考えられる。すなわちわが国の従来の庄園史研究の方法が、文献資料に大部を依存するのみで、それを現地の遺構との対比に於いて進めてゆくという方法がほとんど欠落していた。したがって研究者による庄園遺構保存の訴えも稀であり、遺構保存の重要性も国民の声として結集されなかった。これらの遺構に対する行政面での対応の仕方も、当然手ぬるいものとなつたのである。新見庄についても、このことは例外でなかった（註6）。

第2節 文 献 調 査 の 経 過

Ⅰ) 第1次調査

期間 昭和49年8月16日～8月18日 3日間

参加者

杉山博（東京大学教授）・上島有（京都府立総合資料館古文書課長）・藤井駿（岡山大学名誉教授）・長光徳和（岡山県総合文化センター奉仕課郷土資料室主任）・三好基之（岡

新見庄関連遺跡（祐清塚・二日市）(45・41)

山県立博物館学芸課主任）・富岡敬之（岡山県教育庁文化課参事）・大山行正（同文化課職員）・難波友広（同文化課職員）・井上弘（同文化課職員）・杉本和典（新見市教育委員会社会教育課長）・竹本倉友（同係長）・太池貞治（新見市立図書館長）・秋月唯雄（郷土史家）・門原弘道（神郷町教育委員会社会教育主事）・白根正寿（郷土史家）（敬称略、職名は当時のもの、以下これに準ずる）

調査日程

8月17日（土）晴

（新見市内）三日市——高尾平——金子・辻田——江原八幡宮——杠城——横見——谷内——（神郷町）門前・政所跡——高瀬

夜、宿舎にて討議

8月18日（日）晴

千屋

ii) 第2次調査

期間 昭和49年11月28日～11月30日 3日間

参加者

上島有・藤井駿・石田善人（岡山大学教授）・三好基之・加原耕作（岡山県総合文化センター主事）・富岡敬之・菱川豪（津山教育事務所長）・赤木茂（同次長）・大山行正・難波友広・井上弘・浅倉秀昭（岡山県教育庁文化課職員）・杉本和典・太池貞治・長谷川明（郷土史家）・赤木武雄（郷土史家）

調査日程

49年11月28日（木）晴

西方政所屋敷跡——金子氏屋敷跡——江原八幡宮——善成寺跡——谷内——岩倉上古墳

49年11月29日（金）晴

新見市役所蔵元禄8年検地帳——唐松——岩山神社横旧道——高尾林正男家文書——田治部氏本貫——塔の畠遺跡——真福寺——潮城——田治部雅楽守の碑

49年11月30日（土）晴

午前中、討議総括

iii) 第3次調査

期間 昭和50年12月16日 1日

参加者

上島有・藤井駿・三好基之・守屋明（高梁教育事務所）・光吉勝彦（岡山県教育庁文化課文化財二係主任）・岡田博・田仲満雄（岡山県教育庁文化課職員）・太池貞治・浅原公章（郷土史家）

調査日程

50年12月16日（火）曇

二日市——横見古墳群——祐清塚

以上三回に亘って調査を行った。これらの調査は、単に縦貫道敷設予定路線上を対象にしたのみではなく、全庄域、およびそれに隣接した東部地区までを対象とした。その理由は、予定路線上の地域が、庄全体の遺構のなかで占める位置を把握すること、またこの地域が唐松・多治部によって代表される国衙領々域内での遺構とどのように関連しているかを明らかにすること、および、新見庄全体の遺構が、過去および現在の開発のためにどのように変容破壊され、またされようとしているかという実態を把握するためであった（註7）。

第3回の調査によって、調査団は、路線予定地域に含まれる上市附近の高梁川西岸地域の部分発掘による遺構遺物の確認と、谷内地域内の祐清塚の発掘と移転を提案した。とくにこの2地点を選んだ理由は「二日市」・「祐清塚」の章に後述する。既に決定されていた発掘調査の日程と予算内で消化可能の作業量を指示するに止まらざるを得なかった（註8）。

（註）

- 註1 新見庄の推定庄域は、地方史研究協議会編『地方史研究必携』（岩波全書 171） 岩波書店、1952年7月10日刊による。同書の「第3章 中世地方史の研究、第4章 庄園の構造」に詳しい。
- 註2 新見庄の伝領関係を明らかにするのが本書の目的ではないので、それについてはアウトライン程度の記述にした。詳細は彦田一太他「中世莊園に於ける本所領家関係の一形態——備中國新見庄の場合——」（横浜市立大学文学部『協同研究』第1号、昭和31年3月）、杉山博『解体期莊園の研究』東京大学出版会、1959年5月刊などを参照のこと。
- 註3 これらの文書群は、本来一括されて、かつての庄園領主である東寺（現、京都市南区九条）に伝えられたものであるが、その後所有者の移動等によって、それぞれの名称があたえられたのである。なお、東寺百合文書のうち新見庄関係の史料は『備中國新見庄史料』（藤井駿編、瀬戸内海総合研究会発行、昭和27年12月刊）に集録され容易に見ることができる。その後、東寺百合文書の未整理文書のなかから、新見庄の検注帳をはじめ、多くの新史料が発見された。また、教王護國寺文書のなかにも、多くの新見庄関係の史料が散見する。なおこれらの文書群の性格については、京都府立総合資料館編『図録東寺百合文書』を参照されたい。
- 註4 新見庄に関する史料の内容は、伝領に関するもの、土地台帳に関するもの、収税に関するもの、商工業運輸に関するもの、在地の領主・名主に関するもの、政治的争論・紛争に関するもの等、一つの社会を構成する諸要素の全般にわたるといえよう。詳細は（註3）に掲げた史料集を参照されたい。
- 註5 ここでいう「考古学者」とは、主として原始・古代の遺跡・遺物を研究の対象とする人に限定した。本来考古学とは、文献史学が文献史料によって歴史学を行うと同様に、遺物・遺跡によって歴史学を行う学問であり、その対象年代は原始・古代に限られるものではない。また歴史学の方法論として、考古学や文献史学が存在するのではない。これらは歴史学研究の上での即物的な分業形態にすぎず、歴史学はこれらを総合統一したところに存在するのである。
- 註6 こういった状況に対する反省は、新見庄の調査が決定された前後から、歴史学者の間で表明されはじめた。永原慶二『莊園遺構の保存問題によせて』（月刊「文化財」1975年2月号）参照。したがって今回の調査団による新見庄の調査は、多くの問題点を残しながら、なお画期的なことであったといえよう。
- 註7 このことについては、第1回の調査終了後、団員の一人である杉山博が、個人的な見解として『新見庄危うし』（歴史手帳2巻10号、名著出版社）で、問題点を発表した。
- 註8 中国縦貫道に関わる埋蔵文化財発掘調査の全般に関しては、対策委員会が結成され、委員会の指導のもとに発掘作業が進められていたが、新見庄調査団と委員会との関係も不明確であり、また一度も両者による協議は行われることなく今日に至っている。

＜第2図 新見庄関係図解説＞

- ※①～④の神社は名主による宮座の伝統が残っている神社。
- ※⑤……西方領家方の中心になる神社で、文明元年（1469）秋、庄民が集会をし、大鐘をつき土一揆を起こしたところ。
- ※⑥……東寺より下ってきた代官祐清の葬式をした寺。
- ※⑦……祐清の殺害現場。このあたりは、地頭方・領家方が入り組んでいた。
- ※⑧・⑨……中世の市場。⑧は鎌倉時代に栄えた市場であるが、やがて商業の主力は⑨の三日市場に移ったと思われる。
- ※⑩……地頭新見氏の居館。⑪……新見氏の城。⑧～⑩が地頭方の中心地。
- ※⑫……領家方の中心地。⑯金子は田所。⑰福本は惣追捕使。⑭宮田は公文の居館のあったところ。このあたりが西方領家方の中心地。
- ※⑯は多治部の国衙政所。多治部氏はこの地方の豪族で、しばしば新見庄へ侵入した。
- ※⑰……神代の国衙政所。
- ※⑱……古い出雲街道、文永8年（1271）この道を界として新見庄は下地中分された。西方が庄園領主の支配地、東方が地頭の支配地となった。

新見庄関連遺跡（祐清塚・二日市）（45・41）



第2図 新見庄関係図 ($\frac{1}{150000}$)

第3節 発掘調査の経過

昭和50年12月16日、新見市の宗金遺跡調査事務所において祐清塚に関する調査会議が開かれ、発掘調査の対象地として更に二日市調査区を加えることが提案された。席上、三好基之氏によって新見庄研究の概略が説明された後、郷土史家浅原公章氏の地元における切図の研究調査成果が発表され、新見市上市の高梁川西岸の小平野に二日市庭と推定される地点が存在することが明らかにされた。しかも中国縦貫自動車道建設用地に近接あるいは含まれており、発掘調査による解明が望まれたのであった。この二日市北方の丘陵上に存在する横見墳墓群、その裾部に位置する横見古墳群はすでに縦貫道建設に伴う事前調査としてその発掘を終了していたが、眼前に拡がる水田部の歴史的変遷を解明するという問題提起も発掘調査員の側からも行われ、急拠、発掘調査を行なうべく各方面への折衝が行なわれた。その結果、当時新規発見遺跡として岡田・浅倉2名の調査員によって発掘調査が行われていた谷内遺跡を一時中断し、年明けて1月15日より約3週間の調査期間をメドに二日市調査区にトレント・グリッドを設定し、発掘を開始した。一方、当初より発掘調査の計画があった祐清塚もその調査期間内に調査を行うことになり、2月3～5日の3日間にわたって実施した。いずれの発掘調査も、降・積雪・寒冷期であったため、実施にあたっては困難を極め、ことに二日市調査区では降雪のため視界が悪く、写真撮影が不可能になる事態や作業の中止がしばしば生じた。また、工事の進捗も日増しに調査区内へ及び、横見墳墓群が存在した丘陵の土を満載したダンプカー、地ならしのブルドーザーに追われる状況の中で調査を終えた。

（日誌抄）

1月15日（木） 調査区を3区に分けて繩張りを行う。

1月19日（月）～23日（金） 降雪、強風続く。谷内遺跡より発掘資材を搬入、宗金遺跡より休憩小屋建築のための材木搬入。B・M（ベンチマーク）よりレベル移動。1区よりトレント調査開始。師土器片・陶磁器片・須恵器片の出土がみられるが、遺構の残存は不明。

1月26日（月）～31日（土） 2月10日をメドに二日市調査区を終了する旨、公団・本課・フジタ工業に電話する。1区～3区まで調査区を確定、1区・3区はトレント調査、2区はグリッド調査を行なう。土層断面図作成、写真撮影を始める。2区では溝・柱穴を検出。建物は3区ではほとんど出土せず高梁川の蛇行による旧河道をなす。1区・2区では、土師器・須恵器・須恵質土器・備前焼・陶磁器・鉄滓、銭貨の出土がみられる。

2月2日（月） 既掘部分の平板測量。1区・2区の柱穴検出・坪掘りを始める。

2月3日（火）～4日（水） ダンプカーが横見墳墓群の位置した丘陵の土を積載、調査区に迫ってくる。祐清塚の調査を平行して行う。写真撮影・平板測量。

2月5日（木）～9日（月） 1区・2区の調査に集中、遺構検出・清掃作業。写真撮影・平板測量を平行して行う。柱穴内出土遺物の取上げ、器材の撤収をもって全ての調査を終える。

第2章 祐清塚の調査

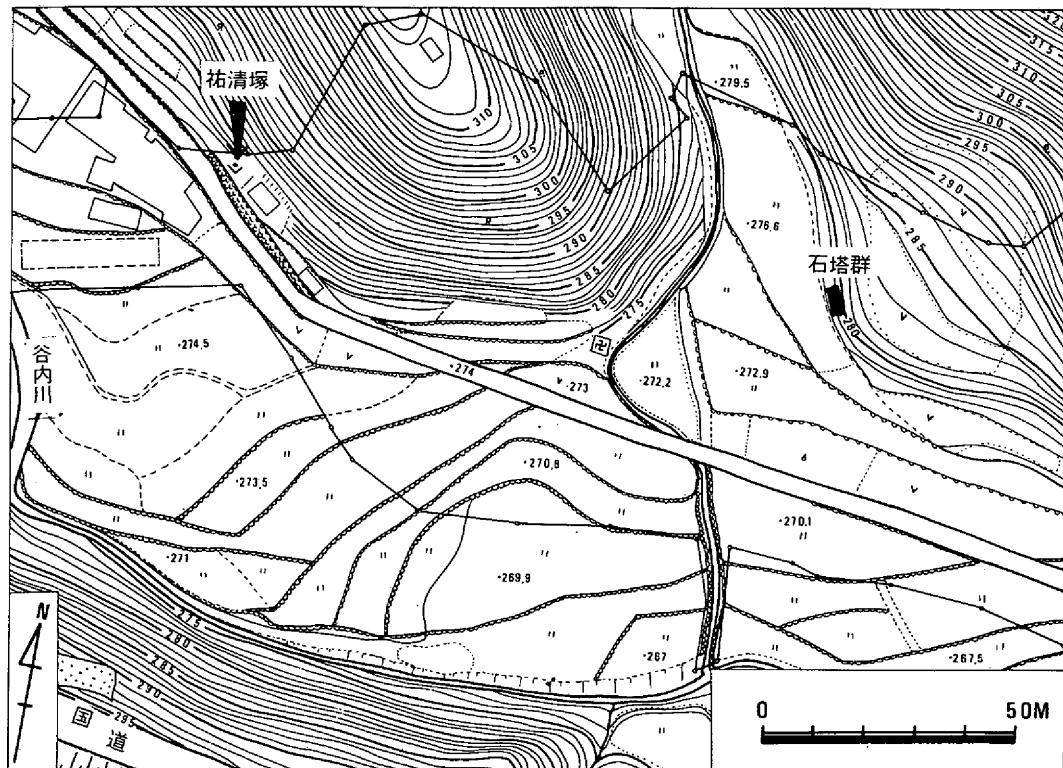
第1節 文献調査の概要

(1) 問題の所在

寛正4年8月25日、東寺の直務代官として在庄していた祐清は、谷内の庄民によって殺害された。新見庄園史の上で、この祐清の殺害事件は、室町中期の庄園が抱えている基本的な矛盾を、余すところなく露呈した事件であった。それは新見庄という備中山間部庄園の特殊な問題でなく、誇張的な表現をすれば、全国の解体期庄園の総てが含んでいる問題の劇的な表現であったといえよう。

祐清殺害事件の背景および経過については団員の1人、上島有によって既に報告がなされているので、その報告を部分的に引用することにする（註1）。

「室町時代の末頃、東寺の代官として新見庄に下った祐清が、わずか1年にしてそこで悲劇的な最後をとげたことは、中世の研究者には常識となっており、いまさら改めて詳述する必要はないと思われるが、後の叙述との関係もあり、簡単にそのあらましを紹介しておこう。



第3図 祐清塚・石塔群周辺地形図 ($\frac{1}{1500}$)

応永15年（1408）以降新見庄は、備中国の守護である細川氏の被官安富宝城・同智安が請負代官として支配した。しかし長禄・寛正の頃になると、智安はほとんど契約の年貢を進納せず、未進は莫大な額に達した。そこで東寺は幕府に対して直務支配（東寺の直接支配）の承認を要求するが、いっぽう新見の庄民たちも、安富智安を庄内から追い出して、東寺の直務支配の代官の下向を求めた。東寺の要求は寛正2年（1461）9月に幕府から認められるが、その代官の選考は難航し、翌寛正3月7月になってやっと祐清が任命された。東寺の直務代官となった祐清は直ちに京を出発し、8月5日には新見庄に着任した。その後約1年間、祐清は東寺の忠実な代官として庄務に専念するが、その前には多くの難問がまちかまえていた。寛正3年は全国的な不作の年であったが、その被害は新見庄の北部の高瀬・中奥といった村が殊にひどかった。百姓等の強い捐免の要求にもかかわらず、祐清は年貢の徴収を強行するが、翌寛正4年7月には、もっとも年貢未進のはなはだしいかった節岡名の名主豊岡を処分してしまった。

これが原因となって、祐清は豊岡にくみした地頭方の百姓によって殺されることになる。すなわち祐清は寛正4年8月25日、庄内の宮巡りのため地頭方の領内を通って谷内にさしかかったが、たまたまそこで百姓が家を新築していた。祐清は馬に乗って建築現場を通りようとしたが、豊岡と氣脈を通じた地頭方の百姓は、祐清にいいがかりをつけて下馬を要求し、その場で祐清とその仲間1人を殺害してしまった。これが導火線となって、東寺方の農民は地頭方政所を焼打ちするという大事件にまで発展するが、この祐清殺害事件は、武士や商人が殺されたというのとはちがってことであろうに京都から下った東寺の僧侶を殺したという点で、新見庄の庄民にとっては後味の悪い事件であったにちがいない。」

祐清殺害の場所が、谷内川にそったわずかの耕地をもつ谷あいの谷内地区であったことは、寛正4年8月27日と推定される「新見庄三職注進状」により明確である（註2）。この地域は新見庄の幹線ともいうべき出雲街道が、地頭の城塞である杠城の西麓を廻って木戸・芋原に延びている地域でありまた地頭、領家の両勢力が錯綜しているところでもあった。この地域には既に横見から谷内を経て舞尾に至るバイパスが、谷内川左岸にせまる山腹に完成しており、今まで縦貫道建設によって歴史的景観は全く変容され、その片鱗すら止めないことになる。

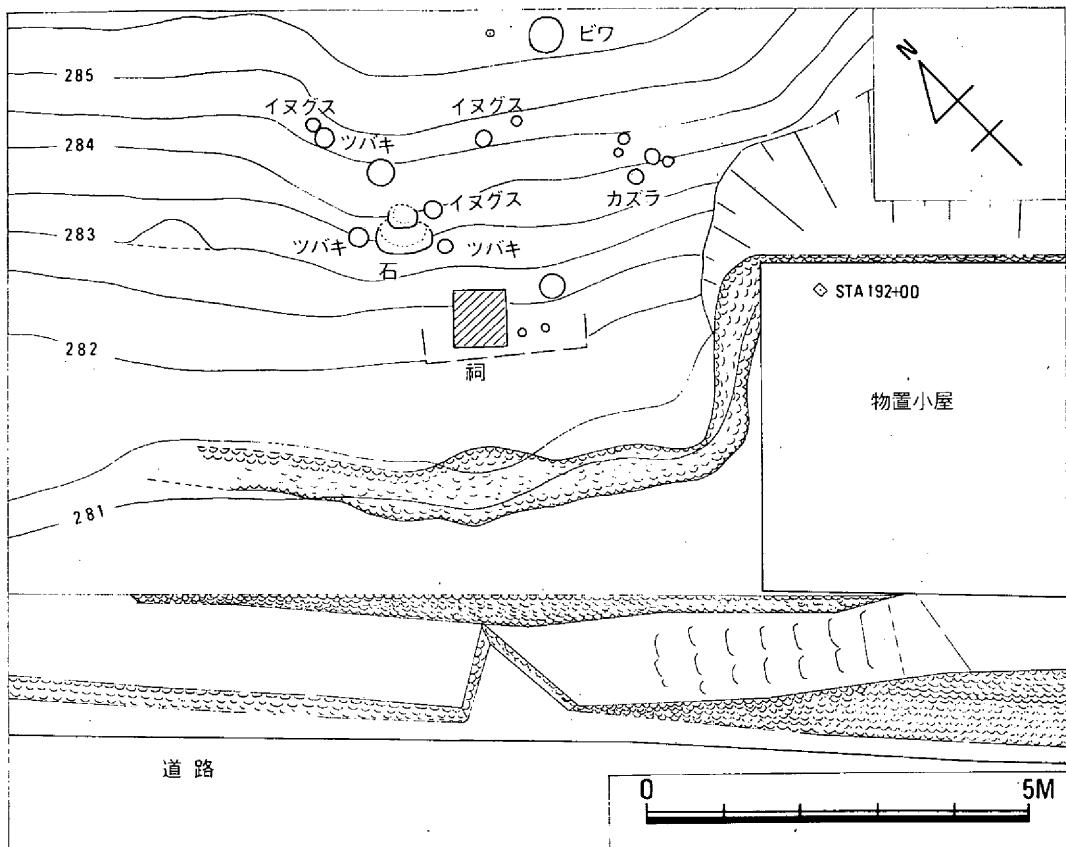
調査団は以上の理由から、この地域の調査を3回にわたって調査した。

(2) 祐清塚の発見

谷内地区における祐清塚の発見は、現地の太田満佐雄氏による聞き取りを唯一の根拠とする。団員のなかで、主としてこの聞き取りに当った上島有の報告を再録する（註3）。

「部落のとっかかりは太田満佐雄氏（62歳）の家で、太田氏の家も縦貫道の用地として収用されるため、現在の家から50m位南の田地に家を新築中であった。祐清の殺されたのはこの辺だろうかと話しながら岡の麓をみると、太田氏の家の前の岡の斜面に小さい祠を見つけた。それは何の変哲もない、この地方でよく見かける荒神さんの祠で、神体には石を祭り、『奉修八大荒神』と墨書した札が納められてあった。これについて建築作業をしていた太田氏に尋ねたところ、思いかけず大変なことにな

新見庄関連遺跡（祐清塚・二日市）(45・41)



第4図 祐清塚全体図 ($\frac{1}{100}$)

った。

ここで、そのときの受け答えを忠実に再現すると、つぎのようなものであった。すなわち、この祠は太田氏が個人的に祭っているもので、『何でも昔、年貢を取り立てに来た人がここで殺されたので、殺された人かそれを殺した人かは知らないが、どちらかの人を祭ったものだと聞いている』ということであった。これを聞いた私は当然のことながら、直感的に祐清のことが思い浮んだが、念のため『それはいつごろのことですか、江戸時代のことですか』と問い合わせてみた。すると『いや江戸時代ではなく、それより前の何でも鎌倉時代のことだと聞いている』ということであった。また、この祠の右側には、しめ縄をまいた2本の古い木が立っており、荒神さんの祠はよく見かけるが、このようなものは全くはじめてである。これは『剣のみさき』といい、その下にその時使った刀がうめてあるということであった。

ここまでくれば、祐清という名前は伝わらず、殺された人か殺した人か分からぬという注釈がつき、鎌倉時代と室町時代の混同はみられるが、これは祐清を葬った祠であると考えるのが、もっとも順当な考え方であろう。調査に同行された藤井駿氏（岡山大学名誉教授）・杉山博氏（東京大学教授）とも相談の結果、私達はこれを祐清塚と名付けることにした。」

新見庄閔連遺跡（祐清塚・二日市）

庄園領主東寺の地方派遣代官であり、かつ僧籍を有する祐清の殺害事件は、地頭・領家いずれを問わず、現地の庄民に多大の衝撃を与えたものと思われる。非業の死を遂げた者の怨霊を鎮めるため、何らかの形で祭祀が行われたことは当然のことである。非業の死者がミサキとなって祟りを行うという風習は、民俗学ではしばしば指摘されているところである（註4）。

以上の理由によって、調査団は、祐清塚を含めた周辺の記録保存と、祐清塚地上構築物の移転保存を指示した。

（註）

- （註1） 上島有「新発見の祐清塚について——備中国新見庄の現地調査報告——」『日本歴史』第329号（1975.10）吉川弘文館
- （註2）（寛正4）8月27日新見庄三職注進状、百合サ（29—40）24
畏申上候
抑御代官今月廿五日当庄御宮めくり被召候、左候間地頭方相國寺之善仏寺御領中ニ、谷内と申地下人家を作候處にて下馬とかめ仕候て、谷内・横見と申者兩人して打申候（以下略）
- （註3） 上島有前掲書
- （註4） 三浦秀宥「岡山の民間信仰」『岡山文庫73』日本文教出版社。三浦氏はこの著のなかで、江戸時代、美作山中一揆の首謀者徳右衛門が処刑後、徳右衛門ミサキに祭られた例をあげている。徳右衛門ミサキには、供養として金属製の刀槍の模型が奉納されている。祐清塚にも「剣のミサキ」があり、またその後の調査で判明したところによると、八大荒神の祠のなかに、鉄製の刀様の模型が奉納されている。両者は場所・時代ともかなりの隔りがあるが、中国山地に広く行われた共通の習俗であると思われる。

第2節 発掘調査の概要

昭和51年2月3日から5日にかけて調査を実施した。主に写真撮影に重点を置き、周囲の環境あるいは景観の記録に努めた。それは祐清塚と称されるこの祠部分に祐清が埋葬された遺構や、それに伴う遺物が検出・出土しなくとも、やはり殺害された現場は当該地の近辺と考えられるし、現在の道路も中世における重要な交通路と考えられるからであった。

発掘は、まず地形測量と祠の周囲の樹木の配置・樹種を記録した後、祠および剣ノミサキを買収用地外へ移転し地下遺構の検出を目的として平面発掘調査を行った。これらの立地は祠及び剣ノミサキの下部は平瓦が積まれ更に安定度を増すために小礫が用いられていたが、さほど古い時期のものとは考えられず、おそらく直下の道路建設が行われた際の所為と考えられる。祠等を取り除いた後、表土より近代の茶碗の破片・硯の破片が出土したほか遺物は皆無であった。また、地山面にも掘り込み遺構等の存在は認められず、丘陵斜面の自然堆積による状況を示すことが確認された。したがって、この調査地点に埋葬遺構は存在せず、地表上に表象物をもつ単なる祠が祭られた荒神信仰遺跡と考えられる。

新見庄閻連遺跡（祐清塚・二日市）（45・41）

〈付記〉

第3図・図版5に掲げた石塔群は祐清塚の東方130mの畠地に存在する。今回の調査対象とはならなかつたが、位置的にも祐清塚に近接し、興味深い景観を呈しているので写真撮影記録を残すこととした。これら縦貫道買収用地内の石塔の類は、墓地に準じているため移転の原則がとられている。したがつて現状では埋蔵文化財として発掘調査の対象とされず、地下状況の確認がなされぬままその景観や所存地が失われつつある。

この石塔群はいわゆるこごめ石でつくられた小型の五輪塔・地蔵から成り総数10数個体分認められる。五輪塔は各輪ばらばらに置かれているに過ぎない。地蔵は3体あるがいずれも遺存状態は極めてよいが紀年陰刻等はみられなかった。

第3章 二日市庭の調査

第1節 文献調査の概要

長年にわたる新見庄の商業の研究は、日本中世商業史の研究に多くの成果をもたらしてきた（註1）。『東寺百合文書』を中心とする新見庄関係史料には、庄園の商業に関するものが幾多も散見し、これらの史料を解明することによって、市庭の構造、商人と庄民との関係、遠隔地取引の実態等が明らかにされてきている。

新見庄における市場の位置については、従来から、現在の新見市三日市町周辺であろうと想定され、多くの研究が、通念的にこのことを肯定してきている（註2）。しかしながら最近になって、このことに疑問を示す研究が発表され、その位置は三日市町周辺ではなく上市付近であると指摘している（註3）。この報告書では「東方名寄帳」や「納帳」に記載されている市庭が、現在新見市の上市であるのか三日市町であるのか、その比定地を論ずることは省略するが、いずれにしろ『内検取帳』に記載された「二日市庭井村」をはじめ、その周辺地域にあたる「車瀬」・「カハラサキ」などが、いずれも今日の上市地区内に残存する。また明治初年の切絵図によれば、上市地区の内に古市・古町の地名が残存している。ことに注目したい以上によって、新見庄を通過する縦貫道路線のうち、宗金から横見に至る区間に、庄園商業の舞台となった市庭遺構の存在が推定されることになった。調査団は、その遺構の部分的な確認と出土遺物・遺跡の保存を要請した。

（註）

（註1） その代表的な論文を一、二掲げる。

杉山博「莊園における商業」河出書房版『日本歴史講座中世編一』（昭26），のちに『庄園解体期の研究』東京大学出版会に収録される。

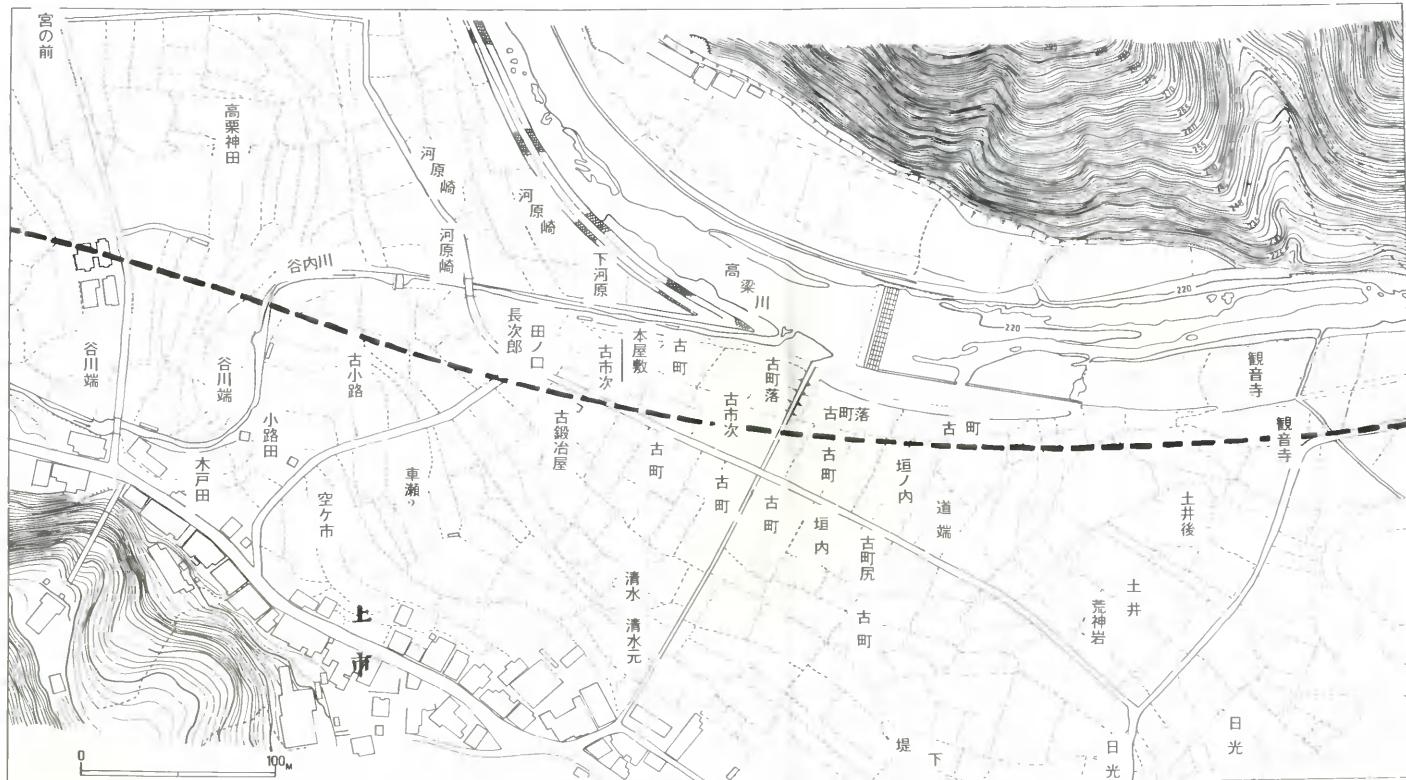
三浦圭一「備中国新見庄の商業」『日本史研究』29（昭和31）

（註2） 史料上の市庭の初見は、「備中国新見庄地頭方東方田地実検名寄帳」（以下東方名寄帳と略す）正中2・4・22 東寺百合文書（以下百合と略す）である。いま該当の部分を掲げると

一市庭分

新上	一所一反	明心
	一所三反内本卅五・十八步 大般若免	同人
	新田二反十代十八步	
新上	一所冊代	法阿
新上	一所卅代	金剛三郎
新上	一所半	道仏
	一所一反内十代屋敷	本主備前上
新上	一所一反	是阿
新上	二所冊代	弥藤二入道
新上	一所五代	江三郎
		梅カヘ三郎

(浅原公章氏調査)



第5図 二日市調査区周辺字名 ($\frac{1}{3000}$)

新見庄闕連遺跡（祐清塚・二日市）（45・41）

新上 一所十八步	藤十郎
新上 一所廿代	上座
新上 一所五代	淨四郎
新上 一所十代	弥平二
新 一所冊代 保頭給	紀藤二入道

また同年の「備中国新見庄東方地頭方山里畠内検取帳」（以下内検取帳と略す）正中 2.2 百合 7（1～3）に二月廿五日取

(中略)		
中鳴	一所二反廿代	源六
方市庭溝口	一所十八步	又三郎
同 所	一所十代	朝夕 弥太夫
里畠 カハラサキ 公文後	一所一反	寅二郎
公文給里畠同所	一所一反卅代	成沢 浄達

(中略)

三月七日取

(中略)		
市庭分	一所卅代	市庭沙汰人
車瀬上		紀藤二入道
同 谷 頭	一所十代	同
堂 上	一所十代	三郎二郎
	一所五代	同
新 堂 上	一所卅代	光阿ミ
同 所	一所五代	堂二郎
同 所	一所一反	市庭沙汰人
同 所	一所十代	紀藤二入道
同 所	一所一反	弥二郎
同 所	一所五代	左近二郎入道
同 所	一所十代	堂二郎
同 所	一所廿代	左近二郎入道
漆中 四十本	車瀬 二所卅五代	沙汰人
里畠 同所	一所一反卅代	紀藤入道
大歳免分也		国弘摩
市庭向口	一所十代	同

(中略)

四月九日取

(中略)		
車セ	一所十代	市庭 明心
二日市庭井村	一所十五代	念 法
(略)		

また「備中国新見庄東方地頭方捐亡検見并納帳」（以下納帳と略す）建武元，百合 7（1 の 4）

四十九俵式斗二升四合代 拾九貫伍百参十文 ④

十一月廿三日和市分寺家上御使相共沽之俵別三百九十五文宛

六十俵代 式拾四貫式百四十文 ⑤

十二月三日和市分寺家上御使相共俵別四百四文宛

(中略)

十四俵代 参貫式百九十文	◎
十一月廿三日和市分寺家上御使相共沽之俵別式百卅五文宛	
十九俵代三斗壱升九合五勺	◎
代四貫三百五十六文	
十二月三日和市分同上御使相共沽之俵別式百廿文宛	
(中略)	
七石六斗三升三合三勺五才 俵分十九俵三升三合五才	◎
代四貫五百八十文 正月廿三日和市分寺家上御使相共沽之俵別式百卅文宛	
(中略)	
拾捌石壱斗式升二合六勺 俵分卅五俵壱斗二升一合六勺	◎
代六貫式百五十二文 正月廿三日和市分寺家上御使相共沽之俵別百卅六文宛	
(略)	

とある。①②は米、③④は大豆、⑤は粟、⑥は蕎麦の壳却を示す。

また同じく「納帳」に

一市庭在家後地用途事

合		
二所壱反十代内	卅代後地四百文 廿代屋敷分	黒石二郎
一所廿五反十步内	十五代十步後地百九十文 十代屋敷	源三郎入道
一所廿代内	十代後地百文 十代屋敷分	道 教
一所十代十八歩内	十八歩後地廿五文 十代屋敷分	惣三郎 今左近二郎
一所廿五代内	十五代後地百五十文 十代屋敷分	三郎太郎
二所壱反卅五代内	壱反十五代後地六百五十文 廿代屋敷分	道 佛
一所廿代十八歩内	十代十八歩 後地百廿五文 十代屋敷分	左近二郎入道 今法阿
一所廿五代十步内	十五代十步後地百七十五文 十代屋敷分	馬入道 今馬免
一所卅代十四歩内	廿代廿四歩後地二百卅四文	金剛三郎
一所十代十八歩内	十八歩地廿五文 十代屋敷分	サ・ツクマ
一所十五代十八歩内	五代十八歩後地六十七文 十代屋敷分	信 道
一所十五代十八歩内	五代十八歩後地七十五文 十屋敷分	十郎太郎入道
以上拾肆間内		今左近四郎
壱間 分地子錢百六十四方但大水流旱之 仍寺家之上御使被加見知旱之		源三郎入道分
拾參間 分地子錢式貫廿六文		

同市庭御公事錢事

合		
壱貫四百文	弓事錢	
四百文	駄錢	
壱貫式百文	但依商人多少每年用途足不同也紺借屋并座後錢	
以上參貫六百文		

(註3) 高重進「中世における村落の形成と市場——新見庄を例として——」『史学研究』第95号(昭41)に詳しい。高重氏は(註2)に掲げた「内検取帳」の二日市庭井村などの記載を手掛りにして、「東方名寄帳」・「納帳」に記載された市庭分・市庭在家も総て二日市を指すものであり、二日市の現在比

定地は、従来の三日市町説を否定して、新見市上市であるとされている。そして「納帳」にみられる十一月廿三日和市、十二月三日和市、正月廿三日和市は、開催日からみると三日市を示し、この市の開催された場所が、今日の上市か三日市町かについては論を避けておられる。

第2節 発掘調査の概要

はじめに

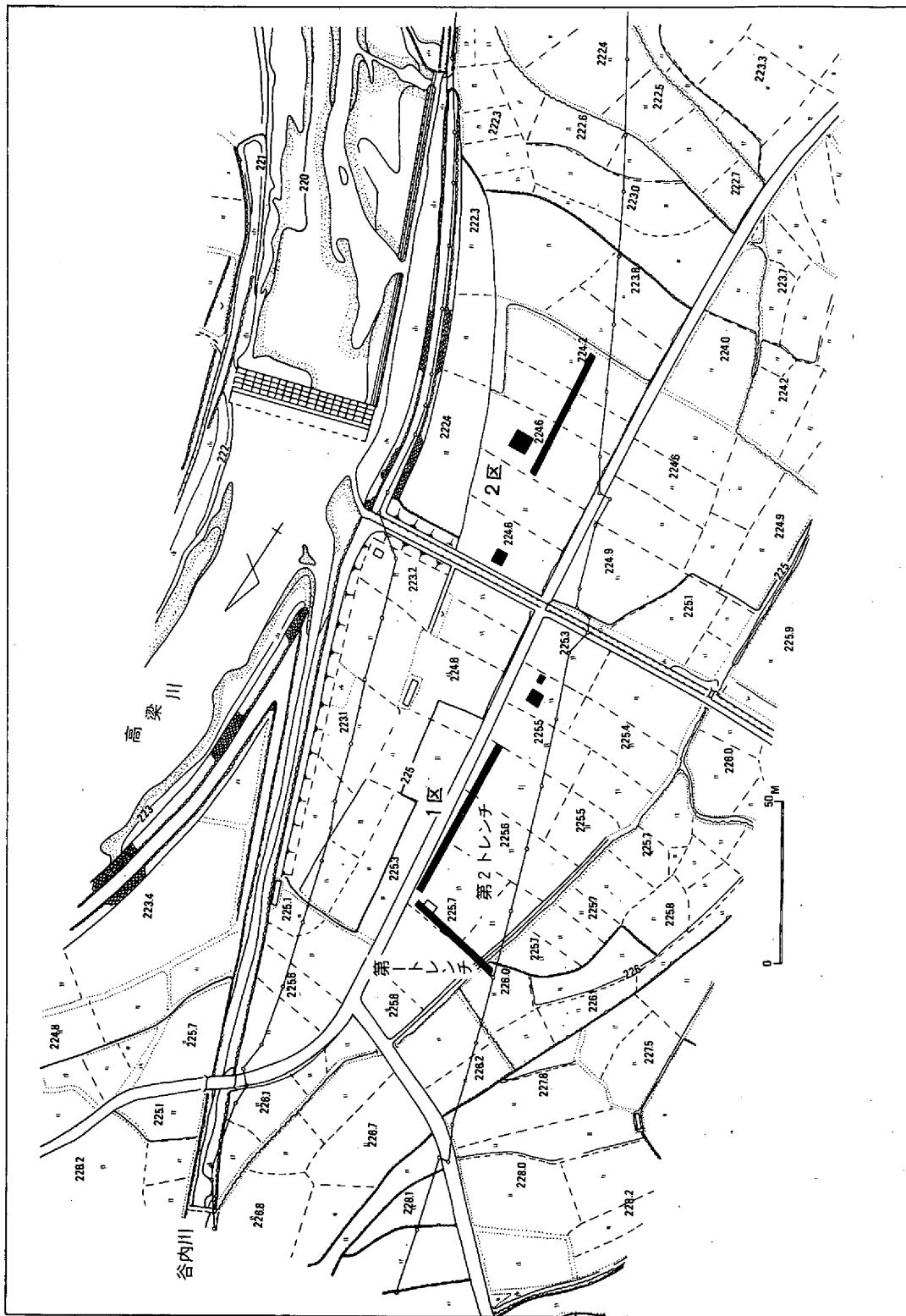
二日市調査区の設定は、当初の中国縦貫道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の対象遺跡としてはとりあげられず、急拠発掘の実施が計画されたため全面調査はもとより不可能で当該面積の極く1部の地点のトレンチ調査・グリッド調査を目的としたものであった。調査の実施は、大きく調査区を北方より1区から3区に分けて行った。1区・2区は比較的微高地で安定面と考えられ、それほど高梁川の氾濫の影響も少なかったのではないかと推定した地区で、3区は調査区の南端部の土層を確認するために設定した調査区である。以下各調査区についてその大要を述べたい。

(1) 1区 (第6・8~11図、図版7~12)

調査区の北方、字名「古鍛冶屋」・「古町」にあたる水田の発掘区である。第1トレンチは、ほぼ東西38m、巾約2mを測るトレンチ発掘区であるが、深さ約30cmで礫を含む粘土層に達した時点で湧水が多く、発掘続行を断念した。このトレンチの西方水田は、ややレベルが高く微高地を形成するものと考えられたが、高梁川の氾濫によって相当の土砂・礫が堆積しているようである。遺物の出土はわずかで、近世・近代の陶磁器小片のみ認められる。第2トレンチは、その北端を第1トレンチの東端に近接する南北トレンチで全長約56m、巾約2mを測る長大な発掘区である。第8~10図に掲げる平・断面図はトレンチを設定した水田の境界ごとに掲載したものである。遺構の検出密度は、調査区全体でもっとも多く、柱穴・土壙を数多く検出した。柱穴は、大きく3~4時期に分類でき、掘り方、埋積土の色調・土質によって判明した。柱穴の規模は径20cm前後を測るものが多く、次いで径約40~50cmを測るもののがみられる。調査期間の制約から、その存在(平面プラン)を確認するにとどまり、完掘したものは主に土層断面位置に存在する柱穴だけである。土壙・石組み状遺構については円形、あるいは方形のものがみられ、埋積土の状況から周辺の柱穴群と同時期に存在したことがわかる。後者は第2トレンチ南端区で検出した50×70cmを測る長方形石組み遺構であるが、周囲の柱穴を切って構築されていたことから、検出遺構の中でも比較的新しい時期に比定される。遺物は水田耕土中ならびに深さ30~40cmを測る砂質遺構検出面や、柱穴中・柱穴掘り方上面より出土しており、遺構同様、調査区全体でもっとも量に恵まれている。

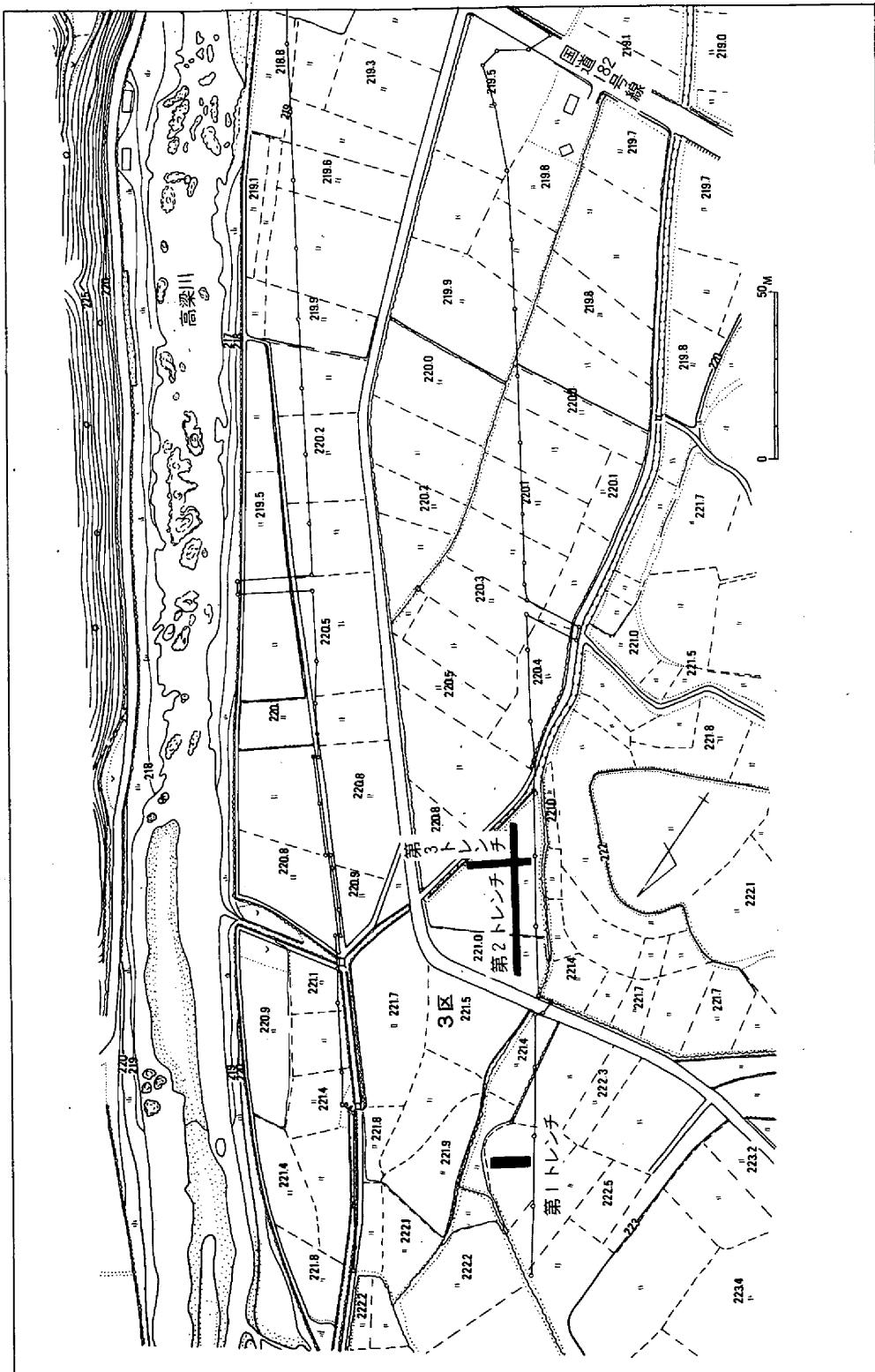
第2トレンチの南方約30mの地点にも、小発掘区および4mグリッドを設定した。前者は付近の水田の畔上に五輪塔の空輪が存在し、中世墓の確認を行うために設定したが地下遺構は存在しなかった。付近には多数の礫が集められているが近世・近代の陶磁器が出土しており、かなり新しい時期の所作と考えられる。水田が安定した時期に、区画整理が行われ、その際移築されたものの残部であろ

新見庄関連遺跡（祐清塚・二日市）(45・41)



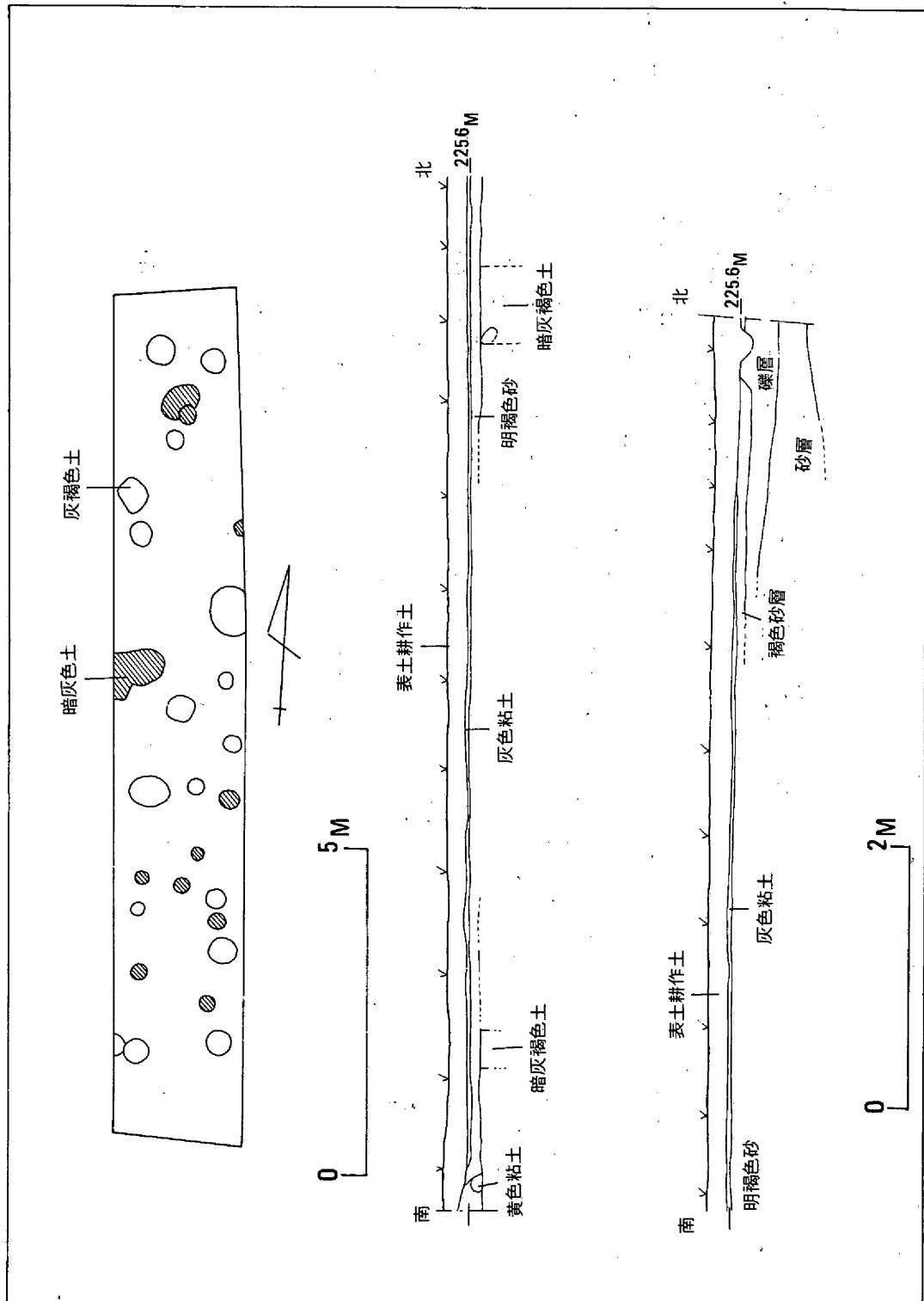
第6図 二日市調査区域図～1区・2区～(1/2000)

新見庄関連遺跡（祐清塚・二日市）(45・41)

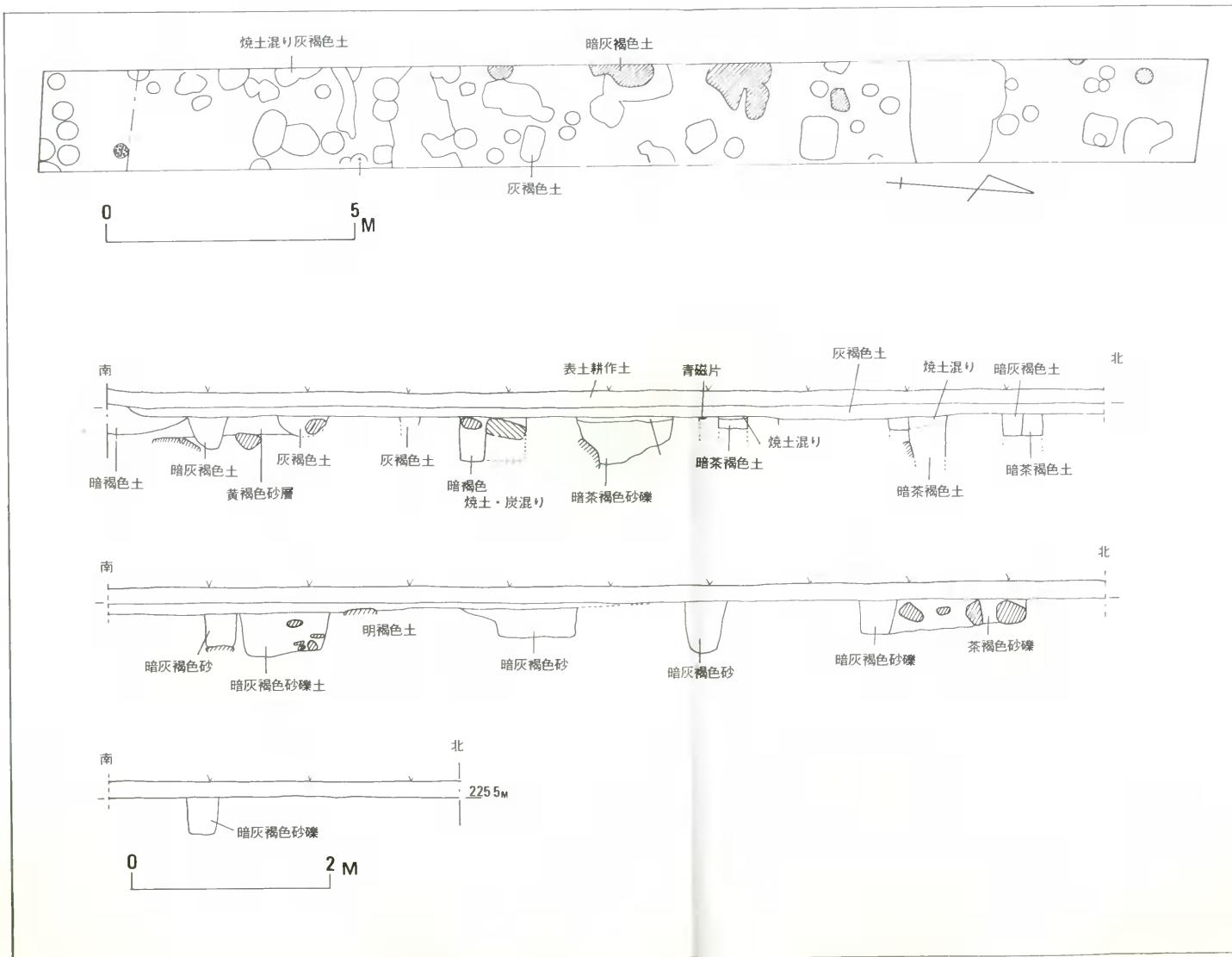


第7図 二日市調査区域図～3区～ ($\frac{1}{2000}$)

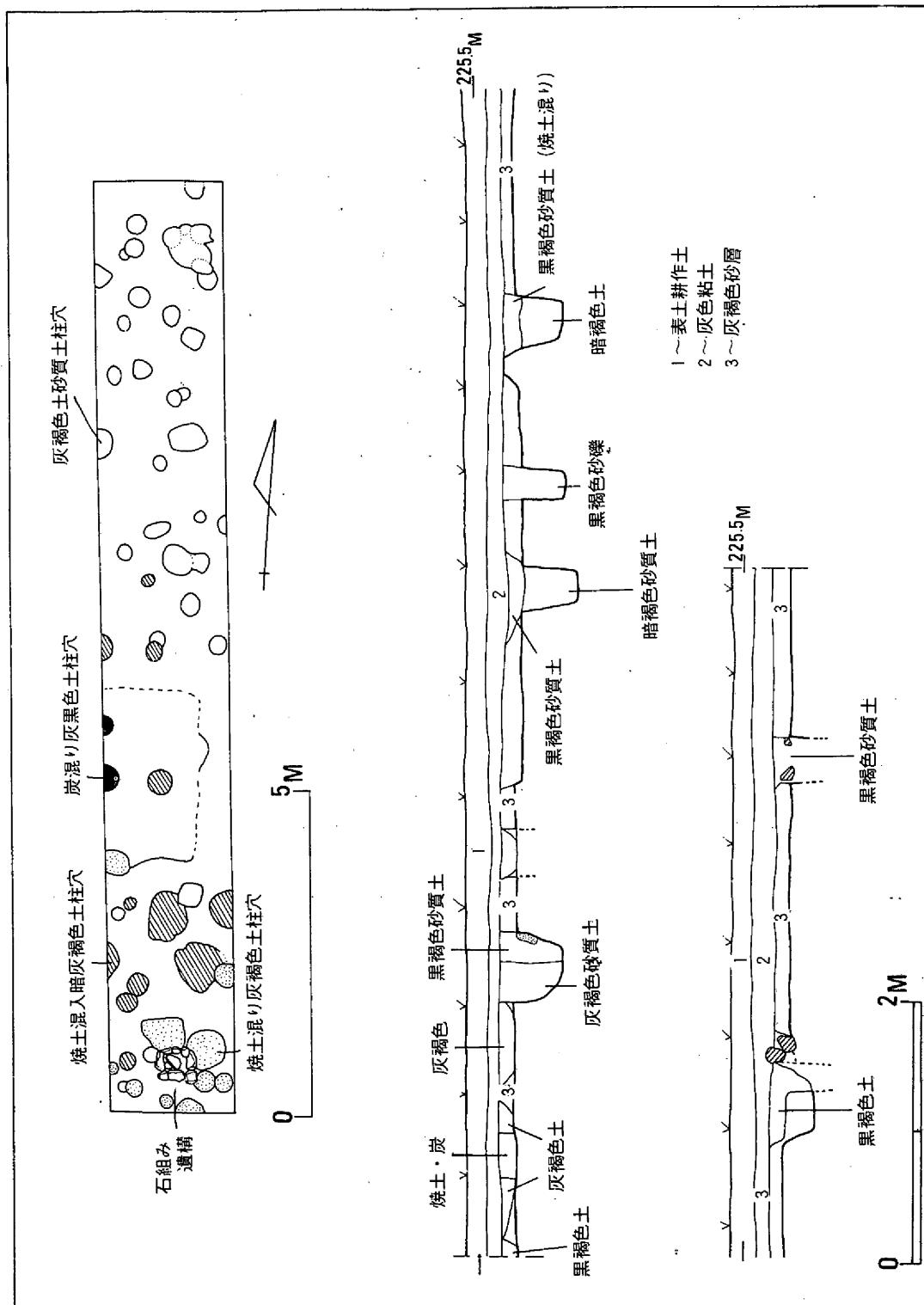
新見庄関連遺跡（祐清塚・二日市）(45・41)



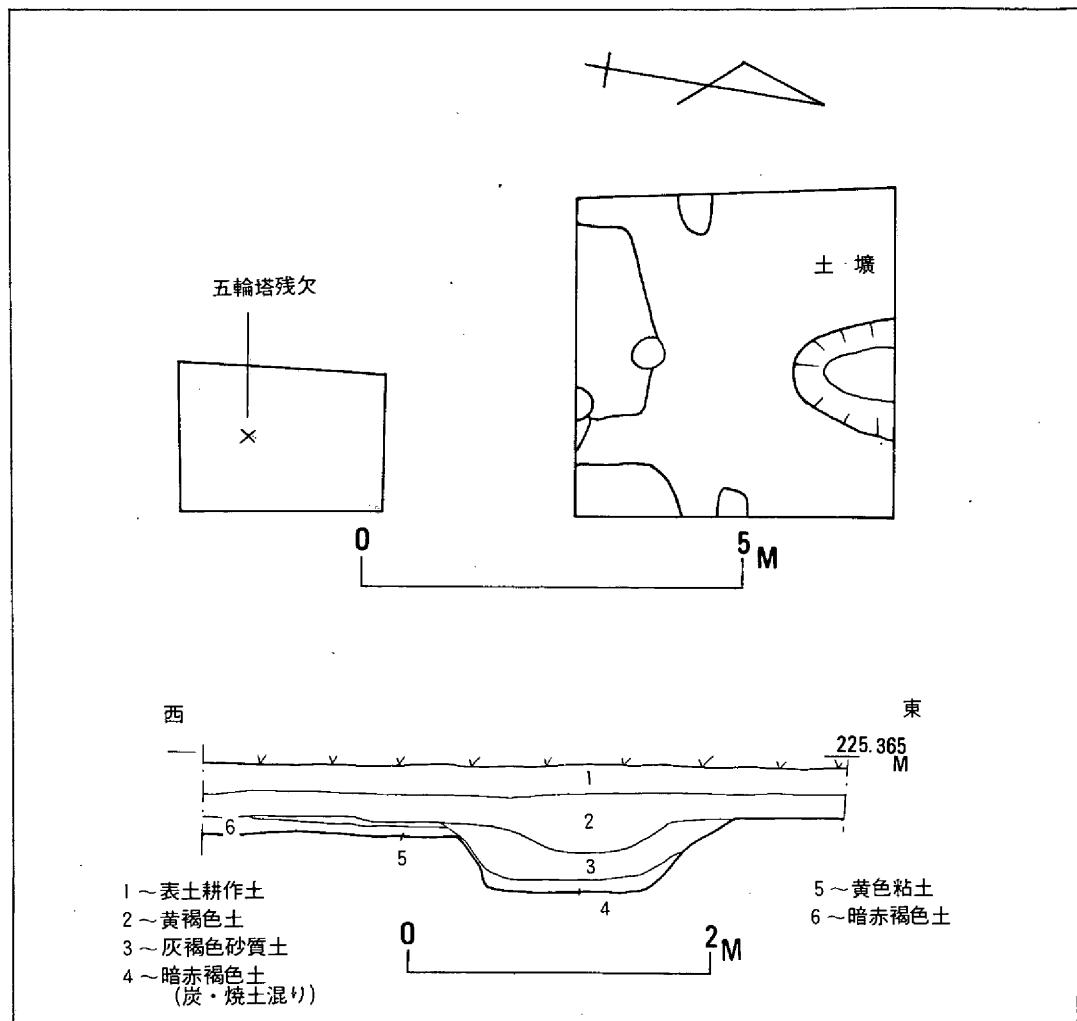
第8図 1区第2トレンチ北端区平面図 ($\frac{1}{100}$) 断面図 ($\frac{1}{50}$)



第9図 1区第2トレンチ中央区平面図 ($\frac{1}{100}$) 断面図 ($\frac{1}{50}$)



第10図 1区第2トレンチ南端区平面図 ($\frac{1}{100}$) 断面図 ($\frac{1}{50}$)



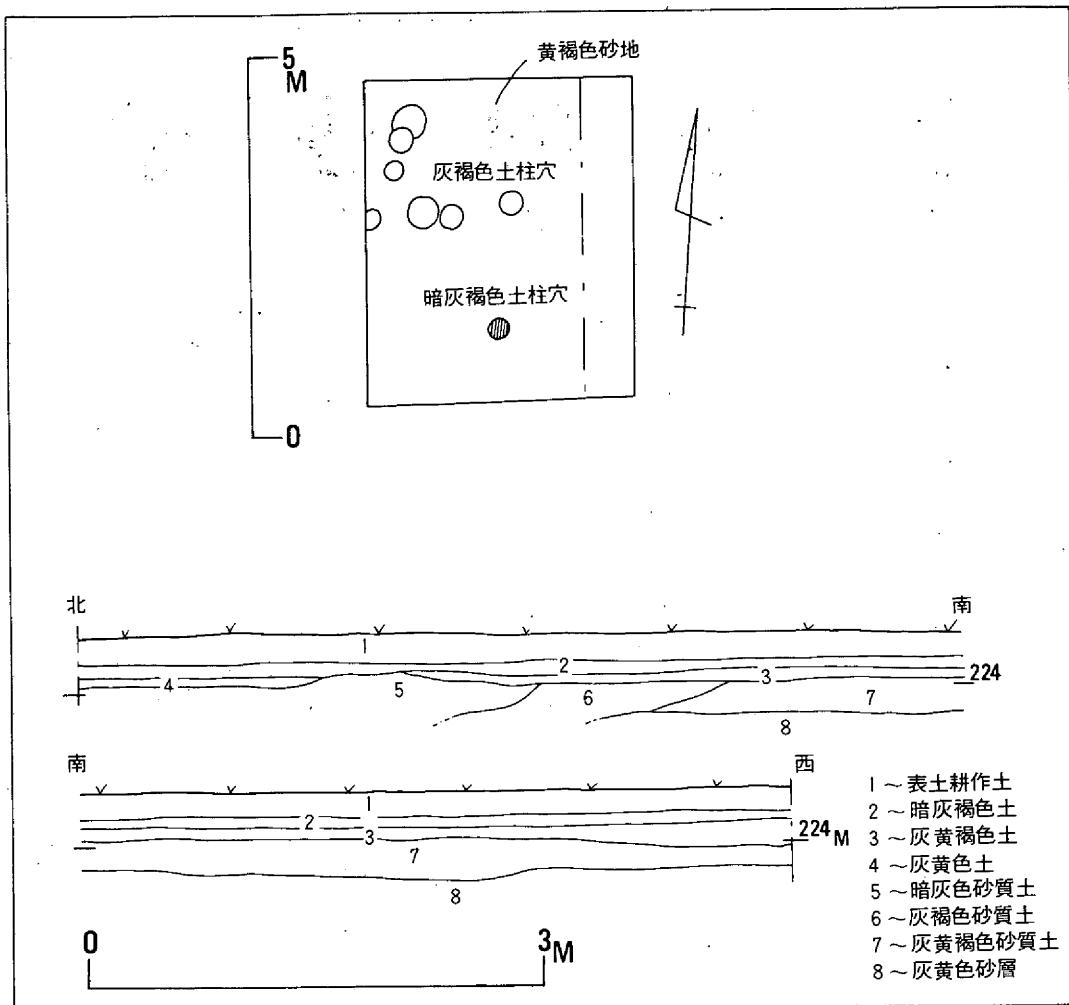
第11図 1区南調査区グリッド平面図 ($\frac{1}{100}$) 断面図 ($\frac{1}{50}$)

う。またグリッドはこの小発掘区に近接して設定したが、柱穴・土壙のプランを検出した。グリッド北辺で検出した土壙は残存長約1.5m、巾1.6m、深さ45cmを測るもので底面には炭・焼土が多量に堆積している。出土遺物には備前焼擂鉢片がみられ、近世初期に比定することができる。

以上、1区の概略について述べたが、他の調査区に比べると比較的遺構・遺物の検出・出土に恵まれており、安定面であったことが推定され、明治時代にも数戸の家が存在したといわれる言い伝えを裏付けているともいえる。遺物についても年代的巾が認められ後述の項で概略を述べるが、とりあげた遺物の大半は1区出土のものであることは注目に値する。

(2) 2区 (第6・12・13図、図版13)

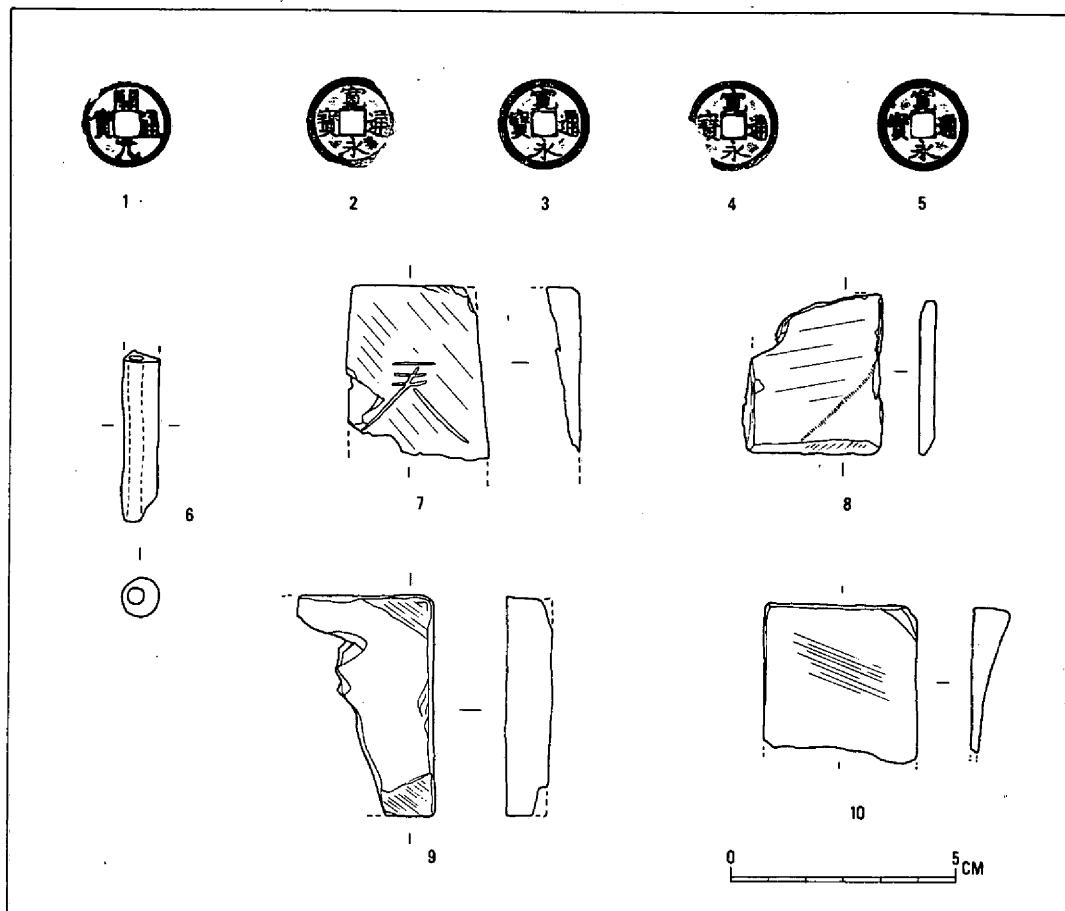
2区は農道および農業用水路をはさんで、1区の南東30~60mの水田中に設定した発掘区である。第5図による字名では「古町」・「垣ノ内」とされる地区で、グリッドおよびトレンチを設定して発掘

第12図 2区グリッド平面図 ($\frac{1}{100}$) 土層断面図 ($\frac{1}{50}$)

を開始した。グリッドは $4.5 \times 3.5\text{m}$ の小発掘区で、深さ約 40cm の砂質土面で、径 $35 \sim 45\text{cm}$ 前後の柱穴を検出している。この遺構面は土層堆積の状況から安定面とはみなされず、柱穴もほぼ単一時期のものと考えてよいだろう。トレントは全長約 40cm 、巾 2m を測るほぼ南北方向の発掘区を設定した。第13図に掲げた平・断面図はその北端区・中央区である。遺構は柱穴が多く、ついで土壌がみられるが前者はグリッドで検出した柱穴と同様径 30cm 前後を測るものが多く、後者は不整方形・長方形を呈するものがみられるが時期的には近代以降と推定される。遺構検出面は暗灰褐色砂層でさほど安定した生活面とは考えられず、高梁川に近い位置を占めていることにも、その因が求められよう。遺物の出土は、1区ほど多量ではないが寛永通宝・青磁片などがみられる。

(3) 3区 (第7・14図、図版14~16)

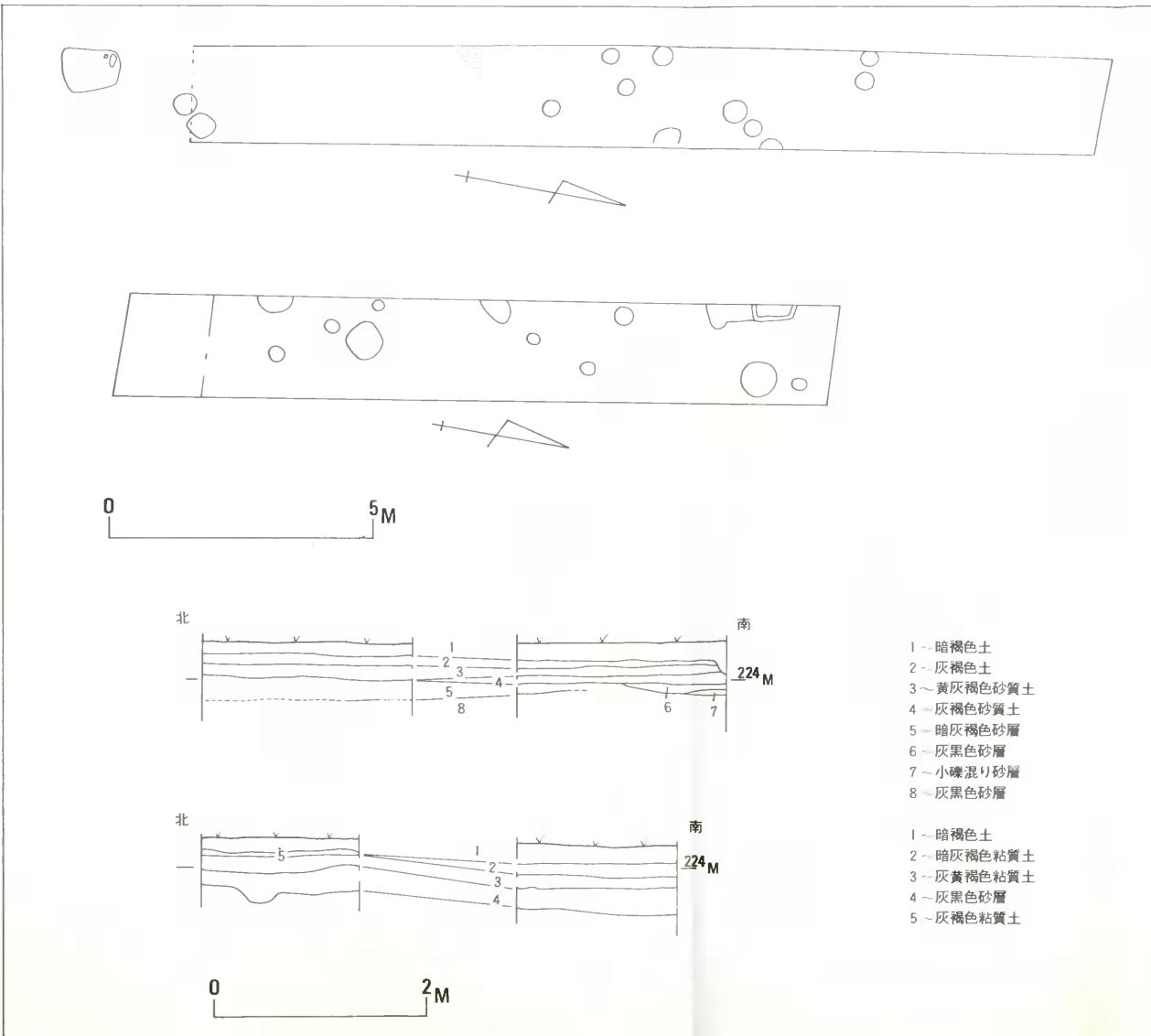
調査区のもっとも南方に設定した発掘区で、第5図による字名「観音寺」付近の水田にトレントを設定した。1区から南東方約 400m にあたり、水田面レベルは 221m 前後と1区・2区に比べると、や

第15図 錢貨・土錐・砥石 ($\frac{1}{2}$)

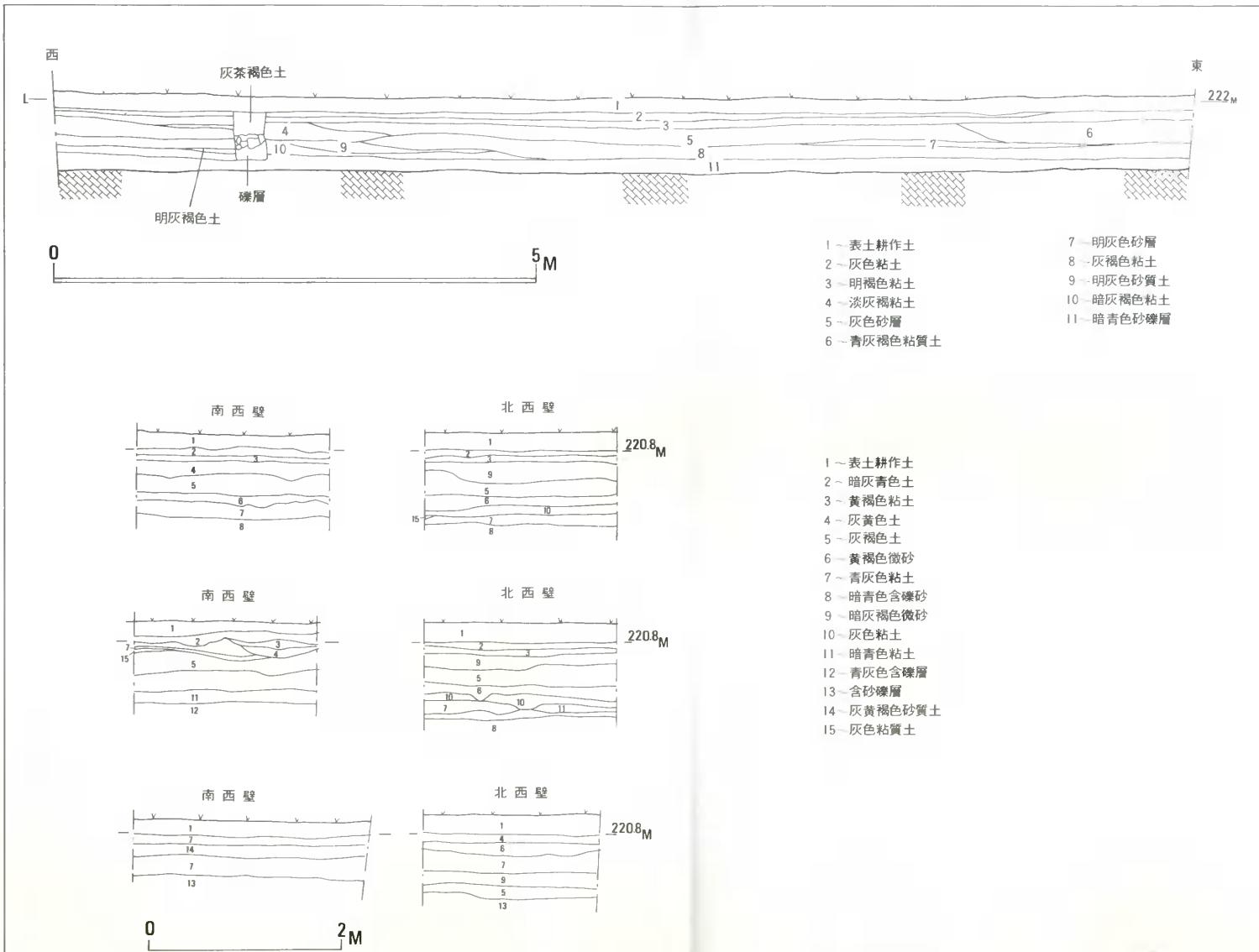
や低地となっている。第1トレンチは西方からびる微高地の東端部にあたるものと推定し設定した全長11.7m、巾3mを測る発掘区である。この地区では深さ約80cmで礫層に達し、その間10層を越える堆積土がみられ、長期にわたる安定面は認められない。第13図に掲げた土層断面図には第2層より掘り込まれた柱穴状ピットがあるが、灰釉陶器（皿・碗）の出土が注目される。いずれも第1層耕土層・第2層灰色粘土層よりの出土で、二次的に移動し、混入したものと考えられる。第2トレンチおよび第3トレンチは各々、全長45m、巾2m、全長18m、巾2mのトレンチであるが、いずれも安定面の検出は果たされなかった。第13図に掲げた第2トレンチの試掘断面壁の観察によると10数層の間断なき堆積層が認められ、深部は砂礫層となっている。高梁川の氾濫の際には、必ずといってよい程冠水をうけたことが推定され、生活面としての利用は全くなかったといってよいだろう。遺物の出土も耕土層・第2層より近世・近代の陶磁器片がわずかに出土しているが、いずれも二次的に埋積したものと考えられる。

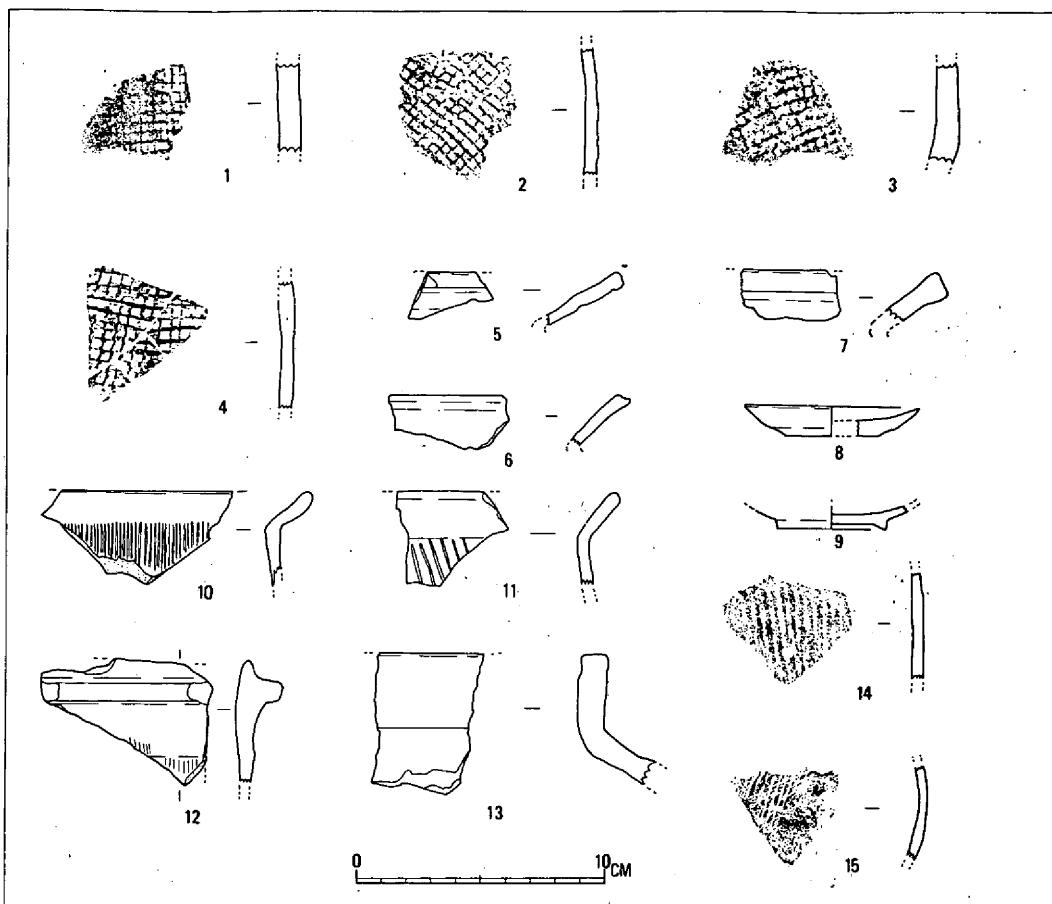
(4) 出土遺物の概要 (第15~19図、図版17~22)

各発掘区で出土した遺物の多くは、遺構に伴って出土したものは極めて少ない。また、出土地点に



第13図 2区第2トレンチ北端区平面図 ($\frac{1}{100}$) 断面図 ($\frac{1}{50}$)





第16図 須恵質土器・土師器 ($\frac{1}{3}$)

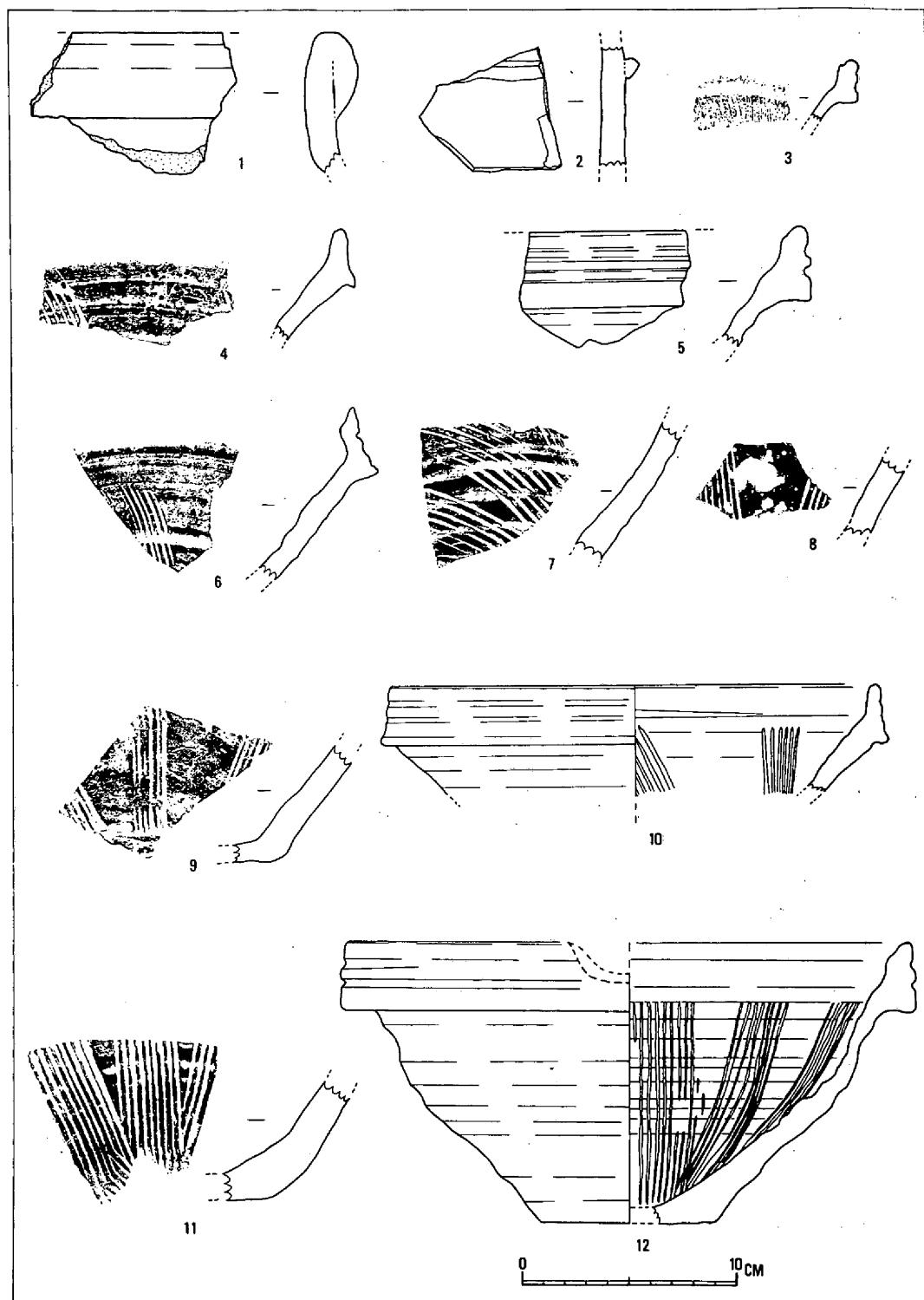
かつて存在したものであるか否か疑問で、度重なる高梁川の氾濫や、水田の整備に伴って土砂に混入して持ち運ばれた可能性もある。発掘区の中ではとりわけ1区第2トレンチにおける遺物の出土がもっとも多く、柱穴上面あるいは土壤内からの出土遺物もみられ、遺構の年代推定に手がかりを与えている。全般的に破片の出土が目立ち、実測図作成が可能となったものはごく1部である。以下、器種あるいは生産地ごとに分類し個々の概略について述べたい。

(a) 錢貨 (第15図—1～5、図版17—1)

開通元宝1枚、寛永通宝4枚が出土している。開通元宝は1区グリッド第3層より出土したもので、初鋳年845年とされるが、我が国では宋錢・明錢とも併用された時期があり、しかもそれらと出土する機会が多い。かなり磨滅が甚しいが損傷は目立たない。寛永通宝は17世紀前半より、我が国で鋳造されもっとも広く流通した銅錢で、1区および2区の柱穴上面より出土している。いずれも損傷は少なく、良好な保存状態を示している。

(b) 砕石 (第15図—7～10・図版17—2)

7は1区第2トレンチ中央区より出土した剥離性に富む硬質粘板岩製の小形砾石である。巾は3.4



第17図 備前焼擂鉢・備前焼片 ($\frac{1}{3}$)

cmを測り、その中央部に「天」字状の陰刻がみられる。8は1区耕土より出土した扁平小形砥石で黒色を呈し、粘板岩と推定される石材を用いている。9は1区表採遺物で淡いピンク色を呈する小形砥石である。石質は結晶片岩と推定される。10は1区で表採した粘板岩製の小形砥石である。黄褐色を呈し下方は使用によって極めて薄くなっている。

(c) 土錐 (第15図-8・図版17-3)

1区より出土した棒状単孔土錐で下半を欠失している。茶褐色を呈し、細かい砂粒を含む土師質焼成のものである。

(d) 須恵質土器 (第16図-1~4・図版18-2)

実測・拓本採取が可能であったのは、図に掲げた4点である。1は2区グリッド発掘区より出土した破片である。石英微砂を多く含む精良粘土を用い、焼成は極めてよい。外面は格子目のタタキが施され小灰黒色を呈し、内面は茶褐色を呈する。2は1区第2トレンチの柱穴内より出土した破片である。胎土・焼成ともに良好で、器壁は薄手である。格子目のタタキが施された外面は黒色を呈し、ナデ調整によって仕上げられた内面は灰黒色を呈する。3は1区第2トレンチ南端区の柱穴中より出土した器壁の磨滅が甚しい破片である。胎土は石英微砂を含む良質粘土を用い、焼成良好、極めて堅緻な厚手な器壁を示している。外面は格子目のタタキが施され、内面はナデ調整によって仕上げられている。4は1区第2トレンチ南端区第3層から出土した破片である。胎土は粗砂を含まぬ良質粘土で、焼成良好、堅緻な薄手の器壁を示している。黒色を呈する外面には格子目のタタキが施され、灰色を呈する内面は横方向のナデ調整によって仕上げられている。以上の4点はいずれも青色あるいは灰青色に発色しない、いわば瓦質土器ともいべき外観を示している。時期的には13~14世紀代に比定できよう。

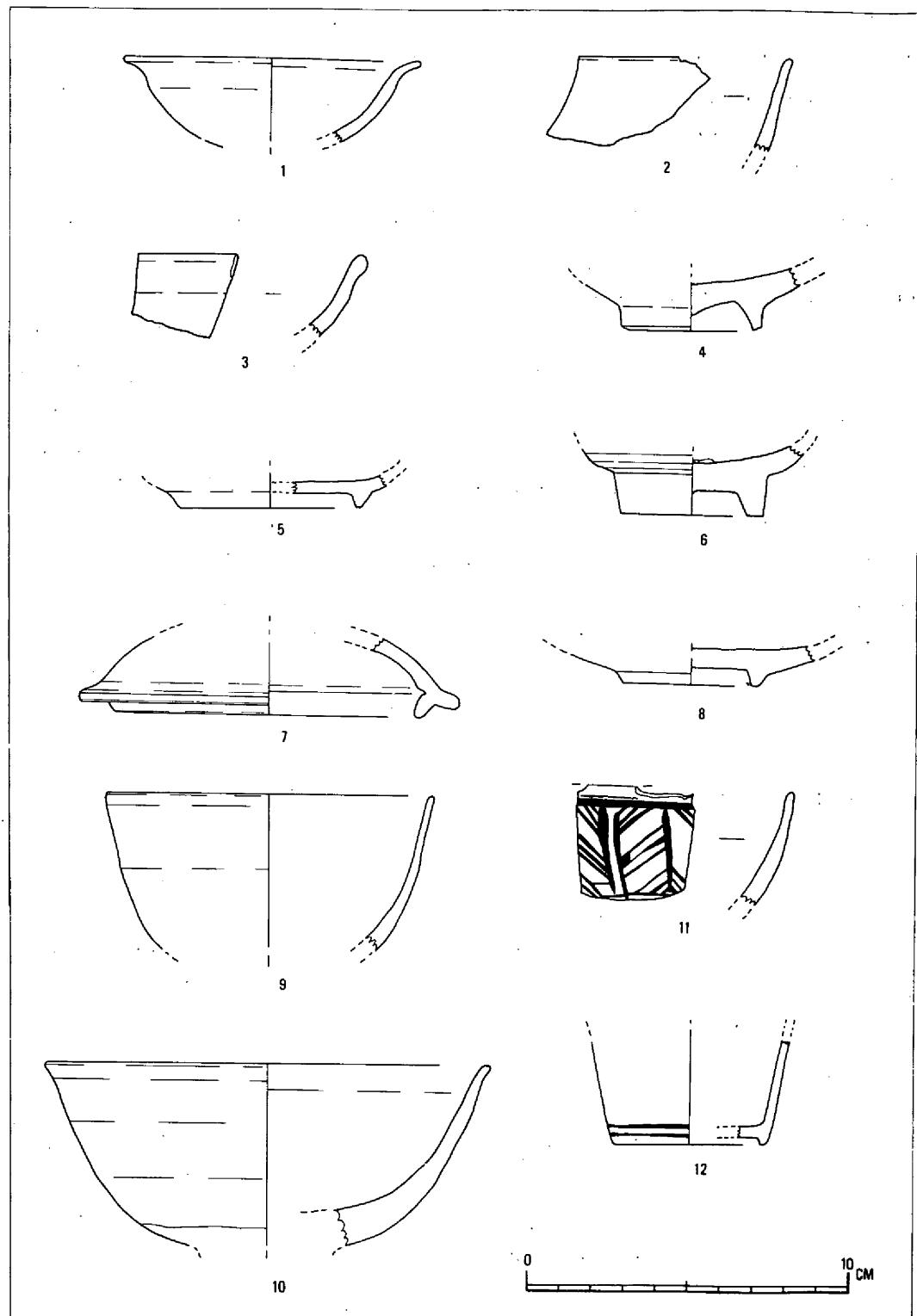
(e) 土師器・土師質土器 (第16図-5~15・図版17-3, 18-1)

いずれも日常什器と考えられる甕・鍋・羽釜、皿、椀などの破片である。小片が多いため、器形の全容を知ることのできるものは極めて少ない。5~7, 10・11はいずれも1区第2トレンチより出土した鍋形・甕形土器口縁部片である、いずれも外面は縦方向の粗い刷毛ナデ調整、内面は横方向の刷毛ナデ調整で仕上げられている。8は1区第2トレンチ耕土層より出土した皿で、底部は糸切底である。9は1区第2トレンチ耕土中より出土した椀片で、底部には輪状の粘土紐を簡略に貼りつけた低い高台を有する。10は1区第2トレンチより出土した羽釜形土器片である。器壁の磨滅が甚しいが、鋸の下方外面には縦方向の刷毛目を観察することができる。焼成は良好で、粗砂を多く含み、茶褐色を呈している。13は1区第2トレンチ南端区より出土した壺形土器片である。口縁部はほとんど直立し、端部には平垣面が認められる。体部内面は横方向の箝削りが行われている。器壁は厚く、胎土中には粗砂を多く含む。焼成は比較的良好で、茶褐色を呈する。14・15はいずれも第2トレンチ北端区より出土した破片である。胎土は微砂を含み、焼成良好、極めて堅緻な土師器である。いずれも外面は縦方向の刷毛調整、内面は横方向の刷毛調整で仕上げられている。

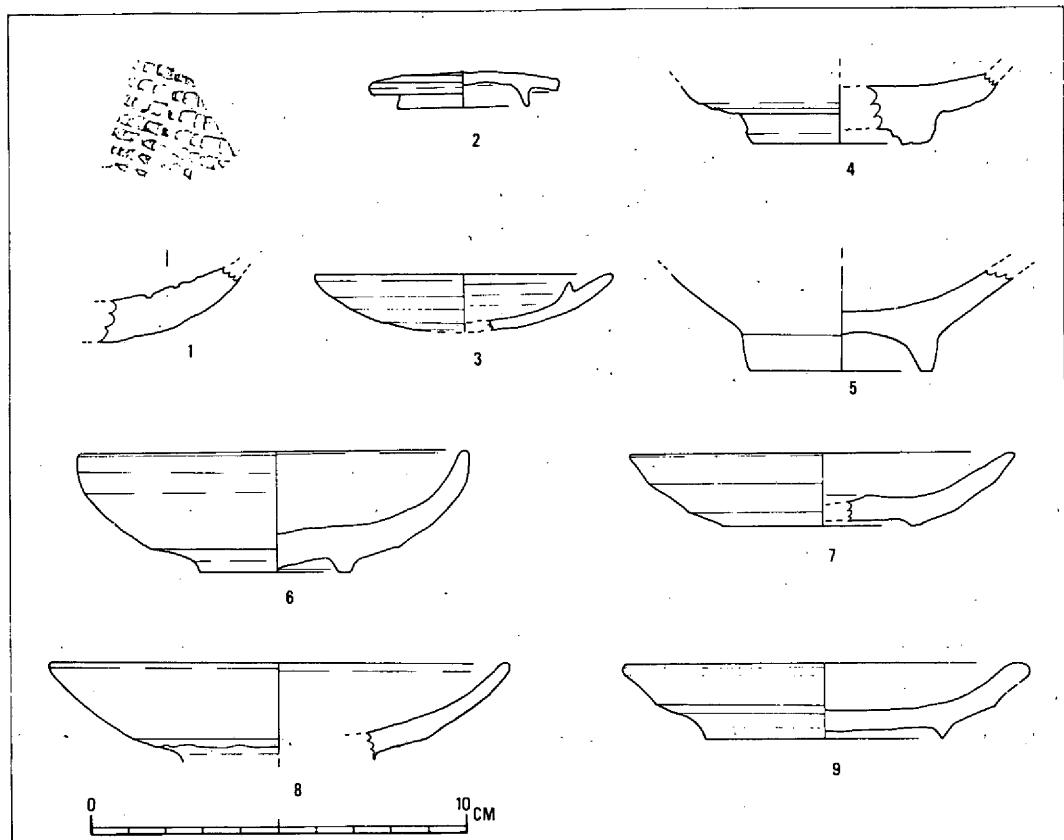
(f) 備前焼 (第17図・図版20)

大半は1区・2区で出土したものである。擂鉢片がもっとも多く、ついで大甕体部片が出土してい

新見庄関連遺跡（祐清塚・二日市）(45・41)



第18図 南宋代白磁・明代青磁・白磁・染付 ($\frac{1}{2}$)



第19図 灰釉陶器他 ($\frac{1}{2}$)

る。1は口縁部上方を玉縁状に折り曲げ肥厚せしめた大甕片で、1区第2トレンチより出土している。粗砂を多く含むが、焼成は堅微で、備前焼特有の赤褐色を呈している。2は1区第2トレンチより出土した壺形土器と思われる破片で、赤褐色を呈していない。破片の上方に横方向の鐘状の貼付け凸帯をもつ。3~12は擂鉢の破片であるが赤色の発色が認められず鎌倉末期の生産とみられるものが、9である。9は1区第2トレンチ南端区の柱穴中より出土した底部片で底部は比較的薄い。内面カキ目は6本を1条とし、底部よりほとんど放射状に施されている。内外面共に青灰色を呈する。4・7・8はいずれも1区第2トレンチから出土したもので、室町期に比定できる破片である。いずれも赤褐色を呈し、放射状あるいは斜方向のカキ目が施されている。5・6・10~12は室町末期~近世に比定される破片であるが、正確な年代は明らかではない。12は1区南方グリッド発掘区の土壤中より出土したもので、近世初期と考えられる擂鉢で比較的保存に恵まれて出土した。内面カキ目は8~9本を1条の単位とし、ほぼ放射状に施されている。口縁部の上方拡張、肥厚も極端な形状を呈している。5・11もこれと同様である。3は内面の全的に細いカキ目が施されたものでやや小形な擂鉢である。時期的には近世末~近代に比定されよう。

(g) 輸入陶磁器 (第18図、図版21)

1は1区第2トレンチより出土した南宋代の白磁碗片である。素地は灰白色を呈し、釉はわずかに

青味がかった白色を呈している。南宋代の白磁片は、他に3片出土しているがいずれも小片で、調査区全体でも1区以外出土していない。2・3はいずれも明代青磁片でいずれも1区第2トレンチより出土している。2は素地は白色、釉は淡青色を呈する碗の口縁部片である。3は素地は白色、釉は淡緑色を呈し、丸味をもった碗の口縁部片である。4・6はいずれも1区第2トレンチで出土した明代青磁碗の底部片である。4は素地は白色、釉は青白色を呈し、細くて高い高台がやや外方してつくられている。6は素地は白色を呈する。7は1区第2トレンチの灰褐色遺構検出面より出土した明代の製品と推定される白磁合子蓋片である。口縁部内面には身受けのカエリをもつ。素地は白色を呈する良質な土を用いている。釉は白色を呈する。9は1区第2トレンチより出土した明代の青磁碗である。復原口径はやや小さく径約10cmを測る。素地は灰白色、釉は灰色がかった緑色に発色している。10は2区で出土した明代の青磁碗片である。素地は灰黒色、釉は灰色がかった緑色に発色している。8・11・12は明代染付で藍色を基調とする染付が施されている。8は皿で、3区第3トレンチより出土している。素地は淡灰褐色を呈し、器壁は白色を呈する。11は1区表面採集遺物で綾杉様の藍色の染付が施されている。素地は灰白色を呈している。12は11同様、1区表面採集遺物である。素地は灰白色を呈し、体部下半には2条の横方向の藍染付が施されている。

以上の中国製輸入陶磁器は、中でも南宋白磁がもっとも古く12~13世紀の輸入、使用が推定され、16世紀後半に比定される明代陶磁器と共に大きく2時期に分けることができる。後者の量の多さは、生活居住地としてこの地域が安定したことと示すと同時に、当時の貿易の盛行を反映したものであろう。

(h) 灰釉陶器 (第19図・図版22-1)

1は瀬戸卸し目皿の破片で、1区第2トレンチ灰褐色土遺構面より出土している。上面は格子目状にヘラ描きが施され、灰緑色を呈している。底部はていねいな籠ケズリによって成形されている。2は近世以降に比定される青磁で1区南グリッド調査区より出土している。小形合子あるいは堆の蓋と考えられ、内面に身受けがある。釉は天井部にのみ施され、くすんだ灰緑色を呈する。3は備前焼燈明皿で1区表面採集遺物である。器壁は薄く、胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好で、赤褐色を呈する。4は1区表面採集遺物である。灰緑色の釉を施された碗で、鈍重な高台をもつ。素地は灰褐色を呈するが微砂を多く含む。5は1区南調査区第3層黒褐色土中より出土した碗である。底部を含む全面に釉が施され黄白色を呈している。素地は白っぽい褐色土を用いている。6~9は灰釉陶器で、いずれも灰緑色~灰色を呈する。6は3区第1トレンチより出土した皿である。低い高台をもち、体部は丸味をもって内反する。素地は灰褐色、釉は緑色を呈する。7は6と同様3区第1トレンチより出土した皿である。極めて低い高台をもち、ほぼ全面に灰緑色を呈する釉が施されている。素地は灰褐色を呈する良質土が用いられている。8は1区第2トレンチ北端部で出土した皿である。素地は灰色、釉はくすんだ灰色を呈する。9は3区第1トレンチ耕土層より出土した皿である。断面三角形を呈する低い高台があり、やや凹凸をもつ体部を経て丸味をもった口縁部に至る。素地は灰白色を呈する精良土で、釉は全面にわたって灰緑色を呈する。以上の灰釉陶器は大半が室町~近世にかけて使用されたものと考えられ、備前焼との共伴性が認められる。このほか瀬戸天目茶碗片も少量ではあるが、出

土しており、灰釉陶器と共に瀬戸系の製品の流通を物語っている。

(i) 染付（図版22—2）

伊万里焼とみられる角皿・丸皿が1区・2区を中心として出土している。いずれも破片で耕土中よりの出土が大半を占めている。また茶碗片の出土も多くみられ、体部外面に藍色を呈する網目文様が描かれた破片の出土が目立っている。いずれも近世～近代にかけての日常生活品と考えられる。

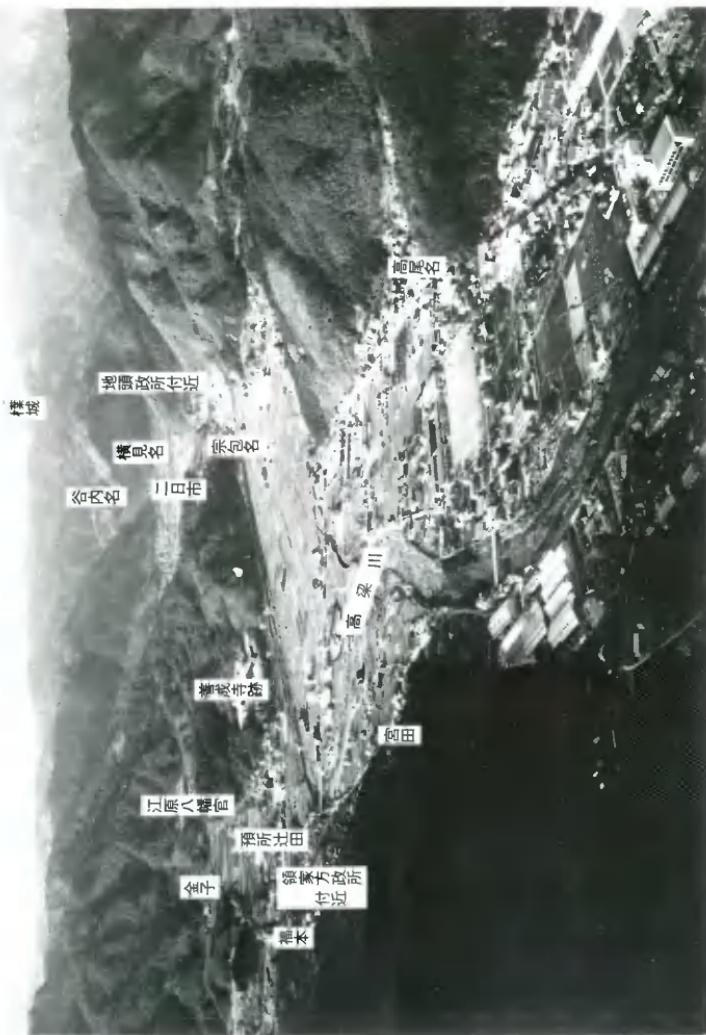
以上、出土遺物の概略を述べたが、このほか鉄滓の出土も目立ち、1区の字名「古鍛冶屋」の名のごとく中世～近世の鍛冶工房の存在をうかがわせる。いずれにせよ、1区・2区の字名「古町」を裏付ける日常生活什器を中心とした遺物の出土によって、二日市庭の一画をなす地点である可能性が認められよう。常に高梁川の氾濫の危険にさらされたとはいえ、河川交通、あるいは伯耆・備後に通ずる陸上交通の要に位置する地理的好条件を満たす場所であったといえよう。

結 語

二日市跡の発掘調査は1～3区に亘って行われたが、この内2～3区は谷内川・高梁川の氾濫もしくは水田造成によって、安定面をなしていない。1区（字名〈古町〉〈古鍛冶屋〉）では、遺物としては鎌倉・室町期、江戸期のやきものの出土、遺構としては柱穴および土壙が発見されている。このことから、この地域に、高梁川ぞいに定設的な建物群が存在しており、その建物群は、出土遺物の性格から生活をともなった構築物であったといえよう。これらのことから、この地域が、鎌倉期の新見庄の土地台帳に見られる二日市跡である、と推定することが可能である。そしてこの地域は、鎌倉期から江戸時代にかけて、何らかの形で市場の機能を果していたのではないだろうか。次にこの二日市跡の消長を、出土遺物等によって検討したが、判然としなかった。二日市から三日市への移行の問題についても、発掘の結果からは明確に結論を出すことはできなかった。

祐清塚推定地については、地下遺構は全く発見されなかった。地上の構築物は最近のものである。この附近の南面した山麓には中世墓跡や阿弥陀堂が発見されており、祐清塚推定地も、中世以来の祭祠区域に属している。これらのことから、祐清殺害事件の伝承地として推定することは可能である。

今回の新見庄の調査の問題点については、報告書の冒頭で記述したので、ここでは再言しないが、庄園史の一部分を解明するという観点からの発掘調査は、その方法結果が不十分なものであったけれども、画期的なことであったといわねばならない。従来の縦貫道建設とともに発掘調査においては、中世遺跡のそれは、古代遺跡のそれに附隨して行われるか、単発的に中世の遺物遺構としての調査に終始しており、地域の歴史を踏まえてのものは皆無といってよかろう。その意味からも、今回の調査は、今後の遺跡保存問題においても、中世史の研究という本来の学術研究においても、注目されてよいと思われる。



新見庄中心部俯瞰（新見市街地上空から北西方をのぞむ）

図版2



1. 祐清塚俯瞰（南東上空から）



2. 祐清塚近景（南西から）



1. 祐清塚に祭られた祠（左）と剣のミサキ（右）



2. 祠内部（南西から）

図版4



1. 祐清塚発掘状況（南西から）



2. 祐清塚発掘終了後（南西から）



1. 祐清塚東方の石塔群（西から）



2. 同上近景（南から）

図版6



1. 二日市調査区遠景（南東から）



2. 二日市調査区と横見墳墓・古墳群（南から）



1. 1区第1トレンチ(東西)発掘状況(東から)



2. 1区第2トレンチ南端区柱穴検出状態(北西から)

図版8



1. 1区第2トレンチ南端区遺構検出状態（南から）



2. 1区第2トレンチ南端区柱穴検出状態（東から）



1. 1区第2トレンチ中央区遺構検出状態（南から）



2. 1区第2トレンチ北端区遺構検出状態（南から）

図版10



1. 1区第2トレンチ中央区南柱穴検出状態（北から）



2. 1区南調査区（グリッド）土壤検出状態（南から）



1. 1区南北トレンチより北西方をのぞむ（南東から）



2. 1区五輪塔残欠（南から）

図版12



1. 1区南調査区五輪塔残欠付近（南から）



2. 同上調査状況（南から）

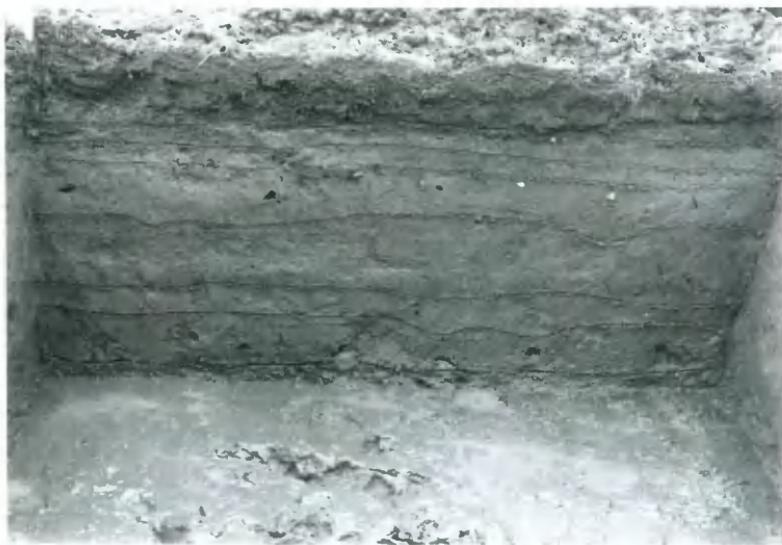


1. 2区トレンチ北半部柱穴検出状態（南から）



2. 2区トレンチ南半部遺構検出状態（北から）

図版 14



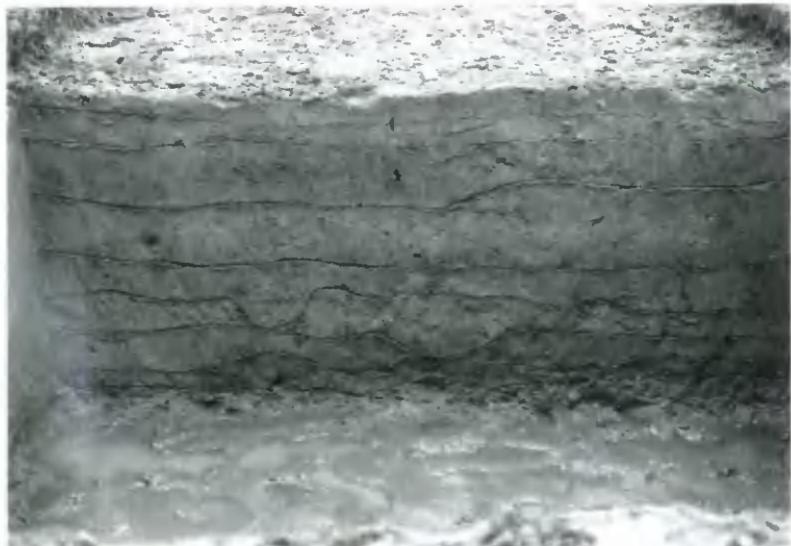
1. 3区第2トレンチ土層断面（南西壁）



2. 3区第2トレンチ土層断面（北西壁）



1. 3区第2トレンチ土層断面（南西壁）



2. 3区第2トレンチ土層断面（北西壁）

図版 16



1. 3区第2トレンチ土層断面（南西壁）



2. 3区第2トレンチ土層断面（北西壁）



1. 錢 貨



2. 砥 石



3. 土錘・土師質土器

図版18



1. 土師器片



2. 須恵質土器片



1. 須恵器片



2. 備前焼大甕片・壺片

図版20



1. 備前焼擂鉢片



2. 備前焼擂鉢片（1区南調査区土塙出土）

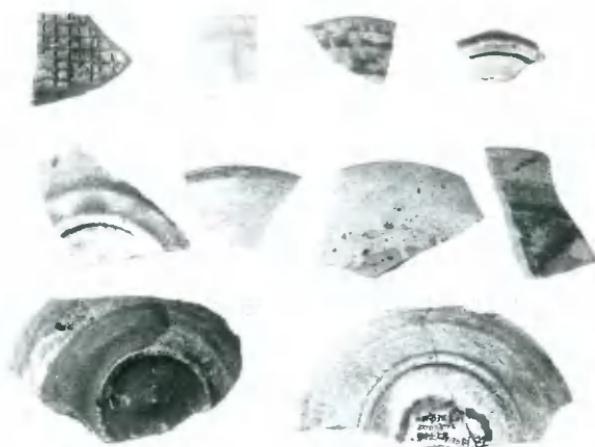


1. 南宋代白磁・明代染付



2. 明代青磁・白磁

図版22



1. 灰釉陶器



2. 伊万里系染付他

岩屋城址
岩屋経塚

(49)

例　　言

- この報告書は中国縦貫自動車道建設に伴って破壊されることとなった、阿哲郡神郷町下神代岩屋（あてつぐん　しんごうちょう　しもこうじろ　いわや）所在の岩屋城址ならびに岩屋第1経塚（以下経塚と記す）の発掘調査報告書である。
- 発掘調査は昭和51年2月23日から5月21日にかけて延べ89日間実施した。発掘調査の実施については、当初より3月上旬までは岡田　博・浅倉秀昭が担当し、以後3月下旬まで岡田1名が担当したが新たに秀島貞康が加わり、終了までこの2名が調査を担当することとなった。なお5月上旬から中旬にかけては岡本寛久・内藤善史両調査員の援助を得た。現地調査の実施については下記の方々の御協力をいただいた。記して深甚の謝意を表する次第である。

（順不同、敬称略）

神郷町教育委員会・小早川正信

〈現地作業員〉

奈須岩根　男知合音一　野田常吉　谷本繁　入江繁一郎　岡本清治　上田孝子　難波石雄　奈須真吾　福田宮二　千原美屋野　土屋光子　吉岡ふみ子　赤場好子　槙原常子　内田照明（慰靈祭御祓）　忠田小夜子（事務担当）

- 出土遺物の整理についてはその一部は、現地遺跡調査事務所で岡田・秀島が断片的に行つたが大半のものについては昭和52年4月から6月にかけて文化課分室（岡山市西古松）にて岡田が行つた。出土遺物は同所に保管している。
- 報告書の作成・執筆については現地調査の結果をもとに岡田・秀島両名の討議内容を、岡田がまとめた。
- 本文中に掲載した遺跡位置図は国土地理院発行の $\frac{1}{50,000}$ 図（上石見）を用いた。（承認済）周辺地形図等に用いた図面は、道路公団作成による $\frac{1}{1,000}$ 路線設計図を用いたが、一部については岡山調査測量K・Kに委託して作成した地形図を用いている。
- 遺構図については、岡田・秀島・岡本・内藤が実測・測量した原図を岡田が淨写した。遺物実測図の作成については、秀島が経塚周辺出土青白磁を担当し、他のすべては岡田が行った。淨写はいずれも岡田が行った。
- 写真撮影については遺跡遠景・遺構写真は岡田・秀島が分担し、遺物写真についてはすべて岡田が行った。
- 検出遺構等については岡山県総合文化センター高橋　護氏、青白磁等については九州歴史資料館亀井明徳氏、経筒・和鏡・湖州鏡については京都国立博物館難波田　徹氏の有益な御教示を得た。記して深謝の意を表する次第である。

本文目次

第1章 調査の経過

第1節 遺跡の位置と環境 93

第2節 調査の概要 95

第2章 1区の調査

第1節 経塚の調査 97

第2節 城址の調査 106

第3章 2・3区の調査

第1節 2区の調査 117

第2節 3区の調査 117

第3節 岩屋第2経塚 121

第4節 遺跡北西方五輪塔・散布地について 121

結語 124

挿図目次

第1図 遺跡の位置 ($\frac{1}{50,000}$) 93第2図 周辺地形図 ($\frac{1}{2,000}$) 94第3図 発掘区域図 ($\frac{1}{600}$) 94~95第4図 1区発掘着手前平面図・遺物出土地点 ($\frac{1}{200}$) 98第5図 1区遺構配置図・土層断面位置図 ($\frac{1}{200}$) 98~99第6図 経塚発掘前平・断面図 ($\frac{1}{60}$) 100~101

第7図 経筒・錫杖頭の輪・錢貨・刀片拓影および実測図 101

第8図 経塚方丘および周辺柱穴列平面図 ($\frac{1}{50}$) 102~103第9図 湖州鏡・和鏡・鏡片拓影および実測図 ($\frac{1}{2}$) 103第10図 青白磁合子・青白磁蓋・青白磁坩形合子・白磁碗実測図 ($\frac{1}{2}$) 104第11図 1区出土須恵器蓋片・須恵質土器片・土師質土鍋拓影および実測図 ($\frac{1}{3}$) 105第12図 1区掘立柱建物平・断面図 ($\frac{1}{80}$) 107第13図 1区経塚周辺柱穴列平・断面図 ($\frac{1}{50}$) 109第14図 1区西端部柱穴群平・断面図 ($\frac{1}{60}$) 110第15図 1区東端部柱穴群平・断面図 ($\frac{1}{50}$) 111第16図 1区北斜面柱穴群平・断面図 ($\frac{1}{50}$) 112

第17図	S 1～3・S 5 土層断面図 ($\frac{1}{50}$)	113
第18図	1区西端部土層断面図 (S 6)・1区北辺土層断面図 (S 4) ($\frac{1}{50}$)	114～115
第19図	2区土壤配置図 ($\frac{1}{200}$)	118
第20図	2区西端部土壤実測図 ($\frac{1}{30}$)	119
第21図	2区西端部土壤実測図 ($\frac{1}{30}$)	120
第22図	岩屋第2経塚出土鉄器実測図 ($\frac{1}{2}$)	123
第23図	五輪塔付近出土備前焼小壺・岩屋第2経塚出土須恵器拓影・実測図 ($\frac{1}{3}$)	123

図版目次

- 図版 1—1 遺跡遠景（北から）
 　　2 遺跡遠景（南から）
- 図版 2—1 遺跡からの景観（北方を望む）
 　　2 遺跡からの景観（南西方を望む）
- 図版 3—1 遺跡遠景（南西から）
 　　2 遺跡遠景（西から）
- 図版 4—1 遺跡俯瞰（北西から）
 　　2 遺跡仰視（北から）
- 図版 5—1 1区遠景（西から）
 　　2 1区北斜面近景（北西から）
- 図版 6—1 1区経塚（西から）
 　　2 経塚近景（南から）
- 図版 7—1 経塚西辺部石碑の位置（西から）
 　　2 石碑文
- 図版 8—1 経塚周辺遺構検出作業（西から）
 　　2 経塚表土除去作業（南東から）
- 図版 9—1 経塚発掘前清掃状況（南東から）
 　　2 経塚表土除去後（南東から）
- 図版10—1 経塚方丘南西肩部湖州鏡出土状態（西から）
 　　2 湖州鏡出土状態（南西から）
- 図版11—1 掘立柱建物（南西から）
 　　2 掘立柱建物（東から）
- 図版12—1 経塚南柱穴列（南東から）
 　　2 経塚東柱穴群（西から）
- 図版13—1 経塚南柱穴列（南から）

岩屋城址・岩屋経塚（49）

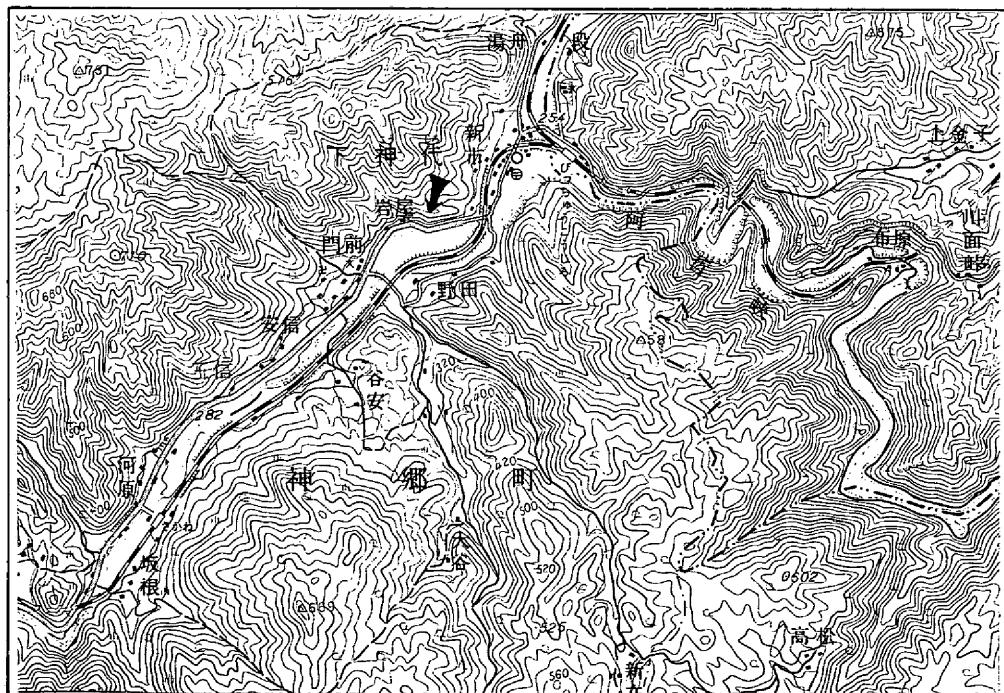
- 2 経塚南柱穴列（南から）
- 図版14—1 1区発掘終了後全景（西から）
2 1区西端部柱穴群（北東から）
- 図版15—1 経塚北整地層土層断面〈S 1〉（西から）
2 経塚北西整地層土層断面〈S 4〉（西から）
- 図版16—1 経塚南整地層土層断面〈S 3〉（東から）
2 同上土師質土鍋片出土状態（北東から）
- 図版17—1 経塚南西整地層土層断面（S 5）（西から）
2 1区西端区整地層土層断面〈S 6〉（南東から）
- 図版18—1 1区・2区発掘区全景（西から）
2 2区西半部（東から）
- 図版19—1 2区1号土壙（北東から）
2 2区2号土壙（南西から）
- 図版20—1 2区3号土壙（西から）
2 2区4号土壙（北西から）
- 図版21—1 3区全景（西から）
2 3区近景（北から）
- 図版22—1 遺跡北西方散布地〈杉林〉・五輪塔〈矢印〉遠景（東から）
2 五輪塔付近（北から）
- 図版23 経筒片
- 図版24 湖州鏡
- 図版25 和鏡片
- 図版26 刀片・錫杖頭の輪・錢貨
- 図版27 青白磁・白磁片
- 図版28 須恵器蓋片・明代青磁片・須恵質土器片・土師器皿底部片・土師質鍋形土器
- 図版29—1 岩屋第2経塚出土須恵器片
2 岩屋第2経塚出土土師器片・鉄器
- 図版30 遺跡地西方五輪塔周辺・散布地出土遺物（須恵器片・備前焼小壺・弥生式土器片）

第1章 調査の経過

第1節 遺跡の位置と環境

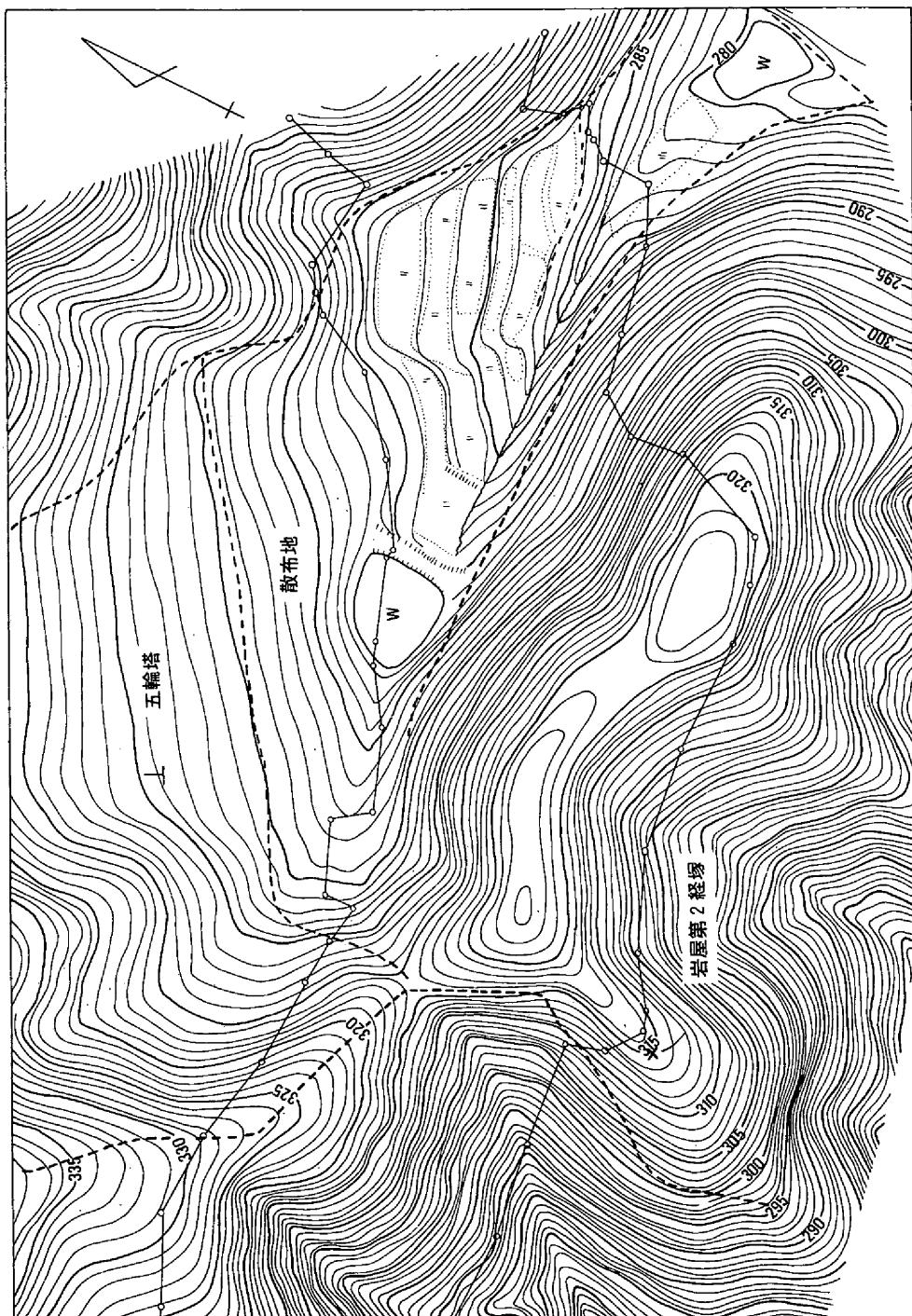
本遺跡は阿哲郡神郷町下神代岩屋に所在する城址ならびに経塚から成る複合遺跡である。遺跡は西方の急峻な山稜から東方へのびる、平野部からの比高約60m・海拔約326mの丘陵上に位置する。北西方の景観は本遺跡の存在する丘陵と、北方低丘陵によって形成された浅い谷が奥まって西方山稜の山麓を成し広い緩斜面が扇形に拡がり、一気に山頂に至る広大な山腹を眺望することができる。北方は東方低丘陵・低位台地をはさんで遠く九坂峠を望むことができる。南西方には神代川流域の狭長な小平野がのび哲西町境に位置する武坂山城を望む良地を占めている。眼下には神代川の蛇行点を見下ろし、東方に曲折しつつ阿哲峠と称する渓谷に至り、これを形成する山塊が新見方面への視界をさえぎっているが、古くより付近には新見に至る最短距離の交通路が存在し、国鉄伯備線もこの山間をぬっている。

概して眺望のよい良地を占めるこの丘陵の東方頂部が人工的な築成によって平坦面を成し、古くより岩屋城址あるいは中田山城址と称される城跡である。またこの頂部には後に明らかとなった経塚が存在し、樹齢数百年を数える楨の巨木がその方丘北辺に根を下ろしている。この頂部の東側には1段

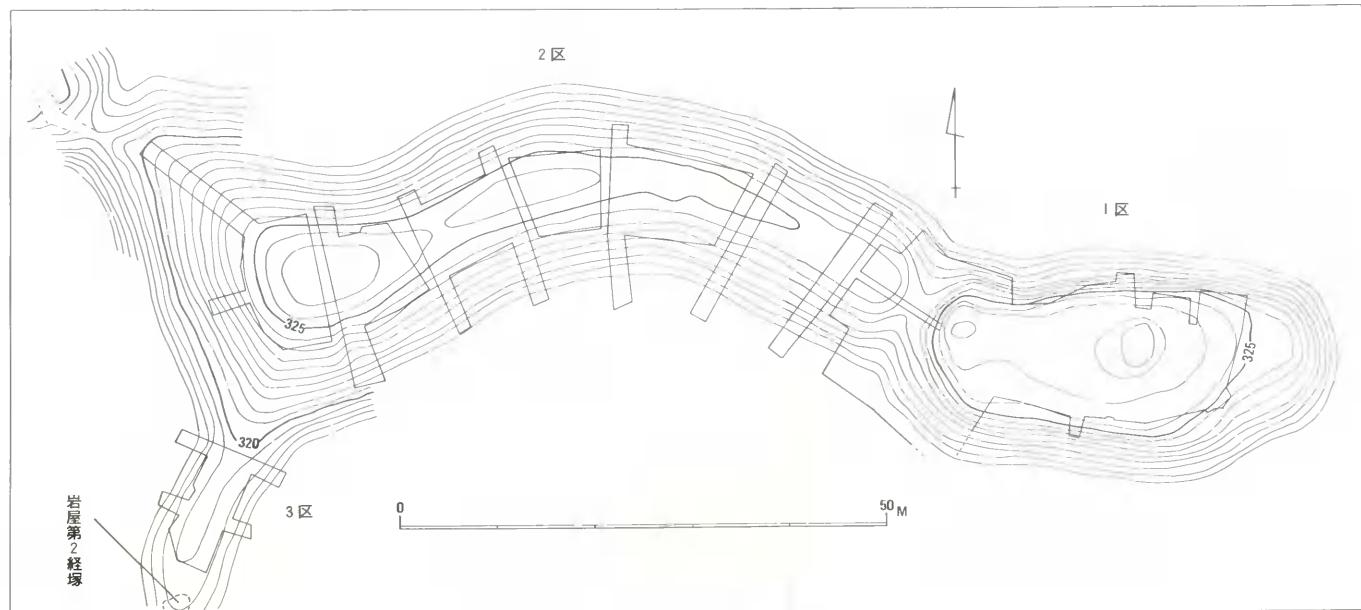


第1図 遺跡の位置 (1/50000)

岩屋城址・岩屋経塚（49）



第2図 周辺地形図 ($\frac{1}{2000}$)



第3図 発掘区域図 ($\frac{1}{600}$)

の狭い平坦部があり、丘陵稜線はこれより更に東方へ緩かに下降する。北方は極めて急峻で、登坂が困難な勾配を呈している。南側もまた、急な崖となっているが約6m下降した地点でやや緩かな丘陵が派生して、南方に下降している。西方は切り通し状の築成・整形がなされ、平坦かつ狭小な丘陵稜線に移行する。

この西方に延びた丘陵はやや高まった頂部に至り、その地点から西方に支丘陵が派生する。このやや下った支丘陵部分の一画に岩屋第2経塚と推定する集石遺構が存在する。

第2節 調査の概要

神郷町はもとより、新見市・哲西町を結ぶ地域には数多くの山城が知られている。神郷町における山城は6か所を数え、小規模な城砦を加えると10か所近く存在している。この岩屋城は、南西方約3.5Kmに存在する武坂山城と共に要衝を占め、東方の水田をはさむ眼前の山頂にも「出丸」と考えられている裸山が存在している。以上の山城のすべてが同一時期とは考えられないが、大きく南北朝時代（14世紀前半～後半）に築城使用されたもの、戦国時代末期の16世紀中葉～後半にかけての尼子氏と毛利氏の抗争期の築城使用と考えられるものに分類することができる。しかし前者の時期で廃城となっていても後に、再利用される機会が当然あり得たと推定され、画一的な分類は、現時点では不可能といわざるを得ない。今回の中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査に関わった山城は本遺跡を含め4か所にのぼる。後日、それらの調査成果については明らかにされる予定であり本遺跡との比較検討は本稿では触れぬこととした。（結語註参照）

神郷町史（註）によれば、「伝承によれば、南北町時代樋崎左京景宗が開いたといわれる。——中略——川を隔てた野田の後の山にも砦をもっていた」と記述されている。更にこの近辺を舞台にして軍事的抗争が起ったのは、伊勢神宮の御厨であったこの地域の中心地、門前の政所と樋崎氏との14世紀後半における抗争ではなかったかと推察している。

以上の客観的諸点をふまえ、発掘調査を開始することとなったが、本遺跡の主目的である築成平坦部の調査のみならず丘陵全体にその調査対象を拡大することとし、1～3区に調査区域を分割し城に付属する周辺遺構の検出につとめることとした。調査は東より1区（城址平坦部）～3区に分割し、3区より発掘を実施した。その結果、1区では当初予期しなかった経塚を検出し、不幸にして経典・奉賽品を埋納した遺構は破壊されていたが経塚に伴う遺品の数々が断片ながらも出土し、経塚築造の普及分布の一端を示した。一方城としての機能を果していた時期の遺構としては、1区全体の造成平坦部そのものが最大の遺構で、付属する掘立柱建物・柱穴列・柱穴群を検出した。またこの時期の遺物として永楽通宝・須恵質土器・土師質土鍋が出土している。2区においては西端部で土壙を検出したが、柱穴の存在は認められず城址の範囲の中に入らない地点と考えられる。3区も同様で用地内における遺構の検出、遺物の出土は全くみられなかつたが、用地外数mの地点で岩屋第2経塚と新たに呼称した須恵器片・土師器片・鉄器を伴う集石遺構が残存しているのを発見したのが予想外の成果であった。

岩屋城址・岩屋経塚（49）

以上、調査の大要を述べたが個々の遺構・遺物については第2章・第3章で詳述したい。

<日誌抄>

昭和51年2月23日（月）～28日（土） 発掘前遠景・近景写真撮影。発掘器材搬入、休憩小屋建築。(周辺のトレンチ調査が必要と思われたため、3区にトレンチを設定、発掘を始める。城としての性格を前提に1区平坦部の調査の前に)、平行して2月17日より岡田、浅倉2名で調査を開始し、トレンチ設定草刈りを行った宗金遺跡の写真撮影も行う。

3月1日（月）～6日（土） トレンチ調査続行。岡田・浅倉は宗金遺跡・岩屋城のかけもち調査を担当することになったが、新年度採用調査員が下旬より新たに加わることを前提に浅倉は2月いっぱいは当面宗金遺跡の専従調査員となり引き続きトレンチ調査等を行い、いわば第1次調査を担当することとなった。一方岡田は岩屋城専従調査員となった。

3月8日（月）～13日（土） 2区、3区トレンチ調査続行、2区頂部にグリッド設定発掘を開始する。

3月22日（月）～27日（土） 新年度採用が決まった秀島調査員来新、調査に合流。2区グリッド調査続行。1区との境界をなす切通し部分も平面調査を開始する。

3月29日（月）～31日（水） 2区グリッド調査続行。1区・2区平板測量。

4月1日（木）～10日（土） 1区と2区の間の切通し部分の表土除去作業。2区はトレンチの間にグリッドを設定、発掘開始。2区土壤の実測・写真撮影。

4月11日（日）～17日（土） 1区平坦部・裾部表土除去作業。周辺測量、写真撮影。

4月19日（月）～24日（土） 1区表土除去作業。深さ10cm未満の表土除去で、地山岩盤に達し、柱穴の存在を確認する。実測及び割付作業を行う。

4月25日（日）～5月1日（土） 2区の調査はほぼ終了。1区柱穴検出作業。数本のトレンチを設定、旧地形の復元を急ぐ。平板測量を始める。基壇状遺構は経塚と判明、5月1日午後、和鏡片・青白磁合子・錢貨・刀片など付近で出土、原位置を保たず破片となって散乱。

5月2日（日）～5日（木） 連休のため現地作業休止。

5月6日（木）～8日（土） 1区平面調査続行。1区西方の柱穴群は掘立柱建物を構成するまとまりがあり基壇状遺構に接する。また経塚方の南前面にも4～5本の柱穴が並び、うち1本より宋錢出土。経塚方丘上面で土層観察のために残していた土手の中より湖州鏡出土。遺存状態良好。

5月9日（日）～15日（土） 経塚東方用地内まで遺構検出作業。柱穴検出。検出遺構の清掃、写真撮影・実測。平板測量。

5月17日（月）～21日（金） 遺構の補足実測、写真撮影。平板測量をもって全ての調査を終了。

（註） 赤木武雄ほか、神郷町、昭和46年7月20日刊

第2章 1区の調査

第1節 経塚の調査

(1) 経塚の構造(第4~6・8図、図版6~10)

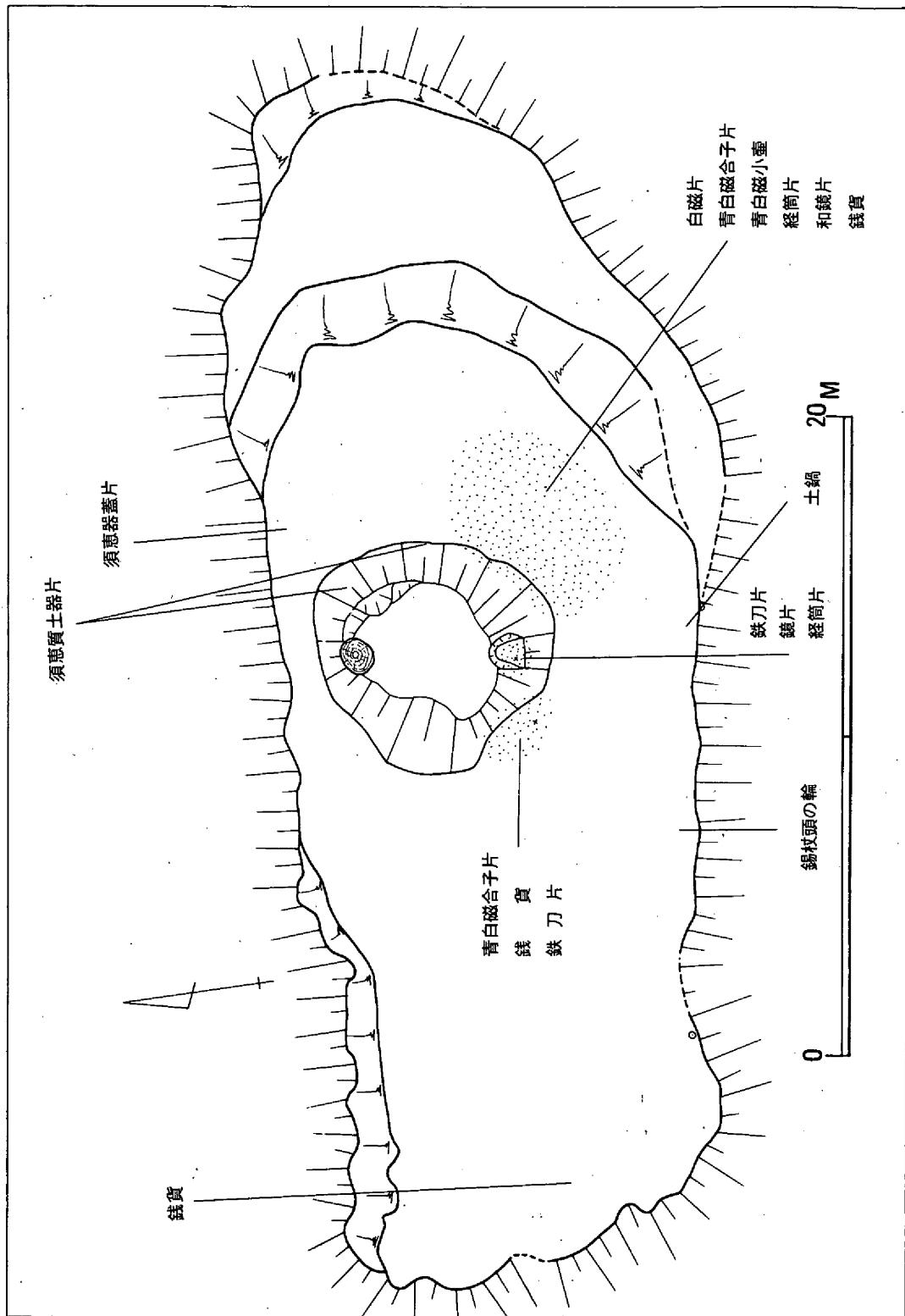
発掘調査開始時には、その存在に気づかず青白磁片・鏡片等の出土によって1区平坦部のやや東側に位置する方丘が経塚であることが認識された。発掘着手以前の状態では、径約7mのいびつな円形プランを呈し、高さ約1.0~1.2mを測る円丘の周囲に小頭頭大~人頭大、あるいは一人持ち大の河原石(円礫)・角礫が裾部を中心に径約9mにわたって密集し、北側には楕の大木が根を張って威容を誇っていた。円丘の西側に約50cm×70cmの「中田山城址」と陰刻された石碑が転倒しており、大正年間、地元青年有志がこの石碑を持ち運んで立てたことが裏面にも陰刻されている。これらの礫も、その時期に持ち運ばれたものと考えられたが、地元古老からの聞き取りあるいは言い伝えによって、否定されることとなった。また、1区平坦部が城として利用された時期に持ち運ばれた可能性も考えられるが、むしろ経塚が造営された際、積石塚のように多数の石をもって經典・奉賽品埋納部を中心覆ったものと考えるのが妥当であろう。

城としてこの平坦部が機能を果していた時期に、全く削平されずに、しかも多数の礫も残されていた点から、少なからず経塚としての意識が中世まで残っていたことを知ることができる。また、後述の寛永通宝の出土によっても江戸時代まで、経塚に対する追善供養が行われていたと理解されよう。しかし、城として利用された時期には、この経塚周囲の柱穴列・掘立柱建物の近接状況からみれば、物見櫓様の構築物があった可能性もあり、高所をそれなりに活用したと考えられよう。

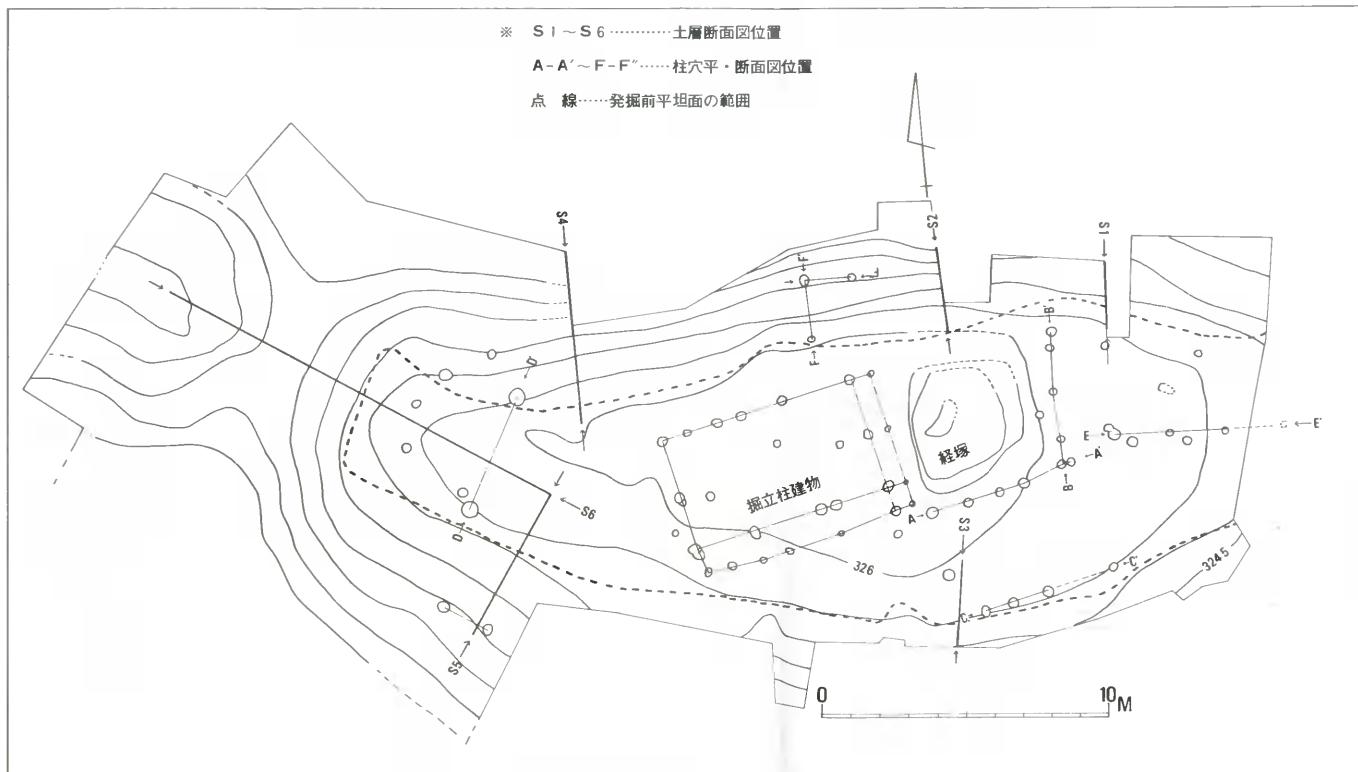
発掘はまず、礫の被覆散乱状況の実測、写真撮影の後、厚さ約10cm前後の表土を除去する作業から開始した。この表土中より寛永通宝・青白磁・鏡片・鉄刀片の出土がみられたが、副納原位置を保った状況ではなかった。また、この経塚が地山面を削り出していることがわかり、当初円丘状を成していたが、地山のプランは、削平等の影響によってややいびつではあるが、方形を呈することが判明した。北辺は、楕の樹根によって著しく原形をそこねているが、東辺約5m、南辺約4.5m、西辺約5mの残存部が直線的に観察された。この地山削り出し方丘の残存高は、若干の高低差はあるが、高所で約60cmを測る。この方丘上面には経筒やその他の副納品を埋めたと考えられる地下構築物の痕跡はすでに観察できず、頂部は大巾な削平あるいは盜掘・攪乱を受けたものと推定される。方丘の東辺・南辺部のB-B'列・A-A'列の柱穴列の方向から観察すれば南東隅に近い数mの部分は若干地山が削りとられたものとみられ、この方向数mの地点で、経筒・鏡片・青白磁片などが多く出土したことを考えれば削平・排土は主に方丘頂部より南東方へ向けて行われたと推定される。

この方丘上における遺物の出土は表土中より、先述の如くわずかにみられたが、南辺西方の丘頂肩よりやや下った地点で湖州鏡が出土している。副納原位置は当然保っておらず、奇跡的に完全な状態

岩屋城址・岩屋経塚 (49)



第4図 1区発掘着手前平面図・遺物出土地点 ($\frac{1}{200}$)



第5図 1区遺構配置図・土層断面位置図 ($\frac{1}{200}$)

で表土下に埋もれたものである。

(2) 経塚関係遺物（第7・9～11図・図版23～28）

前項で述べた如く、原位置を保って出土したと考えられる遺物は皆無ではなくとど経塚方丘上あるいは周囲の表土中から出土したものであるが中には、錫杖頭の輪のように経塚方丘より南西約7mの平坦部肩付近で出土したものもあり、遺物の散布は広範囲にわたっている。このことは、平坦部が城として利用された時期に、平坦部の削平・拡張が企てられ、経塚方丘の一部損壊に伴って一部の遺物が散乱したことも推定できる。しかし、攪乱・盜掘が本格的に行われたのは近代で、鉄製刀子・錫杖頭の出土が伝えられている。（註1）それらは経塚遺物とは認識されておらず、むしろ城址に伴う遺物として考えられたようで、「山頂、楓の木の近くを掘れば刀が出る」といった言い伝え、風評が最近まで続いているようである。

以上、経塚に埋納・副納されたと考えられる遺物について述べたい。また発見遺物は経筒と奉賽品一括とに大別でき、種類・数量について次に記す。

経筒……(a)	輪積式銅経筒片	1口分
奉賽品……(b)	湖州鏡	1面
	(c) 和鏡・和鏡鏡片	3面分
	(d) 銭貨（明錢・寛永通宝をのぞく）	4枚
	(e) 金銅装錫杖頭の輪	1個
	(f) 青白磁・白磁片	
	平形合子	1合
	壺形合子蓋	1個
	壺形合子	1合
	白磁片	1個
	(g) 須恵器蓋片	1個
	(h) 刀子片	数点

以上

(a) 輪積式銅経筒片（第7図1～7・図版23）

蓋・筒身・台座よりなる輪積式の経筒で、小片を含め20余点出土している。経塚方丘南東方裾部あるいは数mの平坦部表土中よりその大半が散布出土している。第7図-1・2は蓋片で笠形屋蓋式の形状を示しているが、極めて良質な銅を用いており暗緑色を呈し光沢を放っている。この笠形屋蓋の上部には相輪塔が付属すると考えられるが、出土破片の中にはその部位を示すと考えられる破片は見あたらない。3～6は筒身で口径8.45cmを測る。口縁部はやや内傾し、端部上面は平坦に削られている。外面には上方に4条の断面凹線状を示す水平方向の陰刻線がみられ、口縁部下方2.6cmの位置にも巾0.9cmにわたって6条の同様な陰刻線がみられる。この陰刻線が下端にも当然存在すると推定され、上端・中央・下端の3つの部位に存在すると考えれば、1段の筒身は高さ6.1cmを測るものと推定できる。6の内面は上方は縦方向の削りがみられ、中央部より横方向の削りに変化する。口縁端部

岩屋城址・岩屋経塚（49）

はややふくらみ中央部まで厚さ 1.5mmを測るが、下方は 0.9mmの薄手となっている。内面は白色あるいは緑灰色を呈し、経巻が灰泥化したと思われる部分もみられる。3～5の破片も上方は平たく削られ1.9mmを測り、この肥厚した口縁部の下方は0.6～0.9mmを測る。

7は台座（基台）で、上面径8.1cm、下端径11.5cmを測る。上面はほぼ水平な経巻をのせる面があったと考えられ、0.5mmを測る厚さを示している。筒身がおさまる部分は約1.7cmの立ちあがり部分でこの位置より「く」の字状に大きく外方する部分が身受けとなり、更に屈曲してやや裾開きを示す下端部に至る。上部立ちあがり部中央には2条の水平陰刻線があり、下端の屈曲部あるいは端部にも同様な陰刻線がみられる。各屈曲部は厚さ 1.5mm前後を測り他の直線・曲線部分は0.7～0.9mmを測る。蓋片に比べるとやや銅質が悪く銹化が進行している。以上の経筒を復原考察すると、他の出土例（註2）と同様4段輪積式経筒と考えられる。したがって台座に筒身がおさまった状態で約26.4cmの高さが推定され、相輪塔を有する笠形屋蓋を加えると総高40cm前後を測る規模をもったことが推定できる。従来、この形式の経筒は北九州の1部地域の経塚にのみ出土が限定されており（註3）本州における確実な出土例はこれが初見といえる。（註4）

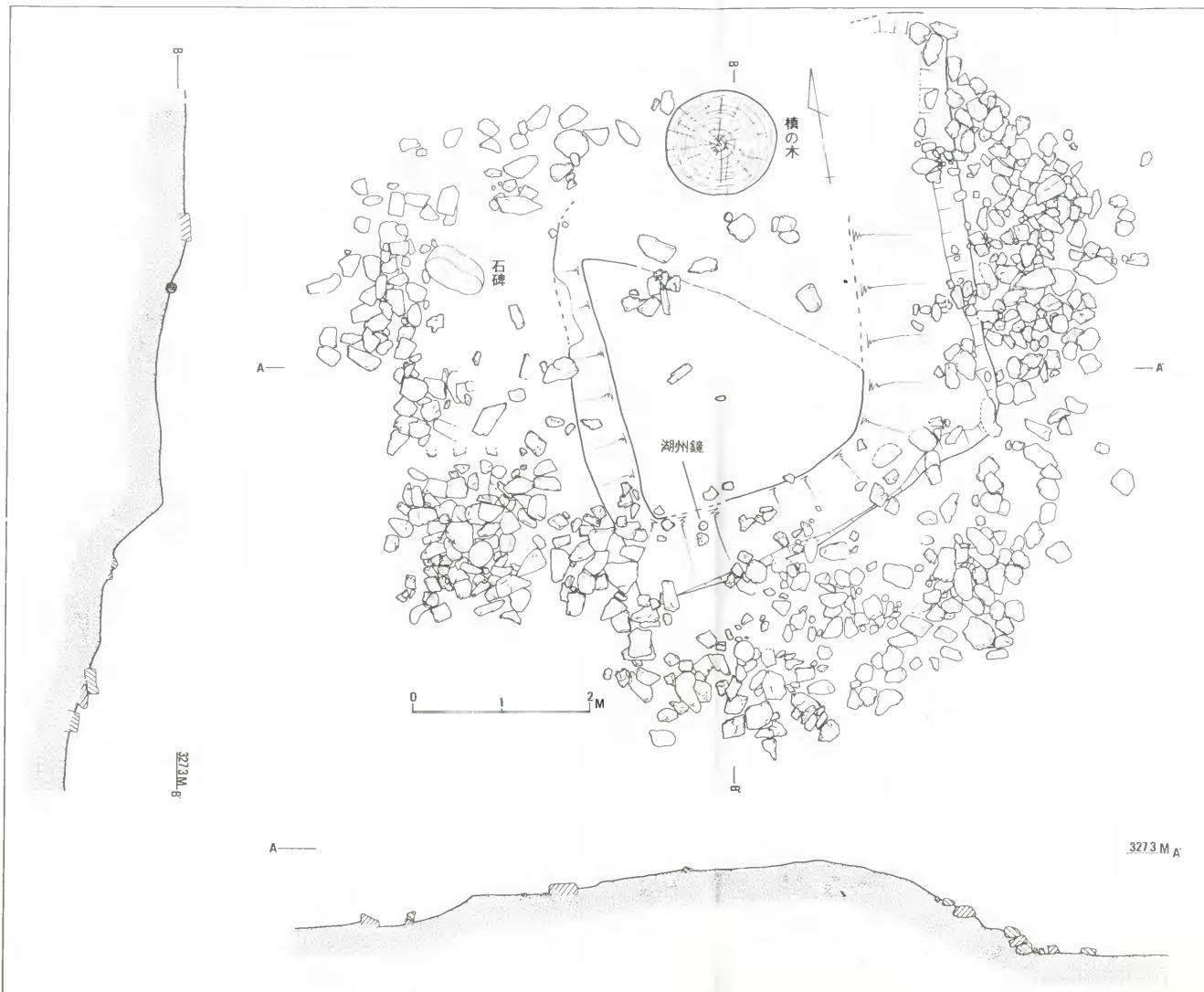
（b）湖州鏡（第9図-1・図版10・24）

中国浙江省湖州において専ら製造されたいわゆる湖州鏡で、我が国には平安時代後期を中心に輸入された。経塚方丘上の南西肩付近で鏡背を上にして出土したが、埋納原位置は保っていないと考えられる。鏡径10.6cmを測り、鏡縁は断面蒲鉾形を呈し、上面を削って巾2～4mmの平坦面をなしている。鏡縁部分の厚さは約3mm、鏡面は2mmを測り、わずかな反りが認められる。鈕は素鈕で鈕座と思われる径1.3cmの部分はやや凹んでいる。銅質は後述の和鏡に比べれば良質とはいえず、鏡面・鏡背共に銹化し緑色を呈している。鏡面には銀色を呈する鍍金が一部認められ、物象を映す機能を高めるための所作と考えられる。鏡背には短辺2cm、長辺4.6cmを測る長方形銘文区画をもち『湖州真石念二叔家青銅照子』の銘文が2行にわたって陽鏤されている。この湖州鏡の出土は近畿以西に顯著に知られ、県内では他に御津郡建部町福渡所在の高井谷経塚出土例・備前市鶴山福田所在の経塚出土例が知られている。（註5）

（c）和鏡・和鏡鏡縁片（第9図-2～8・図版25）

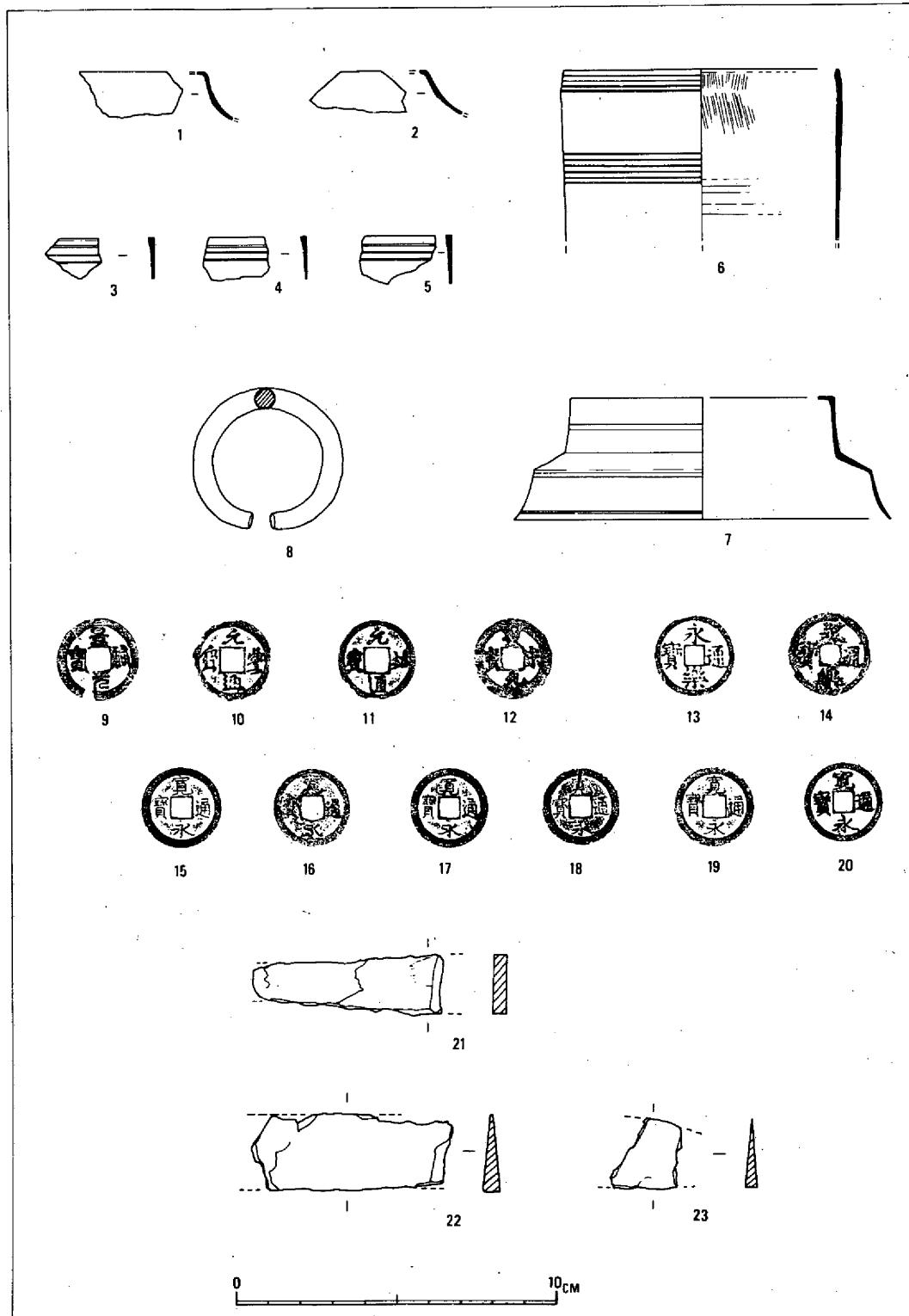
① 松喰鶴鏡（第9図-2）

経塚方丘南東方約3mの経塚遺物の散布地点から出土した鏡径11.4cmを測る、いわゆる松喰鶴鏡である。約半分を欠いているが、残存鏡片の鏡背には、松枝をくわえた鶴が優雅に翼をひろげた図柄が陽鏤されている。欠失部鏡背にもシンメトリックにもう一羽の鶴が描かれていたと思われるが、羽毛の表現など極めて優れた描写・鑄上がりを示している。鈕座はいわゆる捩菊座鈕で径1.5cmを測る。鈕より4.2cmの位置に巾約1mmを測る1条の細くて低い界線（細線単圈式）がめぐり、図柄はこれより鏡縁の間にも及んでいる。鏡縁は巾1.1～1.3mmを測る細縁で、鏡面よりわずかに外方して約7mm立ちあがり、鏡縁上面は平坦に成形されている。銹化は鏡面において著しいが、鏡背は文様の観察をさまたげる程でもなく、良質な銅が用いられたこと、恵まれた条件で遺存していたことがわかる。鏡面は破損によって凹凸が甚しいが、厚さ0.7mmを測る薄手なつくりである。



第6図 経塚発掘前平・断面図 ($\frac{1}{60}$)

岩屋城址・岩屋経塚 (49)



第7図 経筒・錫杖頭の輪・銭貨・刀片 ($\frac{1}{2}$)

② 萩尾花双鳥鏡（第9図一3）

松喰鏡と共に出土した3片の鏡片を接合・復原したもので、鋤・鋤座および鏡縁は残存していないが、鏡背文様は全体の約 $\frac{1}{2}$ を復原推定できる大きさである。図柄部分の鋤上がり・残存度は極めて良好で、萩尾花の間に翼をひろげて舞う小鳥が写実的に描かれている。界圈は松喰鶴鏡と同様、単圈細線式で巾 0.8mm を測る。界圈の径は、復原計測によると約 8.2cm 前後を測るもので、松喰鶴鏡の計測値を参考にすると、鏡径は $10\sim 11\text{cm}$ を測るものと推定できる。鏡面は汚損し、凹凸も著しいが、鏡質そのものは優れている。鏡面の厚さは 0.9mm を測り、松喰鏡よりはやや厚目である。

③ 型式不明鏡（第9図一4）

小片ではあるが、出土した和鏡の中でもつとも良好な鏡質を示し、白銅質特有の白っぽい光沢を放つ灰青色を呈している。出土地点は経塚方丘南辺で、2片の鏡片を接合したものであるが、他に同質の破片はみられない。鏡面は極めて平滑で、今なお銹化及ばず光沢さえ放っている。鏡背文様は、瑞花双鳥鏡の「瑞花」あるいは、唐草双鳳鏡の「唐草」文様いずれかと考えられる。銅質・文様の鋤上がりは極めて良質、良好で、鏡面の厚さは 1.7mm を測る厚手なものである。

④ 和鏡鏡縁片（第9図一5～8）

いずれも、先述の和鏡と共に出土しているが接合不可能であった。5～7は松喰鶴鏡の鏡縁の形状に似ており、細縁式の鏡縁がやや外方して立ちあがるものである。5は鏡縁上面の厚さ 1.3mm 、鏡面の厚さ 0.75mm 、6は各々、 $1.3\text{mm} \cdot 0.75$ 、7は $1.4\text{mm} \cdot 0.6\text{mm}$ を測る。8は各々 $1.7\text{mm} \cdot 1\text{mm}$ を測るが鏡縁の立ちあがりや鏡面の厚さが異なり萩尾花双鳥鏡の鏡縁となる可能性が強い。

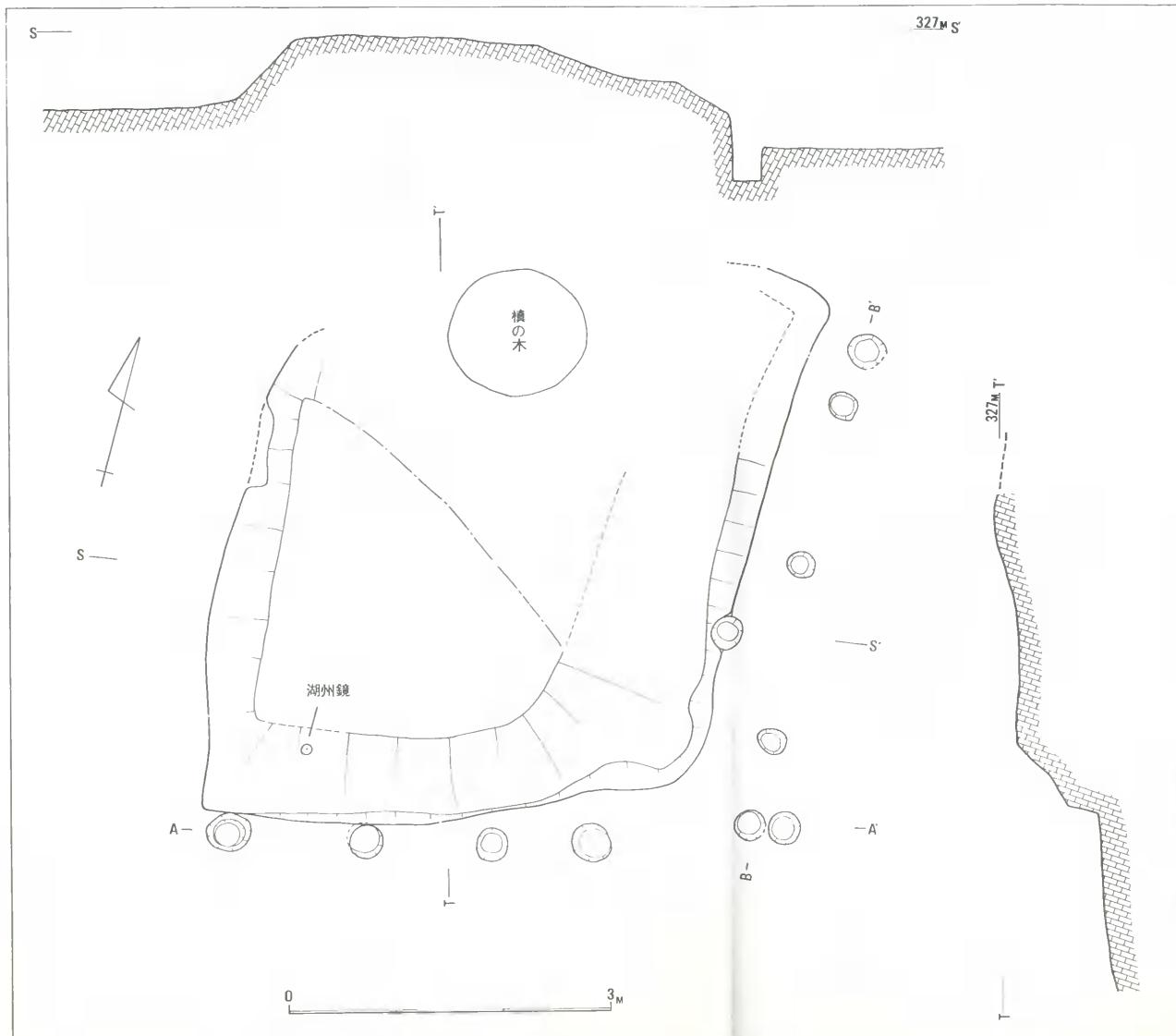
(d) 銭貨（第8図一9～20・図版26）

いずれも北宋錢で4種4枚が出土している。経塚に奉賽品として副納されたと考えられる確実な銭貨と推定される。9は景祐元宝で、経塚方丘南のA-A'柱穴列の西から3番目の柱穴から出土したもので、初鑄年は1034年である。10は元豐通宝で1区西端部整地土層中より出土したもので、初鑄年は1078年である。11は元祐通宝で経塚方丘付近から出土したもので、初鑄年は1086年である。

12は聖宋元宝で、経塚方丘南東付近で出土したもので、初鑄年は1101年である。図に掲げた永樂錢・寛永通宝については、前者は城址に伴い、後者は経塚に対する近世の追善供養の目的で経塚方丘付近に供えられたものではないかと推定している。永樂通宝は初鑄年1408年で中国明時代に铸造、我が国には15～16世紀にわたってかなり輸入、流通した銭貨である。また、寛永通宝は17世紀前半より、我が国で铸造され、広く国内に流通したもので、いずれも経塚方丘西半部、あるいは小柱穴中より出土している。

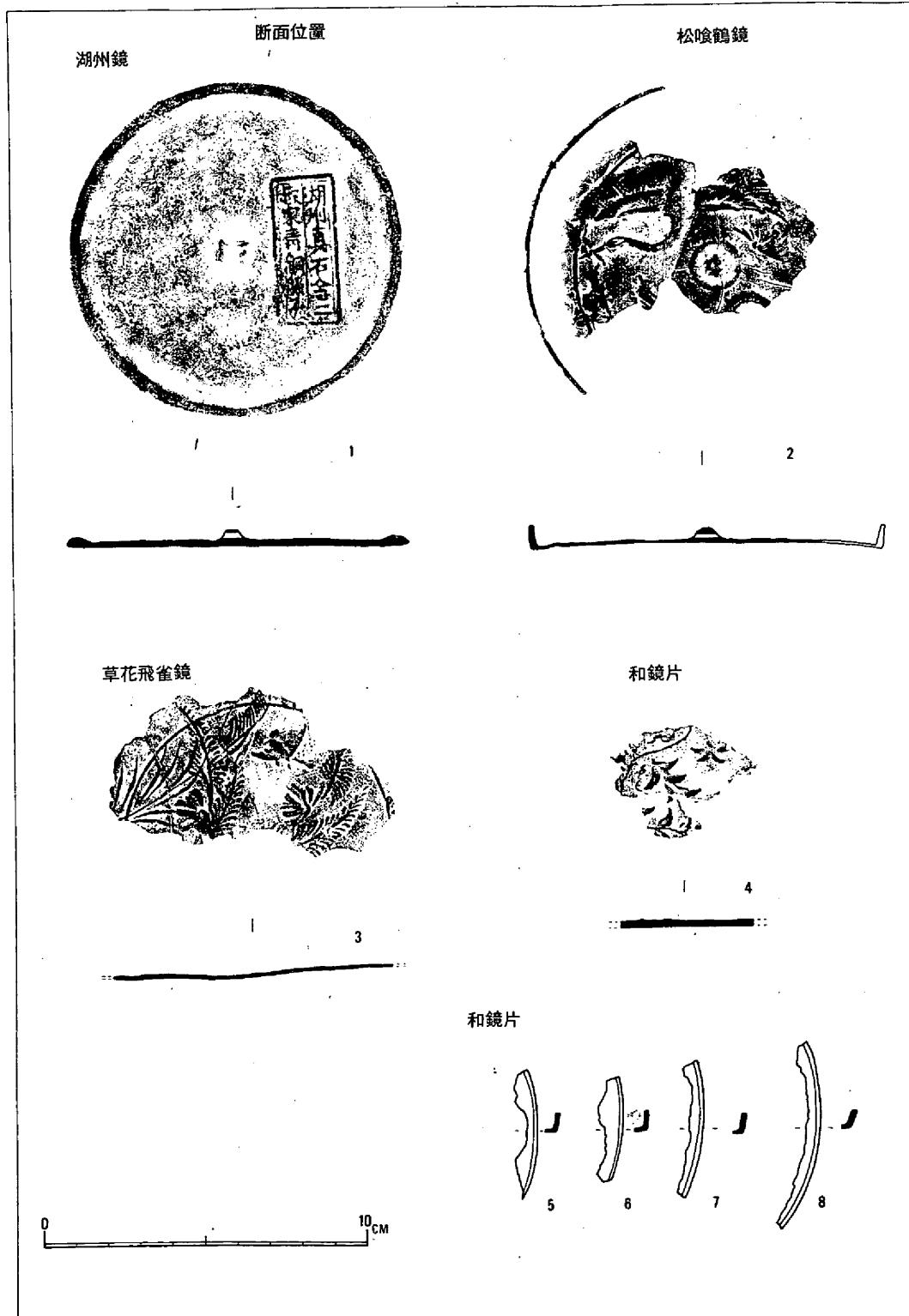
(e) 金銅装錫杖頭の輪（第7図一8・図版26）

経塚方丘の南西約 6m の平坦部肩の整地土層中より単独で出土した。この地点は、この平坦部が城として利用された時期に、削平・拡張をうけた際生じた南側急斜面の肩部にあたる。おそらく、経塚方丘の上面が採土・攪乱をうけた際出土し、整地土に混入して今回出土したものと考えられる。形状については、径 $6.62\sim 6.625\text{mm}$ を測る棒状の銅線を円形に折り曲げたもので輪径約 4.5cm を測る。剥落が甚しい表面の一部には金銅装部分を観察することができる。今回の調査では、錫杖頭の出土はみな

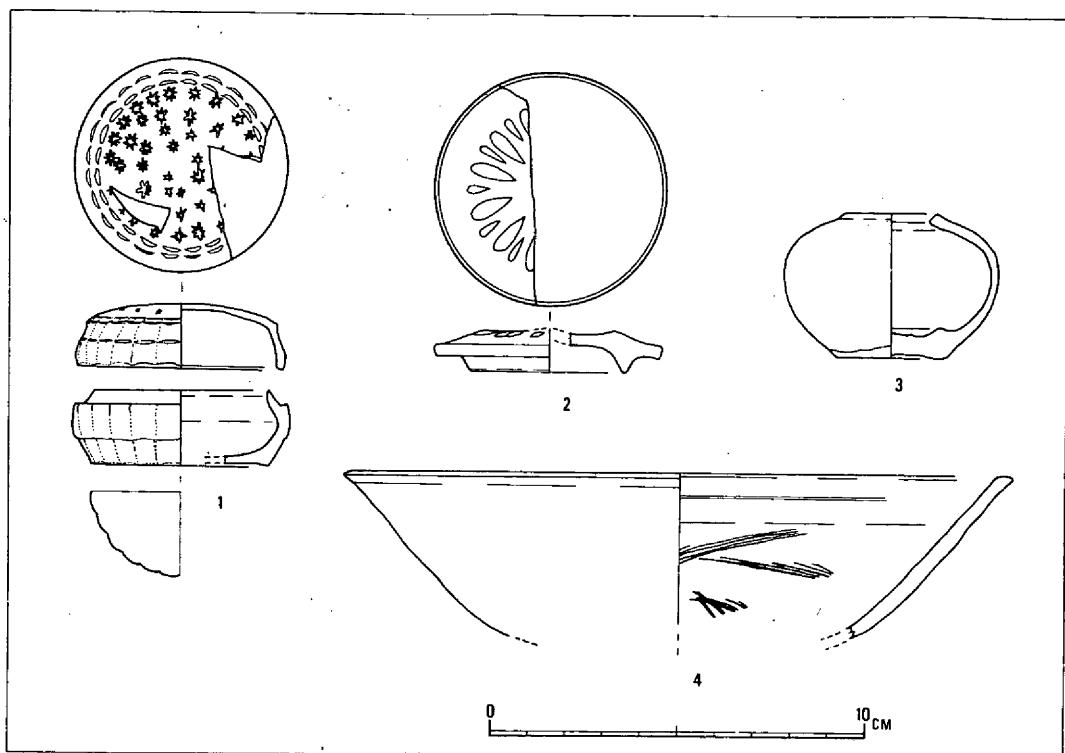


第8図 経塚方丘および周辺柱穴列平面図 ($\frac{1}{50}$)

岩屋城址・岩屋経塚 (49)



第9図 湖州鏡・和鏡・鏡片拓影および実測図 (1/2)

第10図 青白磁合子・青白磁蓋・青白磁壺形合子・白磁碗実測図 ($\frac{1}{2}$)

かったが、かつて出土した伝承があり、それもまた金銅装であったといわれる。その際、錫杖頭よりこの輪がはずれていたかどうかについては明らかではないが、1区平坦部造成期に、他の経塚遺物とともに破損をうけながら平坦部各所に散乱したと考えるのが妥当な推測であろう。

(f) 青白磁・白磁片 (第10図-1～4・図版27)

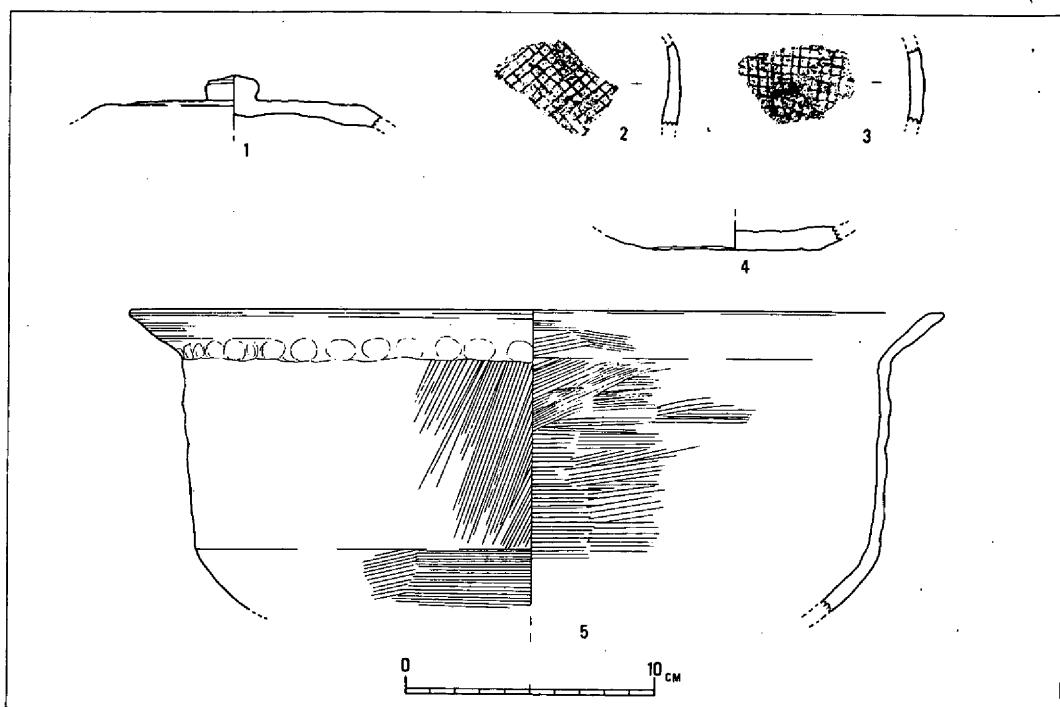
① 青白磁平形合子 (第10図-1)

経塚方丘周辺より身・蓋が破片となって出土した。印籠蓋式の青白磁合子である。蓋は径5.4cm、高さ1.7cmを測る。天井部には型押しによる菊花文が施され、肩部は輪花状を呈しややくびれながら、同様に輪花状をなす口縁部に至る。淡青色に発色した釉は口縁端部より内面にはおよんでいない。身は、口径4.6cm、蓋受け部の径5.1cm、高さ2cmを測る。外観は蓋と同様輪花状をなし、釉は蓋受け部・体部下半・底部を除いて施され、淡青色を呈す。蓋・身いずれも素地は白色を呈し精良である。また器表面には細かな傷がついており、中世以降数度の移動・損傷をうけたことを示している。

② 壺形合子蓋 (第10図-2)

経塚方丘付近表土中より出土した青白磁蓋で、天井部には型押しによる花文がみられる。復原推定径5.9cm、高さ1.1cmを測る載せ蓋で、身受け部・内面を除く天井部に淡青色の釉が施されている。この蓋に伴う壺形合子は発見できなかった。

③ 壺形合子 (第10図-3)

第11図 1区出土須恵器蓋片・須恵質土器片・土師質鍋形土器 拓影および実測図 ($\frac{1}{3}$)

本来、栓形の蓋を伴うものであるがその出土はみなかった。経塚方丘南東付近より鏡片・経筒片などと共に出土した青白磁で体部下半より口縁部にかけての1部を欠いている。器高3.8cm、口径2.4cm、最大体部径5.2cm、底径2.9cmを測り、器体は左方向に成形され、体部の器壁は薄く仕上げられ厚さ6mm前後を測り、内面体部下半より底部にかけては凸凹が目立つ。淡青緑色を呈する釉は、底部を除いた全面に施され、内面底部の一部には釉の流れ込みがみられる。器表は風化が顕著で、釉の剥落がみられ、全体的にくすんだ白っぽい褐色を呈している。

④ 白磁片（第10図-4）

白磁碗の口縁部破片で、経塚方丘南東方散布地より出土した。復原推定口径17.7cmを測り、全体的に淡灰緑色を呈している。素地は良質で白色を呈し、成形は極めてていねいで、口縁部は鋭く外方し端部は鋭角を呈する。内面にはいわゆるネコカキ（櫛描き）が3条みられる。

（g）須恵器蓋片（第11図-1・図版28）

・経塚方丘北東方で出土した唯一の須恵器片で、退化した宝珠つまみ部を残した小片である。つまみ部は径2.1cm、高さ1.1cmを測るやや小形なもので上面は扁平である。全体の形態は不明であるが、淡灰青色を呈し、焼成良好で胎土も長石・石英微砂を含む良質な粘土を用いている。天井部はほぼ平滑で厚さ約5mm前後を測り、約8.5mmの厚さを測る肩部を経て体部へ移行する。単独1片のみの出土であるため正確な用途は不明であるが、経筒外容器（筒）の蓋として用いられたのではないかと推定され、平安初期～中期の製作になる伝世品と考えられる須恵器片である。

(h) 刀片（第7図-21～23・図版26）

経塚方丘南辺付近および南東方散布地で数点の小片が出土している。第7図-22・23は刃部片で、後者は切先に近い部位の破片である。22は刃部最大巾2.3cm, 23は2.15cmを測り、断面はいずれも二等辺三角形を呈し、鎬がみられない点で共通している。21は茎片で、残存部巾約6cmを測り関部に近い部分の最大巾は1.8cmを測り、断面長方形を示す。目釘穴はみられない。このような鉄製利器の経塚からの出土は往々にしてみられ、大刀・刀子などに加えて小柄・鎬・鎌などの出土も知られている。この事実について石田茂作氏は鏡の副納と同様に魔除け・鬼魔の難からの忌避を意図したものとされているが（註6），本遺跡の場合も、城址に伴う遺物ではなく経塚副納品として取扱うべき遺物と考えられる。図に掲げた以外に、大刀残片が出土している。

小 結

経塚の構造・遺物についてその概略を述べたが、その築造時期は以下の諸点から平安時代後期に比定することができる。

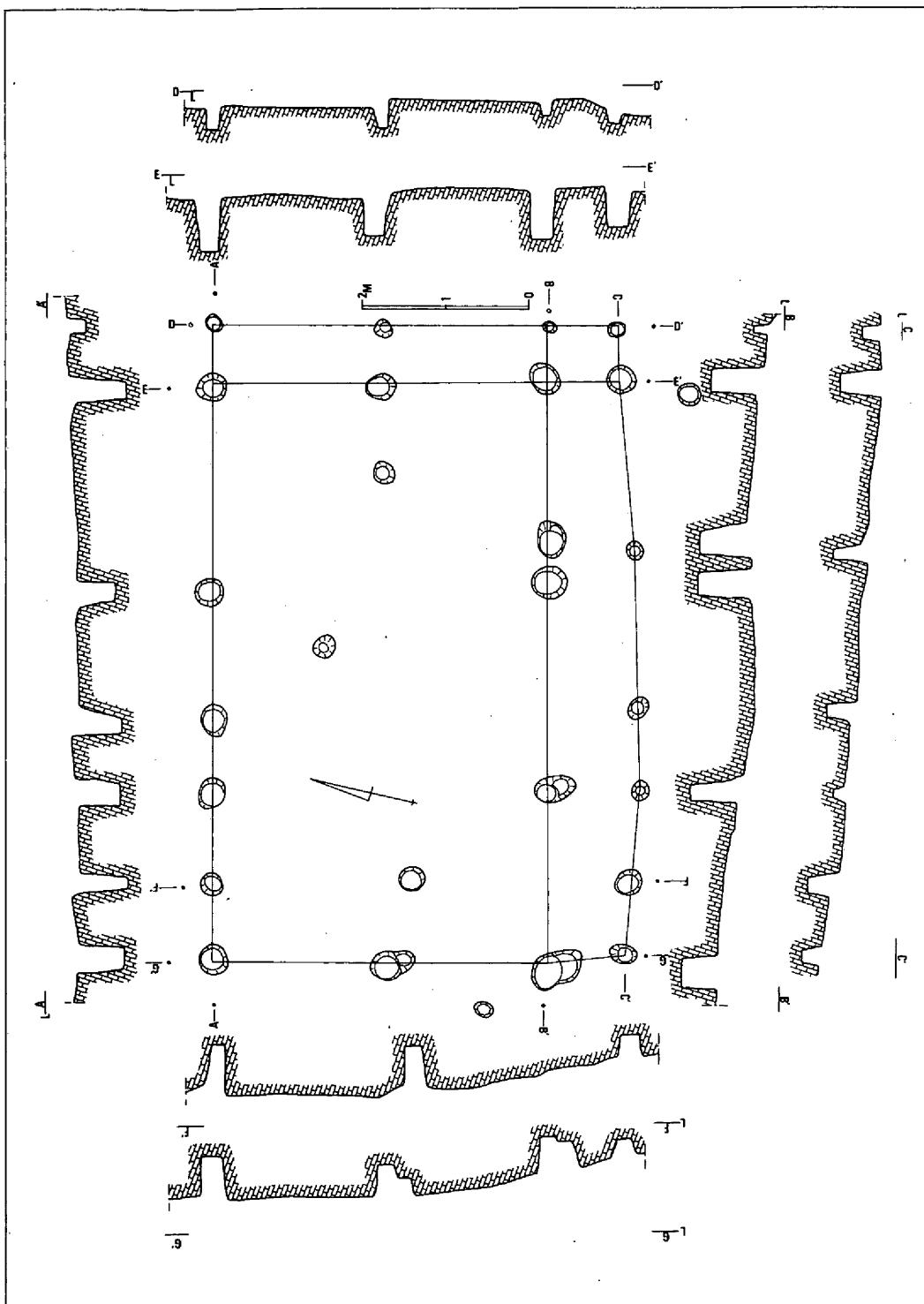
- ① 経筒が12世紀代の経塚に専ら埋納された輪積式のものであること。
- ② 鎌倉時代以降の経塚への副納が少ない湖州鏡が出土していること。
- ③ 北宋代、官窯景德鎮の製品と考えられ我が国に12世紀代に輸入されたものであること。
- ④ 和鏡の型式も、いわゆる藤原鏡と総称される秀逸な鏡であること。

以上である。この備北地域における経塚の発見は初めてであり、古代寺院をはじめとする仏教関係遺跡資料の少ないこの地域に貴重な資料を加えることとなった。更に、完全な状態で出土したものは少ないが、出土遺物も豊富で、質的に優れたものであることは注目に値する。ことに輪積式経筒の発見は極めて重要な事実で、経筒形式分布研究に貴重な1例を加えることとなった。

第2節 城 址 の 調 査

1区の造成平坦面の全域が岩屋城址と考えて差支えないものと考えられる。中国縦貫道建設のための買収範囲は1区東方のやや下った平坦面が含まれず、今回の調査でも全容を解明すべく発掘を行なったわけではない。この城址の全体平坦部は約550m²であるが、発掘対象となったのは約400m²である。この城址に関する具体的な文献等は全く残っていないため、構造を有していたのか明らかでない。更に城址の時期もその築城時期・廃絶期も明らかではなかった。

この平坦部は10～20cmの表土を除去すると第3紀層黃褐色風化岩盤が露出し、この岩盤を掘りぬいた掘立柱建物柱穴列・柱穴群が検出された。城址に伴う遺物は、ある程度時期を限定できる経塚遺物と明らかに時期を異にする錢貨・須恵質土器・土師質土器があり、1区が城として利用された時期に比定される。以下検出遺構・出土遺物について概略を述べる。



第12図 1区掘立柱建物平・断面図 ($\frac{1}{80}$)

(1) 掘立柱建物 (第5・12図・図版11)

1区のほぼ中央部に位置し、経塚方丘西辺に東梁間が接する。棟方向はN76°Eで梁間2間桁行3間、東面・南面に庇を有する。西側梁間は490cmを測り、柱穴間北から210cm・190~210cm・約90cm(庇)を測りほぼ7尺を基準としている。東側梁間は480~490cmを測り、柱穴間北より200cm, 200cm, 90cmを測り7尺弱である。北側桁行は780cmを測り、西から柱穴間200~210cm, 240~250cm, 250cm, 70~80cmを測り7尺・8尺の基準がある。南側桁行は780cmを測り西より柱穴間210~220cm, 250cm, 250cm, 60~70cmを測り、北側桁行と同様である。庇については建築の際の足場用の柱穴である可能性があるがその配置から考えれば庇と推定するのが妥当と考えられる。柱穴は径30~40cmを測り、庇部分の柱穴は一まわり小さく、10~25cmを測る。掘り方はほとんど円形を呈し、中には楕円形を呈するものがみられる。いずれも深さ40~60cmを測るが、庇部分の柱穴は10~50cm前後を測り不揃いである。柱穴掘り方の規模から推定すると、柱はさほど大きなものは用いられず、建物そのものの規模も小さい。柱穴のまとまりによって、建物が構成できる唯一の建築遺構で、当然城址に伴う主要な付属構築物と考えられる。この建物を構成する柱穴掘り方内からは全く遺物は出土しなかった。

(2) 柱穴群、柱穴列 (第5・13~16図・図版12~14)

(a) A-A' 柱穴列 (図版13)

経塚方丘の南側約50cmの位置に、掘立柱建物の棟方向と同一方向にほぼ直線的に並ぶ。柱穴の規模は小さく、掘り方の径は30~40cm前後、深さ35~60cmを測る。西から3番目の柱穴からは前節で述べた景祐元宝が出土しており、経塚の破壊・経塚遺物の攪乱以降あるいはその直接の契機に掘り込まれた柱穴列と考えられる。また、西から4番目の柱穴掘り方内からは土師器片が出土しているが(第11~4図)、出土レベルからみて柱穴廃絶期を示すと考えられ、その形質から経塚遺物とは考えられないものである。この柱穴列は当初、経塚方丘に伴うものと推定していたが以上のように城址の時期に比定することが妥当と思われる。しかし、当時経塚あるいはその位置した方丘に対する配慮・意識があったと考えられ、全面的に破壊は試みられなかったものの、何らかの利用が行われたことが推定できる。

(b) B-B' 柱穴列 (図版12-2)

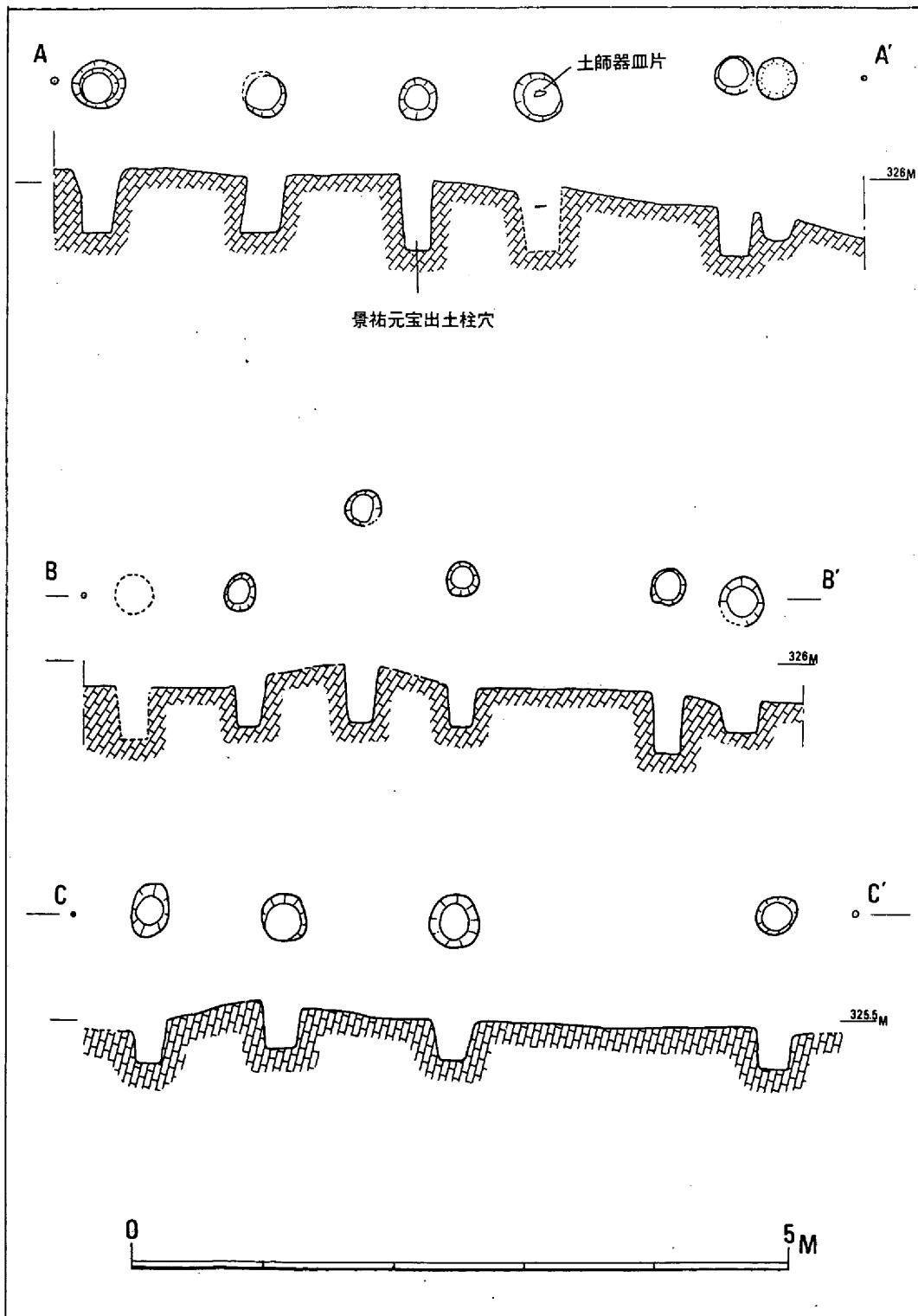
経塚方丘の東辺約1mに位置するほぼ南北方向を示す柱穴列である。柱穴の規模は径25~30cm前後を測り、深さは30~50cmを測る。北から4番目の柱穴は経塚方丘の下端に位置し、須恵質土器小片が出土しているが、経塚に伴う遺物ではないと考えられる。これは、第11図-2・3と形質を共通にする小片である。

(c) C-C' 柱穴列 (図版13-2)

経塚方丘の南約4.5mの平坦部肩よりわずかに下った地点で検出した柱穴列である。4個の柱穴が掘立柱建物・A-A'柱穴列と方向を同じくし、直線的に並ぶ。柱穴の規模は径30~40cm前後を測る。柱穴掘り方内からの遺物の出土はみられないが、西端柱穴付近では土師質鍋形土器片(第11図-5)が出土している。

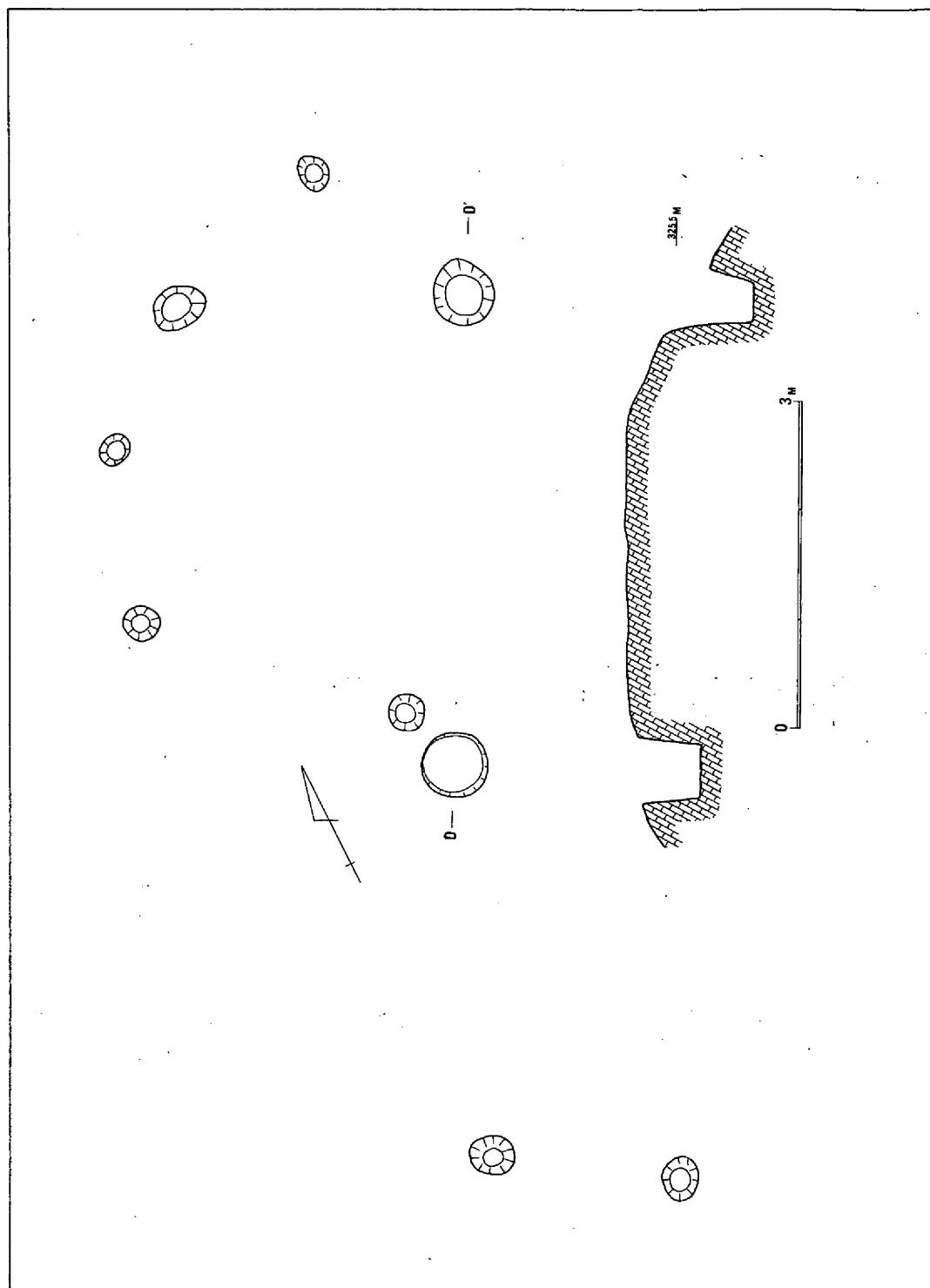
(d) B-B' 東方柱穴群 (図版12-2)

岩屋城址・岩屋経塚（49）

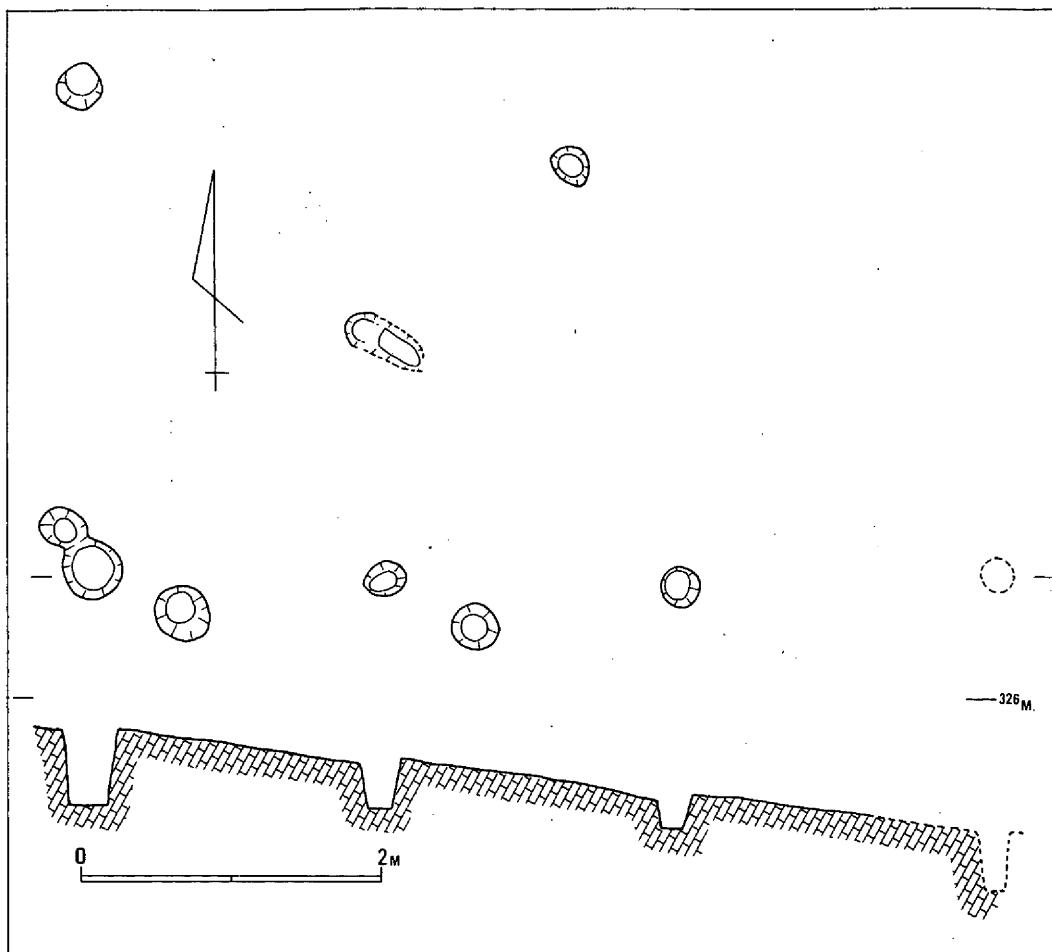


第13図 1区経塚周辺柱穴列平・断面図 ($\frac{1}{50}$)

岩屋城址・岩屋経塚（49）



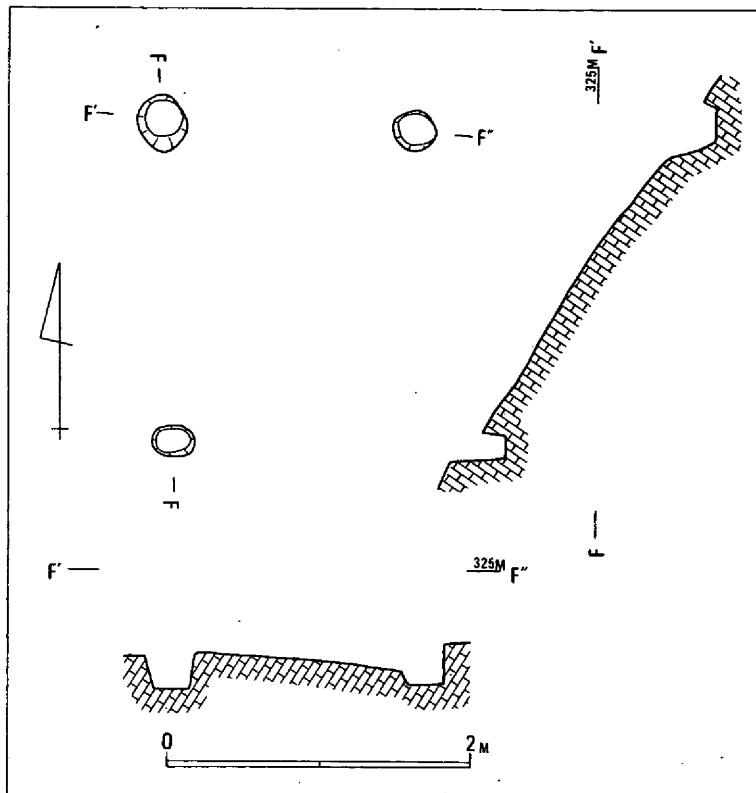
第14図 1区西端部柱穴群平・断面図 (1/60)

第15図 1区東端部柱穴群平・断面図 ($\frac{1}{50}$)

経塚方丘の東方約3mから7mにかけての緩かな斜面に散在する柱穴群である。柱穴の規模は径20~40cm前後を測り、深さ20~50cmを測る。E-E'柱穴列は、ボーリング棒によって買収用地外で発見した1個を加え直線方向を示す4個の柱穴より成る。柱穴列方向はほぼ東西を示し、西から190cm, 190cm, 約210cmの柱間距離を測る。

(e) 1区西端部柱穴群(図版14)

1区平坦部のもっとも西方に位置し、掘立柱建物より約6m西に散在する柱穴群である。D-D'柱穴列は2個の比較的規模の大きい柱穴からなる。いずれも径55~60cm深さ60~70cmを測り、やや狭くなった西端平坦部をはさむ位置に存在する。これより北西方4mで切通部分になるため通用門のような構造物が存在した可能性がある。また、この西側の4本の小柱穴も柵状の構築物を構成すると考えられD-D'柱穴列と共にあたかも1区の西方の守りを固めた観がある。D-D'柱穴列の南3mには2本の柱穴が存在する。柱穴の規模はいずれも径30~40cm、深さ約50cmを測り、柱間170cmを測る。

第16図 1区北斜面柱穴群平・断面図 ($\frac{1}{50}$)

検出位置は平坦部より約2m下った地点で平坦部造成の際の土留め用の柵か、あるいは攻撃を受ける際、寄せ手を迎撃するための突出構築物が存在した可能性がある。

(f) 北斜面柱穴群（第16図）

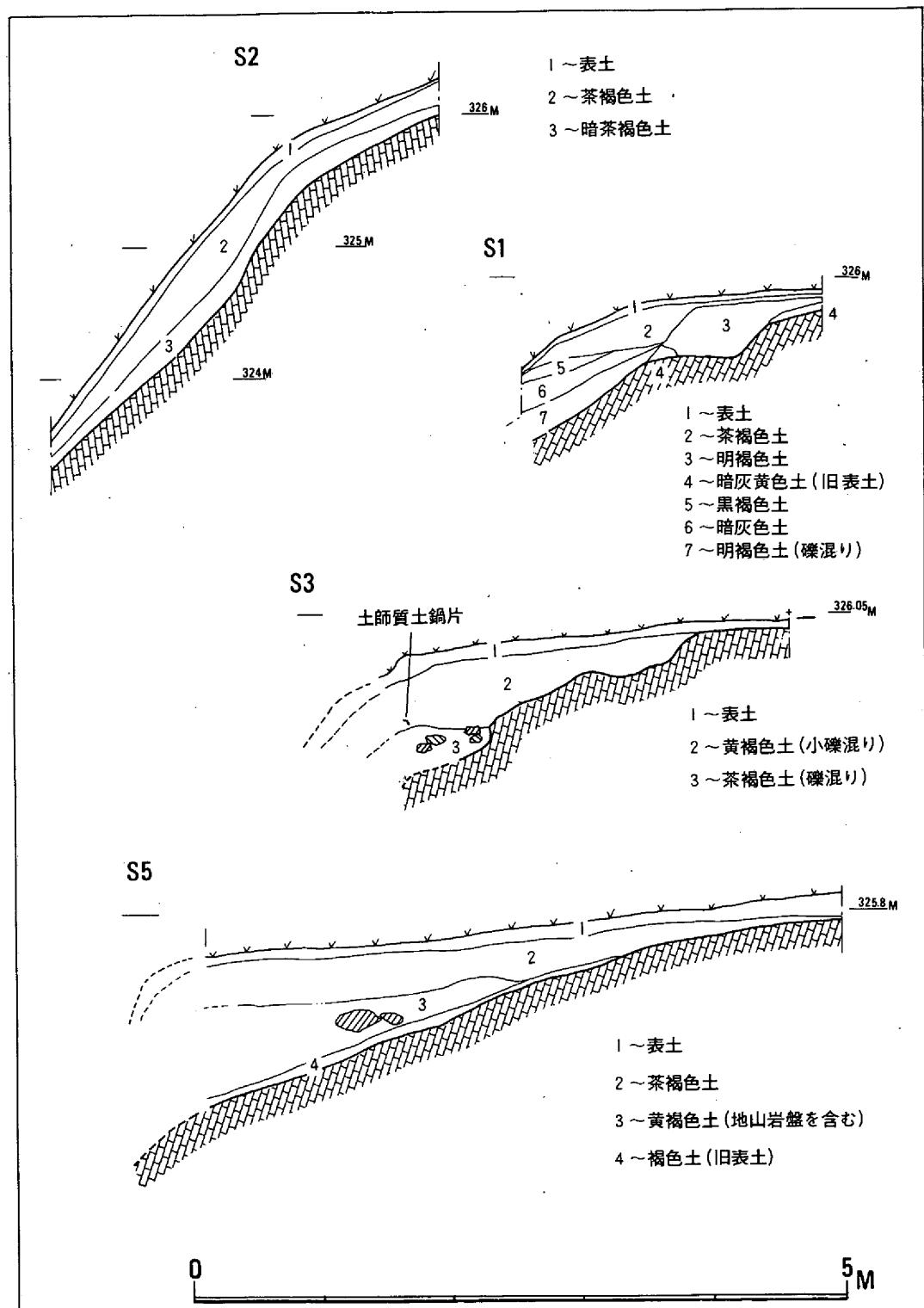
掘立柱建物の北方約2～4m（平面距離）に位置し、平坦部よりやや下った地点に1個、更に約2m下った地点に2本の柱穴が存在する。いずれも約30～40cm、深さ約30cm前後を測る小柱穴で、先述の西端部柱穴の検出レベルに近いことから、やはり平坦部より突出した防禦構築物を構成する柱穴群である可能性が強い。

(3) 平坦部の整地について（第17～18図・図版15～17）

S 1～S 6 の各地点の土層断面の観察によって、数次にわたって整地が行われたことがわかる。その整地は、平坦部の地山を削平しその土をもって充てられたと考えられ、各整地層中には風化岩盤剥落土が含まれている。この整地は、平坦部の面積を拡張することに目的があり、更に平坦部縁辺をより急峻に変貌せしめることにも役割を果しているようである。もちろん1区全体の丘頂を平坦にする目的が優先したことはいうまでもない。

S 1は1区北側東方に設定した土層観察壁である。巾約70cmの犬走り状地山平坦面があるが、S 2

岩屋城址・岩屋経塚 (49)



第17図 S1~3・S5土層断面図 ($\frac{1}{50}$)

の位置まで達していない点から部分的な人為的掘削を受けたものと考えられる。第3層明褐色土は地山風化岩盤の剥落土で整地層を形成している。第7層も同様である。

S2は経塚方丘北側斜面で、S1に比べるとより急峻で、大規模な整地は行われていないようである。単純な3層の土層からなり、ほぼ地山のプロポーションに平行する点から自然堆積と考えられる。

S3は経塚方丘南側の土層断面で、S1と同様な犬走り状平坦凹部がみられる。更に下方には小兒頭大・拳大の礫が多く出土する凹部があるが、買収用地外に続くため未調査に終った。この礫中よりも、土師質鍋形土器片が出土している。ここでは第3層茶褐色土層が第1次整地面、第2層黄褐色土層が第2次（最終）整地面と考えられるが、それも単純な土質の差であって、大きく整地時期の隔たりを示すものではないだろう。

S4は1区北側西方の土層断面である。第5層は整地以前の旧表土と考えられ、S2の第3層もこれにあたる。第2～4層淡茶色～淡茶褐色土層が整地層と考えられ、小礫・地山剥落風化岩盤を含んでいる。

S5は1区南西方土層断面である。第4層はS2・S4の第3層・第5層と同様、褐色を呈する旧表土である。第2層茶褐色土層・第3層黄褐色土層が整地層と考えられ、小礫あるいは他の整地層と同様、地山剥離風化岩盤片を含んでいる。各々ほぼ水平に整地されている点が注目される。

S6は1区西端から2区にかけて設定した土層断面壁である。自然な丘陵の鞍部を呈しているが、1区の側を第2～4層にかけて整地を行って急崖をなすよう人為的土盛りが行われている。整地層の下層をなす第4層は比較的軟質の明褐色土が用いられているが、第2・3層には相当量の土量を費したことが推定でき、柱穴群の存在を合わせ、両方の守りを重視したことがわかる。

(4) 城址に伴う遺物（第7図—13・14、第11図—2～5、図版28）

(a) 銭貨（第7図—13・14）

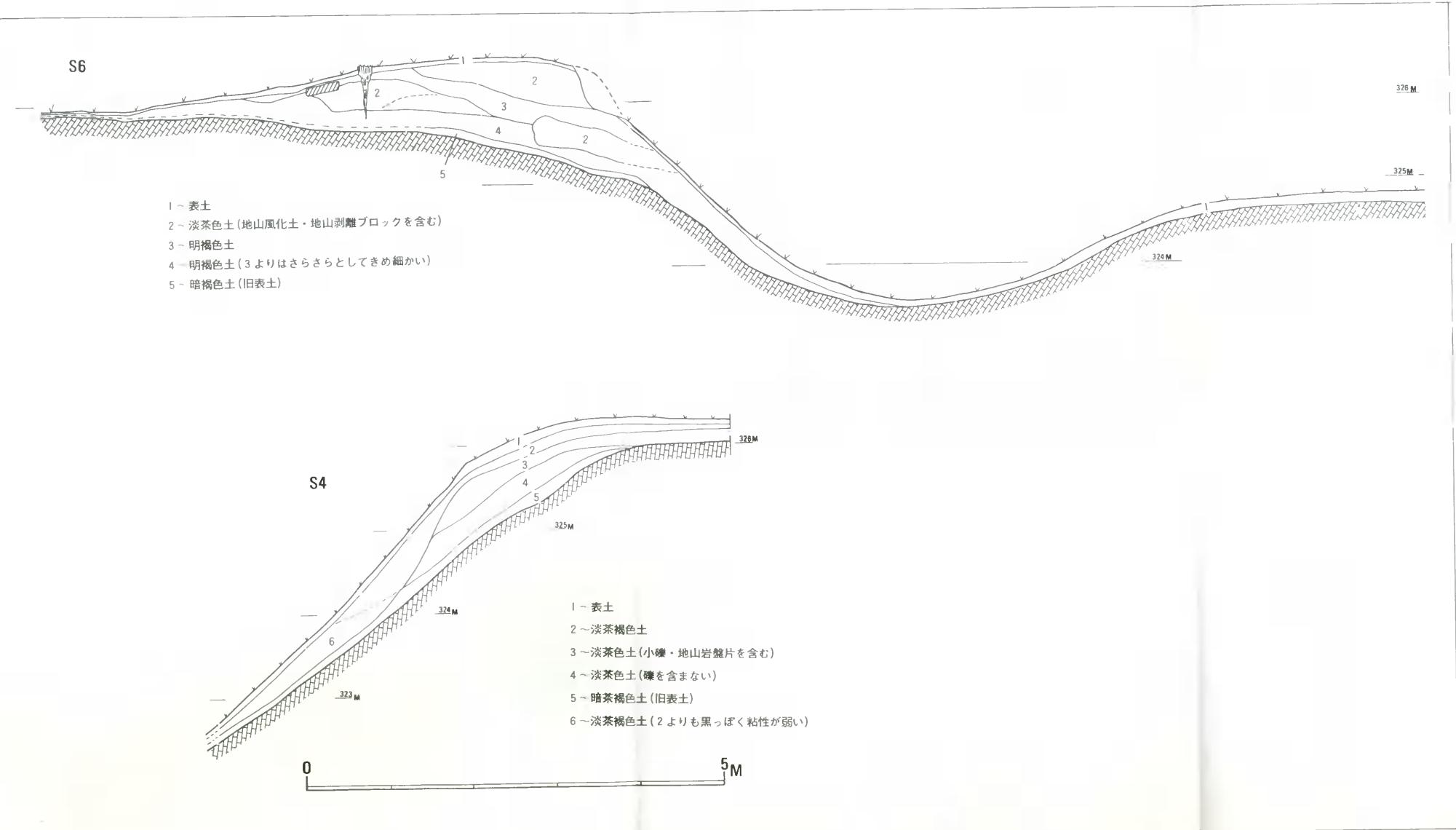
いずれも中国明代に鋳造された永楽通宝で、初鋳年は1408年である。出土地点はいずれも経塚方丘付近表土中であるが、我が国に15～16世紀に輸入・使用された事実から経塚遺物とは区別すべきものと考えられる。

(b) 須恵質土器片（第11図—2・3）

経塚方丘付近のB—B'柱穴列中の柱穴中および、経塚方丘北側で数片出土している。図に掲げた2点は後者である。いずれも外面には格子目のタタキが施され、内面はヨコナデ調整で仕上げられている。石英・長石の微砂を含む胎土は比較的精良であるが、焼成はやや悪く、外面は灰黒色・内面は白っぽい褐色を呈する。外観は瓦質を呈しているといえよう。

(c) 土師質鍋形土器（第11図—5・図版28）

経塚方丘の南方約6mの、平坦面肩部よりやや下降した地点で、20数点の破片となって出土した。整地層と考えられる土層より下層に位置しているが、城としての機能を備えるための整地や掘立柱建物・柱穴列が構成する構造物の建築が数次にわたって行われたことを示しているかもしれない。器体



第18図 1区西端部土層断面図(S.6)・1区北辺土層断面図(S.4) ($\frac{1}{50}$)

岩屋城址・岩屋経塚（49）

は復原口径32.5cm・残存高11.9cmを測り、底部よりほとんど垂直にのびる体部を経て外方する口縁部に至る。口縁端部はやや肥厚し、上面は扁平なくせをもっている。口縁部はヨコナデ調整が施され、指頭圧痕が口縁部と体部の接合部をめぐっている。体部上半は斜方向の荒い刷毛ナデ調整が施され底部より横方向の直線的な細かい刷毛ナデ調整に変化する。体部外面の素地は明るい膚色を呈するが、煤の付着が著しく煮沸用の器種であったことを示している。内面は、ヨコナデ調整が施された口縁部を除いて斜方向あるいは横方向の荒い刷毛ナデ調整が施されている。内面は、白っぽい黄褐色を呈する。器体は薄目で、底部は体部よりやや厚く成形され、粗砂を含まぬ精良土を用いて焼成されている。器体の磨滅は少なく刷毛目の残存も明瞭である。

（d）土師器皿片（第11図—4・第13図・図版28）

経塚方丘南のA—A'柱穴列の西から4番目の柱穴から出土している底部片である。底径は6.5cmを測り、体部への移行は丸味をもち立ちあがりはゆるやかに開く。底部はヘラオコシであるが、成形後条線状の圧痕がみられる。おそらく器体が乾燥しないうちに、蔓状纖維の上に置かれその圧痕がついたものと考えられる。胎土は石英・長石の微砂を含む精良土で、土師器としては比較的焼成はよい。外面素地は白っぽい膚色を呈するが大半は二次的に淡褐色に変色している。内面は回転を利用したナデ調整で仕上げており、凹凸が甚しい。色調は外面同様淡褐色を呈する。

以上、概略を述べた遺物の年代についてはかなりの巾があると思われるが、永楽通宝については南北朝時代以降に比定できる。項を設けて説明をしなかったが、図版28の明代青磁片も出土しており、同一時期とみなされる。これらは城址として1区が使用された時期の下限を示しているといえよう。須恵質土器片・土師質土器・土師器については鎌倉時代（12世紀末～14世紀前半）の時期的範疇に比定できることと考えられ、城址の上限・利用期を示しているといえよう。したがって、城としてこの平坦部が占地された時期は必ずしも単一時期でなく、造成等の所見を考慮すれば、数次にわたる改修・整地が行われたことが推定される。

（註）

- （註1）小早川正信氏の御教示による。
- （註2）四王寺跡経塚群出土品中、第2・8経塚出土経筒（福岡県粕屋郡宇美町四王寺山所在）福岡県筑紫郡太宰府町大原野出土経筒などが著名である。
- （註3）石田茂作「経塚」（考古学講座第20巻……昭和4年11月10日刊）
- （註4）難波田徹氏の御教示によれば、最近鳥取・山口両県で各1例発見されたという。
- （註5）（註3）および、大本琢寿「岡山県地方経塚一覧」（吉備考古81・82合併号……昭和26年 吉備考古学会刊）高井谷経塚出土湖州鏡は猪目形鏡で、「湖州石念二叔煉銅無比照子」の銘文をもち、長径9.7cmを測る。伴出品としては銅製経筒・青白磁合子・銀製品・和鏡・刀子などが知られている。
- （註6）（註3）の文献による。

＜参考文献＞

- ① 経塚遺宝展図録 奈良国立博物館 昭和48年4月29日刊。
- ② 中野政樹編 「和鏡」 至文堂 昭和44年11月15日刊。
- ③ 広瀬都異 「和鏡」（考古学講座第2巻所収） 雄山閣 昭和3年5月10日刊。

岩屋城址・岩屋経塚（49）

- ④ 館蔵古錢資料（大和考古資料目録第2集） 奈良県立考古博物館 昭和48年3月25日刊。
- ⑤ 亀井明徳 「平安朝期輸入陶磁器の名称と実体」（考古学雑誌第61巻・第1号所収） 昭和50年7月、日本考古学会刊。
- ⑥ 山崎純男ほか「京ノ限遺跡」（福岡市西区田島所在）段谷地所開発株式会社 昭和51年8月20日刊。

第3章 2・3区の調査

第1節 2区の調査（第3・19～21図・図版18～20）

2区の調査は、3区と同様1区に先がけて実施し、まずトレンチ調査を行い、つづいてトレンチ間を拡張、平面調査に移行し、城址の範囲を把握するために行ったものである。2区と設定した地区は狭小な丘陵尾根筋で表土下10cm～20cm前後で1区同様、第3紀層明褐色風化岩盤に達する。この地山面での柱穴等、城址に伴うとみられる遺構は全く検出できなかった。更に、1区のように地山を削平・造成した痕跡は認められず、人為的地形の変形を受けていない。2区の西端部はやや広い高所をはなしているが、この地点で土壙4基を検出したほか、遺構は全くみられず、遺物の出土も皆無である。以下、土壙について概略を述べる。

土 壙（第19～21図）

長方形の土壙4基を検出し、土壙墓と推定している。検出時のプランは地山明褐色土が土壙中に流入しており、色調による判別はできなかったが、試掘によるわずかな土の硬さから全容を明らかにすることができた。1～4号土壙のいずれも、副葬遺物は認められず、上面供献遺物等も周辺精査にもかかわらず出土しなかった。

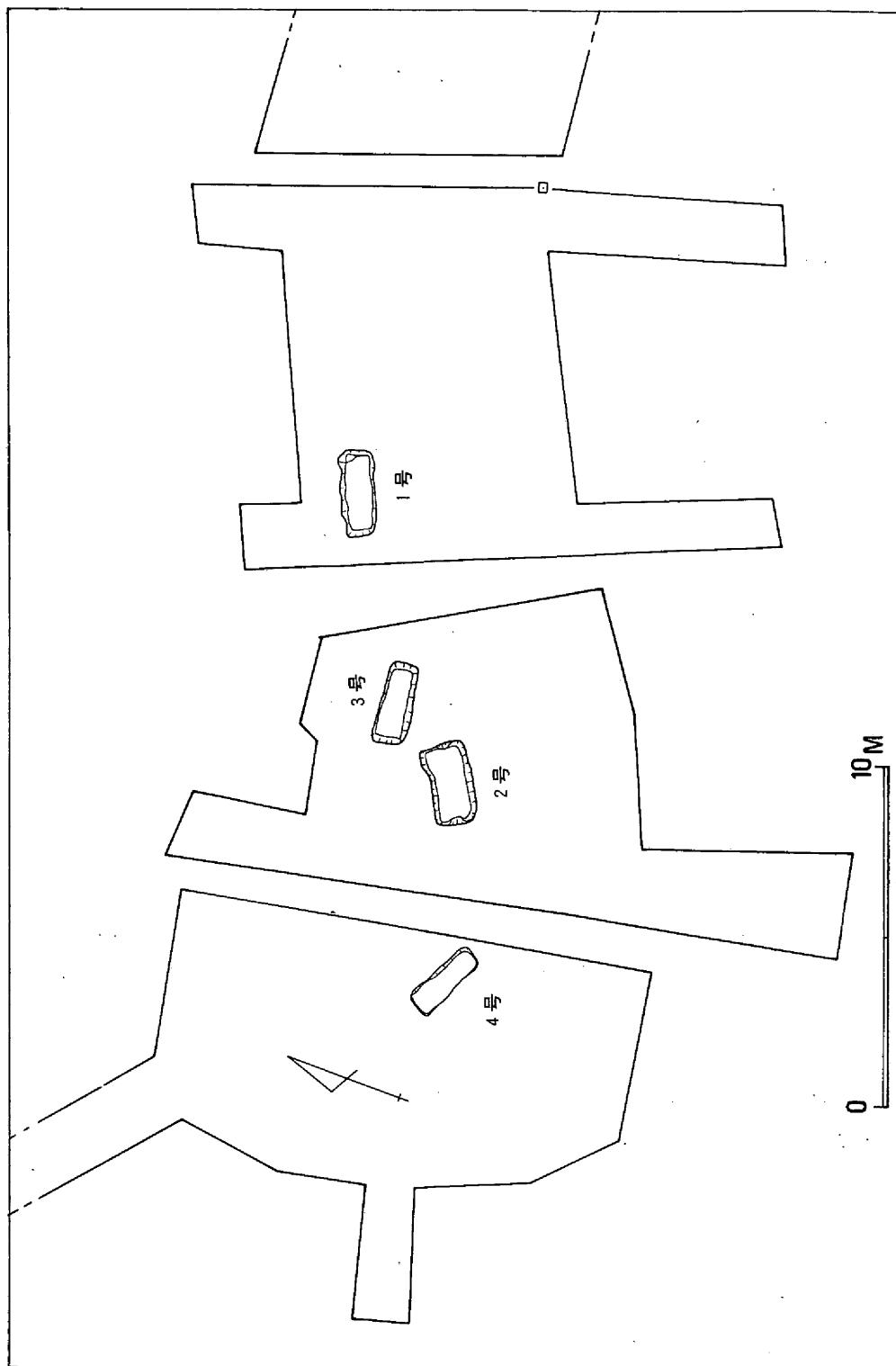
1号土壙は土壙群中もっとも東に位置し、掘り方約 $2.5 \times 1\text{m}$ 、深さ0.3～0.5mを測る。底面は東小口部分がやや深いが、ほぼ平坦で壁面はゆるやかな立ちあがりをもちながら掘り方に至る。2号土壙は、3号土壙と近接する約 $2.4 \times 1.3 \sim 1.2\text{m}$ 、深さ約0.4～0.5mを測り、ややいびつな長方形を呈している。底面はやや凹凸があり、壁面も直線的な立ちあがりを示していない。3号土壙は2号土壙の北東方に近接し、約 $2.4 \times 0.8 \sim 1\text{m}$ 、深さ0.4～0.6mを測る。西方小口部はやや広めであるが、掘り方・壁面の残存は良好である。4号土壙は土壙群中もっとも西方に位置し、約 $2.3 \times 0.8\text{m}$ 、深さ約0.3～0.1mを測る。プランは長方形を呈するが、残存度が悪く、やや不整な形状を呈し、壁面の残存状態も悪い。

以上4基の土壙は、全く伴出遺物が出土しなかったが、遺跡北西方山麓緩斜面には弥生時代中期後半の土器散布地が存在し（図版22）、その時期の土壙墓と考えるのが妥当であろう。1区が城址として利用された時期とは無関係な遺構と考えられる。

第2節 3区の調査（第3図・図版21）

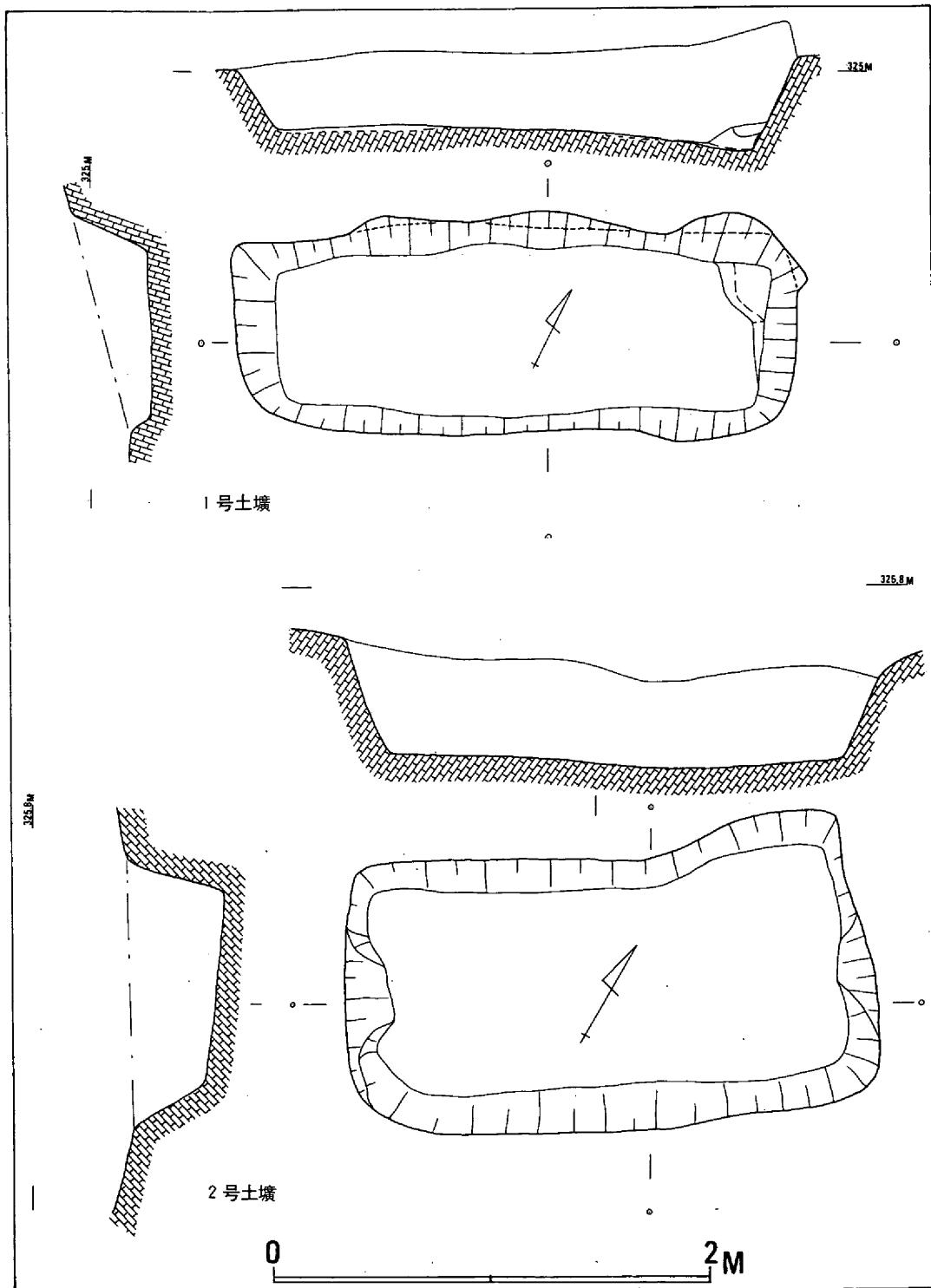
3区は2区西端高所より南方に派生する狭小な支丘陵である。当初2区と同様、城址に關わる遺構の検出を目的として調査を開始したがその知見は得られなかった。発掘はまず丘陵に対して直行する

岩屋城址・岩屋経塚（49）



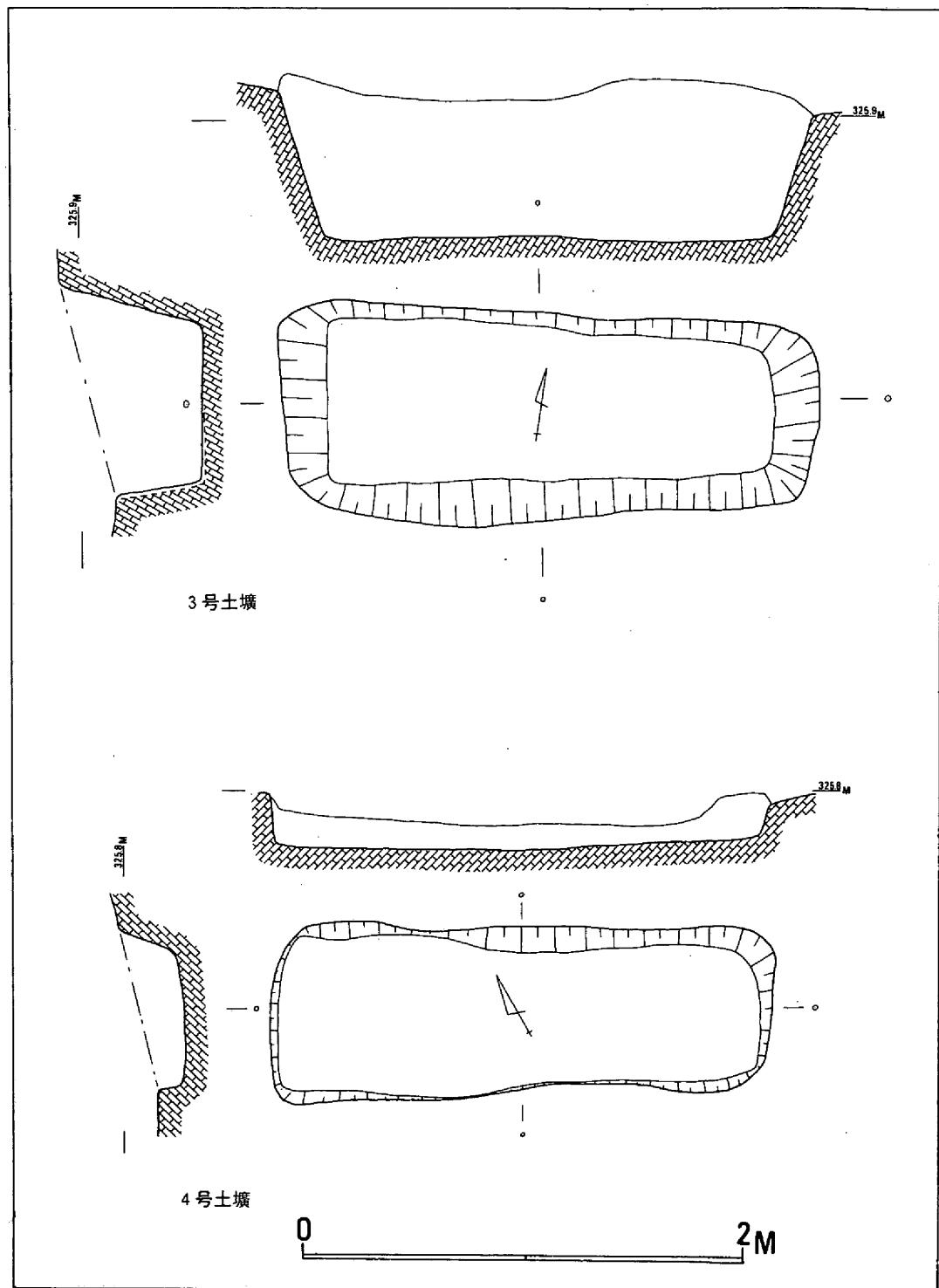
第19図 2区土壤配置図 ($\frac{1}{200}$)

岩屋城址・岩屋経塚（49）



第20図 2区西端部土壤実測図 ($\frac{1}{30}$)

岩屋城址・岩屋経塚(49)



第21図 2区西端部土壤実測図 ($\frac{1}{30}$)

2本のトレーナーを設定し、更に平面調査に移行したが、柱穴等の遺構検出、あるいは遺物の出土は全く認められなかった。

第3節 岩屋第2経塚（図版21）

3区南方の縦貫道買収用地外に位置する。人頭大の角礫が約3m四方に集中し、付近で須恵器片・土師器片・鉄器が出土している。銅製品の破片の出土はみられないが、位置的にも、第1経塚との関連においても経塚である可能性が強い。幸い、縦貫道建設によって破壊を免れたので「岩屋第2経塚」と命名し、今後の保全を期したいと考える。以下、出土遺物について説明を加える。

① 須恵器片（第23図—2～7・図版29—1）

約50点の破片を表面採集した。いずれも集石遺構付近に散乱していたものである。口縁部は、小片の観察によれば、頭部より短かく外方するもので壺形土器の口縁部片と考えられる。体部はやや鈍重な倒卵形を呈し、底部は平底である。図に掲げたものはいずれも体部片で、外面は斜方向の格子目タタキが施されたものである。内面は横方向の指頭圧痕が目立ち粘土積み上げ成形を示している。体部内面は、横方向のナデ調整で仕上げられ、底部は内外面共に任意のナデ調整が行われているが、全面にわたっていない。胎土は石英・長石の粗砂・微砂を多く含み精良とはいえないが、焼成は比較的堅緻で灰青色を呈している。この壺形土器は、経筒もしくは副納品の外容器に用いられたものではないかと推定され、平安時代末期～鎌倉時代初期に比定されよう。

② 土師器片（図版29—2）

須恵器壺形土器片と共に約20片の小片が表面採集された。須恵器片に比べると器壁の風化が甚しく、また小片となっており器種も明らかではないが、口縁部小片から観察すると、鉢形あるいは鍋形土器ではないかと推定される。胎土は石英・長石の微砂を含むも比較的精良で、焼成は普通、内外面共に明るい膚色を呈する。体部外面は細かい刷毛ナデ調整、内面は縦方向を基調として荒い刷毛ナデ調整を施している。須恵器とはほぼ同時期の製作・使用になるものであろう。

③ 鉄器（第22図・図版29—2）

2点の鑿状鉄器が出土している。大きさは異なるが形質は類似しており、下端は鋭利である。1は残存長8cm、最大巾1.2cm、中央部厚さ1cmを測り、頭部は扁平で下端部は鋭い。重量約30gを測る。2は1より一まわり大きく、残存長10.8cm、最大巾1.7cm、厚さ1.6cmを測り、頭部はやや扁平で薄手となり、下端は鋭利である。重量約70gを測る。いずれも錆化が甚しく、表面の剥落によって原形を著しく損ねている。これらはやはり経塚に伴う副納品と考えてよいだろう。

第4節 遺跡北西方五輪塔・散布地について（第2・23図—1、図版22・30）

(1) 五輪塔（第23図—1、図版22・30）

遺跡北西方約150mの山麓緩斜面に多数の礫と共に存在している。付近はかなり搅乱されており空

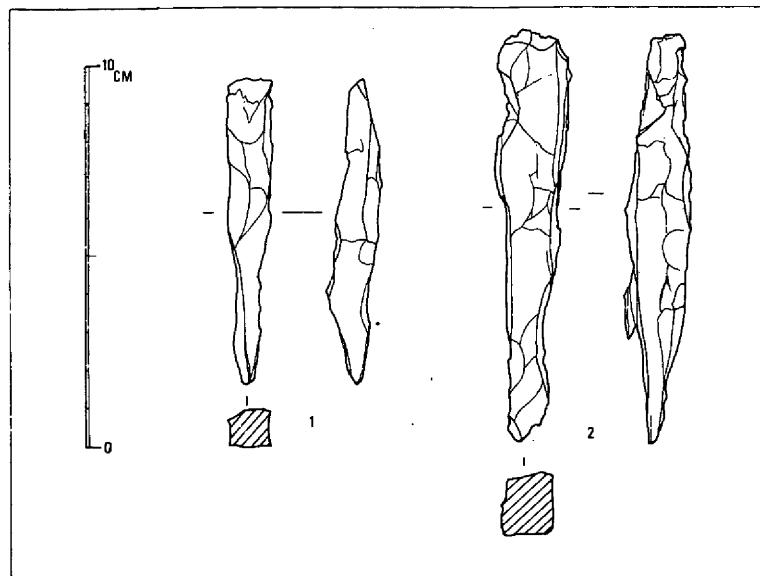
岩屋城址・岩屋経塚（49）

輪・風輪のみ残され、火輪以下は見当たらない。この五輪塔残欠より北方約4mの地点に植林をするための径約50cm前後、深さ約30cmほどの穴が掘られ、その際出土した備前焼小壺・須恵器片を植林事業に携わっていた方が、岩屋城を調査していた調査員の元に持参されたものである。第23図-1はいわゆるスズメ口小壺で体部より上半を欠失している現高4.1cm、底径5.3cmを測る備前焼である。胎土は粗砂をわずかに含み、焼成は極めて良好で、内外面共に備前焼特有の赤褐色を呈している。器体の成形は右まわりで、内外面共にヨコナデ調整で仕上げられている。底部はやや上げ底で、糸切り底である。須恵器は破片のため器形は明らかではないが、椀状の容器と考えられる。外面は縦方向の刷毛調整の後、荒いナデ仕上げが施され、内面は横方向の刷毛調整が行われている。いずれも鎌倉時代に比定できよう。

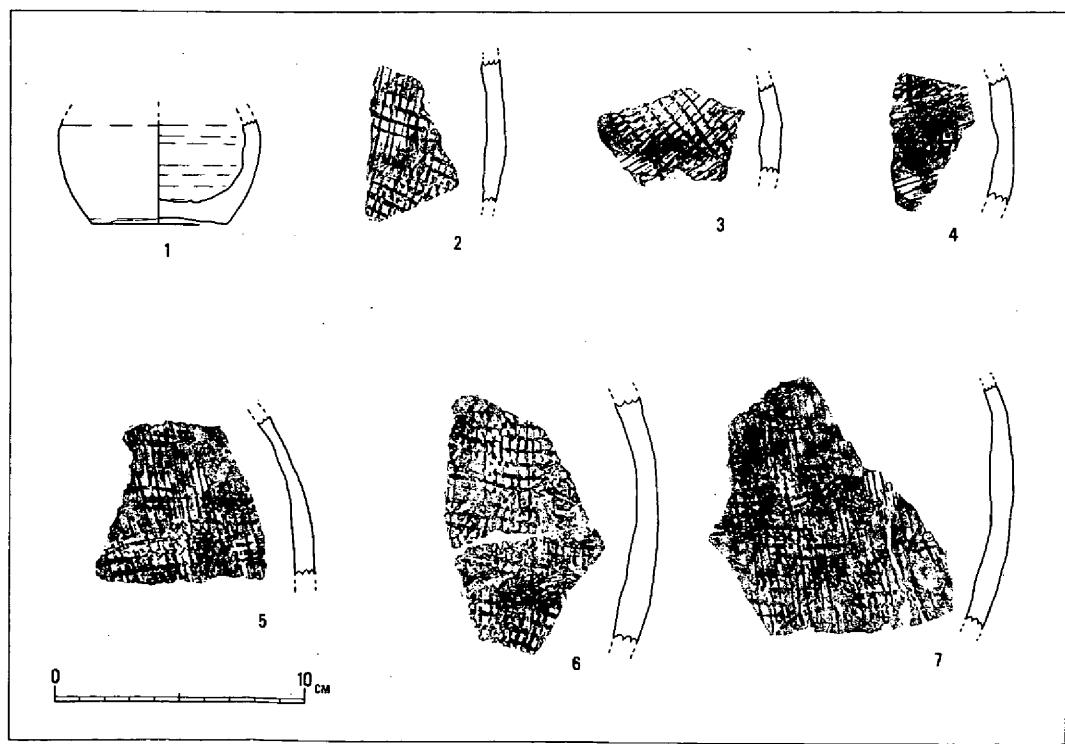
（2）散布地（図版30）

五輪塔の南東方山麓が平坦部となる杉林の中に位置する。図版30下段に掲げた中期後半に比定される弥生式土器片のほかに、鉄滓・炉壁片・須恵器片などが出土している。須恵器片は奈良～平安時代のもので、鉄滓・炉壁片に伴うと考えられ、この地点がかつて鉄生産の場であったことを示している。弥生式土器片は、丹塗りのものを含み居住地であったと同時に、埋葬遺構が存在する可能性も十分考えられる。

岩屋城址・岩屋経塚（49）



第22図 岩屋第2経塚出土鉄器実測図 ($\frac{1}{2}$)



第23図 五輪塔付近出土備前焼小壺・岩屋第2経塚出土須恵器拓影・実測図 ($\frac{1}{3}$)

結語

経塚および経塚遺物の発見は、偶然の機会によるものが圧倒的に多く、発見された際にはすでに外部構造や埋納物が原状を保たずして陽の目をみるとほとんどである。そのため、これらの研究は即物的仏教美術史の中に位置づけられて進められることが多い。本遺跡の場合も例にもれず、城址調査を目的とした発掘過程で、当初全く予期しなかった経塚・経塚遺物を発見したのであった。不幸にして、中世山城としてこの経塚が存在する丘頂が占地された際、一部破壊・損傷をうけたにもかかわらず、豊富な経塚埋納品の一端を知り得たことは極めて幸運であったと言わざるを得ない。とりわけ、輸積式銅製経筒は現時点での分布の東限を示し、本州では初見である。従来、北九州の一部地域にのみその発見事例が求められていたのであるが、新たな知見を加えることとなった。また、湖州鏡および3面分の和鏡は、その質・量の点において極めて秀れたものである。ことに和鏡は、いわゆる藤原鏡と称されるもので、秀逸な技法による写実的かつ優美な鏡背文様を示している。岡山県は中国地方でも、比較的多くの経塚が発見されており、学術調査例もあるが(註1)，鏡の出土数においてはもっとも多い。更に、北宋官窯よりもたらされた青白磁についても、その質・量・種類においても同様、県下の経塚出土遺物を凌ぐものである。かつて、この備中北部地域では経塚の発見は皆無で(註2)，しかも仏教信仰に直接かかわる古代寺院の所在も知られていないが、本遺跡の発見によって、当時この地域に仏教経典の書写・埋納を行う風を受容し、実行することのできる有力者が存在したこととうかがわせる。銘文等の遺存によって施主・願主および造営時期については明確に知ることができないが、遺物の内容から、平安時代後期(12世紀)の造営になる経塚であることが推察できよう。

城址の調査においては、中世山城の構造の一部を明らかにしたといえよう。戦国時代末期に出現した城郭以前の城については、その構造・規模・付属施設の諸点について不明な点が多いのが実状である。ことに中世山城においては、平時の居住地・館が近接している場合が多く、周辺の立体的かつ広範囲な調査が必要であろう。今回の調査では、城址平坦部の発掘のみ行ったが、今後周辺部には十分な注意が払われねばならないと考えられる。中国縦貫自動車道建設に伴う、備中北部地域の調査では、本遺跡をはじめとして、土井城(註3)・藤木城(註4)・岸本城(註5)の3か所の城址が、調査後破壊された。それぞれ、山城の構造や根古屋・門・土塁など付属構造物などの知見が得られており、本遺跡と共に備中北部地域の中世史研究に新たな視座を与えるものであろう。しかし、いま各々の城址が存在した位置を想像して眺めることができても、もはや城址からの眺望は不可能なことがある。あらゆる種類の遺跡も同様、遺跡を眺める位置、遺跡から眺めることのできる視野、いわば遺跡をとりまく景観・自然環境の保存の重要性を、岩屋城址の消滅とともに痛感するものである。

岩屋城址・岩屋経塚（49）

（註）

- （註1） 上房郡有漢町所在のマゴロ山経塚、倉敷市浅原所在の安養寺経塚などが著明である。後者は計画的な学術調査が行われ、多量の瓦経や、土製塔婆形題箋・土製宝塔などが出土している。（鎌木義昌編「安養寺瓦経の研究」昭和38年刊。鎌木義昌・間壁忠彦・間壁葭子「安養寺瓦経本『法華三昧行法』の復原」日本歴史考古学論叢所収 昭和41年11月25日 吉川弘文館刊。以上の書物に詳しい。）
- （註2） やはり中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査対象遺跡で、経塚副納品とみられる懸仏転用の和鏡が出土している。鎌倉時代の和鏡と推定され、鏡面に墨書梵字が書かれている。（横田東古墳群一阿哲郡哲西町矢田所在一岡山県埋蔵文化財発掘調査報告＜23＞に所収、昭和52年度中に刊行予定。）
- （註3） 阿哲郡哲西町土井所在。昭和50年10月～51年2月調査。遺構として、掘立柱建物1棟・柵列3か所・門状遺構・切り通しなどが検出され、須恵質土器・土師質土器などが出土している。（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告＜21＞に所収、昭和52年度中に刊行予定。）
- （註4） 阿哲郡哲西町畠木所在。昭和51年7月～10月調査。遺構として、城址下方の谷部を造成して建築された掘立柱建物2棟（根古屋？）・土壙が検出され、青磁片・備前焼・須恵質土器・土師質土器が出土している。（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告＜23＞に所収、昭和52年度中に刊行予定。）
- （註5） 阿哲郡哲西町岸本所在。昭和51年8月～10月調査。遺構として、掘立柱建物2棟・登坂路などが検出され、永楽通宝・鉄製武器片・天目茶碗片・燈明皿・備前焼・龜山焼・須恵質土器・土師質土器などが出土している。（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告＜22＞に所収、昭和52年度中に刊行予定。）

＜参考文献＞

本報告書作成の全般にわたって、以下の書物を参考にした。

- ①浅野 清・小林行雄編「世界考古学大系第4巻（歴史時代）」昭和36年7月31日 平凡社刊。
- ②三上次男・楢崎彰一編「日本の考古学 第6・7巻 歴史時代（上）・（下）」昭和42年7月5日、8月31日平凡社刊。
- ③歴史学研究会編「日本史年表」昭和51年9月25日 岩波書店刊。
- ④三宅敏之「経塚研究の現況と課題」日本歴史第290号所収。昭和47年7月刊。

図版1



1. 遺跡遠景（北から）



2. 遺跡遠景（南から）

図版2



1. 遺跡からの景観（北方を望む）



2. 遺跡からの景観（南西方を望む）

図版3



1. 遺跡遠景（南西から）



2. 遺跡遠景（西から）

図版4



1. 遺跡俯瞰（北西から）



2. 遺跡仰視（北から）



1. 1区遠景（西から）



2. 1区北斜面近景（北西から）

図版6



1. 1区経塚（西から）



2. 経塚近景（南から）



1. 経塚西辺部石碑の位置（西から）



2. 石碑碑文

図版8



1. 経塚周辺遺構検出作業（西から）



2. 経塚表土除去作業（南東から）



1. 経塚発掘前清掃状況（南東から）



2. 経塚表土除去後（南東から）

図版10



1. 経塚方丘南西肩部湖州鏡出土状態（西から）



2. 湖州鏡出土状態（南西から）



1. 挖立柱建物（南西から）



2. 挖立柱建物（東から）

図版12



1. 経塚南柱穴列（南東から）



2. 経塚東柱穴群（西から）



1. 経塚南柱穴列（南から）



2. 経塚南柱穴列（南から）

図版 14



1. 1区発掘終了後全景（西から）



2. 1区西端部柱穴群(北東から)



1. 経塚北整地層土層断面 S 1 (西から)



2. 経塚北西整地層土層断面 S 4 (西から)

図版16



1. 経塚南整地層土層断面（S3）（東から）



2. 同上土質鍋形土器片出土状態（北東から）



1. 経塚南西整地層土層断面 (S5) (西から)



2. 1区西端区整地層土層断面 (S6) (南東から)

図版18



1. 1区・2区発掘区全景（西から）



2. 2区西半部発掘区（東から）



1. 2区1号土壤（北東から）



2. 2区2号土壤（南西から）

図版20



1. 2区3号土壤 (西から)



2. 2区4号土壤 (北西から)



1. 3区全景（西から）



2. 3区近景（北から）

図版22



1. 遺跡北西方散布地（杉林）・五輪塔（矢印）（東から）



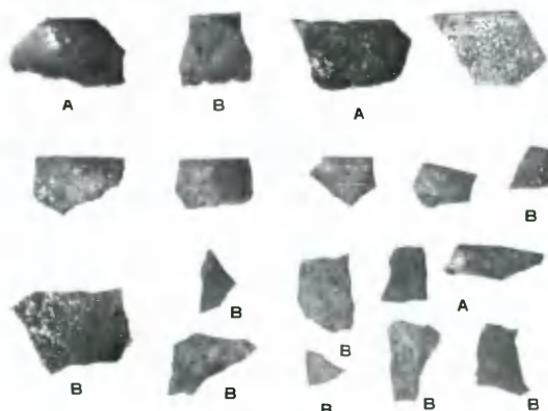
2. 五輪塔付近（北から）



経筒台座



筒身



経筒片 (A-蓋片・B-台座片・他は筒身片)

図版24



鏡背



鏡面

湖州鏡



萩尾花双鳥鏡



松鳴鶴鏡



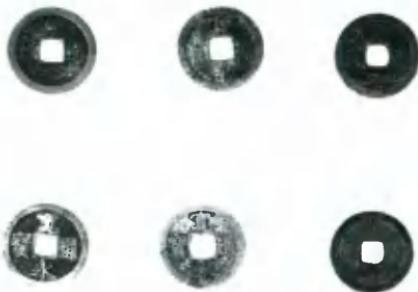
型式不明鏡片

鏡縁片

図版26



永樂通寶



寛永通寶



青白磁坩形合子蓋



白磁片



青白磁坩形合子



菊花文青白磁平形合子蓋



菊花文青白磁平形合子

圖版 28



須惠器蓋片



明代青磁片

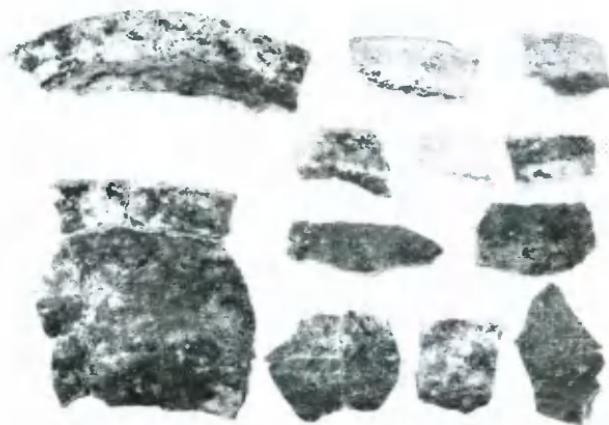


須惠質土器片



須惠質土器片

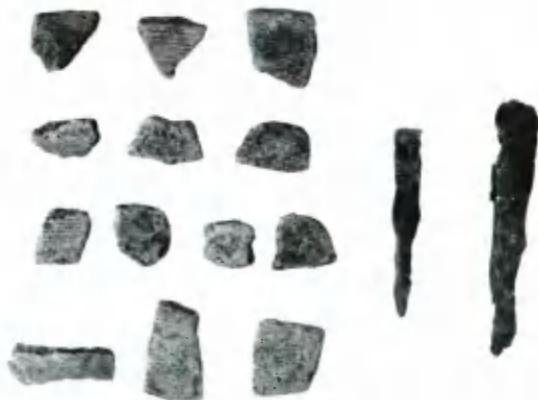
土師器皿底部片



土師質鍋形土器



1. 岩屋第2経塚出土須恵器片



2. 同上出土土師器片・鉄器

図版30

遺跡北西方五輪塔付近・散布地出土遺物



須恵器片



備前焼小壺



備前焼小壺底部



弥生式土器片

中 林 遺 跡 (56)

目 次

はじめに.....	159
立地.....	159
調査.....	160
まとめ.....	163

図 目 次

第1図 グリッド設定図 (1/500)	160
第2図 地形図 (1/400)	161
第3図 トレンチ断面図.....	162

図 版 目 次

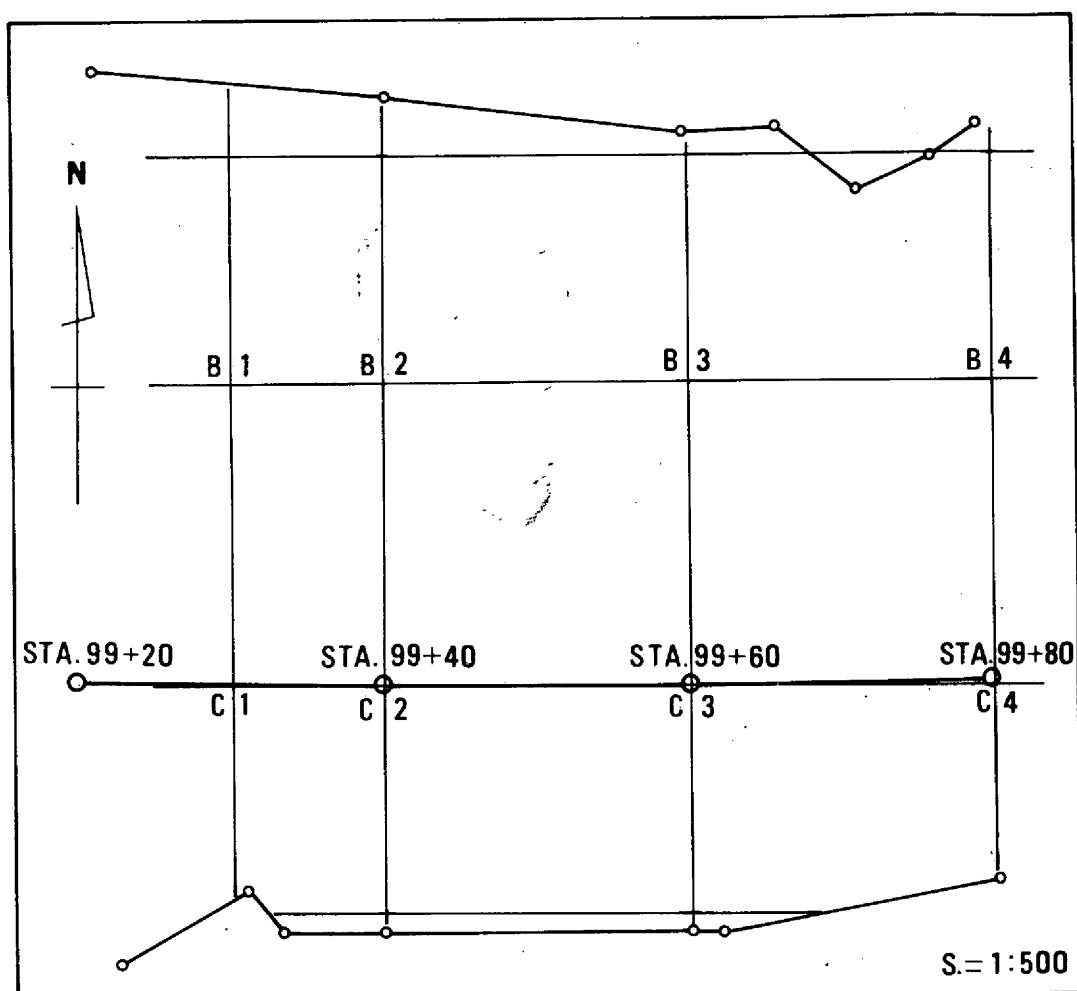
図版 1-1 遺跡の遠望	
2 溝状遺構	
図版 2-1 遺跡内の西側丘陵	
2 第1トレンチ断面	

は じ め に

新見市以西の中国縦貫自動車道関係の遺跡は、約40ヶ所あるが、その中にあっても遺跡の性格が最も不明なものであった。そのため、遺跡の範囲内に見られる溝状遺構（以後溝と表記する。）に対し種々の意見が提出された。それ等を要約すると、カンナ流しとするもの、道（磐座への参道も含めて）とするもの、谷川とするもの等である。いずれにしても、地形内に見られる溝が主要な遺構であると考えられていた。また、周辺の緩斜面に住居址等の生活址も予測されたが、西側の斜面には、斜面全体に石が露頭しており、その可能性は少ないものと考えられ、調査の中心を溝として発掘に着手した。調査は、昭和51年3月1日に着手し、同年3月31日に終了した。報告書は井上弘が執筆した。

立 地

中林遺跡は、阿哲郡哲西町上神代に所在する。遺跡は、南面する丘陵の裾に位置する。遺跡の南には、神代川が流れしており、数100m東流すると北から延びた丘陵に当り、南に方向を変え、丘陵の先端でさらに蛇行する。その神代川により開析された平地が川に沿って細長く展開する。その平地には国道182号線と、国鉄芸備線とが走っている。東約300mには横穴式石室を主体部とする道上古墳、

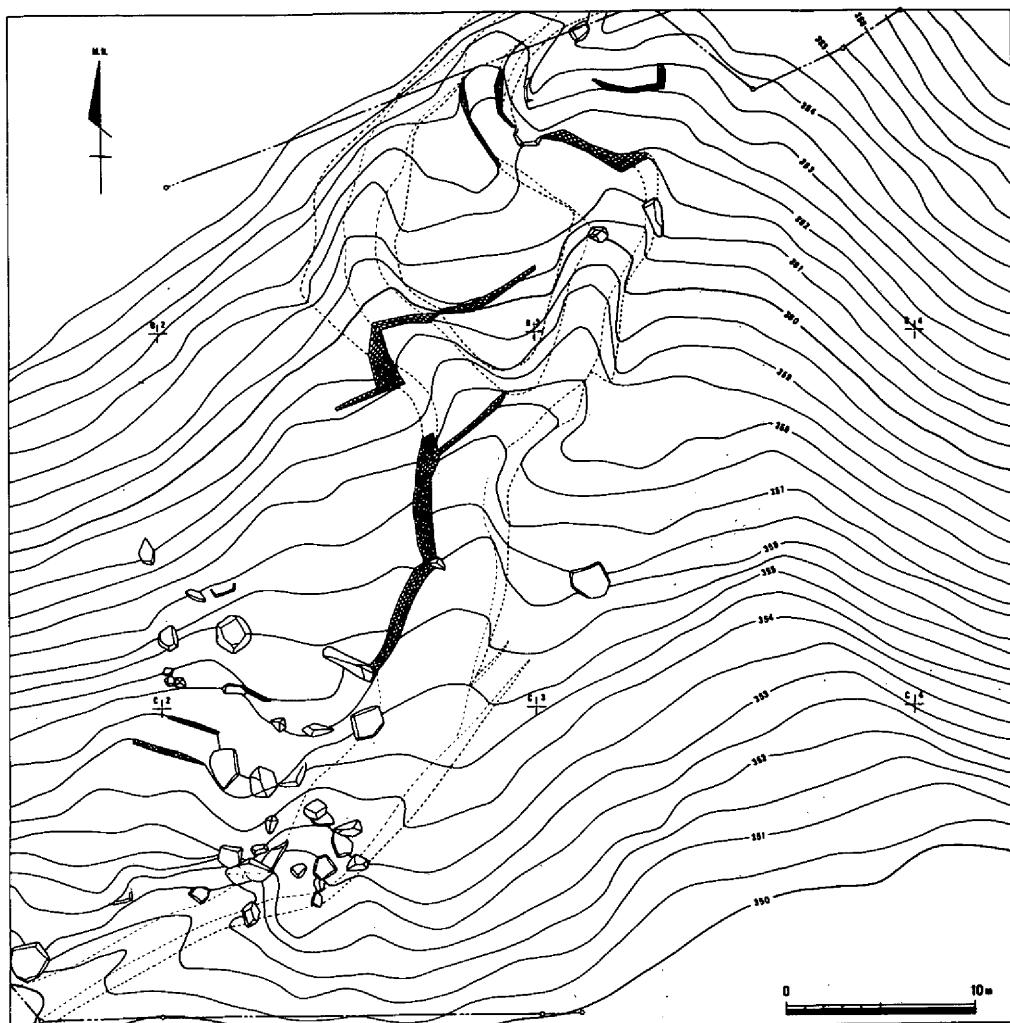


第1図 グリッド設定図

次いで山根屋遺跡があり、西約1Kmには野田畠遺跡がある。また、背後の山陵の中腹には磐座と考えられる巨石が2本立っている。南側自動車用地に接して民家があるが、その民家の東側に家に接して横穴式石室が開口している。

調査

調査は、遺跡と考えられる地点を中心にできる限り広く地形測量することから着手した。この地形測量に着手するまでに、測量会社により20m方眼を基本としたグリッドが設定されており、杭打ちが完了していた。そこで、そのグリッドを基準点として平板測量を実施した。地形図は100分の1とし、25cm間隔の等高線を描くものとした。地形測量終了後に、B杭、C杭に沿ってトレンチを設定した。トレンチは、範囲内に見られる溝が調査の主体であるため、それに中心を置き、周囲に住居址等

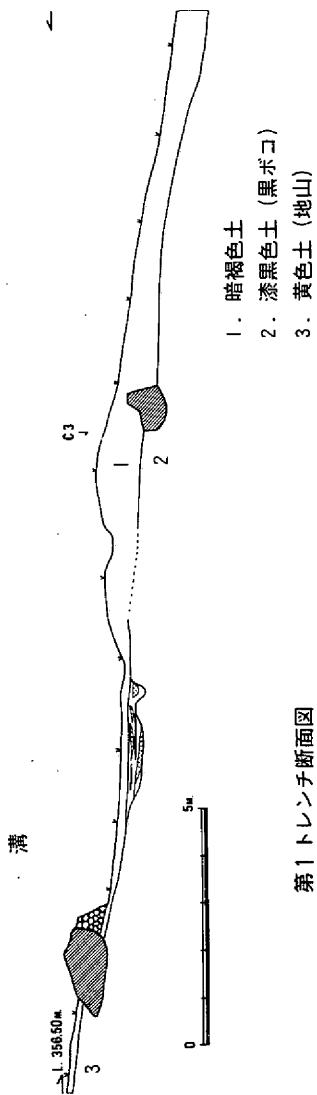
第2図 地形図 ($\frac{1}{400}$)

の有無を確認することにした。トレンチは、C杭に沿うものを第1トレンチ、B杭に沿うものを第2トレンチとした。

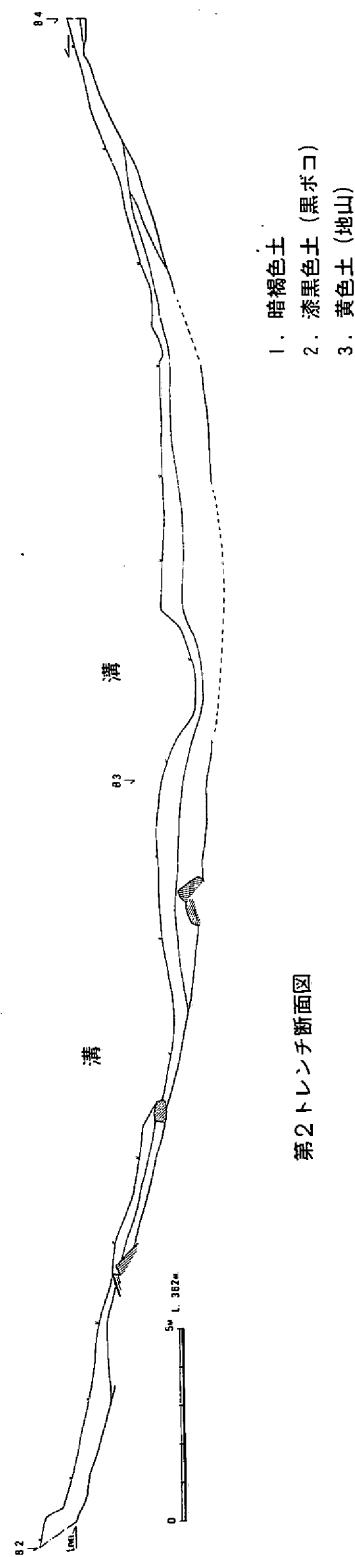
第1トレンチ

第1トレンチは、C-3杭を中心に、西へ約15m、東へ約10mに設定した。トレンチの層序は、茶褐色土、漆黒色土（黒ボコ）、黄色土の三層よりなる。しかし、溝の部分においては、漆黒色土層の堆積が厚いことと、同層位中に大型の転石が多く混入しているため、その深さは確認できなかった。C-3杭より西へ5mの位置に巾5mの溝がある。溝の西岸は石積みであるが、東側に石積は見られない。トレンチの断面を見ると、溝の底部、東よりに砂と暗褐色土、黑色土の互層が見られる。その部分は、漆黒色土をU字型に切り込むもので、堆積する砂層は凸レンズ状である。砂層は、細砂を含む

中林遺跡(56)



第1トレンチ断面図



第3図 トレンチ断面図

もの、小円礫を含むものがある。堆積する砂層をさらに観察すると、同一砂層内においても、粒子の大小、色調の違いが見られ、それ等が水平に堆積して、互層をなす状態が見られる。各砂層中に見られる砂粒は均質である。以上の状況は、流水による砂の堆積の状態を呈するものと推測され、その部分が水路であったものと考える。C-3杭より10m以西は丘陵となり、暗褐色の表土層の下層は、大形の転石を多く含む黄色土層を形成している。C-3杭以東は、浅い谷を形成しており、50~70cmの暗褐色土の下層は漆黒色土(黒ボコ)となり、その堆積も厚い。

第2トレンチ

第2トレンチは、B-2杭よりB-4杭の間に設定した。このトレンチも、基本的には2つの層よりなる。つまり、上層に暗褐色土があり、その下層は漆黒色土であり、黄色土の地山層となる。同トレンチでは、漆黒色土の層位は薄く、西側溝では漆黒色土の堆積も見られなかった。また、東西両溝においても砂の堆積する状態は見られなかった。第1トレンチにおいて砂の堆積が見られたのは、地形的に北から南に下る斜面であり、第2トレンチ付近はその傾斜が急であり、B-3杭とB-2杭の中間付近からそれは緩やかになり、第1トレンチ付近では、ほぼ平坦に近くなるため、上流より運ばれた砂粒が、第1トレンチ付近で堆積したものと考えられる。両トレンチとともに、土器等の文化遺物の出土はなかった。

第1トレンチ、第2トレンチの調査結果からすれば、その溝状遺構には、かつて水の流れていたことが考えられる。しかし、その溝も、谷が浅いため水量はけっして多くなかったものと考えられる。

中林遺跡については、発見当初その溝状遺構についてカンナ流し、または、磐座への参道と考えられていた。カンナ流しについては、同所の上流に砂鉄を産出する場所が無いこと、カンナ流しに必要な水源が無いことからその可能性は否定されるものと考える。むしろ、トレンチ調査の結果からも解るように、水量のさして多くない水路と考えるのが妥当であろう。

まとめ

先にも述べたように、中林遺跡に対しては、カンナ流し、道(参道)、溝と三様の考え方がある。しかし、カンナ流しとする考え方に対しては、発掘調査に並行して、付近を踏査した結果、上流に砂鉄を産出する場所が無いこと、カンナ流しに必要な水源が無いことから、その可能性は無いものと考えるに至った。

道とする考え方であるが、この場合の道は、背後の山陵の中腹に巨大な立石があり、それを磐座と考えるものである。その磐座を意識したものであり、それへの参道を考慮してのものであった。磐座は、この山陵の南東斜面に在る。この磐座を遠望できる地点から見た背後の山陵は、神奈備型を呈しており、その点からしても古代の祭祀遺跡としての可能性は大きいものと考える。また、この溝状遺構をたどれば、磐座へと続く。その巨石群が磐座であるとして、古代からそこにおいて祭祀が継続しているものであるなら、その道も、磐座への参道として踏襲されていた可能性も大きいと考えられる。

中林遺跡(56)

しかし、今はそのような様子が見られない。とすれば、参道として現在まで継続しているとする考え方には、可能性としては少なくなるであろう。

溝とする考え方であるが、トレンチ調査の結果からすれば、水の流れた痕跡が認められることからも、最も妥当性を得たものと言えるであろう。この溝を上流に辿れば、用地外数mの部分で新しい溝に接続する。新しい溝は、尾根を横切る状態を呈しており、その状態からすれば新しい溝は人為的に掘られたものとすることができます。遺跡内に見られる溝を下流に辿れば、民家の裏へ、それを直撃する状態で続く。その状態で上流から水が流れると、民家はその被害を受けることとなる。しかし、現在ではこの溝に水は流れることなく、尾根を横切って西側の谷へ流れている。自然の水が尾根を横切ることがないことを考えれば、上流で分岐する新しい溝は人為的な溝とすることができます。現在では常時その溝に水の流れる状況は見られないが、降雨日等には、周囲の水を集めるものと思える。その水が、今回調査した溝を流れないとすることは、この下に民家が建つ状況において、その流れを変えるために上流に新たに溝が造られたものと考えられる。つまり、下に民家が建つのと相前後して今回調査した溝もその機能を失ったものと考える。その機能を失ってくるとともに、谷部に形成されたその窪地が山道へと転用されるに至ったものと考えられる。



I. 遺跡の遠望 (南南東より)



2. 溝状遺構

図版2



1. 遺跡内西側丘陵



2. 第1トレンチ断面

阿哲郡哲西町の地理的・歴史的環境

阿哲郡哲西町の地理的・歴史的環境

1. はじめに

中国縦貫自動車道（以下縦貫道という）建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査も、岡山県内で75遺跡を調査して昭和51年10月30日に終了した。縦貫道は県北の美作・備北の2市9町を通っているが、この11市町のうち遺跡数の最多の所は阿哲郡哲西町である（75遺跡のうち23遺跡を占めている。）これらの各遺跡ごとに地理的歴史的、環境について記述すれば、説明が重複することが考えられるので、哲西町内の最初に出てくる報告の前に町内の地理的、歴史的環境をまとめて記載することにした。各遺跡の報文では、その遺跡の立地を記述するにとどめた。

2. 地理的環境

哲西町は岡山県北西部に位置し、南北約15Km・東西約5Kmの南北に細長い町で、西は広島県比婆郡に接し、他の三方は阿哲郡神郷町・同郡哲多町・川上郡備中町と境を接している。

哲西町の総面積は約7700ha、その内水田は580haで残りの大部分は山林・原野・牧草地・畑となっている。総面積の7.5%しかない水田はその大部分が町内を南西から北東へ流れる神代川（高梁川の一支流）沿いに細長く存在している。神代川沿いのわずかな水田地帯も、集落・国道182号線・国鉄芸備線・縦貫道などによって更に少ない面積を保持しているにすぎない。

哲西町の中央部・西部は準平原の「吉備高原」の北端部に位置しており、北部はややけわしい山が連なっている。神代川およびそのいくつかの支流沿いにわずかに沖積層が見られる。沖積層（水田地帯）の縁辺部（山裾および樹枝状に発達する小さな舌状の尾根部分）には新生代第三紀層が存在している。縦貫道は、その大部分がこの第三紀層の部分に建設され、一部が水田（沖積層）を埋めてつくられている。言葉を変えるならば、縦貫道用地内で調査した23遺跡はすべてこの第三紀層の上に形成されているといえる。

山間部の大部分は、中生代の閃綠岩（哲西町北部）・斑岩（中央部）・玢岩（南部）で構成されており、一部は中生代の橄欖石・蛇紋岩や古生代の石灰岩・粘板岩・砂岩で構成されている。荒神山・明神山・湯の明神山・高山・長松寺山・権現山などは新生代の玄武岩鐘である。

第三紀の中新統に属する灰色の泥板岩層は国鉄姫新線・芸備線沿いに細長く分布し、この層からはピカリア・ハマグリ・マテガイ・シジミ・サメの歯・カニ・カキ・オキシジミ・メタセコイヤ・ブナ・カシ・ヤナギなどの化石を産する。野馳の大野部ではエダサンゴの化石が出土している。縦貫道の工事中に各所からカキなどの化石がよく出土している（地質については第2図参照）。

3. 歴史的環境

哲西町は総面積に比して水田はわずか7.5%しか存在しない所であるが、遺跡の分布密度はかなり

阿哲郡哲西町の地理的・歴史的環境

高い方である。町内を通る縦貫道の長さは7.6kmであるが、この用地内に発掘調査を実施した遺跡の数は23に達した。これから見ても分布密度の高いことがわかる。

町内へ人間が足を踏み入れたのは古く旧石器時代に遡る。大字矢田字貝田に存在する二野遺跡（第1図59 以下「第1図」を略す）では、縄文時代から平安時代にかけての遺物の包含層から、旧石器時代のサヌカイト製ナイフ形石器と尖頭器が出土している。これは平安時代までの遺物と混在しているため原位置の確認は出来ないが、偶然の出土とはいえない。西へ約10kmの地点には帝釈峠遺跡群（註1）が存在し、北25kmの所には野原遺跡（註2）が存在している。これらの遺跡を拠点に狩猟を行っていた旧石器時代人がこの哲西町内に足を踏み入れたことは充分考えられる。

縄文時代の遺跡も、縦貫道用地内の発掘調査を契機にして、9か所が確認されている。大字下野部字柄峠では早期の石鏃が、土井上遺跡（註3）・馬場遺跡（註4）では早期の土器片が採集されている。塚の峯遺跡（72）では前期の土器片が、二野遺跡では前・後・晚期の土器片が、大倉遺跡（67）清水谷遺跡（71）、岸本下遺跡（74）では晚期の土器片が出土しており、西江遺跡（58）では晚期のピットと土器片が確認されている。佐藤遺跡（53）では、後・晚期の土器が出土し、後期の住居址1軒が確認されている。佐藤遺跡の住居址・西江遺跡のピットを除いて他の遺跡では遺構は存在しない。土井上遺跡は、縦貫道の工事中に土器片が採集されたもので、発見時にはすでにオープン・カットされていて、調査しないで消滅した遺跡の一つである。馬場遺跡も土器を表面採集しているだけで遺跡の実態は不明である。

弥生時代になると遺跡数も多くなる。しかし前期に属するものは、西江・大倉・清水谷・岸本下（74）の4遺跡に土器片が見られるのみである。中期になると、縦貫道関係では、山根屋遺跡（54）・野田畠遺跡（57）・西江遺跡・二野遺跡・横田遺跡（65）・大倉遺跡・清水谷遺跡が知られており、これら以外にも家坂遺跡（20 註5）・善光院裏山遺跡（註6）・三角高下遺跡（註7）などが知られている。山根屋・野田畠・西江・横田・家坂では、住居址やピット・溝などが確認、または調査されている。住居址もかなりあり、この時期以後人々が哲西の地に定住したものと考えられる。

弥生時代後期になるとさらに遺跡数も増し、縦貫道用地内に限っても前記の中期の遺跡に加えて、土井遺跡（61）・土井城址（62）・横田遺跡4区、藤木城址（66）・御供川遺跡（69）・塚の峯遺跡・二本松遺跡（73）・岸本城址（75）・宮の尾遺跡（6）をあげることができる。西江遺跡では特殊器台・特殊壺の伴う土壙墓群が確認されている。

これらの弥生時代の遺跡は、（家坂遺跡を除く）神代川沿いの狭長な沖積に向かって樹枝状にのびる第三紀層の丘陵上あるいは山裾部に位置し、家坂遺跡は大字矢田字元町から広島県境に展開する小さな谷の奥に位置している。家坂遺跡同様に谷間の遺跡が今後発見される可能性がある。

哲西町では昭和36年度に第1回目の分布調査が行われ、約250基にのぼる古墳などの遺跡が『岡山県遺跡地図』（註8）に載せられている。第2回の分布調査は、縦貫道予定線を中心に巾500mの範囲にわたって昭和44年度に実施され、これをもとに縦貫道の路線が決定された。この時点で路線内に含まれる遺跡は、中林遺跡（56）・西江遺跡の一部・二野遺跡（59）（横穴式石室1基のみ）・鳴山古

阿哲郡哲西町の地理的・歴史的環境

墳群（63）・大倉遺跡（67）・四日市古墳（70）・塚の峯遺跡（72）の7遺跡のみであった。昭和49年度になって発掘調査に先だち、縦貫道の調査担当者全員で精査した結果、佐藤遺跡・山根屋遺跡・野田畠遺跡・西江遺跡（延長1Kmに拡大）・二野遺跡・土井遺跡・土井城址・横田遺跡・藤木城址・忠田山遺跡（68）・御供川遺跡・清水谷遺跡・岸本城址を新たに確認した。また用地内の伐採終了後に、光坊寺古墳群（60）・横田東古墳群（64）を確認した。53～75（53・73・74を除く）の20遺跡を対象に発掘調査を開始した。

数度にわたる分布調査にもかかわらず、縦貫道建設工事中に発見された遺跡は、道の上古墳群（55）・宮の尾遺跡・土井上遺跡・二本松遺跡・岸本下遺跡の5遺跡をあげることができる。これらの遺跡では1片の土器も採集されなかった地点である。工事中発見のうち、二本松遺跡・岸本下遺跡については工事を中止して調査を行うことができたが、宮の尾遺跡・土井上遺跡では発見したときにはすでに工事によって遺跡は消滅していた。また、野田畠遺跡では、たった1個の石庖丁のみを表面採集しただけであった。これらは埋蔵文化財の分布調査の難しさを痛感させた。

さらに岡山県全域の分布調査の一貫として昭和50年度に分布調査が実施された。この際は主として神代川の南の地域の分布調査が行われ、その成果は、前2回のものと合わせて『岡山県遺跡地図第5分冊』（註9）に載せられる予定である。

古墳時代になると、遺跡の分布は縦貫道沿いの所だけでなく、小さな谷の奥まった場所や山頂などにも点在している。集落址は佐藤・山根屋・野田畠・西江・土井城・横田・大倉・忠田山・御供川・清水谷・塚の峯・二本松・岸本下・岸本城の各遺跡で確認されている。弥生時代と同様に古墳時代の集落址は、縦貫道建設用地内の調査の行われた部分のみでわかっているのであって、その他の所にも存在しているものと思われる。

古墳時代初頭の墳墓は、山根屋遺跡・西江遺跡にあり、方形台状墓・シストあるいは土壙墓で形成されている。前半期の古墳群として光坊寺古墳群をあげることができる。これは円墳・方形墳から成っており、内部主体に竪穴式石室をもち、珠文鏡などの遺物が出土している。その他の場所では古墳時代前半期に属する古墳は明確にしえない。

古墳時代後半期に属するものは各所に散在している。内部主体は、シストあるいは木棺直葬のもの、横穴式石室が認められる。畠木の鳴木山古墳群（40）の一基（径5mの小円墳）からは、6世紀初頭の須恵器が出土している。横穴式石室は6世紀後半になって出現する。上神代吉が谷にあるひさご塚古墳は国鉄芸備線建設時に破壊されたものであるが、形象・円筒埴輪を持っており、5世紀中葉の築造と考えられる（註10）。埴輪を持つ古墳としては備中北部では唯一の例である。ただ西江遺跡の包含層から埴輪片1片が出土し、その地点はひさご塚古墳から南へ1Kmの地点である。西江遺跡出土の埴輪片は、どこの古墳に伴うものかは不明である。

後半期のもので特筆すべきものに横穴がある。家坂横穴（20—1基）（註11）・竹川内横穴群（22—7基）・愛宕山横穴群（23—15基）・鳴山古墳群（2基）・寺畠横穴（青谷古墳群（35）の内—1基）の26基の存在が知られている。このうち家坂横穴・鳴山古墳群の3基は発掘調査が行われた。県中北部の久米町、加茂町、北房町などにその分布が知られている。

阿哲郡哲西町の地理的・歴史的環境

奈良・平安時代の遺構・遺物は、山根屋・西江・二野・土井・二本松・井下谷（36）の各遺跡で確認されている。

城址では、鎌倉時代の西山城（50）・万石城（17）・育野城（84）がある。室町時代のものでは、尼子方の見坂山城（1）・豆木城（34）・藤木城・岸本城・岩高城（8）があり、毛利方の育野城・要塞城（50—後に尼子方となる）がある。哲西町の北西部に尼子方が、南東部に毛利方が対峙していたものである。城址ではないが、建物群・墳墓などは、土井遺跡・忠田山遺跡・二本松遺跡などで確認されている。

製鉄関係の遺構は、鍛冶炉が西江遺跡・二野遺跡で確認され、鉄穴・水路などは柄峠と浅尾田に残っている。

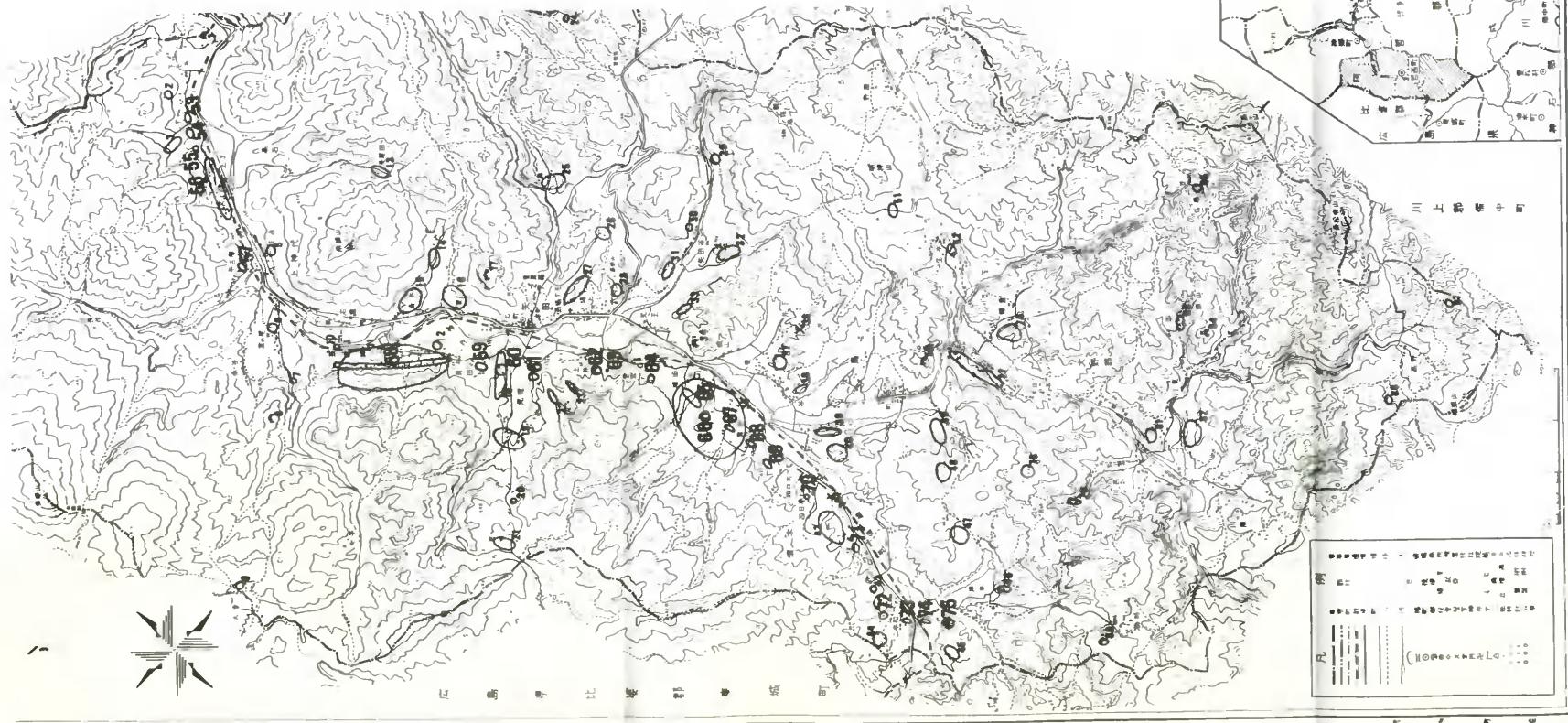
（田仲満雄）

- 註 1. 広島大学が十数年来発掘調査を続けている。
- 註 2. 『岡山県埋蔵文化財報告7』岡山県教育委員会 昭和52年3月刊
- 註 3. 土井遺跡のすぐ南の尾根上にあった。
- 註 4. 矢田元町にある町役場の東側の山裾部分で採集された。
- 註 5. 藤田 等「備中哲西町弥生式遺跡」『古代吉備』第4集 古代吉備刊行会・昭和36年刊
- 註 6. 矢田荒堀の光坊寺古墳群の西に位置する南にのびる尾根上にある。
- 註 7. 八鳥の嶋木山東古墳群のある尾根が低く北にのび、その先端部に位置している。
- 註 8. 『岡山県遺跡地図』岡山県教育委員会 昭和39年刊
『全国遺跡地図—岡山県』文化財保護委員会 昭和42年刊
- 註 9. 『岡山県遺跡地図』第5分冊 岡山県教育委員会 近刊予定
- 註10. 遺物は現在、東京国立博物館と哲西町立矢神小学校に保管されている。
- 註11. 潮見 浩・難波宗明「備中哲西町家坂の横穴調査報告」『古代吉備』第4集 古代吉備刊行会 昭和36年刊

（参考文献）

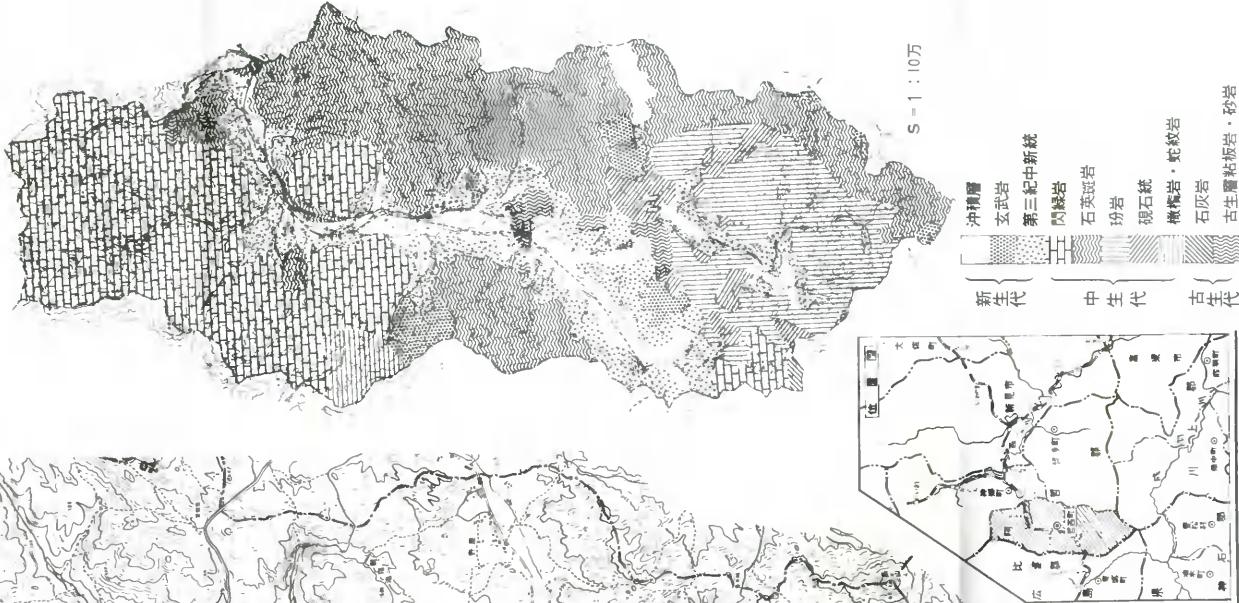
- 『哲西町遺跡カード』哲西町教育委員会
- 『哲西史』哲西町 昭和38年刊
- 『阿哲郡誌』阿哲郡教育会 大正12年刊
- 『古代吉備』古代吉備刊行会 昭和36年刊

第1図・2図ともに哲西町教育委員会提供の地形図(S-1 : 25,000)に記入し、縮尺した
ものである(5ヶ年分布調査を基本にして作成—田中満雄)



1. 豊坂山城址
2. 温光庵古墳群
3. 川の段古墳群
4. 市岡古墳群
5. 実本古墳群
6. 宮の尾遺跡
7. 宝堂古墳群
8. 岩高城址
9. 大金古墳群
10. ひさご冢古墳
11. 西古墳群
12. 山王小丸古墳群
13. 遠尾田丸古墳群
14. 水江古墳群
15. 森木古墳群
16. 涌水古墳群
17. 万石城址
18. 善光院真山遺跡
19. 塚原古墳群
20. 家坂遺跡
21. 飯木古墳群
22. 竹川内縫穴群
23. 爽石山縫穴群
24. 横路古墳
25. 奥古墳群
26. 緑ヶ原古墳群
27. 登宇の政古墳群
28. 武内古墳群
29. 麗刈古墳群
30. 上川内古墳群
31. 室ヶ吹古墳群
32. 叶谷古墳群
33. 天王奥古墳群
34. 豆木城址
35. 青谷古墳群
36. 井下谷遺跡
37. 塚の段古墳群
38. 美菴寺古墳群
39. 鳴木山東古墳群
40. 鳴木山古墳群
41. 住吉遺跡
42. 御立山古墳群
43. 御立山古墳群
44. 妙伝寺裏遺跡
45. 一本松下遺跡
46. 一本古墳群
47. 一本東古墳群
48. 上宝古墳群
49. 小塙古墳群
50. 西山古墳群
51. 滝水古墳群
52. 林古墳群
53. 佐藤遺跡
54. 山根屋遺跡
55. 道の堀遺跡
56. 中林遺跡
57. 野田城址
58. 西江遺跡
59. 二野遺跡
60. 光坊寺古墳群
61. 土井城址
62. 土井城址
63. 鳴山古墳群
64. 横田東古墳群
65. 横田遺跡
66. 龍木城址
67. 大曾根跡
68. 忠田山遺跡
69. 鐘井山遺跡
70. 四日市古墳
71. 清水谷遺跡
72. 魔の本古墳群
73. 二本松下遺跡
74. 岩木下遺跡
75. 岩木城址
76. 須磨古墳群
77. 日の本古墳群
78. 七つ森古墳群
79. 鳥田島古墳群
80. 斎場古墳群
81. 二条山古墳群
82. 保の森古墳群
83. 山平古墳群
84. 舟野城址
85. 大間古墳
86. 天堤古墳群
87. 地藏ヶ谷古墳群

53~75は中盤階発掘遺跡一覧表の番号と同じ



第1図 阿哲郡哲西町遺跡分布図

第2図 哲西町地質図

新生代 沖積層
中生代 玄武岩
第三紀中新統
古生代 内縫岩
石英斑岩
砂岩
石灰岩
硫酸岩
古生層粘板岩・砂岩

西 江 遺 跡 (58)

本文目次

第1章 調査の方法と経過	185
第1節 西江遺跡の位置	185
第2節 発掘調査の経過	188
第2章 発掘調査の概要	192
第1節 西江平調査区	192
1. 西江平調査区の概要	192
2. 西江平調査区の遺構、遺物	192
3. 小 結	196
第2節 北井調査区	198
1. 北井調査区の概要	198
2. 北井調査区の遺構、遺物	198
3. 小 結	209
第3節 国信調査区	209
1. 国信調査区の概要	209
2. 国信調査区の遺構、遺物	209
3. 小 結	242
第4節 実政調査区	243
1. 実政調査区の概要	243
2. 実政調査区の遺構、遺物	243
3. 小 結	290
第5節 藤安調査区	291
1. 藤安調査区の概要	291
2. 小 結	294
第6節 田代調査区	295
1. 田代調査区の概要	295
2. 田代調査区の遺構・遺物	295
3. 小 結	324
第7節 安信平地部調査区	324
1. 安信平地部調査区の概要	324
第8節 安信丘陵部調査区	327
1. 安信丘陵部調査区の概要	327
2. 安信丘陵部調査区の遺構・遺物	330
3. 小 結	394

第3章 西江遺跡の特質	396
第1節 西江遺跡の調査概要	396
第2節 西江遺跡出土の弥生式土器・古式土師器について	397
第3節 土壙墓群及び特殊器合・特殊壺について	405
第4節 西江遺跡出土の師楽式土器について	409

図 目 次

第1図 西江遺跡地形図	186～187
第2図 西江遺跡グリッド配置図	187
第3図 西江平調査区全体図	193
第4図 大型住居址実測図	194
第5図 土壙1実測図	195
第6図 土壙2実測図	195
第7図 土壙3実測図	195
第8図 縄文・弥生式土器実測図	197
第9図 北井調査区平面図	199
第10図 1号住居址実測図	200
第11図 2号住居址実測図	201
第12図 2号住居址出土土器実測図	202
第13図 2, 3号建物実測図	204
第14図 井戸実測図	205
第15図 縄文・弥生・土師器実測図	207
第16図 須恵器実測図	208
第17図 石器実測図	208
第18図 国信調査区(北)全体図	210
第19図 国信調査区(南)全体図	211
第20図 国信調査区南端部平面図	212
第21図 1号住居址実測図	213
第22図 1号住居址出土土器実測図	214
第23図 1号住居址出土遺物実測図(石器・鉄器)	215
第24図 2, 3号住居址実測図	216
第25図 4, 5号住居址実測図	217
第26図 6, 7号住居址実測図	218
第27図 6号住居址出土土器実測図	219
第28図 8～11号住居址, 墓壙実測図	220

西江遺跡(58)

第29図 住居址実測図	221
第30図 2号建物実測図	222
第31図 1号建物実測図	222
第32図 3号建物実測図	223
第33図 4号建物実測図	224
第34図 柱列及び土壙実測図	225
第35図 土壙4(縄文)実測図	226
第36図 縄文式土器実測図	227
第37図 土壙状遺構実測図	228
第38図 弥生・土師器実測図	230
第39図 弥生・土師器実測図	232
第40図 土師器実測図	233
第41図 弥生式土器実測図	235
第42図 土師器実測図	236
第43図 須恵器実測図	238
第44図 須恵器実測図	239
第45図 亀山焼・備前焼実測図	240
第46図 石器実測図	241
第47図 鉄器実測図	242
第48図 土錐実測図	242
第49図 実政調査区北部平面図	244
第50図 実政調査区中央部I平面図	245
第51図 実政調査区中央部II平面図	246
第52図 実政調査区南西部平面図	247
第53図 実政調査区南東部平面図	248
第54図 1号住居址実測図	249
第55図 3, 4, 5号住居址・土壙実測図	250
第56図 4号住居址出土土器実測図	251
第57図 6号住居址実測図	251
第58図 7号住居址実測図	252
第59図 7号住居址出土遺物実測図	253
第60図 土壙1, 2出土土器実測図	253
第61図 师楽式土器実測図	254
第62図 土壙3出土土器実測図	255
第63図 土壙4出土土器実測図	255

西江遺跡(58)

第64図 土壙4出土須恵器実測図	256
第65図 住居址、柱列及び土壙実測図	257
第66図 土壙5出土亀山焼等実測図	258
第67図 土壙5出土遺物（土錐・砥石）実測図	258
第68図 簾状文のある土器片実測図	258
第69図 1号建物実測図	260
第70図 2号建物実測図	261
第71図 3、4号建物実測図	262
第72図 5号建物実測図	263
第73図 6(上)、7(下)号建物・柱列5実測図	264
第74図 繩文・弥生・土師器実測図	268
第75図 土師器実測図	270
第76図 土師器実測図	271
第77図 須恵器実測図	273
第78図 須恵器実測図	274
第79図 須恵器実測図	275
第80図 師楽式土器実測図	278
第81図 師楽式土器実測図	279
第82図 師楽式土器実測図	280
第83図 師楽式土器実測図	281
第84図 師楽式土器実測図	282
第85図 師楽式土器実測図	283
第86図 師楽式土器実測図	284
第87図 師楽式土器実測図	285
第88図 師楽式土器実測図	286
第89図 師楽式土器実測図	287
第90図 師楽式土器実測図	288
第91図 亀山焼・磁器実測図	288
第92図 石斧実測図	289
第93図 塗輪片実測図	289
第94図 鉄器実測図	289
第95図 藤安調査区(北)全体図	291
第96図 藤安調査区(南)全体図	291
第97図 鍛冶炉実測図	292
第98図 土壙1実測図	293

西江遺跡(58)

第99図 土壌2実測図	293
第100図 土器実測図	293
第101図 亀山焼・備前焼実測図	294
第102図 田代調査区周辺地形図	296
第103図 田代調査区全体図	297
第104図 1号住居址実測図	298
第105図 2号住居址実測図	298
第106図 3号住居址実測図	298
第107図 3号住居址出土土器実測図	299
第108図 4, 5号住居址実測図	299
第109図 6号住居址実測図	300
第110図 9号住居址実測図	301
第111図 10号住居址実測図	302
第112図 11号住居址実測図	303
第113図 12号住居址実測図	304
第114図 弥生式土器・紡錘車実測図	305
第115図 弥生式土器実測図	306
第116図 紡錘車実測図	306
第117図 石器・鉄器・土玉実測図	307
第118図 土壌3実測図	309
第119図 土壌4, 7実測図	310
第120図 土壌5, 6実測図	310
第121図 鍛冶炉実測図	311
第122図 土壌墓実測図	312
第123図 須恵器実測図	313
第124図 鉄鎌実測図	313
第125図 弥生式土器実測図	314
第126図 弥生式土器実測図	316
第127図 土師器実測図	317
第128図 須恵器実測図	320
第129図 亀山焼実測図	321
第130図 亀山焼・備前焼実測図	322
第131図 鉄器実測図	323
第132図 安信平地部調査区全体図	324
第133図 住居址実測図	325

西江遺跡(58)

第134図 土壙実測図	325
第135図 弥生・土師器実測図	326
第136図 須恵器実測図	326
第137図 安信丘陵部調査区地形図(調査前)	328
第138図 安信丘陵部調査区地形実測図(発掘調査後)	329
第139図 弥生式土器実測図	332
第140図 弥生式土器実測図	333
第141図 土壙墓群全体図	334～335
第142図 土壙墓実測図(1～7, 9)	336
第143図 土壙墓実測図(8, 10～15)	337
第144図 土壙墓実測図(16～25)	338
第145図 土壙墓実測図(26～30)	339
第146図 土壙墓実測図(31～39)	340
第147図 土壙墓実測図(40～47)	341
第148図 土壙墓実測図(48～57)	342
第149善 土壙墓実測図(58～65)	343
第150図 土壙墓実測図(66～75)	344
第151図 土壙墓実測図(76～83)	345
第152図 土壙墓実測図(84～90)	346
第153図 2号方形台状墓実測図	347
第154図 2号方形台状墓北側貼石実測図	348
第155図 2号方形台状墓南側貼石実測図	348
第156図 土壙墓実測図(91～95)	349
第157図 土壙墓実測図(96～100)	350
第158図 91号土壙墓出土ガラス玉実測図	351
第159図 土壙墓実測図(101～113)	352
第160図 土壙墓実測図(114～126)	353
第161図 土壙墓実測図(127～132)	354
第162図 溝断面図	358
第163図 弥生・土師器実測図	359
第164図 113号土壙墓供献土器実測図	361
第165図 南土壙墓群溝肩出土土器実測図	362
第166図 南端テラス出土土器実測図	362
第167図 特殊器台・特殊壺実測図	363
第168図 特殊器台・特殊壺出土状況実測図	365

第169図 特殊器台1実測図	369
第170図 特殊器台2実測図	370
第171図 特殊器台3実測図	371
第172図 (上)特殊器台4実測図,(下)器台胴部文様帶連続「S」字状文展開図(その1)	372
第173図 器台胴部文様帶連続「S」字状文展開図(その2)	373
第174図 特殊壺1(上), 同2(下)実測図	374
第175図 特殊壺3(上), 同4(下)実測図	375
第176図 安信丘陵部調査区遺構配置図	377
第177図 2, 3号墳平面図	379
第178図 5号墳実測図	380
第179図 2, 5号墳墳丘断面図	381
第180図 1, 4, 6号墳実測図	382
第181図 1, 2号墳墳丘実測図	383
第182図 2, 4, 5, 6号墳主体部実測図	384
第183図 3号墳周辺出土土師器実測図	385
第184図 4号墳出土遺物実測図	386
第185図 6号墳出土須恵器実測図	387
第186図 集石遺構1実測図	388
第187図 集石遺構2実測図	388
第188図 集石遺構3実測図	388
第189図 集石遺構4実測図	388
第190図 集石遺構5実測図	389
第191図 土壙1実測図	389
第192図 土壙2実測図	389
第193図 土壙3実測図	389
第194図 土壙状遺構実測図	390
第195図 土器実測図	393
第196図 石鏃実測図	394
第197図 西江遺跡出土弥生式土器・土師器編年表(1)	402
第198図 西江遺跡出土弥生式土器・土師器編年表(2)	403
第199図 西江遺跡出土弥生式土器・土師器編年表(3)	404

図版目次

- 図版1—1 西江遺跡全景(1) (東から)
図版1—2 西江遺跡全景(2) (東から)
図版2—1 西江平調査区柱穴群 (南東から)
国版2—2 大型竪穴住居址 (南から)
図版3—1 北井調査区 (北) 全景 (北から)
図版3—2 北井調査区 (南) 全景 (北から)
図版4—1 1, 2号住居址 (北から)
図版4—2 井戸 (東から)
図版5—1 国信調査区 (北) 全景 (南から)
図版5—2 1号住居址 (南から)
図版6—1 国信調査区 (南) (南から)
図版6—2 国信調査区 (南) (北東から)
図版7—1 3号建物 (南東から)
図版7—2 7号住居址 (南から)
図版8—1 9号, 10号住居址 (南から)
図版8—2 繩文式土器出土の土壙 (南から)
図版9—1 国信調査区 (南区東) (北から)
図版9—2 1, 2号住居址 (北から)
図版10 国信調査区出土遺物
図版11—1 実政調査区 1号住居址 (南から)
図版11—2 大型土壙周辺 (南から)
図版12—1 中央部住居址・土壙検出状況 (北から)
図版12—2 5号住居址, 土壙1~3 (北から)
図版13—1 土壙3, 師楽式土器出土状況 (南から)
図版13—2 土壙3, 師楽式土器出土状況 (東から)
図版14—1 4号住居址遺物出土状況 (東から)
図版14—2 6号建物周辺 (北から)
図版15—1 1号建物, 6号住居址 (西から)
図版15—2 7号住居址 (北から)
図版16—1 2号建物周辺部 (北から)
図版16—2 5号建物 (南から)
図版17 実政調査区出土遺物 (土師器・須恵器・師楽式土器)
図版18 実政調査区出土遺物 (師楽式土器・鉄器・石斧)

- 図版19—1 藤安調査区(南)全景(北から)
図版19—2 鍛冶炉(東から)
図版20—1 田代調査区(北)全景(1)(北から)
図版20—2 田代調査区(北)全景(2)(北から)
図版21—1 田代調査区(北)全景(3)(南から)
図版21—2 田代調査区(北)全景(4)(南から)
図版22—1 11号住居址(東から)
図版22—2 6号住居址(南から)
図版23—1 10号住居址周辺(北東から)
図版23—2 9号住居址(東から)
図版24—1 12号住居址(東から)
図版24—2 13号住居址(東から)
図版25—1 田代調査区(南)全景(北から)
図版25—2 3号住居址(東から)
図版26—1 2号土壙墓(東から)
図版26—2 3号土壙墓(東から)
図版27 住居址出土遺物
図版28 田代調査区出土遺物(須恵器・鉄器)
図版29—1 龜山焼擂鉢
図版29—2 釜形土器
図版30—1 安信平地部調査区全景(東から)
図版30—2 安信平地部調査区北東部(南東から)
図版31—1 北土壙墓群(1)(南から)
図版31—2 北土壙墓群(2)(東から)
図版32—1 南土壙墓群(南から)
図版32—2 2号方形台状墓(北から)
図版33—1 2号方形台状墓南側貼石(南から)
図版33—2 113号土壙墓供献土器出土状況(東から)
図版34—1 127号石蓋土壙墓(東から)
図版34—2 115号土壙墓(東から)
図版35—1 特殊器台出土状況(1)(西から)
図版35—2 特殊器台出土状況(2)(東から)
図版35—3 特殊器台出土状況(3)(南から)
図版36—1 2, 3号墳全景(南から)
図版36—2 2, 3号墳全景(掘りあげた後)

西江遺跡(58)

- 図版37—1 3号墳周辺遺物出土状況
図版37—2 5号墳全景(南から)
図版38—1 4号墳全景(東から)
図版38—2 4号墳遺物出土状況(東から)
図版39—1 1号墳全景(東から)
図版39—2 6号墳全景(北から)
図版40 弥生式土器(中期)
図版41 弥生式土器(後期)
図版42 土壙墓群周辺出土の土器
図版43 特殊器台1
図版44 特殊器台2
図版45 特殊器台3
図版46—1 特殊器台4
図版46—2 1号方形台状墓周辺出土の特殊器台
図版47 特殊壺1, 2
図版48 特殊壺3, 4
図版49 3号墳, 4号墳出土遺物
図版50 古墳出土須恵器

執筆分担

当報告の執筆は調査を担当した3名で分担した。

第2章第1節2—(1), 第2節2—(1)~(5), 第3節2—(1)~(6), 3, 第4節2—(1)~(5), (6後半),
3, 第8節2—(3後半), (4後半), (5), (9), (10), 3後半, 第3章4……(田仲)

第1章, 第2章第1節1, 2—(2), (3), 3, 第2節1, 2—(6), 3, 第3節1, 2—(1), (7), 第
4節1, 2—(5), (6前半), 第5節, 第6節2—(1前半), (3), (7), 3, 第7節, 第8節1, 2—
(1), (2), (3前半), (4前半), (6)~(8), (10), (11), (13), 3前半, 第3章1, 2, 3……(正岡)

第2章第6節1, 2—(1後半), (3)~(6)……(二宮)

第1章 調査の方法と経過

第1節 西江遺跡の位置

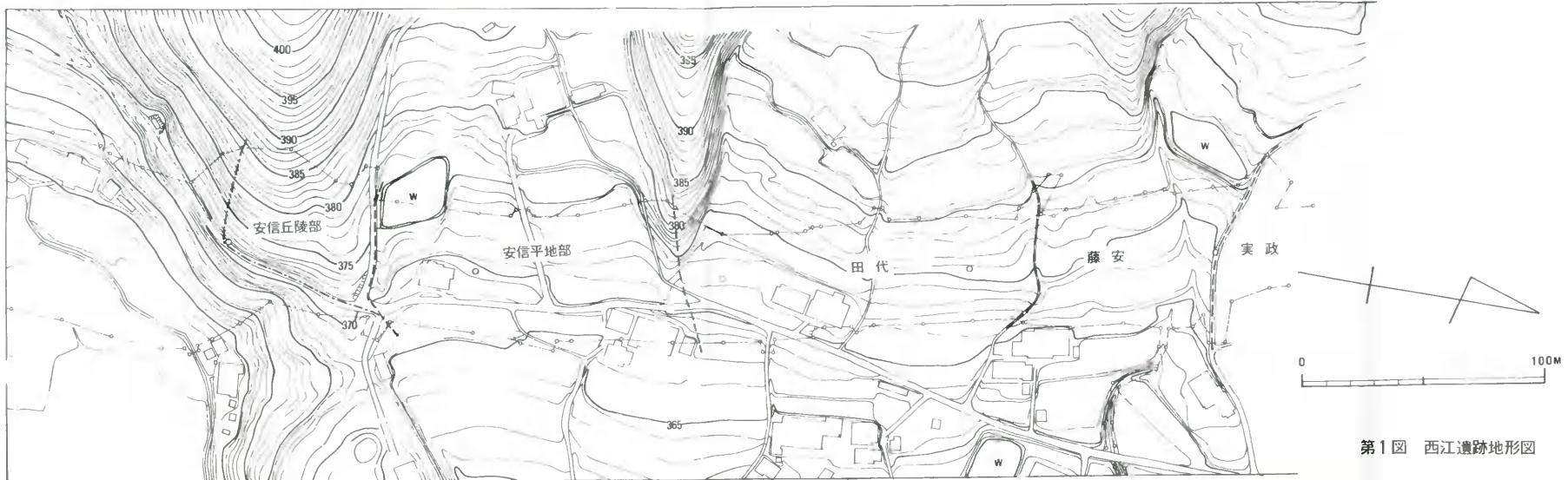
1. 西江遺跡の位置

西江遺跡は岡山県阿哲郡哲西町大字上神代西江に所在する。哲西町内の歴史的・地理的環境については先に一括してあつかってあるので、ここでは西江遺跡の範囲について述べる。遺跡は東へ面した山裾が緩やかに傾斜し、神代川の周辺部低位面により段丘状を呈している。地形は詳細にみるといくつかの小支丘によって区切られ、谷地形を呈するところもある。上面がなだらかな小支丘上面および台地状を呈するところに縄文時代より近世に至る遺構・遺物が検出される。細かい尾根や高い尾根を除くと現在の居住区域と重なっている。

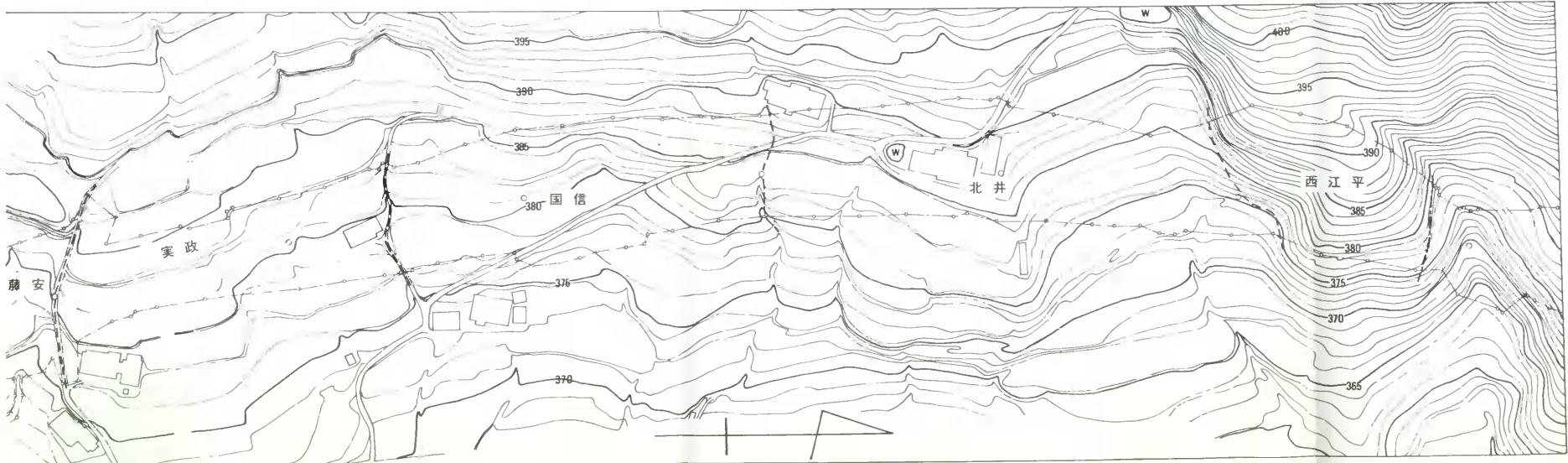
西江遺跡では調査によって縄文晩期の土器片、黒曜石などが少量出土している。谷をはさんで南に所在する二野遺跡では縄文晩期の土器片がまとまって出土している(註1)。弥生時代の遺跡では西江遺跡の各地点から各時期の遺物が出土している。量的にもまとまっているのは時期と地点がわかれている。神代川をはさんで東側の丘陵先端部でも若干の土器が採集されている。北方では大きな谷地形をはさんで宮の尾遺跡がある。工事中に発見された遺跡で、弥生中期から後期の土器片が採集されている。西江の南端部に位置する丘陵部では弥生後期から古墳時代初期へつづく、土壙墓群が多数検出された。これには特殊器台・特殊壺などが伴っている。土壙墓群を内部主体とする方形合状墓も2基存在する。

古墳時代の遺跡は弥生とほぼ同じ立地をしている。谷をはさんだ南の丘陵上に位置する光坊寺古墳群は前期～中期へかけての古墳が11基並んでいる。西江遺跡では南端部丘陵において、円墳が6基確認された。この丘陵の先端部には2基の古墳がある。付近で牧舎建設中にも箱式石棺5基が発見されている。また、丘陵の頂部に若干周溝部が凹んでいる円墳がある。内部主体は横穴式石室である。同丘陵の北側の丘陵基部にも円墳1基があり、北方の丘陵基部においても横穴式石室を内部主体とする円墳2基が栗林中にある。この南の北井にも畠地で若干削られた円墳が1基ある。北端部丘陵が東へのびる先端部には瓢塚古墳がある。芸備線建設のため、昭和3年に大部分が破壊されているが、石室があつて直刀などが出土し、墳丘から人物埴輪、円筒埴輪等が出土している(註2)。埴輪を出土している古墳は備中北部では唯一の例である。墳形は前方後円墳といわれているが、現在確認できない。谷をはさんだ南には比較的大きな横穴式石室を内部主体とする二野古墳が所在する。神代川をはさんで対岸の丘陵上及び裾部には水江、桑本、浪方の各古墳群が所在する。いずれも円墳である。

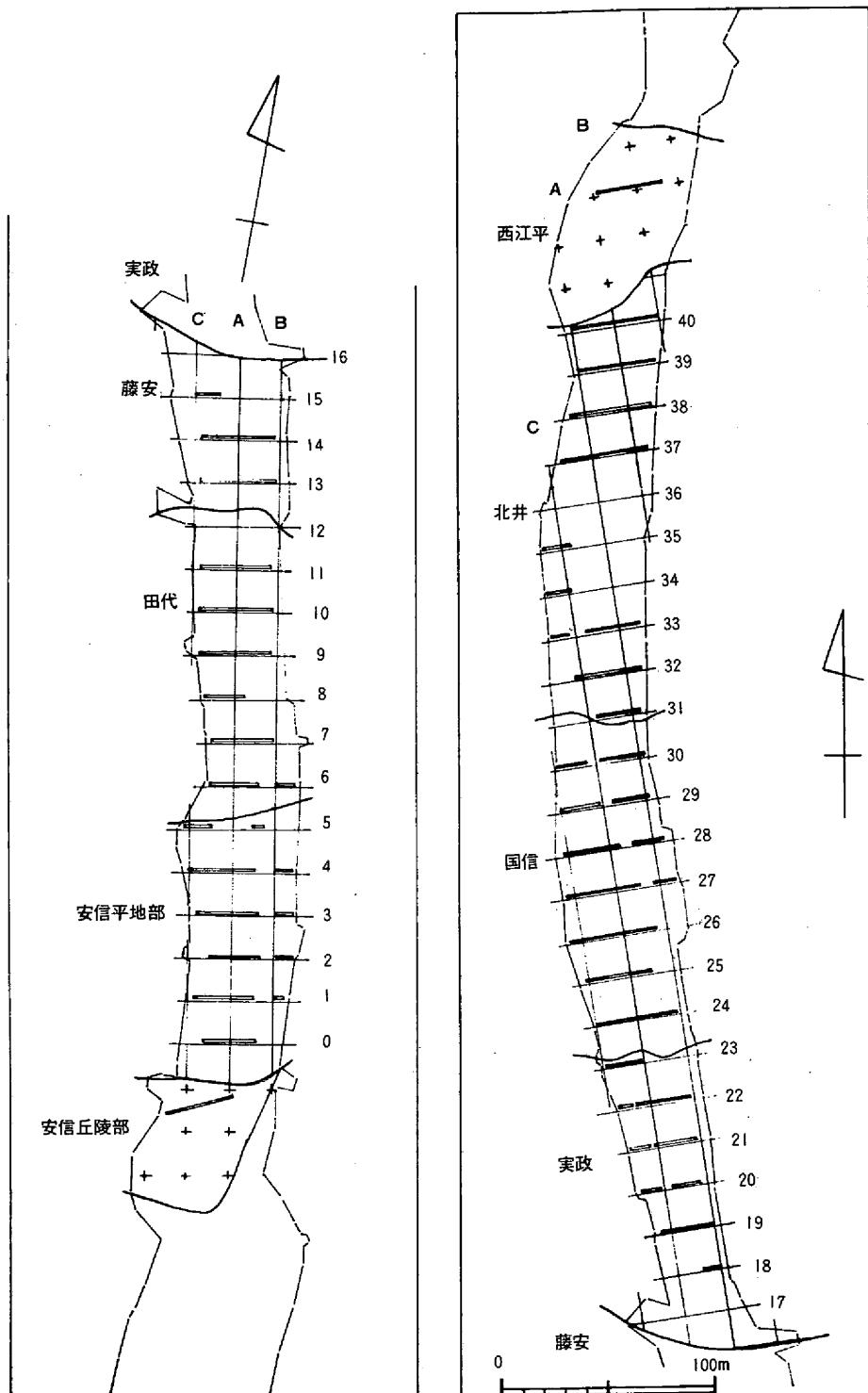
奈良・平安時代の遺構は調査範囲内で確認されていて、比較的遺物も多い。遺物の散布は東西にひろがっている。その後の遺構・遺物も多数検出している。近世・近代の墓地が多く検出されている。



第1図 西江遺跡地形図



西江遺跡(58)



第2図 西江遺跡グリッド配置図

第2節 発掘調査の経過

1. 発掘調査の経過

西江遺跡は全長約1Kmに及び、地形も先に述べた如く丘や谷などによって区分されていることから、小字名と関連づけ、調査区として区分した。字畔田くわだについては字北井きたいの傾斜面下方にあたり、遺構はなく、遺物も少ないとから北井調査区に含めてあつかうこととした。字安信やすのぶについても丘陵部分の中央部を境として、南側は字貝田かいだに含まれているが、弥生の集落、土壙墓群及び古墳等は連続していて区分することができず、一括することとした。丘陵の下方の水田及び畠地については丘陵部と明瞭な区分がみられることから、安信平地部調査区とし、丘陵上を安信丘陵部調査区とした。したがって調査区としては、西江平、北井、国信、実政、藤安、田代、安信平地部、安信丘陵部の各調査区として、調査区ごとに遺構・遺物をまとめた。発掘調査は当初、正岡睦夫、二宮治夫が担当した。1976年1月からは二宮が津山教育事務所へ転任し、田仲満雄が担当することになった。

西江遺跡は当初計画されていなくて、再調査によって、土器片、黒曜石片を若干採集したことから同地形の続く範囲を西江遺跡として確定したものである。発掘調査は1975年4月に着手する予定であったが町当局と充分な意志疎通がはかれず、7月1日から着手することになった。

調査に先だって、全体の位置関係を明確にしておくため、南北に通る軸線を設けて20m角のグリッドを設定した。割り付け図の中へ中国縦貫道のセンター杭を記入した。所々に海拔高の基準も移動した。この作業は岡山調査測量KKに委託して実施した。

調査対象の範囲が広く、しかも地形が山や谷、台地といろいろであることから遺構・遺物のひろがりを調査する必要があった。これを第一次調査として、20mおきに幅3mで路線幅にあわせて約40mのトレチを設定した。地形によっては水田、畠地、地形等によって隨時、適当な場所へ設定した。トレチ調査は実政調査区からはじめ北へ向って実施した。実政調査区の南側は台地状の地形になっていて、弥生中期から奈良時代の遺物を検出した。この調査区では「師楽式土器」と呼ばれる平行タタキめを施した小型の土器片が検出された。今後の調査の1つの問題点とした。国信調査区もほぼ同様である。この調査区では南側と東側に黒色粘土の堆積が厚く、弥生式土器、土師器、須恵器片を含むところがあって谷地形を含めて全面調査の必要が確認された。字畔田はかなりな急傾斜で水田が段段に造成されている。トレチの結果、切り盛りがはげしく、若干の遺物が含まれている以外、遺構は存在せず全面調査から除外することとした。

北井調査区の北側に位置する緩やかな谷地形の部分へ、幅3m、長さ40mのトレチを4本設定したが若干の遺物が検出されたのみであり、全面調査を実施しないこととした。この北側の丘陵が計画時には含まれていなかったが上面が平坦なことから、幅3m、長さ20mのトレチを設定したところ、柱穴が検出されたため、尾根の上面の全面調査が必要であると判断された。

その後、南へかえって、藤安調査区では大部分が斜面になっていることがわかった。田代調査区は

平坦な地形を呈することから、調査前から遺構の密集するところと推定していたが、3本のトレントを設定したところ柱穴などが検出されて台地部分の全面調査が必要であることが確認された。同調査区の南側では谷になっていて、黒色粘土が1.5m～2m堆積していて、遺構・遺物は検出されず、調査対象区域から除外できることがわかった。

安信平地部調査区では中央部の畠地へトレントを設定したところ、地山は多量の角礫を含むが、須恵器片を伴う竪穴式住居址1軒を確認して全面的調査を予定した。この南部分のトレントでは黒色粘土が約2m堆積し、遺構が存在しないため、調査区域から除外することとした。

さらに南に位置する丘陵があり、この一画が溜池の堤防をつくるため、土取りされ、その際「箱式石棺」が出土したという話を地元の人から聞いた。のことと丘陵部の傾斜が若干かわるところがあり、トレント調査を実施した。この結果2カ所に周溝が確認され、少なくとも2基以上の古墳が存在することが判明し、計画時には含まれなかつたが全面調査の対象地とすることとした。以上第一次調査は9月6日までに完了し、全体の調査計画をたてた。

第二次調査は9月7日から計画にもとづいて全面調査を実施した。まず藤安調査区の高い部分の全面調査を実施して鍛冶炉などが検出された。田代調査区は畠地が2段に造成されていて、段の付近では1～1.5mの黒ボクが堆積していることから、表土はブルドーザーによって除去した。その後、ベルトコンベヤーを設置して全面的に表土除去を行った。排土はトレント調査で確認した北と南の谷部分へ積みあげた。ここでは弥生前期から以降の遺物が検出された。量が少ないとあって20mグリッドの範囲の遺物はまとめた。遺構は多数検出され、この調査区の調査完了は11月27日である。11月28日からは安信平地部調査区の調査に着手した。表土はブルドーザーで除去した。地山は大小の石が集積した谷である。結局、竪穴住居址1軒と土壙1基が検出されただけで遺物は少なかった。同調査区は12月11日までに完了して、12月12日からは南の安信丘陵部調査区の調査に着手した。はじめに確認された古墳に十文字の土手を予定して下方へ延長し、幅50cmを残して周辺部の全面調査をはじめた。ここで下方に流れた特殊器台の破片が検出され、上手に近づくにしたがってまとまることがわかり、原位置を保っていることが確認された。ちょうど冬期で30～40cmの雪がたびたびつもり、調査は非常に困難であった。周辺部からは土壙墓群も多数検出された。そのため上方のかなり広い範囲にわたって表土除去を実施した。南側で地山が大きく切られている部分がわかり、下部まで掘り下げるところになっていた。このことからこの平坦面を南へ向かって全面的に広げた。土置き場がなくて、下の道路をとて、さらに下方へ運ぶという困難が伴った。この結果、弥生中期の造成面であることが判明した。また、岩が露出した部分があり、この付近で弥生後期前葉の丹塗り土器がまとまっていて注目された。

冬期で詳細な調査が難しく、まず、表土除去を先行した。2月に入って、古墳の調査に着手する。3号墳では封土中から特殊器台片が一片検出された。地山面上では縄文晩期の土器、弥生前期の土器が若干検出され、柱穴も多数確認された。古墳の調査に入つてから細かい作業のため、作業員の半数で北端の西江平調査区の表土除去を併行してすすめた。3月からは土壙墓群の調査にも着手した。南側へのびた平坦面にも多数の土壙墓が検出された。土壙には供献土器を伴うものもあり、調査が長く

かかった。土壌墓群と特殊器台の調査は5月10日までかかって完了した。全域の調査が終って、25～50cmコンターの地形測量を実施した。この間、北井調査区の表土除去もすすんでいた。5月には西江平の遺構の掘り下げと実測等を完了した。遺構・遺物は少なかったが、弥生前期前葉の土器片が検出されるなど重要な事実が判明した。ひきつづいて北井の遺構掘り下げ、実測を行った。5月中には国信の北半分の調査を完了していた。東側の傾斜面堆積層には遺物が含まれていることから全面的に掘り下げた。ここでは各時期の遺物が混在していた。6月には国信、実政の表土をブルドーザーで除去した。6月後半から7月前半にかけて、国信調査区の南半分の調査を実施した。傾斜面の黒色粘土層が厚くて作業がはかどらなかった。しかし、この谷部分では地山面で縄文晩期の土壌を検出し、師楽式土器が比較的多く検出されるなど色々の事実が明らかになった。高い部分では竪穴住居址とともに建物群があり、下方に流れている奈良時代の須恵器などとの関係が問題となった。

8月後半から実政調査区の調査に着手する。台地が広く、全面調査を実施するため、土置き場がなくていくつかに区分して調査した。北側の黒色土が厚く堆積している部分ではトレンチ調査で確認していた竪穴住居址を平面的に検出した。黒ボクへ切り込み、黒褐色土で埋没していた。南の台地部分では削平されて保存が悪いが、円形、方形の住居址が切り合っているところへ師楽式土器の完形品を含む土壌が切り込んでいるのが確認された。土壌中には須恵器、土師器も含まれていて、それまで多量の師楽式土器を検出したにもかかわらず、遺構に伴わず、苦心していたが、これで周辺遺構との関係等の手がかりを得ることができた。その他、竪穴住居址、建物等が検出された。事務所及び作業小屋等についても撤去し、この下の調査を実施した。実測等が完了したのは1976年10月10日である。通算15ヵ月余の調査期間であった。

整理作業は現場の作業と併行して、遺物の水洗、記号記入、復原などを行ってきた。現地で残った分については岡山へ運んで実施した。現場のプレハブ事務所に宿泊して調査をしたこともあり、夜間に遺物実測などを行い、できるだけ多くの整理をするようにした。10月末には中国縦貫道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の現場作業を完了し、11月からは岡山の文化課分室において整理、報告書の作成作業を実施した。調査の過程で二宮は1976年1月から津山教育事務所へ転任になったため、他の事業のあいだに整理作業と報告書の執筆を行った。田仲は1976年11月から1977年3月まで西江遺跡他の整理、実測、製図作業を作ったが、4月から学校へ転任したため、校務外で報告書の執筆等の作業を行った。正岡は11月から3月まで西江遺跡他の整理、実測、製図作業を行い、4月からはデスク対応となった。したがって、4月から6までの間は専従者をおくことができなかった。

遺物については、全体量が比較的少ないとから、遺構中のものだけでなく、包含層中のものについてはほぼ実測した。図版作成の際若干省いたものもあるが、土器の口縁部及び底部等の状況については全体の比率を含めて、ほぼ比較が可能であると考えられる。ただし、近世以降の遺物については割愛したものが多い。

発掘調査を実施するにあたっては地域住民の御理解と御協力をいただいて完全に実施することができた。作業のためには下神代ばかりでなく、哲西町全域からでていただいた。発掘調査には龍国大学学生森毅氏が1975年7月～8月調査に参加した。また、特殊器台、特殊壺の復原、実測、製図作業

西江遺跡(58)

については1977年4月末から同年6月にかけて、狐塚省蔵氏によって実施した。細片が多く、個体数も多いことから完全に整理を行うことは困難な状況であるが、一応の整理をしていただいた。なお、本書に掲載した特殊器台1～4、及びこれに伴う特殊壺第167図19、20の実測、製図は狐塚氏による。国信調査区の縄文晩期の土器、安信92号土墳墓出土のガラス玉の実測については松本和男氏の実測、製図による。各位に対し、記して感謝の意を表したい。その他の実測、製図、写真撮影、報告文の作成は田仲満雄、正岡陸夫、二宮治夫が分担して行ったものである。

特殊器台に関する各部名称については先に公表された狐塚省蔵「吉備形器台論（上）」『異貌』4号1976年に準拠している。

第2章 発掘調査の概要

第1節 西江平調査区

1. 西江平調査区の概要(第3図、図版2)

西江遺跡の最も北に寄ったところに位置し、西からびる小支丘が西江平調査区である。この支丘の先端部が多数の人物埴輪等を出土した瓢塚である。西江平は北側が急傾斜になっていて谷があり、この北にも細い屋根が東へのびている。北側の尾根は工事中の観察等を通じても遺物の検出がなされなかった。南側はもと牧場になっていた広くて浅い谷で比較的緩やかに傾斜している。工事にかかる幅は約60mであり、その南側では段が形成されている。西側は尾根の上面が広くなり、現在、檜林となっている。調査対象となったところはやや東へ開いた形で、東へ緩やかに傾斜するが上面は平坦である。当初、地表観察ではまったく遺跡は確認されていなかったが、第1次の確認調査の際、トレーナーを入れたところ、柱穴・土壙等が検出されたことから、丘陵部の平坦部分を全面にわたって表土除去した。上面は表土と下に黒ボクを含むところがあり、その厚さは部分によって著しく異っていた。西方の高いところでは約1.5m、平坦面で約40cmであった。表土除去によって平坦面に柱穴群・土壙2、南東に寄ったところで土壙1、東側の傾斜面に大型の竪穴住居址1等が検出された。表土除去の際、若干の遺物が検出されたが、その量はきわめて少ない。竪穴住居址の床面から若干の土器片が検出された他、縄文晩期の土器1片、弥生前期前葉の壺及び甕片、弥生中期後半の壺、甕及び高杯の破片、その他若干の須恵器、土器片がある。他には東傾斜面付近で黒ボク中に集石がみられた。

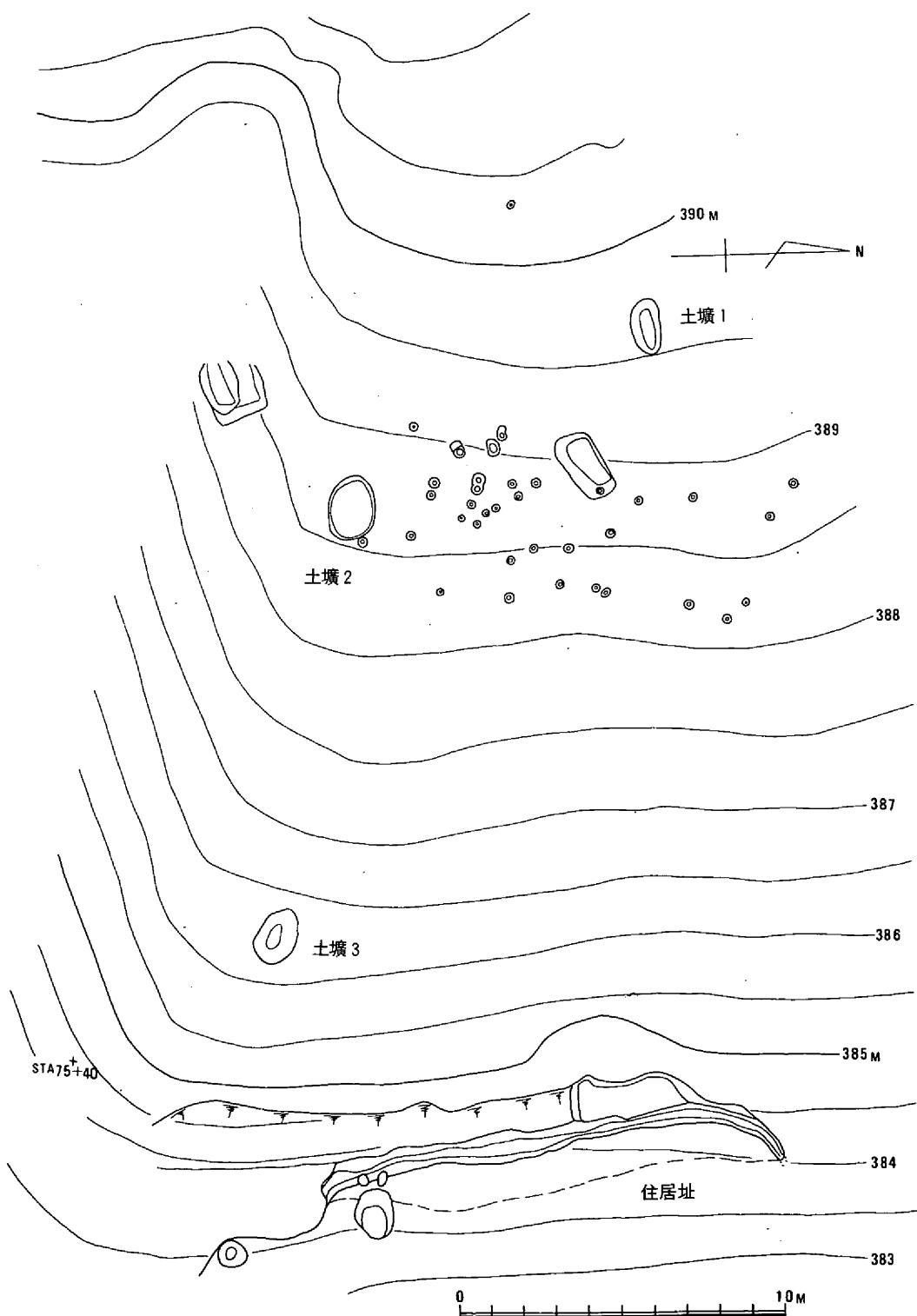
2. 西江平調査区の遺構・遺物

(1) 大型竪穴住居址(第4図)

西江平調査区の東端部の東向き斜面につくられたもので、斜面のため土砂の流失がはげしく、斜面の高位部に掘り込まれた一部が残在していたのみである。残存床面は、南北14.0m・東西1.1mを測り、この床のまわりには幅30~90cm・深さ5~15cmの溝がつくられている。大部分は流失しているため壁の高さは定かでないが、南北14m(東西は流失のため不明)の隅丸方形を呈している。西辺の北端には、方形の突出部(床は同一レベル)が掘り込まれている。この突出部の床面の大きさは南北3.2m・東西1.0mを測り、壁は斜面のより高位部に位置しているためかなり残存しており、その高さは0.3mを測る。

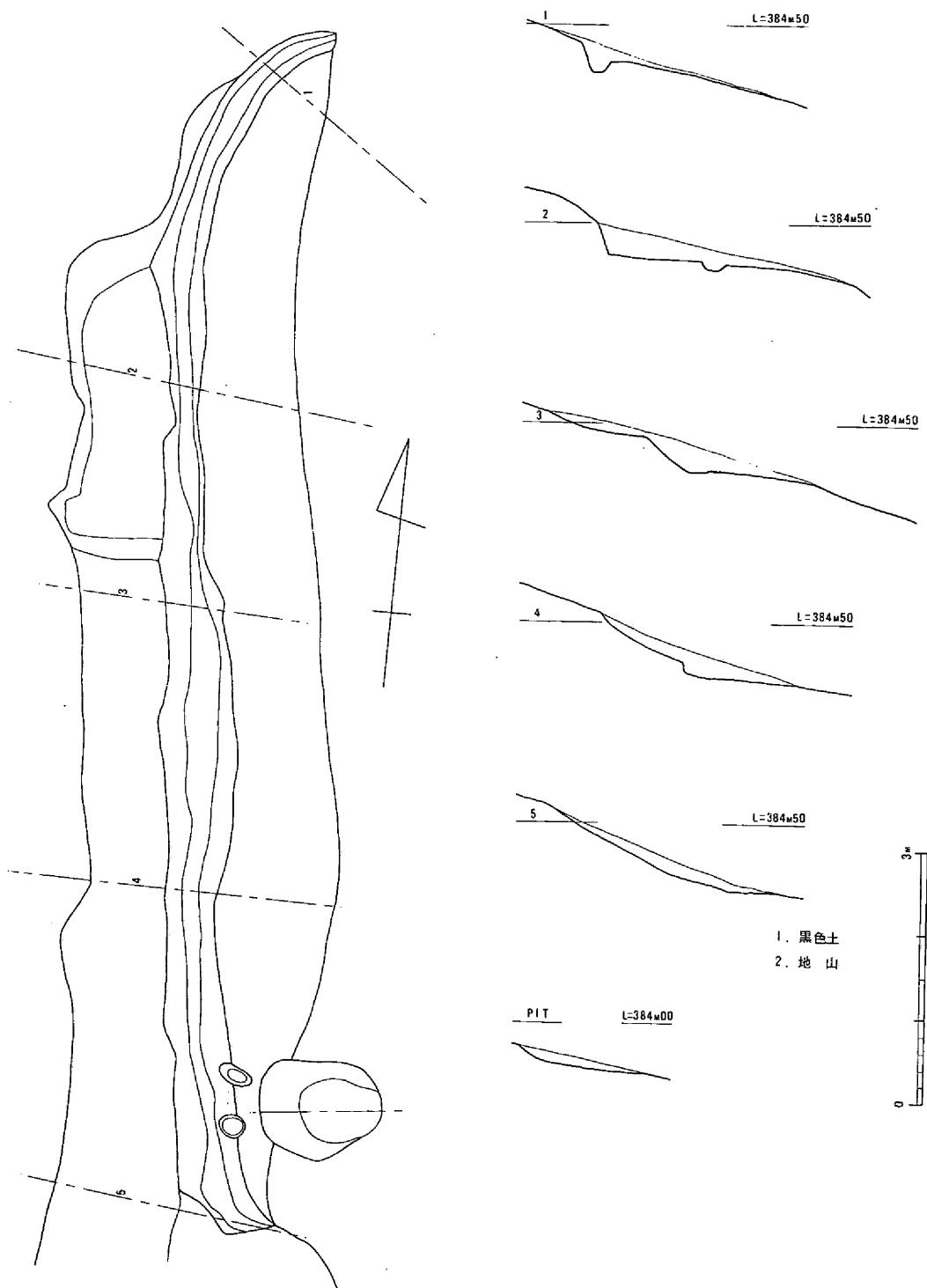
この大型隅丸方形遺構の南端近くには、2つの柱穴と浅い皿状のピット1つが存在する。柱穴は共に壁体溝の肩にあり、径30cm、深さ15cmを測る。浅い皿状ピットは、その一部は斜面のため流失しているが、現存径1.46m・南北1.2mを測る楕円形でその深さは15cmを測る。

西江遺跡(58)

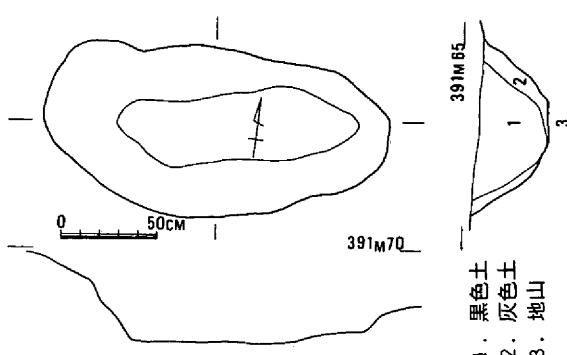


第3図 西江平調査区全体図

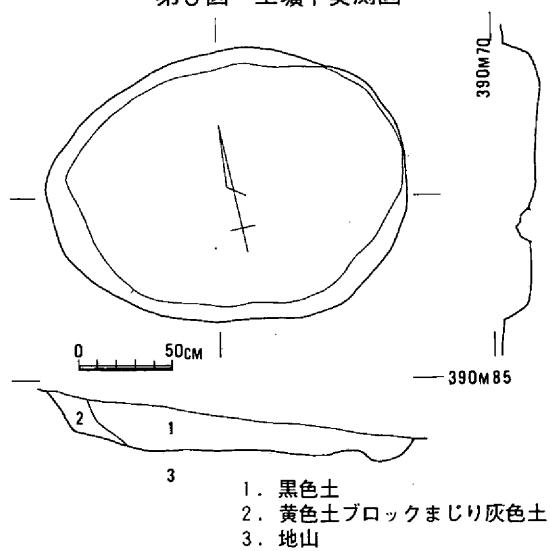
西江遺跡(58)



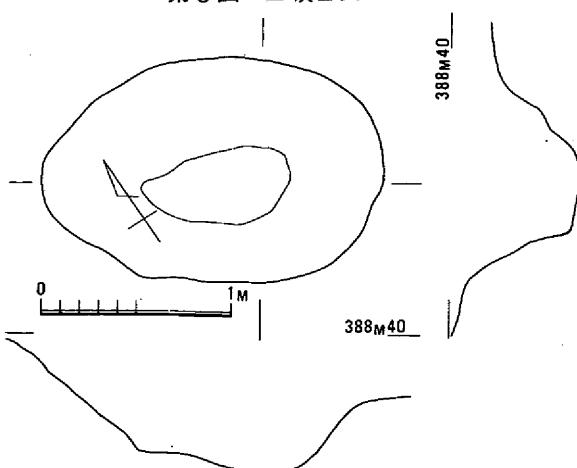
第4図 大型住居址実測図



第5図 土壙1実測図



第6図 土壙2実測図



第7図 土壙3実測図

この大型遺構は、黄色土（地山）に掘り込まれたもので、この上には黒色火山灰土が堆積していた。この遺構に伴う遺物はきわめて少なかった。住居址の床面から若干の土器片が検出されている。ほとんど小破片で図化できたのは12, 13だけである。12は甕の肩部の破片で、内面には指圧痕が残っている。13は甕の底部で外面には縦位のヘラ磨きを施している。12, 13は黄褐色を呈する。この遺構の性格については、流失によって全貌を知ることができないが、住居址と予想される。住居址とすれば、非常に大きなものであったことになる。方形の住居址としては、古墳時代のものではあるが上房郡北房町谷尻遺跡（註3）において1辺11mのものが調査されているが、これをさらに上廻るものである。集落の中におけるこの種の大型住居址の位置づけについて今後問題となろう。集落における共同使用（集会等）される施設であったものと考えられる。

(2) 土 壙 (第5~7図)

丘陵上にはいくつかの凹みがあるが、明瞭に人為的な土壙としてとらえられるものについて概要を述べる。土壙1は北西部に位置し、楕円形を呈している。底部は擂鉢形になっている。断面によると中央部は黒色土、周辺部が灰色土である。地山は黄色粘土である。大きさは長径182cm、短径90cm、深さ51cmを測る。土壙2は中央部南端に位置し、やや丸みをおびた楕円形を呈する。底部は平坦になっていて、現状の深さは浅い。断面によるとほとんど黒色土で埋没し、西方にだ

け黄色粘土ブロックを含む灰色土である。大きさは長径154cm, 短径141cm, 深さ33cmを測る。土壙3は南東部に位置し、橢円形を呈する。底部はやや平坦になるが壁の傾斜はきつい。埋土は黒色土と灰色土である。大きさは長径180cm, 短径120cm, 深さ71cmを測る。

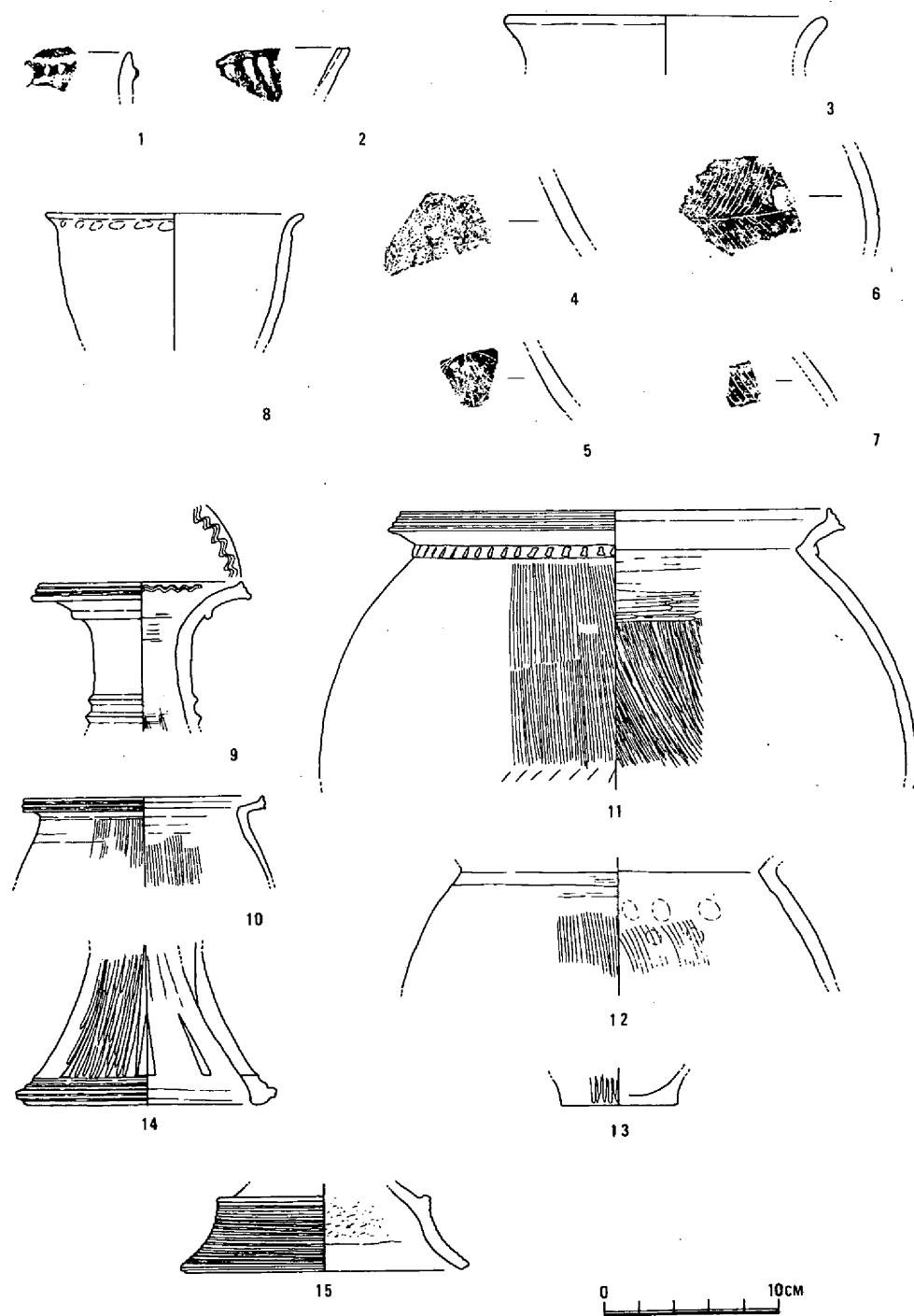
以上の土壙からはいずれも遺物は検出されなかった。土壙の性格についても明らかでない。

(3) その他の遺物 (第8図)

遺構に伴わない遺物には縄文晩期の土器片、弥生前期、同中期、同後期の土器片が若干みられる。1は甕の口縁部で、端部近くにきざみめを施した凸帯を配している。胎土には微砂を含み、色調は内・外・断面とも黄褐色を呈する。時期は縄文晩期に属する。2は年代が明らかでない。口縁部内面に長手の大きなきざみめを施している。上面は水平に切ったような状況になっている。3は壺の口縁部で、外方に緩やかにひろがり、端部は丸くなる。4, 5は壺の肩部で無軸の木葉文を描いている。6, 7も壺の肩部で横位の綾杉文を描いている。いずれもきわめて細い線で沈線の深さも浅い。8は甕で下半部を欠失している。口縁部は指圧痕が残り、やや外反する。胴部は拡張せず、そのまま小さくなり鉢形に近い。外面にはうすいハケメが施されている。3～8は胎土に微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。これらは弥生前期前半に属する。9は壺の上半部で頸部は長い筒状を呈する。口縁部は朝顔形にひろがり、端部は若干肥厚し外面には凹線文を施している。上面には3本線の波状文を施し、口縁部外面の下部には凸帯を1条配している。頸部下には断面三角形の凸帯を2条配している。頸部内面にはしづり目が残っている。胎土には微砂を含み、色調は灰褐色を呈する。10は甕の上半部で、口縁部は外方に折れ曲がり、端部は肥厚して上方に立ち上がる。外面には凹線文を施している。内外面とも縦位のハケメを施している。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。11はやや大型の甕で頸部にきざみめを施した凸帯を配している。外面の調整は縦位のハケメを施し、胴部にヘラ描きの「ノ」字文を配している。内面は頸部直下へ横位のヘラ磨きを施し、その下は縦位のハケメを施している。内外面はうすい黄灰色を呈し、黒斑がみられる。断面は黒色を呈する。14は高杯の脚部で緩やかにひろがり、端部は肥厚して外方へ張り出しがみられる。三角形の透しを配している。外面には縦位のヘラ磨きが施されている。胎土には若干の微砂を含み、色調は灰褐色を呈する。9～14は弥生中期後半に属する。15は鼓形器台の下半部で、脚部外面には太い櫛描きによる擬凹線文を施している。端部はうすくならずやや方形を呈する。内面にはヘラ削りを施している。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。外面には丹塗りが施されている。この鼓形器台は岡山県下では従来発見が報告されていないもので、山陰地方からの移入品の可能性が強い。

3. 小 結

縄文晩期の土器片が1片検出されたが、遺構等との関係はわからない。弥生前期前葉の土器が検出されたが、この時期のものは岡山県北部で発見されたのははじめてである。尾根の平坦部で検出されたものであるが、柱穴群がこれに関係しているかどうかわからない。現存する遺物では壺2、甕1があり、1時期のものである。きわめて短期間だけ居住したものであろう。弥生前期前葉の土器の存在から弥生式文化そのものは岡山県南部と余り変らず、この地域に持ち込まれていたことがわかる。



第8図 繩文・弥生式土器実測図 ($\frac{1}{4}$)

丘陵の平坦面に柱穴群がみられたが、同地区には弥生中期後半の前山Ⅱ式に属する土器が若干まとまっていることから、この時期の住居址が存在したと推測される。弥生中期後半の大型住居址は残りが悪くて判断しがたいが、大型の方形を呈する竪穴住居址で、西方へ小さな張り出しがみられるなど特色がある。

第2節 北井調査区

1. 北井調査区の概要(第9図、図版3)

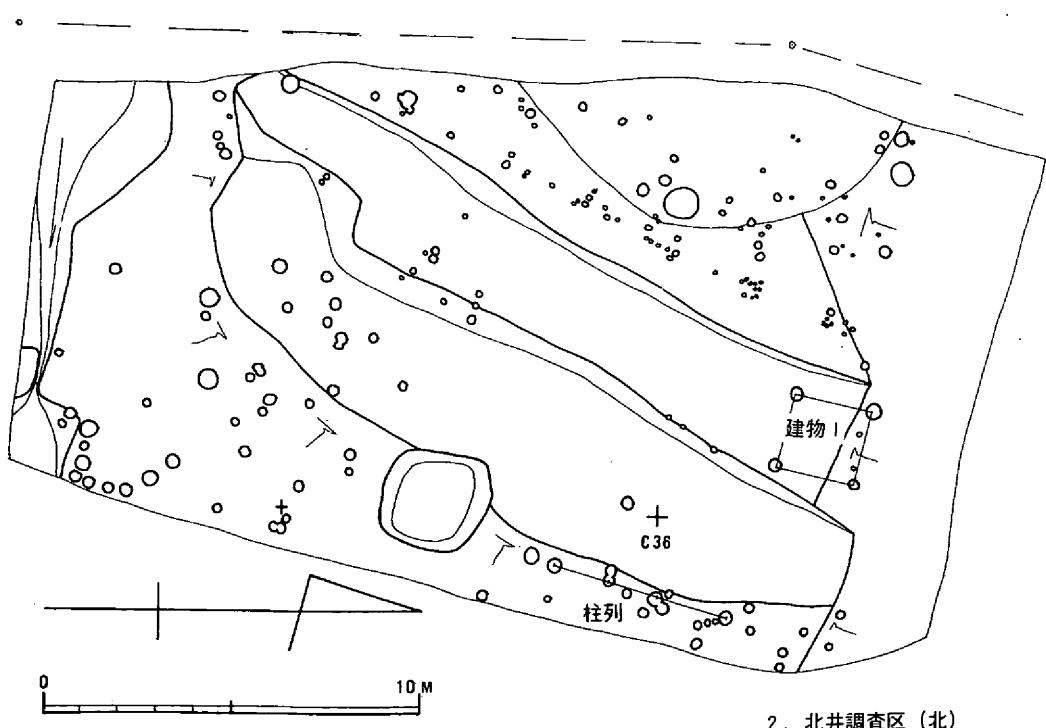
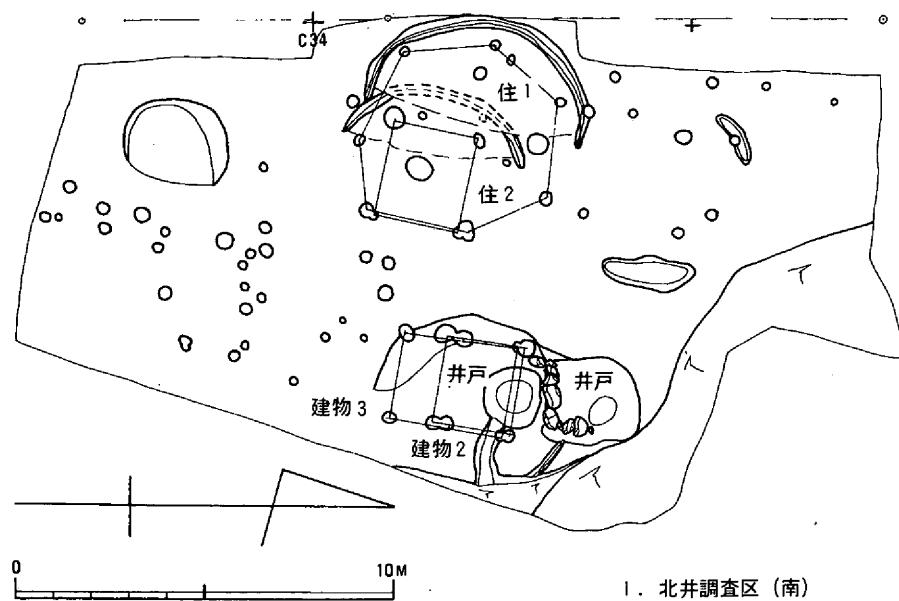
西江平の南にある緩やかな谷地形からこの南に位置する若干高くなった台地状の地形を呈するところが北井調査区である。台地状の東側はかなりな傾斜を呈していて、その斜面の一部が畠田と呼ばれているが、ここでは北井調査区として一括して記述することとした。北側の緩やかな各地形には20mおきに幅2.5m、長さ約40cmのトレンチを3本設定して第1次調査を実施したが遺構が検出されず若干の土器片しか採集されなかったため、全面調査は実施しなかった。台地状を呈するところでは大茅おおがやへ通じる幅2m位の道があり、その西側が畠地、東側が立ちのきをした宅地跡となっていた。畠地部分のトレンチ調査で若干の遺物と柱穴が検出されたことから全面調査を実施した。その結果、畠地にする際に段々がつくられ、高い部分については削平されていた。しかし、東側に寄った部分では1間×1間の建物1棟と柱穴が柵列状に並んでいるものも検出された。また、鍛冶炉のあとも残存していた。北側は谷へ向かって緩やかに傾斜している。南側では路線の中央部に位置する小さな池へ向かって流れ込む谷水の流れがあり、この周辺には砂礫が多く集積し、その中に須恵器、土師器片が比較的多く混っていた。このすぐ南は東へ緩やかに傾斜する小さな平坦地があり、切り合った弥生時代後期後葉の竪穴住居址が2軒、歴史時代の建物、他に新しい時期の井戸、土壙などが検出されている。この東側は傾斜がきつくなっている。水田にするため上方を大きく切っていた。水田には東西方向にいくつかのトレンチを設定したが遺構は検出されず、若干、弥生式土器、須恵器片が造成土の中に含まれていた。

2. 北井調査区の遺構・遺物

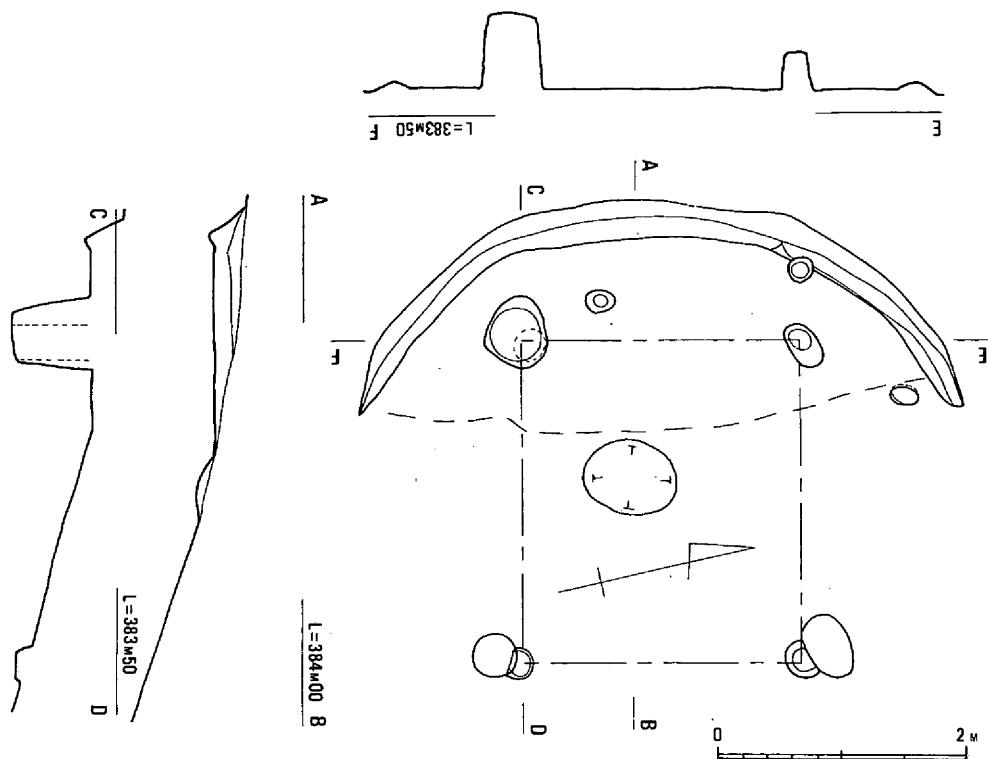
(1) 竪穴住居址

1号住居址(第10図) 1号住居址のある地点は緩かな傾斜をもつ斜面で、耕作土を除去して地山面を出し、この地山面に遺構を検出した。1号住居址は、壁体溝の一部・床面の一部・ピット1・柱穴4が残っていた。この住居址は、残存壁体溝から推定して径5mの円形であったと考えられ、中央ピットをもつ4本柱のものである。住居の壁の高さは、2号住居址の床のために削られ、本来の高さは不明であるが、現存23cmを測る。壁体溝は、円周の約3分の1残存していて、その幅は15cm・深さ7cmを測る。床も東西1.7mのみに平坦面が残っている。柱穴は径30~50cmでその深さは30~60cmを測り、心心距離は南北2.3m・東西2.5mである。中央ピットは径70cmの浅い皿状のもので、ピット内で

西江遺跡(58)



第9図 北井調査区平面図



第10図 1号住居址実測図

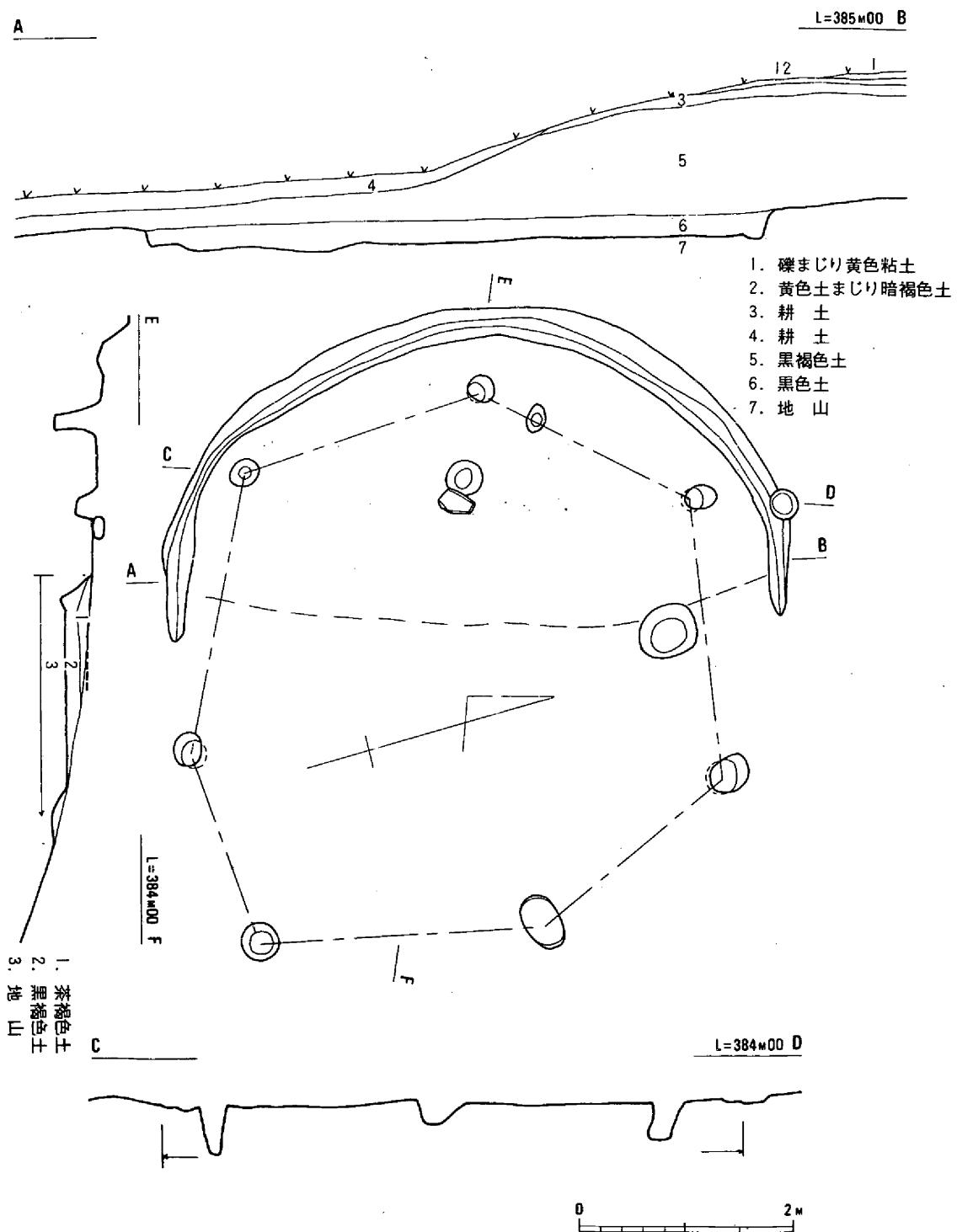
焼けている部分や炭・灰などは検出できなかった。この中央ピットは住居の中央から少し南へ寄った所につくられていた。

1号住居に伴う遺物は皆無であるが、2号住居址の直前に建てられたもので、1号住居の建てられた時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

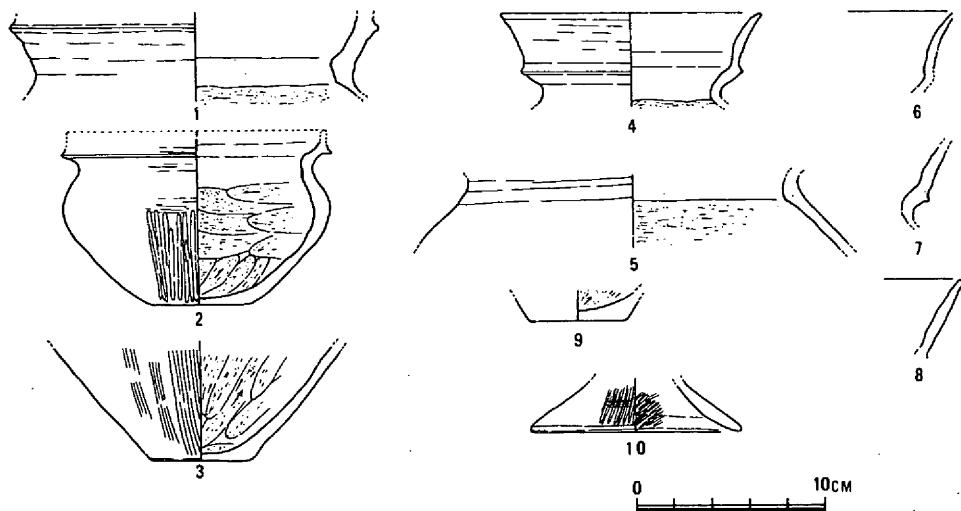
2号住居址（第11図）2号住居址は、1号住居址の建て替えである。この住居址も1号住居址と同様の残存状態であった。残存壁体溝から推定して、長径(東西)7.0m・短径(南北)5.8mの楕円形であったと考えられ、中央ピットはなくて、7本柱のものである。住居址の壁は現存高18cmである。壁体溝は全周の5分の2が残存しているが、その幅は18cm・深さ8cmを測る。床は、1号住居址を埋め、さらに1号住居址の壁を削り取ってつくられている。中央ピットは、本来浅い皿状のものであったかもしれないが、検出はできなかった。

遺物（第12図）住居址の埋土から検出された遺物には土器片がある。1は鉢か壺の口縁部であろう。頸部の器壁は厚く、胴部は内面ヘラ削りが施されて薄い。胎土には微砂を含み、色調では外面は黒色、内面は黄褐色を呈する。2は鉢で、頸部から湾曲して拡張し、端部は肥厚し、上下に拡張する。胴部は肩部が張って、底面は平底である。胴部上半は横位の横なでを施し、下半部は縦位のヘラ磨き

西江遺跡(58)



第11図 2号住居址実測図

第12図 2号住居址出土土器実測図 ($\frac{1}{4}$)

が施されている。内面の上半部は横位のヘラ削りを、下半部は縦位のヘラ削りが施されている。口縁部内面と外面には丹塗りが施されている。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。3は甌の底部であろう。外面には縦位のハケメを施し、内面には縦位のヘラ削りが施されている。外面には媒が付着している。1～3は床面付近で検出されたものである。4は壺の口縁部で頸部から湾曲して拡張し、くびれて上方に立ち上がり、外湾しながら拡張し、端部はうすくなる。内外面とも横なでが行われ、胴部内面は頸部直下から横位のヘラ削りが施されている。胎土には微砂を多く含み、色調は外面が橙色、内面は黄褐色、断面は灰色を呈する。5は壺の胴部であろう。頸部外面は横なでが施され、内面は頸部直下から横位のヘラ削りが施されている。色調は内、外面が黄褐色、断面は黒色を呈する。6は壺の口縁部であろう。7、8は甌か鉢の口縁部であろう。胎土には微砂を含み、内・外面はほぼ灰褐色、断面は灰色を呈する。9は平底の底部で内面にはヘラ削りが施されている。底部にもハケメが施されている。胎土には微砂を含み、色調は外面が黄褐色、内面は灰色を呈する。10は小破片で器形が不明瞭である。高杯の脚として図示したが内外面ともヘラ磨きが施され、疑問が残る。端部は丸くなっている。胎土には微砂を含み、内外面とも灰色を呈する。4～10は埋土中で検出された。1～3は弥生後期後葉に属するもので、4～10は弥生後期後葉～古墳時代前期のものであろう。

(2) 建物

1号建物 (第9図) 北井調査区の北半部分の北端にあり、尾根と谷の傾斜の変換点に建てられているもので、東西1間×南北1間の建物である。心心距離は東西2.0m・南北2.1mを測り、建物はN8°Eと少し東にふっている。柱穴は径25～40cmで、深さ25～50cmを測る。この建物に伴う遺物は皆無であるが、この建物は平安時代ないしはそれ以降のものであろう。

2号建物 (第13図) 北井調査区の南半部分の東端、つまり1、2号住居址のすぐ東に存在する建物で、後述の井戸を埋めた後に建てられ、東西1間×南北1間のものである。心心距離は東西2.4m・

西江遺跡(58)

南北1.85m, 建物の方向はN17°Eであり, 柱穴の径は28~40cm・深さは25~40cmを測る。北西隅の柱穴の底から, 江戸時代中期に属する有田焼の破片が出土している。これからみて, この建物は江戸時代中期もしくはそれ以後に建てられたといえる。

3号建物(第13図) 2号建物と同一面において検出された建物で, 2号建物の建て替えのものであろう。東西1間×南北2間の建物で, 心心距離は東西2.3m, 南北は北から1.65m・1.60m, 建物の方向はN15°E, 柱穴径は30~40cm・深さは25~60cmを測る。東辺および西辺の中柱は, 隅柱に比しその深さがやや浅くなっている。

2号建物と3号建物とは相前後する時期のものであるが, 2号建物を建てた時にはすでに井戸の存在は忘れされていたものであろう。

(3) 井戸(第14図)

井戸は, 2, 3号建物のすぐ北側で検出した。この井戸は, 2, 3号建物よりも古い時期に掘られ, 建物が建てられた時にはすでに埋められていたものである。

井戸1(第14図) 東西2.2m・南北2.6mの隅丸方形の掘り方をもち, 深さ0.63mで, 径1mの円形の井筒が入れてあった。井筒そのものは残存していなかったが, 井筒と掘り方との間には暗褐色土がつめられており, 井筒の内側には礫が無雑作に投げ込まれていて, 井戸が埋められた時にはまだ井筒が残存していたことを示している。

井戸掘り方と井筒との間を埋めた後に, オーバーフローする水を排水するために, 幅15~20cm・深さ5~10cmの溝が東南方向に向けてつけられており, 井戸の東辺と南辺の二方には礫(岩)を並べて他の部分との区切をこしらえている。調査時においても湧水量は豊富で調査の進行に支障をきたすほどであった。

井戸2(第14図) 井戸1のすぐ南に接して掘られていたもので, 東西1.6m・南北1.5mの隅丸方形の掘り方を持ち, 深さは0.8mを測る。井戸1と同様径1.15mの井筒があったと思われる。また, 幅50cm, 深さ10~15cmの排水溝が東にのびている。井戸2では井戸1のような石列は認められなかった。湧水量は井戸1よりもさらに豊富であった。

井戸1・2を埋めた後に2, 3号建物を建てている。2号建物の時期から考えて, 井戸1・2(共に同時期のもの)の掘られた時期は, 江戸時代中期以前といえるが, その上限は遺物がないので決められない。

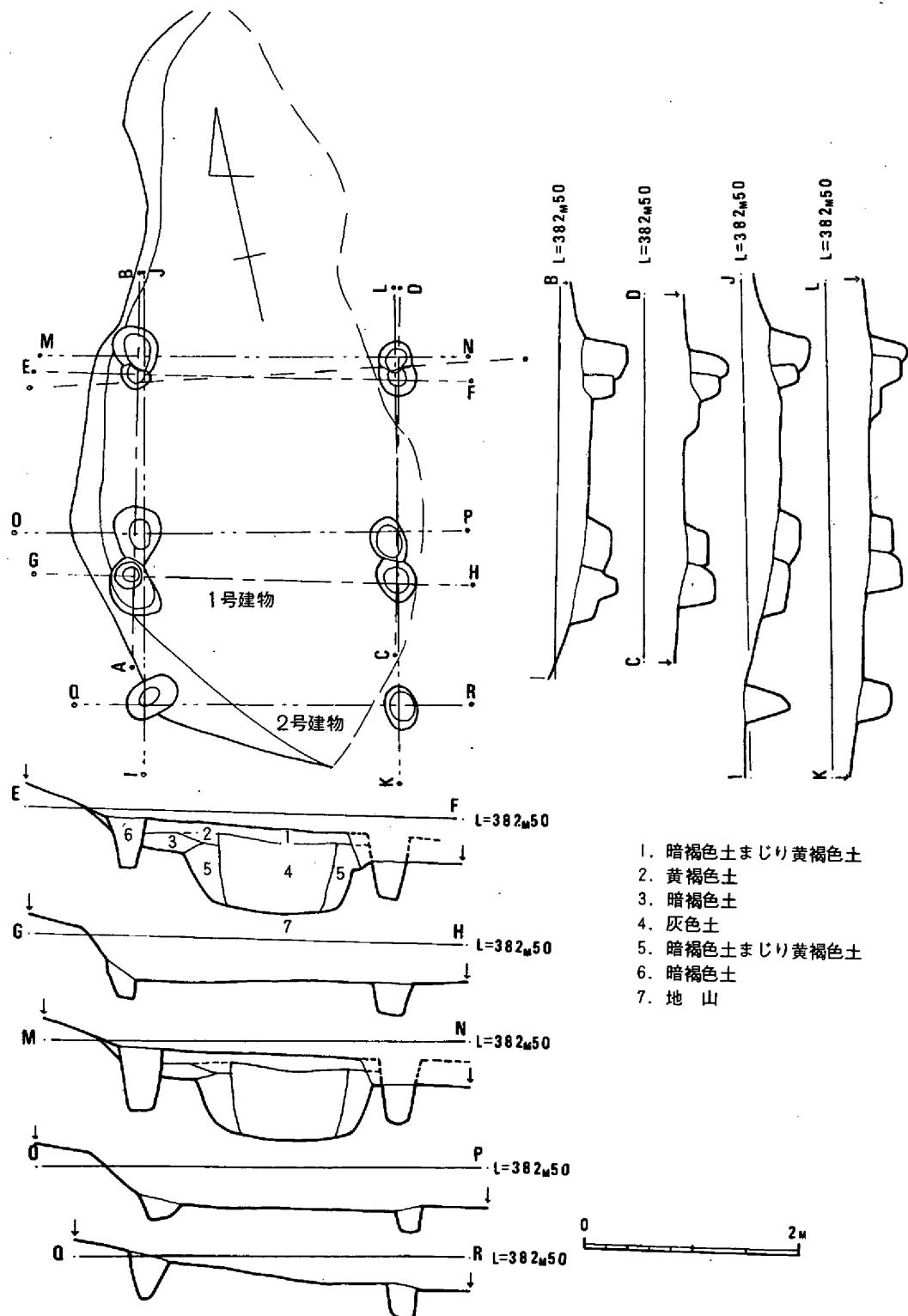
(4) その他の遺構

北井調査区では, 住居址・建物址・井戸跡の他に柱穴列・杭列・鍛冶炉跡・土壙・多数の柱穴が検出された。

柱穴列は, 北半部分の東端にあり, 4本の柱がN14°E方向に並んでいる。その心心距離は, 北から2m, 1.5m・1.6mを測り, 柱穴の径は25cm~30cm・深さは25~35cmを測る。柵か建物の一部と考えられる。

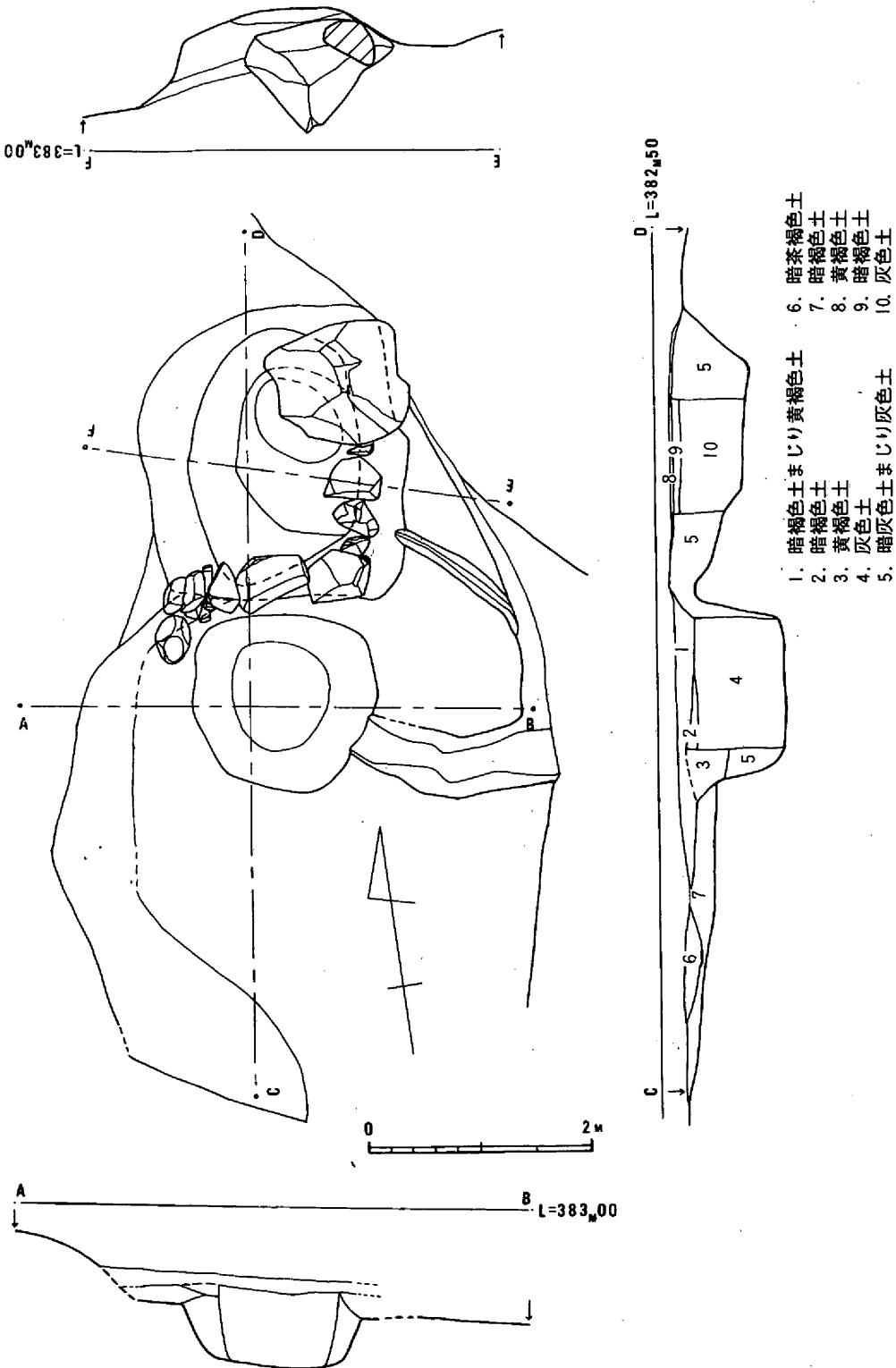
杭列は, 柱列の西にあって, 概略N26°E方向に径5~10cmの杭が打ち込まれたものである。その杭の間隔は2.8m~1.5mと不揃いで, しかも何回も打ちかえられている。柵であったと考えられる。

西江遺跡(58)



第13図 2・3号建物実測図

西江遺跡(58)



第14図 井戸実測図

鍛冶炉は、北半部分の南斜面にかかる所で検出した。炉の底の一部が残存しているのみでその全様を知るすべもないが、熱によって赤変している範囲は東西60cm×南北55cmのほぼ円形に近いもので、その一部は青灰色を呈していて環元炎で焼かれたことが知られる。付近には柱穴が多く存在するが、鍛冶炉の覆い屋になるようなものは確認できなかった。この付近の表土層除去中に親指大から大豆大的鉄鋸が若干出土したが、これらはこの鍛冶炉に伴うものであろう。

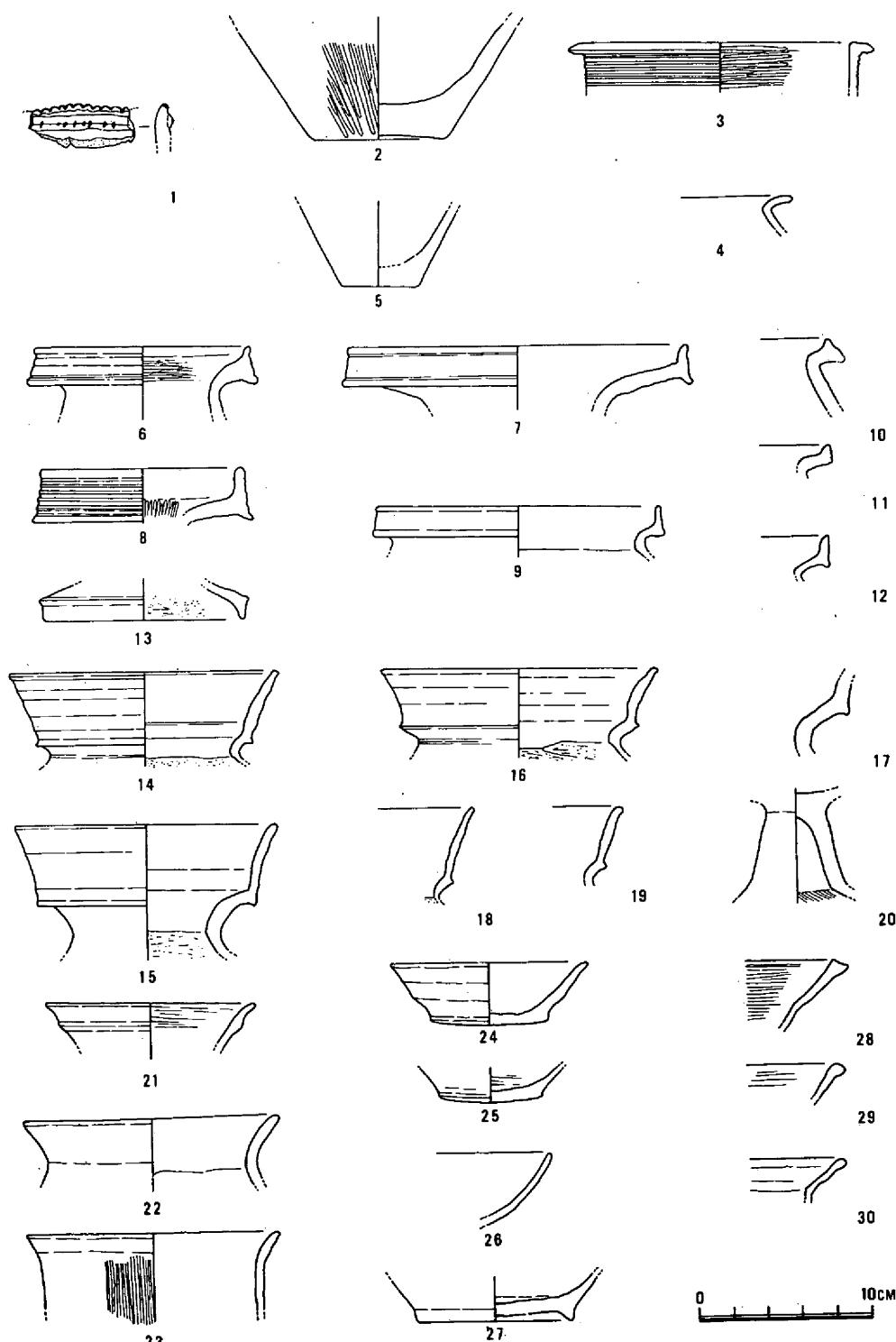
土壙は、北半部分で浅い皿状のもの(1)が、南半部分で浅い皿状のもの(2)・溝状のもの(3・4)が検出された。土壙1は、東西2.5m・南北2.8m・深さ0.15mを測る方形の浅い皿状のものである。土壙2は、東側は土砂の流失によって全形はわからないが、東西2.2m以上・南北2.7m・深さ0.25mを測る隅丸方形の浅い皿状のものである。土壙3・4は共に若干弧を描く溝状のもので、前者は長さ1.5m・幅0.6m・深さ0.15mを測り、後者は長さ2.5m・幅0.8m・深さ0.2mを測る。

土壙のいずれからも遺物は出土せず、時期・性格は共に不明である。

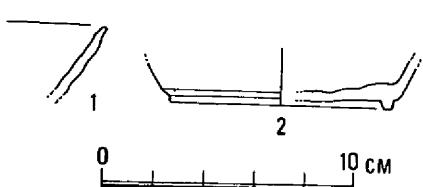
(5) その他の遺物(第15図)

遺構に伴わない遺物には縄文晚期の土器片、弥生前期、同中期、同後期、古墳時代、歴史時代の土器片、須恵器片がみられる。縄文晚期の土器片は1片だけである。甕の口縁部で外面にきざみめを施した凸帯がある。胎土には砂粒を含み、色調は灰褐色を呈する。2は壺の底部で器壁は厚い。外面には縦位のヘラ磨きが施されている。胎土には砂粒を含み、色調は黄褐色を呈する。3は甕の口縁部で、口縁は逆「L」字形を呈し、断面は三角形を呈する。外面には口縁直下へ櫛描き文を施している。内面には横位のヘラ磨きを施している。胎土には砂粒を含み、色調は灰褐色を呈する。4は甕の口縁部で、口縁は上方へ緩く湾曲している。断面は丸みをもっている。口縁の上面から内面にかけてヘラ磨きを施している。胎土は細かく、色調は黄褐色を呈する。5は甕の底部である。表面が剝離していて不明瞭であるが、外面はヘラ磨きを施しているらしい。胎土には微砂を含み、色調は灰褐色を呈する。6、7は壺の口縁部である。6は頸部から湾曲しながら外反し、口縁端部は肥厚して上下に拡張する。外面には凹線文を配する。内面には横位のヘラ磨きを施している。胎土は良質で、口縁部の内外面には丹塗りが施されている。7は頸部から大きくひろがり、端部は上下に拡張する。表面が荒れていて不明だが丹塗りが施していたらしい。胎土には微砂を含み、色調は灰褐色を呈する。8は器台の口縁部と推定される。口縁は上方へ立ち上がり、下方にも若干張り出す。外面には凹線文を施している。内面には縦位のヘラ磨きを施している。内外面に丹塗りを施している。胎土には砂粒・雲母を含んでいる。9は甕の口縁部で、頸部から湾曲しながら拡張し、屈曲して上方に立ち上がる。内面は頸部直下からヘラ削りが施されている。口縁は内外面とも丹塗りが施されている。胎土には微砂を含む。10~12は甕の口縁部で、頸部から屈曲して外反し、端部は肥厚する。色調は淡黄色を呈する。13は高杯の脚部である。緩やかにひろがった裾の端部は肥厚して立ちあがる。内面にはヘラ削りが施されている。外面には丹塗りが施されている。14は甕の口縁部で頸部から短かく外反し、屈曲して斜め上方へ大きく拡張する。端部の断面は方形を呈している。内面は頸部直下から横位のヘラ削りが施されている。胎土には微砂を含み、色調は淡黄色を呈する。15は壺の口縁部で頸部から湾曲しつつ外反し、屈曲して上方へ大きく立ち上がる。口縁端部の断面は丸みをもっている。口縁部外面にのみ丹塗

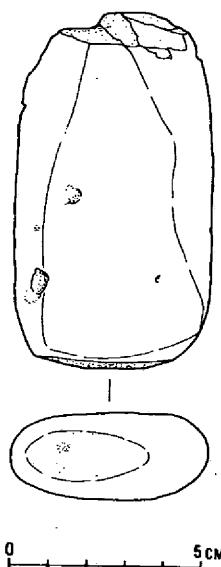
西江遺跡(58)



第15図 繩文・弥生・土師器実測図 ($\frac{1}{4}$)



第16図 須恵器実測図



第17図 石器実測図(1/2)

りが施されている。内面では頸部直下から横位のヘラ削りを施している。胎土には微砂を含み、色調は淡黄色を呈する。16は14とはほぼ同様である。色調は灰褐色を呈する。17~19は甕の口縁部の小破片である。口縁は上方へ大きく拡張している。17, 18は胎土に微砂を含み黄褐色を呈する。19はきめの細かい胎土で色調は黄褐色を呈する。20は高杯の脚部で、やや長い筒状を呈している。きめの細かい胎土で、色調は黄褐色を呈する。21は壺か甕の口縁部であろう。口縁部は一度くびれてさらに拡張する。きめの細かい胎土で、色調は黄褐色を呈する。22, 23は頸部から湾曲しながら外反する。端部の断面は丸くなっている。胴部外面にはハケメが施されている。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。24, 25は底部をヘラ切りした杯で口縁部は斜上方へひろがる。胎土には微砂を含む。24の色調は黄褐色を呈する。25の色調は灰白色を呈する。26は椀形のものの口縁部でやや内湾ぎみに拡張する。内外面とも横位のヘラ磨きを施している。胎土はきめが細かく、色調は外面が黄褐色、内面は黒色を呈する。いわゆる内黒の椀である。27は高台付の底部である。高台は断面三角形を呈する。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。28~30はなべの口縁部である。「く」字状に外反する口縁部の端部は肥厚する。28の焼成は堅緻で、色調は灰白色を呈する。断面は灰色を呈する。29の断面は黒色を呈する。北井として一括しているが、9~13, 15, 17は斜面にあたる「字畔田」出土のものである。

1は縄文晩期、2は弥生前期、3, 4は弥生中期前葉、10は弥生後期前葉、6~9, 11, 12は弥生後期後半、14~21は古式土師器、22, 23は古墳時代後期、24~27は平安後期、28~30は若干新しくなるものであろう。14~19は口縁部が大きく開く形式のもので、岡山県南部にはみられず、山陰で多くみられる形態のものである。県北部では上房郡北房町桃山遺跡(註4)、阿哲郡神郷町新市谷遺跡(註5)他で出土している。県北西部の古式土師器における一組成に含まれているものと推測される。

須恵器の量は少なく、図化できたのは2点である(第16図)。いずれも杯の破片で、1は斜め上方へのびた口縁部、2は断面台形を呈する低い高台の付いた底部である。表面の色調はいずれも暗青灰色を呈し、2の断面では茶褐色を呈する。また、2の外面の底部付近には自然釉がかかっている。時期は奈良時代に属するものであろう。

石器では北側の谷部分からすり石が1点検出された。形は角の丸くなったほぼ長方形を呈している。断面はやや扁平な長楕円形を呈する。表面には凹凸があるが全体を磨いたあとがある。短辺の一方に打痕があって叩石としても使用した可能性がある。反対側はすった痕が残っている。大きさは長径9.5cm、幅5.2cm、厚さ2.4cm、重さ182gを測る。表土層中からの出土であり年代は明らかでない。

3. 小 結

北井調査区は東へ張り出た台地状を呈する部分に遺構があり、北側は緩やかな谷地形、東側はやや急な傾斜地となっている。検出された遺構では、弥生後期後半の円形竪穴住居址が2軒切り合って存し、時期不明の建物、柵列、中世と推測される鍛冶炉、近世の井戸などがある。遺物の量は少ないが、縄文晚期、弥生中期前葉、同後期、古墳時代前期の土器があり、明瞭な遺構が少ないが、弥生時代後期後半、古墳時代前期、中世、近世には小規模ながら集落がいとなまれていたと推測される。奈良・平安時代の遺物は少ないが、西江遺跡では発見例の少ない内黒の椀がある。

第3節 国信調査区

1. 国信調査区の概要(第18~20図、図版6)

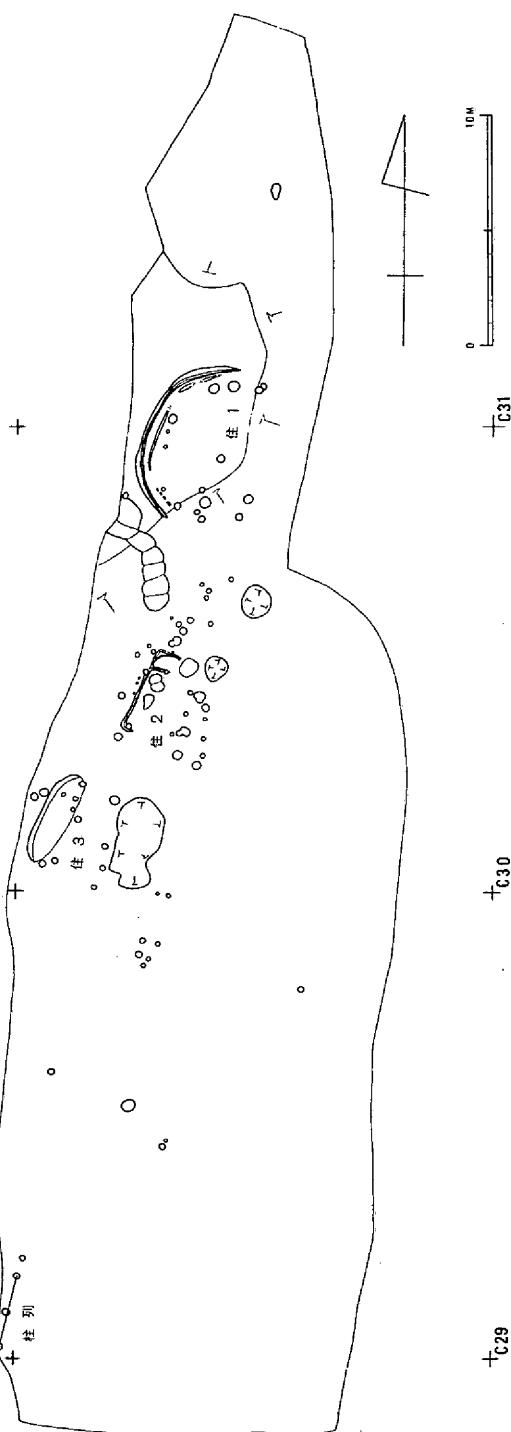
国信調査区は北端と南端にそれぞれ小さな谷川の流れがあって自然地形上の区分がみられる。また、中央部にも1条の小さな谷川がある。したがって、詳細にみれば、国信調査区も北部分と南部分に分かれている。遺構の説明などでは分けて記述する。国信北は東へのびる傾斜がやや緩やかになる部分が西端部にあり、この地形は西側の用地外へも少し続いている。用地内の平坦部分の面積は小さい。東側はやや急な傾斜となっていて黒色粘土の堆積層が厚く、弥生式土器、土師器、須恵器等が混在して検出された。遺構の残存状況はよくないが、弥生時代後期後葉の円形竪穴住居址1軒、時期不明の方形竪穴住居址1軒、柱列、土壙、炉跡などが検出された。国信南は小さな尾根状を呈する張り出しがみられ、この上面及び緩やかな東斜面に遺構が集中している。上面には古墳時代の方形竪穴住居址が7軒検出され、切り合っているものもあり、保存状況はきわめて悪い。この部分に重なって奈良時代と推測される建物2棟及び柵列がある。近世・近代の墓壙も重なり複雑になっている。他にも時期不明の土壙がいくつかみられる。東へ緩やかに下る傾斜面にも時期不明の竪穴住居址2軒が切り合って検出され、建物2棟及び柵列がある。この地域には柱穴が多く、弥生時代、古墳時代のものも多いと推測されるがまとまっていない。南東への傾斜面には黒褐色土層が厚く堆積し、弥生中期から奈良時代にかけての遺物が比較的多い。平安時代の遺物も若干みられる。遺物の中には師楽式土器片も多数含まれていた。実政調査区において土壙中から師楽式土器の完形品などがまとまって出土し、同調査区の包含層中にもっとも多く師楽式土器片が検出されることから、国信調査区の南側傾斜面で出土したものも実政調査区で一括してあつかいたい。

2. 国信調査区の遺構・遺物

(1) 竪穴住居址

1号住居址(第21図) 1号住居址は国信調査区の北端にあり、斜面のため土砂が流失していて住居址の約2分の1が残存している。この住居址は、推定径7.8mの円形のもので、壁の高さは現存25cm

西江遺跡(58)

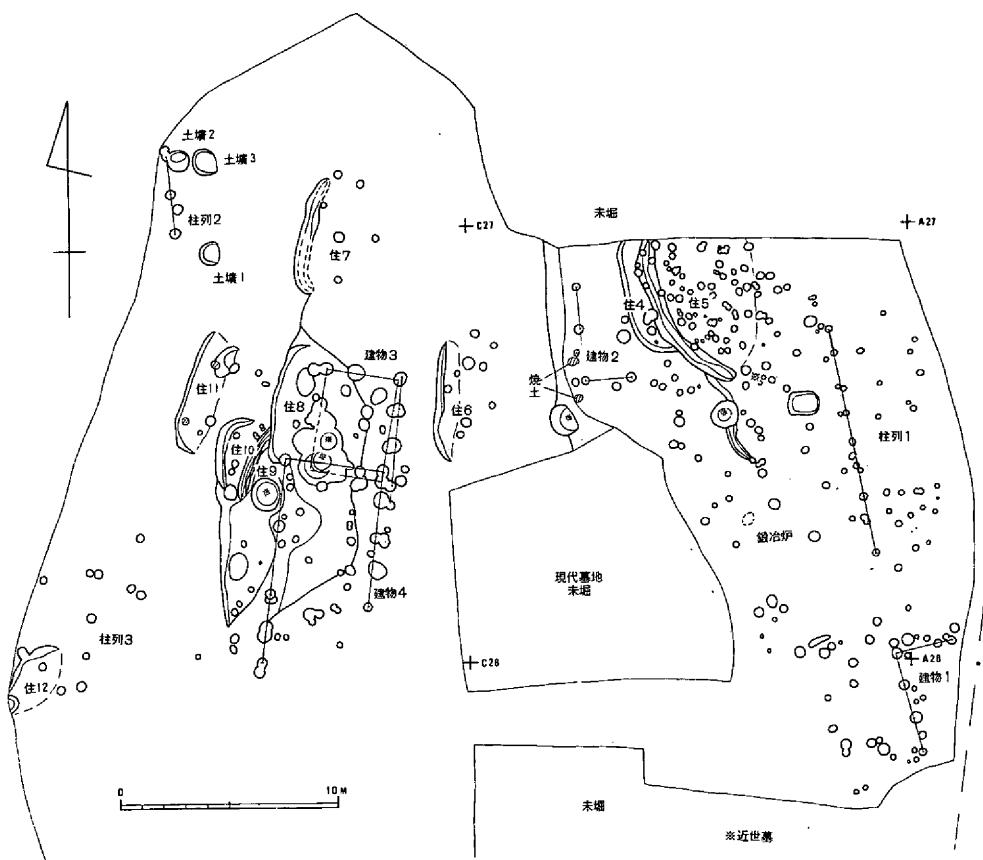


第18図 国信調査区(北) 全体図

を測る。壁体溝は幅15cm、深さ5~7cmを測り、この壁体溝の内側の床面には、別の壁体溝が存在する。内側の壁体溝は、この住居の拡張前の住居に伴うもので、拡張前のものは、径6.6mの円形であったと推定される。床面は、拡張前の床面にそろえており、拡張後は床面全体に黄色土をおいて貼り床としている。この住居内で検出された柱穴は16で、その大きさは、径15~35cmを測る。拡張前の住居址は何本柱であったか定かではないが、拡張後のものは6本柱であった可能性もある。

遺物(第22図)床面付近で検出された遺物には甕、こしき、鼓形器台、砥石、叩石などがある。土器はいずれも破片である(1~5)。甕の口縁部は頸部から外反し、さらに上方へ拡張する。屈曲部で外方へ張り出しのあるもの(1)と張り出さないものがある。口縁端部は横なでがされており、頸部から肩部へかけて、横位のヘラ磨きを施したもの(1)と縦位のヘラ磨きを施したもの(2)がある。胎土には微砂を含む。色調では1は黄褐色を呈し、2は灰褐色を呈する。底部(3, 4)は直径6cm位の平底で、3の底部にはヘラ磨きが施されている。4は焼成後の穿孔があり、こしきとして利用されたものであろう。色調は外面と断面が黄褐色、内面が黒色を呈する。鼓形器台(5)は下半部の破片である。管状部から拡張してくびれ緩やかにひろがる。端部近くで肥厚している。外面には回線文状の施文がみられる。太

西江遺跡(58)

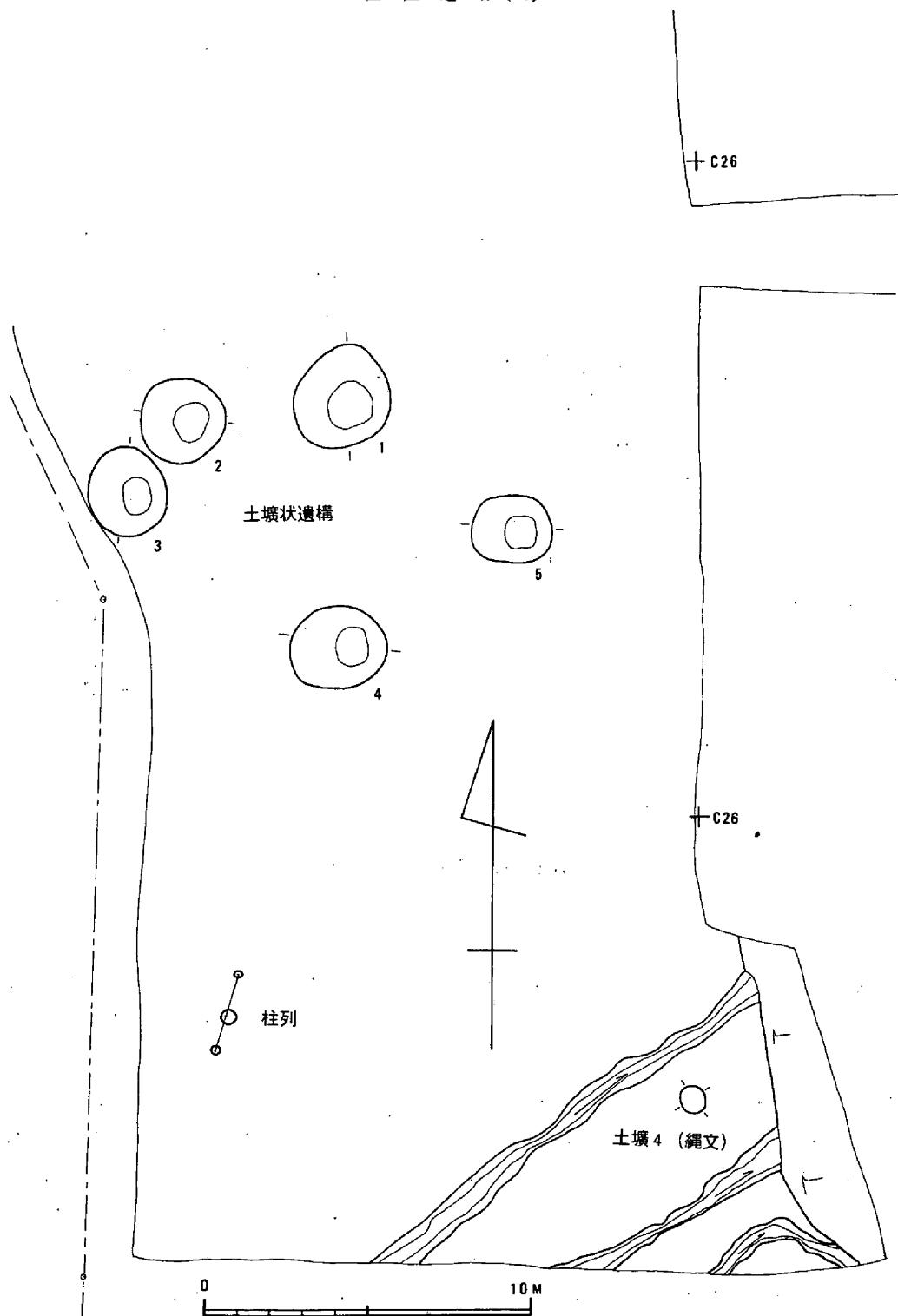


第19図 国信調査区（南）全体図

い櫛状のものを利用し、5本位が同時にひかれている。外面は横位ないし斜位方向のヘラ削りが施されている。端部近くでは横位のヘラ磨きを施している。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。

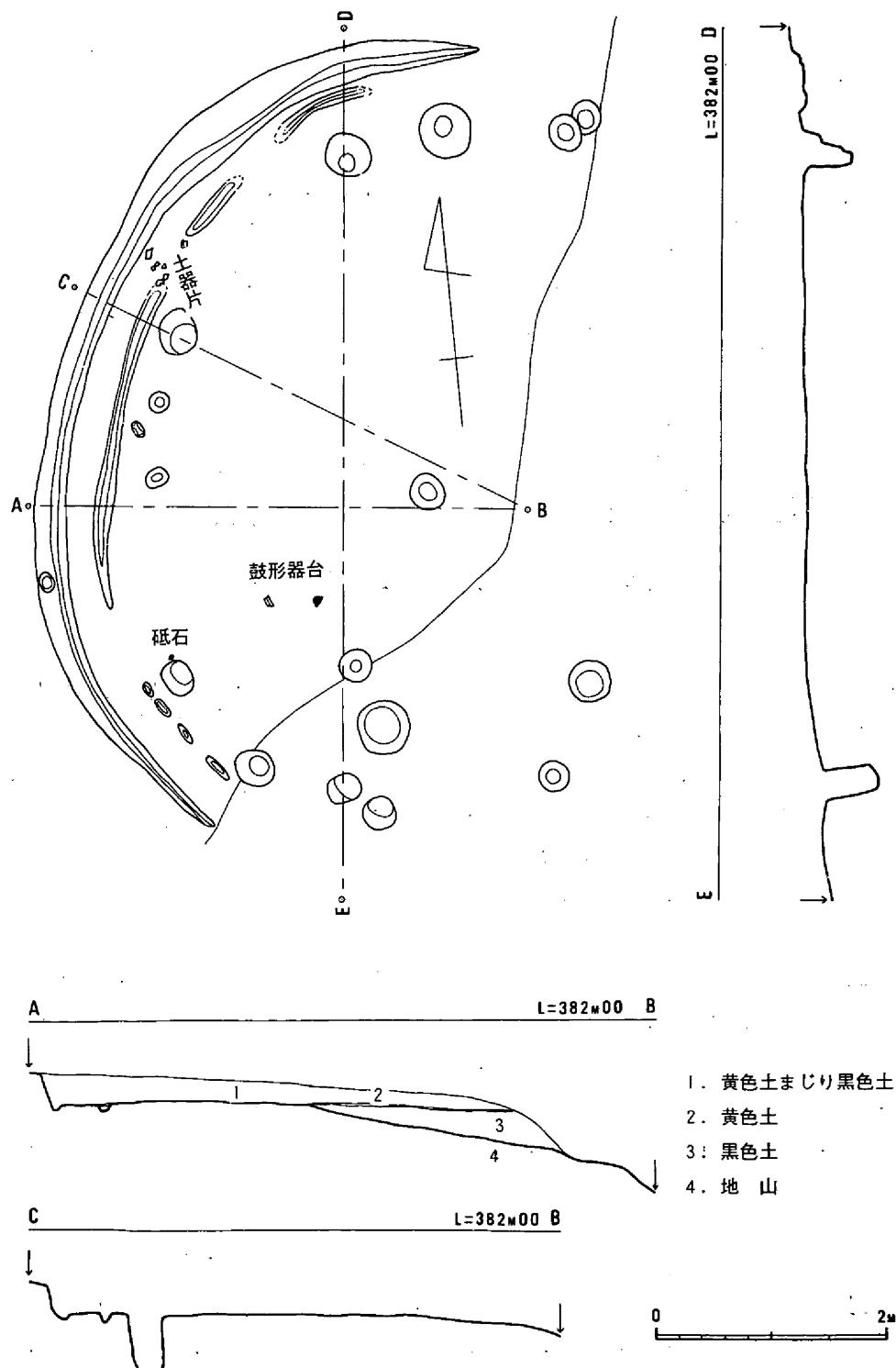
6, 7は口縁端部の小破片である。6は端部が丸くなり、7は端部が角ばる。端部近くの内側がくぼんでいる。6は一般的な胎土で、色調は灰色を呈する。7は丹塗りが施されていて胎土には雲母を含みやや茶褐色を呈する。8は甕の頸部から肩部にかけての小破片である。外面は横なでが施され、内面には横位のヘラ削りが施されている。胎土には微砂を含み、色調は黄灰白色を呈する。9は口縁部を欠失し、底部も折れたあとを磨いたような痕跡がみられ、あるいは脚があった可能性もある。胴部に断面三角形の細かい凸帯が2本あり、その間に4本の波状文を描いている。肩部にはやや斜め方向へヘラ磨きが施され、胴部下半は縦位のハケメを施し、下方にはさらに横位のヘラ磨きを施している。内面は横位のヘラ削りが施されている。外面には丹塗りが施されている。胎土には微砂を含み、

西江遺跡(58)

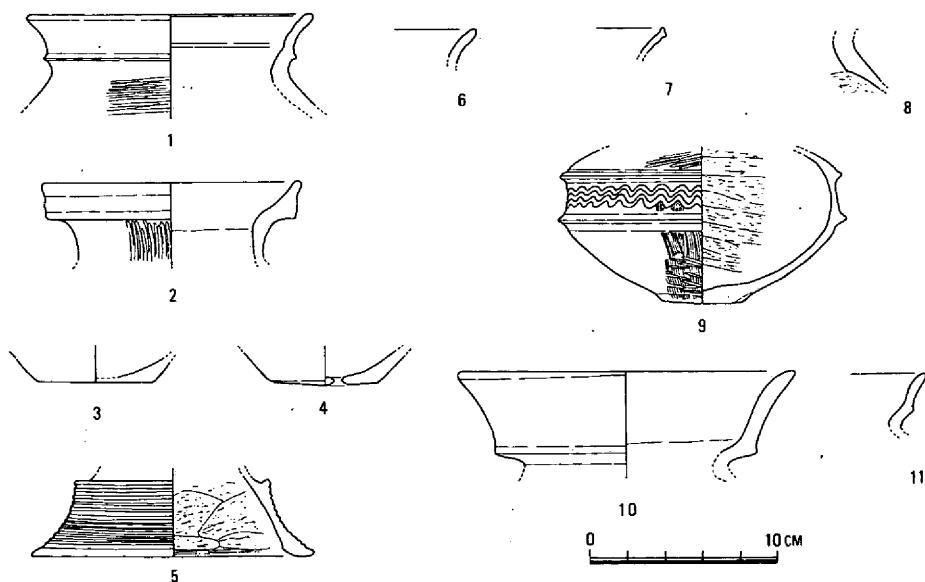


第20図 国信調査区南端部平面部

西江遺跡(58)



第21図 1号住居址実測図

第22図 1号住居址出土土器実測図 ($\frac{1}{3}$)

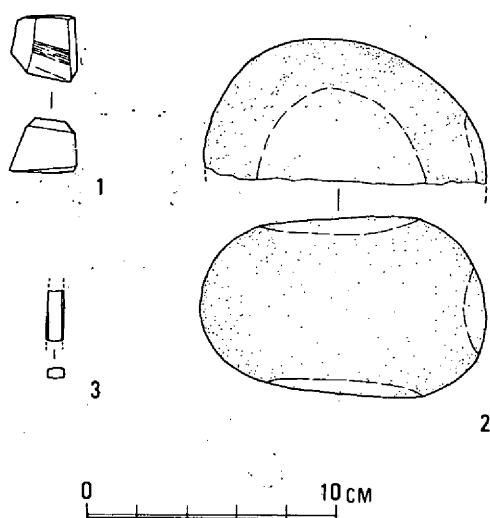
中に直径5mmの礫も含まれている。色調は内面で灰白色を呈し、断面で暗灰色を呈する。10, 11は甕の口縁部で、いずれも頸部から外反し、一度くびれてさらに外上方に大きく湾曲しながら拡張する。胎土には微砂を含み、色調は灰白色を呈する。

石器(第23図)には砥石、すり石がある。砥石はきめの細かい白色の石で、6面とも使用されている。形はいびつで、大きさは長辺2.7cm、短辺2.5cmを測る。すり石は半分に割れている。ほぼ楕円形のもので、上下の面と横の1カ所が使用されている。使用痕は叩いたようなものではなく、すった磨滅痕である。大きさは長径11.3cm、短径7.2cmを測る。鉄片(3)が1個あるが、断面長方形の小破片である。

2号住居址(第24図) 2号住居址は、1号住居址のすぐ南にあって、その一部が残存するのみである。「コ」の字状に溝が存在し、南北の辺の長さ3.8mを測り、東へ向けて0.9m・0.6mの長さを溝が残っている。壁・床は残存しない。北端から南へ0.9m寄ったところに東西辺に平行な溝がつくられており、この深さは8cmを測る。溝は幅8~11cm・深さは0~10cmを測る。この住居址の柱は何本であったか不明であるが、溝の中に径5~8cmの小柱穴がみられる。これは壁体の保持(壁の部分に板をあてそのままにしていた。)に利用されたものであろう。また、北端の溝で区切られた部分はベッド状遺構とも考えられる。

この住居址のつくられた時期は、遺物がまったく伴わないので明確である。

3号住居址(第24図) 3号住居址は、2号住居址の南西にあり、これも住居址の一部のみが残存するものである。壁の現存高は15cm、現存の床の幅は1.1mで、1辺が5m程度の隅丸方形のものであったと推測される。壁体溝は検出できず、もともと壁体溝はつくられなかったものであろう。遺物は皆無で、住居のつくられた時期は不明である。



第23図 1号住居址出土遺物（石器・鉄器）

第23図 1号住居址出土遺物（石器・鉄器）に土盛りのために全体を調査しえなかった。壁は現存しなかったが、壁体溝からみて径10m前後の円形の大型住居であったと推定できる。床面は東西4.4mが残存し、非常に多くの柱穴が認められた。柱穴が多すぎてこの住居に伴う柱穴を選び出すことはできなかったが、床・壁体溝は同じものを利用して数回建てかえられたとも考えられる。時期は4号住居址よりも新しいが、遺物がないのでその時期は決められない。

6号住居址（第26図）6号住居址のすぐ西にあり、その一部分のみが残存するものである。壁の高さは現存30cmを測る。壁体溝は一部のみに掘られており、他の部分は壁の下から直ちに床となっている。壁体溝は幅15cm・深さ10cmを測る。床面は南北5.5m・東西0.8mが残存していて、住居址の全形は隅丸方形のものであったと推定できる。この住居に伴う柱穴は数本みられる。柱穴の径は22~66cm・深さは20~45cmを測る。

住居址の床面では甕の破片と小さな手捏ね土器1点が検出された。甕の口縁は「く」字状に外反し、自然にうすくなり端部は丸い。胴部の肩は張っていない。胴部外面には縦位のハケメを施し、内面にも縦位のハケメを施している。胎土には微砂を含み、色調は淡黄褐色を呈する。手捏ね土器は直径3.2cm、高さ2.5cmと小型のものである。器壁は厚く外面は丸く整形されていない。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。

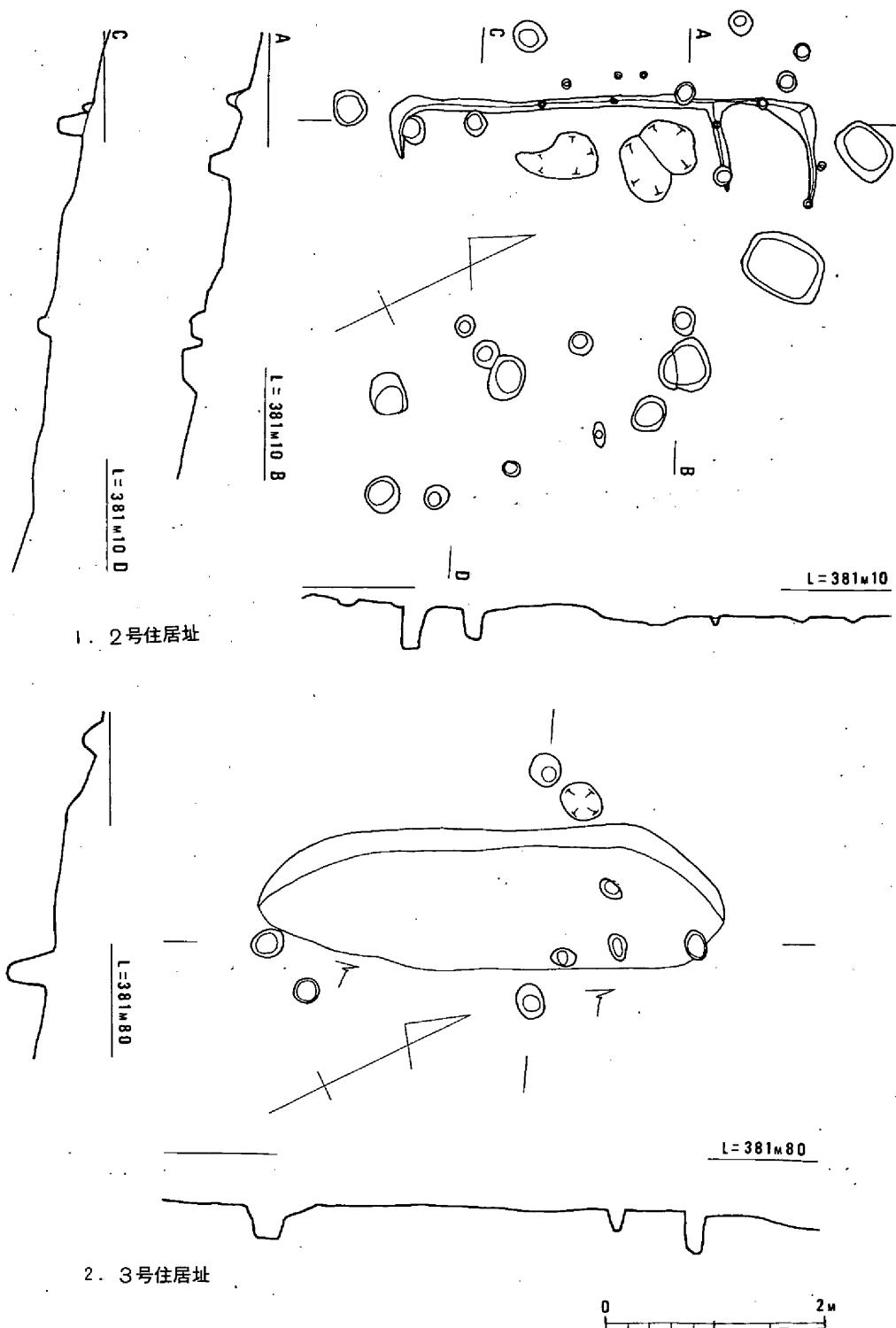
7号住居址（第26図）7号住居址は6号住居址の北西にあり、壁体溝・柱穴の一部を残すのみである。一辺5.5cmの隅丸方形のものであったと推定でき、壁体溝の幅は30cmとやや幅が広い。壁の高さは現存8cmである。この住居に伴う遺物は皆無で、つくられた時期は不明である。

8号住居址（第28図）8号住居址は、6号住居址の西、7号住居址の南にある。この住居址は1辺5.7mの隅丸方形であったと推定できるが、壁体溝はつくられていません。床面は2棟の建物の柱穴・近世墓によって荒されており、この住居址に直接伴う柱穴は確認できなかった。7号住居址などと同

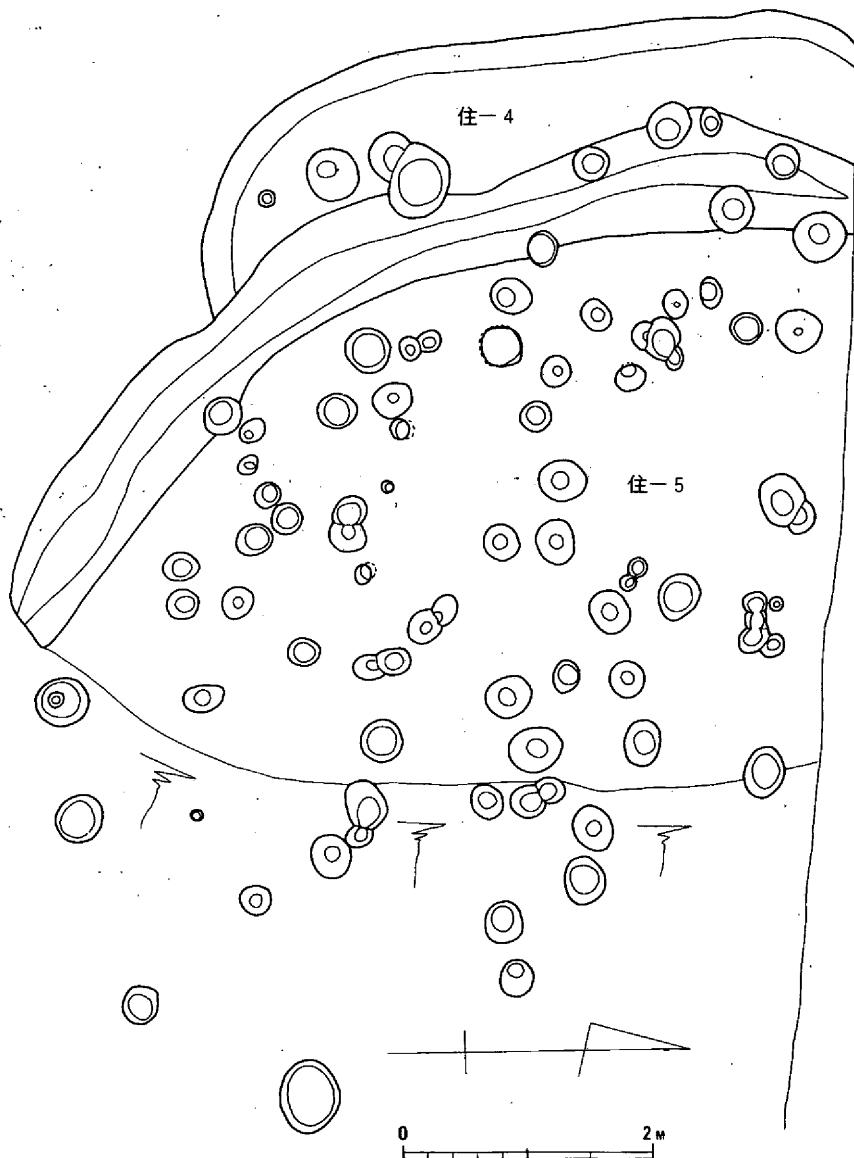
4号住居址（第25図）国信調査区南半のうちの北東端にある住居址で、国信調査区の除去した土砂を高く積みあげてしまったために一部を未発掘のまま終らざるを得なかつたものである。南北5.5mの隅丸方形の住居址であったが、同じ場所につくられた5号住居址によってその大部分は削り取られてしまつて、東西の長さは不明である。残存する床の東西幅は1mで、この住居址に伴う柱穴は不明である。壁体溝はつくられていなかつた。伴う遺物がないのでつくられた時期は不明である。

5号住居址（第25図）4号住居址をこわしてつくられている住居で、4号住居址と同様

西江遺跡(58)



第24図 2・3号住居址実測図



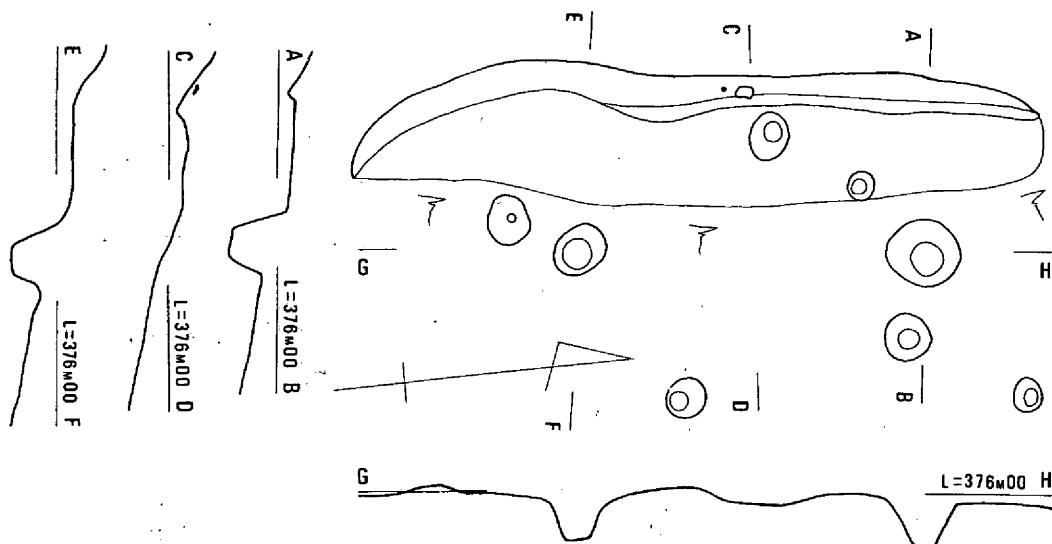
第25図 4・5号住居址実測図

様に時期を決める材料を持たない。

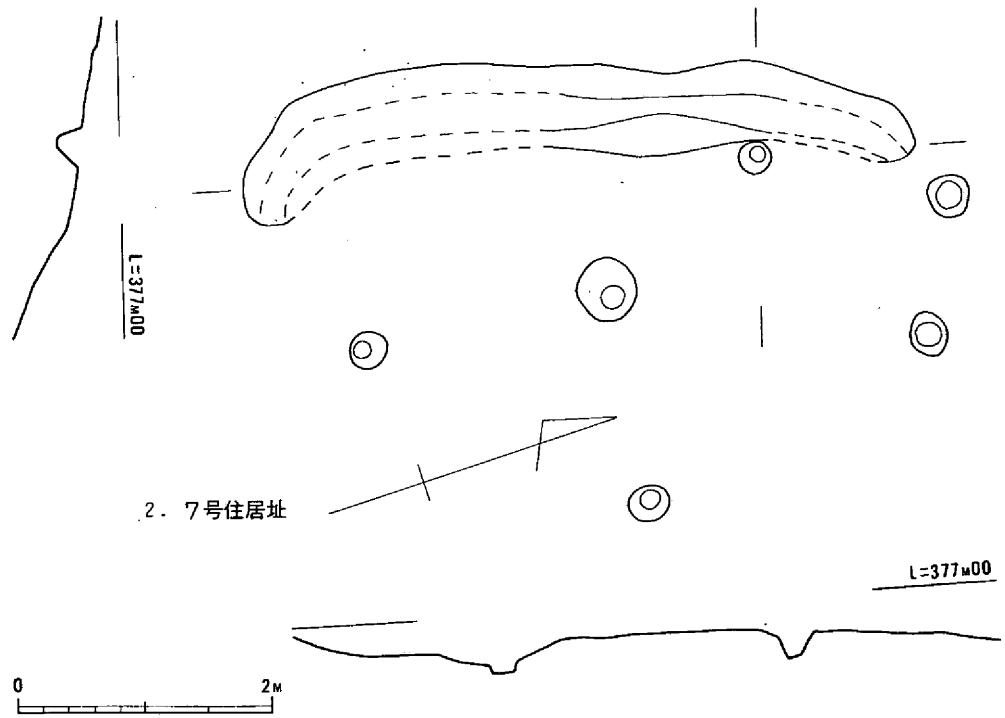
9号住居址・10号住居址 (第28図) 9号住居址は、8号住居址の南西に接しており、壁体溝および一部が帶状に残るだけの住居址である。壁体溝の幅は40cm・深さ10cmを測り、床面の残存幅は10cmである。伴う遺物は皆無である。

10号住居址は、9号住居址のすぐ西にあるが、壁体溝の一部が残るのみである。壁体溝から考えて一辺4.5m前後の隅丸方形の住居址であつただろう。

西江遺跡(58)



1. 6号住居址



2. 7号住居址

第26図 6・7号住居址実測図

11号住居址 (第28図) 8号・10号住居址の西にあって、他の住居址と同様一部のみ残存するものである。推定1辺5.7mの隅丸方形のもので、壁の高さは現存15cmで、壁体溝はつくられていない。床面は幅1.4mが残存している。床面には一部焼土がみられ、ほぼ全面に炭化物が散布していてこの住居址が火災をうけて放棄されたものであることがわかる。時期は不明である。

12号住居址 (第29図) 8号住居址の南西にあり、その一部は用地外に存在するために一部は未調査のまま残っている。壁の高さは現存25cmで、壁体溝はつくられていない。全形は定かではないが隅丸方形のものであったと思われる。残存床面の幅は1.5mである。大部分の住居址と同様に遺物がまったく出土していないので、つくられた時期は不明である。

(2) 建物および柵列

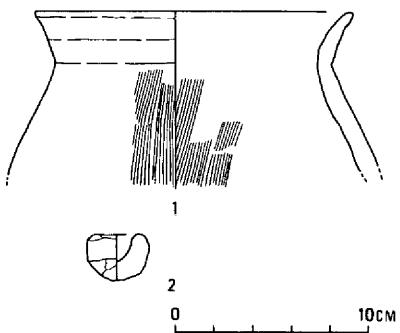
1号建物 (第31図) 国信調査区の前半のうち東端に位置しており、一部は用地外にあるため未調査のまま残した。東西1間以上×南北3間以上の建物である。心心距離は、東西が2.5m、南北は北から1.5m・1.6m・1.5mであり、柱穴の径は33~43cm・深さは15~50cmを測り、南北の柱の方向はN14°Wである。この建物の南北の柱の線を北へ延長した所に柱列1がある。柱列1は、9本の柱からなる柵であって、この建物1と関連のあるものであろう。

2号建物 (第30図) 1号住居址のすぐ西にあって、東西1間以上×南北2間以上の建物であるが、この建物に伴う柱穴は4個のみが確認できた。心心距離は、東西が2.1m、南北が南から2.35m・1.95mを測る。この建物の柱穴の径は25~35cm・深さは13~30cmで、柱穴の一部は1・2号住居址と重なっていて検出はできなかった。南北方向の柱列は、N5°Wの方向に並んでいる。

3号建物 (第32図) 8号住居址と重なっている建物で、東西2間×南北3間のものである。南西隅には近世墓がつくられており、その部分の柱穴は消滅している。心心距離は東西が1.7m・1.7m、南北が1.5m・1.5m・1.5mで、柱穴の径は50~70cm・深さは30~60cmを測る。南北の柱列は、N14°Eの方向に並んでおり、建物1と同一方向である。建物1との同時性を物語るものであろう。この建物は、ほとんど同規模のものを同位置に建て替えている。ただ、南北方向の柱列の方向がN7°Eと前のものに比し少しずれている。

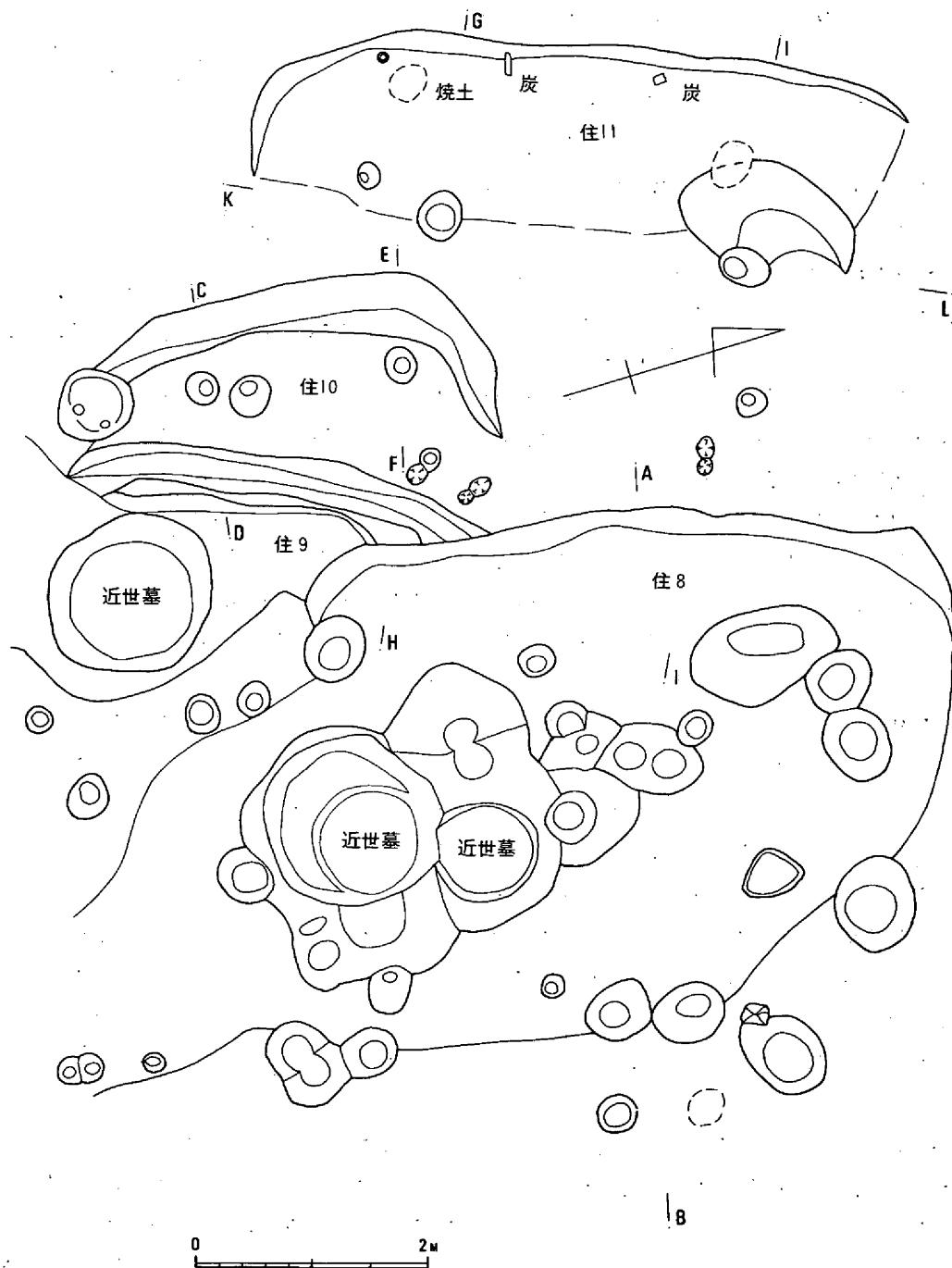
4号建物 (第33図) 3号建物のすぐ南にあって、東西1間(中柱部分に近世墓があつて中柱の存在については不明、東西2間の可能性もある)×南北3間の建物である。斜面のため土砂が流れて南東隅の柱穴は残存しない。心心距離は、東西1間とすれば4.36m(東西2間ならば2.18mずつ)、南北は北から3.1m・3.2m・3.1mを測る。柱穴の径は32~45cm・深さは10~65cmを測る。南北の柱列はN8°Eの方向に並んでいて、3号建物の建て替え後のものとほぼ同じ方向に建てられているもので、この2つの建物の同時性を意味しているといえよう。

柱列1 (第34図) 建物の北西隅から4.6m離れた所から10.5mの間に9個の柱穴がN16°Eの方向に



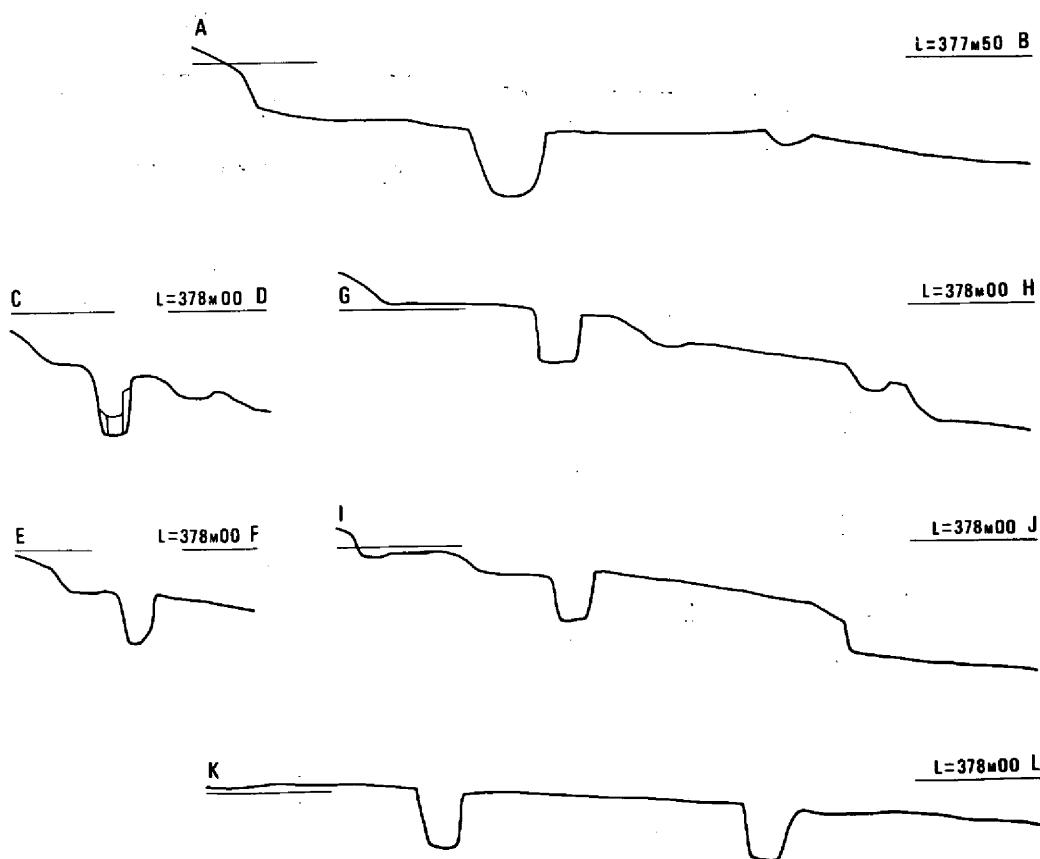
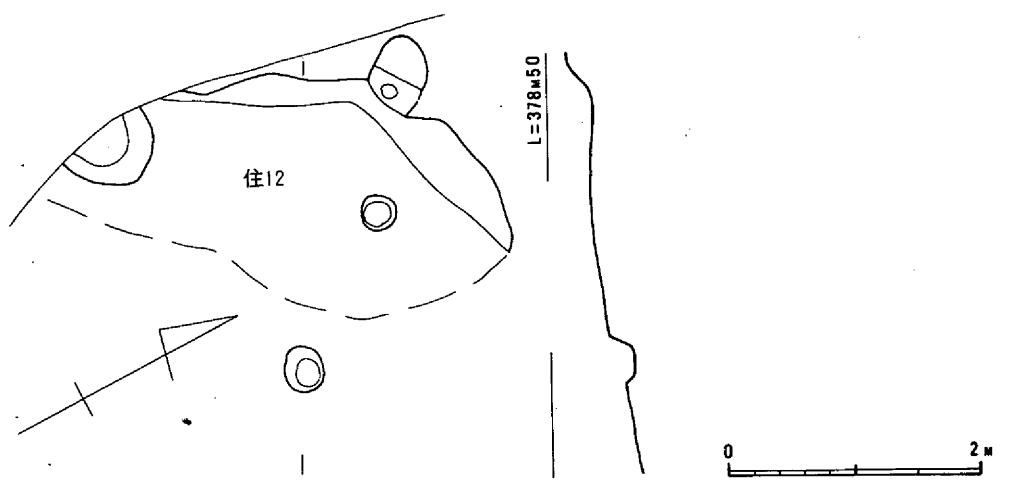
第27図 6号住居址出土土器実測図

西江遺跡(58)



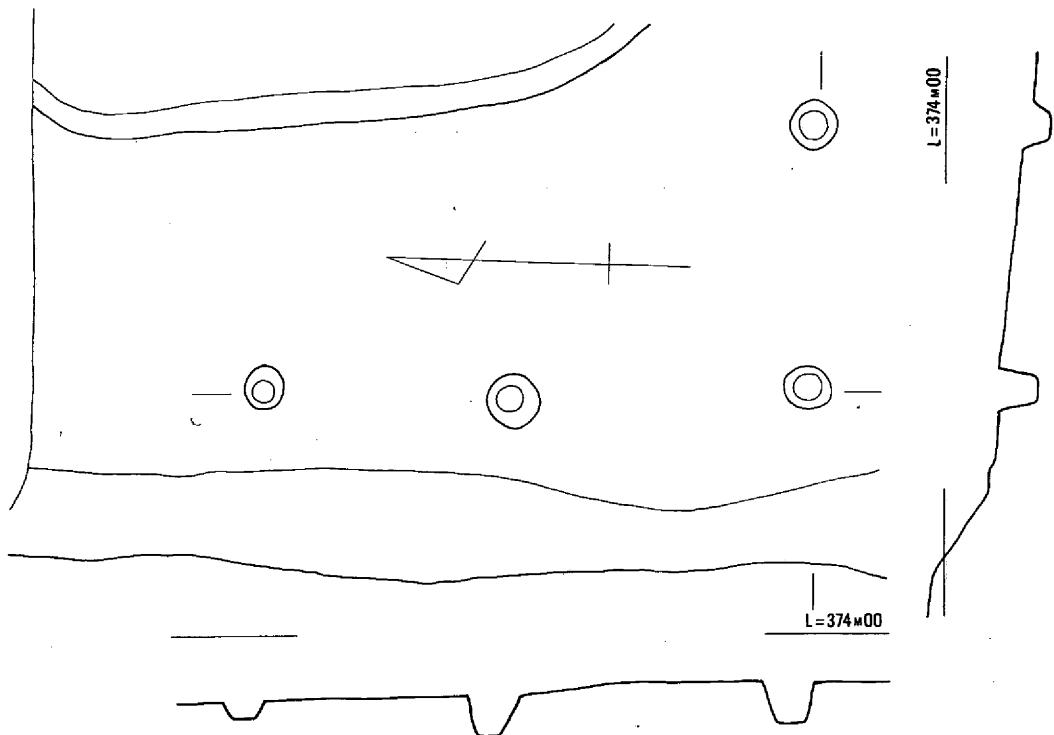
第28図 8~11号住居址・墓壙実測図

西江遺跡(58)

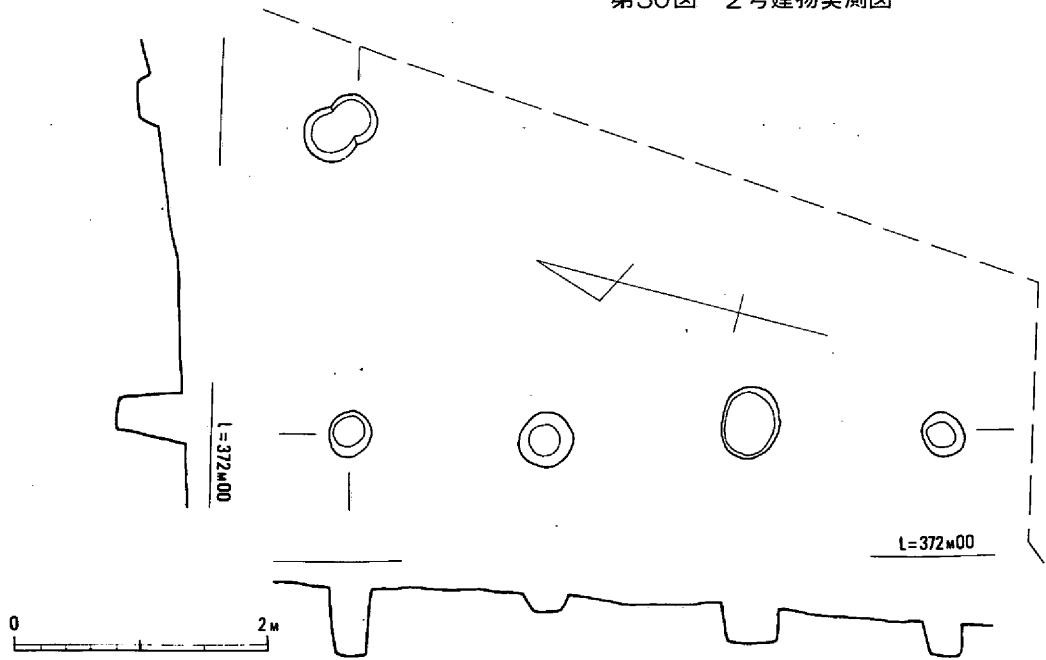


第29図 住居址実測図

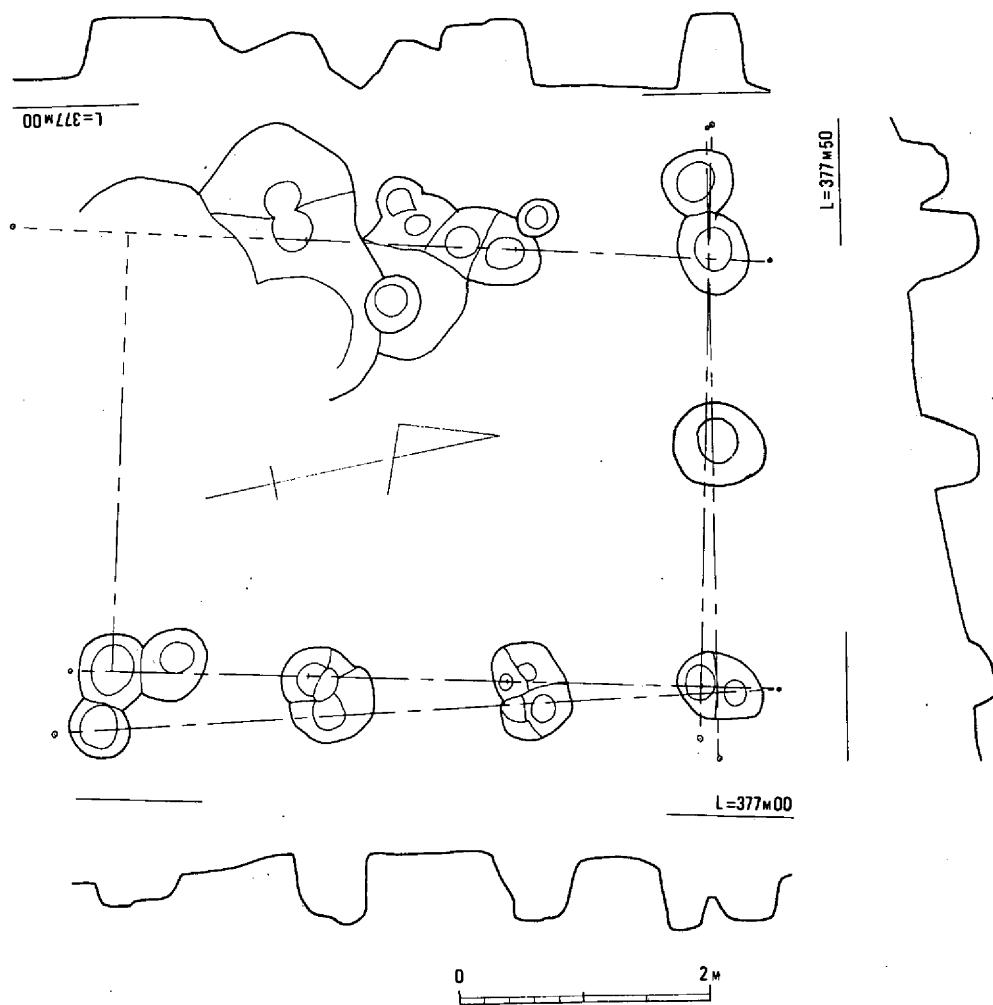
西江遺跡(58)



第30図 2号建物実測図



第31図 1号建物実測図

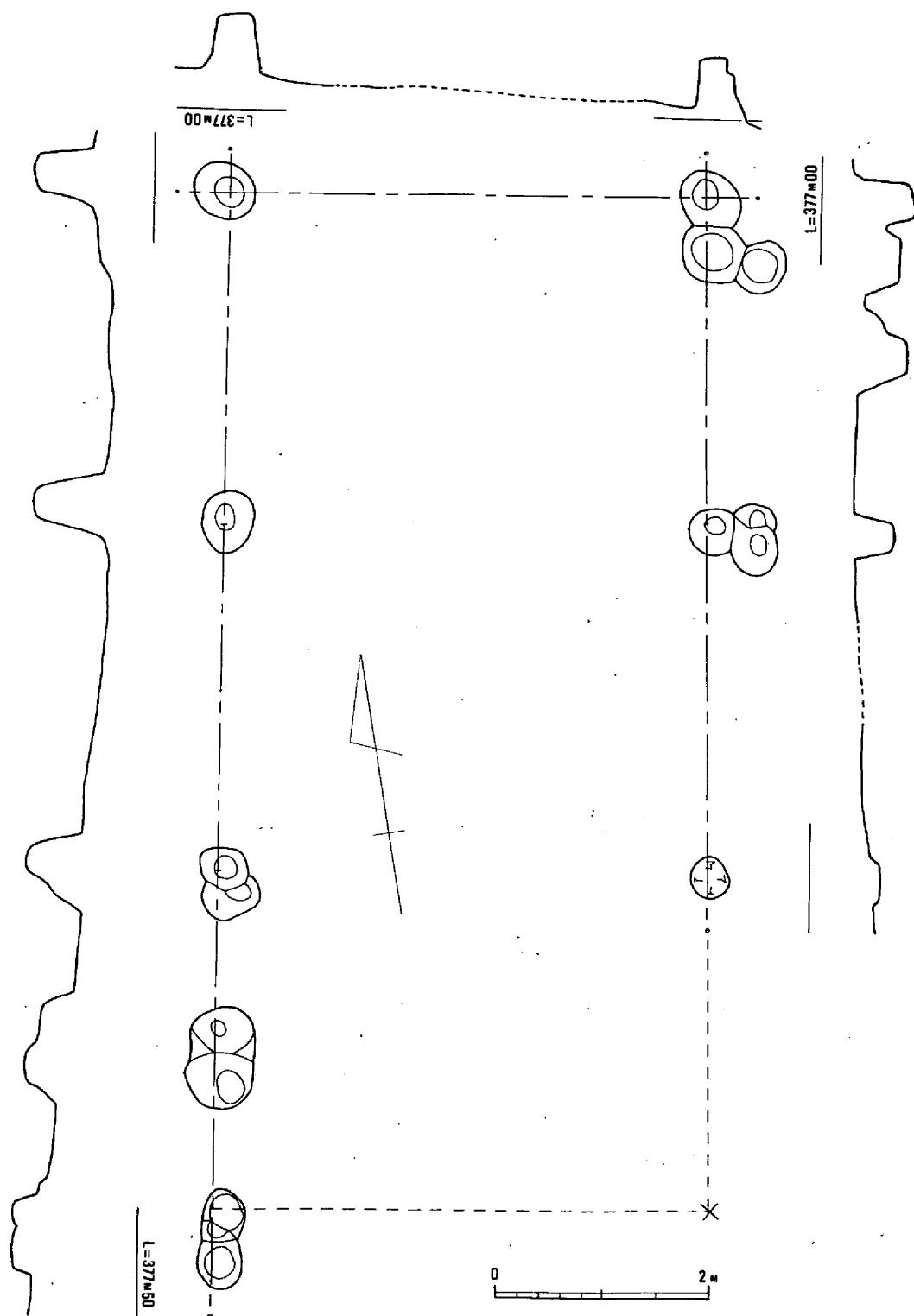


第32図 3号建物実測図

並んでいる。心心距離は、1.1mから1.7mと不揃いであり、柱の径は25~35cm・深さは15~30cmを測る。この柱列は柵列とするのが妥当であろう。この柵列は1号建物の西辺の柱列のほぼ延長上にあり、1号建物に伴う柵と考えることができよう。時期は、1号建物や建て替え前の3号建物と同時期と考えられ、奈良時代の可能性もある。建物とこのような柵の組合せは、時期が若干違うが久米郡の宮尾遺跡(久米郡衙跡)で調査されている(註6)。国信調査区の建物群(実政調査区のものも含めて)の性格を考えるときに興味深い一面を秘めている。

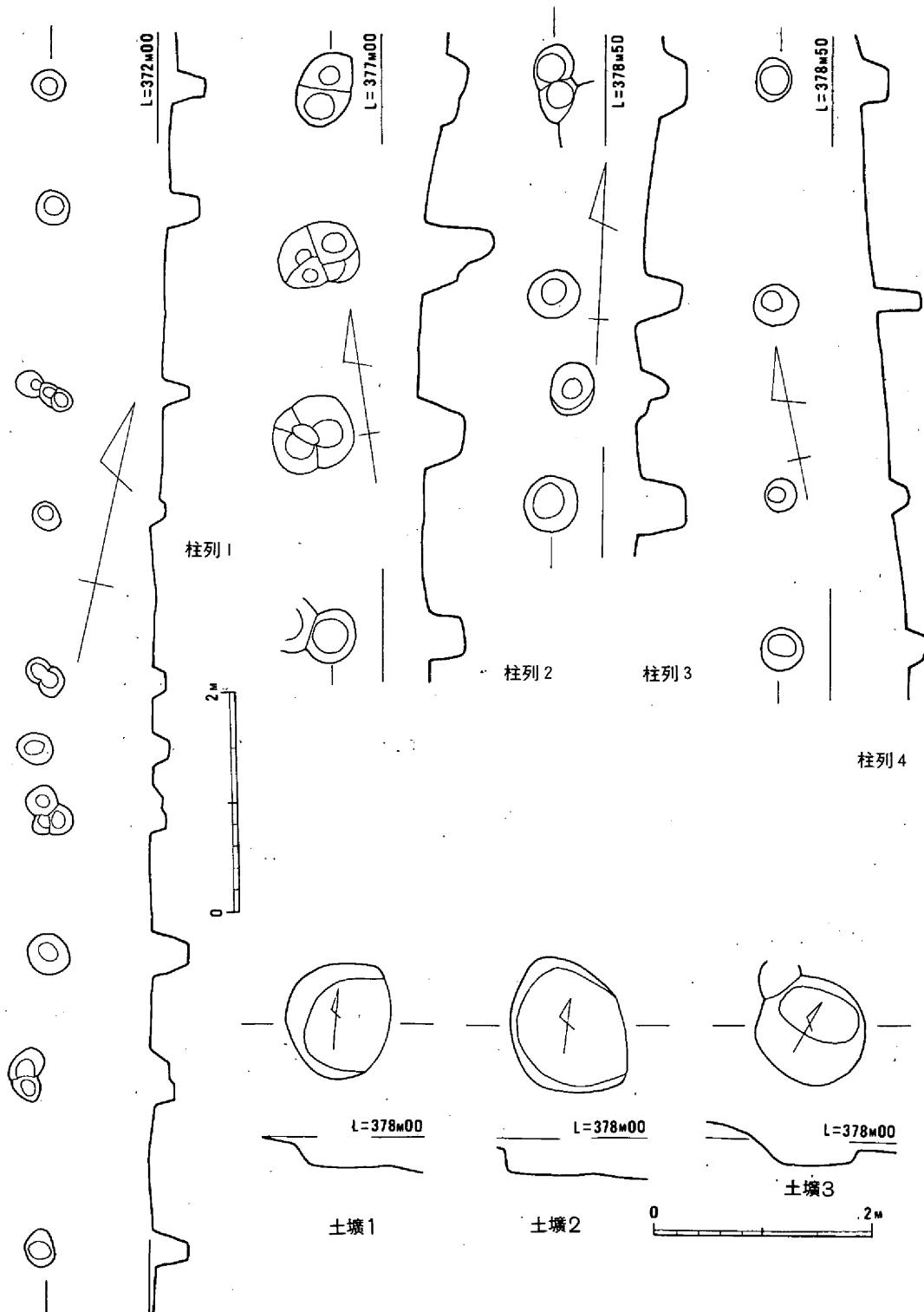
柱列3・4(第34図) 柱列3は、7号住居址の西にあって、3本の柱がN5°W方向に並んでいる。心心距離は共に2m、柱穴の径40~50cm、柱穴の深さは20~40cmを測る。この柱列は用地境に接しており、建物の東側の柱列が検出されたのか、柵となるのかについては、用地外の調査を行っていないので不明である。

西江遺跡(58)



第33図 4号建物実測図

西江遺跡(58)



第34図 柱穴及び土壤実測図

柱列4は、12号住居址の東に4個の柱穴がN14°E方向に並びもので、その心心距離は北から2m, 1.8m, 1.4m, 柱穴の径は30~36cm, 柱穴の深さは20~40cmを測る。この柱列4は柵と考えられ、1号建物・柱列1・建て替え前の3号建物と同一方向に柱穴が並んでおり、同時性を示すものであろうか。

(3) 縄文晚期の土壙（第35, 36図、図版10-1）

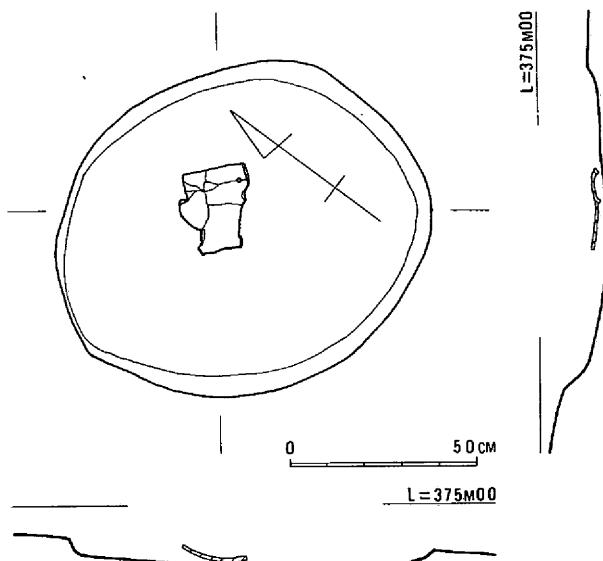
国信南端近くの自然流水路に接して橢円形土壙1基を検出した。上部が自然に流失していくわずかに底部付近を残すにすぎない。土壙の床面に接して甕の大きな破片が検出された。土壙の大きさは長径100cm, 短径85cm, 深さ8cmを測る。甕は比較的大きなもので復原すると口径40cmを測る。底部が存しないが、現存の高さは20.5cmである。器壁の厚さは約6mmである。形態は胴部でくびれて、口縁は若干外反する。口縁端とくびれ部にきざみめを施した断面三角形の凸帯を配している。口縁端から3.5cm下がったところに直径5mmの穿孔がある。穿孔は主として裏から行っている。外面の整形は口縁部に横位の条痕を施し、胴部には斜位の条痕を施している。内面は横なでが行われている。胎土には砂粒を多く含み、色調は赤褐色を呈する。保存状態はよくない。

(4) その他土壙1~3（第34図）

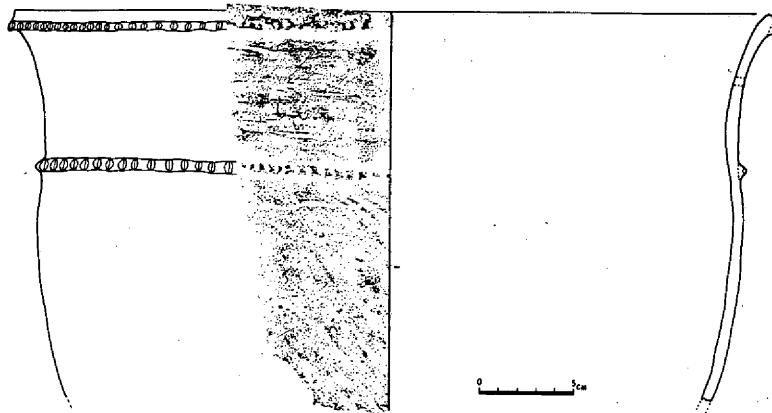
いずれも、7号住居址と柱列3の間に存在する。土壙1~3は土砂の流失によって全形をとどめていないが、現存する部分の計測値は次のようになっている。土壙1は径1.05m・深さ0.20mの円形、土壙2は1.05m×1.35m・深さ0.20mの楕円形、土壙3は1m×0.95m・深さ0.23mの楕円形である。いずれも地山（黄色土）に掘りこまれたもので、内部は住居址の埋土と同様の暗褐色土で埋っており、遺物は出土しなかったが、住居址群に伴う貯蔵穴と思われる。

(5) 土壙状遺構（第37図）

国信調査区の南の谷へ移る傾斜の変換点に、5個の大型土壙を検出した。遺構検出時に黒色土が環状に存在していた。つまり、黄色土を掘って土壙をつくり、その中に椀状に黒色土が入り、その上に黄色土が入っている。5個の土壙は、径2.0~2.8mの円形あるいは楕円形を呈し、深さ0.4~0.6mを測る。この土壙からの出土遺物は皆無である。この種の土壙は、西江遺跡では、他に田代調査区・安信調査区でも検出した。性格は共に不明であるが、風倒木痕ともいわれているものである。



第35図 土壙4（縄文）実測図

第36図 繩文式土器実測図 ($\frac{1}{4}$)

(6) 近世墓壙

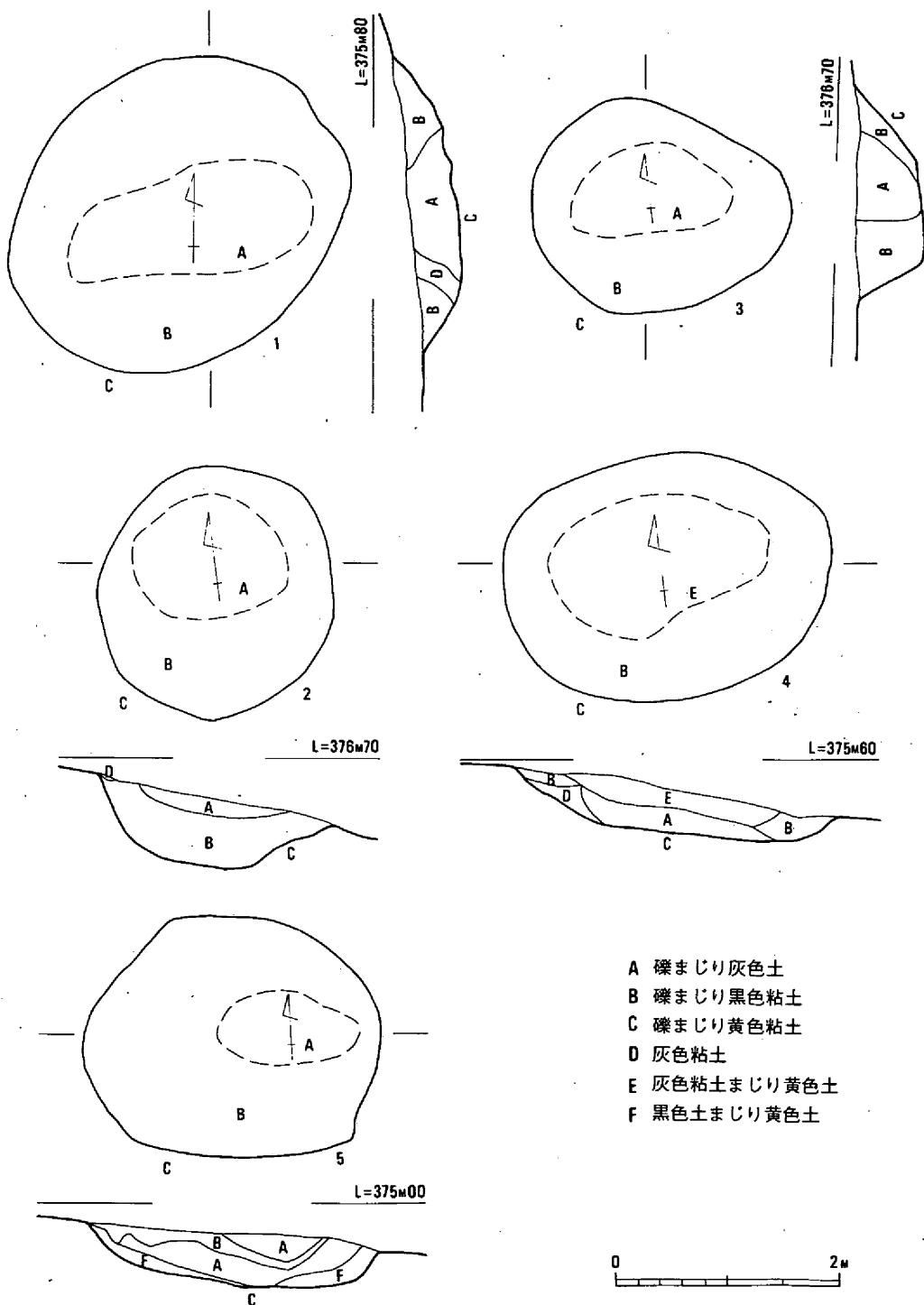
国信調査区では5つの近世墓壙が検出された。いずれも南半のうちの尾根状部分につくられている。共に径0.7~1.0mの円形の穴を掘り、その中に桶を入れている。8号住居址のところにある墓壙には、江戸中期の備前焼の擂鉢が入っていたが、他の墓壙には遺物は入っていない。また、遺体は桶に入れて埋葬されたのであるが、遺体・桶材は残存していなかった。

(7) その他の遺物

弥生式土器・土師器(第38~42図)

国信調査区の中で北半部にあたり、南東部傾斜面で検出されたものが第38~40図である。道路が斜めに横ぎった上方と下方の調査区域のものをまとめている。1, 2は壺の口縁部でやや長い頸部から口縁は朝顔形にひらく。1では端部が肥厚し、外面には凹線文を施している。頸部の外面には縦位のハケメが丁寧に施されている。2では頸部に太い沈線が施され、やや凹線文に類似している。外面にはヘラを縦位にあてているがヘラ磨きにきわめて類似している。色調はいずれも内外面が灰褐色を呈し、断面は黒色を呈する。胎土には微砂を含んでいる。3は壺か器台の口縁部で朝顔形にひらいた口縁の端部は肥厚する。口縁の上面と外面には半裁竹管による鋸歯文を配している。胎土には直径2~3mmの砂粒を含み、色調は黄褐色を呈する。4は甕の口縁部で、逆「L」字形の口縁をつくり、さらに外面に粘土を貼り付け、口縁直下に断面三角形の凸帯をめぐらしている。内面は横位のヘラ磨きが施されている。胎土には微砂を含み、色調は灰褐色を呈する。5は高杯の杯部で碗形の杯部の口縁端部は肥厚し、内外に少し張り出す。内面には斜位のヘラ磨きを施し、外面はなでている。胎土には微砂を含み色調は外面が黒色、内面が灰色を呈する。ただし8分の1位の小破片であり、黒斑の一部である可能性が強い。6, 7は甕の口縁部である。6は口縁が「く」字状に外反し、端部が若干肥厚し、外面には凹線文を施している。胎土には微砂を含み、色調は灰褐色を呈する。7は口縁を欠失しているが、頸部には指圧を施した凸帯を配している。外面には縦位のハケメを施し、内面には斜位のハケメを施している。色調は黄褐色を呈する。8~14は長頸壺の口縁部である。8は頸部から大きく外反

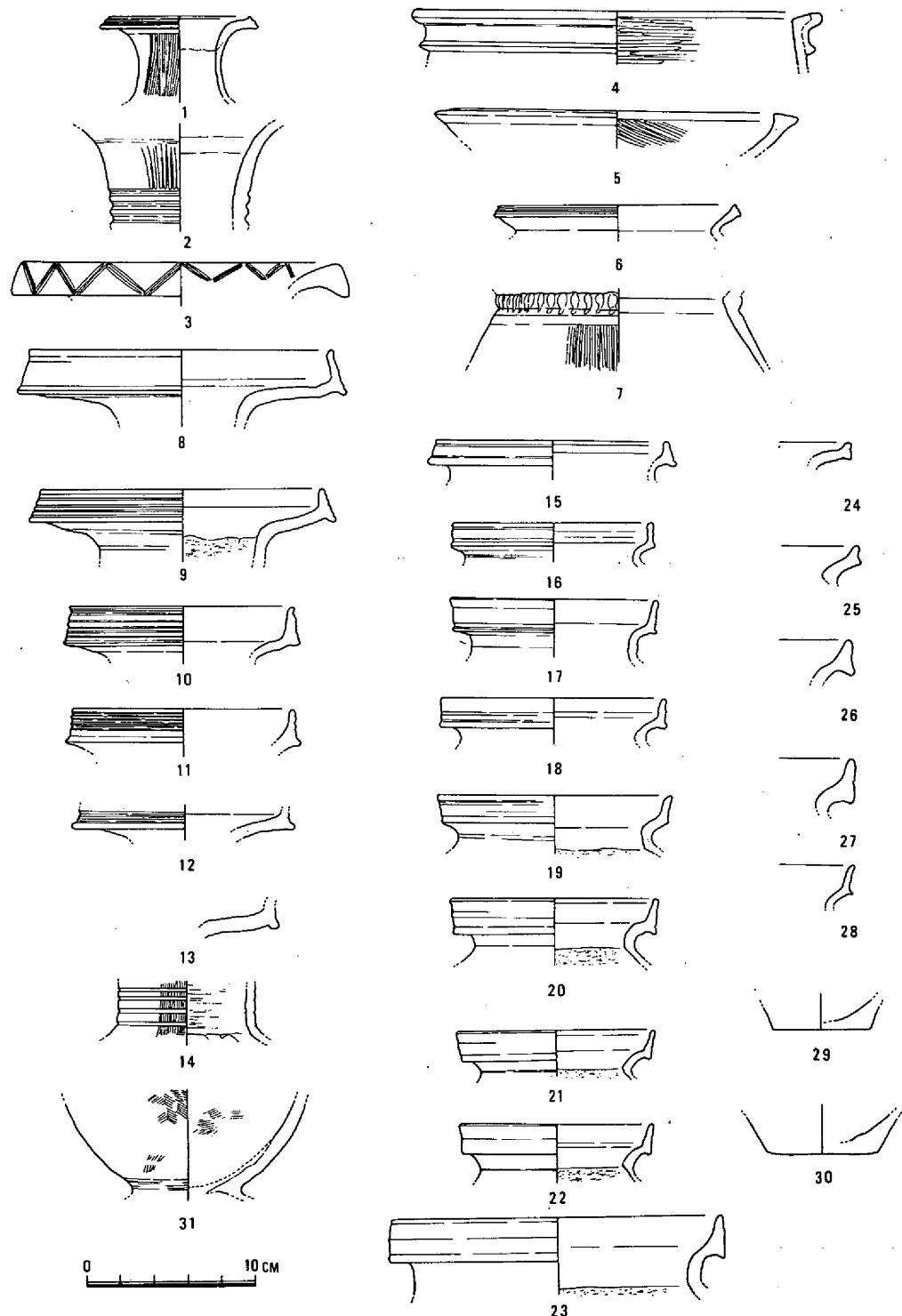
西江遺跡(58)



第37図 土壌状遺構実測図

し、端部は上下に拡張する。口縁の外面は無文である。端部近くの下面を除いて内外面とも丹塗りが施されている。胎土には雲母と微砂を含み、断面はやや茶褐色を呈する。9～14の胎土もすべて同様である。9は頸部から大きく外反し、端部は上下に拡張する。口縁の外面には凹線文が施されている。頸部の内面には横位のヘラ削りが施されている。丹塗りは内外面とも施されているが、8と同じく端部近くの下面には塗られていない。10は頸部からやや外湾しながら拡張し、端部で上方へ立ち上がる。丹塗りの方法は8と同じである。11は小破片で詳細は不明だが端部の外面には凹線文を施している。12、13も小破片であるが、8とほぼ同じである。14は頸部の破片で、筒状の頸部の外面には縦位のヘラ磨きを施し、その後、横位の沈線を施している。15～28は甕の口縁部である。15は頸部から短く外湾しながら拡張し、端部は肥厚して拡張する。外面はやや内傾し無文である。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。16は口縁端部がほぼ直立しているが、他はやや外反する。16の胎土はきめが細かく、他には微砂を含む。色調は灰色～黄褐色を呈する。23は甕の口縁部で頸部から上方に湾曲しながら外反し、端部は肥厚して上方へ立上がる。内面では頸部直下から横位のヘラ削りが施されている。胎土には微砂を多く含み、色調は黄褐色を呈する。24～28は甕の口縁部の小破片である。24はきめの細かい胎土で、外面には丹塗りが施されている。他は胎土に微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。29、30は甕か壺の底部である。いずれも平底で、30の底部には磨滅がみられる。29の外面にはヘラ磨きがみられる。胎土にはいずれも微砂を含み、色調は灰褐色を呈する。31は台付鉢か台付甕の破片である。胴部から底部へかけて湾曲し、脚部が接合されている。接合部はあとから横位のなでが施されている。胴部外面には交差したハケメが施され、内面にも斜位のハケメが施されている。32～38は高杯又は小型器台の脚部である。32は緩やかにひろがる裾部の端が肥厚し、上下に拡張する。外面には丹塗りが施されている。胎土には微砂を含み、断面は灰色を呈する。33～38は若干のちがいはあるが、裾部が緩やかにひろがり、端部は肥厚して立ちあがる。内面は横位のヘラ削りが施されている。外面に縦位のヘラ磨きを施しているもの(34、36)がみられ円孔をそれぞれ配している。37では裾部に刺突文と鋸歯文を施している。すべて外面には丹塗りが施され、胎土には雲母を含んでいる。37は小型器台の脚部であろう。39は鉢の上半部である。頸部から短かく外反し、端部は上方へ立ちあがる。胴部内面には横位のヘラ削りが施されている。口縁部の内面から外面へ丹塗りが施されている。頸部直下でみると、ヘラ削りを施したあとから丹塗りを施している。40～61は甕の口縁部である。40～48では頸部から外湾しながら開き、一度くびれて斜め上方へ大きく拡張する。端部は丸くなっている。内面は頸部直下から横位のヘラ削りが施されている。いずれも胎土には微砂を含み、色調は黄褐色～灰褐色を呈する。口縁部の外面に媒が付着しているものがある(41、46、47)。49、50、55は頸部から屈曲して短かく外反し、さらにくびれて大きくひらく。端部はほぼ丸みをもっている。口縁の拡張部分で下方へ張り出しがみられる。49、55の内面には頸部直下から横位のヘラ削りが施されている。いずれも胎土には微砂を含み、色調は灰褐色を呈する。55の外面には媒が付着している。51は頸部から外湾しながら上方へ拡張し、くびれて斜上方へ拡張する。内面は頸部直下から横位のヘラ削りが施されている。胎土には微砂を含み、色調は外面が灰褐色、内面が黄褐色を呈する。52は頸部からやや内湾ぎみに拡張し、さらにくびれて斜上方へ大きくひらく。端部は少し外方へ

西江遺跡(58)

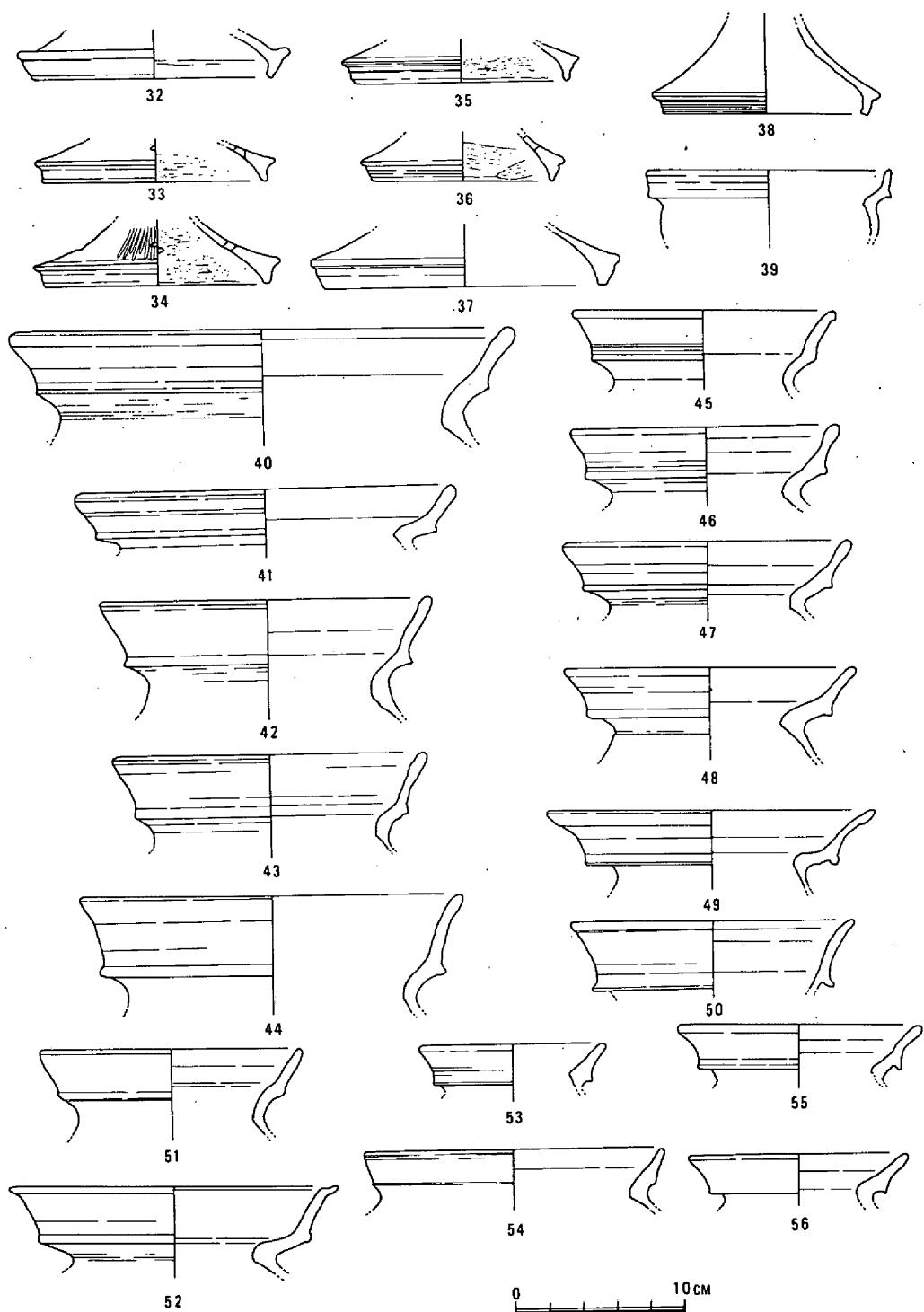


第38図 弥生・土師器実測図 ($\frac{1}{4}$)

張り出す。内面は頸部から横位のヘラ削りが施されている。胎土には微砂を含み、色調は灰黄色を呈する。53, 54, 56, 60は頸部からごく短かく外反し、くびれて上方へのびる。頸部から外反する部分の器壁は厚い。内面は頸部直下から横位のヘラ削りが施されている。いずれも胎土には微砂を含み、色調は灰褐色を呈する。57, 58は甕の口縁部で、頸部から小さく湾曲しながら外反し、くびれて大きく上方へやや湾曲しながらのびる。端部はやや丸い。口縁部には横なでが施されている。57は胎土に微砂を含み、色調は淡黄色を呈する。58は焼成が堅緻で、色調は灰白色を呈する。59は口縁部の小破片で外反する。口縁部の外面には凹凸がみられる。胎土には微砂を含み、色調は内外面が黄褐色、断面が黒色を呈する。61は甕の口縁部で頸部から「く」字状に外反し、端部は外面に小さなくびれがありうすくなる。口縁の内外面とも丹塗りが施されている。胎土には微砂を含む。64は鉢の口縁部で、口縁は肥厚し、端部がやや張り出す。口縁部は横なでされ、外面には縦位のハケメが施されている。外面には丹塗りが施されている。内面は黒色を呈する。胎土には微砂を含む。65, 66は甕の口縁部の小破片である。65は胎土に微砂を含み、色調は灰白色を呈する。66は胎土に砂粒を含み、色調は黄褐色を呈する。62, 63は九重式に類する器台の口縁部と推測される。胴部から外反して肥厚し、さらに斜め上方にひらく。外面には丹塗りが施されている。62は口縁部内面にも丹塗りが及ぶ。62では口縁の外面へ凹線文状の凹凸が明瞭である。胎土はきめが細かい。67は鼓形器台の破片と推測される。口縁部では大きくひらく口縁部がやや肥厚し、端部は丸くなっている。内面には横位のヘラ削りが施されている。ヘラ削りをしたあと丹塗りが施され、外面にも及ぶ。胎土はきめが細かい。68は小破片で不明瞭であるが外面には丹塗りが施され、胎土はきめが細かい。69は高杯の脚部で、裾部は緩やかにひらき、端部はうすくなる。外面には横位の細かいヘラ磨きが施されている。胎土には精製粘土が用いられ、色調は灰褐色を呈する。70~72は高杯の脚部である。いずれも下半部を欠き柱状部のみである。上部は杯部へさしこみ形になっている。72の上部には杯部と接合しやすいようにきざみめを施している。裾部を欠失しているが急に外反する形になっている。70の外面には横位の細かいヘラ磨きが施されている。いずれも胎土はきめが細かく、色調は黄褐色を呈する。73は甕の口縁部で「く」字状に外反し、外面には横位のハケメ状の施文がある。胴部外面には交差したハケメが施されている。内面では頸部直下から横位のヘラ削りが施されている。胎土はきめが細かく、色調は黄褐色を呈する。74は甕の口縁部で、口縁は外湾しながら拡張し、端部はやや角ばる。胎土には微砂を含み、色調は灰色~黒色を呈する。75は甕の上半部で器壁も厚い。口縁部は「く」字状に外反し、端部は丸い。胴部の外面には縦位のハケメが施され、内面には横位のハケメが施される。胎土には小礫を含み、色調は黄褐色を呈する。76は甕の口縁部で、口縁は緩やかに折れて短かく、横なでが施されている。外面は縦位のハケメが施されている。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。77~79は甕の口縁部で器壁が厚く、胎土には小礫を含む。色調は灰褐色を呈する。80, 81はなべの口縁部で、口縁は端部がやや肥厚する。外面には縦位のハケメが施されている。胎土には微砂を含み、色調は灰白色を呈する。82は高台付椀である。高台は断面がやや三角形を呈する。内面は黒色を呈し、いわゆる「内黒」の土器である。

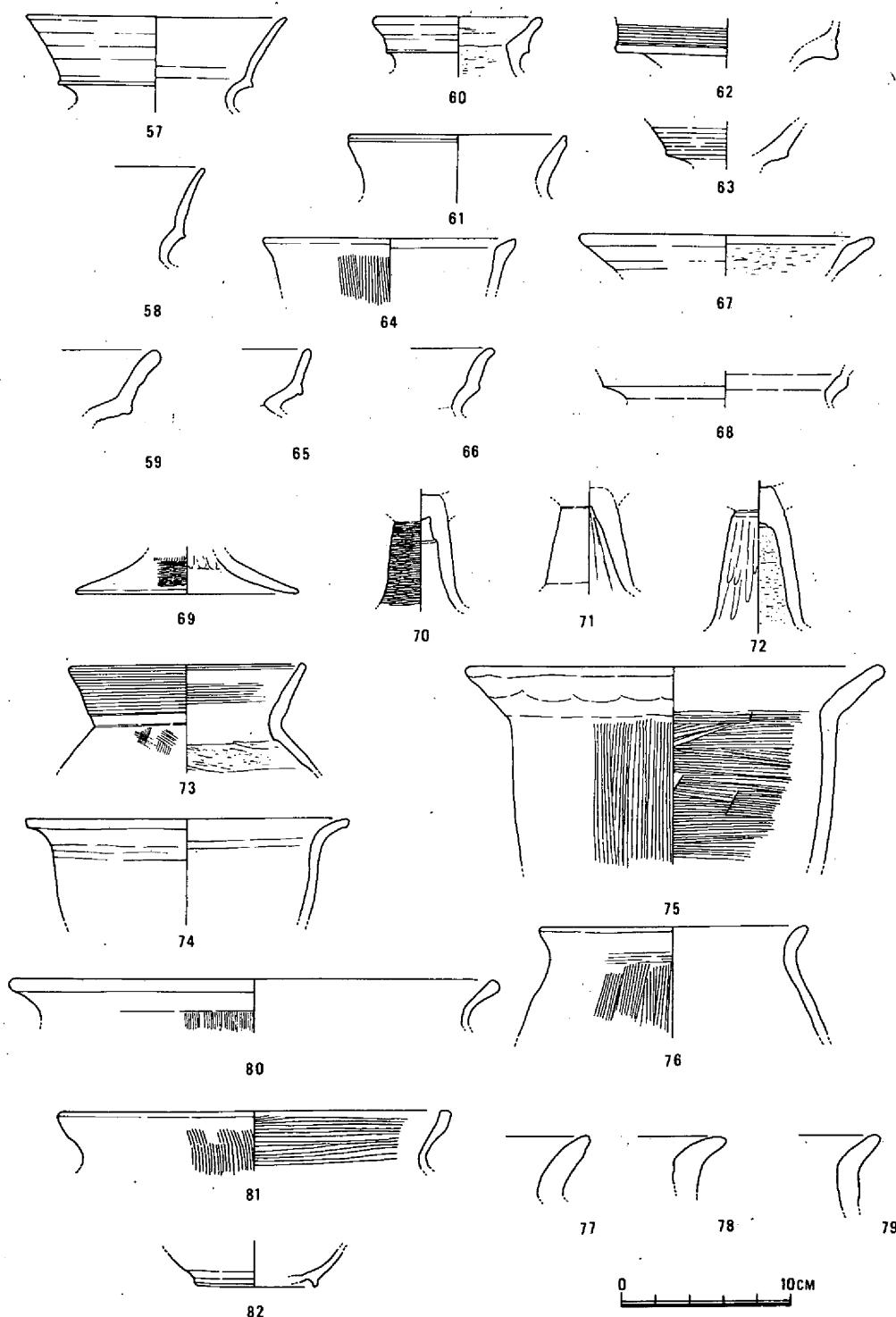
4は弥生中期前半に属する。3, 5は弥生中期中葉に近い時期である。1, 2, 6, 7, 15は弥生

西江遺跡(58)



第39図 弥生・土師器実測図 ($\frac{1}{4}$)

西江遺跡(58)



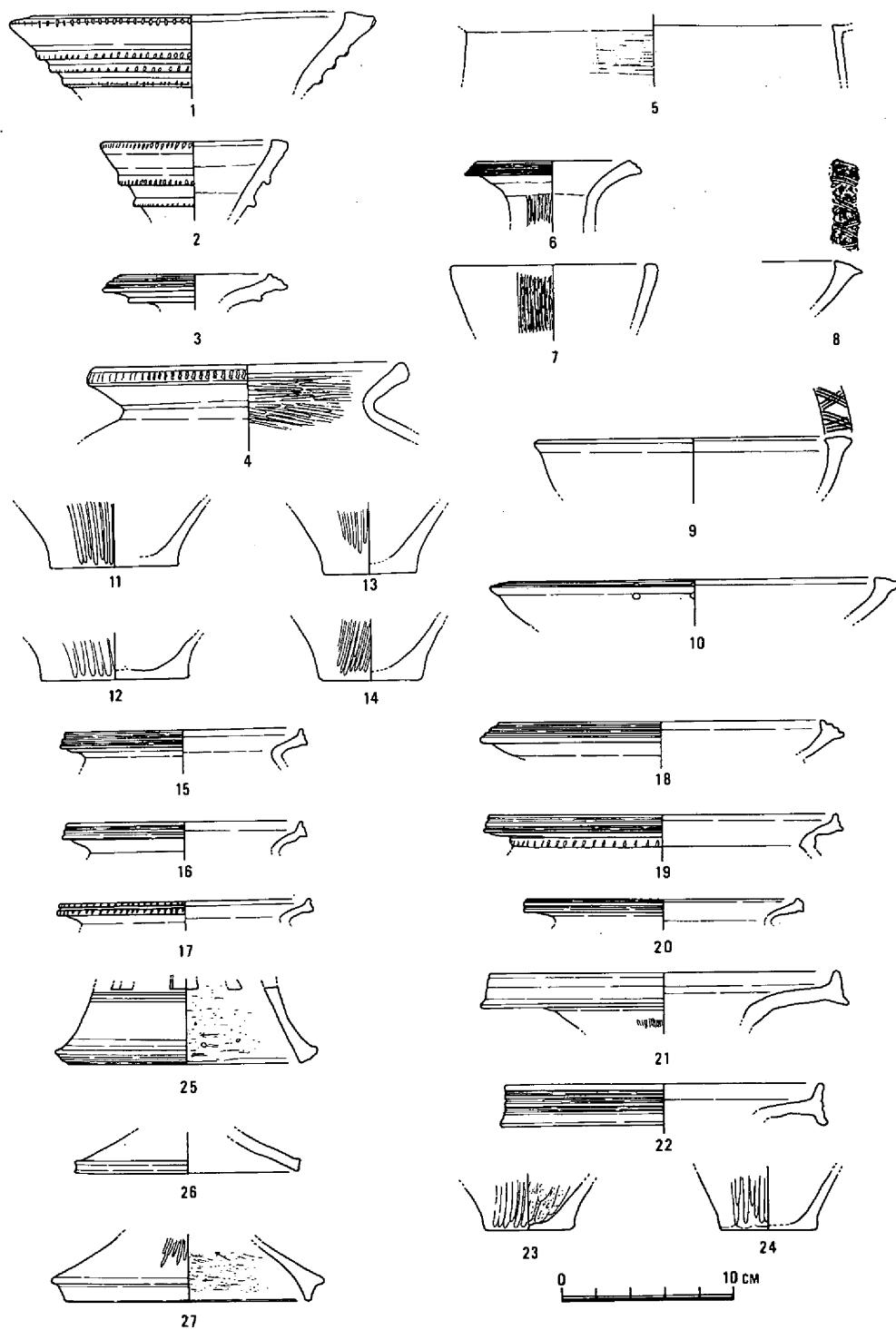
第40図 土師器実測図 ($\frac{1}{4}$)

中期後半に属する。以上の時期のものは量が少ない。16~28, 32~39は弥生後期後半~古式土師器に属する。これらは県南部ではみられず山陰では「鍵尾Ⅱ式」(註7)に多くみられる。29, 30は弥生後期後半に属する。40~61, 64~66は古式土師器に属する。山陰に多くみられ、岡山県では西北部においてみとめられる。62, 63は山陰では「九重式」(註8)と呼ばれるものに類似する。67, 68は山陰の「鍵尾Ⅱ式」に類似する。69~72は古式土師器に属する。73~79は古墳時代後期~奈良時代に属する。80, 81は中世に属し、82は平安時代に属する。

国信調査区の南半部で検出されるものが第41・42図である。

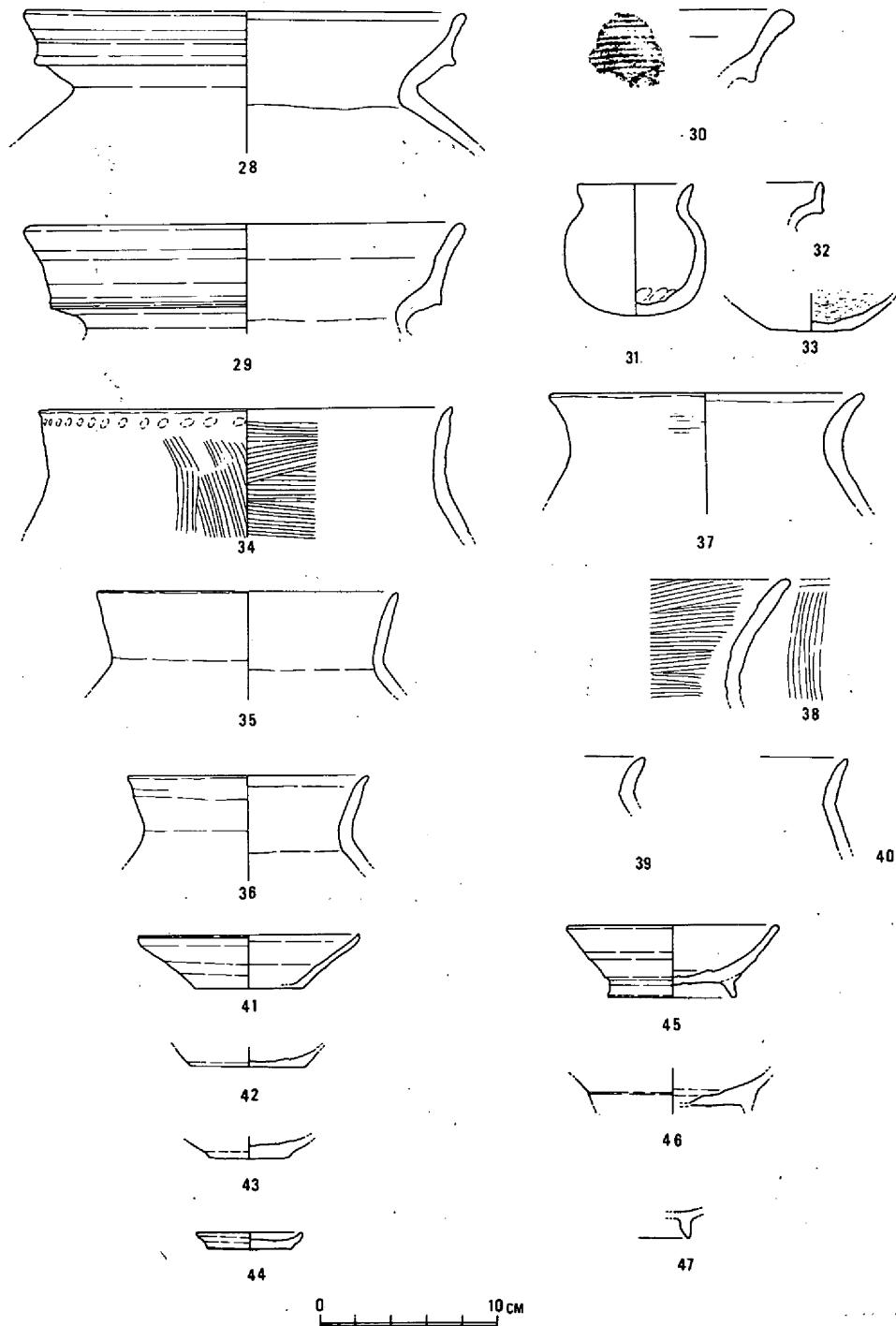
1~3は壺の口縁部で、朝顔形にひらき、口縁端部は肥厚する。外面には貼り付け凸帯を配している。1, 2には口縁端部及び凸帯にきざみを施している。3の口縁部には凹線文を配している。1の胎土には微砂を含み色調は内外面が灰黄色、断面が黒色を呈する。2の胎土には微砂を含み、色調は茶褐色を呈する。4は甕の口縁部で、口縁は頸部から「く」字状に外反し、端部はやや肥厚して、外面には刺突文を配する。胎土には微砂を含み、色調は灰褐色を呈する。5は甕の口縁部で、口縁は角ばって屈曲し外反する。頸部周辺は内外面とも横なでが施されている。6は壺の口縁部で、朝顔形にひらき、端部は少し肥厚し、外面には凹線文を配する。胎土には微砂を含み、色調は灰褐色を呈する。7は鉢形を呈する。口縁部の破片である。口縁部を少し肥厚して内側への張り出しがみられる。外面には縦位のハケメが施されている。色調は内外面が黄褐色、断面が黒色を呈する。8~10は高杯の口縁部で端部は肥厚し、内外へ張り出す。上面に3本線のくし描きを交差させたもの(8, 9)や端部に2個の穿孔を配したものがある。色調は内外面が黄褐色、断面が黒色を呈する。11~14は甕の底部で、外面にはハケメを施している。胎土には微砂を含み、色調は淡黄色~灰褐色を呈する。内面にはヘラ削りはみられない。15~20は甕の口縁部で頸部から「く」字状に外反し、端部は肥厚して外面には凹線文を施している。19の頸部にはきざみを施した凸帯を配している。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。25は器台の脚部で裾部は緩やかにひらき、端部は肥厚する。胸部には三角形の透しを配している。内面には横位のヘラ削りが施されている。胎土には微砂を含み、色調は灰白色を呈する。21, 22は壺の口縁部で大きくひらいた口縁の端部は肥厚して上下に拡張する。22の外面には凹線文を配している。口縁の下を除き、外面には丹塗りを施している。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。23, 24は甕の底部で、外面には縦位のヘラ磨きを、内面には縦位のヘラ削りを施している。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。23には黒斑がみられる。26, 27は高杯の脚部で大きくひらいた裾の端部は肥厚し、27では立ち上がりがみられる。27では内面にヘラ削りが施されている。外面には丹塗りが施されている。27には雲母を含み、内面の色調は茶褐色を呈する。28~30は甕の口縁部で、頸部から屈曲して外反し、さらに上方へ大きく拡張する。30では外面に明瞭な「擬凹線文」が残り、28, 29でも横なでによって、凹凸を示している。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。30の断面は黒色を呈する。31は小形の完形壺である。胸部はほぼ球形を呈し、口縁は若干外開きとなり、端部はうすくなっている。きめの細かい胎土で、色調は黒褐色を呈する。22は甕の口縁部で、端部は上方へ拡張する。内外面とも丹塗りを施している。胎土には細砂を含み、茶褐色を呈する。33は平底の底部で丸みをもっている。内面には横位のヘラ削りを施している。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。一部には黒斑がみられる。34~40は甕の口縁部で、頸部から湾

西江遺跡(58)



第41図 弥生式土器実測図 ($\frac{1}{4}$)

西江遺跡(58)



第42図 土師器実測図 ($\frac{1}{4}$)

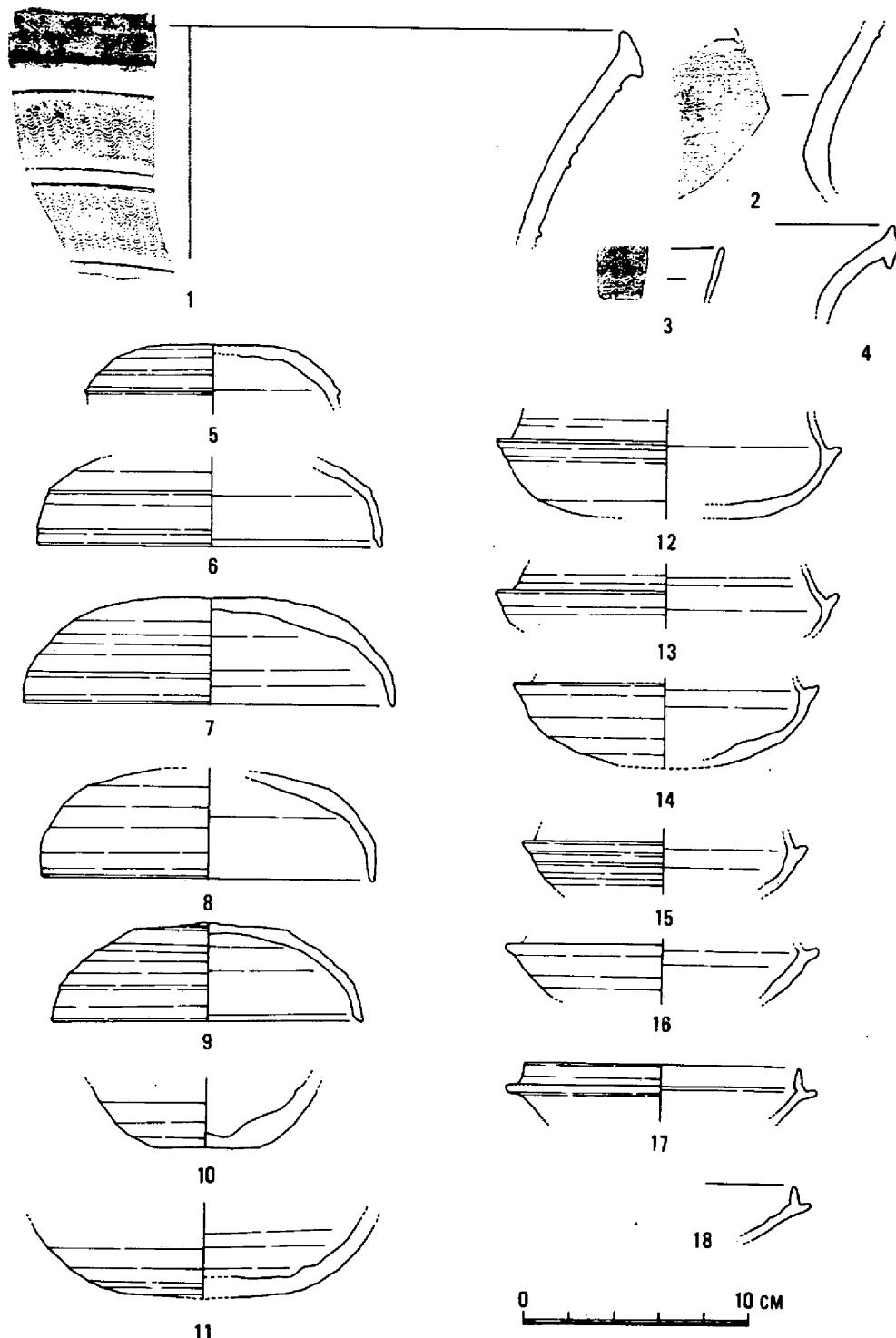
曲しながら外反し、端部は薄くなる。34、38は内外面とも太いハケメを施している。胎土には砂粒を含み、色調は黄褐色を呈する。41～44は糸切り底の杯である。44は高さはきわめて低い。45～47は貼り付け高台の杯である。いずれも胎土には微砂を含む。色調は45が灰白色、46が黄褐色、47が橙色を呈する。

1～14、24は弥生中期中葉に属する。5は若干時期が古くなると考えられる。15～20、25は弥生中期後半に属し、凹線文が発達している。21～23、26、27は弥生後期後半に属する。28～30、32、33は古式土師器に属する。31は古墳時代中期に属するらしい。34～40は古墳時代後期に属し、41～43、45～47は平安時代に属するものである。44は中世のものである。

須恵器(第43、44図)

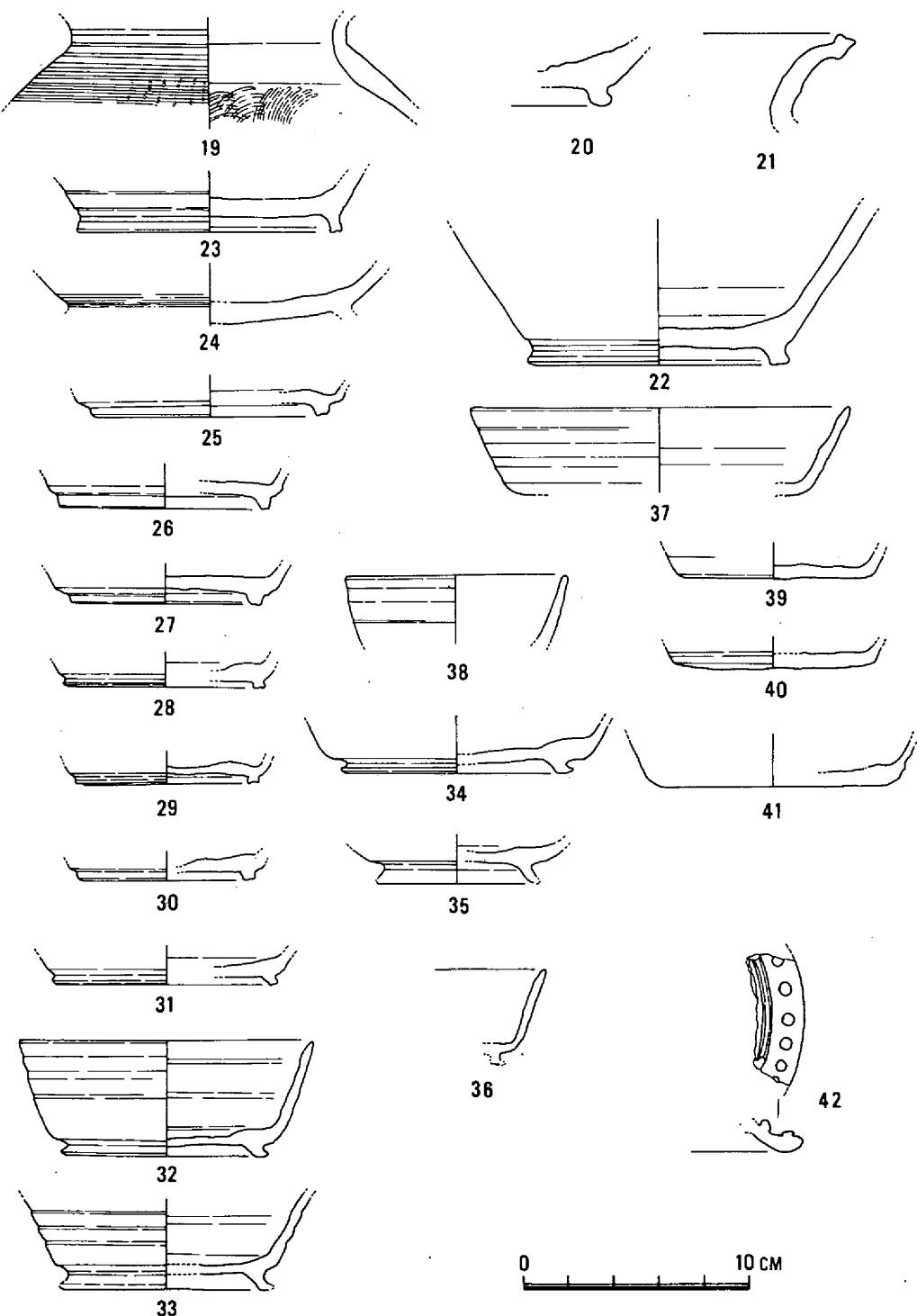
国信調査区も比較的須恵器の多い調査区である。1は大型甕の口縁部である。朝顔形にひらいた口縁の端部は拡張して上下に稜をもつ。口頸部に櫛描き波状文と凸帯を交互にめぐらせている。内外面には自然釉がうすくかかり漆黒色を呈する。断面は茶褐色である。破片から復原した直径は38cmを測る。2も大型甕の頸部で1と類似するが波状文がやや粗雑である。3は甕の口縁部らしい。外面に細かい波状文を配している。色調は内・外・断面とも青灰色を呈する。4は甕の口縁部小破片である。朝顔形にひらいた端部は上下に拡張する。胎土には微砂を含み、色調は内外面が暗青灰色、断面が茶褐色を呈する。5～9は杯蓋である。5、6は天井部から口縁部へ移る部分に段がみられるが、他のものは不明瞭である。5の天井部は広くヘラ削りが施されている。6には口縁端部内面にも段がみられる。色調では5の内外面が青灰色、断面が茶褐色を呈する。10は小型壺の底部であろう。外面にはヘラ削りが施され、内面には自然釉が厚くかかっている。11～18は杯身である。11は底部半分位がヘラ削りしている。胎土には微砂を含み、色調は青灰色を呈する。12は受部が横に張り出し、立ちあがりは内傾する。底部は半分位ヘラ削りされている。胎土には微砂を含み、色調は青灰色を呈する。13は12とほぼ同様である。14は底部の半分位をヘラ削りしている。15、16もほぼ同様である。17・18は受部が横に張り出し、立ちあがりは短かく上方へ立ち、端部はうすくなる。色調は17が灰白色、18が青灰色を呈する。19は甕の肩部で、外面はタタキのあと、横位の調整がなされ、内面には青海波がある。胎土には微砂を含み、色調は青灰色を呈する。20は壺の底部らしい。21は甕の口縁部で、色調は灰白色を呈する。22、23は高台付壺の底部で断面方形の高台がやや外方に張る。いずれも胎土に微砂を含み、色調は22の内外面が暗青灰色・断面が茶褐色、23が灰白色を呈する。24～36は高台付杯である。高台は断面方形で、ほぼ直立するもの(25～30)と断面がくずれていて外方に張り出すもの(31～36)がある。いずれも胎土に微砂を含み、色調は灰白色～青灰色を呈する。37、39～41は高台のないものである。胴部はやや斜め上方へのびる。色調は、灰白色～淡青灰色を呈する。38は杯の口縁部である。42は凸帯と円形浮文を配した何かの脚部と推定されるが器形がわからない。胎土には微砂を含む。上面には自然釉がかかり、灰白色を呈する。内、断面は暗青灰色を呈する。

年代では1～5が陶邑の「TK47」に相当し5世紀後葉～6世紀前葉に比定されている(註9)。6～19は6世紀後半～7世紀前葉であろう。そのほか、23～41はほぼ奈良時代を中心に考えられる。42は比較資料がなくて明らかでない。



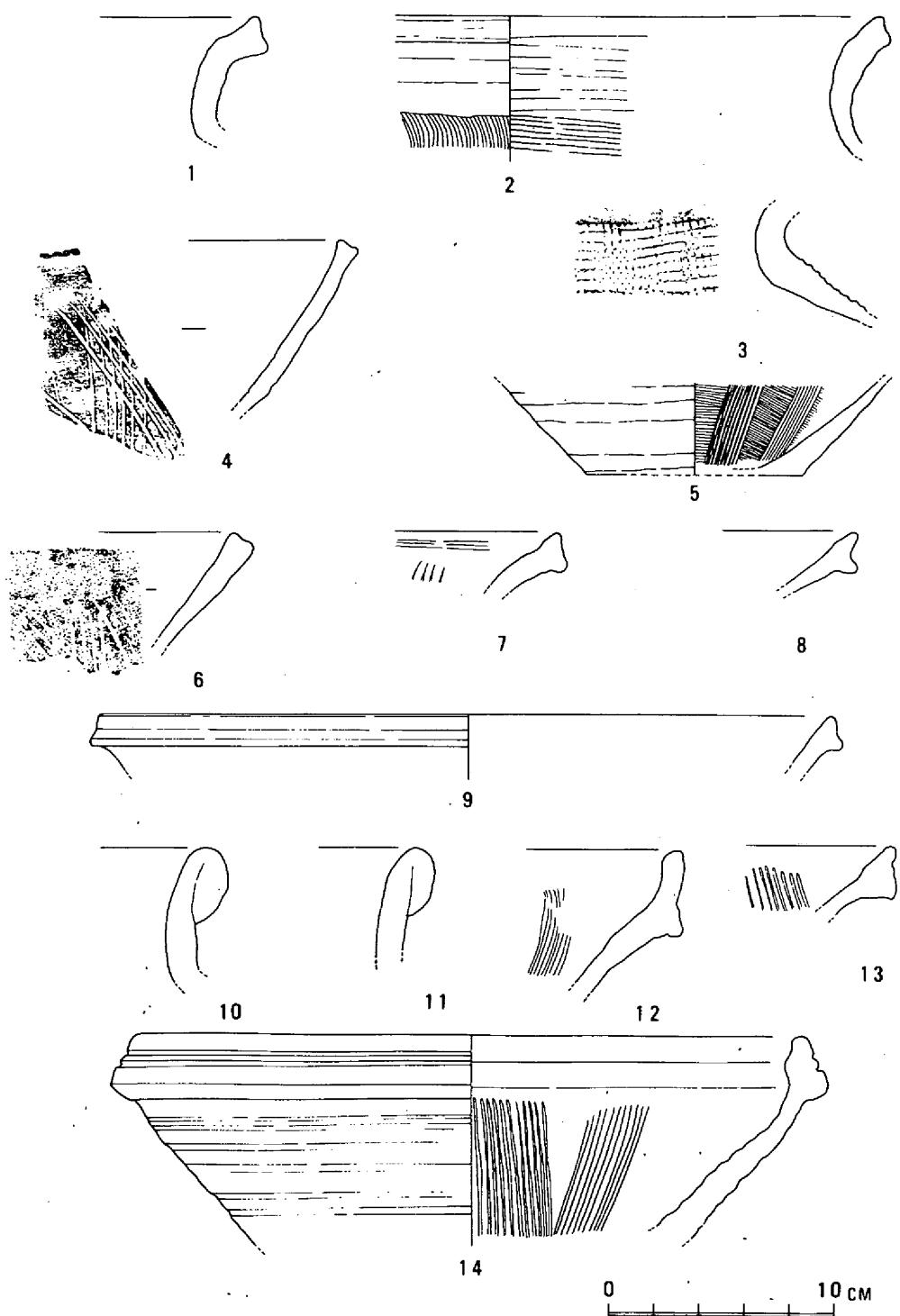
第43図 須恵器実測図 ($\frac{1}{3}$)

西江遺跡(58)



第44図 須恵器実測図 ($\frac{1}{3}$)

西江遺跡(58)



第45図 龜山焼・備前焼実測図 ($\frac{1}{3}$)

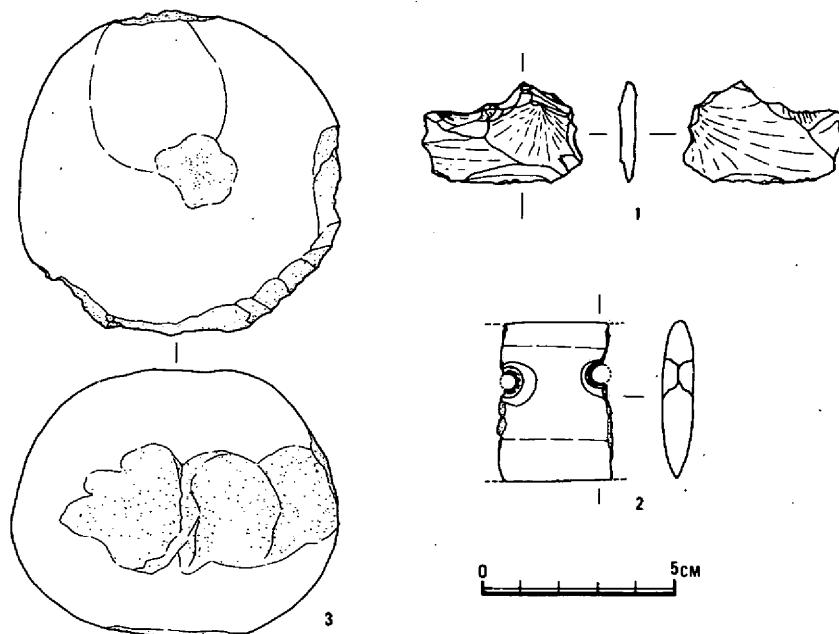
亀山焼・備前焼(第45図)

亀山焼には甕と擂鉢がある(第45図1~9)。甕は口縁部が湾曲しながら外反し、端部は肥厚している。外面には格子目の叩きを施しているもの(3)と縦位のハケメを施したもの(2)がある。擂鉢の口端部は少し肥厚するもの(4, 6)と上下に大きく肥厚するもの(7~9)がある。内面のかきめは交差するもの(4, 6)と交差しないもの(5)がある。4の外面には煤が付着している。色調は灰白色を呈するもの(4, 6), 灰色を呈するもの(5), 暗灰色を呈するもの(7), 灰褐色を呈するもの(9), 青灰色を呈するもの(8)がある。

備前焼には甕と擂鉢がある。甕(10, 11)の口縁部は大きな玉縁になっている。色調は暗灰色~暗茶褐色を呈する。擂鉢は口縁部が拡張し、外面が無文のものと凹線文を配するものがある。内面には縦位のかきめが施されている。色調は茶褐色を呈する。14の内面はよく使用されていて磨滅している。

石器(第46図、図版10~3)

国信調査区では石庖丁、石匙、叩石が出土している。石匙(1)は横長で、一方によった上方にはり出しがあり、刃部はほぼ直線的で若干の調整がなされている。大きさは長径4.2cm, 短径2.7cm, 厚さ4mmを測る。石材はサヌカイトである。石庖丁(2)は磨製のもので両側を欠失している。2個の穿孔がある。現存長3cm, 幅4.2cm, 厚さ8mmを測る。石材は砂岩である。叩石(3)は橢円形の自然石で周辺部と両側に使用痕がある。大きさは長径8.6cm, 短径8.5cm, 厚さ8cm, 重量730gを測る。石材は花崗岩である。



第46図 石器実測図(1/2)

鉄器(第47図、図版10—4)

国信北の下方にある畠地において鋤、刀子状鉄器のみ状鉄器が検出された。畠地の造成土の中であって、年代を知る手がかりはない。鋤(1)は刃が磨滅していなくて使用されていない可能性がある。現存長18.4cm、最大幅12.3cmを測る。刀子状鉄器(2)は刃がついてなくて、刀子として利用されたものではない。全長17.5cm、幅3cmを測る。

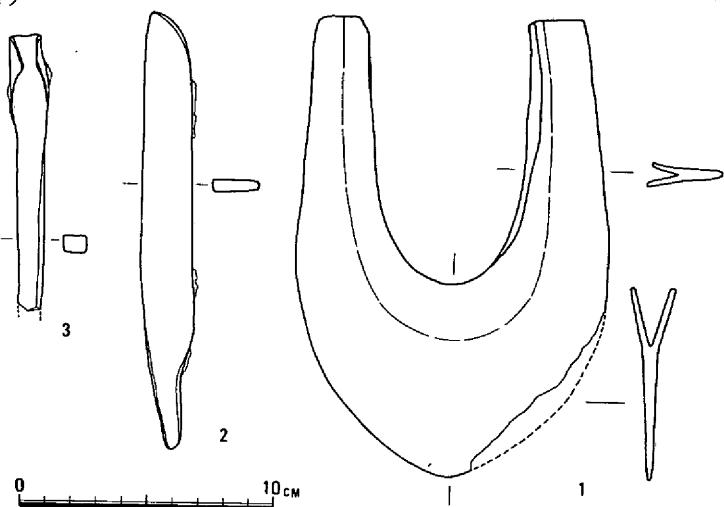
み状鉄器は先端部を欠失しているが、のみと推測される。上端に袋状部がある。現存長11.1cm、柱状部の幅1cmを測る。

土錘(第48図)

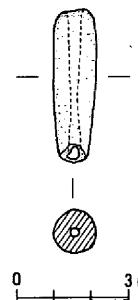
国信南区で検出されたもので、細長い管状を呈している。長さ4.1cm、直径1.1cm、重さ5.5gを測る。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。

3. 小 結

国信調査区は小さな谷川をはさんで北と南にわかれている。いずれも台地上に遺構が所在する。遺構には竪穴住居址、建物、柵、土壙、近世の墓塚などがある。縄文晩期の遺物は各調査区で少量出土しているが、遺構の検出はなかった。国信調査区において土壙中から甕の大きな破片が検出された。上部がほとんど自然流失していることから、詳細は不明だが、土壙のなかに甕棺として埋められたものと推定される。竪穴住居址は弥生時代後半から古墳時代にかけてのもので、円形、方形のものがある。いずれも保存状況が悪く、壁体溝のみのものが多い。建物は保存状態が悪いため、その全容を知ることができないが、台地上には3間×2間、その他のものがある。同時に何棟が存在したかはわからないが、国信調査区の南にまとまっていたことがわかる。傾斜面には奈良時代を中心とする須恵器、土師器の破片が堆積している。浅い谷をはさんだ南側の実政調査区にも建物、柵がある。ただ、1点であるが、実政調査区側の谷部分から円面鏡の破片も検出された。このことから文字を使用することに関連のあった建物を考える必要があるだろう。したがって、この区域は豪族の居住区域であったか、行政に関連した倉庫群の可能性が高い。



第47図 鉄器実測図 (1/3)



3 CM

第4節 実政調査区

1. 実政調査区の概要 (第49~53図)

山裾が西から東へ向って緩やかに傾斜し、舌状にのびている。傾斜が緩やかなことから周辺部はほとんど水田となっている。北端は国信との境の小さな谷川で区切られ、南端は奥が深く、水の流れのたえない比較的大きな谷川がある。南側に寄った部分が高くなっていて、遺構も主にこの地点で検出された。水田を造成するため切り盛りが多くなされていて遺構の残存状況は余りよくない。弥生時代の円形住居址3軒、古墳時代の方形住居址6軒、円形土壙、古墳時代後期で師楽式土器の完形品や須恵器片を伴う方形土壙、時期が明瞭でないが建物7棟、柵列、歴史時代の大型土壙1個、近世、近代の墓壙などが検出された。北側にはほとんど遺構が検出されていない。若干の柱穴、土壙が検出されたにすぎず、北端部には地表面に数条の自然水路がみられた。遺物では北東に面した谷に多く、弥生式土器、土師器、須恵器、師楽式土器などが検出された。

2. 実政調査区の遺構と遺物

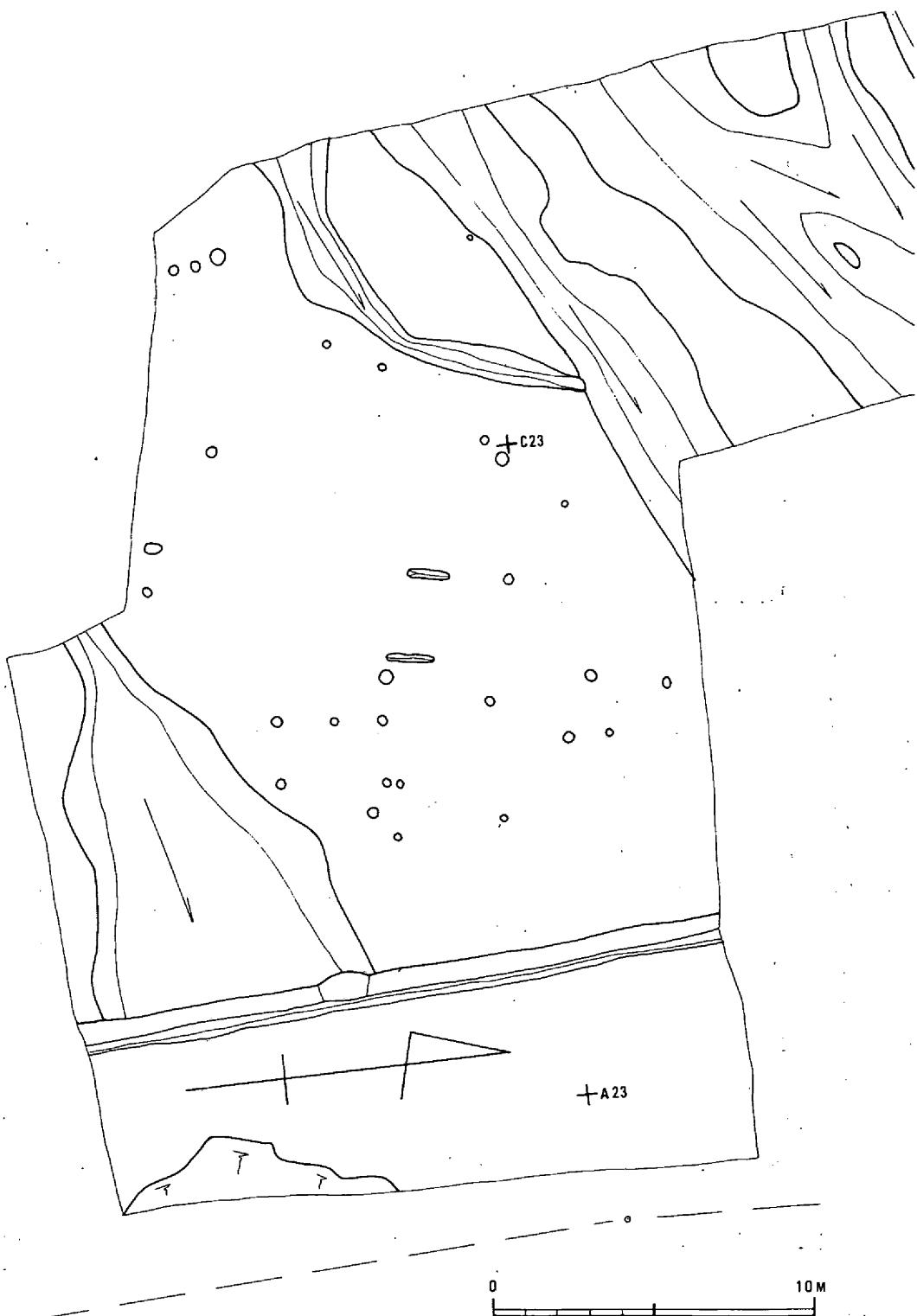
(1) 横穴住居址

1号住居址 (第54図) この住居址は実政調査区の北半分に位置する谷部分の中央に存在する。谷部分には黒色土が堆積していた。この黒色土の中に黒褐色土で埋まった住居址を検出した。この住居址は土砂の流失によって原形をかなり損じている。1辺6m以上の方形の住居址で、壁の高さは現存25cm、壁体溝は南辺の一部で確認され、その幅は35cm、深さ5cmである。住居の南壁沿いに8個の柱穴がならんでおり、このうち5個は壁体溝の中にある。これらの柱穴の径は10cmのもの1、20cmのもの5、30cmのもの2となっており、屋根を支える柱を立てたのでなく、立ち上がる壁(板か草)をつくるためのものと考えられる。屋根を支えるための柱穴は確認できなかった。床面と考えられる面において南北1.7m×東西0.3mの範囲に焼土が認められた。これは火床の拡大(連続使用に伴うもの)か、住居が火災を起こしたときに消火の目的で投げこまれた土が焼けたものかあるいは屋根にのせた土が火災のため焼けて落ちたかは不明である。この住居址に伴う遺物はないが、古墳時代のものであろう。

2号住居址 1号住居址の南西にあり、1号住居址と同様に黒色土の中で検出されたが、住居の南西隅の一部が残存していた。壁体溝は幅20cm・深さ5cmを測り、L字型に残っている。この柱穴は1つ確認でき、径10cm・深さ7cmを測る。壁体溝から考えて隅丸方形のものであっただろう。壁・床は残存せず、また、遺物は皆無であった。

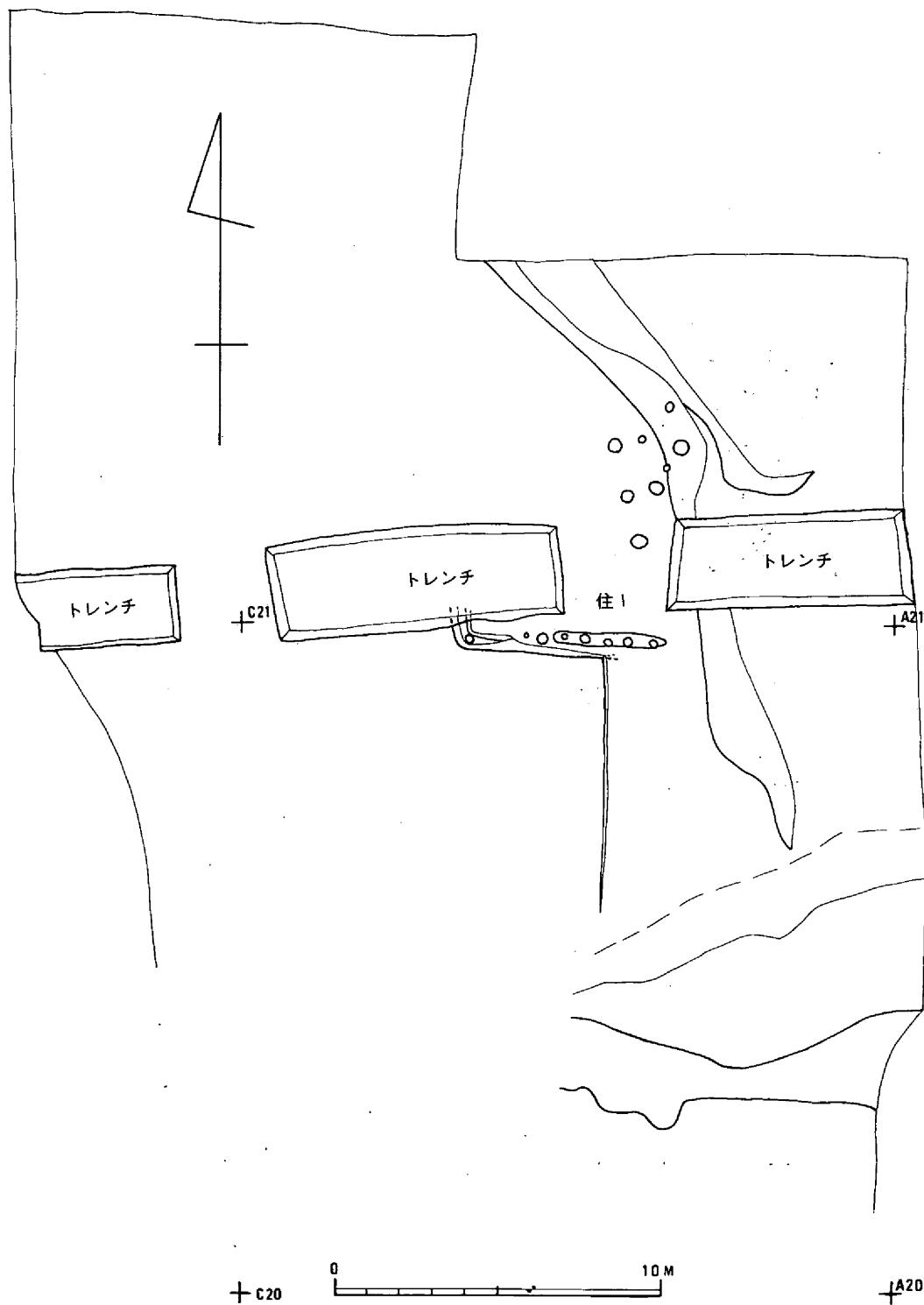
3号住居址 (第55図) 2号住居址の南東にあり、1・2号住居址とはちがって地山(礫まじり黄色土)を掘ってつくられている。2号住居址同様に南西隅の一部が残存するのみである。壁体溝は幅15cm・深さ5cmを測り、この住居址に伴う柱穴は1つで径5cmである。壁・床は残存しない。壁体溝から見て方形の住居址であったと思われる。

西江遺跡(58)



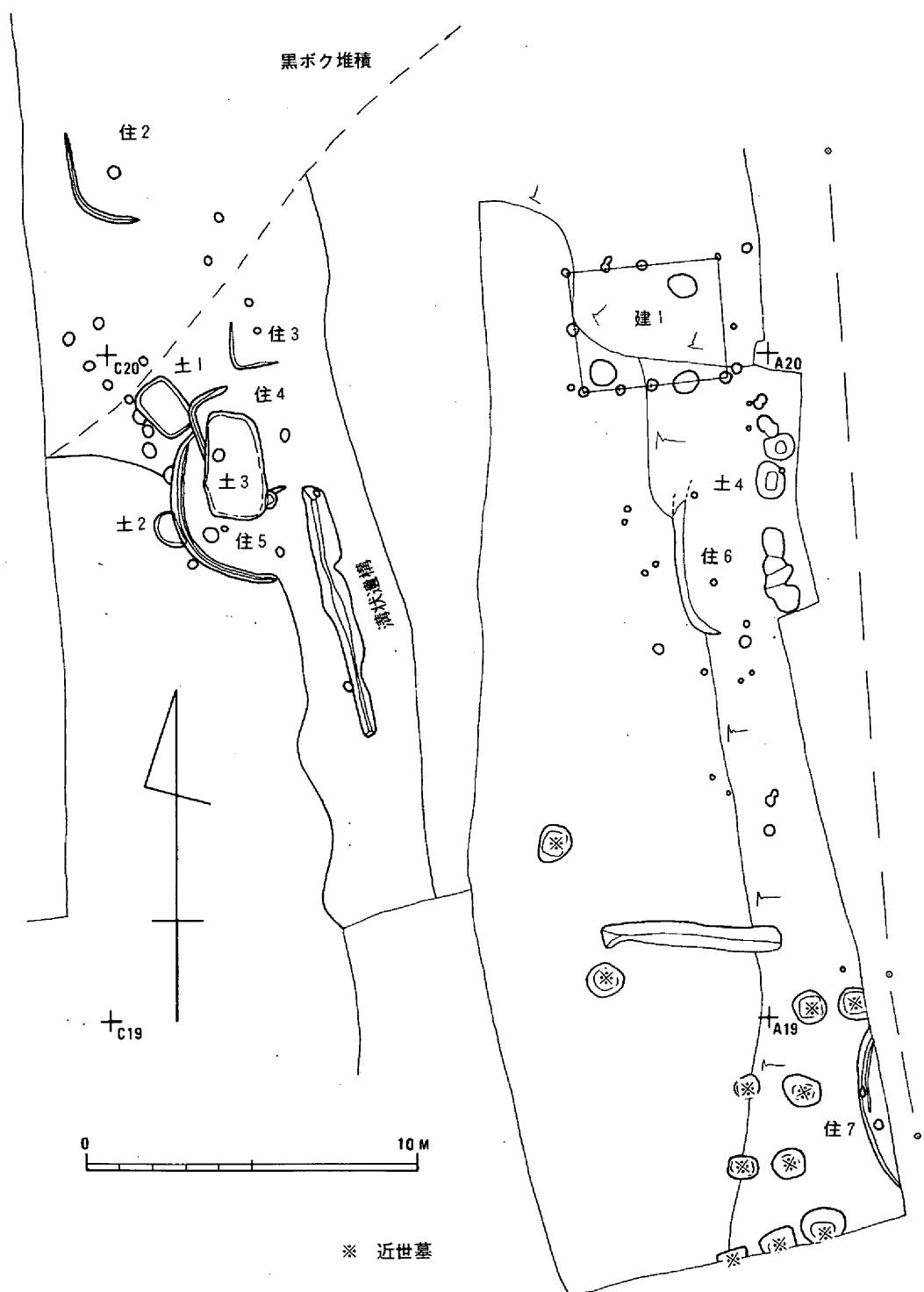
第49図 実政調査区北部平面図

西江遺跡(58)



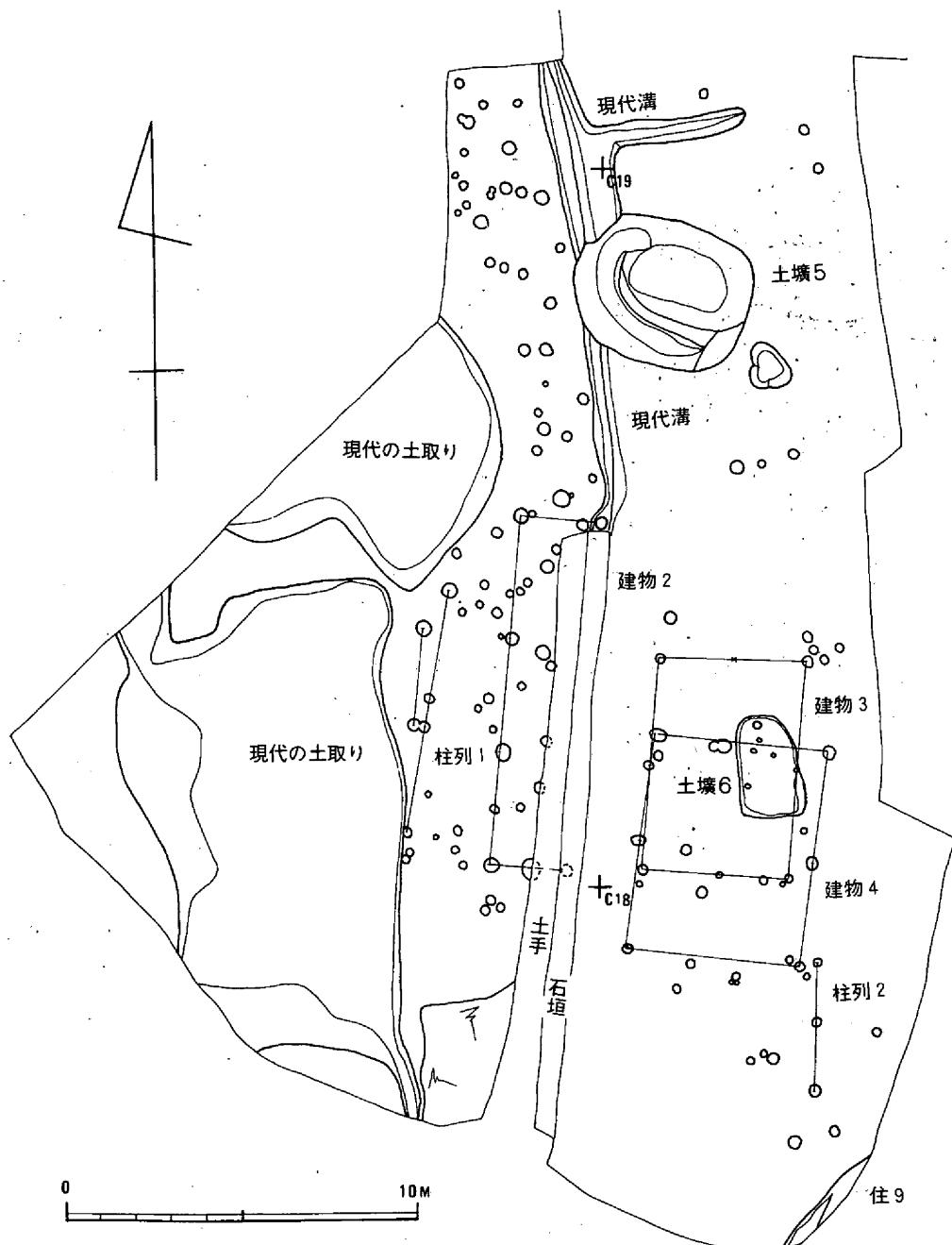
第50図 実政調査区中央部Ⅰ平面図

西江遺跡(58)



第51図 実政調査区中央部Ⅱ平面図

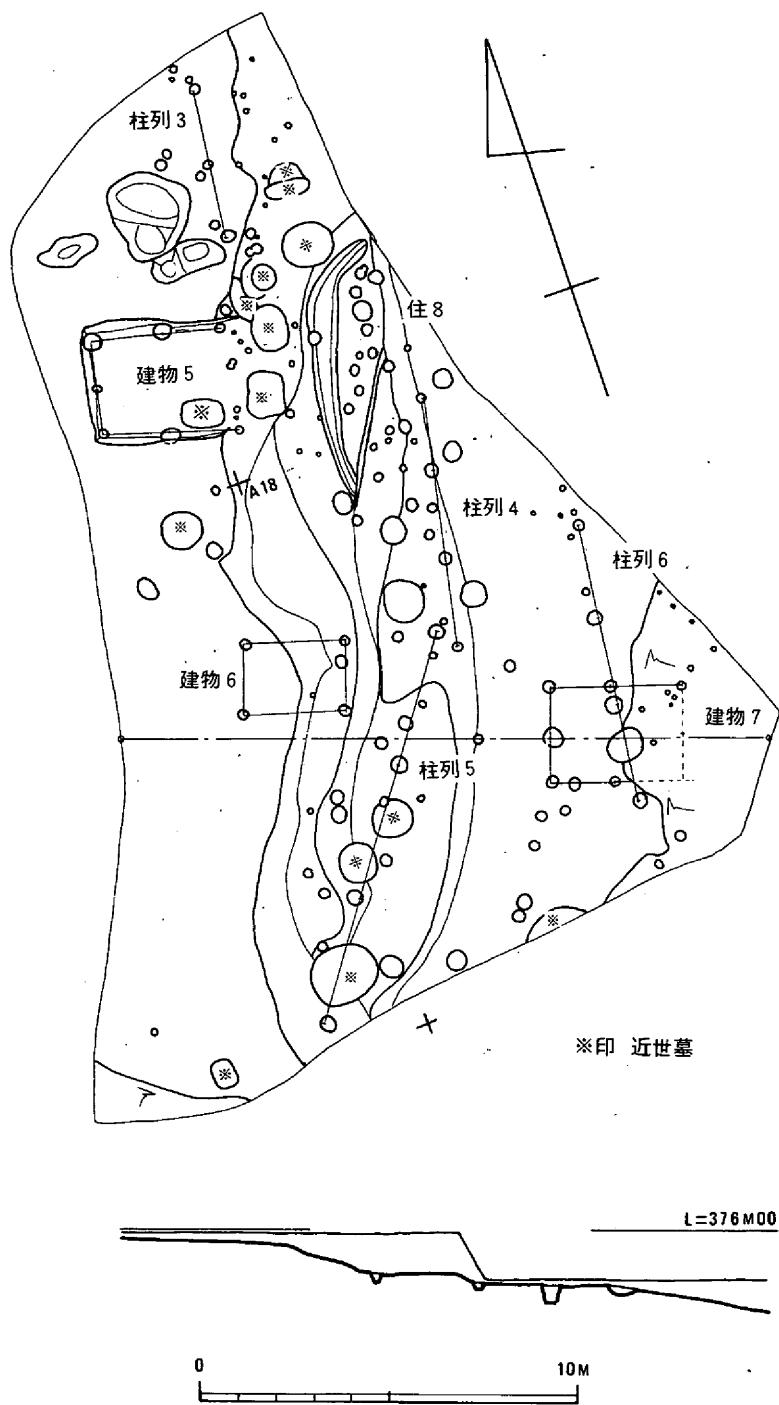
西江遺跡(58)



第52図 実政調査区南西部平面図

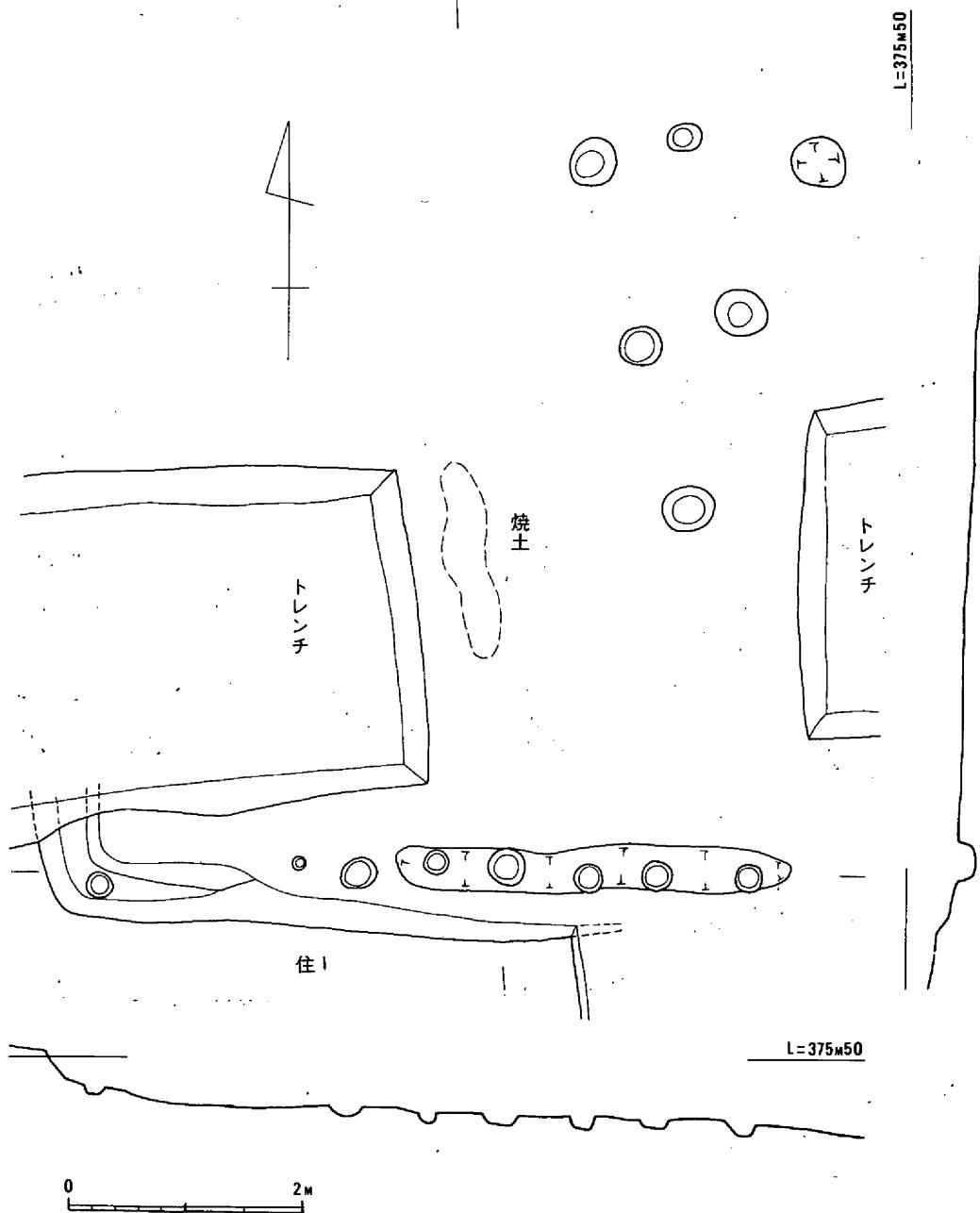
4号住居址(第55図)

この住居址は3号住居址のすぐ南にあり、地山（礫まじり黃色土）に掘り込まれたものであるが、住居址の約半分は土砂の流失に伴って消失しており、この住居址が埋没した後に師楽式土器を持つ土壤が掘られたために、さらに残存状態が悪くなっている。南北1辺3.6mの方形の住居址で、壁体の現存高10cm・壁体溝の幅13cm・深さ5cmを測り、この住居址に伴う柱穴は確認できなかった。この住居址の西辺の壁体溝の直上から3個の土師器（壠1・高杯1・椀1）が出土した。第56図にこれらの遺物を示した。1は口縁径6cm・高さ3cmの手すりね土器で、2は口縁径16.4cm・杯部の高さ7cmの脚部を欠いている高杯で、3は口縁径10cm・胴最大径13.2cm・高さ14.6cmの壠でこれらは5世紀中頃のものであろう。



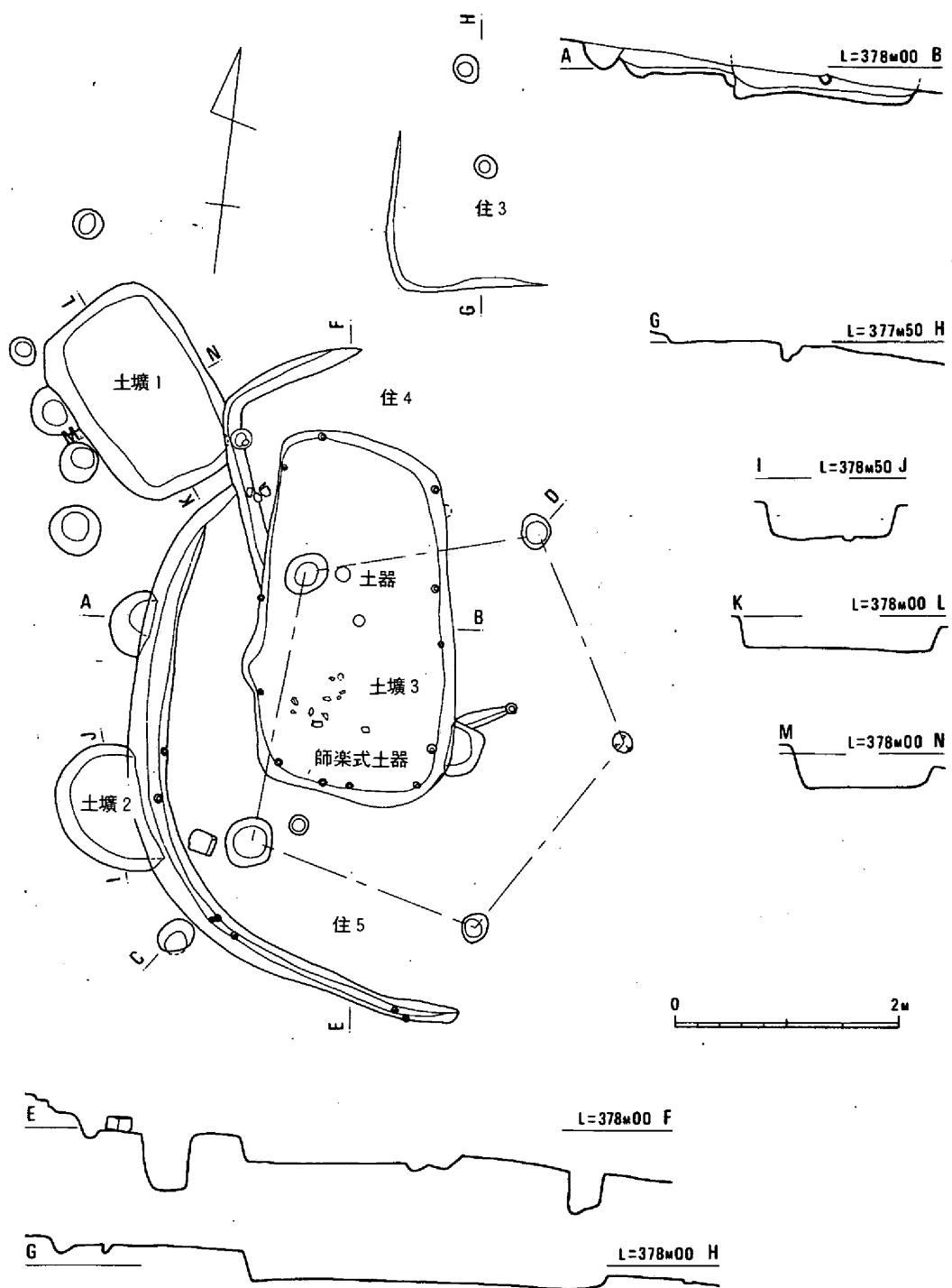
第53図 実政調査区南東部平面図

西江遺跡(58)



第54図 1号住居址実測図

西江遺跡(58)

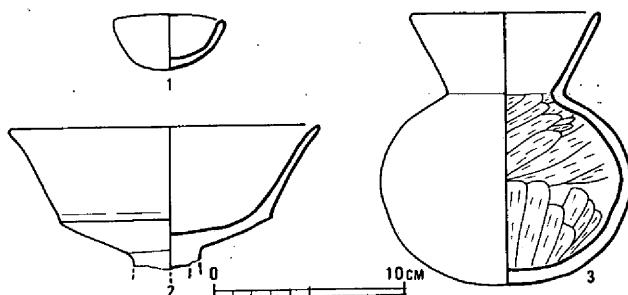


第55図 3・4・5号住居址・土壤実測図

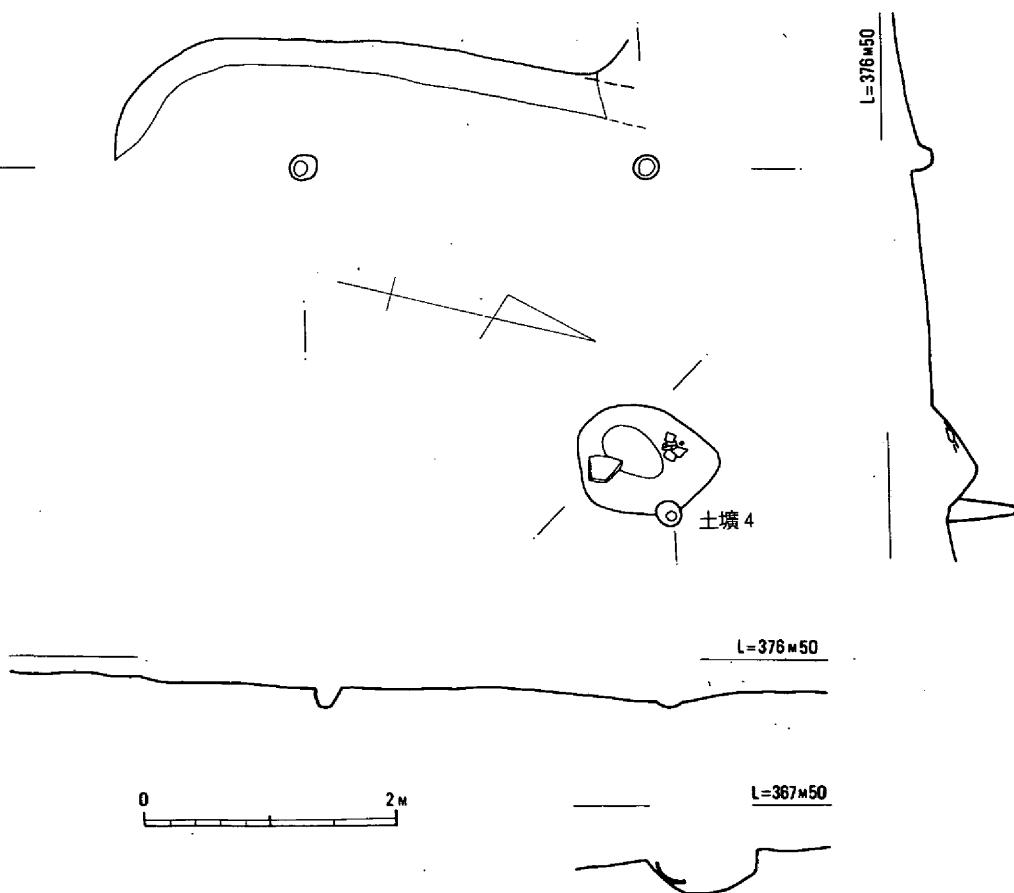
西江遺跡(58)

5号住居址(第55図)この住居址は、3号住居址のすぐ南にあり、地山を掘り込んでつくられている。この住居址も他のものと同様土砂の流失によって半分以上が流失している。全形は円形であったと思われ、推定形5.3m、壁体の現存高は15cm、壁体溝の幅は15cm・深さ7cmを

測り、柱穴は5個確認した。5本柱の住居であったのだろう。柱穴の心心距離は北西隅から右廻りに2.10m・2.00m・2.15m・2.08m・2.42mを測り、柱穴の径は22~40cm・深さ40~50cmを測る。この住居址は、4号住居址・土壤3によってさらに破壊されている。壁体溝の中に7個の小さな杭穴(杭



第56図 4号住居址出土土器実測図

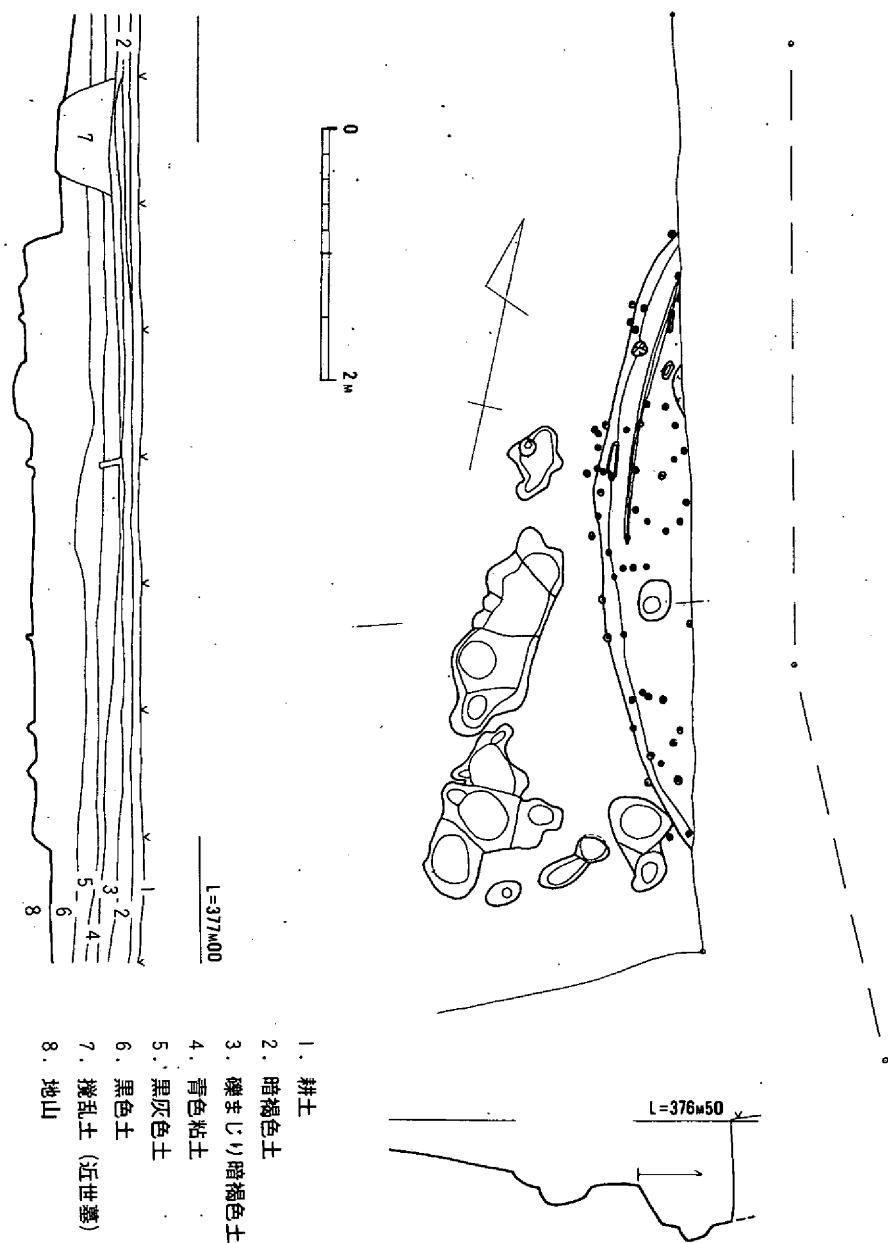


第57図 6号住居址実測図

西江遺跡(58)

穴、径5~8cm・深さ10cm)が認められ壁体保持の板を支えるための杭と思われる。この住居址の南西の柱穴の側から砥石が床面上で検出された。

6号住居址(第57図)この住居址は5号住居址の東にあって、大半は流失し、西辺の一部が残るの



第58図 7号住居址実測図

みである。壁の残存高は5cmで、壁体溝はつくられていない。柱穴は2本確認し、その径は20cm・深さ20cmを測り、床面は東西2mが残っている。この住居址の東にはいくつかのピットがあるが、この住居址には関連しないものである。

7号住居址(第58、59図)この住居址は、6号住居址の南15mのところに位置するが、その大部分は用地外にあたり、用地境のすぐ東は水田造成時に掘り下げられていて用地外部分は残存しない。弦の長さ5m・最大幅0.75mの弓形部分のみを調査した。この住居址は一度建て替えられており(拡張)建て替え前のものは推定径6m・壁体溝の幅6cm・深さ5cmを測り、建て替え後のは推定径7m・壁の高さは30cmで壁体溝はつくられていない。共に円形のもので、どちらも壁体保持の板を支えるための杭(径5~7cm・深さ5~12cm)の跡が多數みられた。この杭は壁の上と下とにあり、若干立ち上がる壁の存在も予想される。床面に見られる杭については、性格は不明である。

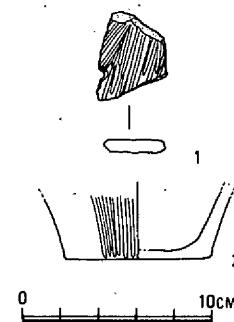
住居址の埋土中には遺物がきわめて少ない。遺物には紡錘車及び甕の破片がある。紡錘車は甕の胴部からつくったもので破片でしかない。両方から穿孔した状況がうかがえる。外面にはヘラ磨きが施されている。甕の底部は安定した平底で、外面には縦位のヘラ磨きが施されている。胎土にはきめの細いものを用い、色調は外面が灰褐色、内面が黄褐色、断面が暗灰色を呈する。

埋土中からは甕の破片が出土している。頸部で屈曲し、口縁端部は肥厚し、若干上方に拡張する。外面には凹線文が施されている。頸部外面には横なでが施され、胴部には縦位のハケメが施されている。内面にはやや斜位のハケメが施されている。色調は内外面とも帶黃灰白色を呈し、断面は内側半分が灰色を呈している。年代は弥生中期後半である。

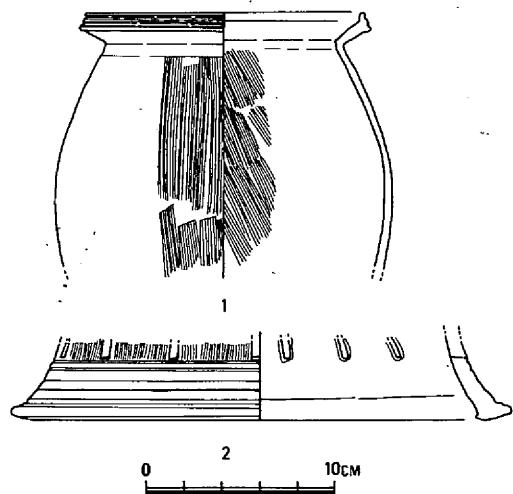
(2) 土壙

土壙1(第55図)この土壙は、5号住居址に接してその北西に存在し、4号住居址によって一部が削り取られている。1.86m×1.20mの隅丸長方形を呈し、深さは0.38mを測る皿状の土壙で、底は平坦である。この土壙が貯蔵壙かあるいは墓穴であるか不明であり、覆い屋等の存在の有無は確認できなかった。この土壙の中からは弥生時代中期後半の甕(第60図1)が出土した。5号住居址によって半分削り取られている円形土壙2などと同じ時期に属するものであろう。

土壙2(第55図)この土壙は、方形土壙の南にあって、5号住居址によって半分切り取られてい



第59図 7号住居址
出土遺物実測図

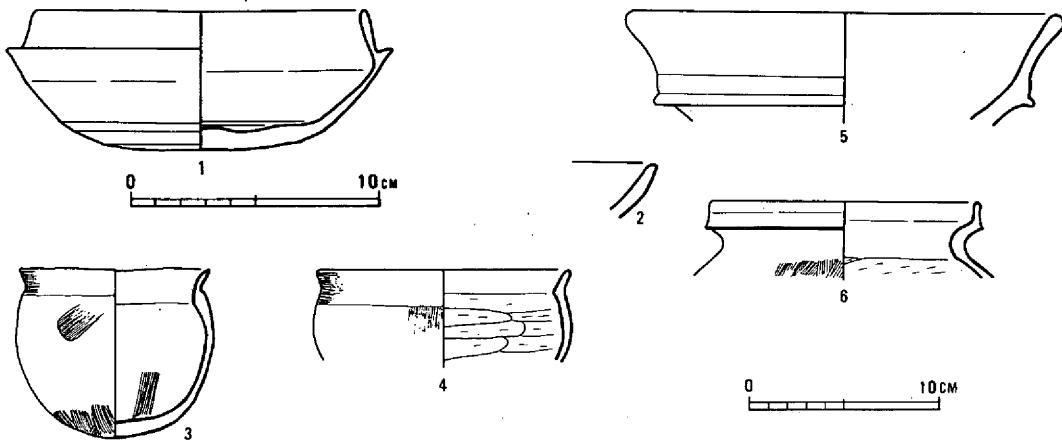


第60図 土壙1・2出土土器実測図 (1/4)

西江遺跡(58)



第61図 師樂式土器実測図 (1~29土壤3, 30~32柱穴)

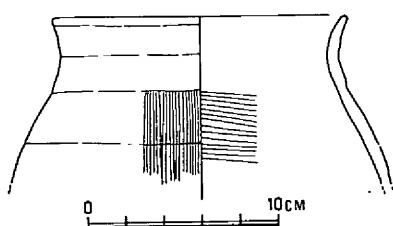
第62図 土壙3出土土器実測図 ($\frac{1}{4}$)

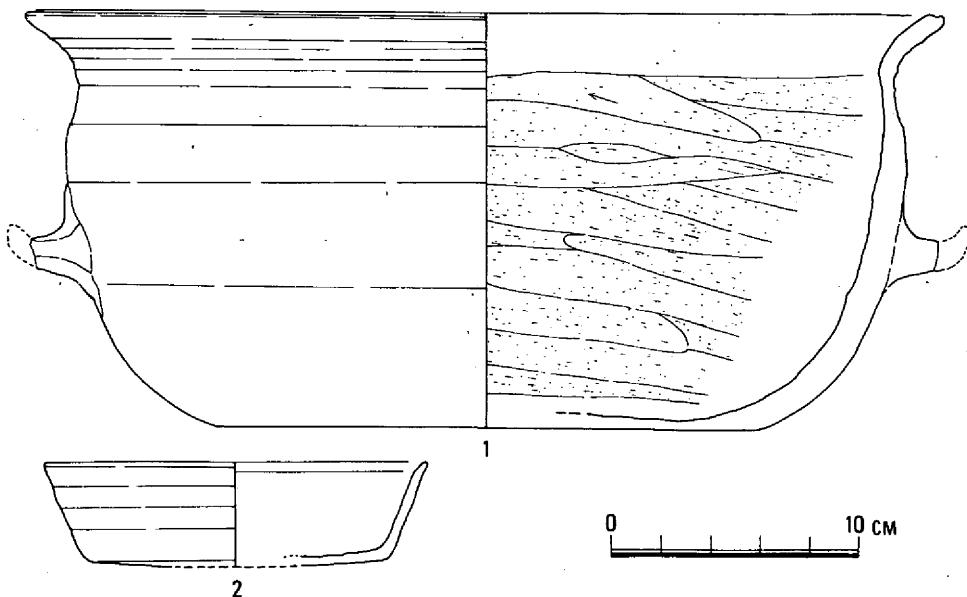
る。径1m×1.2mの楕円形を呈し、深さ30cmを測る。土壙の底は平坦で、底の中央に径10cm・深さ5cmの小さな柱穴状の穴が穿たれている。この土壙が貯蔵穴であって、底の小穴は覆い屋をささえるために柱を立てていたものであろう。この土壙出土の遺物は、前記の方形土壙出土のものと同時期に属するものであり、この土壙が方形土壙と同時に存在していたといえよう。これら土壙と7号住居址とは25m以上離れており、7号住居址に伴う土壙ではなく、すでに流失してしまって現存しない遺構あるいは縦貫道用地外西側に存在の予想される遺構に伴うものと思われる。

埋土中からは、器台の破片とサヌカイトの小破片が出土している。第60図2は器台である。脚部は緩やかに裾がひろがり、端部は肥厚して張り出す。三角形の透しを配している。外面には縦位のハケメが施されている。脚部の下面是すれていて使用の痕跡が明瞭である。胎土には微砂を含み、色調は外面が灰白色、内面が淡灰色を呈し、断面は灰色を呈する。他に甕の小破片が少量検出されている。

土壙3(第55図) この土壙からは師楽式土器が出土した。国信調査区の南半から実政調査区にかけて多数の師楽式土器が出土しているが、遺構に伴っているのはこの土壙が唯一の例である。また、完形の師楽式土器は、この土壙出土のものだけである。

この土壙は、4号住居址および5号住居址を切って掘られており、東西1.72m×南北3.24mの隅丸長方形を呈し深さは現存25cmを測る。床はほぼ平坦につくられている。土壙の壁沿いに12個の杭穴が存在し、その径は5~7cm・深さは5~10cmである。これら杭穴群は、この土壙に覆い屋をつけるために打たれた杭の跡と思われる。この土壙は、覆い屋のあった貯蔵穴で、この時代(6世紀後半——後述)の貯蔵穴の形態を示すものとして注目されよう。この土壙は、4・5号住居址

第63図 土壙4出土土器実測図 ($\frac{1}{4}$)

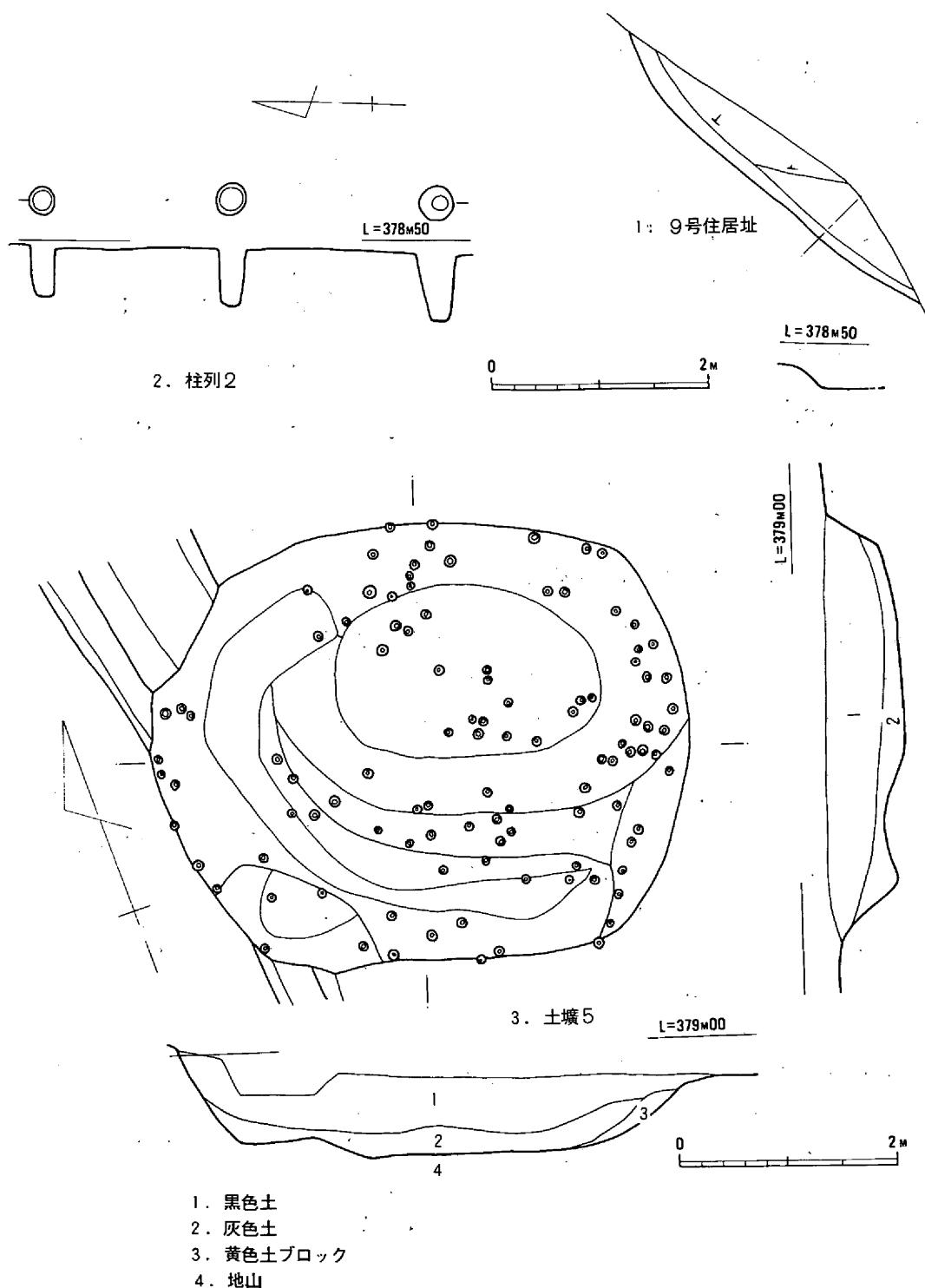
第64図 土壌4出土須恵器実測図 ($\frac{1}{3}$)

や弥生時代の2個の土壌などと同じく表土層を除去して検出したもので、地山（黄色土）に掘りこまれており、土壌の中には黒色土が堆積し、若干の濃淡の差によって上下2層に分離できた。下層の方には遺物はほとんど含まれていなかったが、上層の中に師楽式土器・須恵器・土師器が含まれており、これら遺物は土壌そのものからみると底から約10cm浮いた状態で検出された。西江遺跡全体で399片（完形2個を含む）の師楽式土器が出土し、その内29片（完形2個を含む）がこの土壌に伴うものである。ほぼ中央に完形の師楽式土器が上向きに検出され、他方の完形品は数片に割れて前者の南側70cmの位置に存在し、その他の破片の大部分は後者の完形品の近くに散在していた。なお、須恵器（杯身）は師楽式土器の破片群と共にあり、小型の鉢（完形——土師器）は中央の師楽式土器の50cm北北西の位置に下向きに存在していた。これらの遺物は、床面から約10cm浮いた状態で検出されたものであるが、薄手の小型の完形品も含まれているので、この土壌が埋まるとき黒色土と共に流入したとは考えられない（第62図の5、6は埋没時の混入であろう）。須恵器は、6世紀後半に属するもので、この土壌の掘られたのもこの時期と思われる。なお、出土遺物については、まとめて後述しているので参考されたい。

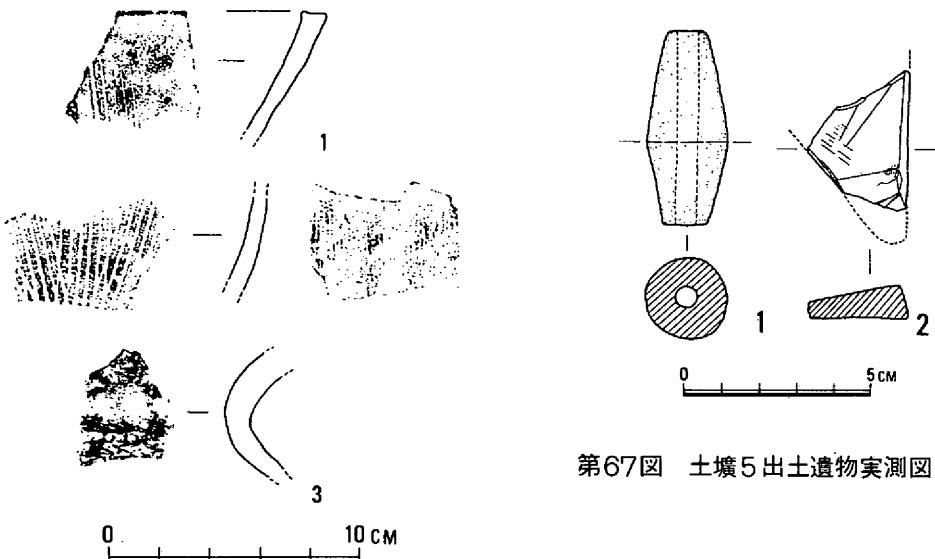
土壌4（第57、64図）6号住居址の東側、地山の傾斜変換部に数個の土壌が南北に並んでいる。いずれも径60～80cm、深さ20～30cmを測る不整円形を呈している。これらの内、4つの土壌には奈良時代の遺物が含まれていた。土壌4では須恵器、土師器片が含まれており、その他の土壌には土師器片が少量ずつ含まれていた。

土壌4の埋土中からは須恵器と土師器が出土している。須恵器には鉢と杯がある。鉢（第64図1）

西江遺跡(58)



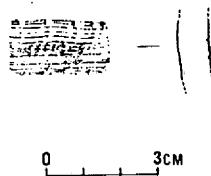
第65図 住居址・柱列及び土壤実測図

第67図 土壌5出土遺物実測図 ($\frac{1}{3}$)第66図 土壌5出土亀山焼実測図 ($\frac{1}{3}$)

は口径が36.8cmと大型のもので、両側に把手が付いている。約半分が残っている。口縁は少し湾曲しながら外反し、端部には1本の凹線がある。全体の器形はほぼ錐底状を呈していて、底部は平底である。外面は横なでが施されていて、内面には横位のヘラ削りを施し、その後整形していない。胎土には微砂を含み、色調は内・外・断面とも灰白色を呈する。杯(2)は平底で、胴部はやや外方へひらく。端部はうすくなり、全体に横なでの調整が行われている。胎土中には黒色の粒子が含まれている。色調は灰白色を呈する。土師器には甕の破片がある。口縁部は湾曲しながらやや外反し、端部は丸い。胴部の肩は張っていない。口縁部は横なでし、胴部には縦位の太いハケメを施している。内面には横位の太いハケメが施されている。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。以上の遺物は奈良時代に属するものと推測される。

土壌5(第65図3, 66, 67図)5号住居址の南15mの地点にあって、東西5m, 南北4mを測る楕円形を呈し、その深さは0.7mである。検出当時は住居址と思われたが、内部を埋めている黒色土・灰黒色土を除去すると平坦な床面ではなく、若干の凹凸のある床であり、壁・床には多くの杭が打ち込まれた跡が検出された。床は中央やや南寄の所が弧状に若干高くなっている。その外側の壁の直下は若干凹んでいて溝状となっている。床及び壁にみられる多数の杭跡は径5~10cm, 深さ5~10cmを測る。

土壌の埋土中には亀山焼の擂鉢、甕、土錐、砥石などがある。亀山焼の擂鉢(第66図1, 2)は胴部からやや内湾しながら高ちあがり、端部は若干肥厚して上面は平坦になる。内面には縦位のかきめ



第68図 壺状文のある土器片実測図

がある。胎土には砂粒を多く含み、色調は内外面とも灰白色、断面が灰色を呈する。甕は頸部の小破片で、外面には格子目の叩きが施されている。胎土には微砂を含み、色調は淡青灰色を呈する。

砥石(第67図2)は埋土の上部で検出されたもので小破片である。破片は三角形を呈している。4面とも使用あとがみられ、平面の部分に直線的にすったあとがある。

土錘(第67図1)は完形のもので、形は筋錘形を呈する。大きさは全長5.2cm、最大部の直径2.2cm口径1.2cmを測る。穴はほぼ同じ直径で管状になっている。長辺の一方が特に磨滅している。重量は20.5gである。色調は黄灰色を呈し、一部に黒斑がみられる。

簾状文のある土器片(第68図)

実政南の小さな土壙中から簾状文のある小破片を検出した。同土壙中には古墳時代後期の甕片や弥生式土器の小破片も含まれていた。大きさは2.6cm×1.5cmのものである。外面にはハケメの上から簾状文を施している。胎土には0.2~1mmの砂粒を含み、色調は黄褐色を呈する。

(3) 建物および柵列

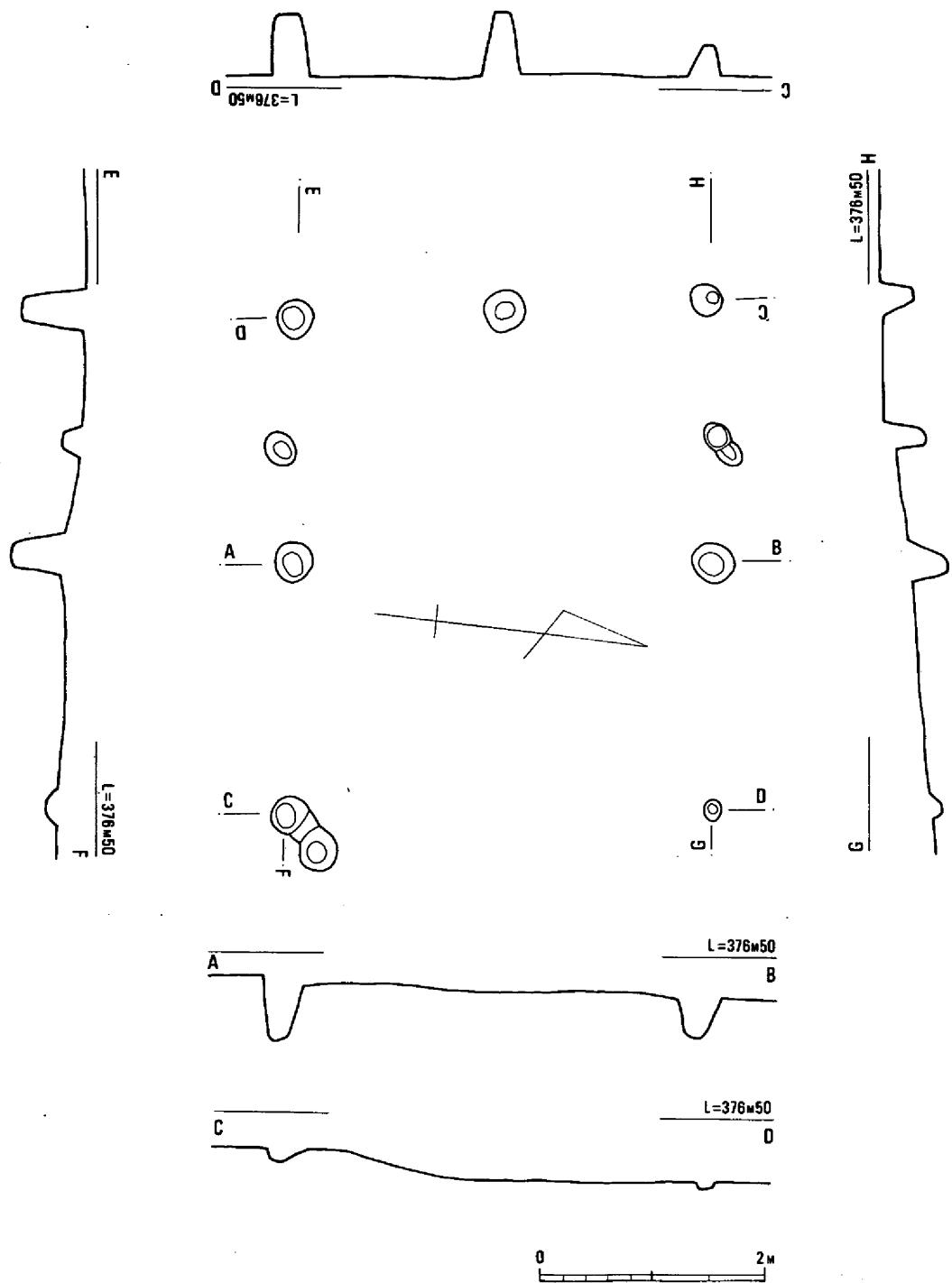
1号建物(第69図)この建物は、6号住居址の北にあり、地山の傾斜変換点に位置している。南北2間(3.6m)×東西2間(4.5m)で、北と南の2辺にはそれぞれ中柱が立てられている。傾斜変換点に建てられているため、東辺の中央の柱穴と北辺の東側の中柱は消滅しており、北東の隅柱は底部がわずか残るのみである。この建物の心心距離は、南北各1.8m、東西は北辺が西から2.3m・2.2mで南辺が各2.2mであり、西辺の柱列の方向はN6°Wで、柱穴径は26~36cm・深さは15~55cmを測る。南辺と北辺では、それぞれの柱の間の中央に中柱が立てられており、概ね、中柱は隅柱よりも浅い穴に埋められている。時代は平安時代と考えられ、6号住居址の東にある土壙群がこれに関連するものであろう。

2号建物(第70図)この建物は建物3~7などと共に実政調査区の南端部に位置しているものである。東西2間×南北3間の建物であったと思われるが、東辺は水田造成時に掘り下げられていてまったく残存していない。残存していた柱穴は、北辺の中央のものおよび西辺のもののみである。柱穴の心心距離は、北辺では2.1m、西辺では北から3.3m・3.2m・3.2mで、柱穴の径は40~50cm・深さは55~70cmで、南端の2個は中を段状に残して径20cmの細い穴が下に続いている。この建物に使用された柱の太さを示すものといえよう。南北の柱列の方向はN4°Eの方向を向いている。この建物は、実政調査区で調査した建物の内では中心的役割をはたしていた建物であり、その時代の伴う遺物はないが奈良~平安時代に建てられたものと思われる。

3号建物(第71図)この建物は2号建物のすぐ東にある建物である。東西2間(4m)×南北2間(6m)で、柱穴は径20~40cm・深さ25~35cm、南北の柱列の方向はN4°Eを測る。心心距離は東西の南辺で西から1.50m・1.90m、南北の西辺で北から3.10m・3.00mである。2号建物と平行する建物であるが、2号建物に比して貧弱な建物である。

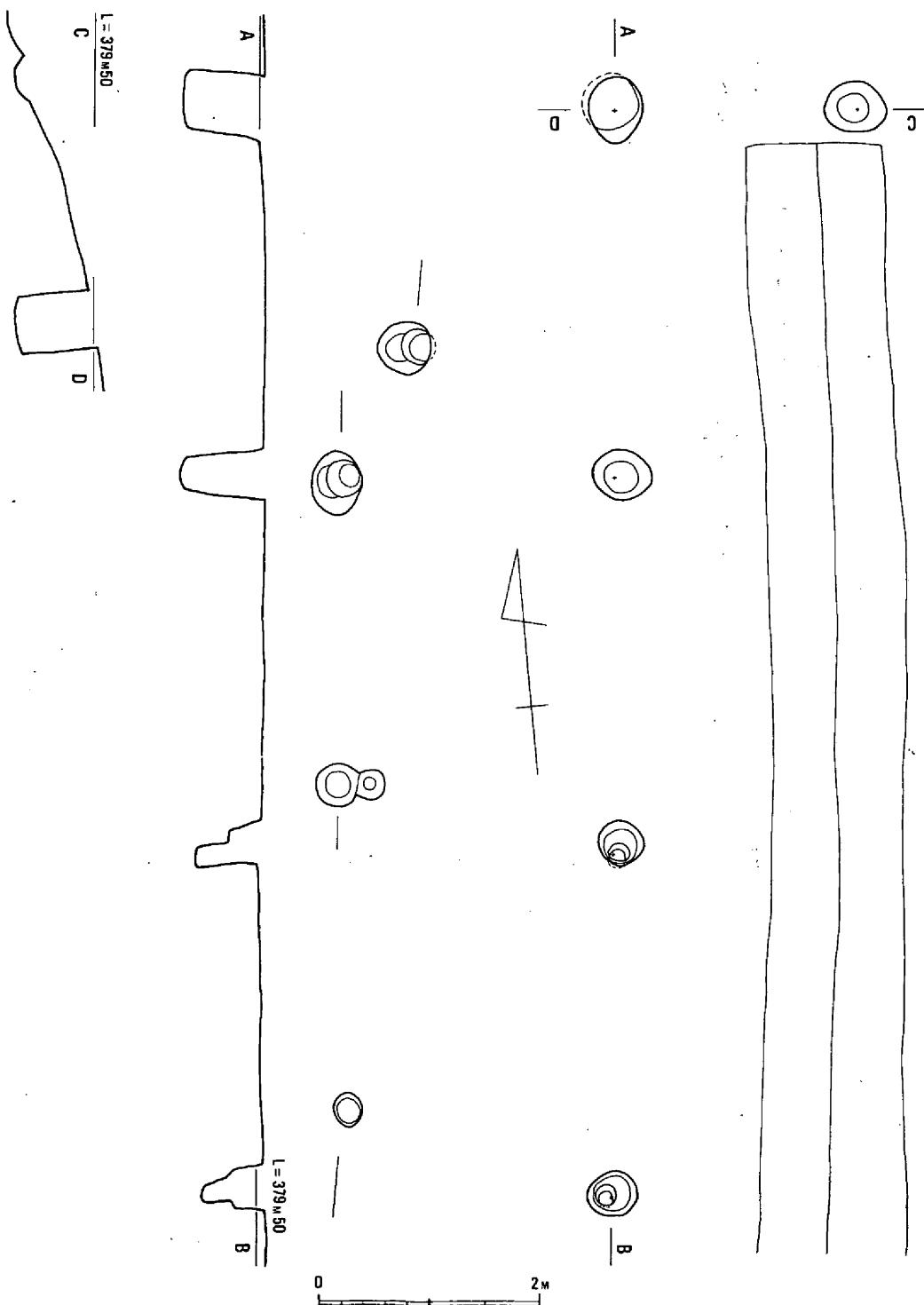
4号建物(第71図)3号建物と一部重なりあっている建物である。東西1間(4.90m)×南北2間(6.05m)で、柱穴の径は25~45cm・深さ25~30cm、南北の柱列の方向はN2°Eを測る。心心距離は東西4.90m、南北の西辺は北から3.00m・3.05mで、東辺は北から3.15m・2.90mを測る。

西江遺跡(58)



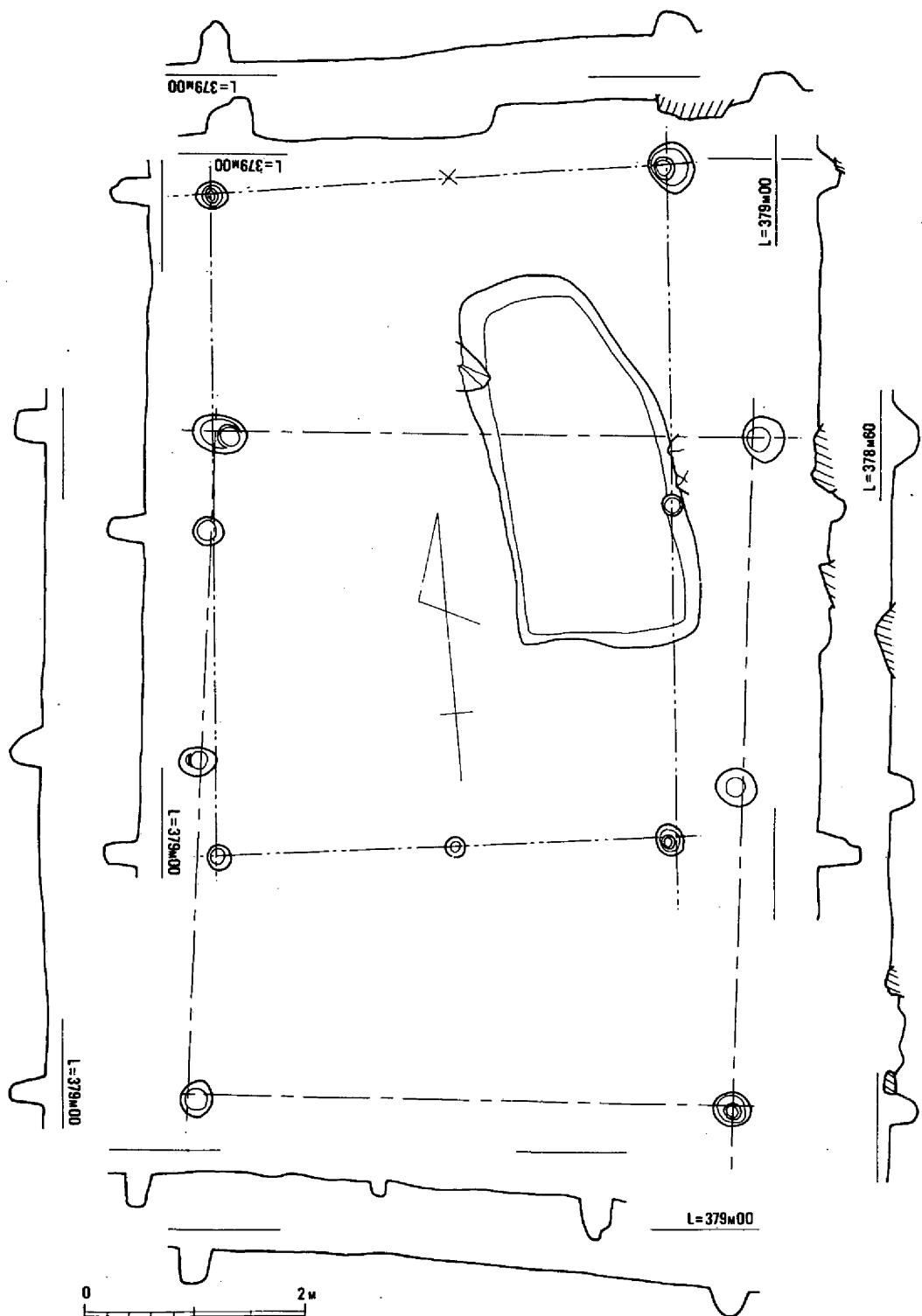
第69図 1号建物実測図

西江遺跡(58)



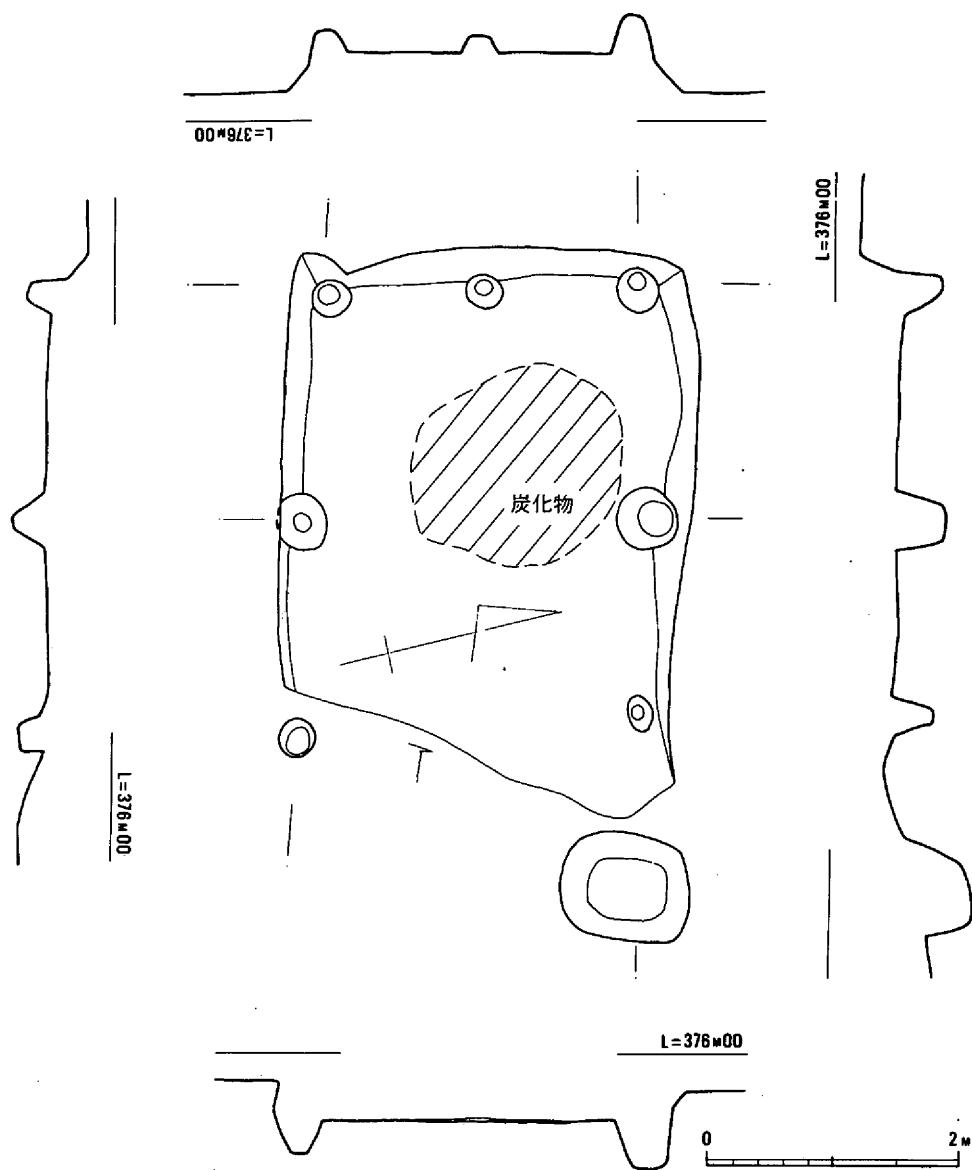
第70図 2号建物実測図

西江遺跡(58)



第71図 3(上)・4(下)号建物実測図

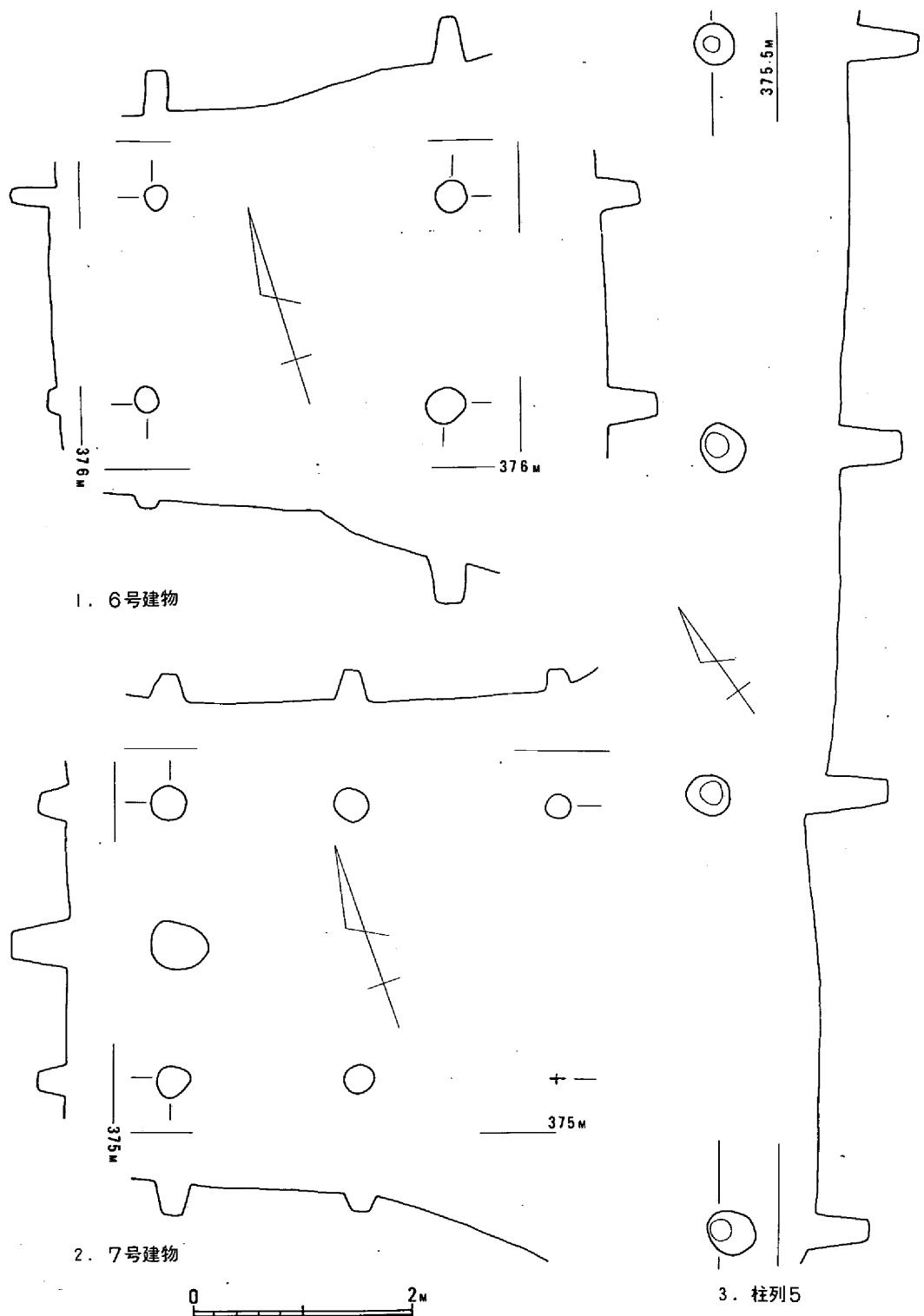
西江遺跡(58)



第72図 5号建物実測図

5号建物(第72図)この建物は4号建物の東にあって、垂直距離1.5m下がった所に存在する。この建物は、竪穴住居と同様に方形の掘り込みを行い平坦な床をつくっている。床と壁の境に穴を掘り柱を立てている。方形の掘り方の上端の長さは南北3.3m・東西4.5m以上で、壁の高さは35cmを測る。壁沿いに9個の柱穴があり、心心距離は南東端の柱から右廻りに1.70m・1.80m・1.30m、1.20m・1.85m・1.55mを測り、柱穴の径は30~48cm・深さは床面から20~35cmで、西辺の柱列はN6°W方向に並んでいる。床面には炭化物(わらや材の小片)がかなりの広さに存在する。これは建物が火災にあったことを示すものであろう。この建物は、建物址として扱ったが、住居址として扱ってもよ

西江遺跡(58)



第73図 6・7号建物・柱列5実測図

いもので、どちらとも決める材料は残存していない。

6号建物(第73図)この建物は、5号建物の南にあり、地山の傾斜の変換点につくられた建物である。東西1間(3.70m)×南北1間(1.85m)の建物で、心心距離東西3.70m・南北1.85m、柱穴の径は25~35cm・深さ10~40cmを測り、西辺の柱穴はN8°E方向にならんでいる。本来は1間×1間の建物でなく、東西2間×南北1間のものであった可能性もある。

7号建物(第73図)この建物は6号建物の東にあり、少し下がった位置に建てられた建物である。東西2間(3.50m)×南北2間(2.60m)の建物で、南東隅の隅柱と東辺の中央の柱は残存していない。心心距離は東西1.75m・南北1.30m、柱穴の径22~42cm・深さ15~50cmで、西辺の柱列はN10°Eの方向に並んでいる。1~7号建物にはまったく遺物を伴っていない。

(4) 柱列

柱列1(第52図)柱列1は2号建物の西約2mの所に所在する。4個の柱穴より成り、N8°E方向に並んでいる。心心距離は北から3.0m・0.9m・3.0mで、その径は20~30cmを測る。柱列1の西側は現代の土取り場跡で、この柱列が建物の一部を示すものかあるいは単に柵となるものかについては不明である。

柱列2(第52図)柱列2は、3、4号建物のすぐ南にあり、3個の柱穴から成っていてN2°W方向に並んでいる。その心心距離は北から1.75m・1.80mで、その径は22~32cm・深さは45~60cmを測る。この柱列2は建物になる可能性はなく、柵となるものである。

柱列3(第53図)柱列3は、5号建物のすぐ北にあって3個柱穴から成っていて、N10°E方向に並んでいる。心心距離は北から3.0m・3.0mで、柱穴の径25~35cmを測る。これも建物になる可能性はなく、柵となるものである。

柱列4(第53図)柱列4は、5号建物の東にあって、4個の柱穴から成っていて、N18°E方向に並んでいる。心心距離は北から1.95m・2.30m・2.30mで、柱穴の径20~40cmを測る。建物の1辺となるものではなく、柵となるものである。

柱列5(第73図)柱列5は、柱列4のすぐ南にあって、4個の柱穴から成っていて、N45°E方向に並んでいる。心心距離は北から3.65m・3.65m・3.50mで、柱穴の径35~45cm・深さは55~75cmを測る。柱穴の径も太く、実政調査区の中ではもっともしっかりした柵列であろう。

柱列6(第53図)柱列6は、7号建物を横切る形で存在し、4個の柱穴から成っていて、N8°W方向に並んでいる。心心距離は北から2.50m・2.30m・2.60mで、柱穴の径は30~45cmを測る。これも建物の一部となるものではなく、柵列である。

(4) 近世墓

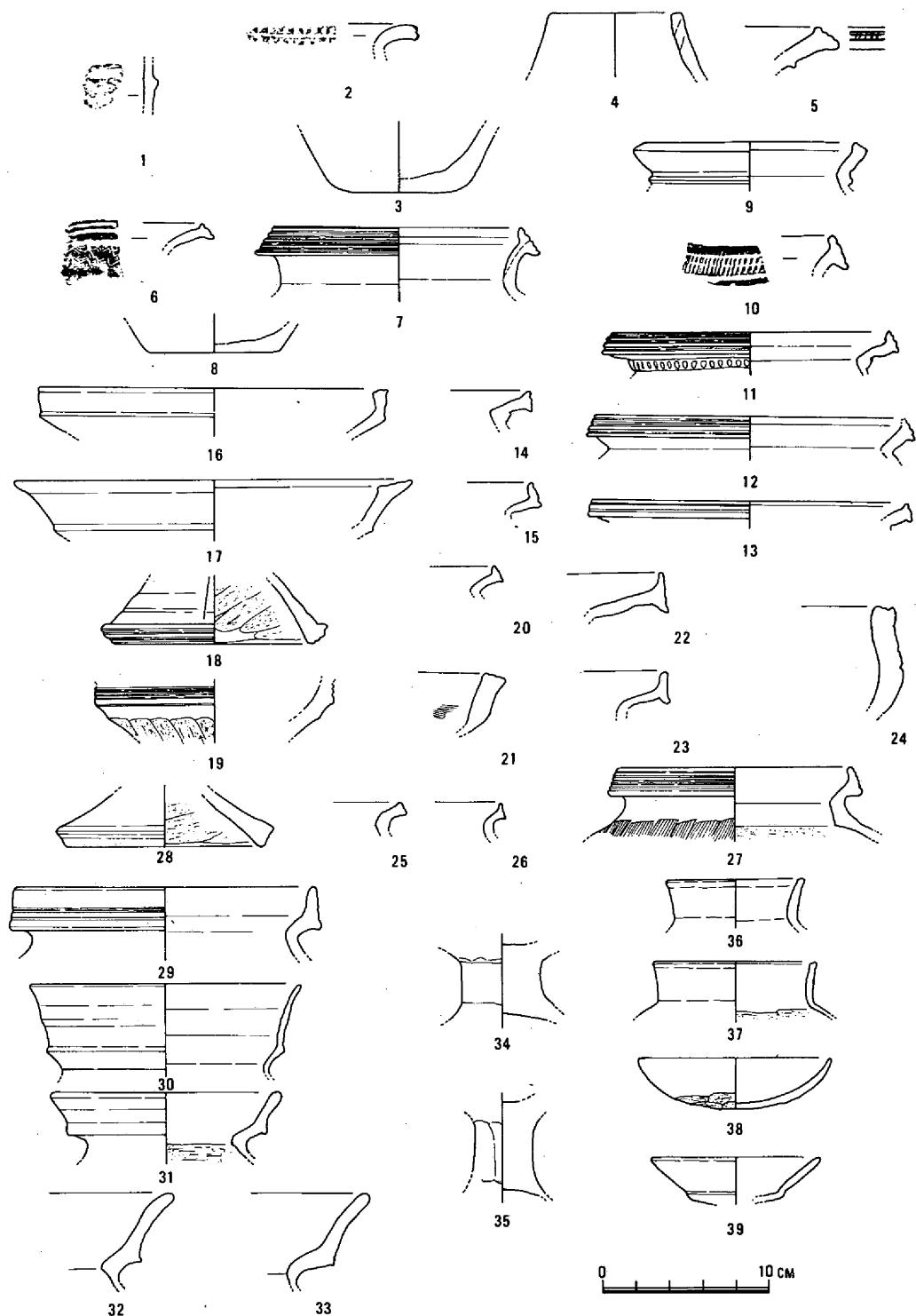
実政調査区南半の7号住居址付近から7号建物付近にかけて23基の近世墓を検出した。掘り方上端は、円形・楕円形・隅丸方形などを呈している。実政調査区の他の遺構(住居址や建物など)は单一土(黒色土)で埋まっているのに対して、この近世墓は黄色土と黒色土が塊状にまざっている。なお5号建物の南のものには、大型蛤刃石斧が混入していた。

(6) その他の遺物

縄文・弥生・土師器 (第74~76図) 1は縄文晩期の甕の小破片である。きざみめを施した貼り付け凸帯を配している。胎土には微砂を含み、色調は外面が黄褐色、内面が帶灰黄褐色、断面が灰色を呈する。2は甕の口縁部で頸部から外方へ折れ曲がり外面に1本沈線を施し、きざみめを施している。胎土には微砂を多く含み、色調は黄褐色を呈する。3は壺の底部らしい。表面は磨滅していて詳細がわからない。胎土には砂粒を多く含み、外面は黄褐色、内面は灰色を呈する。4は無頸壺の口縁部と推測される。内面には粘土の接合部が明瞭である。色調は橙色を呈する。5, 6は壺の口縁部で、朝顔形にひらき、端部は肥厚し、外面には凹線文を施している。5の口縁にはきざみめを施している。外面に凸帯を配している。6では上面に波状文を施している。いずれも胎土に微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。7は壺と考えられるものの口縁部で、頸部から上方へやや外反しながら立ち上がる。口縁端部は肥厚して上下に拡張し、外面には凹線文を施している。胎土には微砂を含み、色調は内外面が黄褐色、断面が灰色を呈する。8は平底の底部である。色調は灰黄色を呈する。9は甕の口縁部で「く」字状に外反し、端部は少し肥厚して内側に張り出す。頸部には断面三角形の貼り付け凸帯を配している。胎土には微砂を含み、色調は内外面が黄褐色、断面が灰色を呈する。10は壺の口縁部と推測される小破片である。外湾しながら開き、端部は肥厚して上下に拡張し、外面には凹線文を施してから、ヘラによるきざみめを施している。11~15は甕の口縁部で「く」字状に屈曲して外反し、端部は肥厚して、上下に拡張する。外面には凹線文を施している。11, 14では頸部へきざみめを施した貼り付け凸帯を配している。胎土は微砂を含み、色調はほぼ黄褐色を呈する。16は高杯の口縁部で、口縁は直立し、端部は若干肥厚する。外面は無文である。17は高杯の口縁部で、口縁は外方へのびる。端部の外側がさらに外方へのびる。全体に丹塗りが施されている。胎土はきめが細かい。18は高杯の脚部で、緩やかにひろがり、端部は肥厚して外方に張り出す。外面には縦位にヘラ描きの沈線を施す。内面はやや斜位のヘラ削りが施されている。胎土には微砂を含み、色調は淡黄褐色を呈する。19は壺の胴部の破片である。胴部最大径のところに凸帯を配している。胴部外面の下半には縦位のヘラ削りが施されている。胎土には微砂を含み、色調は灰褐色を呈する。20は甕の口縁部で、やや上方に湾曲しながら外反し、端部は肥厚して上下に拡張する。胎土はきめが細かく、色調は黄褐色を呈する。21は高杯の口縁部と推測される。口縁はやや外開きぎみにのびる。器壁は厚い。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。22, 23は壺の口縁部の小破片である。口縁は頸部から外側に大きくひろがり、端部は肥厚して上下に拡張する。口縁の下を除いて内外面とも丹塗りが施されている。胎土には雲母を含み、断面の色調は茶褐色を呈する。22は長頸壺の口縁部である。24は鉢の口縁部で器壁は厚く、口縁は上方にのび、外面には沈線とへら先による刺突文が施されている。25は甕の口縁部小破片で、端部は若干肥厚する。内面には頸部直下からヘラ削りが施されている。26は甕の口縁部で、頸部から湾曲しながら外反し、端部は肥厚して上方へ拡張する。内外面とも丹塗りが施されている。胎土はきめが細かく、断面の色調は黄褐色を呈する。27は甕の口縁部と推測されるもので、頸部から屈曲して外反し、端部は肥厚して上方に拡張し、外面には凹線文が施されている。胴部では肩が張るらしい。肩部には縦位のハケメが施されている。内面では頸部直下から横位のヘラ削りが施されてい

る。口縁部は内外面とも丹塗りが施されている。29は甕の口縁部で頸部から「く」字状に短かく外反し、端部は肥厚して上方へ立ち上がる。胎土には微砂を含み、色調は灰白色を呈する。30～33は甕の口縁部で頸部から折れ曲がり、短かく外反してくびれ、さらに斜め上方に大きく拡張する。30は器壁が薄く、口縁端部はうすくなっている。胎土は細かく、色調は内外面が灰白色、断面が黒色を呈する。31～33は比較的器壁が厚く、口縁のくびれ部分は肥厚し、外方への張り出しがみられ、口縁端部は丸くなっている。内面は口縁直下から横位ヘラ削りが施されている。いずれも胎土には微砂を含み、色調は灰白色～淡黄褐色を呈する。34、35は高杯の柱状部で中実のものである。34は短かく、35はややはそくて長い。34は胎土に細砂を含み、色調は外面が黄褐色、内面が灰色を呈する。35は胎土に微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。36、37はやや頸の短かい壺の口縁部である。口縁は若干ひらくがほぼ直立ぎみで、端部はやや角張っている。内面は頸部直下から横位のヘラ削りが施されている。外面には丹塗りが施されている。36は内面も頸部にも丹塗りが施されている。いずれも胎土には雲母を含みやや茶褐色を呈する。38は皿形の土器で底の浅い丸底で、底部周辺の外面は横位のヘラ削りが施されている。胎土には微砂を含み、色調は橙色を呈する。39の器形は明瞭でないが高杯か小型器台の杯部らしい。口縁は一度くびれてさらに外反する。胎土はきわめて細かく、色調は黄褐色を呈する。40は椀形を呈する土器で丸底の底部からやや径が小さくなり、端部は薄くなる。内面には横位のヘラ削りが施されている。胎土には細砂を少量含み、色調は黄褐色を呈する。41は小形の壺で完形品である。頸部はくびれてほぼ直立する。両側に2個と1個の焼成後の穿孔が施されている。胴部はやや肩が張り、かなりいびつな形になっている。外面には若干なでたあとがみられ、内面には横位に指でなでて整形したあとが明瞭である。底部は製作過程でやわらかいうちに植物の上に置いたようで、その圧痕が明瞭であり、やや平たい部分がある。胎土には微砂を含み、色調は灰褐色を呈する。42は40に若干似ているが口縁部が直立し、胴部がやや膨らむ点が異なる。口縁部は横なし、胴部の内面も横位に指でなでたあとが明瞭である。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。43は口縁部が短かく外反し、胴部がやや拡張する器形である。内面には少し斜位のハケメが施されている。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。44、55はほぼ椀形を呈するものである。44、45、48、49はほぼ全形のわかるものであるが、深さがやや深く、胴部から口縁部へかけてやや内湾し、端部は薄くなり丸くなっている。48では底部に横位のヘラ削りが施されている。44は胎土中に褐色の小礫を含み、色調は黄褐色を呈する。底部はやや平底である。45は胎土に微砂を含み、色調は朱色を呈する。48は胎土に微砂を含み、色調は橙色を呈する。49は胎土が細かく、色調は橙色を呈する。50は深さが浅く、口縁は横に切られ、端部はうすくなる。52は精製粘土による小型土器である。内面は縦位のなでが施されている。51、53～55は小破片である。57は口縁が頸部から「く」字状に外反し、端部は薄くなる。端部にはくびれがみられる。口縁の外面には横なし、内面には粗いハケメが横位に施されている。内面には頸部直下から横位のヘラ削りが施されている。胎土には微砂を含み、色調は内・外・断面とも黄褐色を呈する。56、58～67、72は甕の口縁部で、頸部から外湾しながら拡張する。口縁端部は自然に薄くなっているものが多いが、56、62、65、67では端部も薄くならない。56は小さく破れているが、口縁部は円形にめぐる。胎土には直径5mm位の角礫を含む。色調は内外面が黄褐色、断面が灰色を呈す

西江遺跡(58)

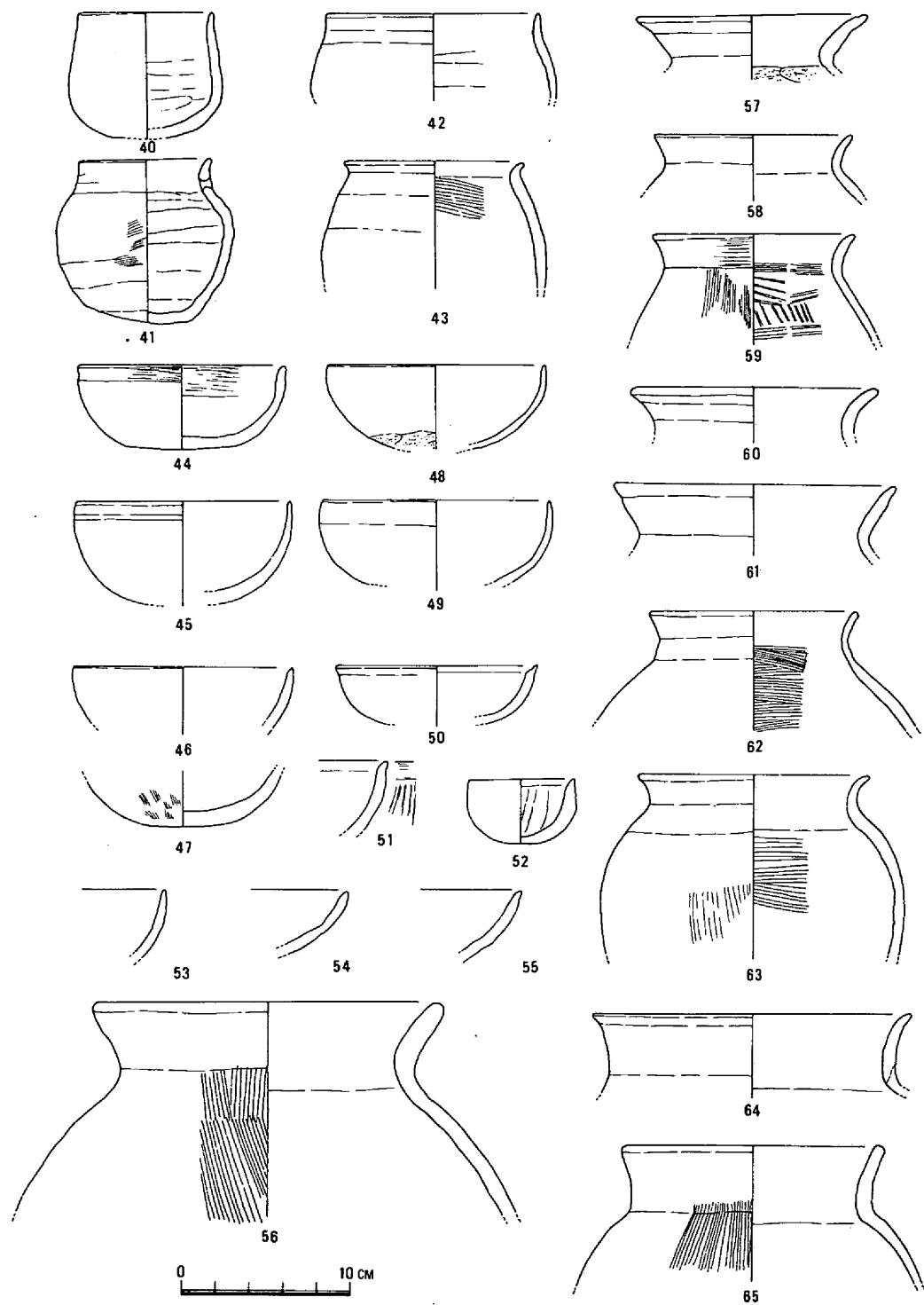


第74図 繩文・弥生・土師器実測図 ($\frac{1}{4}$)

る。58は胎土に微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。断面は灰色を呈する。59は肩部に縦位のハケメを施し、内面には粗いハケメが施されている。胎土には角礫を含み、色調は黄褐色を呈する。60は胎土に微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。61は胎土に直径5~7mmの礫を含む。62は短かい頸部があり、口縁はやや外反する。口縁部は横なでされ内面には横位のハケメが施されている。胎土には大きな礫を含み、色調は黄褐色を呈する。63は外面に縦位のハケメ、内面に横位のハケメを施す。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。64は口縁部と胴部の胎土が明瞭に違っている。口縁部は微砂を含むが細かい胎土で黄褐色を呈する。胴部は大きな角礫を含み、暗灰色を呈する。65は外面に縦位のハケメを施している。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。66は外面に斜位のハケメを施している。胎土には1~4mmの砂粒を含み、色調は黄褐色を呈する。67は胴部内面に斜位のハケメを施している。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。72は小さく破れているが、ほぼ完全に揃う。胴部は頸部からやや拡張したまま同じ大きさで底部に移り、底部はやや平坦な丸底を呈する。口縁部は横なでされ、胴部外面では上半部に斜位及び横位のハケメ、胴部下半では交差したやや縦位のハケメが施されている。内面では若干交差しながら横位のハケメが施されている。頸部内面には黒色の付着物がみられる。68~71は甌の破片である。68、69は把手で、いずれも胎土に微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。70、71は底部で筒形の胴部の径がやや小さくなり、下は完全にぬけている。70はやや器壁が厚く、71では薄い。70は内外面に若干斜位のハケメを施している。71では外面には縦位のハケメを施し、内面には交差したハケメを施している。いずれも胎土には微砂を含み色調は黄褐色を呈する。73は鉢で底部を欠失している。口縁はくびれて外反し、端部は丸くなっている。胴部は湾曲して底部へ移る。外面には縦位のハケメを施した後で、横なでが施されている。内面にも斜位のハケメの後で横なでを施している。外面には口縁端部まで煤が付着している。胎土には砂粒を含み、色調は外面が黒色、内面が灰褐色を呈する。74は口縁がやや内傾する鉢の口縁部であろう。外面には縦位のヘラ磨きが粗く施され、内面にはやや斜位のヘラ削りが施されている。口縁は自然に薄くなり、端部は丸い。75~85は甌の口縁部でいずれも小破片である。86~89は貼り付け高台付の皿及び椀である。いずれも底部のみの破片である。86では内外面に丹塗りが施されている。87は高台がやや高く、胎土には微砂を含み、色調は灰白色を呈する。88は胎土が細かく、色調は灰褐色を呈する。89は断面三角形の高台で、胎土は細かく、色調は内面が灰白色、外面が灰褐色を呈する。90~94はなべの口縁部で、いずれも小破片である。口縁端部には角ばるもの(90)、やや肥厚して丸くなるもの(91~93)、やや丸くなるもの(94)がある。外面に煤が付着しているもの(91、94)もみられる。胎土にはほぼ微砂を含み、色調は灰白色~灰褐色を呈する。

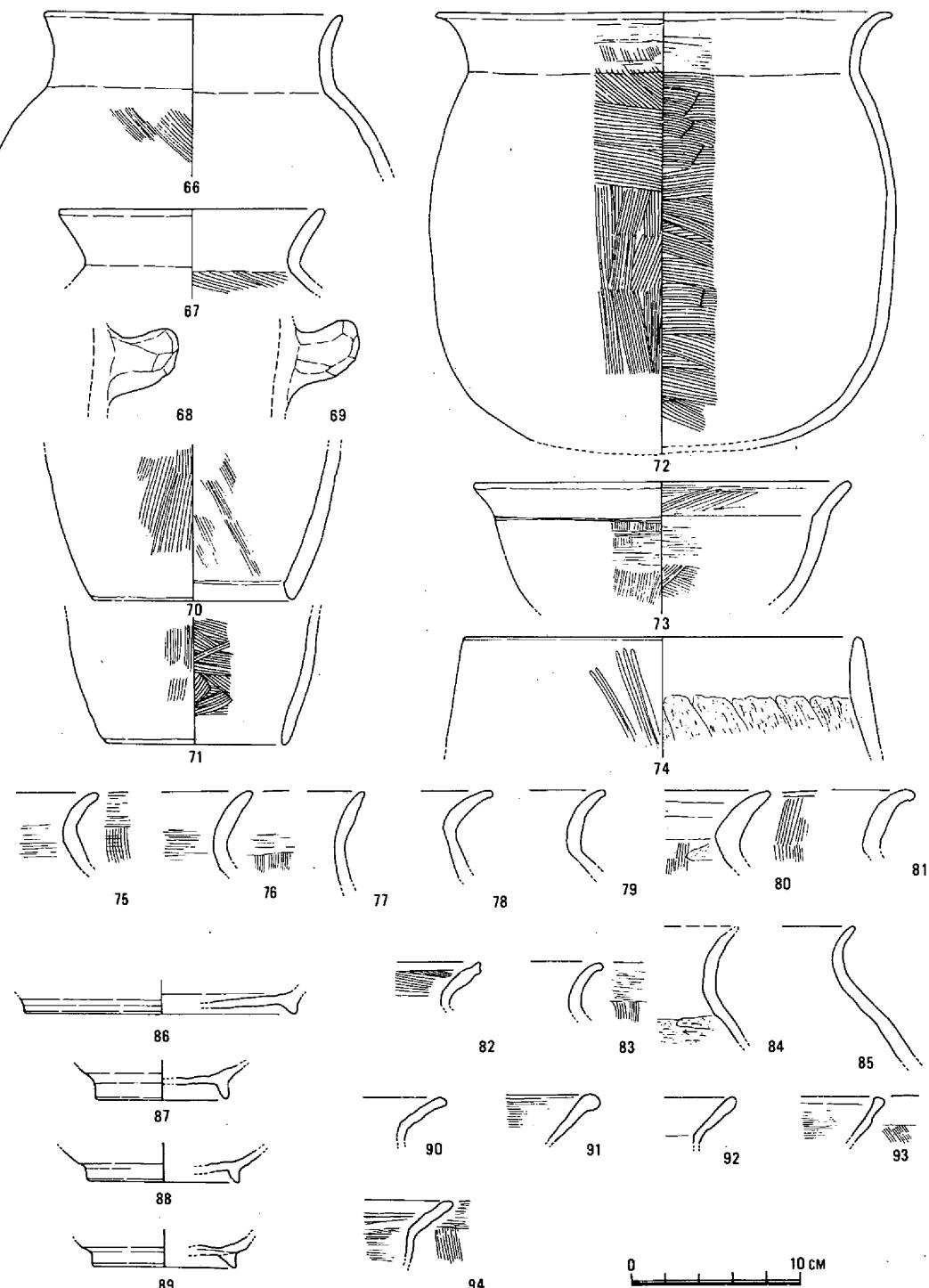
1は縄文晩期のものである。2、4は弥生中期前葉のものである。3は弥生前期~中期前葉に属する。5~16は弥生中期後葉のもので、5、9はそのうちでは古式のものである。16は仁伍式の高杯の特色が明瞭である。17、18、28は弥生後期前葉に属する。21、24、25もこの時期のものらしい。28は若干下降する可能性もある。19、20、22、23、26、27は弥生後期後葉に属する。29、30~39、57は古式土師器に属する。31~33の甌は山陰に多くみられるもので、山陰で鍵尾II式と称しているものに属する。38は山陽地方に多くいわゆる王泊6層期に属するものである(註10)。48も類似点が多く、こ

西江遺跡(58)



第75図 土師器実測図 ($\frac{1}{4}$)

西江遺跡(58)



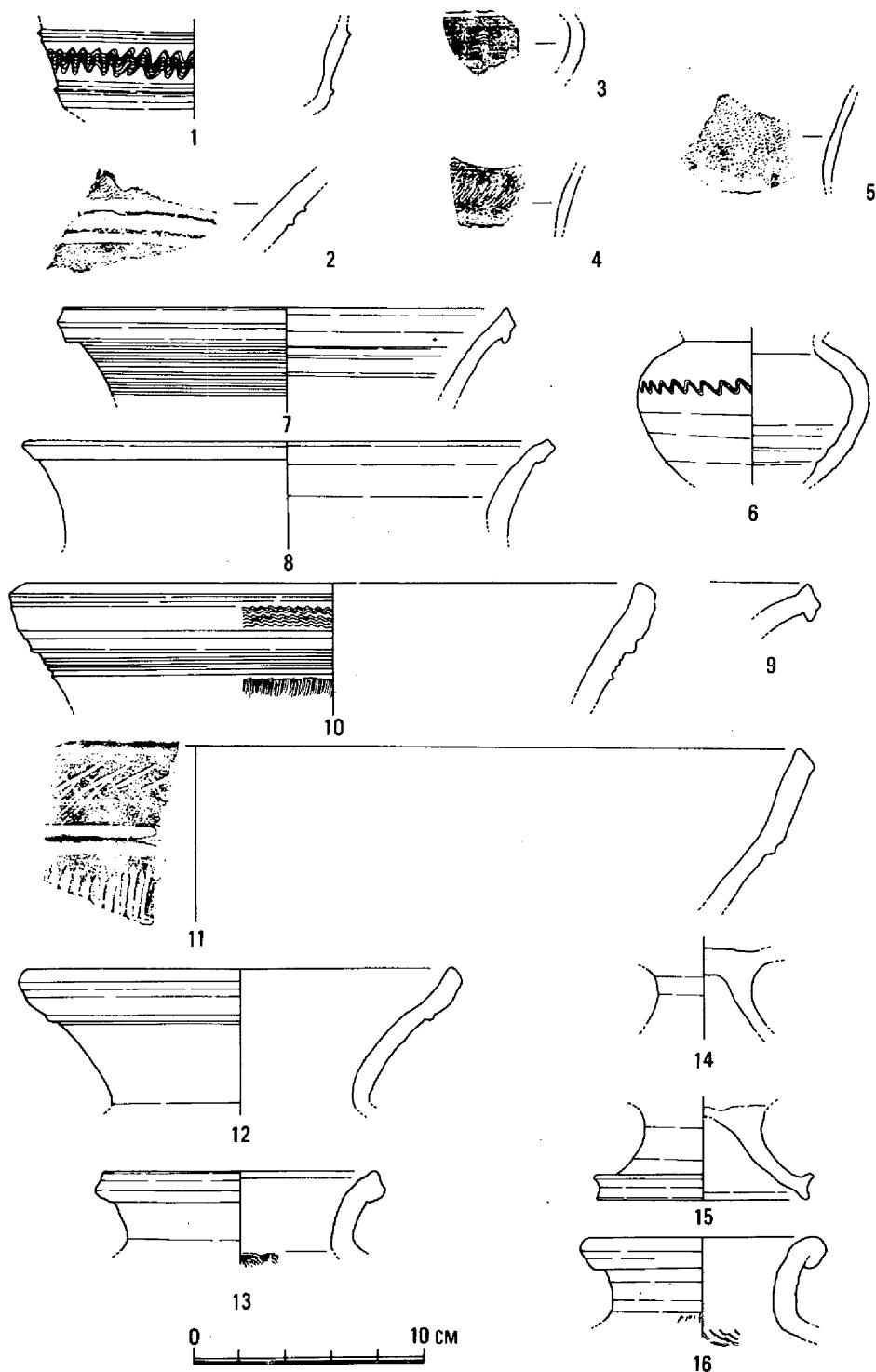
第76図 土師器実測図 ($\frac{1}{4}$)

の時期に入るらしい。40~47, 49~56, 58~85は古墳時代後期に属するもので、一部歴史時代に降るものも含まれているらしい。86~89はほぼ平安時代に属する。90~94は中世のものである。

須恵器（第77~79図）実政調査区は比較的須恵器が多く検出された調査区である。時代的にも古いものがあり、器種も多い。1は高杯の杯部破片である。外面には角ばった小さな張り出しがあり、間に細かい波状文を配している。下半部にはヘラ削りが施されている。内外面に自然釉がかかり、灰白色を呈する部分もある。他は青灰色を呈し、断面は茶褐色を呈する。焼成はきわめてよい。2は広口壺の口縁部であろうか。外面には細かい波状文を配している。色調は内外面が青灰色を呈し、断面は茶褐色を呈する。3~6は甕の破片である。3は胴部の破片で外面に細かい波状文を施している。胎土には微砂を含み、色調は内外面が青灰色、断面は茶褐色を呈する。4は甕の頸部で粗い櫛描きを施している。胎土には微砂を含み、内・外・断面とも青灰色を呈する。5は頸部で細かい波状文を施している。胎土には微砂を含み、色調は内・外・断面とも青灰色を呈する。焼成は堅緻である。6は胴部で、肩に細かい波状文を配している。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。7, 8は甕の口縁部である。7は口縁部が肥厚し、下方へ張り出す。内面には自然釉がかかり黄灰色を呈し、外面は青灰色を呈する。8も口縁部が外方へ肥厚する。外面に自然釉がかかり紫色を呈する。9は7と同様の小破片である。胎土に微砂を含み、色調は灰白色を呈する。10, 11は広口壺の口縁部である。外面には波状文を施している。色調は内外面が青灰色、断面が茶褐色を呈する。11は大きな口縁部で、外面に粗い格子目を施している。色調は暗青灰色を呈する。焼成は堅緻である。12, 13は甕の口縁部である。12は胎土に微砂を含み、色調は内・外・断面とも青灰色を呈する。13は胎土に微砂を含み、色調は内・外・断面とも淡茶褐色を呈する。14, 15は高杯の脚部である。脚は短かい。15では端部が肥厚して上下へ拡張する。自然釉がかかり、色調は青灰色を呈する。16は13とほぼ同じで、端部は折りかえしている。胎土には微砂を含み、色調は青灰色を呈する。

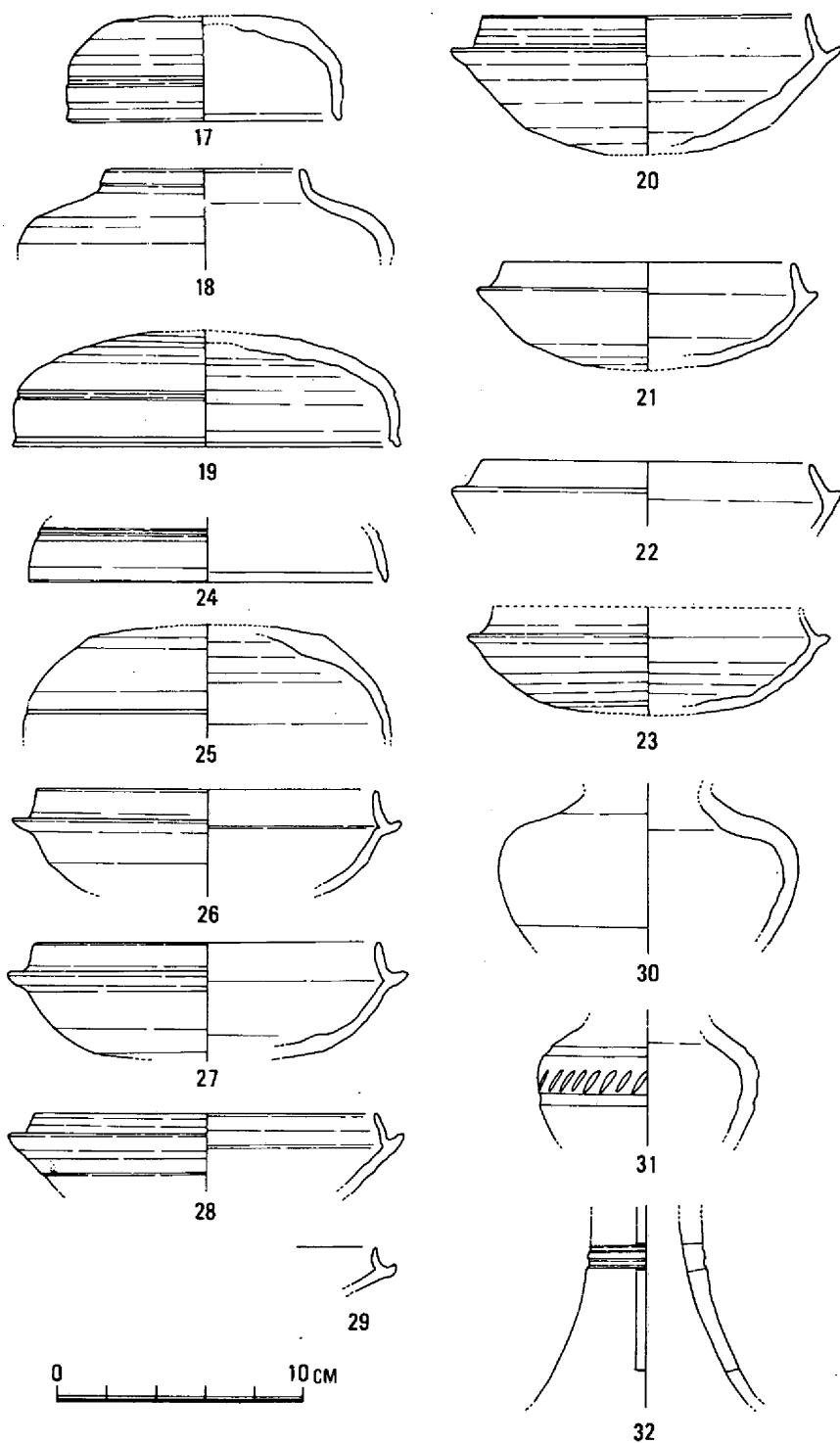
17は壺蓋である。天井部から口縁部へ移る部分に沈線を配している。18は短頸壺である。胎土には若干の微砂を含み、色調は青灰色を呈する。19は杯蓋で、天井部の3分の1位をヘラ削りしている。口縁部へ移る部分に沈線を施している。端部の内面には段がある。20~22は杯身である。底部の3分の1位をヘラ削りしている。受部は斜め上方へ張り出し、立ちあがりは若干内傾し、端部はうすくなる。胎土には微砂を含み、色調は灰白色を呈する。受部は横へ小さく張り出し、立ちあがりはやや内傾する。底部のヘラ削りは全体の3分の1位である。色調は青灰色を呈し、焼成は堅緻である。22は小破片であるが、21と類似している。23は受部が横へ張り出し、立ちあがりはやや内傾する。底部は3分の2位をヘラ削りしている。胎土には微砂を含み、色調は青灰色を呈する。24, 25は杯蓋である。24は口縁端部の内面に段がある。胎土には微砂を含み、色調は青灰色を呈する。25は天井部がやや平坦になっている。胎土には微砂を含み、色調は青灰色を呈する。26~29は杯身である。26では受部はやや湾曲して外方へ張り出し、立ちあがりは若干内傾する。27も26と同様で底部はほとんど調整されていない。26, 27とも胎土に微砂を含み、色調は青灰色を呈する。28は受部が斜め上方へ張り出し、立ちあがりは若干内傾する。胎土には微砂を含み、色調は灰白色を呈する。30は壺の胴部である。肩が張り、胴部下半は横位のヘラ削りを施している。31は甕の胴部には2本の沈線によって区画された

西江遺跡(58)



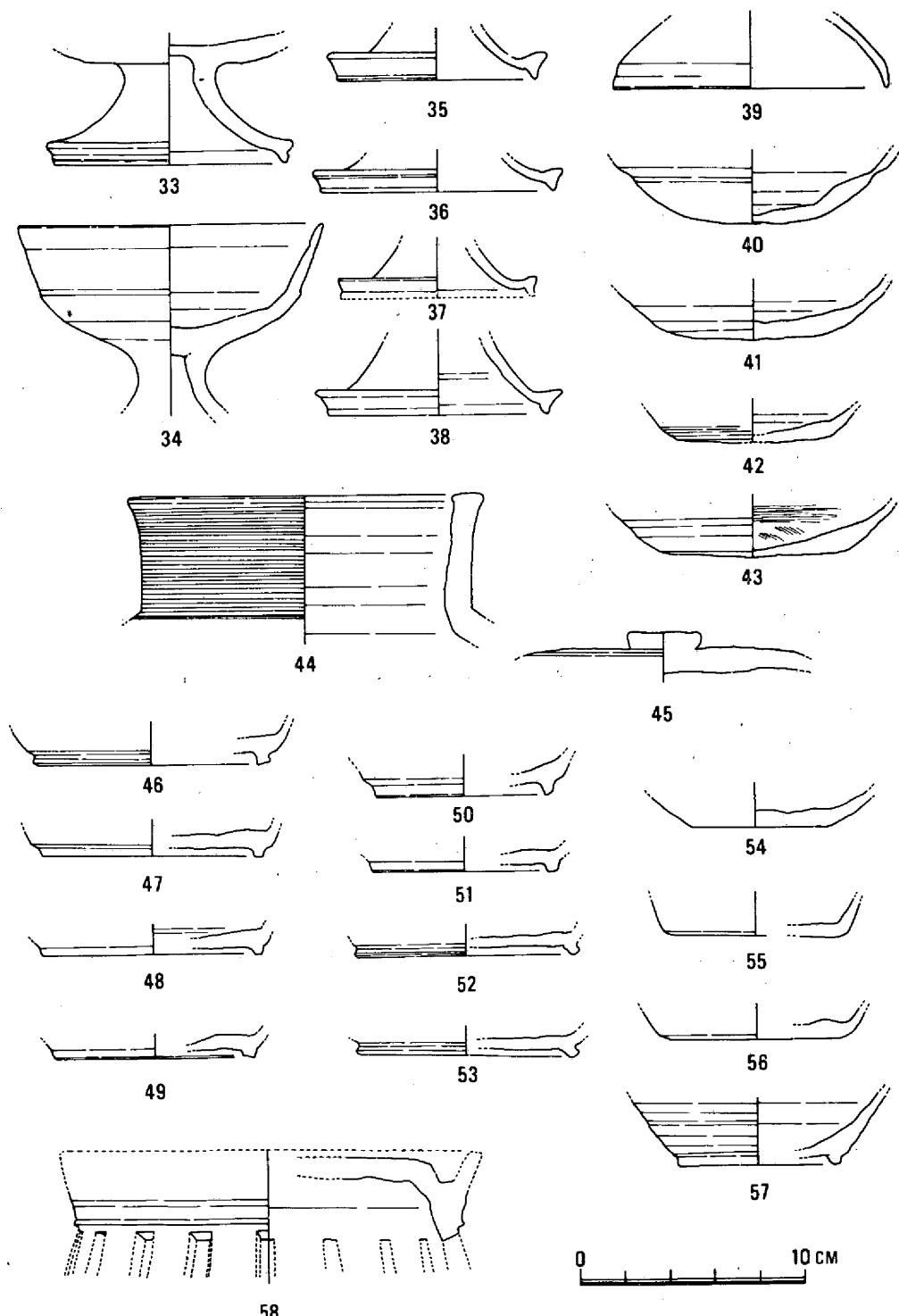
第77図 須恵器実測図 ($\frac{1}{3}$)

西江遺跡(58)



第78図 須恵器実測図 ($\frac{1}{3}$)

西江遺跡(58)



第79図 須恵器実測図 ($\frac{1}{3}$)

あいだにヘラ書き「ノ」字文を配している。胎土には微砂を含み、色調は青灰色を呈する。32～38は高杯である。32は長脚で、2段に長方形の透しを3方へ配している。胎土には微砂を含み、色調は内面が灰白色、外面が青灰色を呈する。35～38は脚の端部が肥厚して立ちあがる。いずれも透しはなく、色調は灰白色～青灰色を呈する。34は高杯の杯部で、口縁は斜め上方へのびて、端部はうすくなる。杯部の下部には若干ヘラ削りを施している。胎土には微砂を含み、色調は青灰色を呈する。39は杯蓋で天井部から口縁部へ移る段が不明瞭である。口縁部は丸くなっている。色調は内面が青灰色、外面が灰白色を呈する。40～43は杯身の蓋である。40、41は底部を小さくヘラ削りしているが、42、43では調整がなされていない、いずれも胎土に微砂を含む。色調は40が灰白色、41の内面が黄褐色、同外面が灰黄色、42が青灰色、43が灰白色を呈する。44は直口壺の口縁部である。口縁部が直立し、端部が若干肥厚する。直立部外面には横位の細かいかきめを施している。胎土には微砂を含み、色調は灰褐色を呈する。45はつまみのついた杯蓋である。つまみは上部がほぼ扁平で中央部がわずかに高まる。胎土には微砂を含み、色調は灰白色を呈する。46～53は高杯の底部である。高台は断面方形でほぼ直立し、52、53のみは外方へ張り出す。色調は灰白色～青灰色を呈する。54～56は高台の付かない杯の底部である。いずれも胎土に微砂を含み、色調は青灰色を呈する。57は高台付の杯である。高台の断面は角張らず、胴部は斜め上方へのびる。胎土には微砂を含み、色調は青灰色を呈する。

58は円面覗の破片である。陸部はほぼ水平で、よく使用されて磨滅している。海部の外方を欠失している。裾部へ移る部分に段があり、裾には長方形の透しを配している。下半部は存しない。小破片からの復原であるが、直径19cmを測る。胎土には微砂を含み、色調は内・外・断面とも青灰色を呈する。

以上の遺物は多種類にわたり、個々の年代判定は困難であるがほぼ以下のように推定される。1は陶邑での「TK208」(註11)までのぼらせることができよう。2～7、9は「TK23」～「MT15」に相当すると考えられ5世紀後葉から6世紀代であろう。10、11はかなり下降するものであろう。12～43は6世紀後半～7世紀前半代であろう。そのうち、17～23は若干古く位置づけることができる。44～56、58はほぼ奈良時代の推定される。57は平安時代に下降するものであろう。

師楽式土器(第61、80～90図)

師楽式土器片は、国信調査区(第3節)および実政調査区(第4節)の2調査区でその出土が見られた。両調査区にわたって幅の広い谷(幅約140m)が存在するが、この谷を埋める黒色土(谷の上方から流されてきた土砂の再堆積したもの)が師楽式土器片の包含層である。師楽式土器を包含していた黒色土からの出土遺物は、師楽式土器片と須恵器片の他に弥生時代の土器片・古墳時代の土師器片と須恵器片・奈良時代の土師器片等が混在する状態で検出された。遺物が混在するだけでなく、この黒色土は層的に分離できるものではなかった。また、この谷は両調査区にまたがっているが、この両調査区ともに同一の黒色土で埋まっており、その層的・土質的な観察においても何ら差異は認められなかった。

師楽式土器を伴う遺構は、既述のもの(第4節2(2)土壙3の項)が唯一の例である。この土壙からは、完形のもの2個と27片の破片が出土した(第61図1～29)。これらは18の1片を除いて、いずれも小型薄手のものばかりである。外面には平行のタタキを施しており、径0.5mm前後の砂粒を

西江遺跡(58)

多く含み、硬く焼かれている。破片になっているものはその全形は想像しがたいが、瀬戸内海沿岸部(島を含む)の製塩遺跡出土の師楽式土器と同様に、器壁が剥離しているものがみられる(1・2・5・22・24)。これから考えて、西江遺跡出土の師楽式土器が単に形・製作技法が同じというだけではなく、製塩ないしは塩そのものに関係した土器であったといえよう。

第61図の30~32の3片は、土壙3のすぐ隣にあった柱穴(一つのまとまりのある遺構とはならない)出土のものである。これらも小型・薄手のもので外面に平行のタタキを施している。

遺構に伴わない師楽式土器片(両調査区にわたって存在する谷の再埋積土に包含されていたものおよび実政調査区の南半分の表土層に含まれていたもの)は第80図33~第90図399までの367片を検出した(その内265番は拓本・断面図を載せていない)。このうち33~336までの304片は実政調査区から、337~399までの63片は国信調査区から出土したものである。圧倒的に実政調査区出土のものが多く、また、師楽式土器を含む土壙を合わせ考えて、師楽式土器を伴う遺構の中心的なものは斜面の上方つまり実政調査区の西側の調査範囲外に存在すると予想できる。

367片の破片は、やや大型厚手のものと小型薄手のものとに分けることができる。外面のタタキは、34・121・242・337・344の5片は格子文で、他は平行文である。土質的には、土壙2出土のものと同質のもの・瀬戸内沿岸のものと同質のもの・精製粘土を使用したものに分類できる。器形の上では、椀状の深いものと、頸が細く咲に近い形のものとがみられる。

亀山焼・陶磁器(第91図)

第91図1は焼成がよくて亀山焼と言えるか疑問がある。口縁端部はわずかに肥厚している。内面には5本单位のかきめが縦位に施されている。胎土には微砂を含み、色調は青灰色を呈する。2は少し内湾し、端部は若干肥厚して内側に少し張り出す。外面には指圧痕が明瞭に残り、内面には5本单位のかきめが縦位に施されている。胎土には微砂を含み、色調は淡青灰色を呈する。3は伊万里焼風の碗である。全面に釉薬をかけている。外面には網目文を描いている。断面は乳白色を呈する。4は天目茶碗である。高台部分は欠失している。内外面は小さな赤味の斑点のある黒色を呈する。断面は灰白色を呈する。1, 2は中世のもので、3, 4は近世のものと推定される。

石器(第92図)

石器には大型蛤刃石斧が1点ある。頭部を若干欠いている。出土したのは南東区の近世墓壙埋土中である。頭部にはこすったあとがあり、刃部には叩いたようなあとがある。大きさは、全長17cm、幅5.8cm、厚さ4.2cm、重量は505gを測る。

埴輪片(第93図)

実政調査区中央部北の黒ボク中から円筒埴輪片と推定される破片を1点検出した。大きさは縦6.8cm、横6.8cm、厚さ1.7cm、凸帯の幅は2.3cmを測る。外面は磨滅してよくわからないが、内面には縦になでたあとらしい凹みがみられる。胎土には直径0.5~2mmの砂粒を多く含み、色調は内・外・断面とも黄褐色を呈する。

鉄器(第94図)

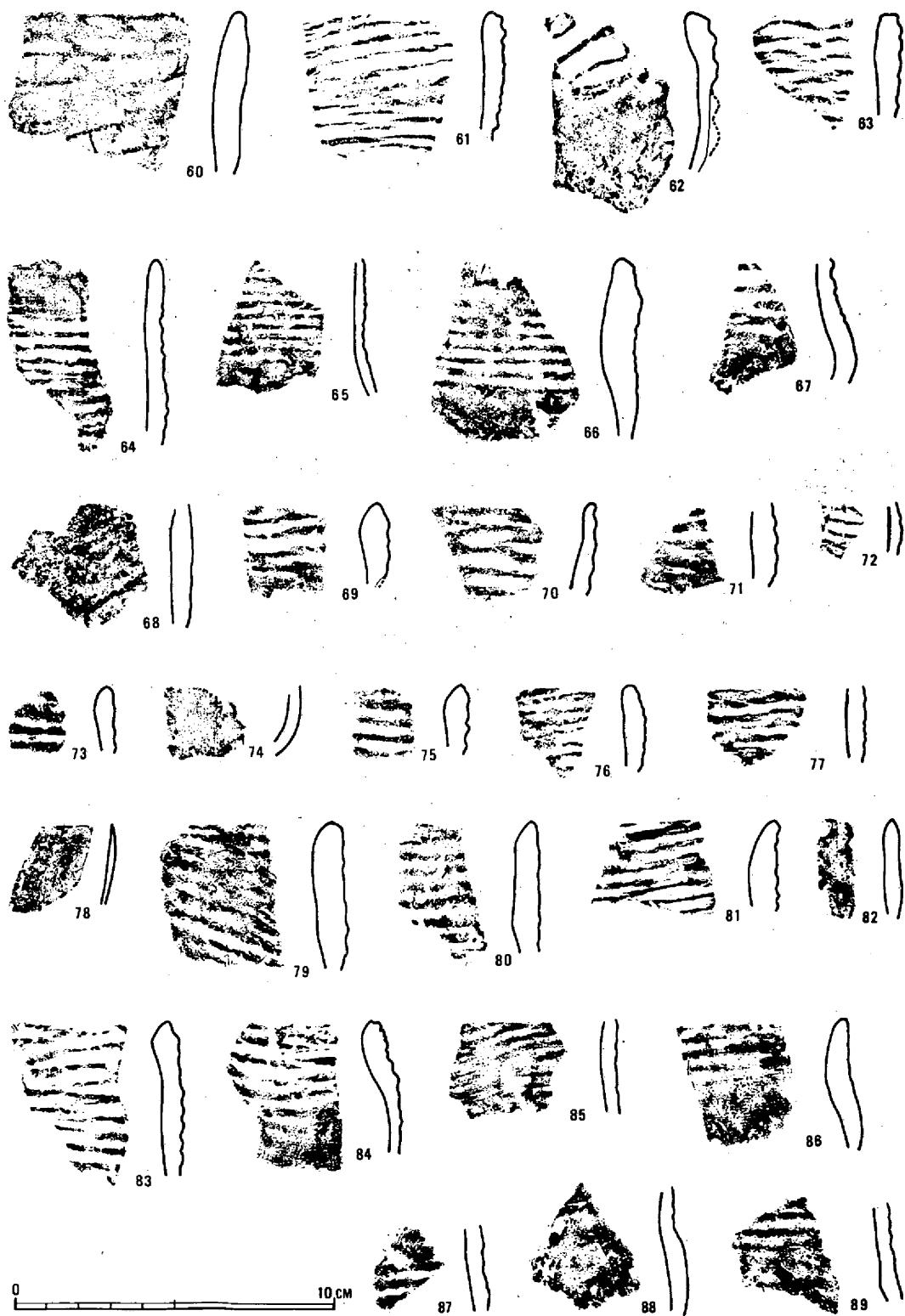
実政調査区で検出された鉄器には鋤、鉄鎌、その他不明の鉄器がある。すべて黒ボクの中で検出さ

西江遺跡(58)



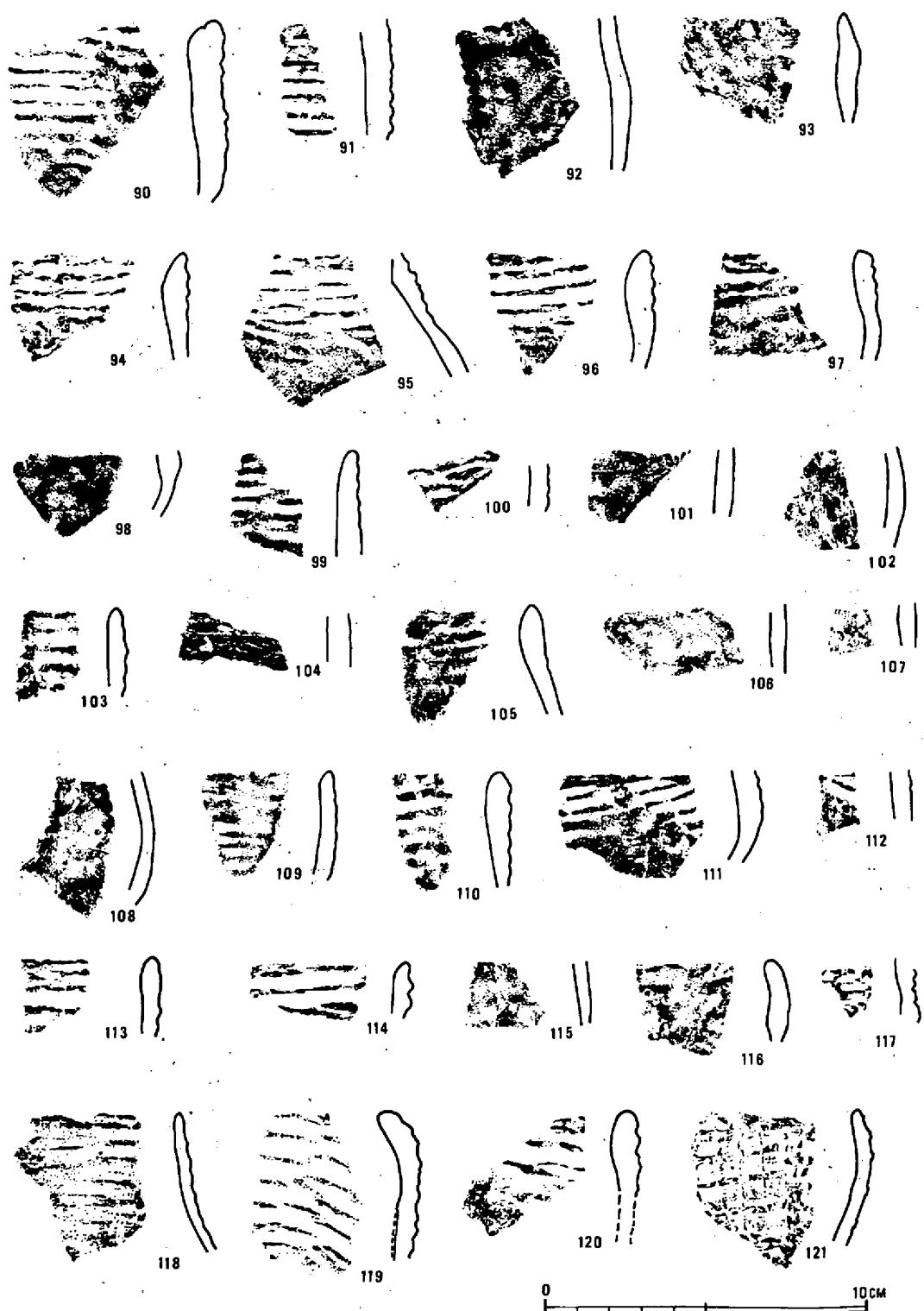
第80図 師楽式土器実測図 ($\frac{1}{2}$) (33藤安34~59実政)

西江遺跡(58)



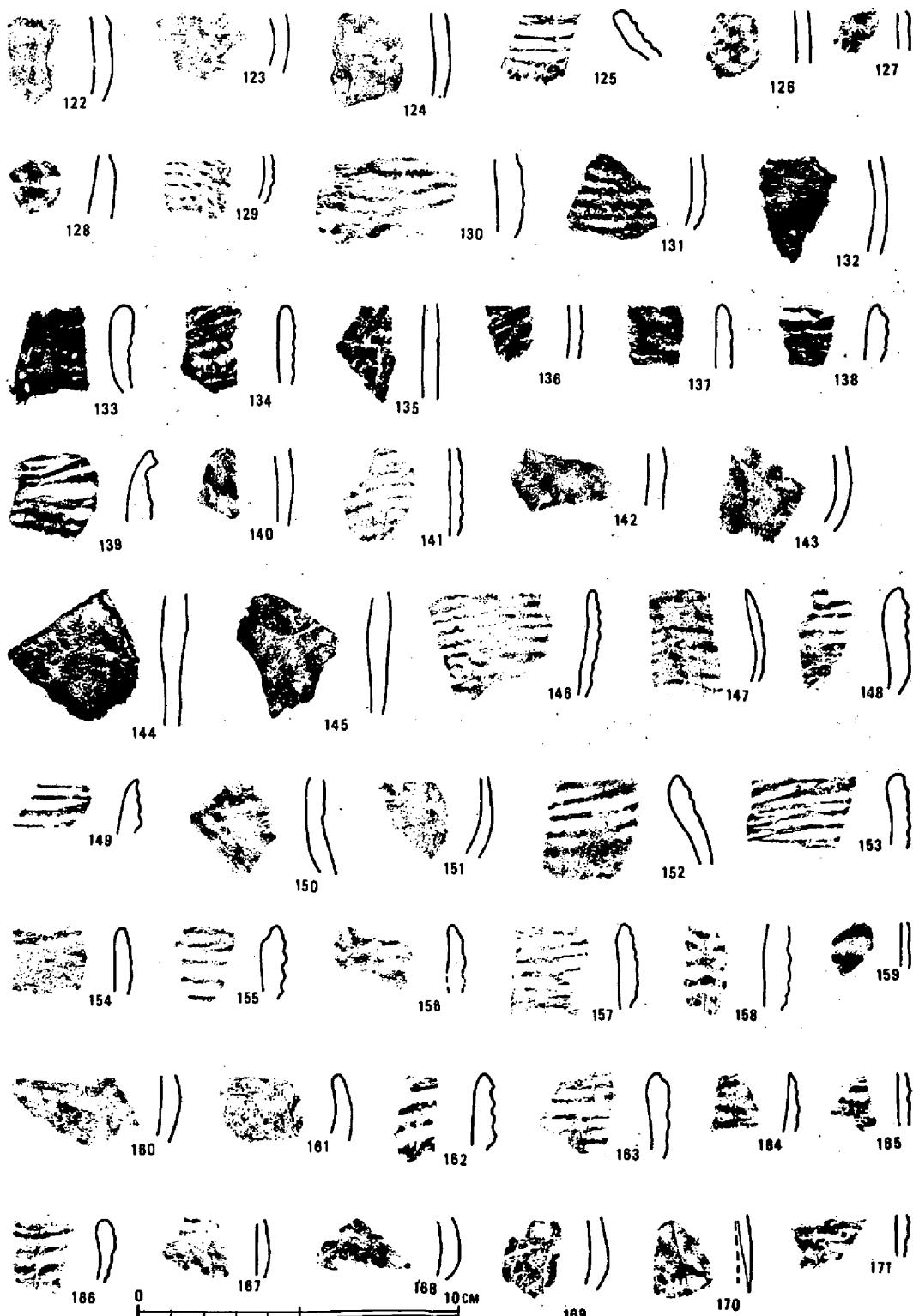
第81図 師樂式土器実測図 ($\frac{1}{2}$) (実政)

西江遺跡(58)



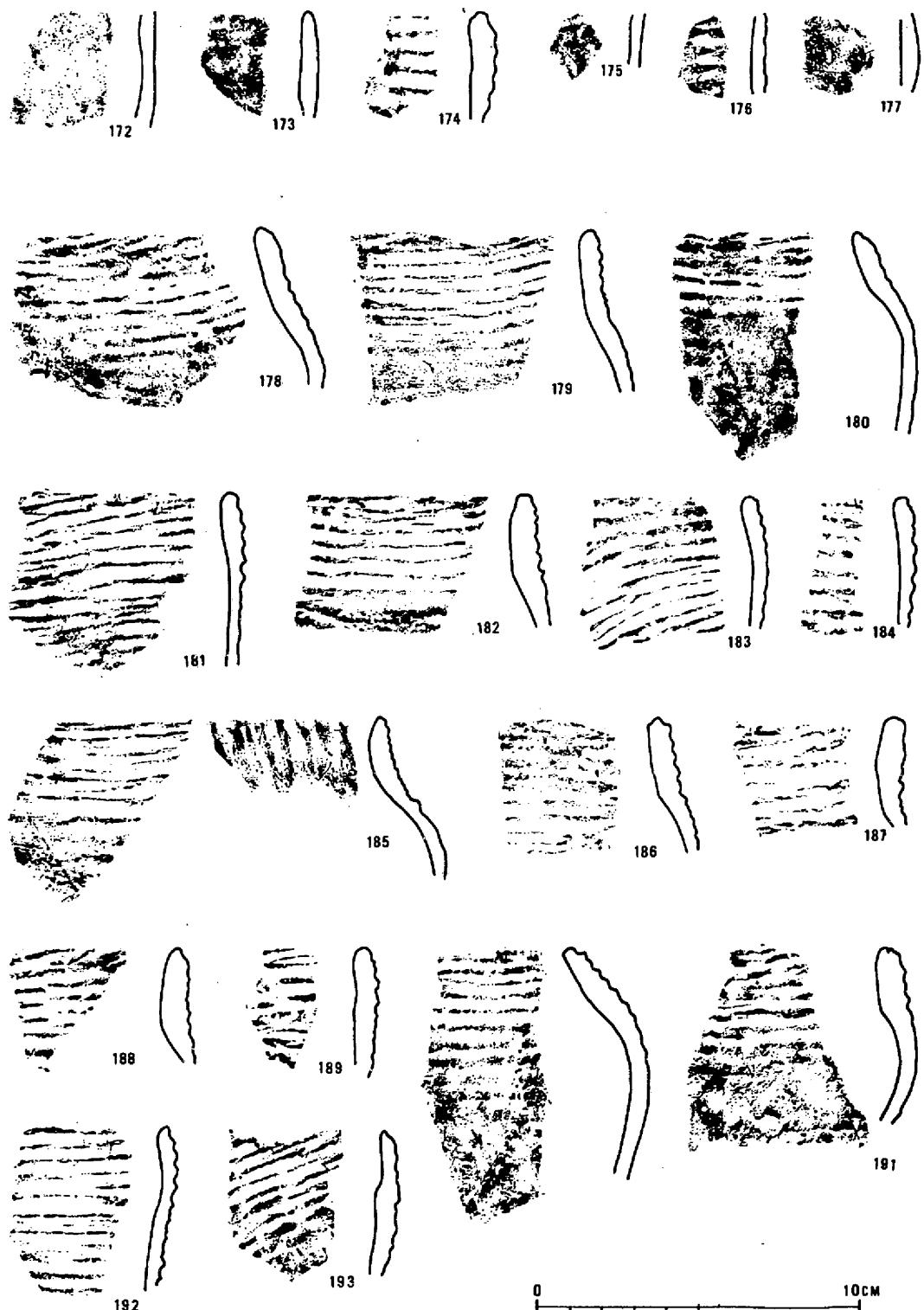
第82図 師樂式土器実測図 ($\frac{1}{2}$) (実政)

西江遺跡(58)



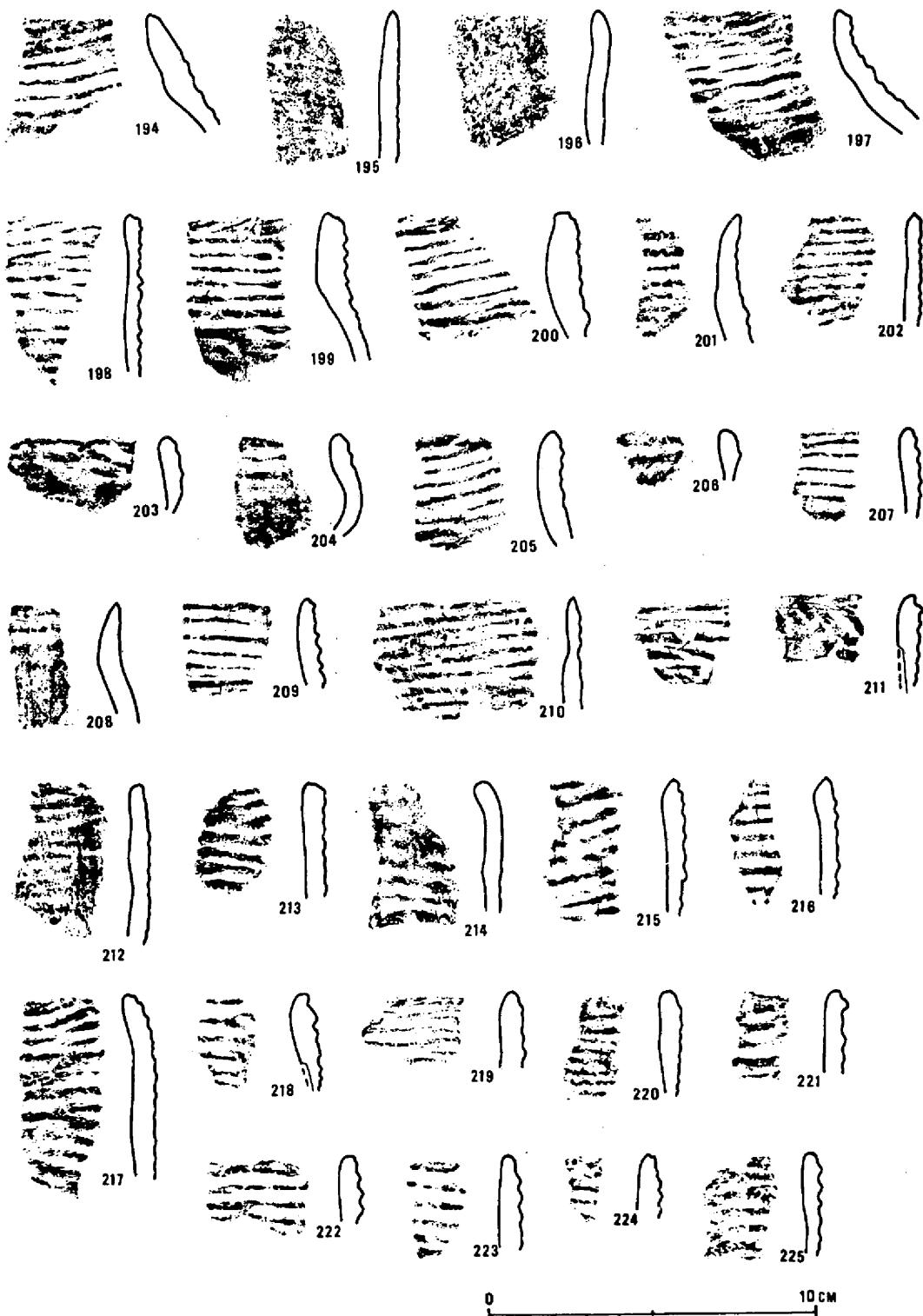
第83図 師楽式土器実測図 ($\frac{1}{2}$) (実政)

西江遺跡(58)



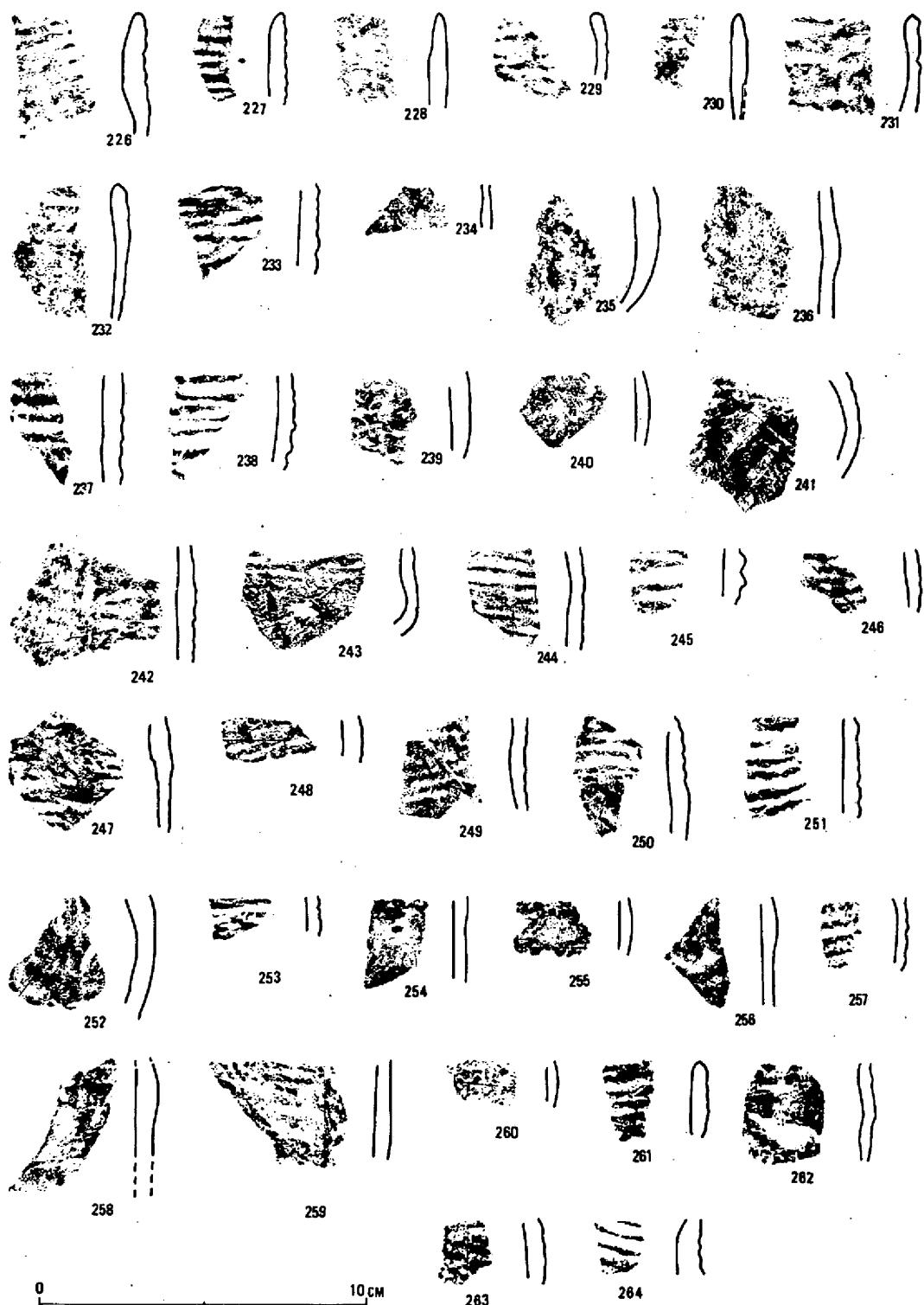
第84図 師楽式土器実測図 ($\frac{1}{2}$) (実政)

西江遺跡(58)



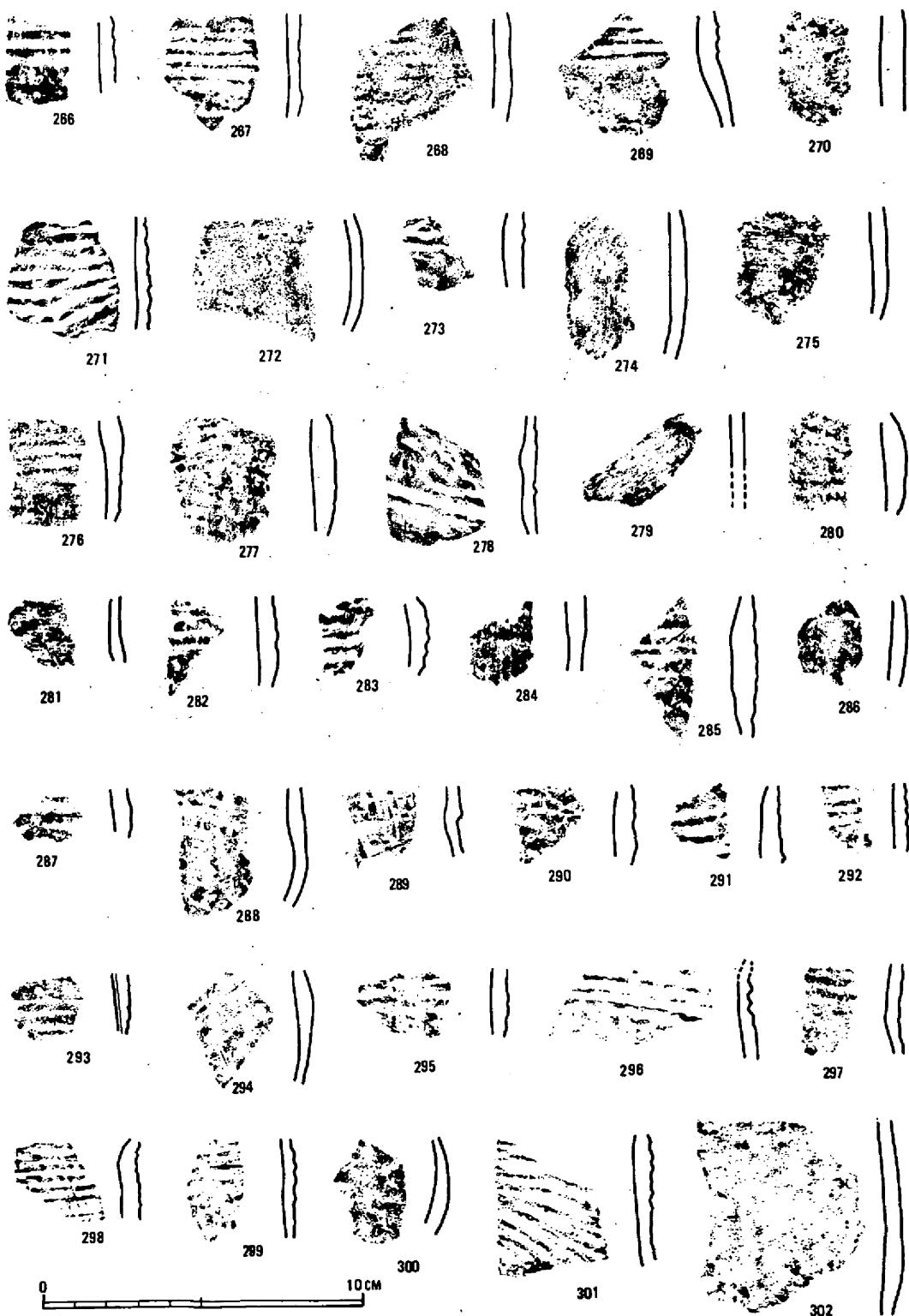
第85図 師楽式土器実測図 ($\frac{1}{2}$) (実政)

西江遺跡(58)



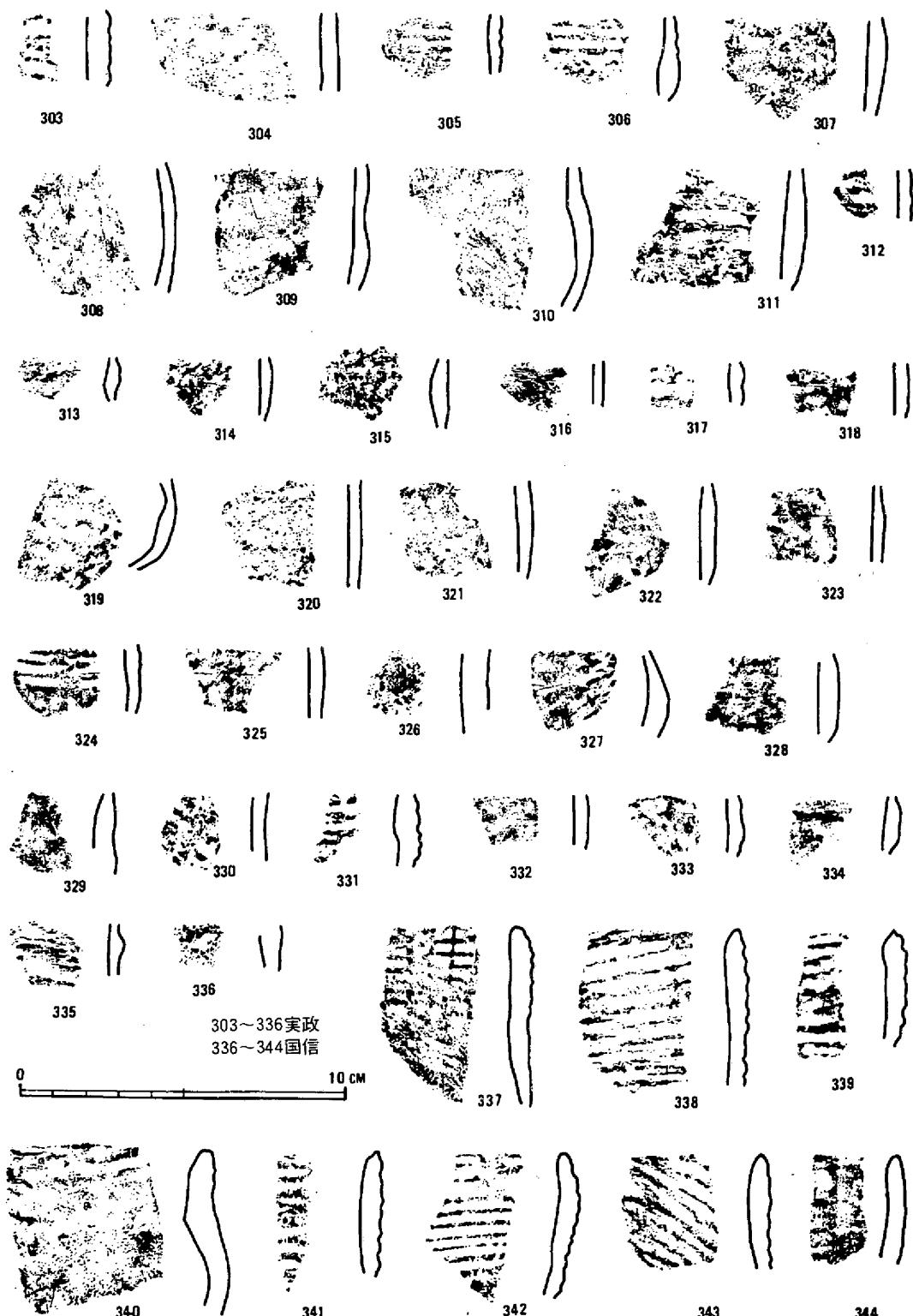
第86図 師楽式土器実測図 ($\frac{1}{2}$) (実政)

西江遺跡(58)



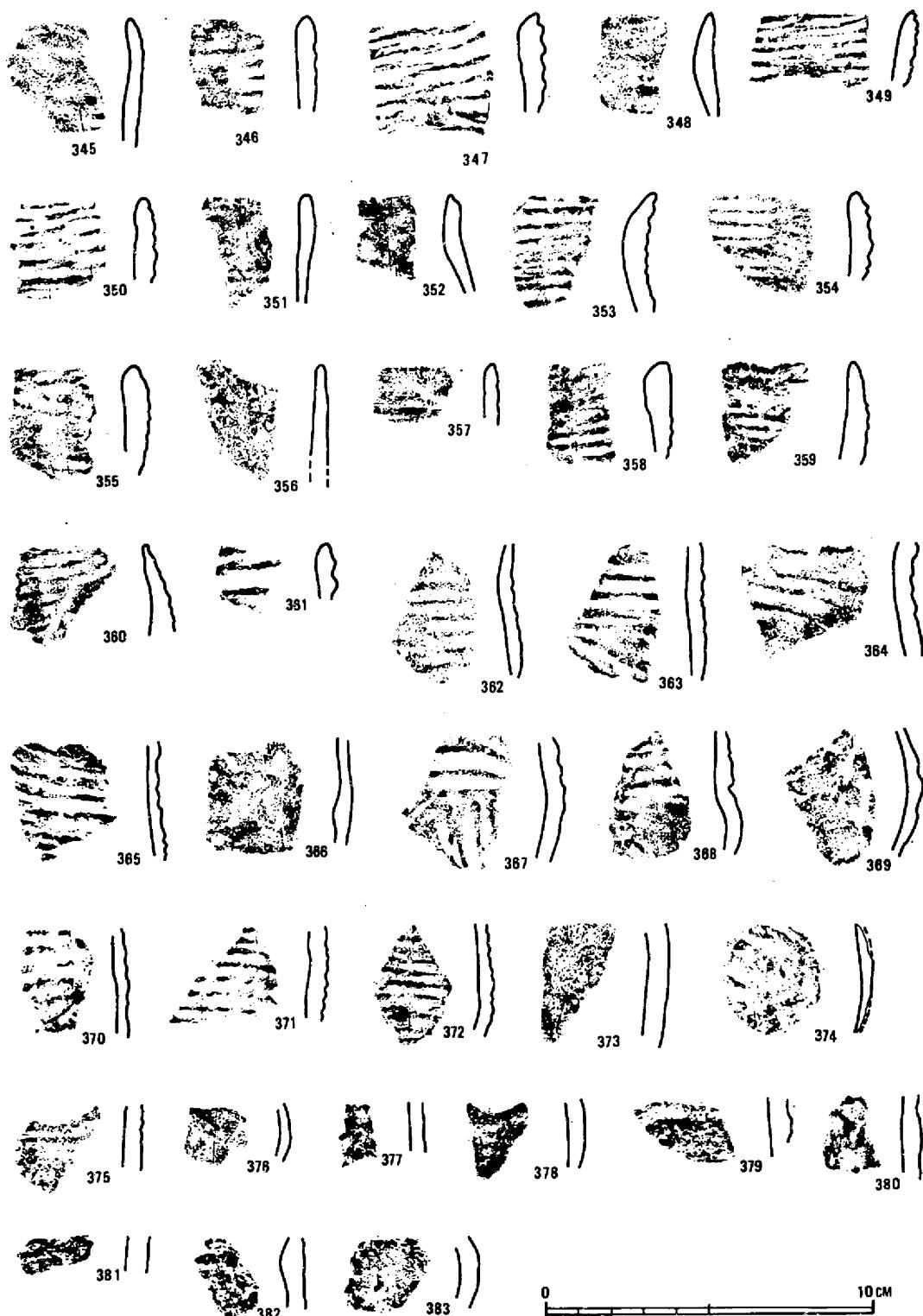
第87図 師樂式土器実測図 ($\frac{1}{2}$) (実政)

西江遺跡(58)



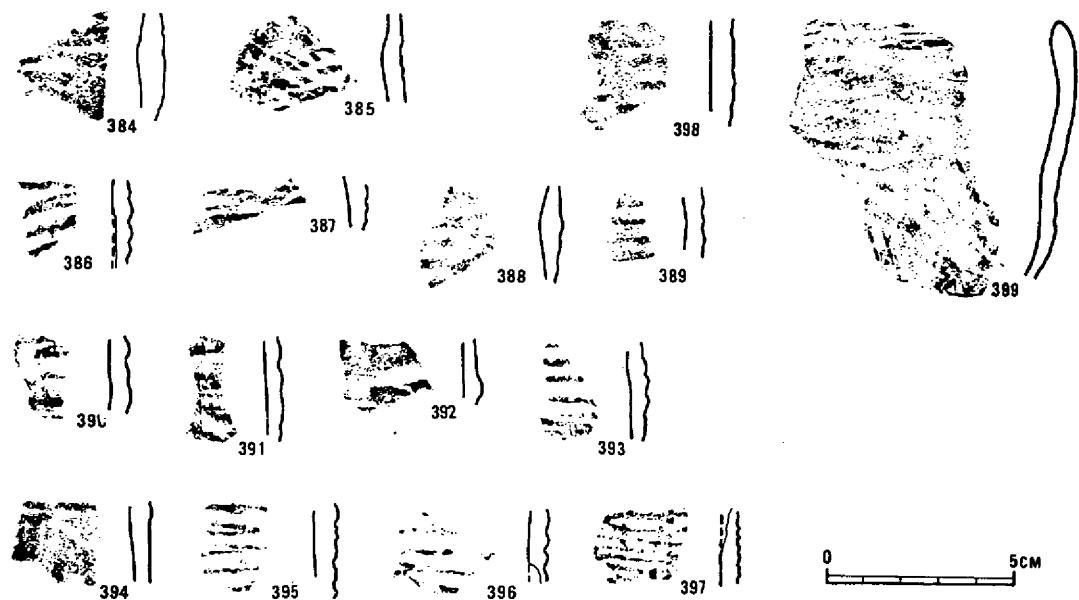
第88図 師楽式土器実測図 ($\frac{1}{2}$) (303~336実政・336~344国信)

西江遺跡(58)

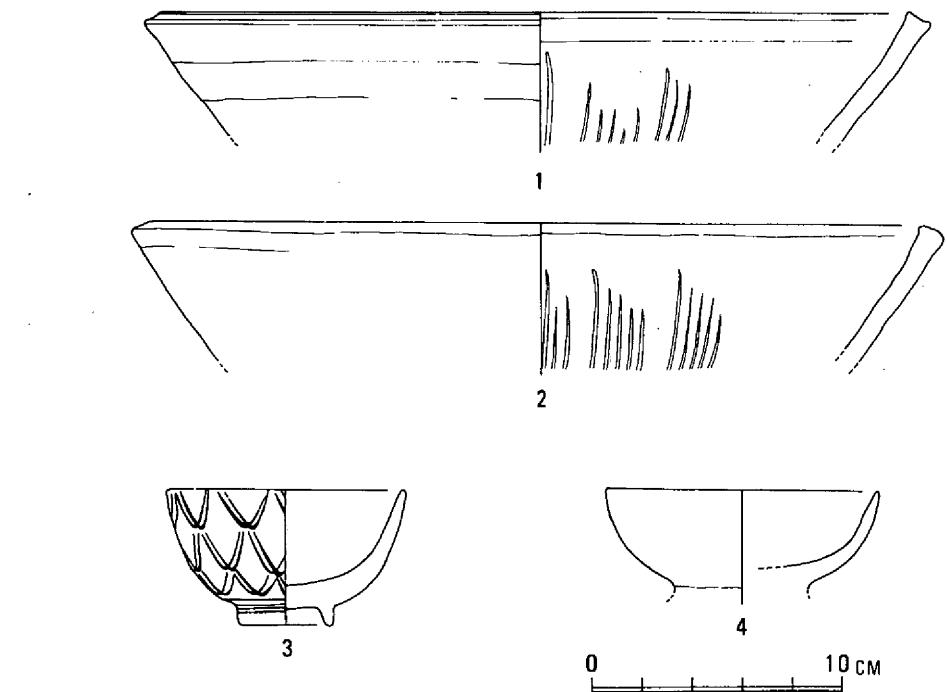


第89図 師楽式土器実測図 ($\frac{1}{2}$) (国信)

西江遺跡(58)

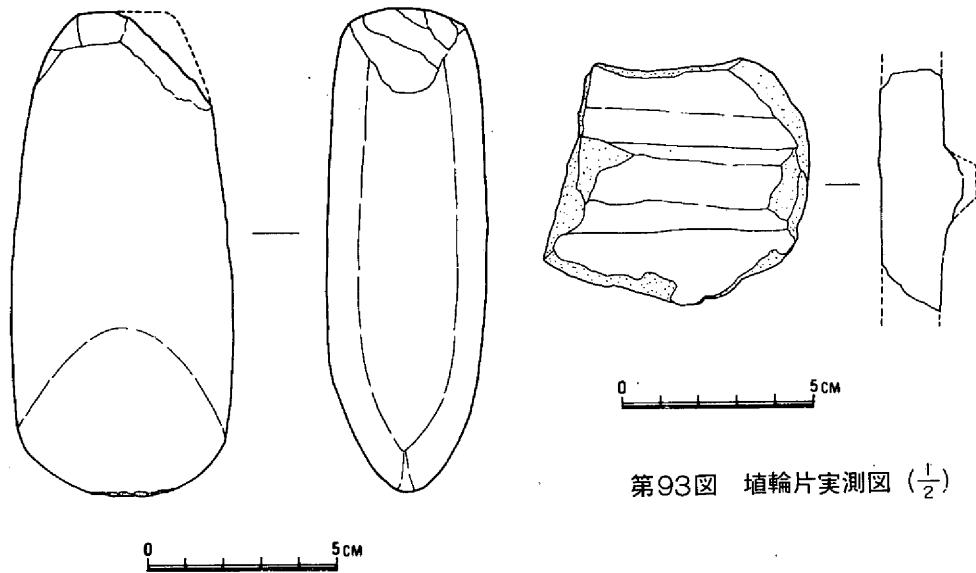


第90図 師樂式土器実測図 ($\frac{1}{2}$) (国信)



第91図 亀山焼・磁器実測図 ($\frac{1}{3}$)

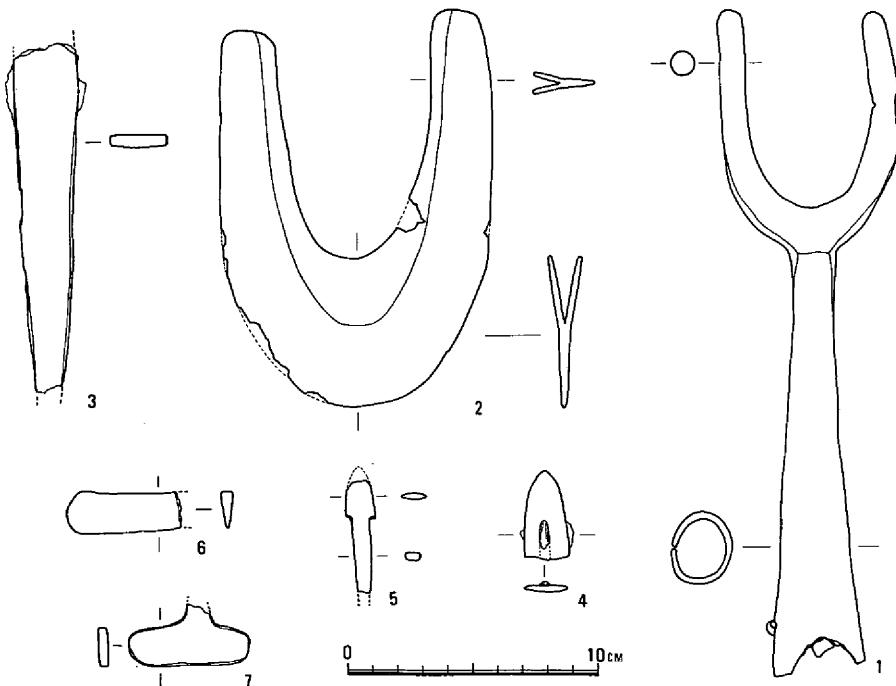
西江遺跡(58)



第93図 塩輪片実測図 ($\frac{1}{2}$)

0 5 CM

第92図 石斧実測図 ($\frac{1}{2}$)



第94図 鉄器実測図 ($\frac{1}{3}$)

れたもので年代の明らかなものはない。1は先端が二叉になり、基部は管状になってだんだん太くなり、目釘穴がある。現存長は25.6cmを測る。2は鋤で、全長15.5cm、幅10.9cmを測る。3はクサビ状の鉄器で現存長13cmを測る。4は平根の鉄鎌で、中央に木ではさんだようにみえる高まりがあり、縦に木目がみえる。反対側はさびのため明らかでない。現存長3.5cm、幅1.8cmを測る。5は細根の鉄鎌で現存長4.4cm、先端部の幅1.2cmを測る。6は一方に刃のついた刀子様を呈するが何であるか不明。現存長4.6cm、幅1.6cmを測る。7は石匙に似た形を呈し、刃はなく、あるいは火打ちに用いたものの可能性がある。長径4.9cm、短径2.4cmを測る。

3. 小 結

実政調査区は西江遺跡のほぼ中央部に位置する。南へのびる舌状の地形があり、この上面に遺構は集中している。遺構の保存状況は良くないが、弥生時代の円形住居址3軒、古墳時代の方形住居址6軒、円形土壙、その他古墳時代の土壙、年代が明瞭でない建物7棟、柵列、近世、近代の墓壙などが検出されている。

遺物には弥生式土器、土師器、須恵器、師楽式土器などがある。ほかに簾状文の施された小破片の出土がある。また、師楽式土器の量は多く、土壙中から完形のものが出土している。

延長1Kmの西江遺跡のうち、師楽式土器は、国信・実政両調査区にまたがる谷の中の包含層から集中して出土した。その範囲を南北200m、東西50m包含層の厚さを平均70cmとして土量を計算すると7,000m³となり、この中に2個の完形品と397片の破片が含まれていたことになる。単純に土量・他の遺物の量からみると、400片足らずの出土量では微々たるものといえよう。しかし、海岸部から直線距離にして約60Km入ったこの山間部にこれだけの師楽式土器が出土したことは驚きといわざるを得ない。

師楽式土器を伴う遺構は1例検出したのみで、この遺構に伴う師楽式土器は、完形2個と27片で、他のものは奈良時代の再堆積層出土のものである。土壙出土の2個の完形品は、底部外面までタタキを行っており、この種の器形・技法の小型薄手の土器は、他の遺跡から未だ検出されていない。土質的には類似する土器片を出土している製塩遺跡は、岡山県浅口郡寄島町などに知られている。今後、同種の器形をもつ製塩遺跡の発見されることを期待したい。

出土したものの大部分は再堆積層からの出土で、元の位置は実政調査区西方の緩斜面に存在していたと予想される。この地点は、他の出土遺物から見て、弥生～古墳～奈良時代にかけての一大集落址であり、この地方の一つの中心的存在であったであろう。また、6世紀後半における塩の集散地の要素をもつ遺跡であったとも考えられる。

第5節 藤安調査区

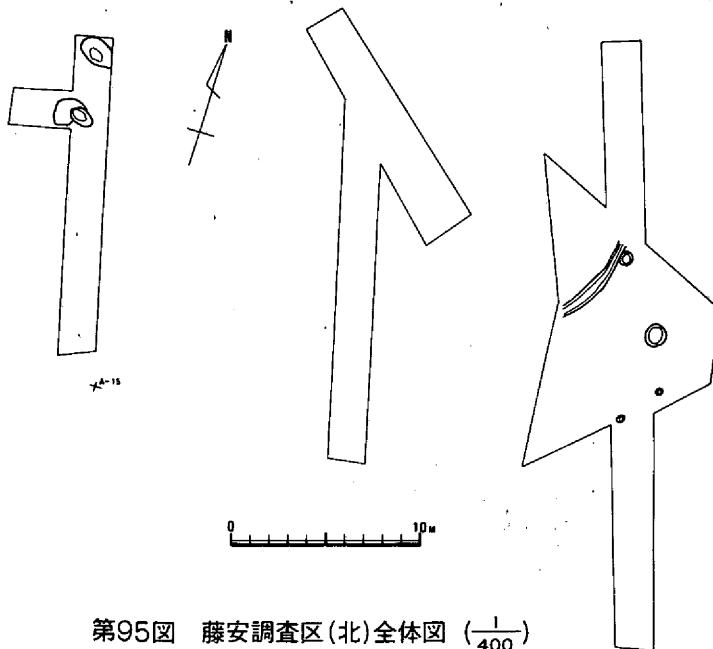
1. 藤安調査区の概要 (第95, 96図, 図版19)

実政の南端にある比較的大きな谷をはさんで南側に小さな張り出しが東へのびている。地表は小さな水田が段々になっていた。

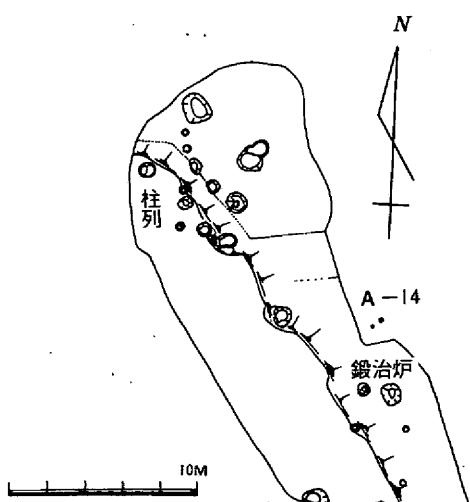
字藤安の範囲はさらに小さな谷をはさんで南側の台地先端部まで含まれる。この南の田代調査区とは割り付けの中軸線と斜めに交わる道が境になっている。北側の細い尾根在の部分は各段にトレンチを入れたが、最上段の水田で土壙2が検出され、最下段では現状の水田の溝と不整形の凹みがみられたにすぎない。南側の台地端部では西側が削平されているが、柱列、鍛冶炉、その他土壙などが検出された。北東部は傾斜が急になっていて、トレンチ調査の結果、黒色土、礫の堆積が厚いことがわかった。この部分で縄文晩期の土器片を1片検出している。

(1) 柱列 (第96図)

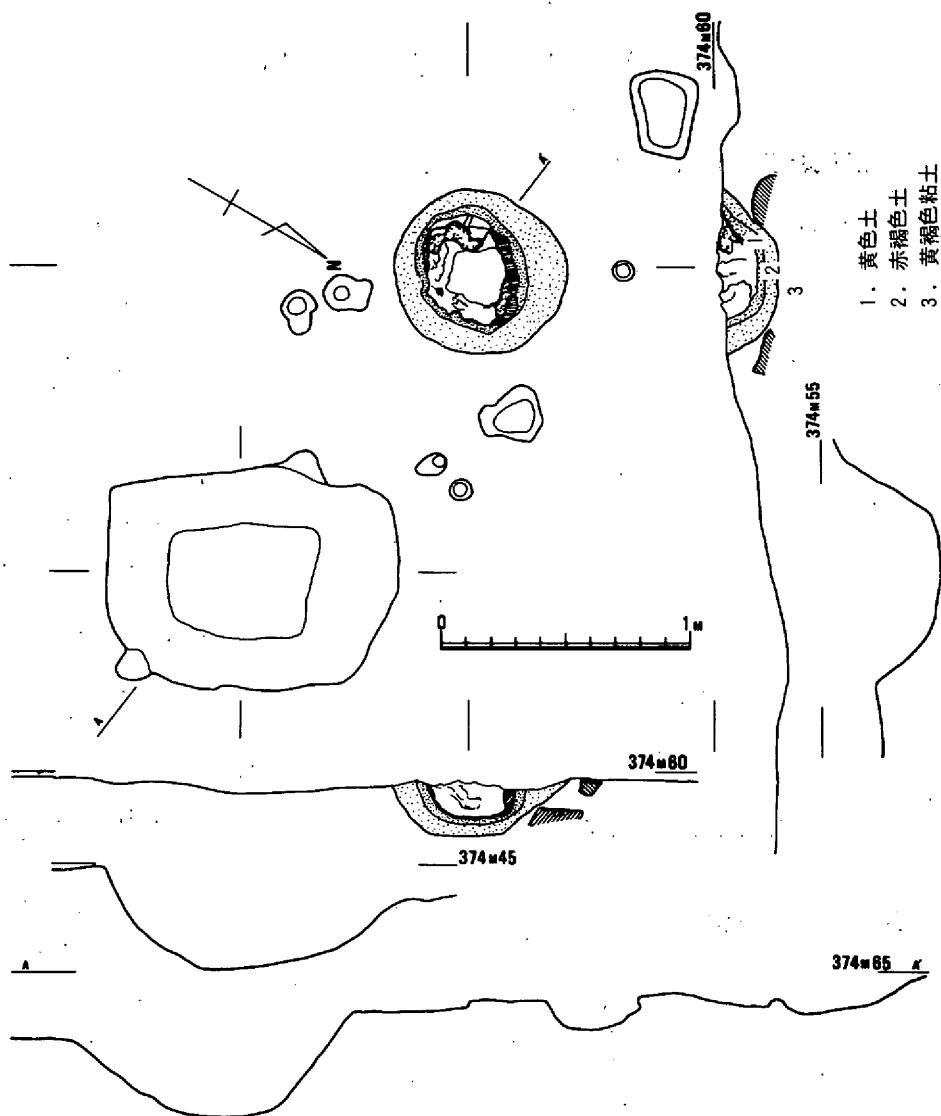
柱列は南側の台地端部で検出されている。柱穴はいくつもあるが、建物としてはまとまりにくい。そのうち比較的大きな掘り方をもつ柱穴3個が直線的に並ぶ。北端の柱穴では柱痕が残っていた。柱穴の掘り方はほぼ80cm、残存する深さは35cmである。柱列はN52°Wで、柱間は3mである。おそらく、西側の削平された部分にもかつて柱穴が存在し、建物となっていたものと推測される。柱痕は黒柳鎮氏の鑑定でネムノキであることが判明した。



第95図 藤安調査区(北)全体図 ($\frac{1}{400}$)



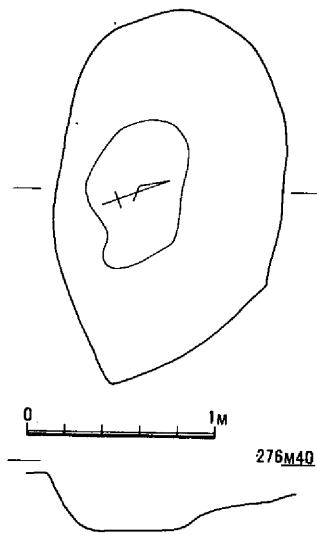
第96図 藤安調査区(南)全体図 ($\frac{1}{400}$)



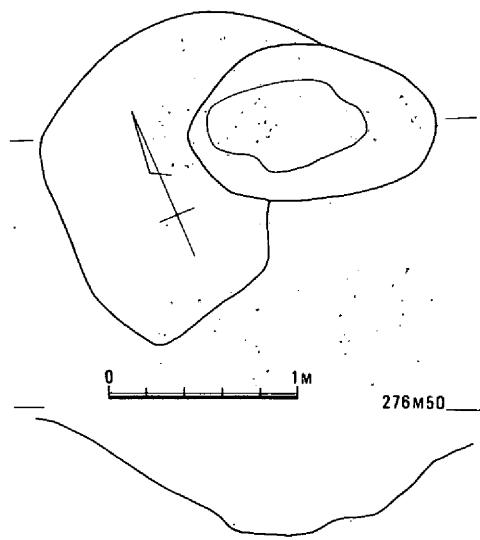
第97図 鍛冶炉実測図

(2) 鍛冶炉(第97図、図版19-2)

南の平坦面に鍛冶炉が1基存在する。水田の床土を除去した段階で検出したもので、上部は削平されている。炉はほぼ円形を呈していて、底部はやや平坦になる。内側はよく焼けていて、表面がとけている。内側の色は青灰色を呈し、そのまわりがほぼ5cm位の厚さで黄色を呈し、その外周は10~15cm位の厚さで赤色を呈している。炉の内側の現状では、直径40cm、深さ16cmを測る。地山は大きな礫を多数含んでいる黄褐色粘土である。炉の東側は少し傾斜して、炉から約1.2m離れた部分が平坦になり、この面には鉄滓などを含む堅い面になっている。この南側に長方形の土壙が1個あり、内部に鉄滓などを含むことから鍛冶炉に伴うものと推測される。大きさは長径115cm、短径87cm、深さ40cm



第98図 土壌1実測図



第99図 土壌2実測図

を測る。平坦面直上で亀山焼の破片が検出されていることなどから、時代は中世のものと推測される。

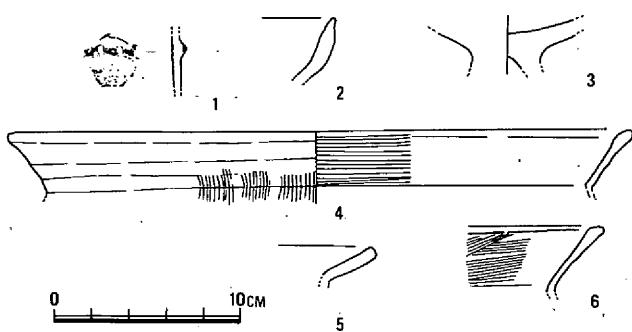
(3) 土壌 (第98・99図)

北の細い尾根上の土壌は2個ともほぼ楕円形を呈している。いずれも灰色粘土で埋没していて、遺物は何も含んでいない。大きさは土壌1が長径200cm, 短径120cm, 深さ30cm, 土壌2が長径130cm, 深さ60cmを測る。

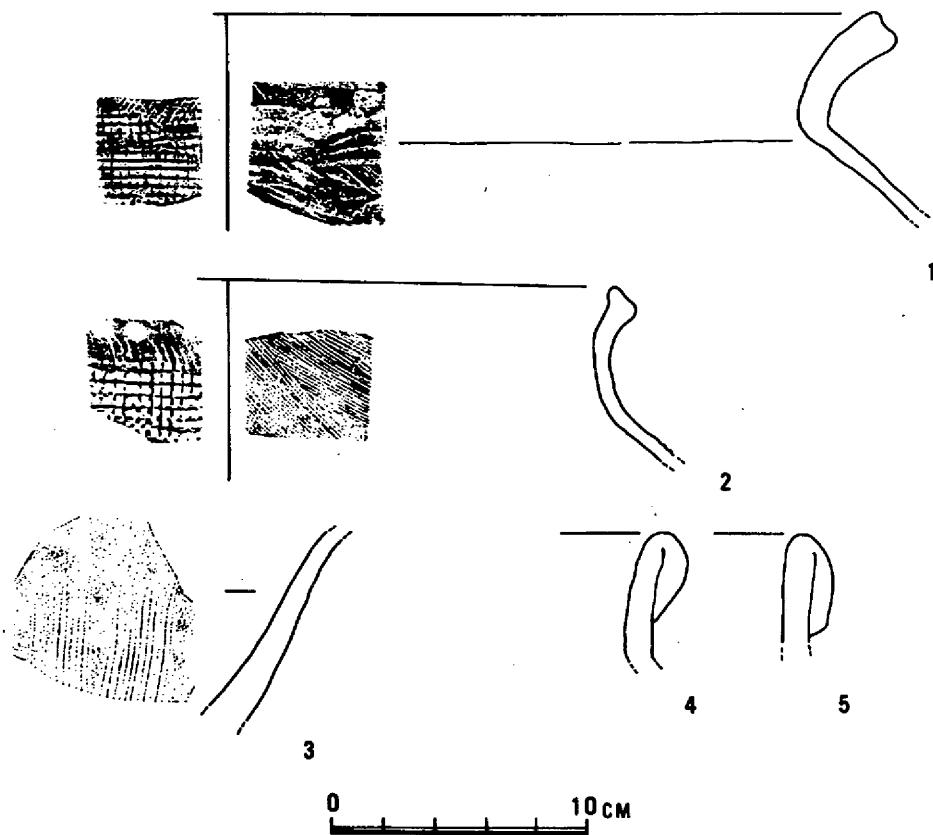
(4) その他の遺物 (第100, 101図)

きざみめを施した凸帯のある甕片が1片ある(第100図1)。他に土師器の甕、高杯、鉢などの破片がある。

亀山焼には大型の甕の破片がある。第101図1は口縁が湾曲しながら外反し、頸部から端部へだんだん肥厚する。肩部には細かい格子目の叩きが施され、内面には青海波状のタタキを施したあとなどでいる。胴部の器壁は薄い。胎土



第100図 土器実測図 (1/4)

第101図 龜山焼・備前焼実測図 ($\frac{1}{3}$)

には微砂を含み、色調は灰色を呈する。2は少し外反する。端部は肥厚して内側へ張り出す。外面には格子目のタタキを施し、内面には斜位のハケメを施している。3は擂鉢の破片である。内面には10本のかきめが施されている。色調は淡茶褐色を呈している。備前焼とは異なっている。4、5は備前焼の壺の口縁部で、折りかえして玉縁になっている。色調は茶褐色を呈するが、5には灰緑色の自然釉がかかっている。以上はいずれも中世に属するものである。

2. 小 結

北側の小さな張り出しには明瞭な遺構は存しない。南側の台地は田代調査区と一体となっていたものである。中世の鍛冶炉とそれに伴うと推定される土壠、周辺の床面などの関係が重視される。柱列は建物を推定できるが、鍛冶炉との関係などは明らかでない。遺物は少ない。

第6節 田代調査区

1. 田代調査区の概要(第102図、103図、図版21・22)

田代調査区は、神代川西側の東向き傾斜面で、南には舌状に延びる尾根、北は谷によってはさまれた位置で段状に削平され、耕地となっていた地域に遺構の存在が認められた。調査範囲は地形からあって2つの部分に分けて行った。いずれも現状は斜面であるためと耕作のためにによる削平がなされている。そのため一部分の遺構は帯状に残り他は消滅している。さらに南側では前述よりも残存状況は悪いものであった。また傾斜面下方に堆積、あるいは押されている土砂の中には弥生式土器から土師器、須恵器等がかなり出土している。また搅乱土層(耕作土)中(H-13の北西の位置)において中世の鉄製品の出土もみられた。検出された遺構は、住居址、鍛冶炉、土壙、土壙墓(近世、近代も含む)、柱穴、不明土壙(風倒木痕か?)、構状遺構等が検出された。柱穴についていいうならば、まとまった形態をして建物となるようなものは一棟も確認されなかった。

出土した遺物は図示されているもの以外に破片もかなりあり、若干の鉄滓も含まれている。

2. 田代調査区の遺構・遺物

(1) 壺穴住居址

1号住居址 (第104図) 南端部の傾斜面に位置し、上部は流出してわずかに壁体溝と柱穴が検出された。壁体溝が「コ」字形にまわるため方形の壺穴住居址であることがわかる。大きさは残る一辺によると5.2mを測る。柱穴は2本確認されたが、北側の1本が若干ずれた位置にある。2本の柱穴の心心距離は2.2mを測る。出土遺物は検出されていない。

2号住居址 (第105図) 南東へ傾斜する斜面に位置し、一部が残存するにすぎない。北西隅がやや丸くまわるが基本的には方形の壺穴住居址である。現存の大きさは最もよく残っているところで4.4mを測る。住居に伴う柱穴は2本確認された。壁から約1.5mのところに位置し、柱穴の直径は約30cmを測る。柱間は心心で2.3mを測る。南の柱穴には長方形の扁平な石が置かれている。この住居址に接する傾斜面付近で第114図の3、6が検出されている。このことからほぼ6世紀後葉の住居址の可能性がある。

3号住居址 (第106図) 南側の最西端に位置し、上部は畠地のため削平され、一方は傾斜面になっていて流失している。用地内で確認されたのはわずかな部分だけで形態等がよくわからない。土層断面によると南端部では黒ボクの堆積層の上にも床面がのびていたことがわかる。耕土を除去すると埋土中から土師器の壺が礫とともに検出された。

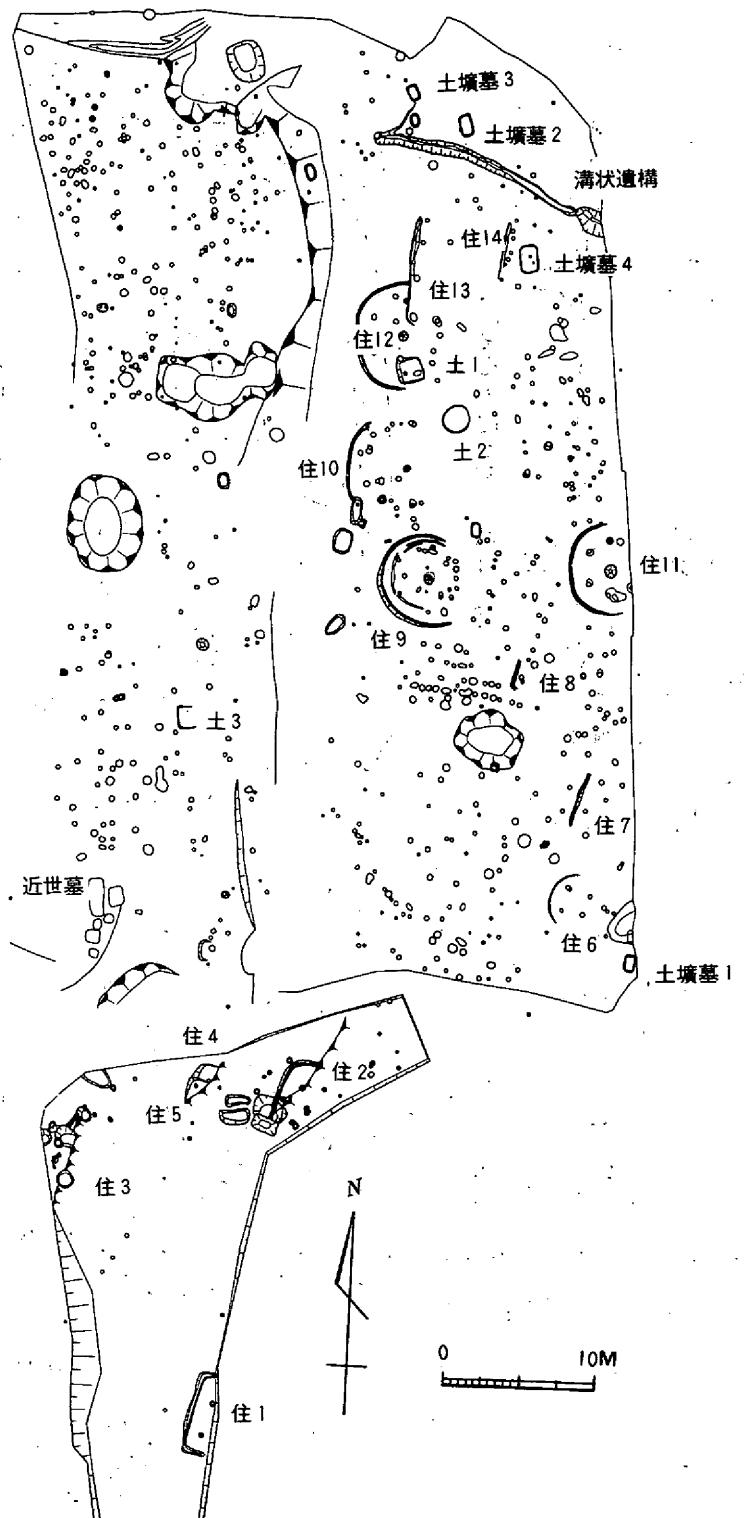
出土した壺(第107図)はほぼ1個体分に相当する。口縁部は頸部から湾曲しながら外反し、口縁端部は水平になっている。胴部と直接接合できないが、肩が張らず、胴部下半は球形に近い。底部は丸底である。口縁部の外面は横位になでてあり、内面は横位のハケメを施している。胴部の外面には縦

西江遺跡(58)



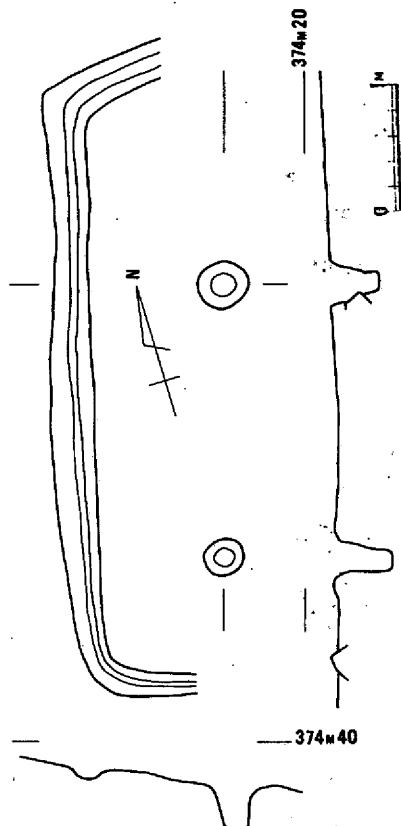
第102図 田代調査区周辺地形図

西江遺跡(58)

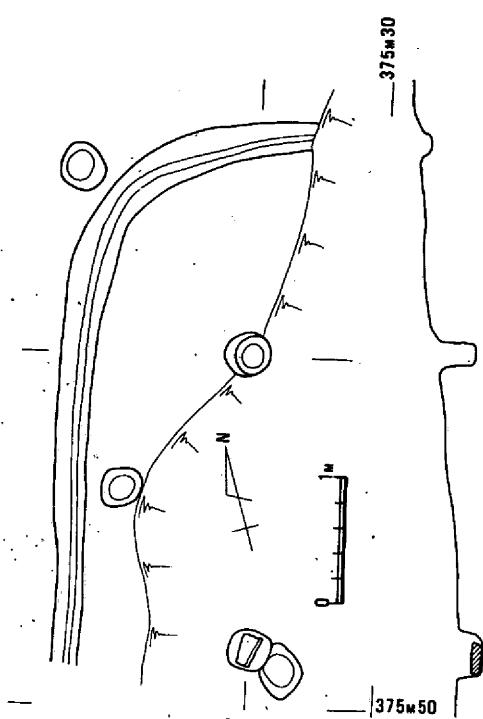


第103図 田代調査区全体図 (1/500)

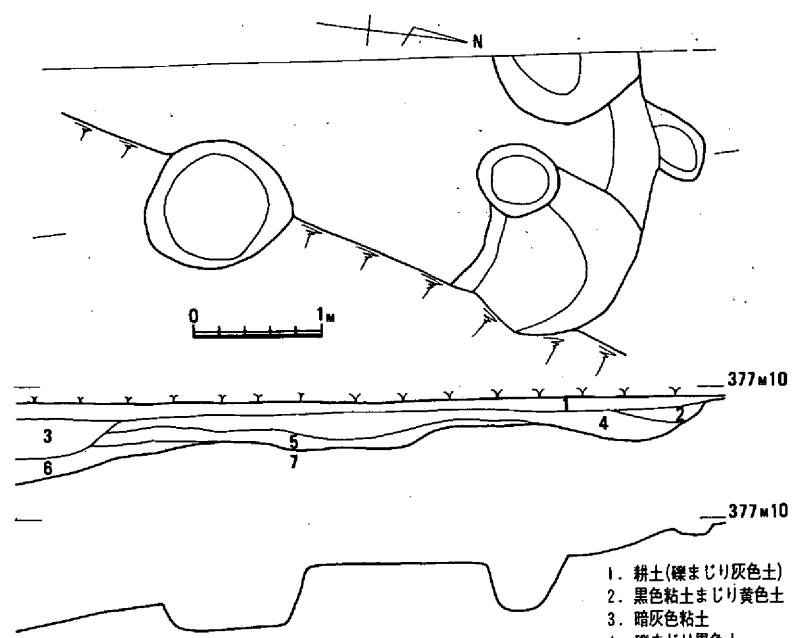
西江遺跡(58)



第104図 1号住居址実測図



第105図 2号住居址実測図



第106図 3号住居址実測図

1. 耕土(疊まじり灰色土)
2. 黒色粘土まじり黄色土
3. 暗灰色粘土
4. 疊まじり黒色土
5. 黄色粘土
6. 疊まじり黒色粘土
7. 地山(疊まじり黄色土)

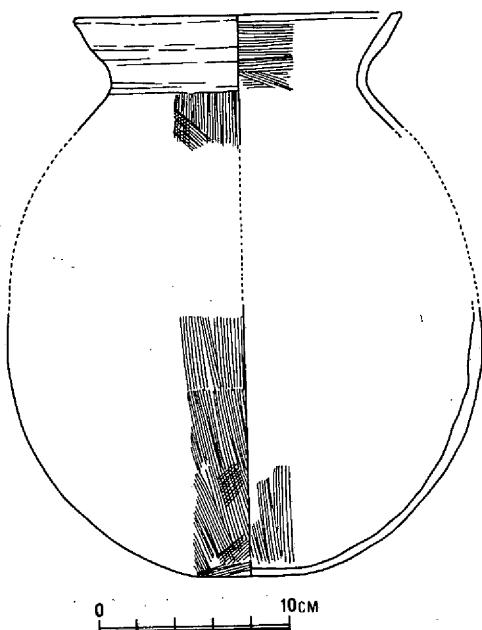
西江遺跡(58)

位のハケメを施し、肩部と底部周辺には交差するハケメを施している。内面は凹凸が多く、ほぼ縦位のハケメを施している。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。年代はほぼ5～6世紀のものであろう。

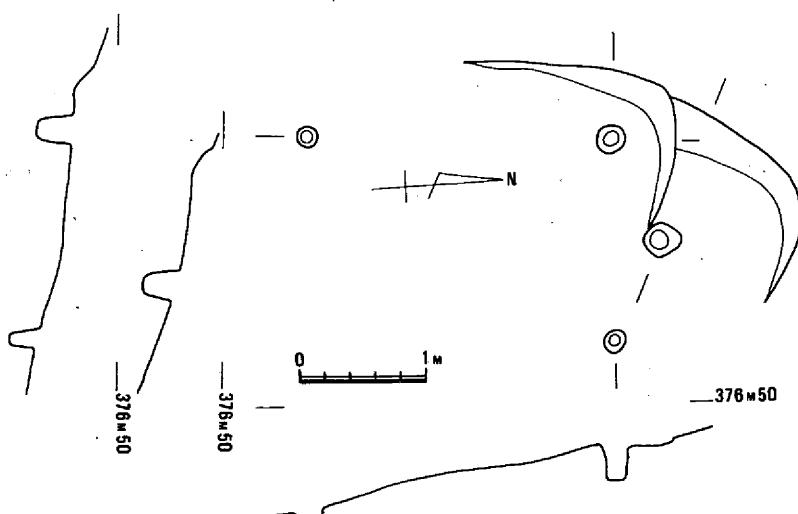
4・5号住居址(第108図) 2号住居址の西方に位置し、急な斜面になっていて、隅が若干残っているにすぎない。隅の形から方形堅穴住居址であることがわかる。4号住居址では柱穴が1本しか伴わないが、5号住居址では2本伴う。ただ、若干北壁に近くなりすぎて疑問もある。この2本の柱の心心距離は165cmを測る。遺物は検出されていない。

6号住居址(第109図) 平面形は円形と推定されるが北西の2柱穴が床面上に存在しているのみで斜面のため検出されず、柱穴のみで、中央ピット並びに焼土等の付属設備は、綿密に追求したが堅穴内での存在は認められなかった。埋土中においては何らの遺物の混入もみられなかった。

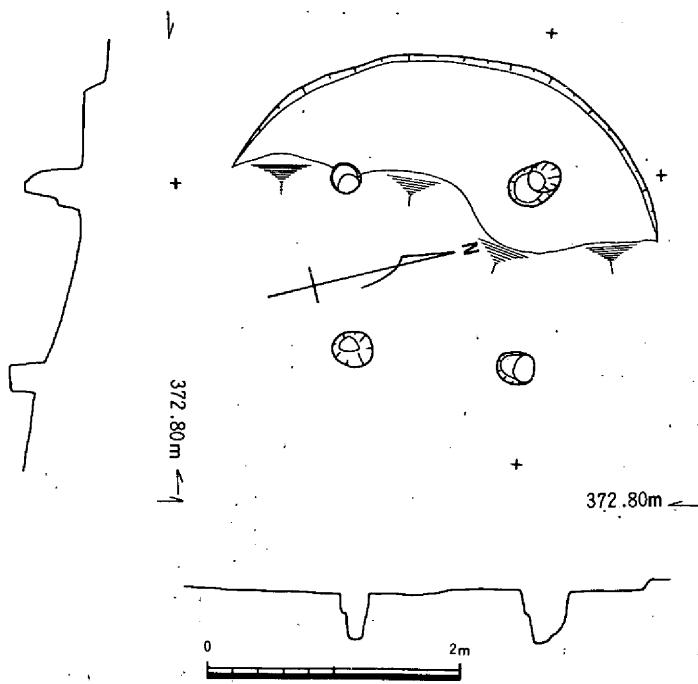
9号住居址(第110図、図版23-2) 平面形態はほぼ円形を呈している。堅穴内における柱穴群は、中央ピットを挟む形で対になっているが、6は浅く3に対応するものとは考えにくい柱穴である。よってこの堅穴住居に伴う柱穴の本数は5本と推定される。また付属施設としては中央に位置して一



第107図 3号住居址出土土器実測図 ($\frac{1}{3}$)



第108図 4(右)・5(左)号住居址実測図



第109図 6号住居址実測図

辺約60cmの隅丸方形を示し、深さ約25cmの中央ピットが存在する。さらにこの中央ピット内には、若干の灰、炭の存在が確認された。竪穴の床面には貼り床があり、下より壁体溝が検出された。このことから、この竪穴は拡張された住居であり、柱穴は拡張後も同一のものを使用したものと考えられる。又南側の壁体溝内において4本の柱の痕跡も検出された。

出土遺物は第114図、1～7で、床面に密着するものは第114図、5、7、第115図、3、8があり、前者の7は壁体溝内に一部が埋没していた。

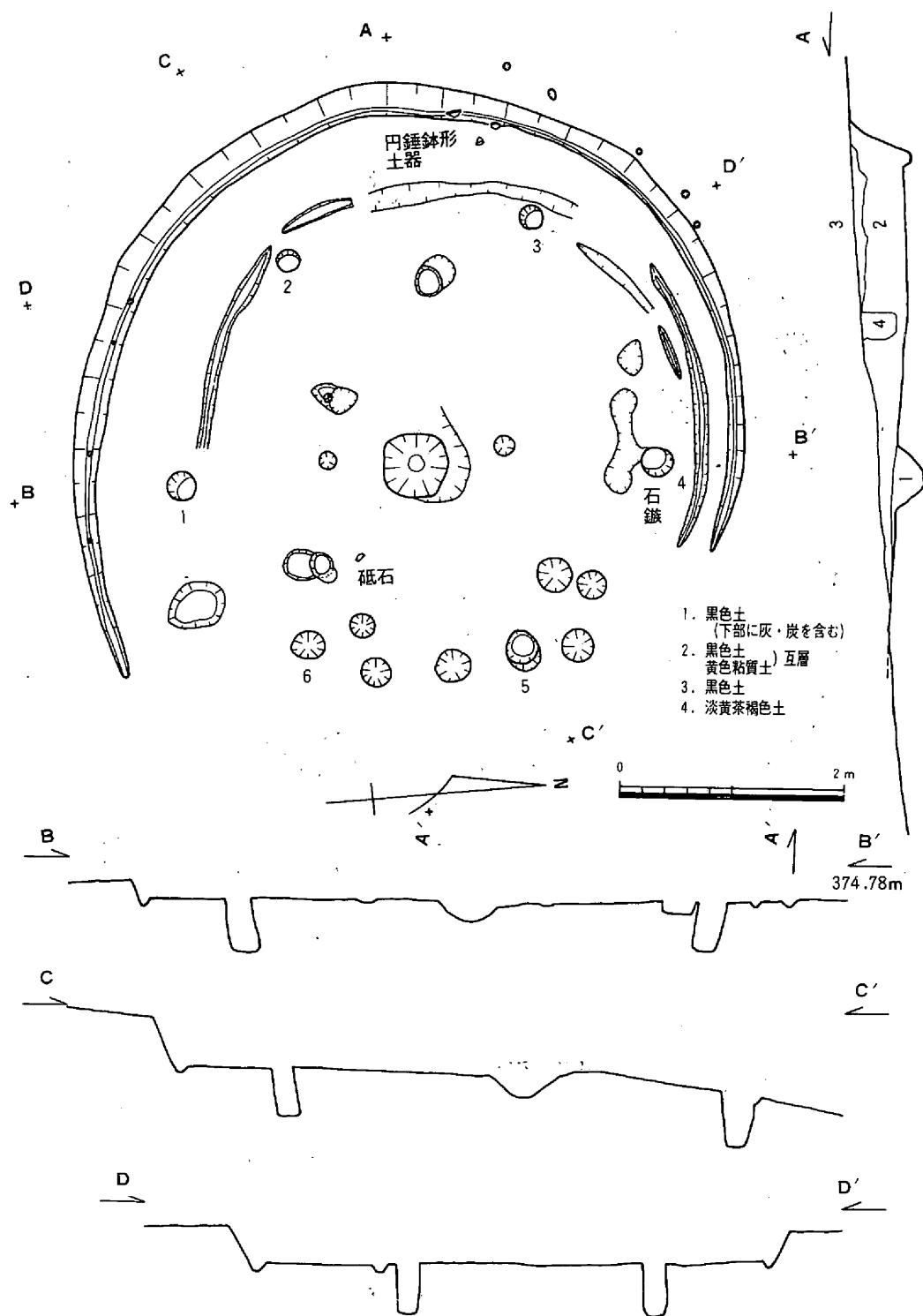
とりわけかわっているものには5のような円錐鉢形土器が出土している。またその他の遺物は上層～床面直上において出土している。それらの中の1点第114図4は耕作中において口縁部の一部が破損している。さらにこの竪穴内より第117図、6、7の鉄製品が出土している。本遺跡の住居址内からの鉄製品の出土はまれなものである。埋土中においてかなりの量の土器片が混入していた。器種は甕の破片が多い。

10号住居址(第111図、図版23-1) 壁体溝の一部より推定される平面形態は不整円形で、これに附隨する柱穴が確認されたにすぎない。施設は存在せず2本の竪穴にともなうものと思われる。さらに床面上には第114図8の土器片紡錘車、並びに甕が出土している。また、壁体溝も南西の位置では土壤によって切断され、そのほか全体に削平をうけているため何ら遺構は検出することが出来なかった。柱穴についても同様のことがうかがわれた。

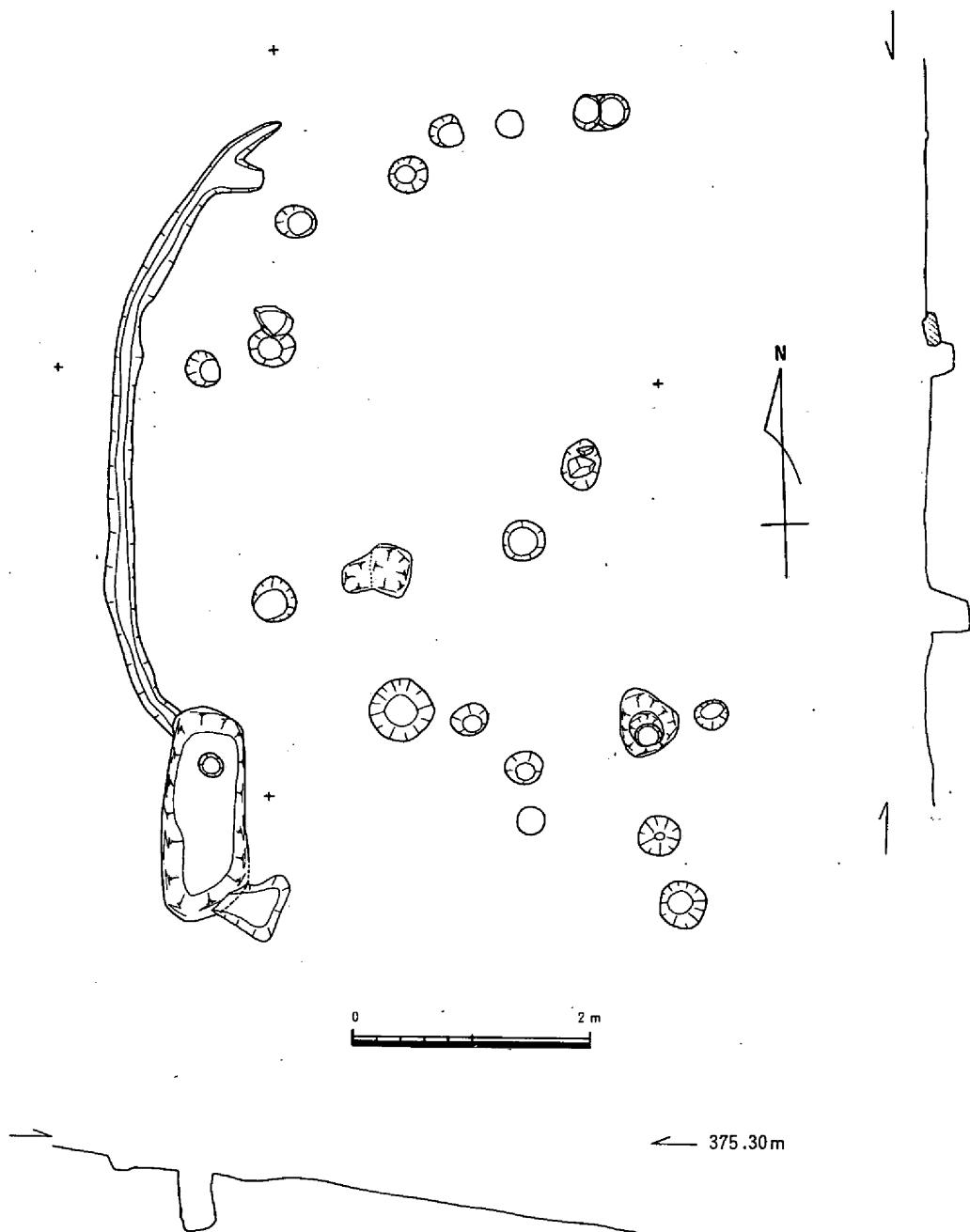
11号住居址(第112図) 平面はほぼ円形と推定される。柱は6本と思われるが5本が路線内に存在していた。壁体溝はとぎれてはいるが図の如く検出できた。附属施設としては、竪穴中央部には径7cm～85cmの不整円形で深さ32cmを測る中央ピットが存在している。この底部には若干はあるが土器片及び灰、炭等の混入も認められた。さらに中央ピットの西側には、柱穴を囲んで不整梢円形のピットがある。これは浅くて用途不明のものであった。竪穴の埋土中または床面に密着して遺物が出土している(第114図10、11、13、14)。そのほか埋土中から若干の破片も検出している。

12号住居址(第113図、図版24-1) 平面形態はほぼ円形と推定される。柱穴は5本までは確認す

西江遺跡(58)

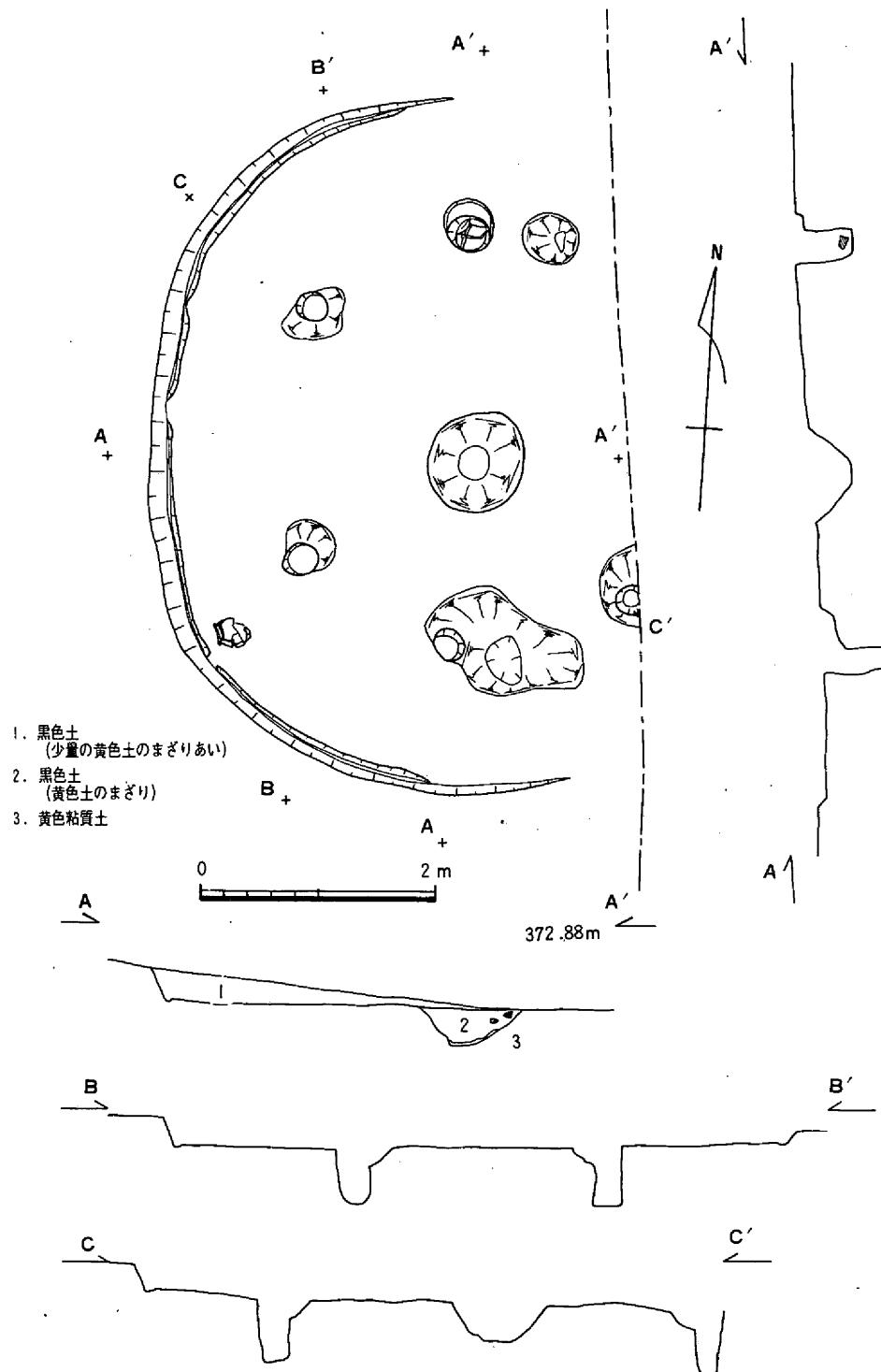


第110図 9号住居址実測図



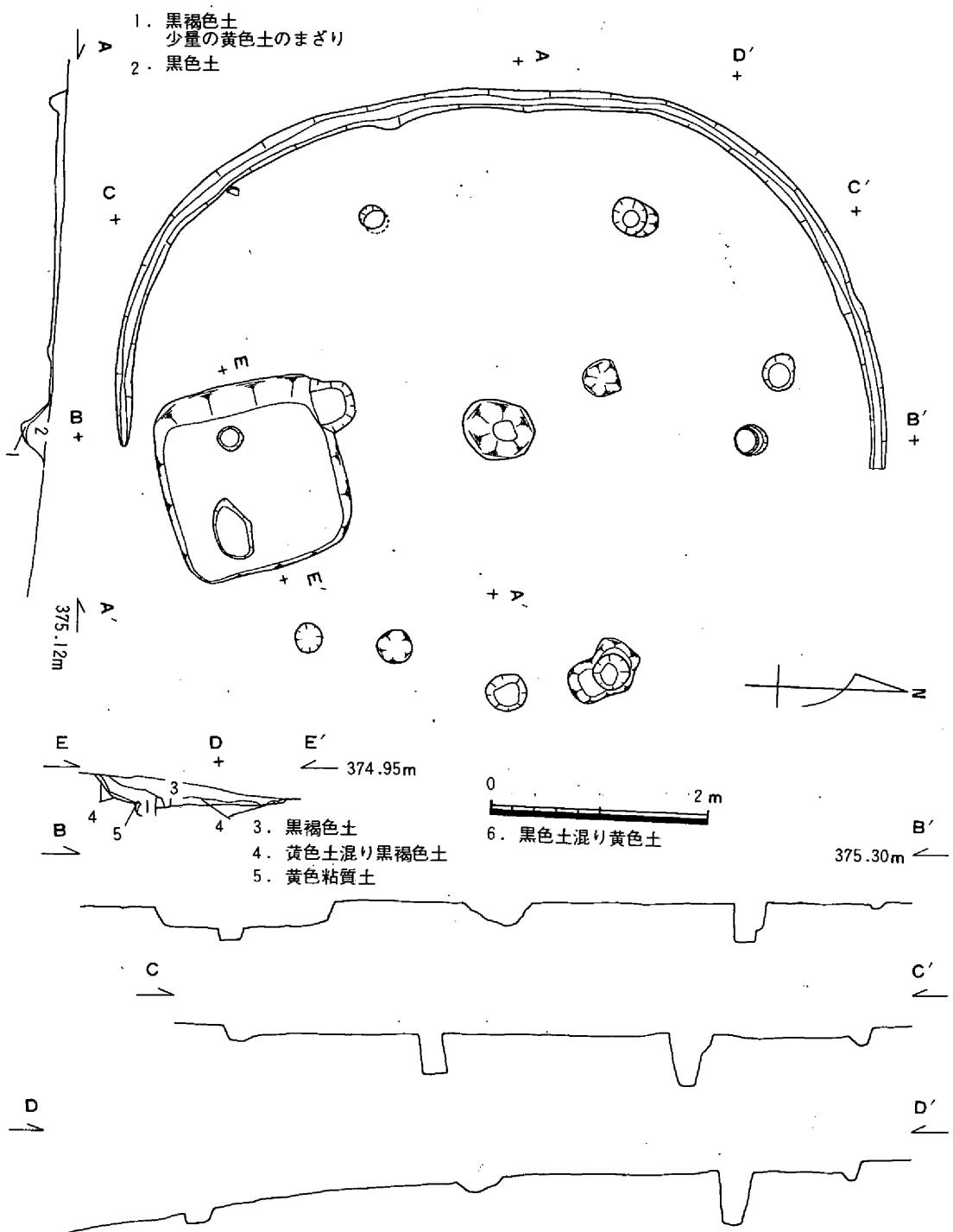
第111図 10号住居址実測図

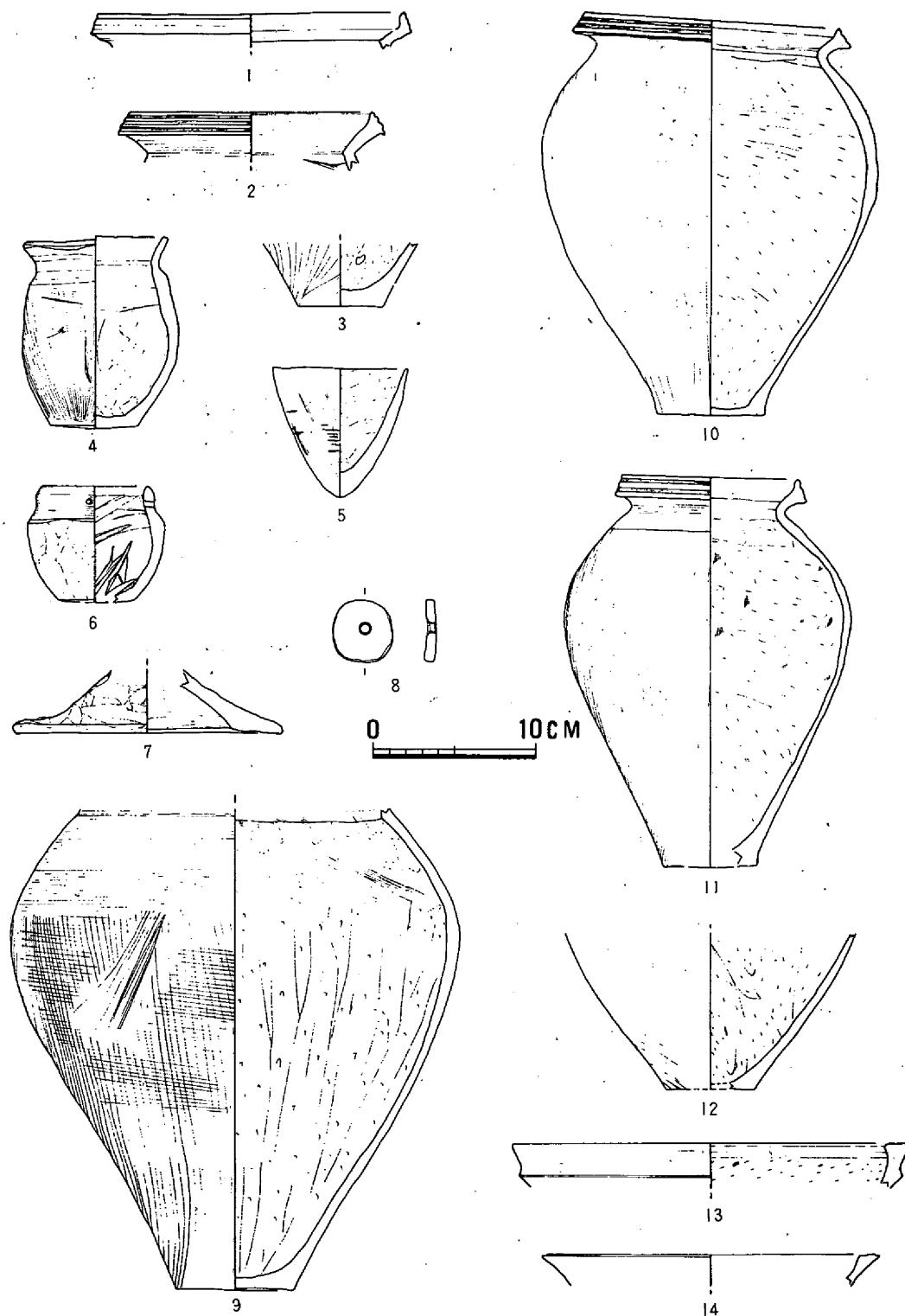
西江遺跡(58)



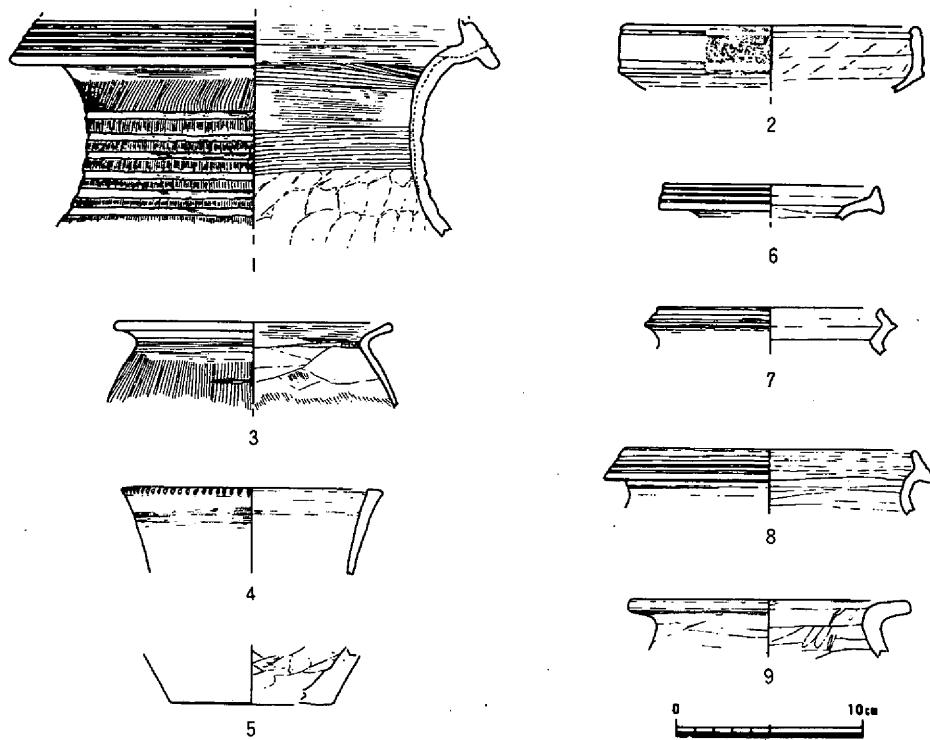
第112図 11号住居址実測図

西江遺跡(58)





第114図 弥生式土器・紡錘車実測図 ($\frac{1}{4}$)

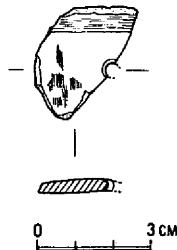
第115図 弥生式土器実測図 ($\frac{1}{4}$)

ることができたが、あと1本は浅く不鮮明であった。いずれにしてもこの竪穴に伴う柱穴数は6本である。

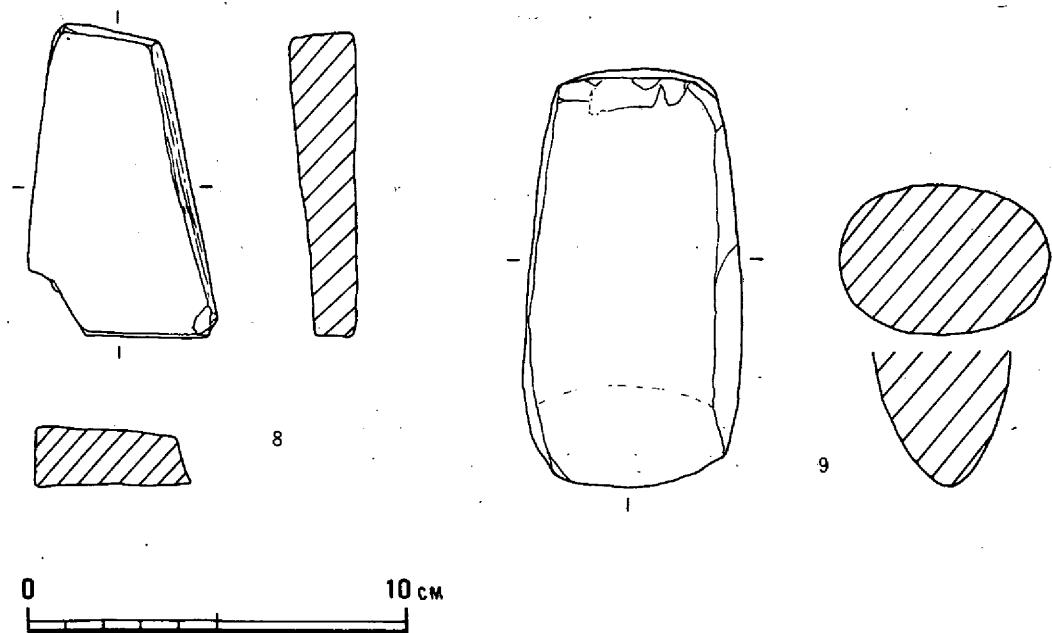
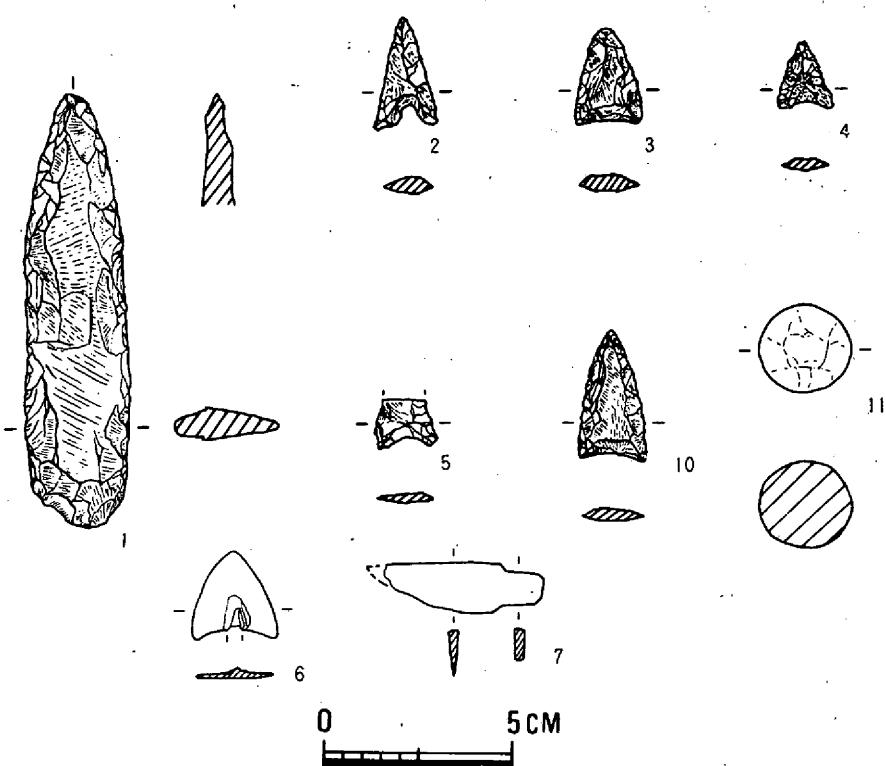
附属施設としては不整楕円形の平面形態を示している深さ21cm位の中央ピットを有している。また竪穴の南隅には長径177cm、短径167cm、深さ約20cmの正方形に近い土壙が検出された。竪穴とこの土壙の関係については、埋土状態からみて柱穴が土壙の埋没後に掘り込まれていた。しかしながら、伴出遺物からみても大幅な時期的な差は感じられない。ちなみに竪穴内出土遺物は、第114図12、第115図6である。12は中央ピット内出土である。土壙内からは、第114図10、第115図1、2があり、土器からみれば弥生時代中期後葉に属するものであろう。

住居址出土遺物(第114図)

壺片(1, 2, 3) 1, 2は胴部より「く」字状にまがり、すばみながら外反し、2の口縁部外面には3本の凹線がみられる。内面整形は頸部より下がヘラ削り、上は横ナデが行われ、外面はナデによって仕上げられている。3については内面で縦のヘラ削りが行われ、外面は胴部より継続するヘラ磨きが行われている。

第116図 紡錘車実測図 ($\frac{1}{2}$)

西江遺跡(58)



第117図 石器・鐵器・土玉実測図

壺(9~12) 胴部より「く」字状に折れまがり、すばみながら外反し、ヘラ状工具による沈線をもつ口縁が10と11においてみられる。9はくびれ部が若干で、上部は損失している。胴部外面整形は、上部がクシ状工具のナデ、肩部以下はクシのナデの後、ヘラ磨きを行っている。内面についても同様の整形順で行われている。10・11において、胴部外面整形は、上部が刷毛状工具による横ナデ、肩部から下は、まず刷毛の横ナデ、その後ヘラ磨きが施されている。内面は胴部上半に刷毛、のち斜・縦のヘラ削りの仕上げである。くびれ部分は指によるナデ仕上げを行っている。12も同様と思われる。

小型壺(4) 本品の胎土は微砂を多量に含む簡素な土器である。外面胴部より下は細いヘラ磨きが施され、頸部はしづりが行われた後、指による横ナデ、内面整形は、上部が横ナデ、下部は縦のヘラ削りが行われ、器壁は薄く仕上げられている土器である。

小型壺(6) 胎土はほぼ一定した微砂を用いているが、若干の小石を含んでいる土器である。内面にはまばらに細かいヘラ状工具を用いている。外面は多面を持つヘラ削りである。表面には赤色顔料が塗布されている。頸部は指の横ナデが行われ、また2個の穴が穿たれている。この穴も対応面に同様のものがあるのであろうが、残存は約3分の1のみであるため不明である。

円錐鉢形土器(5) 本品の胎土は砂粒が多く、外面は全体に面取りを行い、つづいてタタキを施こし、さらに縦の刷毛によって整形されている。底部は指でつまんで仕上げを行っているようである。内面は荒いヘラ削りで仕上げられている。

壺(第115図1) 壺の整形に類似している。頸部には6本の凹線が施され、頸部の内外面にはクシによる整形がなされている。また、内面の肩部に近い部分はナデ仕上げ、口縁内面も横ナデの整形となっている。

高杯(2) 口縁内面は細かなヘラ磨きで仕上げられている。また外面には櫛描き波状文が施されている。

不明土製品(7) (第114図7) 器形、用途とも不明のものである(7)。外面の整形は非常に粗いヘラ削りが行われている。内面も同様にヘラ削りであるが、外面にくらべて幾く分かれいである。また、内面全体に煤が付着している。

(11) (第117図11) は中央ピット(12号住居址)内より出土しているもので、表面全体は面取りによる仕上げがなされている。

紡錘車(8) 最初から紡錘車として作られたものではなく、土器片を用いたものである。10号住居址内からの出土品である。第116図の紡錘車は9号住居址の埋土中で検出されたものである。弥生中期前半の壺の頸部直下の破片である。土器の外面はうすくハケメが施され、内面には横位のヘラ磨きが施されている。胎土には微砂を含み、色調は内・外・断面とも灰白色を呈する。現存の重量は3gである。

石器・鉄器(第117図・図版27) 田代調査区住居址・ピットー1出土の石器は8点ある。各種類別に記してみる。

石槍(1) (9号住居址出土)(1)は表裏面共に大きな剥離面を残し、両側刃に刃をつけている

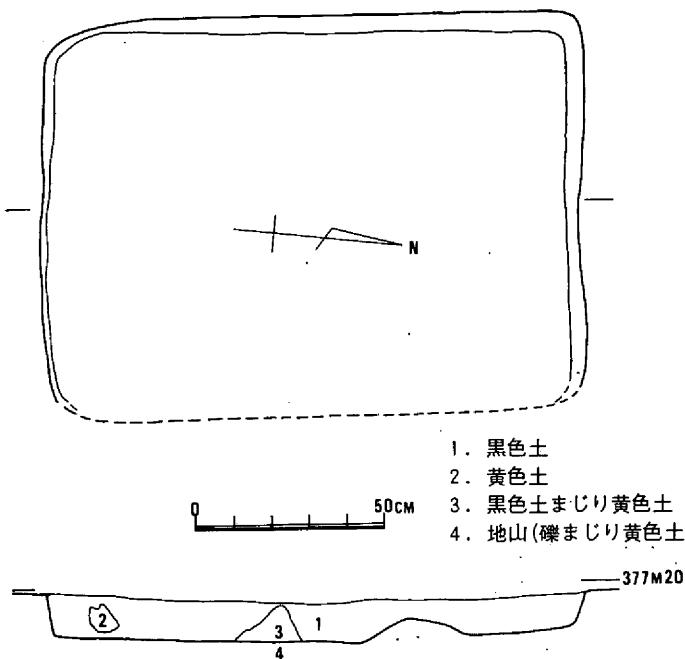
が、基部から4.6cmまでは刃をつぶし着柄のための加工が施されている。さらに基部の一部は人工的に磨滅している。サヌカイト製である。

石鎌(2~5, 9号住居址)(10, 12号住居址) 総数で5点出土している。すべてサヌカイト製

である。表裏面共に大きな剝離面を残した六角形の扁平な断面を示すもの(3・5・10), (4)のように調製剝離面が中央部分にまでおよび、断面形が菱形になるもの、さらに(2)のような前者とは、調製剝離並びに形態が異なり、断面形態も両丸で抉りも深い。縄文時代の様相を呈しているものも出土している。いずれにしても基部の形態はすべて凹基式のものである。いずれにしても(2)のような石鎌も(3)~(5)と同遺構内からも出土している。

砥石(8)(9号住居址出土)

弥生時代の住居址床面に密着して検出されたもので、上下の2側面



第118図 土壌3実測図

を除いたすべての面が使用されている。また砥がれた製品は鋭利なもので、砥石の使用面に条痕が残っている。また、中央部分にわずかのくぼみ面がみられるが何の為めに、何を用いてくぼめたのかは検討をようするものである。

大型蛤刃石斧(9, 9号住居址出土) 敲打されたあと両側面をのぞいて全面が研磨されている。また両側面には敲打時点において着柄部分に位置すると思われるくぼみが作られている。この遺物は刃部の破損状態からみてかなり使用されている。

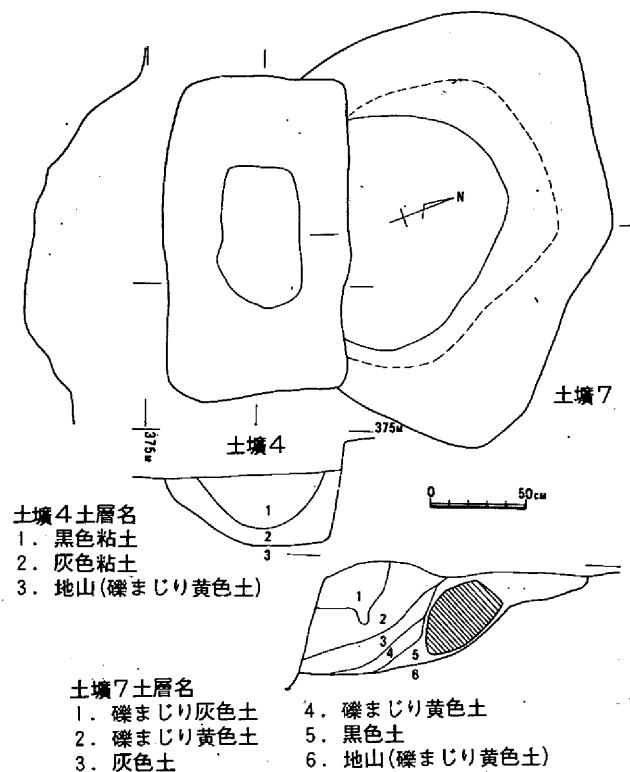
鉄鎌, 刀子(6・7, 9号住居址出土) 鉄鎌, 刀子の出土はいずれも1点ずつである。鉄鎌は凹基式の平造りで、着柄ははさみ込んだ形で行われているようである。刀子は先端及び刃部がサビによって破損してはいるものの、現存長は約4.2cmを測ることができるものであり、刃の部分は両方からの研ぎ込みがなされている。

(2) 土 壤

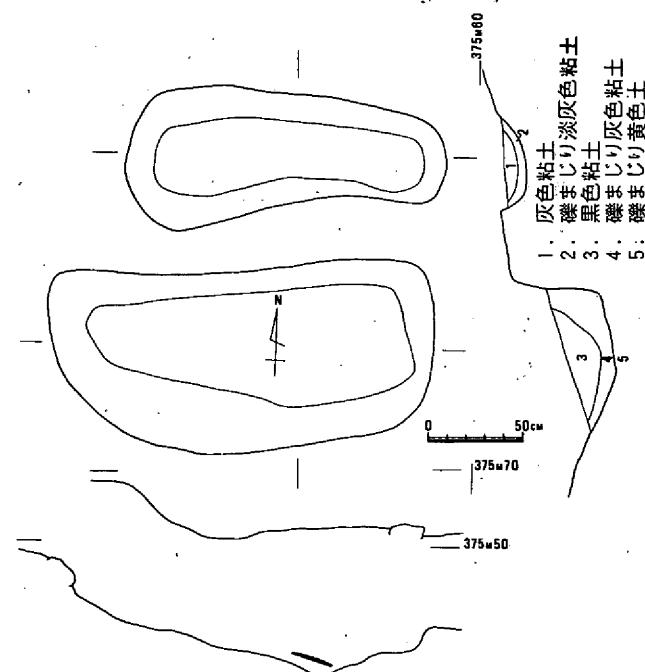
住居址群の周辺には多数の不整形土壌があり、年代もあきらかでないものが多い。住居址に伴う可能性のあるものなどを除き以下に述べる。

土壌3(第118図) 田代調査区の西方の高い部分に長方形の土壌がある。緩やかな傾斜になっている。東側が残っていない。大きさは長辺152cm, 短辺は約105cm, 現状の深さ11cmを測る。埋土はほ

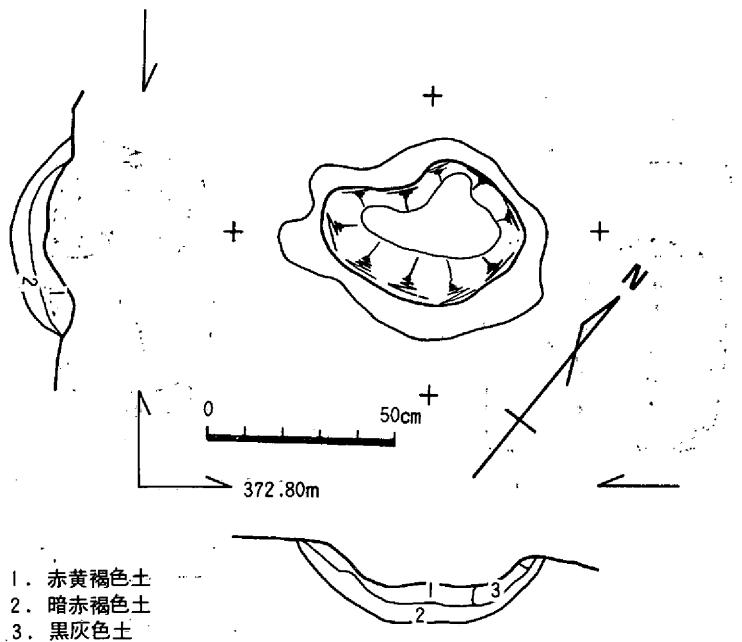
西江遺跡(58)



第119図 土壌4・7実測図



第120図 土壌5(下)・6(上)実測図



第121図 鍛冶炉実測図

とんど黒ボクで黄色粘土のブロックを含んでいる。埋土中からは遺物は検出されていない。

土壙4 (第119図左) 2号住居址に接して、長手の土壙が3基と不整形の土壙状遺構が1基ある。土壙4は2号住居址によって上部を切られていた。形は長方形を呈し、床面は平坦でない。大きさは長径170cm、短径96cm、深さ52cmを測る。埋土は黒色粘土で、遺物は他の土壙と同様に何も検出されていない。

土壙5 (第120図下) 形がかなりひずんでいる。床面も平坦ではない。大きさは長径202cm、短径85cm、深さ50cmを測る。

土壙6 (第120図上) 形がかなりひずんでいる。床面も平面ではない。大きさは長径170cm、短径74cm、深さ15cmを測る。

土壙7 (第119図右) 形は不整形で、周囲が黒色土で埋没し上部には黄色粘土がある。同様のものは8号住居址の東にも存在する。土層の状況などから人為的なものではなく、風倒木の根の痕跡と考えることもできる。土壙4~6については土壙墓の可能性が考えられるが遺物もなく時代も不明であり、床面が平坦でないことから疑問も多い。

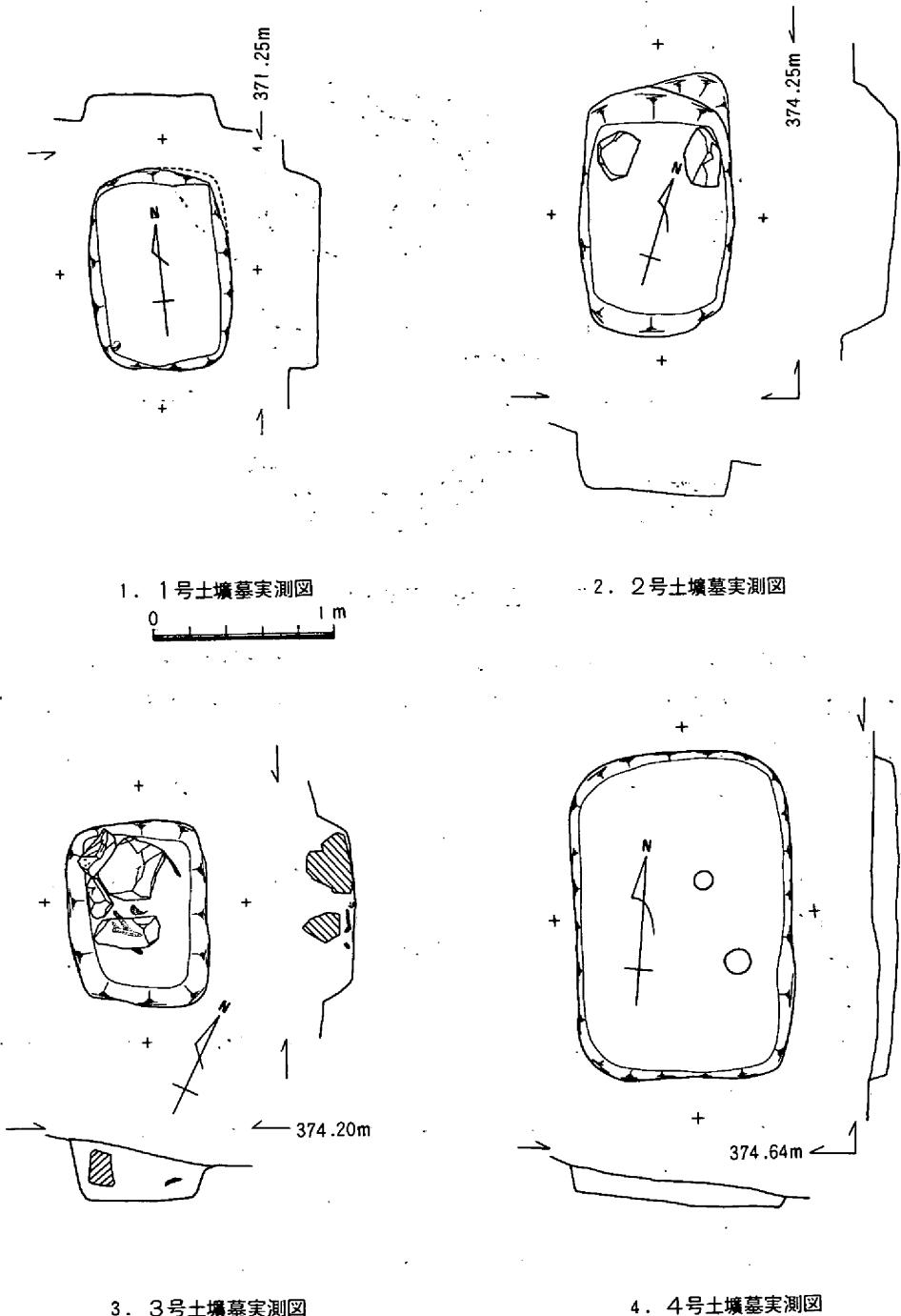
(3) 鍛冶炉 (第121図)

6号住居址の北西約2.5mの位置に検出された。平面形は歪な梢円形に熱が加わって暗赤褐色に変色している。炉の中央部分が少し高くなる断面形態をしている。深さは7~11cmを測る。さらに炉の周辺でかなりの鉄滓が出土している。

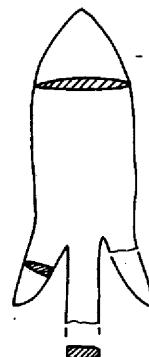
鍛冶炉は他の遺構との時代関係は不明である。

(4) 土壙墓 (第122図、図版26-1, 2)

西江遺跡(58)



第122図 土壌墓実測図

第123図 須恵器実測図 ($\frac{1}{3}$)

第124図 鉄鎌実測図

115図の1～3は近世墓である。4は前者とは異なった性格のものである。なぜならば、1においては朱漆塗り椀とそれに鉄製品、2では角釘、3では、人骨並びに1と同様の朱漆塗りの椀の残片がそれぞれ検出されている。それとは別に4においては第115図4・5の遺物の出土があり、この点からみて4は弥生時代の遺構と思われる。4の性格は明らかでない。

(5) 溝状遺構(第103図)

共伴遺物はまったくなかったが、この溝は尾根づたいに西北西～南東に傾斜して検出された。深さ、幅も場所によって異なっている。深さは20～30cmを測る。下方で楕円形のくぼみをなしていた。深さは最深部で約80cmを測る。

またこの遺構の性格並びに時代も不明である。

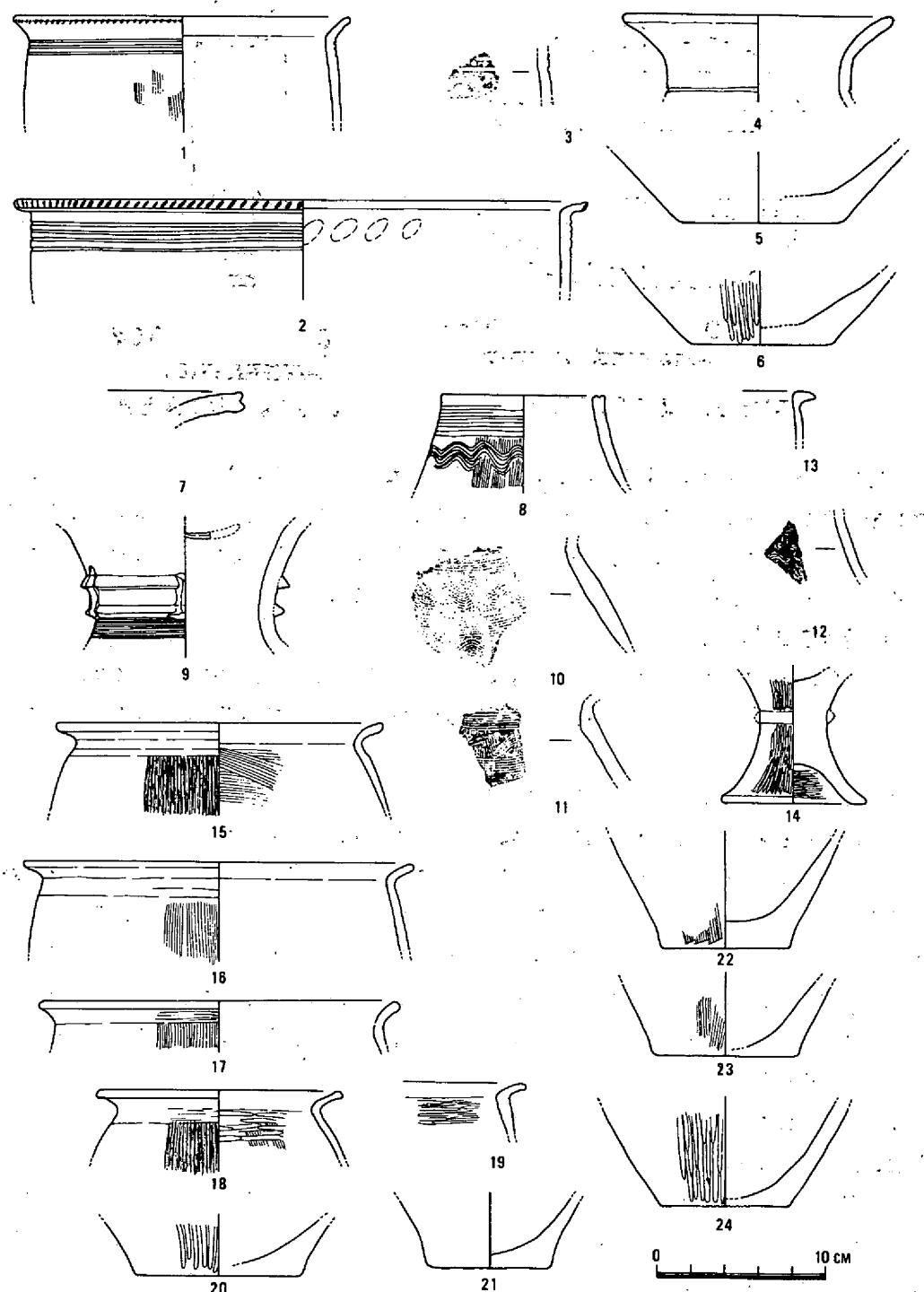
(6) 埋めもどされていた遺物(第123、124図、図版28-2、3、4の右端)

図示された鉄鎌、杯(蓋、身セットは6号住居址の南東隅で土壙1の上部において、搅乱土層の中で検出されたものであり、いずれの遺構にも伴う遺物でない。)の出土状態は、杯の蓋と身の上下が反対になり、その内部に鉄鎌がおさまった状態で検出されたものである。杯は完形品で鉄鎌は有茎式の逆刺を有した平根式のものであり、断面形からみれば両丸造りの鉄鎌である。また遺物でみれば時期は6世紀後葉に比定されるものであろう。これらの遺物(杯、鉄鎌)は古墳から出土したもの埋めたものであろう。

(7) その他の遺物

弥生式土器・土師器(第125～127図)

包含層中から検出されたものについて年代順に説明する。黒曜石が検出されているが、縄文式土器は検出されていない。1は甕の口縁部で「く」字状に折れ曲がり、端部には小さなきざみめが施されている。頸部直下には3本のヘラ描き沈線を配している。胴部外面には縦位のハケメが施されている。色調は灰褐色を呈する。2は口縁部が逆(L)字形に屈曲し、端部には斜位のきざみめが施されている。頸部直下には4本のヘラ描き沈線が施されている。内面には指圧痕が残っている。胎土には

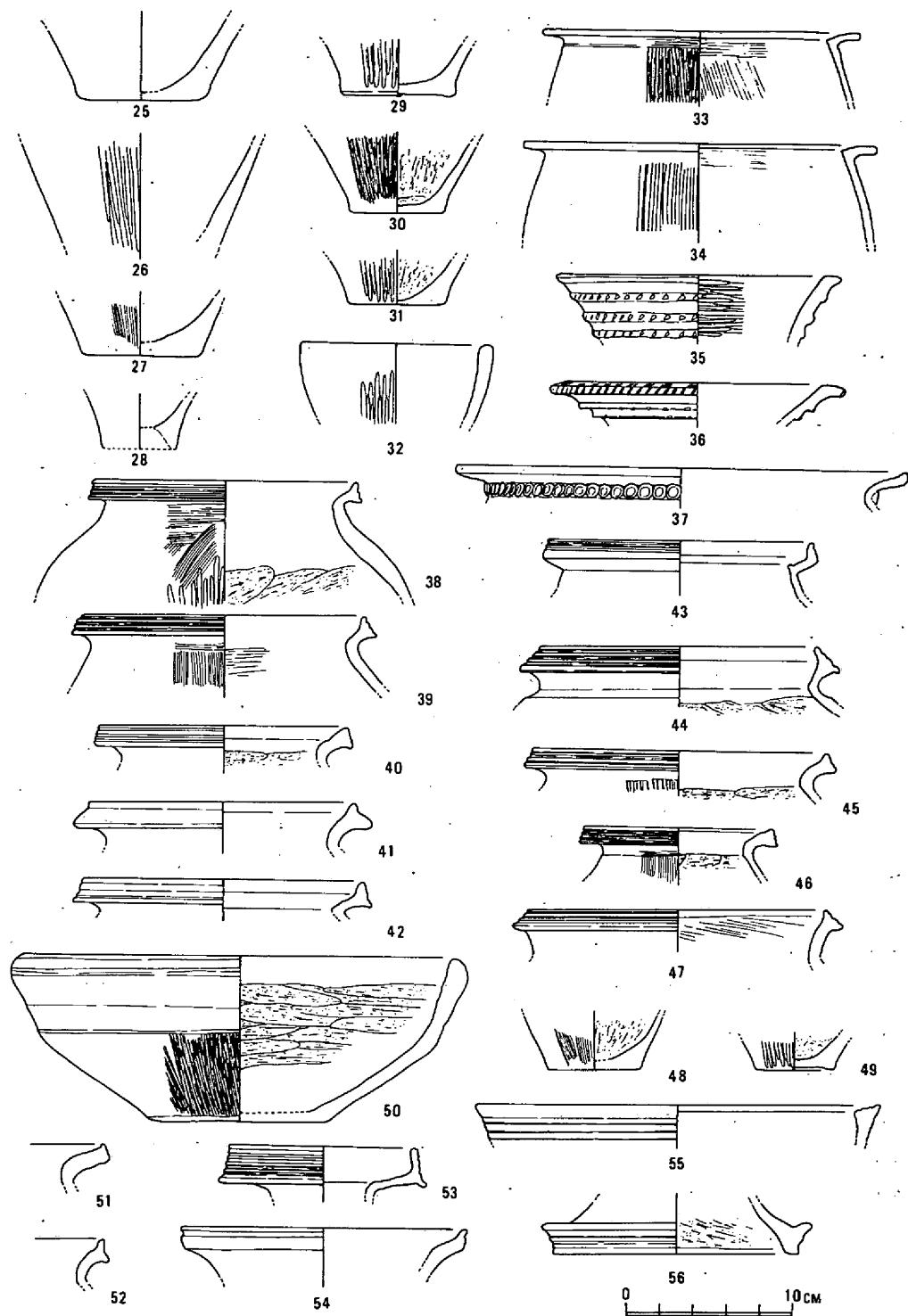


第125図 弥生式土器実測図 ($\frac{1}{4}$)

砂粒を含み、色調は黄褐色を呈する。3は9号住居址の埋土中で検出された甕の小片である。太いヘラ描き沈線が施され、沈線の間には円形の刺突文を配している。胎土には大きな砂粒を含み、色調は内・外・断面とも灰白色を呈する。4は壺の口縁部で、頸部が朝顔形にひらき、端部の断面は丸い。頸部には太いヘラ描き沈線が施されている。胎土には直径2~4mmの砂粒を含む。色調は内・外・断面とも黄褐色を呈する。5, 6は壺の底部で、底部は厚い。6の外面には縦位のヘラ磨きが施されている。いずれも大きな砂粒を含んでいる。色調は内・外・断面とも黄褐色を呈する。7は壺の口縁部で、朝顔形にひらいた口縁端部には一本の沈線を配している。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。8は無頸壺の口縁部で、口縁端部上面には凹みがみられる。外面には縦位のハケメを施したあと、櫛描きの直線文と波状文を配している。胎土には微砂を含み、色調は外面が灰褐色・内面が橙色を呈する。9は壺の頸部で、外面には断面三角形の凸帯を2本配して、縦に棒状浮文を貼付している。頸部のもっとも細くなった部分には櫛描き文を配している。内面にも凸帯を配している。胎土には直径5~7mmの砂粒を含み、色調は黄褐色を呈する。10~12は壺の肩部で縦位のハケメを施したあと櫛描きの直線文と波状文を交互に配している。胎土には微砂を含み、色調はほぼ淡黄褐色を呈する。13は甕の口縁部で、口縁は逆「L」字形を呈している。断面は三角形を呈する。胎土には微砂を含み、色調は灰褐色を呈する。14は高杯で棒状部から上下へひろがる。中央部には凸帯をめぐらしていた痕が残っている。外面には縦位のヘラ磨きが施され、内面には横位のヘラ磨きを施している。胎土には砂粒を含み、色調は橙色を呈する。15~19は甕の口縁部である。口縁は頸部から緩やかに外湾しながらひろがり、端部の断面は丸くなる。18の口縁内面にわずかに凹みがみられる。頸部には横なでが行われ、外面には縦位のハケメが施されている。内面では15が横位のハケメが施され、18, 19では横位のヘラ磨きが施されている。20~29は壺及び甕の底部である。外面に縦位のヘラ磨きを施すもの(20, 24, 26, 29)とハケメを施すもの(22, 23, 27)がある。26では内面に黒色の付着物があり、外面には煤が付着している。胎土には砂粒を含み、色調はほぼ黄褐色を呈する。30, 31は甕の底部で内面には縦位のヘラ削りが施されている。外面には30がハケメ、31がヘラ磨きを施している。胎土には砂粒を含み、色調は30が黒色、31が黄褐色を呈する。32は鉢か高杯の杯部になるかは明瞭ではない。口縁端部がもっとも厚く、やや湾曲しながら径が小さくなる。外面には縦位のヘラ磨きが施され、内面はヘラ削りのあとなでを施している。色調は灰色を呈する。33, 34は甕の口縁部で、口縁は「く」字状に折れ曲がり、やや湾曲しながらひろがる。端部近くの上面にわずかな凹みがみられる。頸部にはよこなでが行われている。胴部の拡張はあまりみられない。胴部上面には縦位のハケメが施されている。33は内面にも縦位のハケメが施される。胎土には微砂を含み、色調は灰色を呈する。35, 36は壺の口縁部で、外開きになった口縁外面にはきざみめを施した凸帯を配している。36では口縁端部に刺突が行われている。口縁上面には櫛描き文を配している。35の内面には横位のヘラ磨きを施している。胎土には微砂を含み、色調は灰褐色を呈する。37は甕の口縁部で頸部から湾曲しながら開き、端部は上方へ若干立ち上がる。頸部には指圧を施した凸帯文を配している。色調は黄褐色を呈する。

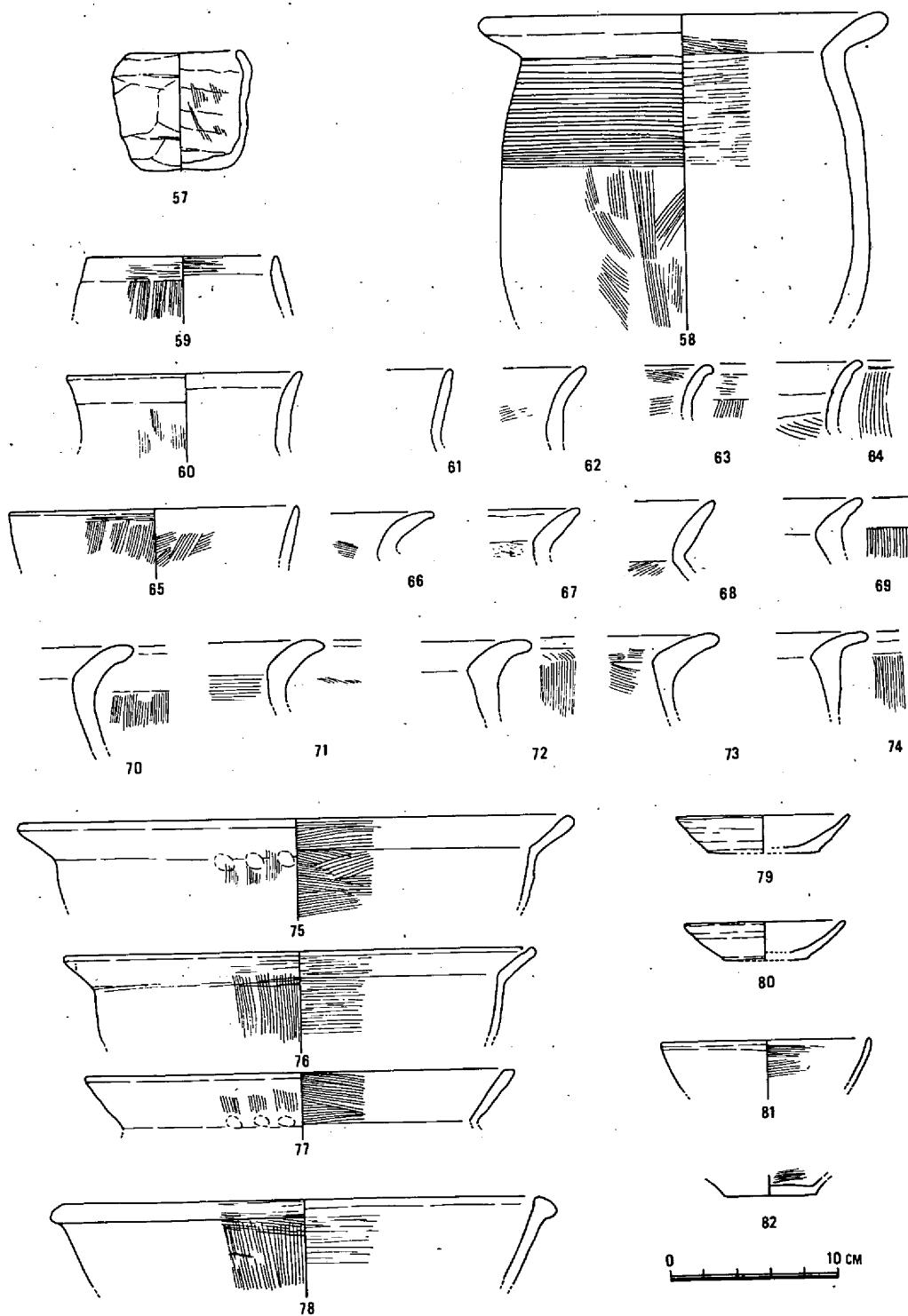
38~47は甕の口縁部である。口縁は緩やかに湾曲しながら拡張するもの(38~41, 45~47)と内面

西江遺跡(58)



第126図 弥生式土器実測図 ($\frac{1}{4}$)

西江遺跡(58)



第127図 土師器実測図 ($\frac{1}{4}$)

に角ばった屈曲部があるもの(42~44)とがある。外面には凹線文を施したもの(38~40, 43~47)がある。肩部にハケメを施したもの(38, 39, 45, 46)があり、38では下方にヘラ磨きを施している。内面ではヘラ削りを施しているもの(38, 40, 44, 46)がある。38は頸部よりやや下方からヘラ削りをしている。胎土には砂粒を含み、色調は黄褐色を呈する。48, 49は甕の底部である。48は外面には細かいハケメを施し、内面には縦位のヘラ削りが施されている。49は外面に縦位のヘラ磨きを施し、内面には縦位のヘラ削りが施されている。底部はややあげ底になっている。いずれも胎土に砂粒を含み、色調は灰褐色を呈する。50は鉢で、器壁が厚くどっしりしている。胴部は中程で屈曲している。外面は上部を横なでし、下半部には縦位のハケメを施している。内面は横位のヘラ削りを施している。下半部はヘラ削りをしたあとヘラ磨きを施している。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。51, 52は甕の口縁部の小破片である。頸部から湾曲しながら外反し、端部がやや肥厚する。52は端部が上下に拡張する。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。53は壺の口縁部で頸部から外方へひろがり、端部は上下に拡張する。外面には凹線文を施している。口縁部には内外面とも丹塗りが施されている。54は甕の口縁部であろう。口縁端部はやや上方へ立ち上がる。外面には沈線を配している。色調は灰黄色を呈する。55は高杯の口縁部で上部が肥厚し、上面には凹線文を施している。胎土に細かい砂粒を含み、色調は黄褐色を呈する。56は高杯の脚部で端部は肥厚し、外上方へ立ちあがる。内面には横位のヘラ削りを施している。57はコップ状を呈するもので手捏ねによるものである。口縁部はやや内傾している。内外面とも凹凸が多く、内面には粘土の接合部分がよく残っている。胎土には微砂を少量含み、色調は灰褐色を呈する。58は甕で器壁の厚いものである。口縁は「く」字状に外反し、端部の断面は丸くなっている。胎土に砂粒を含み、色調は黄褐色を呈する。59は口縁部が内傾し、端部は薄くなっている。外面には縦位のハケメを施している。色調は黄褐色を呈する。甕の口縁部の破片が多い。口縁は緩やかに湾曲しながら外反するもの(60, 62~64)とやや直線的にのびるもの(61, 65)、内側へくびれをもって外反するもの(66~74)がある。外面に煤が付着しているもの(60)もある。65はきめの細かい粘土であるが、他のものは砂粒が多い。なべ(75~77)は口縁部が「く」字状に外反し、端部が若干肥厚する、外面にはいざれも煤が付着している。頸部の外面には指圧痕が残り、縦位のハケメが施されている。内面は横位のハケメが施されている。鉢(78)は胴部が直線的にのびて、端部は丸みをもった肥厚をする。外面には縦位のハケメが施され、内面には横位の横などが施されている。杯(79, 80)は平底からわずかに内湾しながら斜め上方へ拡張し、端部は丸くなっている。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。81はやや内湾ぎみになる口縁部で、器壁は薄く内面にはなあとがある。色調は黄褐色を呈する。82はヘラ切りの底部で、内面にはハケメが施されている。

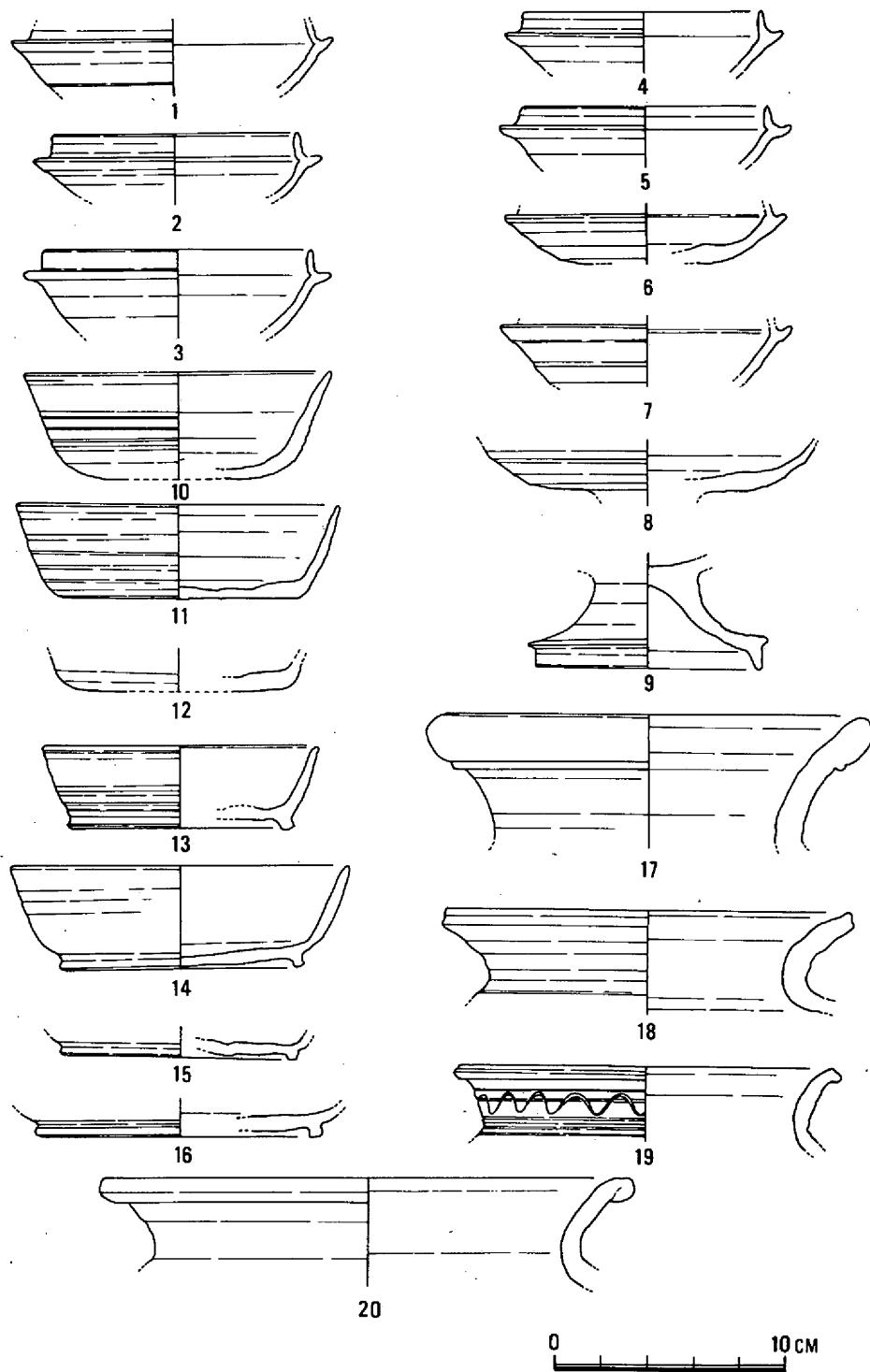
1~6は弥生前期に属する。1の甕は他の土器よりも若干古くなるようで、2の口縁が逆「L」字形を呈するのに対して「く」字状を呈する。7~27は弥生中期前葉に属する。そのうちでも7, 9, 13, 14, 20, 24~26, 29は弥生前期の胎土によく似ていて、中期前葉のなかでも古く位置づける必要がある。甕の口縁部で15~17, 19は口縁端部が横なでされるが、上面に湾曲を示している。28はほぼ類似するが、上面に凹みがみられ、やや後出の様相を呈している。胴部上半の内面は横位のヘラ磨き

を施すものもあるが、ハケメを施すものもみられる。甕の底部については詳細には区分しがたい。32～37は弥生中期中葉に属する。そのうち33、34は口縁部が角ばって外反し、上面は上に湾曲するが、端部近くで若干凹みを示し、端部はやや角ばっている。この様相は二野遺跡に類似するものが多く、中期中葉でもその初期にあたるものと考えられる。32の高杯は口縁端部の肥厚がみられないことから中期のなかでもかなり古く位置づける必要があろう。36は器壁が薄く、口縁の開きが大きいことから中期中葉のなかでも後出のものと考えられる。28、43は弥生中期後葉に属する。30、31、38～50、55、56は弥生後期前葉に属する。中期の土器に対して胎土が粗くなり、内面では頸部直下までヘラ削りが施されている。これは岡山南部の遺跡では雄町遺跡の報告で「雄町8類」(註12)としたものや上東遺跡の報告で「鬼ヶ市I式」(註13)したものに併行し、製作技術もほぼ同様である。51～54は弥生後期終末に属するものである。57～74は古墳時代後期～奈良時代に属するものであろう。79～82は平安時代、75～78は鎌倉時代に属するものであろう。

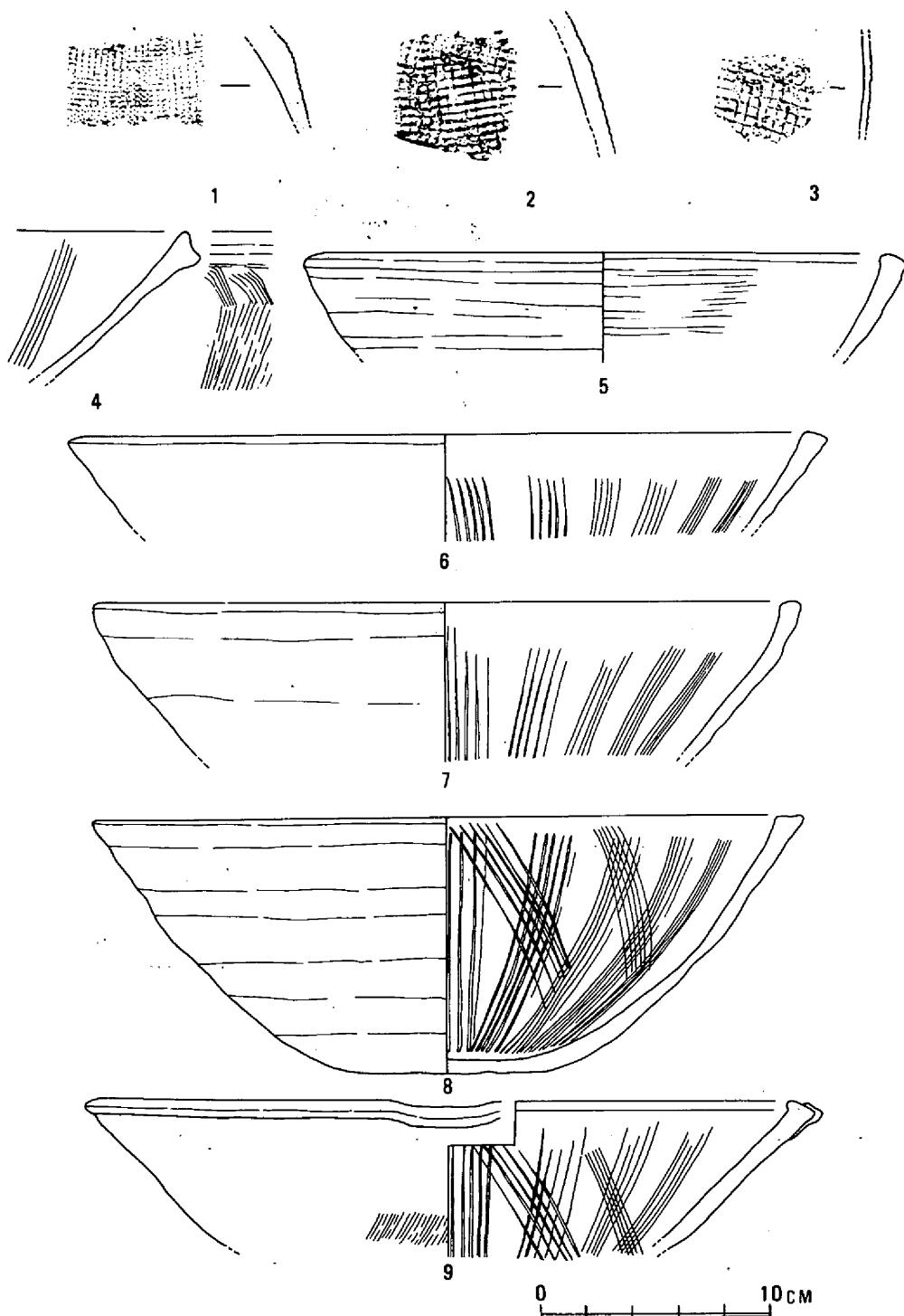
須恵器(第128図)

田代調査区出土の須恵器は余り多くないが、古墳時代から歴史時代に至る須恵器がある。1～7は杯身である。いずれも破片で底部のわかるものはない。1は受部が斜上方へのび立ちあがりはやや内傾する。胎土には砂粒を含み、色調は灰白色を呈する。2は受部が外方へ張り出し、立ちあがりは少し内傾してから直立する。胎土には微砂を含み、色調は暗青灰色を呈する。3は2とほぼ同様である。4は受部と立ちあがりの接合部が厚くなり、立ちあがりはわずかに内傾するだけで短かく立ちあがる。端部はうすくなる。胎土には微砂を含み、色調は青灰色を呈する。5は受部がやや湾曲し、短かく立ちあがる。立ちあがりの端部はうすくなる。胎土には微砂を含み、色調は青灰色を呈する。6は他に比べて器壁が厚い。胎土には直径2～3mmの砂粒を含み、色調は暗青灰色を呈する。7は外面に自然釉がかかっている。胎土には微砂を含み、色調は青灰色を呈する。8、9は高杯である。8は長脚が付くものであろう。胎土には微砂を含み、色調は暗青灰色を呈する。9は短脚であるが透しなく、端部は肥厚して立ちあがりがみられる。同様の脚部は安信4号墳のものにある。色調は外面が灰白色、内面が暗青灰色を呈する。10～12は高台の付かない杯である。7は底部から脚部へかけて、屈曲せず湾曲している。口縁端部はうすくなっている。胎土には微砂を含み、色調は青灰色を呈する。11は底部と胴部が屈曲し、口縁端部はうすくなる。底部はヘラ切りされている。胎土には微砂を含み、色調は淡青灰色を呈する。12は小片で、色調は青灰色を呈する。13～16は高台付杯である。13は高台がやや外方に張り出し、胴部はあまりひらかない。色調は青灰色を呈する。14は完形品である。高台は小さく断面方形を呈する。胴部は若干ひらき、端部はうすくなる。焼成は悪く、胎土に微砂を多く含み、色調は灰白色を呈する。15、16は断面方形の小さな高台が付き、胎土に微砂を含み、色調は青灰色を呈する。17～20は甕の口縁部である。17は口縁が朝顔形にひらき、端部は肥厚して外面に張り出しがみられる。色調は灰白色を呈する。18は口縁が短かく外反し、端部は肥厚しない。胎土には微砂を含み、色調は青灰色を呈する。19は外反した口縁部の端が外方に小さく肥厚する。頸部外面にヘラによる波状文を配している。胎土には微砂を含み、色調は淡青灰色を呈する。20は口縁端部が折りまげられて肥厚する。口縁部の内外面に自然釉がかかっている。胎土には微砂を含み、色調

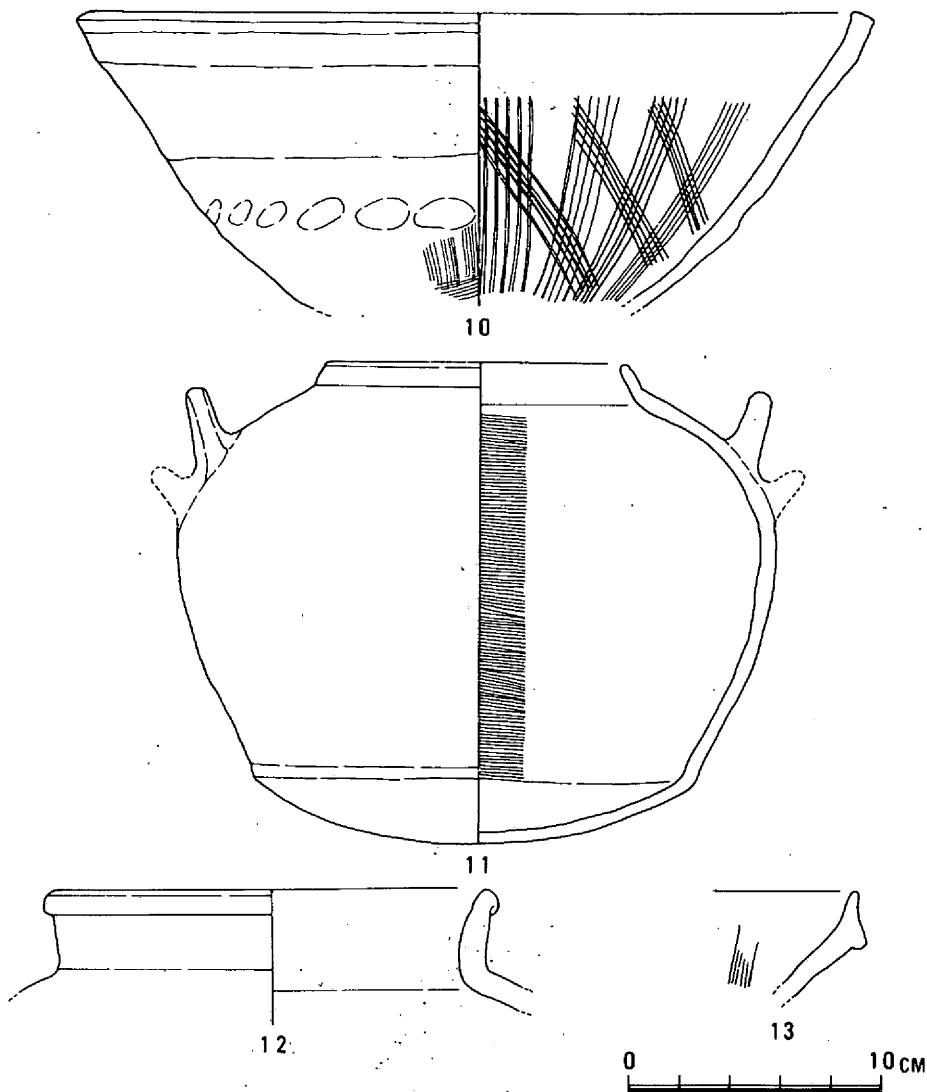
西江遺跡(58)



第128図 須恵器実測図 ($\frac{1}{3}$)



第129図 亀山焼実測図 ($\frac{1}{3}$)

第130図 亀山焼・備前焼実測図 ($\frac{1}{3}$)

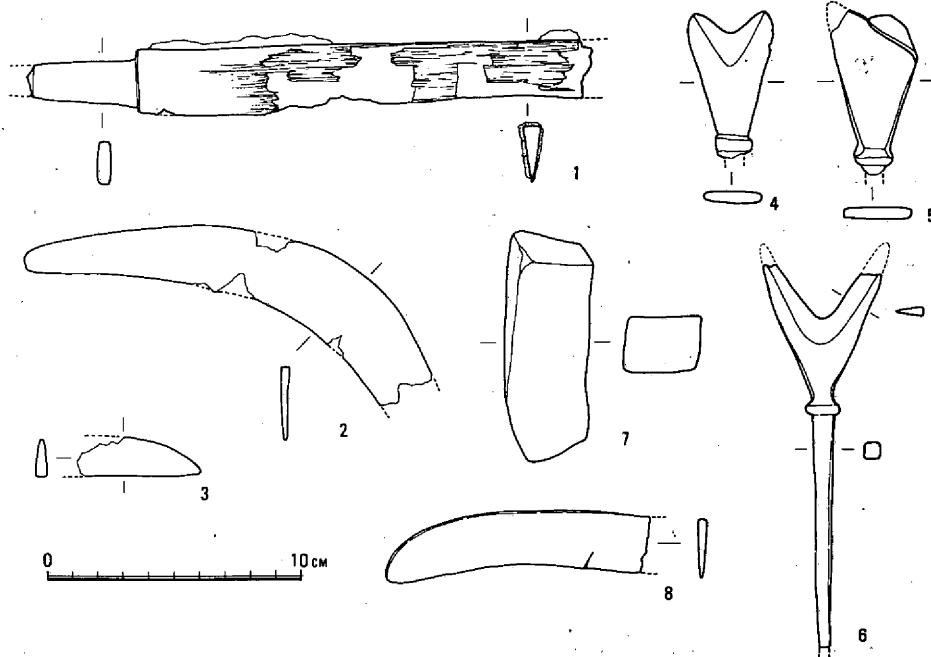
は内外面が青灰色、断面が茶褐色を呈する。

1～9は6世紀後葉に属する。10～16は奈良時代、17～20は奈良時代以降に属するものであろう。

亀山焼(第129図)

亀山焼には壺、擂鉢がある。壺(第129図1～3)は格子目の叩きが施されている。格子目の大きさは個々に若干の違いがみられる。5は鉢の小破片から図化したものであるが、内面のかきめがみられない。口縁端部はいずれもやや肥厚するが、断面がやや角ばるもの(6, 8～10), 丸くなるもの(7), 外方に張り出すもの(4)がある。外面には指圧痕が残り、凹凸が多い。内面のかきめは5～6本で縦位のかきあげただけのもの(4, 6, 7)とさらに斜位のかきめの上から斜めにかきめを施

西江遺跡(58)



第131図 鉄器実測図 ($\frac{1}{3}$)

したもの（8～10）がある。8では外面に煤が付着している。内面は使用されて磨滅している。色調は青灰色を呈するもの（4，9），灰白色を呈するもの（5，7，8，10），灰色を呈するもの（6）がある。11は釣りさげる把手の付いた釜様のもので灰質を呈するが，亀山焼とは異なるものであろう。底部は外湾している。内面には細かいハケメが横位に施されている。外面では把手より下方に煤が付着している。胎土はきめが細かく，色調は淡灰色を呈する。備前焼（第130図12，13）は小破片である。壺の口縁部は端部が若干折り曲げられている。擂鉢は，口縁端部が肥厚し，外面は無文である。色調は茶褐色を呈する。以上のは11を除き中世のもので，11は時期が下降すると推定される。

鉄器（第131図）

鉄器は包含層中で検出され，直刀，鎌，刀子，鐵鎌，柱状鉄器等がある。直刀（1）は先端部を欠失していて，現存長22.3cm，刃幅2.2cmを測る。鞘の木質がかなり残っている。2は湾曲した鎌で基部を欠失している。大きさは現存長16.8cm，最もひろい部分の刃幅3cmを測る。先端部の幅は狭くなる。1～3はA10付近でまとまって検出された。下に土壤があり，副葬されていた可能性がある。3は刀子の先端部で現存長4.9cmを測る。直刀などから推定して6～7世紀のものであろう。4～6は雁股の鐵鎌である。4，5は先端があまりのびず，6は大きくひろがる。基部はふくらみがあり，茎へとつづく。大きさは現存長15.3cmを測る。これらは末永雅雄氏の編年によると「武家時代」とした中世，近世のものの中に類例がみられる（注14）。7は直方体の鉄で何か不明。8は鎌で基部を欠失している。刃の湾曲は小さい。7，8は年代が明らかでない。

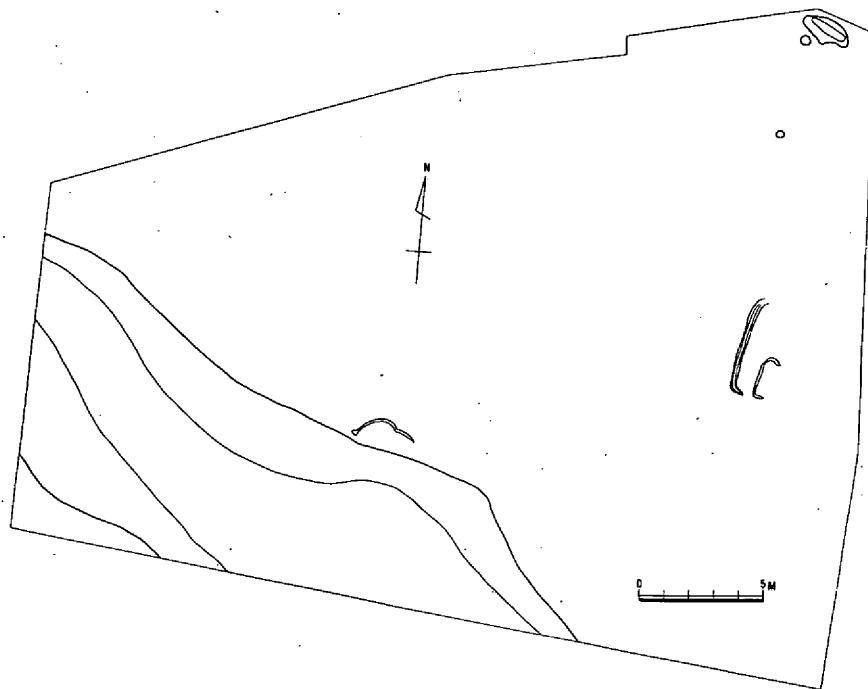
3. 小 結

田代調査区の台地状を呈する部分は畠地であって水田化されていなかったため、削平が比較的少なかった。このため、住居址の残存状況は他の地区よりもよかったです。遺構では弥生中期から古墳時代に至る竪穴住居址が検出された。柱穴の数は非常に多く、他の調査区と異っていて、長期間利用されていたことがわかる。縄文式土器は検出されていないが、黒曜石の破片がある。弥生式土器では前期後半から検出されている。後期前葉のものは住居址で若干まとまって検出されている。7号住居址で凹基式鉄鎌が検出された。県内では同じ中国縦貫道の調査にかかる古坊遺跡(注15)で1本検出されている。弥生後期から普及しはじめる鉄鎌の一資料となる点で重要である。古墳時代の住居址の保存状況はよくないが、6世紀後葉まで竪穴住居址が存在することがわかる。

第7節 安信平地部調査区

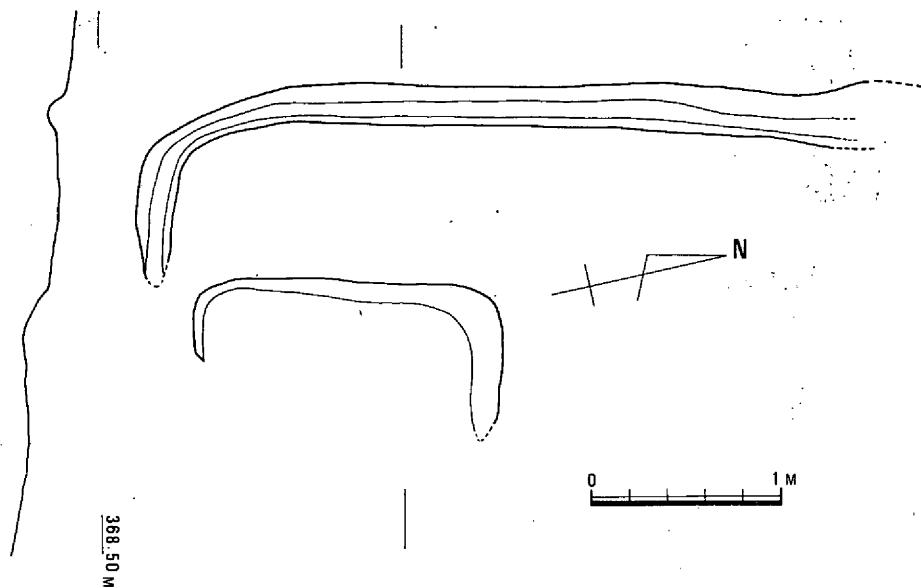
1. 安信平地部調査区の概要

この地区は北側へ細く張り出した丘陵と南側に古墳や土壙墓群の所在する安信丘陵にはさまれた谷部分にあたる。調査時の状況は中央を東西に走る道の北側が段々になった水田、南側が畠地となっている。北側の水田には等高線に沿って3本のトレンチを設定した。これによると北側へ緩やかに傾斜



第132図 安信平地部調査区全体図

西江遺跡(58)

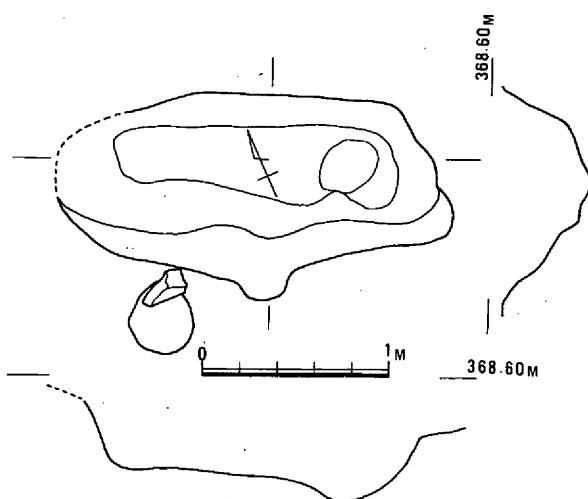


第133図 住居址実測図

し、弥生中期の土器片を含むが、明瞭な遺構は検出されなかった。道より南側では等高線に直交して2本のトレンチを設定したところ、北側では竪穴住居址の一部が検出され、南側では約2m位の黒色土の堆積があって水が湧くことから自然水路と推測した。このため比較的高い部分について約35×25mの範囲を全面調査した。地山は大小の礫を多量に含んでいた。南に寄った部分には緩やかに傾斜する自然の流水路があり、東側では竪穴住居址、北東端部で土壠1を検出した。

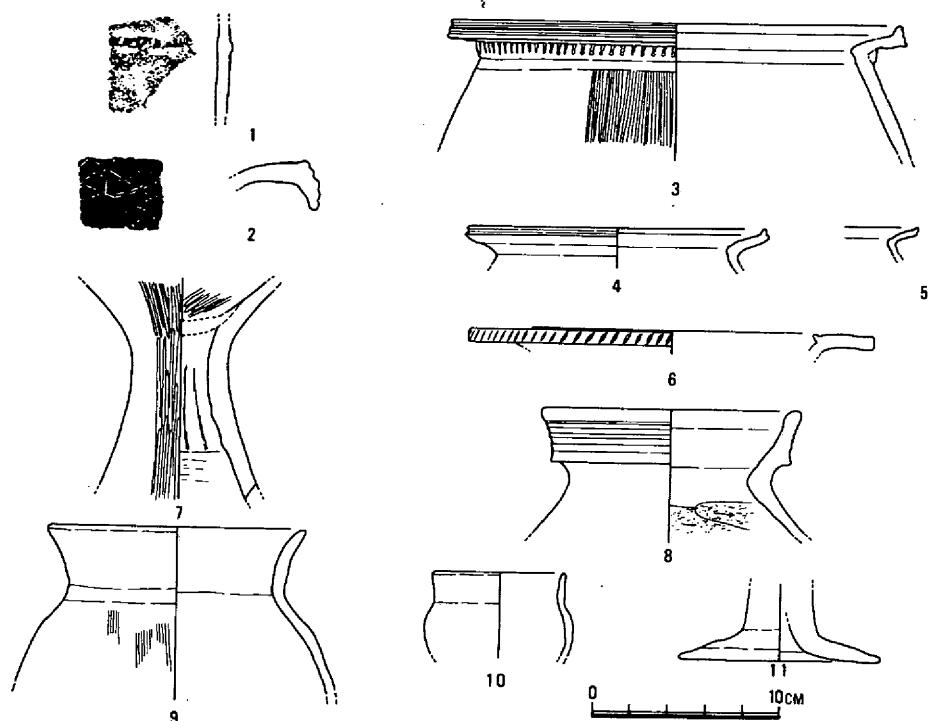
(1) 竪穴住居址(第133図)

地形が緩やかに東へ傾斜し、地山が多量の礫を含むことから保存状況は良くない。ほぼ南北にのびる壁体溝が南で東へ直角に曲がる。南東部の一帯低くなった部分は住居址に伴うと推定されるが明確でない。柱穴は確認できなかった。床面で若干焼けた部分がみられた。また床面付近で須恵器の杯片が検出された(第136図2, 3)。杯の破片は2点あり、いずれも身である。第136図2は4分の1の破片で、立ち上がりは小さくやや内傾し、その端部は薄くなっている。受部はやや斜め上方



第134図 土壠実測図

西江遺跡(58)



第135図 弥生・土師器実測図 ($\frac{1}{4}$)

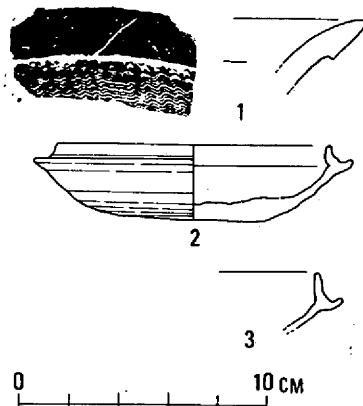
へ張り出す。受部から底部へ移る部分は少し湾曲し、底部付近はヘラ削りを施されている。底部はほぼ平坦になっている。色調は青灰色を呈する。3は小破片で、立ち上がりは2よりやや大きいが内傾し、端部はやや薄くなり丸みをもっている。外面には自然釉がかかっている。色調は暗青灰色を呈する。

(2) 土壙(第134図)

北東部の隅で長手の土壙が検出された。土壙は灰色粘土で埋没し、遺物は何も含まれていない。大きさは長径202cm、短径90cm、深さ53cmを測る。南に接して柱穴が1個あるが関係はわからない。性格不明の土壙である。

(3) その他の遺物(第135図)

包含層中から検出されたものには若干の土器がある。1は縄文晩期に属する甕の破片である。外面にはきざみめを施した凸帯を配している。色調は外面が黄褐色、内面が灰色、断面が黒色を呈する。2は壺の口縁部で、大きく朝顔形にひらいた端部は肥厚し、外面には凹線文を施している。上面には半裁竹管による格子目文を配している。3は甕の口縁部で頸部から屈曲し、外方へ拡張した端部はやや肥厚し、外面には凹線文を施している。頸部にはきざみめを施した凸帯を配している。胴部上半部に



第136図 須恵器実測図 ($\frac{1}{3}$)

は縦位のハケメが施されている。4, 5は甕の口縁部で、頸部から屈曲した端部はわずかに立ち上がる。6は高杯の杯部破片であろう。水平な縁の端部は断面方形を呈し、外方にはヘラによるきざみめが施されている。内側は若干の張り出しがみられる。7は高杯の脚部で筒状を呈し、上下にひろがる杯部の一部があり、円板貼り付けの痕が残っている。内面にはしばりめの痕が残っている。外面には縦位のヘラ磨きが施され、杯部の内面はヘラ磨きを施している。下部には三角形の透しの一部がみられる。3~7の色調はほぼ灰褐色を呈する。8は頸部が湾曲して外反し、口縁部には上下に大きく拡張する。外面には擬凹線を施している。内面は頸部直下まで横位のヘラ削りが施されている。胎土には直径4mmまでの砂粒を含み、色調は黄褐色を呈する。9は甕の口縁部で、頸部から緩やかに湾曲しながら外反する。胴部の外面には薄くハケメが施されている。10は小型の壺である。短かい口縁部は直立ぎみに立ち上がり、胴部は丸い。11は高杯の脚部で棒状部から裾は急にひろがり、端部は薄くなっている。9~11は微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。2~7は弥生中期後半に属する。8は山陰の九重式に類似する。9~11は古墳時代のものである。

須恵器では住居址に伴う2点を除くと図化できたのは1点だけである。第136図1は広口壺の口縁部破片である。大きくひらいた端部では外面に縁がある、その下方には細かい波状文を施している。時期は比較的古く位置づけられよう。

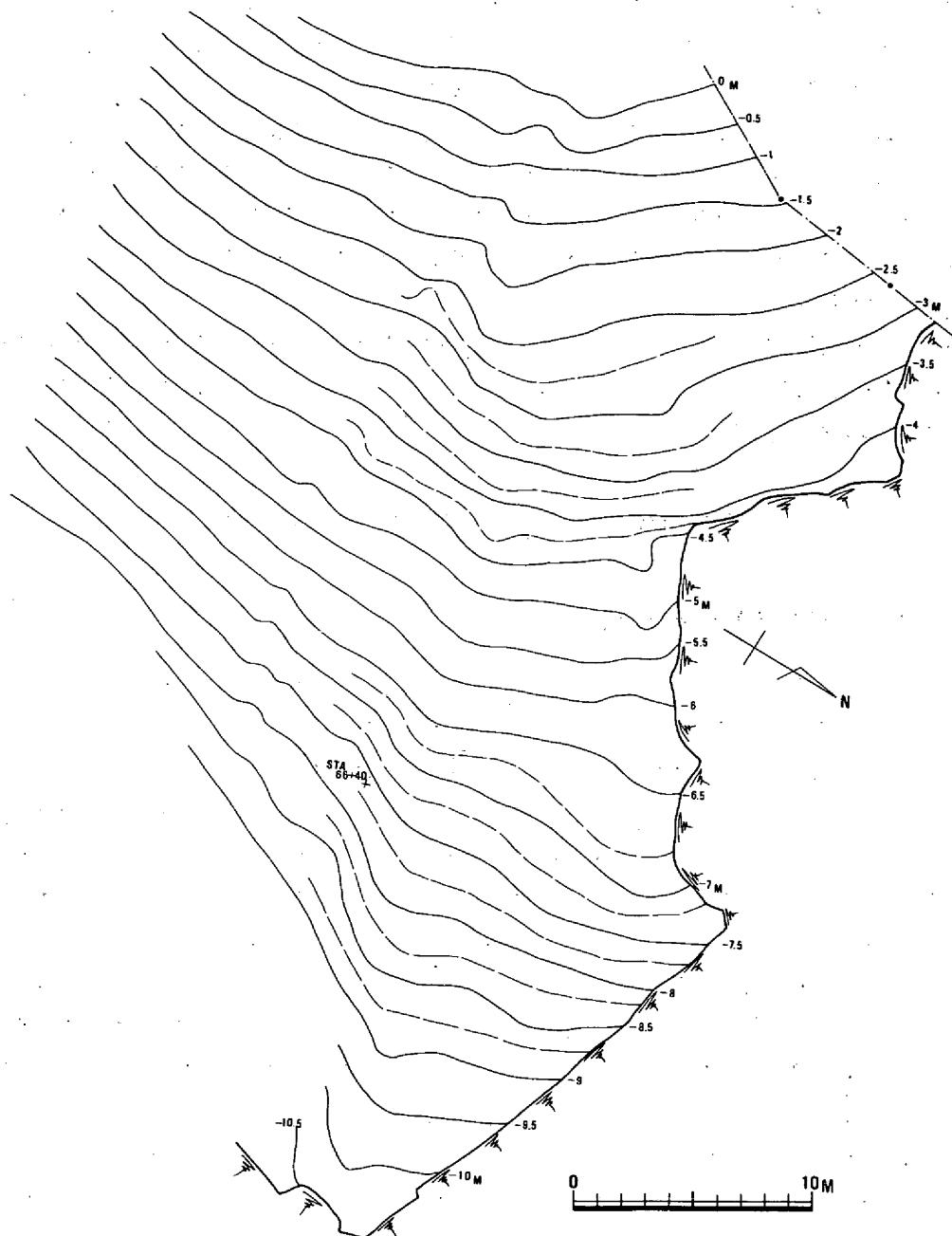
第8節 安信丘陵部調査区

1. 安信丘陵部調査区の概要

西江遺跡の南端部に位置する丘陵が東へのびている。尾根の中央部は貝田との境になっていて、遺跡が貝田へものびているが区分するのが困難であり、西江遺跡の安信丘陵部調査区として一括してあつかいたい。尾根の先端部はややひろがって高くなり、その間が鞍部になっている。この部分に旧道が南北に通じている。先端部の高まりには現在2基の古墳があり、北側の牧舎の造成の際には5基の箱式石棺が発見されている。箱式石棺からの出土遺物はわかっていない。古墳も1基は北半分が削平されている。残存する1基は直径約10mの円墳である。鞍部には現在農業用倉庫が建っているが、地域の人の話によると、造成前には若干の高まりが存在したということからあるいはここにも1基の古墳が存在したことが推定される。調査対象となった地域は東へのびる傾斜面の部分が若干緩やかになっている。北側の山裾部分は南北に通じる道路のため削平されて高さ2m位の崖面になっている。また、一部は北側の溜池の土手をつくるため土取りが行われてさらにえぐりこまれている。もとの地主さんの話ではこの部分で箱式石棺らしいものが出土したとのことで、石材が置かれていた。これは天井石部分にあたるものだけで側石にあたるものがみえないためあるいは調査中に検出された4基と同様に石蓋土壙であった可能性もある。出土遺物は何もなかったとのことである。東裾部にも近代の小さな社のあとがあり一部削られている。調査範囲には弥生時代の竪穴住居址、土壙墓群、古墳群、土壙などがあり、縄文晚期、弥生前期の土器片などがあり、弥生中期には丘陵の中腹に平坦面をつく

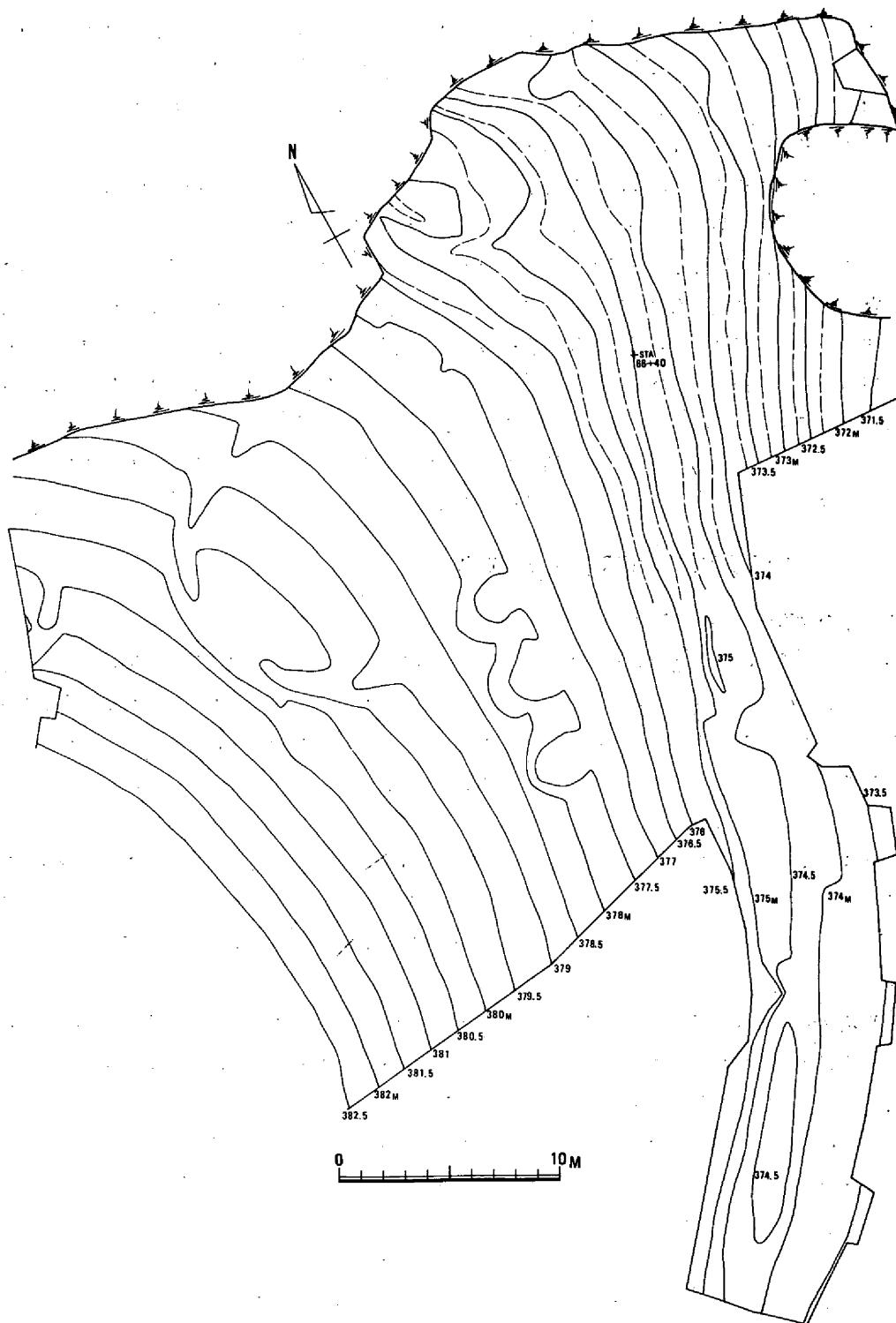
西江遺跡(58)

り、竪穴住居址がつくられている。平坦面は南へ細長くのびている。後に土壙墓群等がつくられたため削平されているが、竪穴住居址は現在3基が確認されている。平坦面の南部には岩盤が露出している部分があり、その前面には弥生後期前半の土器がある。器種には壺、高杯、器台、注口付鉢等があり、いずれも丹塗りが施され、胎土も一般の土器と違って黒雲母を含み茶褐色を呈する。弥生後



第137図 安信丘陵部調査区地形図（調査前）

西江遺跡(58)



第138図 安信丘陵部調査区地形図（発掘調査後）

期後半から古墳時代前半に至る土壙墓群がつくられ、方形台状墓も2基存在するが、北端部が既設の道路で削られているため、残念ながら完全な数を知ることができない。調査で確認されたのは132基の土壙墓、石蓋土壙墓などがある。他に集石遺構もみられるが近世の墓壙もあり、明確にしがたい。また、特殊器台が数基置き並べられたのが倒壊した状況で検出された。

古墳は範囲内に6基ある。西の丘陵頂部にも横穴式石室を内部主体とする円墳が1基存在する。6基のうち4基は土壙墓群の西上方に存在し、2基は土壙墓群の一部を壊してつくっている。1～6号墳はいずれも墳丘は流失し、内部主体の一部および周辺の一部が残存する。3号墳は墳丘、主体部とも残存しないが、周辺底部より土師器（鉢、高杯）の完形品が出土した。5号墳は礫床をもつ箱式石棺を内部主体としている。4号墳は箱式石棺様の小石室を内部主体とし、ガラス玉（勾玉1、小玉16）、須恵器（提瓶1、杯蓋・杯身各1、高杯1）、鉄器（刀子1）を出土した。6号墳の内部主体は土壙で須恵器（杯身2）を出土した。1、2号墳では遺物は出土していない。他に火どころのある土壙が4個あり、土壙墓との切り合いでは土壙墓より新しいことが判明している。年代はわからないが土壙墓群の所在しない高い方にもあって、土壙群に関係したものではないと推定される。

2. 安信丘陵部調査区の遺構・遺物

(1) 積穴住居址（第141図中）

東へのびる丘陵の先端部で北側の尾根部から南の中腹へ向かって高い方を削り、平坦面が造成されている。ここに柱穴が点々とみられることから住居群のためにつくられたと考えられる。後に土壙墓群が多数つくられたため住居址のほとんどは残っていない。1～3号住居址は小さくのびれる尾根のくびれ部に位置する。3号墳の封土下でも柱穴が多数検出され、縄文晩期及び弥生前期の土器片が少量検出されたが住居址のまとまりとして把えることができない。

1号住居址 西側壁部のみを残す積穴住居址で壁体溝は幅が約30cmあってかなり広い。壁体溝が直線的に3.6mのびることと北側がわずかに曲がることから方形のプランであることがわかる。柱穴は付近に数個あるが、明確に伴うものではなく不明確である。2号住居址によって南側は切られている。

2号住居址 1号住居址とほぼ同様に西側の壁部を残しているにすぎない。壁体溝も約40cmと幅が広い。北側は直角に曲がっており、方形プランであることがわかる。南側は石蓋土壙墓によって切られている。柱穴は土壙墓で切られていることもあるが明確でない。

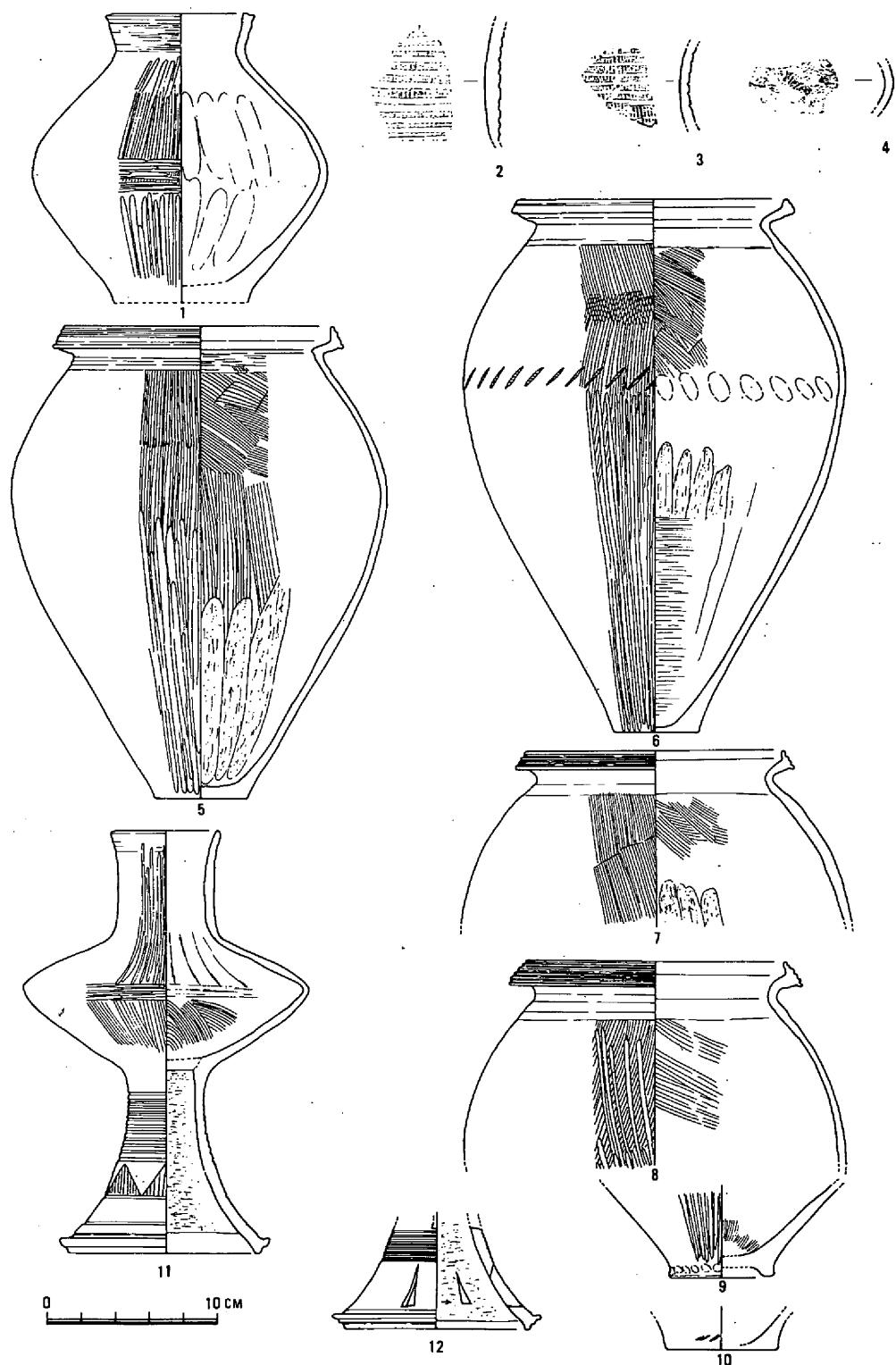
3号住居址 3軒のなかでは最も残りのよい住居址である。コ字形に壁体溝があり、方形プランであることがわかる。壁体溝は幅約40cmとかなり広い。南北2.3mときわめて小さい。床面に2基の土壙墓があり、住居址の床面はほとんど残っていない。

3軒ともほとんど床面が残っていないこともあって遺物は検出されていない。周辺から弥生中期後半の土器が検出されていることから、この時期に属する住居址と推定される。以上その他にも南ヘテラスが造られていて柱穴も検出されていることから住居址の存在したことがわかる。いずれも後につくられた多数の土壙墓群のためほとんど残っていない。

以下、住居址に伴ってはいないが、6号墳と2号台状墓の間で検出された弥生中期後半の土器について述べる(第139図、図版40)。器種は壺、甕、台付直口壺、高杯等がある。1は頸の短かい壺で、頸部からやや外側へひらいている。口縁部端は上面に凹みがめぐっている。胴部は中央部分でやや尖りぎみに膨らむ。外面の調整では口縁部がよこなでされ、胴部中央が横位のヘラ磨きを施し、胴部上半及び下半には縦位のヘラ磨きが施されている。内面は指圧痕を明瞭に残して、縦位のなあとがみられる。色調は外面が黄褐色を呈し、断面は黒色を呈する。2、3は壺の頸部であろう。縦位のハケメのあと、横位のヘラ描き沈線を配している。胎土には微砂を含んでいる。色調は黄褐色を呈する。2の断面は黒色を呈する。4は胴部の破片で波状文を施している。胎土には微砂を含み、黄褐色を呈する。甕は4個体分あり、それぞれ若干の違いがみられる。5は甕の口縁部で「く」字状に折れ曲がり、端部は肥厚して上方へ拡張する。口縁部外面には凹線文を配している。胴部は肩が張っている。外面の整形は胴部上半には縦位のハケメを施し、胴部下半には縦位のヘラ磨きが施されている。内面は胴部上半において斜位のハケメ、胴部中央部には縦位のハケメを施し、下半分には縦位のヘラ削りが施されている。底部は直径5.5cmの平底である。胎土には微砂を含み、色調は内外面、断面とも黄褐色を呈する。胴部下半の外面には煤が付着している。内面には下半部に黑色炭化物が付着している。ハケメの幅は約3cmである。6は口縁端部の肥厚が小さく、上方への拡張も小さい。外面の整形は5とほぼ同様であるが、肩部へ「ノ」字状のヘラによる刺突文を配している。内面では中央部に指圧痕がみられ、胴部下半に縦位のヘラ削りを施したあと横位の横なでがみられる。外面の胴部下半には煤が付着している。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。7、8の甕は胴部下半を欠失している。頸部は湾曲しながら外方へひろがり、口縁端部はやや肥厚して上下に拡張する。外面には細かい凹線文を施している。7は下半部には煤が付着している。胎土には微砂を多く含み、色調は内外・断面とも灰白色を呈する。8は胴部上半に下地として薄く右下りのハケメを施している。その後、粗い間隔でヘラ磨きを縦位に施している。色調は内外面が灰色を呈し、断面は黒色を呈する。9、10は甕の底部である。9は若干あげ底になっていて、指でおさえた痕がある。外面には縦位のヘラ磨きが施され、内面には縦位のハケメを施している。胎土には微砂を含み、色調は外面が灰白色、内面が黄褐色、断面が黒色を呈する。10は平底である。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。11は高い脚部の付いた直口壺である。口縁部は細い筒状になっていて、端部は少し外開きになっている。胴部はそろばん玉形を呈している。中央部は横位のヘラ磨きが施され、上方は口縁部まで縦位のヘラ磨きを施している。内面には頸部にしづり目が残っている。下半部には粗いハケメが施されている。脚は緩やかに裾がひろがり、端部は肥厚して外方に張り出す。脚の上部にはヘラ描き沈線を配し、下方には大きな鋸歯文を配している。内面は横位のヘラ削りが施されている。胎土には砂粒を含み、色調は黄褐色を呈する。12は高杯の脚部で、裾が緩やかにひろがり、端部は肥厚して外方へ張り出す。脚の中央部に横位のヘラ描き沈線を施し、この上下に三角形の透しを配している。外面には縦位のヘラ磨きが施され、内面には横位のヘラ削りが施されている。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。

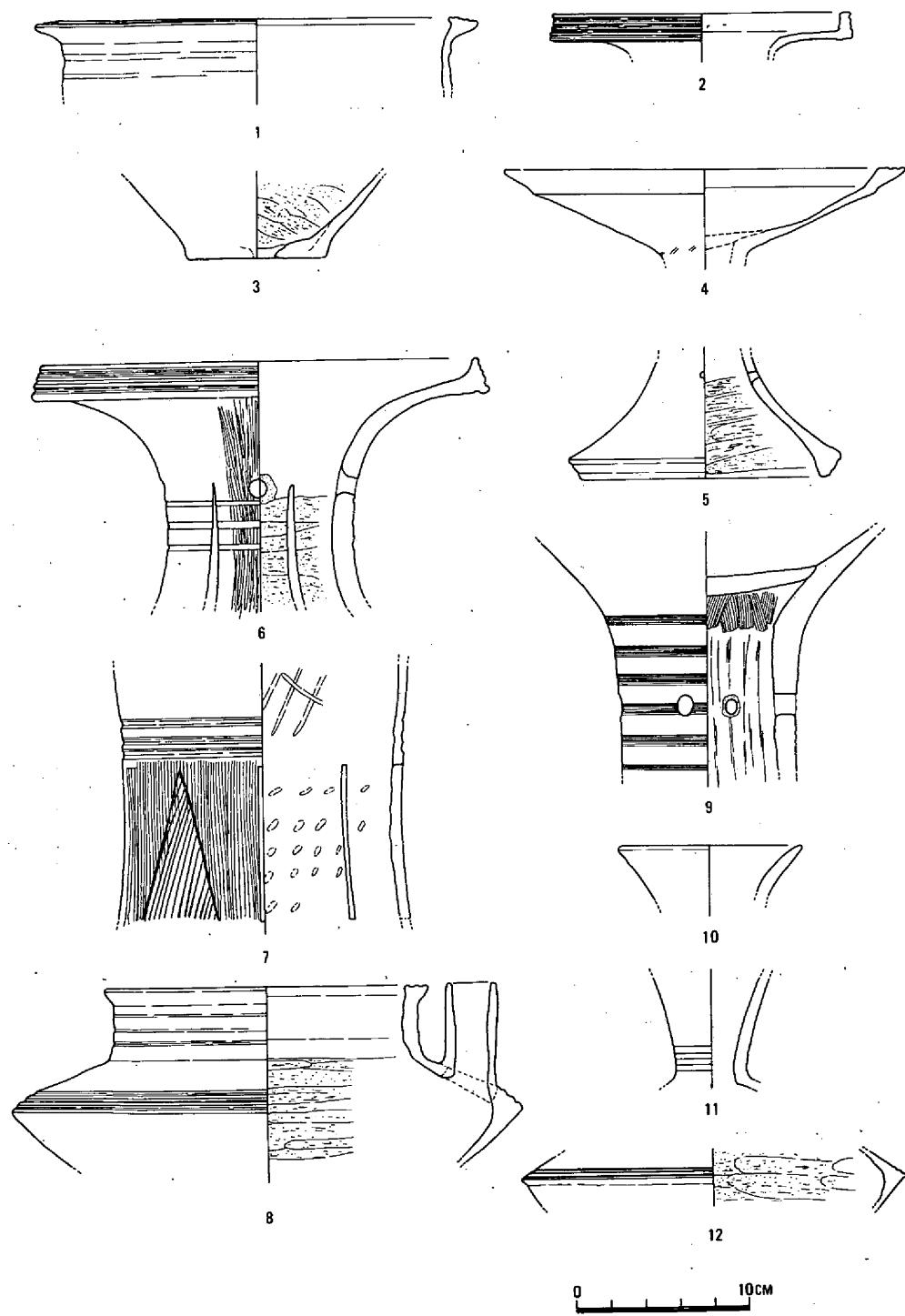
以上の土器は岡山県南部で「前山Ⅱ式」と呼ばれるものに属し、その後半の時期に一括されるもの

西江遺跡(58)



第139図 弥生式土器実測図 ($\frac{1}{4}$)

西・江 遺 跡 (58)



第140図 弥生式土器実測図 ($\frac{1}{4}$)

である。

(2) 露岩前面の土器群 (第140図、図版41)

南へのびるテラスが折れ曲がるところに岩が露出している。この前面に弥生後期前半の土器がまとまって検出された。いずれも胎土に雲母を含み、色調は茶褐色を呈する。器種には壺、高杯・器台、注口付鉢、直口壺等がある。1、2は壺の口縁部である。1は頸部が直立ぎみに立ちあがり、口縁部で少し外方へ開き、端部は肥厚して外方へ拡張する。上面には凹線文を施している。2は頸部から大きく外に拡張し、口縁端部は上方へ立ち上がり、外面には細かい凹線文が施されている。3は壺の底部と推測されるが、焼成後穿孔されている。内面は横位のヘラ削りが施されている。4、5は高杯で同一個体の可能性がある。杯部は斜め上方へ大きくひらき、口縁部は屈曲してやや上方へのび、端部は肥厚する。上面には凹線文が施されている。杯の表面は風化していて調整などは不明である。脚部は緩やかに裾がひろがり、端部は肥厚してやや立ち上がる。円孔が4個配されている。内面は横位のヘラ削りが施されている。6、7は器台であるがかなり異っている。6は口縁部が朝顔形にひらき、端部は肥厚して上下に拡張する。外面には凹線文を施している。口縁部から胴部へ移る部分には円孔が4個、胴部には細長い三角形の透しを4個配している。外面には縦位のヘラ磨きが施され、胴部内面には横位のヘラ削りが施されている。口縁部は内面にも丹塗りが施されている。器壁は厚く、胎土には直径2~4mmの砂粒を含んでいる。口縁部の接合がはげていて、外方から貼り付けたことが明瞭にみとめられる。7は胴部しか残存しないが、円筒状を呈し、外面には3本の太い沈線を配した下方に5個の長方形の透しと大きな鋸歯文を配している。整形は外面には縦位のハケメを施し、内面には指圧痕が残っている。胎土には微砂を含み器壁がうすい。8は注口付の鉢である。そろばん玉形をした胴部から大きな口縁部が直立する。端部は肥厚し、上面には凹線文を配している。注口は肩部に一個配している。胴部の肩には凹線文を配している。内面は横位のヘラ削りが丁寧に施されている。内面にも丹がたれたあとが残っている。9は台付鉢の脚部で下半部を欠失している。外面に櫛描き文を数段施し、円孔を6個配している。鉢の底は円板貼り付けで、円板の中央部には棒をさしこんだ痕がある。脚の上部内面には粗いハケメを施している。8と9は直接には接合できないが同一個体になる可能性が強い。10、11は直口壺の口縁部である。細かくしまった頸部から少し開きぎみに上方へのびる。端部は薄くなり、丸みをもっている。頸部近くには5本の沈線を配している。12はそろばん玉形をした胴部で鉢の器形になるらしい。肩部には沈線を施し、内面には横位のヘラ削りを施している。

土壙墓に伴う土器は弥生後期後葉~古墳時代前期のもので、岩の前面で検出された土器群は別に考える必要があろう。年代も同一時期のものであり、すべて胎土も一般の土器と異って雲母を含み、同時に使用し、破棄されたものであろう。そのことからあるいは岩の前面において何らかの祭祀を行ったとも考えられる。

(3) 方形台状墓・土壙墓群 (第141~161図、図版31~34)

土壙墓の分布範囲はきわめて限定されている。弥生中期につくられた平坦面と東へのびる支丘の上部にのみみられる。後に2基の古墳と道路で一部が削られている。土壙墓の方位も整然としている。等高線に平行しているものと直交しているものとに大別される。大きくまとまりによって別けてみる



第141図 土壤墓群全体図

と、北部の土壙墓群は5, 6号墳で一部削られているが90基の主体があり、石蓋土壙墓2基、土壙墓88基から成っている。土壙墓の切り合いからみると、等高線に直交するものよりも平行するものが新しい。等高線に直交するものが57基、平行するものが73基ある。土壙の平面形では長方形が多く、正方形に近い形のもの(38~41)もある。規模では長径2m位のものと1m以下の小型のものがある。通常の長方形を呈するものでは木棺跡がみとめられたものが多く、小口に詰石したもの(3, 74, 81, 82, 83, 85)、横に詰石をしたもの(58, 79, 83)もある。枕石のみとみとめられたのは1基だけである(83)。小口板のため地山を掘り込んだ痕跡を残したもの(26, 31, 32, 46, 56, 65, 71)もある。土壙の上に長径30cm位の石が残っているもの(3, 23, 27, 49, 57, 82)がある。同一方向のものは、ほとんど切りあいがないことから何らかの目印の存在が推測されるが、今回確認されたものはいずれも土壙の中へ沈んでいたものである。したがって、地表に現われていたものが後世、移動しているものとも考えられることからいずれの土壙にも当初石かそれ以外の目標物の存在した蓋然性が高い。

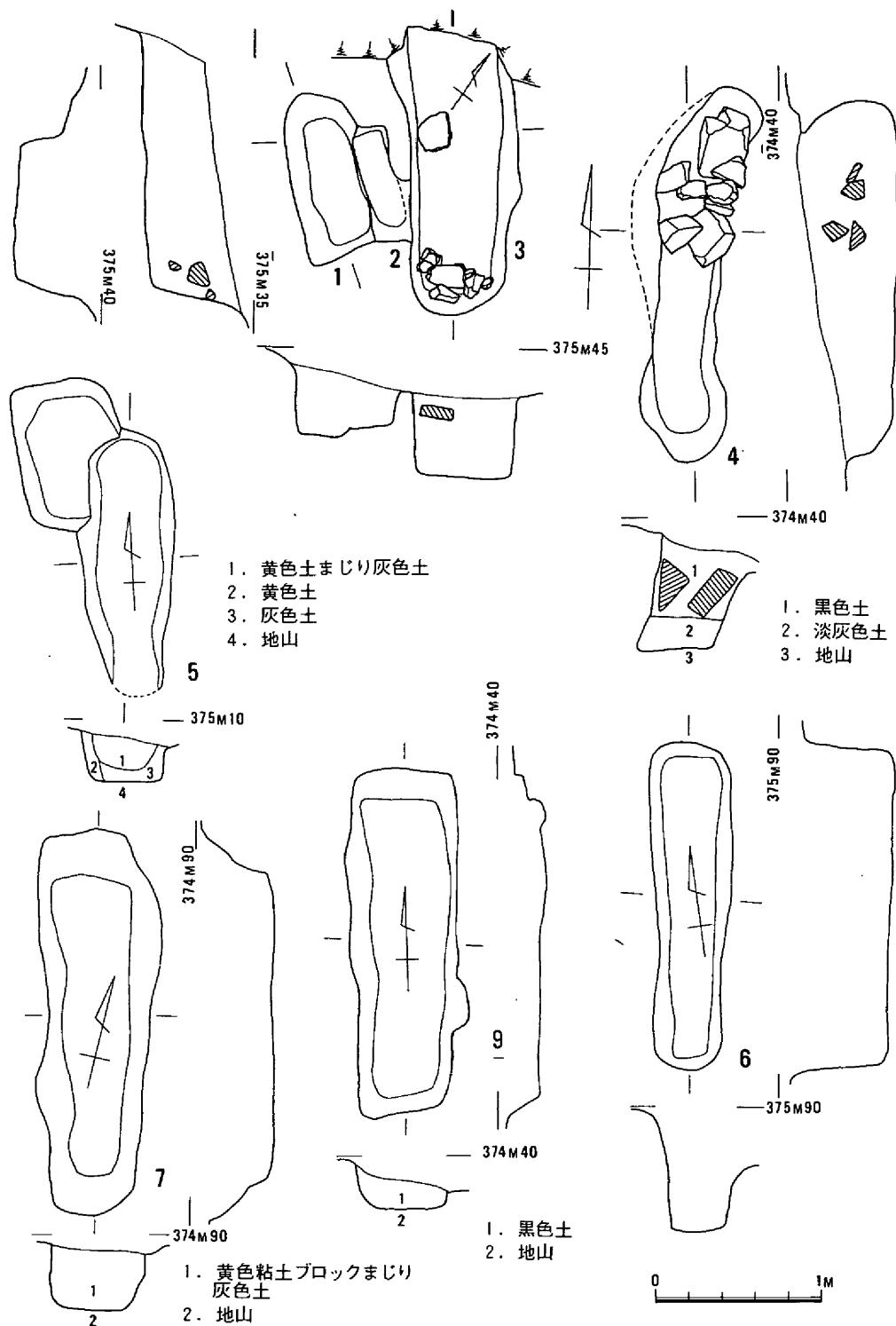
北端にはL字形の深い溝が残っているが、本来方形台状墓付設の周溝の一部と考えられる。墳丘および周溝の大部分がすでに既設の道路によって削りとられており、普通墳丘の中心部にみられる主体部は残っていない。わずかに1基、周溝の中に周溝の長軸と平行して土壙墓が検出されている。周溝は深いものなので、時期の先後関係を明確にできない点がおしまれる。つまり、弥生後期後半の特殊器台片、壺片、高杯片とともに古墳時代前半の鼓形器台等が伴出している。東へのびる支丘に南北方向の溝が1本つくられている。溝と同一の場所に土壙墓(85)があるが、切り合いからみると溝の方が新しい。しかし、特に新しい遺物を含まず、土壙墓群がつくられた時期のものと推定してさしつかえないであろう。溝は幅80cm、深さ30cmの大きさである(第162図)。上層は黒色土、下層は灰色土で埋没している。溝より東には5基の土壙墓が検出されている。他の部分に比べて密集しない傾向を示し、東へは土壙墓のひろがりがないように思われる。土壙墓の副葬品は検出されていないが、土壙の上に供献された状況で検出されたもの(3)がある(第163図1)。丹塗りの長頸壺で、年代は弥生後期後半のものである。さらに特記すべきは、70号主体の直上付近で南北に3基の特殊器台と特殊壺が並んだ状態で検出された点である。

6号墳の南には平坦面を利用して、北側と南側の2面に貼り石を配した方形台状墓がある(第153図)。東側は急崖となり、西側は平坦面をつくるためのカット面がある。現状での規模は

第1表 ガラス製小玉計測表

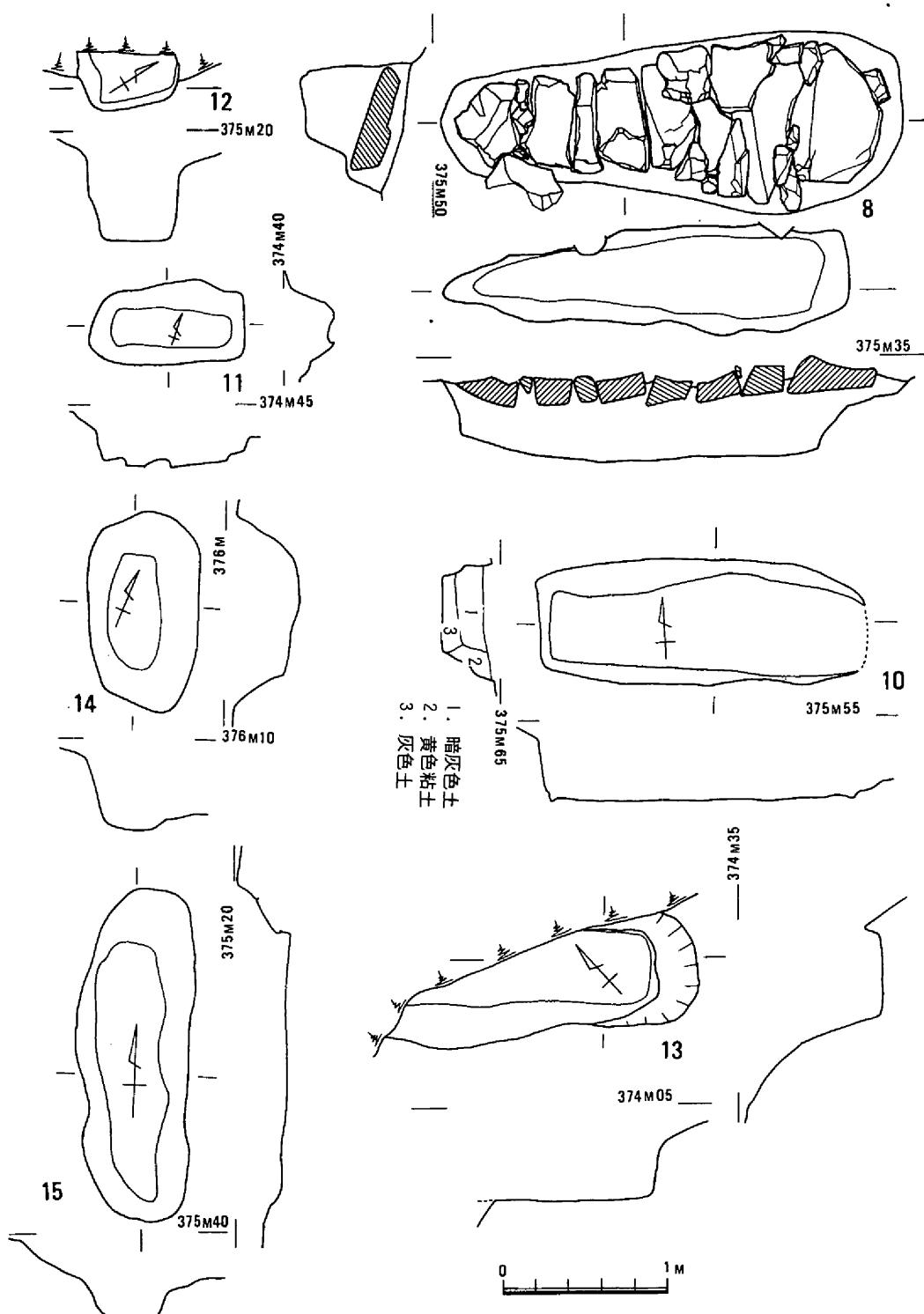
番号	直径 mm	長さ mm	色調
1	3.5	3.5	水色
2	3.5	3.5	"
3	3.0	3.0	"
4	4.0	4.0	"
5	4.5	5.0	"
6	4.0	4.5	"
7	3.5	6.0	"
8	4.0	3.0	"
9	3.0	4.0	"
10	3.0	2.0	"
11	4.0	3.0	"
12	3.5	3.5	"
13	4.0	3.5	"
14	3.0	3.0	"
15	3.0	2.0	"
16	3.5	4.5	淡黄緑色

西江遺跡(58)



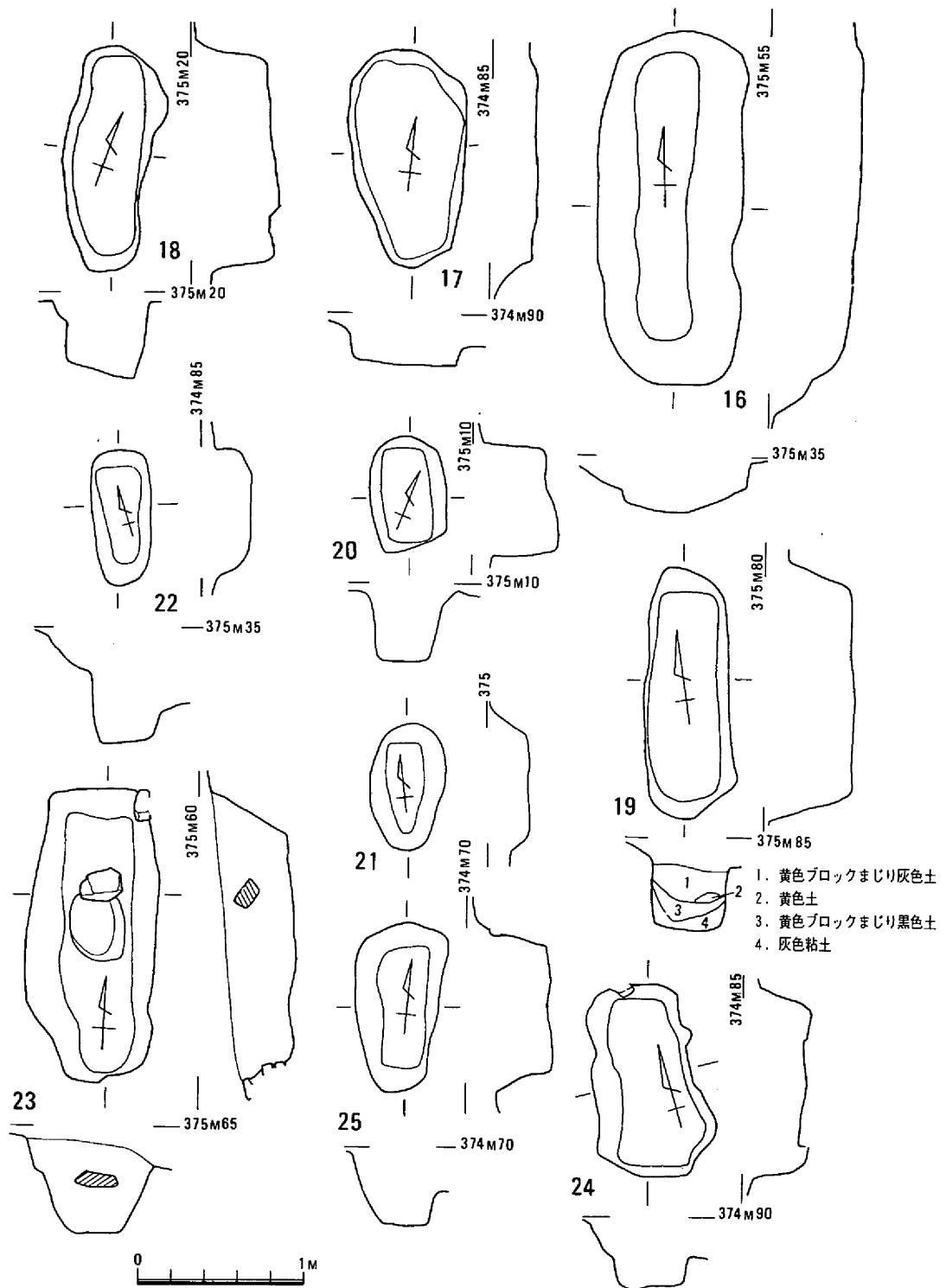
第142図 土壙墓実測図(1~7・9)

西江遺跡(58)



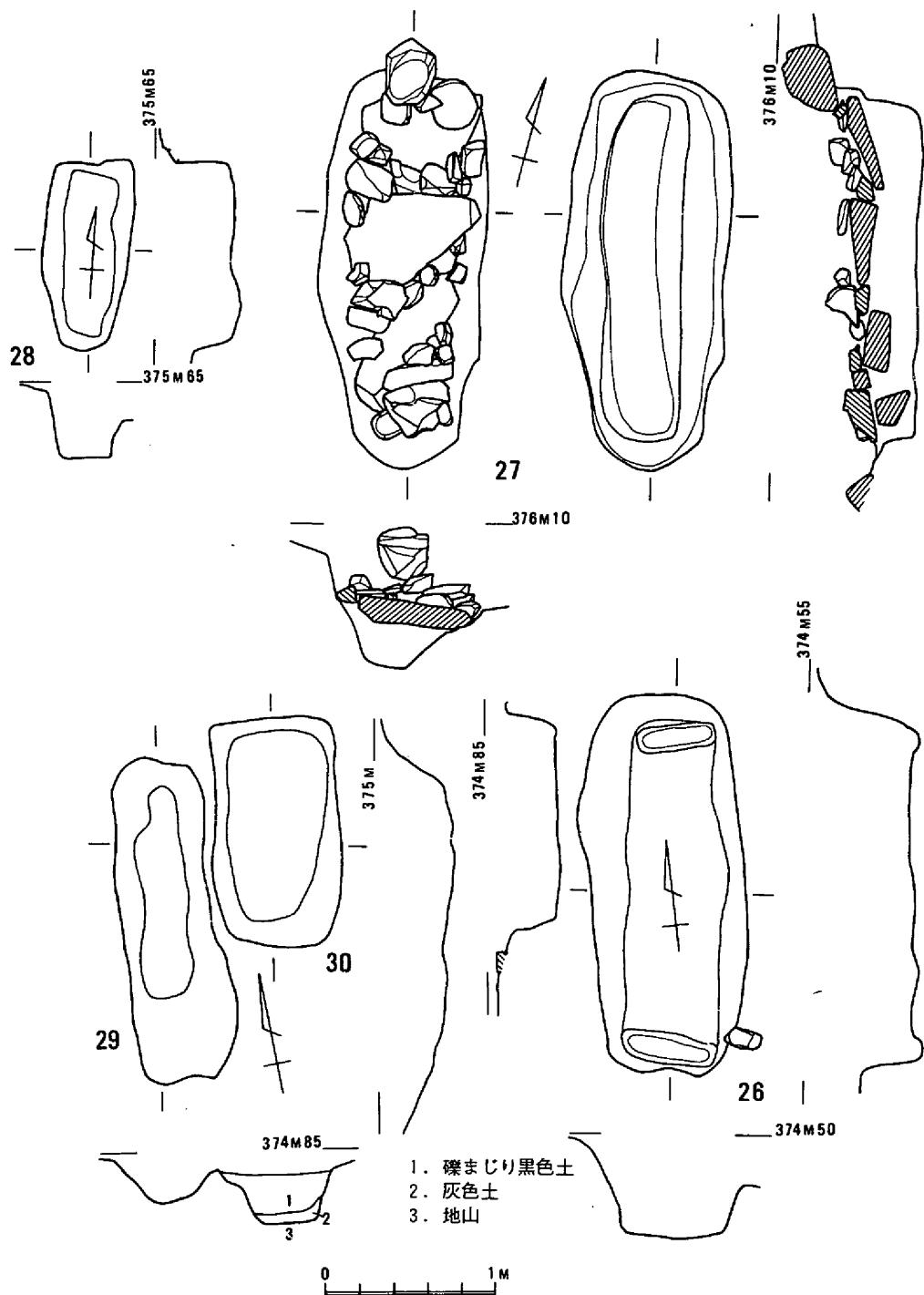
第143図 土壙墓実測図(8・10~15)

西江遺跡(58)



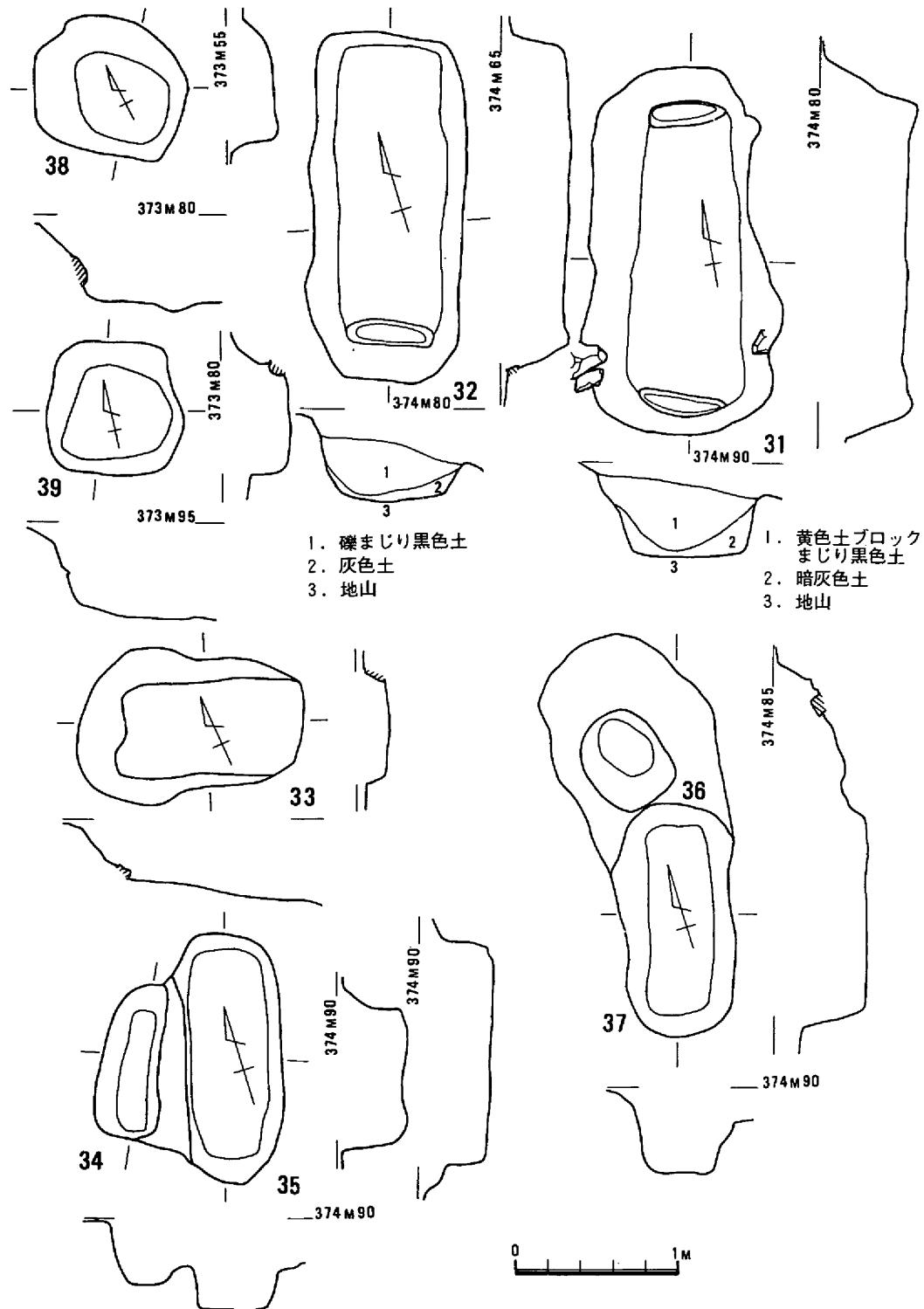
第144図 土壌墓実測図(16~25)

西江遺跡(58)



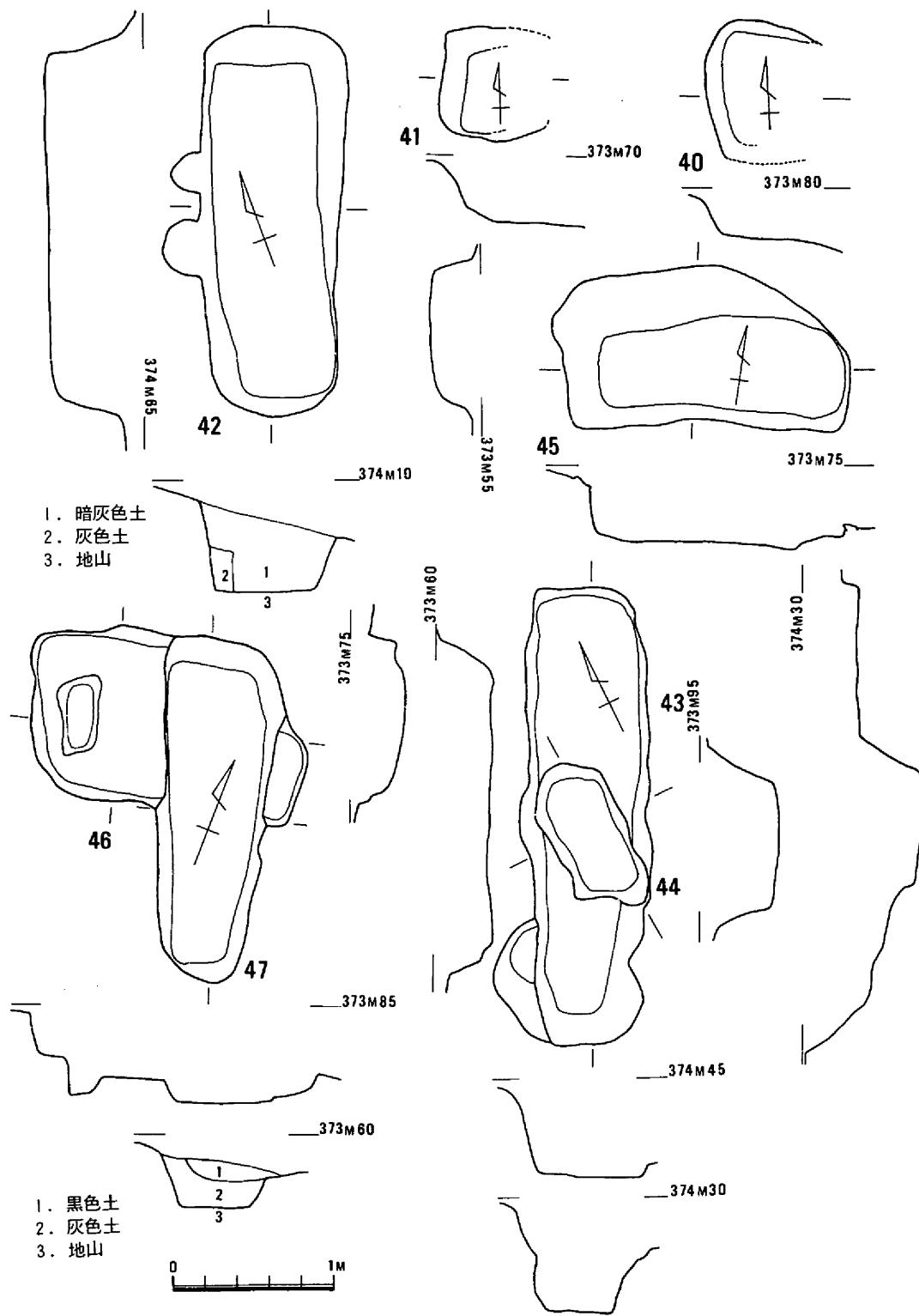
第145図 土壙墓実測図 (26~30)

西江遺跡(58)



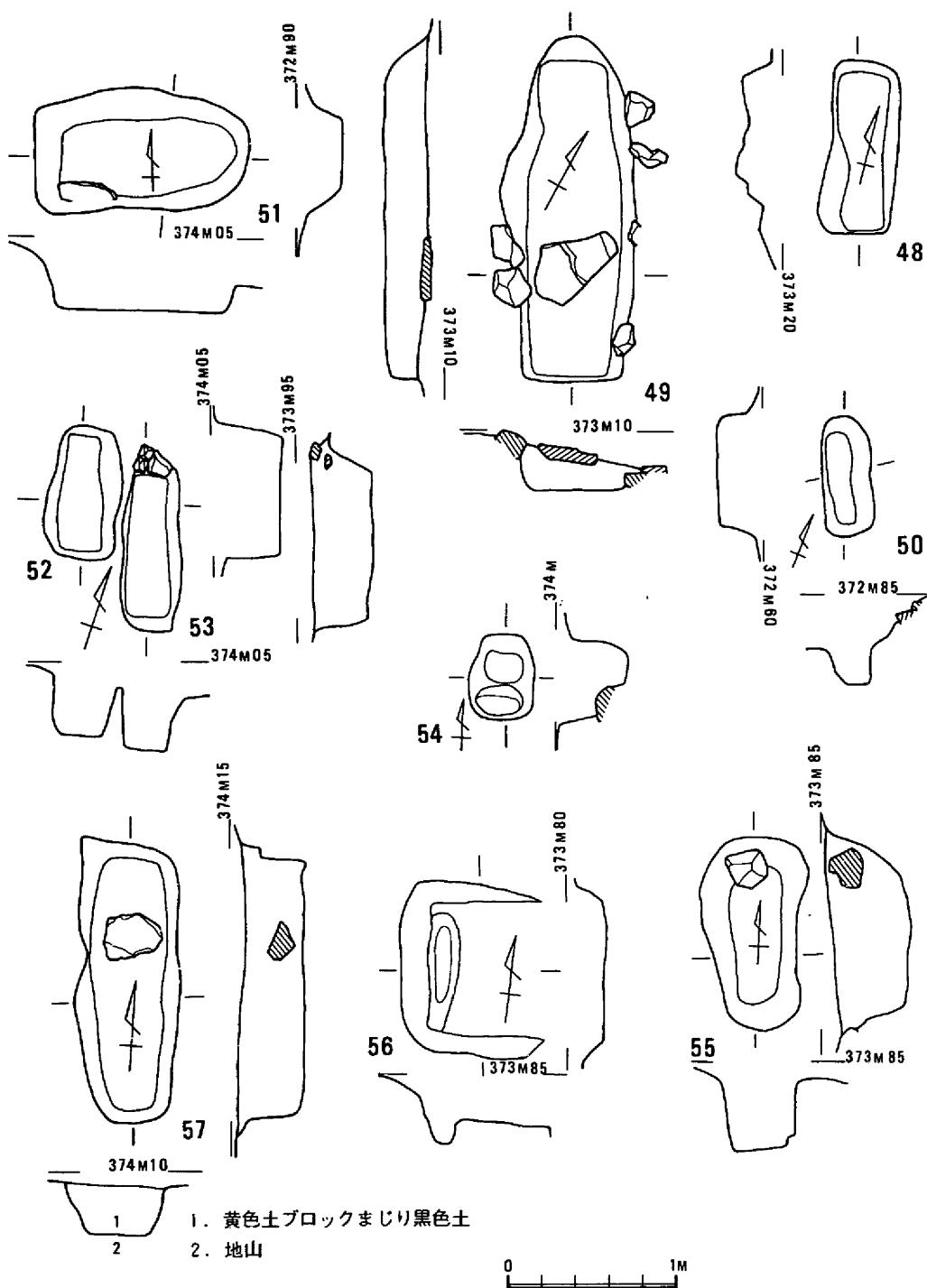
第146図 土壌墓実測図 (31~39)

西江遺跡(58)



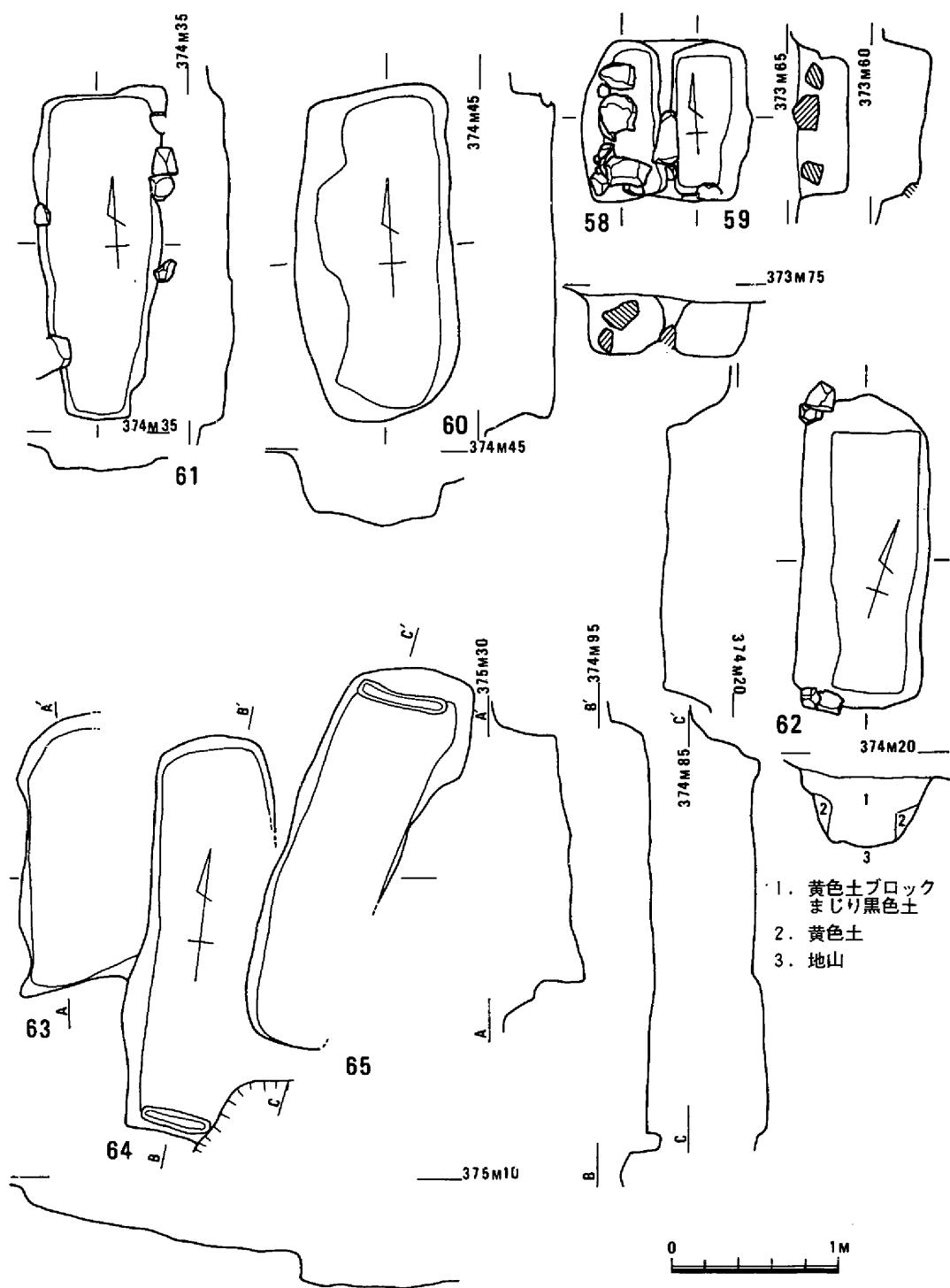
第147図 土壌墓実測図(40~47)

西江道跡(58)



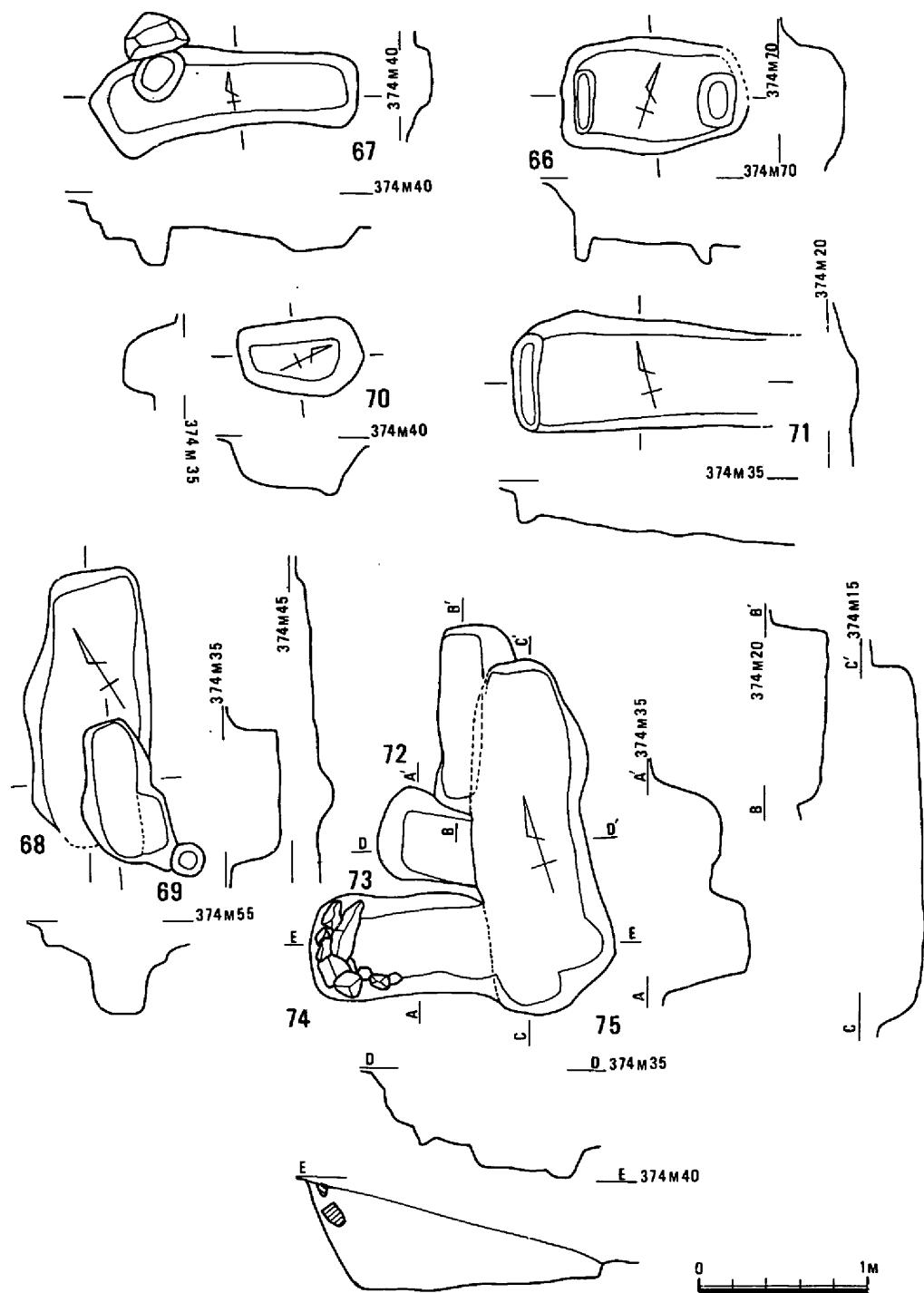
第148図 土壌墓実測図(48~57)

西江遺跡(58)



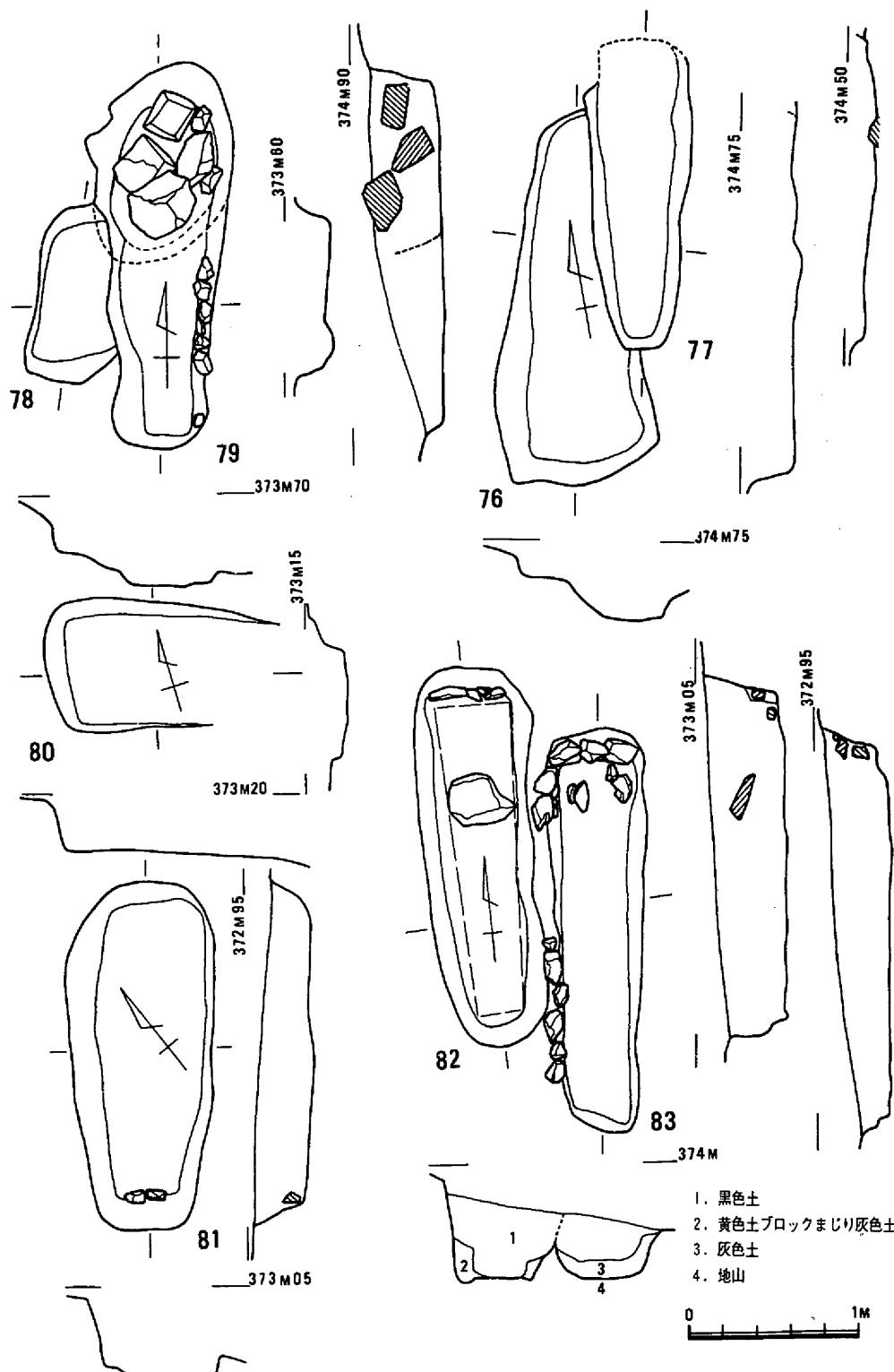
第149図 土壙墓実測図 (58~65)

西江道跡(58)



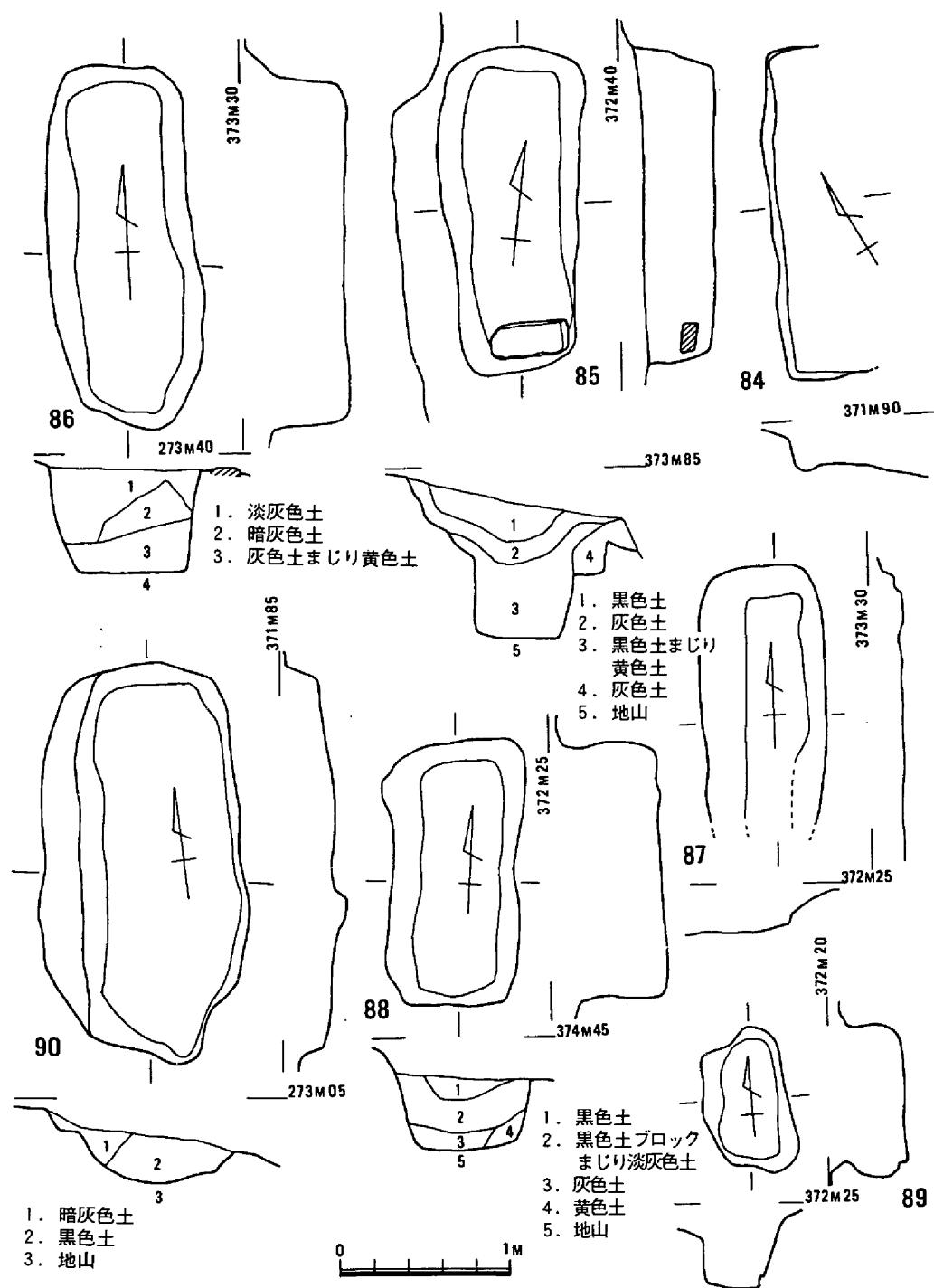
第150図 土壌墓実測図(66~75)

西江遺跡(58)

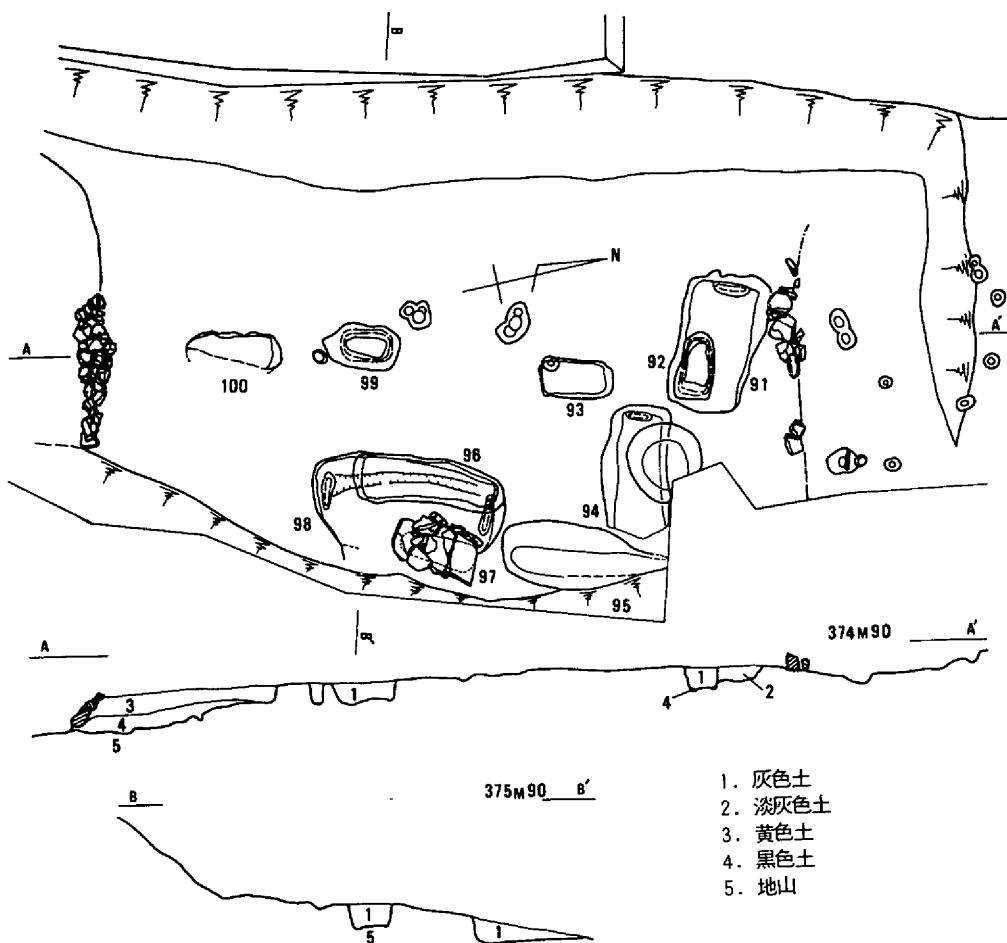


第151図 土塚墓実測図(76~83)

西江遺跡(58)



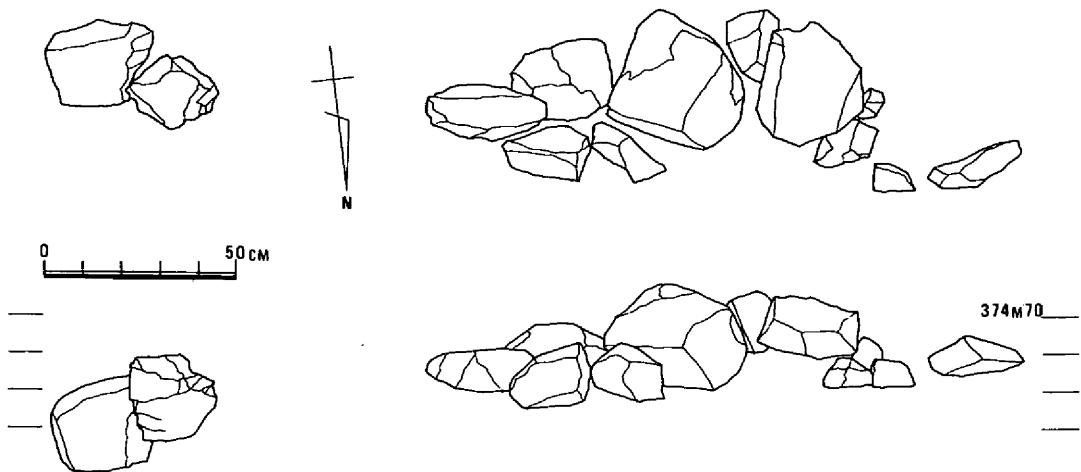
第152図 土壌墓実測図(84~90)



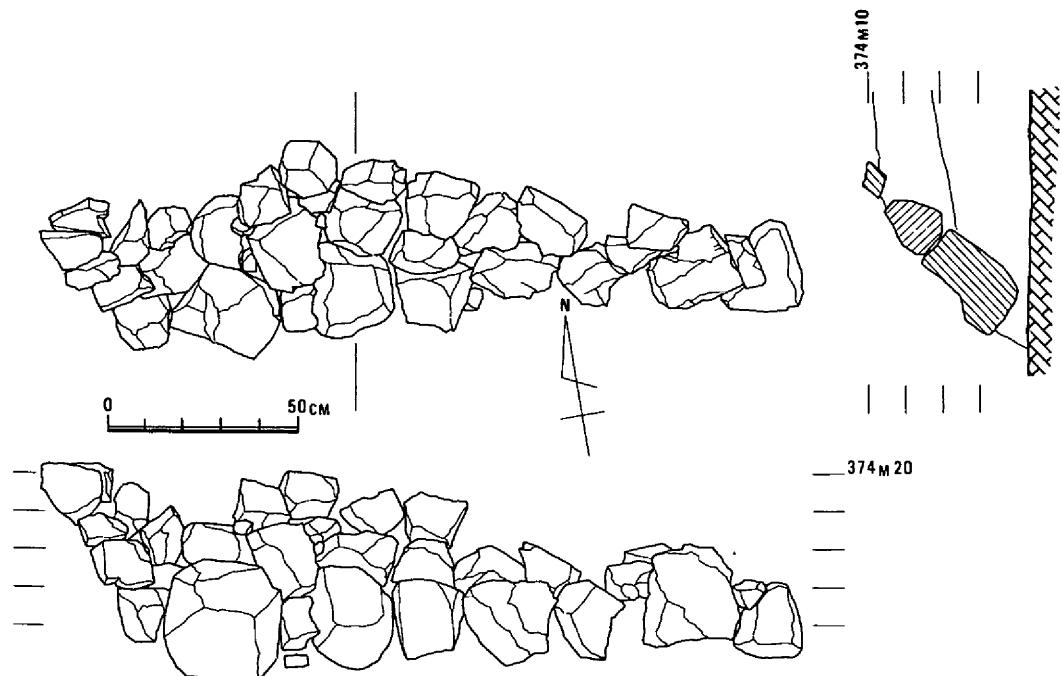
第153図 2号方形台状墓実測図

南北9.7m、東西5.5mを測る。主体部は10基確認されたが、残存する深さに浅いものがあり、若干の盛土が存在したものであろう。東側は急傾斜となって残っていないが、貼り石が存在した可能性がある。貼り石は北側では盛土も流失し、保存状態が悪く10数個の石が残っているにすぎない(第154図)。長径30cm位の石を裾部に置き、その他小さめの石が並んだ状況である。南側の貼り石は比較的保存状況が良い(第155図)。旧表土と盛土に対して貼り付けたような形で石を配している。裾部には長径30cm位の石を置き、上方にはそれより小さい石が約40°の傾斜で貼り付けている。現状での幅は2m、高さは45cmである。土壙墓の深さ等から推定して、さらに約1mの高さがかつて存在したと考えられる。主体部は長径2m位のもの5基と長径1m位のもの5基からなる。方向は南北のものが7基、東西のものが3基と北の土壙墓群と同一の傾向を示している。主体部の切り合いも2カ所、5基においてみとめられ、92号主体は大きい方の91号主体を切ってつくっている。土壙の形は南が広く北が狭

西江遺跡(58)



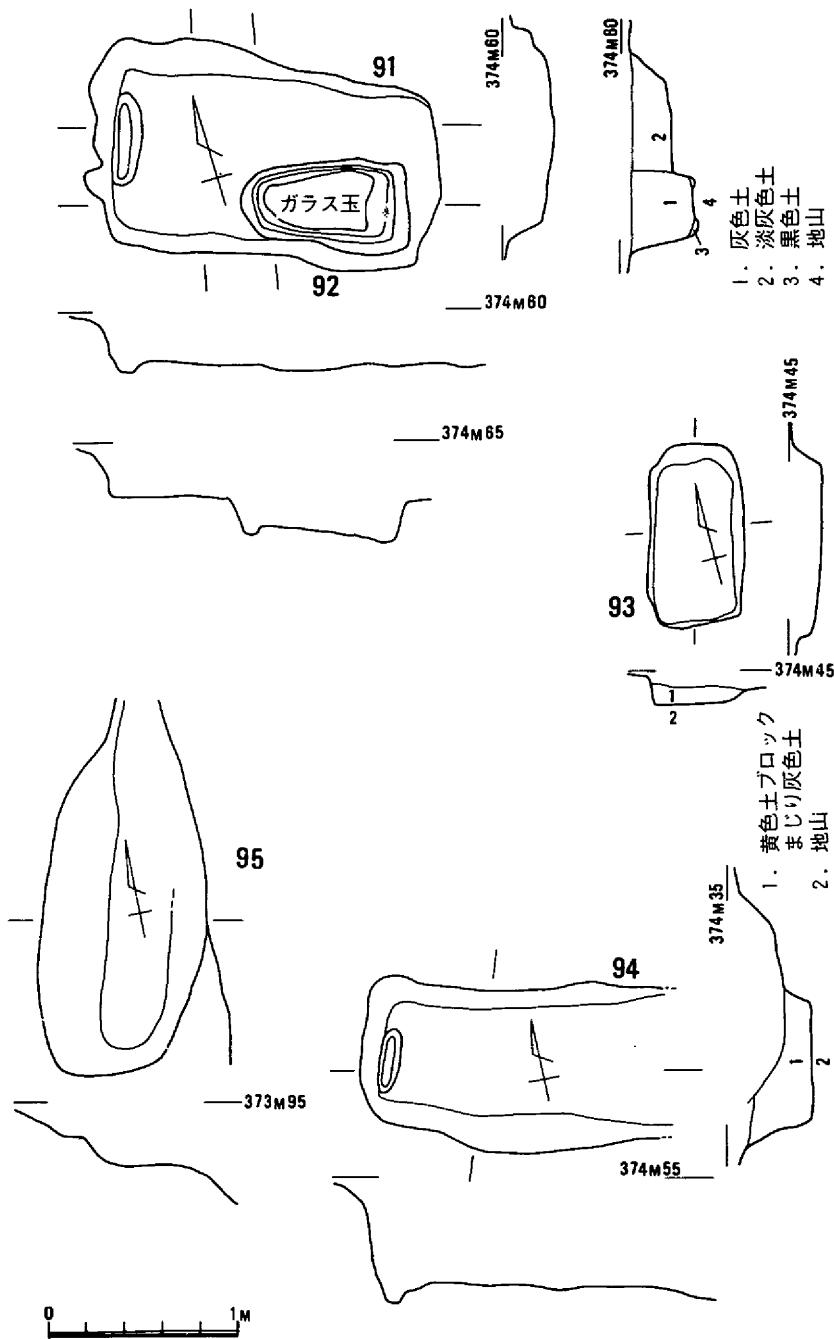
第154図 2号方形台状墓北側貼石実測図



第155図 2号方形台状墓南側貼石実測図

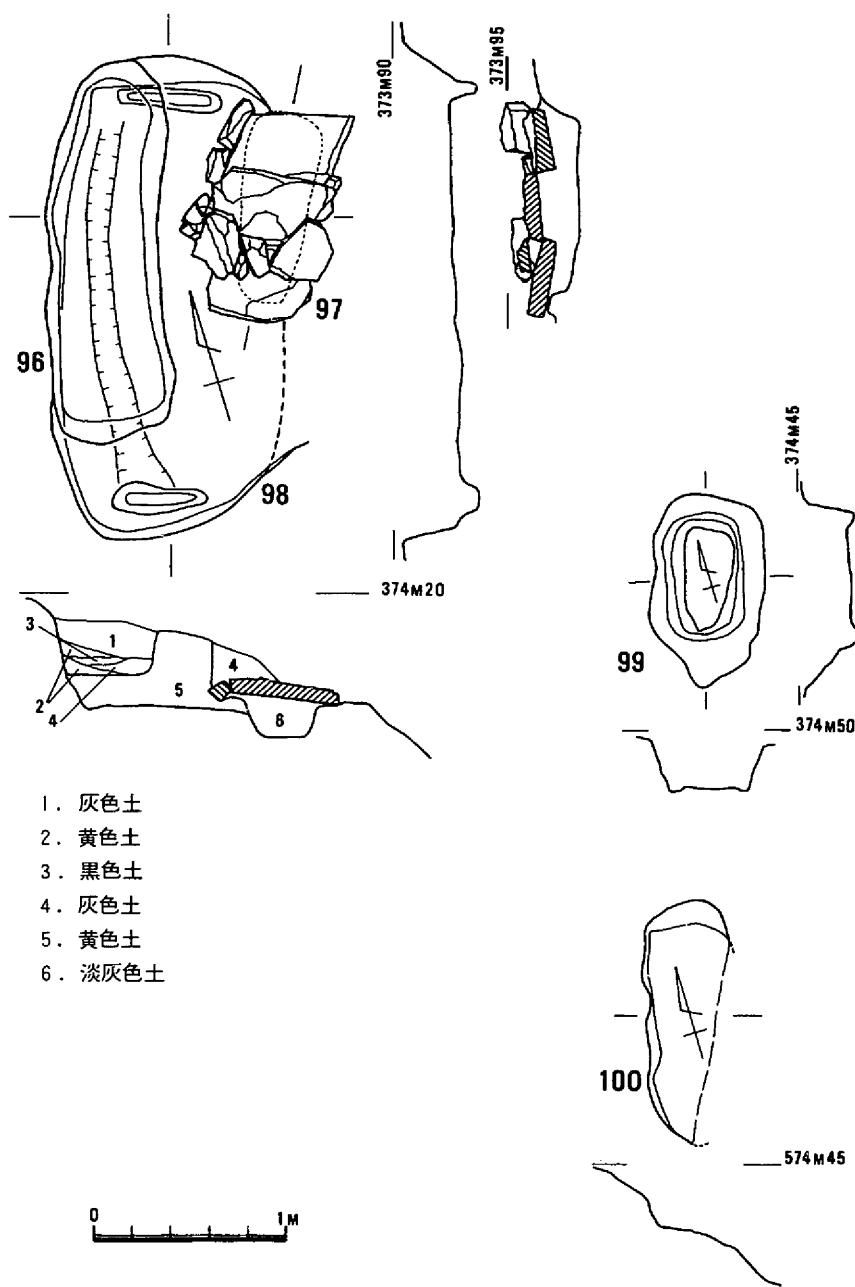
い。床面には細い溝を周囲にめぐらしている。床面の大きさは長径75cm, 短径41cmを測る。東端部近くに寄った部分からガラス製小玉が17個検出された。色調はいずれも水色を呈している。1個だけわずかに黄緑を帯びたものがある。大きさはかなりまちまちであるがほぼ直徑4mm, 長さ3mm位のものが多い(第158図, 第1表)。96号主体は98号主体を切って浅くつくられ, 97号主体(石蓋土壙)は98号主体の地山より深く掘り込んでいる。92, 99号主体は小型の土壙であるが, 土壙床面に小さな周溝

西江遺跡(58)



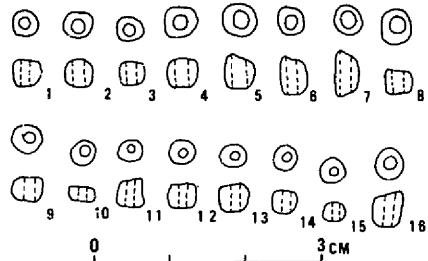
第156図 土壌墓実測図 (91~95)

西江遺跡(58)



第157図 土壌墓実測図(96~100)

をめぐらしているのは他のものと異なる。小口板の痕跡をみるとめるもの(91, 94, 98)がある。92号主体以外では副葬品は検出されていない。91号主体の埋土中から弥生時代の石鏃が1点出土している。94号主体の北寄りには土壙を切って火どころのある楕円形の凹みがある。遺物はなく年代は明らかでない。



第158図 91号土壙墓出土ガラス玉実測図 (1/1)

南土壙墓群
南土壙墓群は、2号方形台状墓の南にあって、土壙墓群の最南端部に位置している。土壙墓群の内、2号方形台状墓および南土壙墓群は標高374mの所に存在する帯状のテラス上に位置している。

南土壙墓群では、101～132の32基の土壙墓を検出した。これらの32基のうち、6基はその主軸が等高線に対して直交してつくられており、残り26基のそれは等高線にほぼ平行してつくられている。土壙の切り合い関係から見ても、北土壙墓群と同様に等高線に直交するグループが平行しているグループよりも古い時期に埋葬されたことを示している。等高線に平行する26基の中にも切り合い関係が見られ、いくつかのグループに分けることができる。

I 等高線に直交するもの	101・109・118・125・131・132	6基
II 等高線に平行するもの	102・108・110・115・121・126・128・129	8基
III 等高線に平行するもの	107・111・113・118・124	5基
IV 等高線に平行するもの	103・104・105・106・112・114・117・119・120・122・123・ 127・130・	13基

これらI～IVのグループは、埋葬の時期を古い順にならべたものといえる。それぞれのグループの中には、長軸の長さが2mを超える大型のものが1～2基ずつ含まれている。

IおよびIIには遺物の伴う土壙墓は皆無である。IIの126号主体は小児用と思われるが、これには3枚の川原石をおいて石蓋としていた。

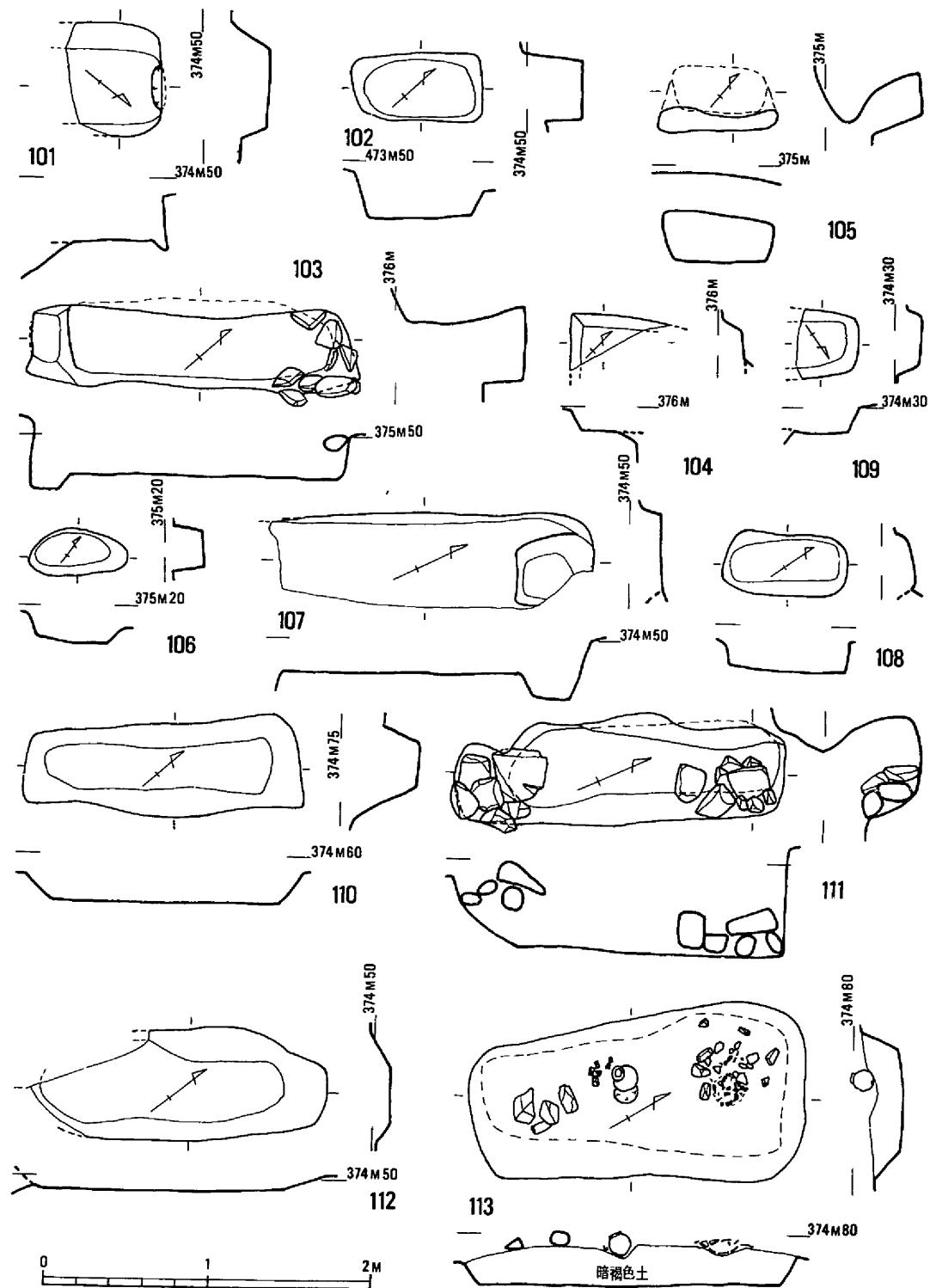
IIIの中では、127号主体のみに石蓋がみられ、またガラス玉が副葬されていた。この副葬ガラス玉は検出時にすでに小破片となっており、実測は不可能で実数は数えられなかったが多くても5個を超えない数であり、いずれも淡緑色を呈していた。IIIの時期に属する土壙墓には、このガラス玉の他には遺物は認められなかった。

IVに属する土壙墓は13基と多くなるが、113号主体を除いては遺物は認められなかった。113号主体は、遺体を埋めた後に、数個の土器をおいており、焼成後に底部穿孔したものと見られる。

土壙墓個々の形態・計測値については第159～161図および第2表を参照されたい。各土壙墓の特徴的な点(特異点になるかもしれないが)をあげると次のようになる。

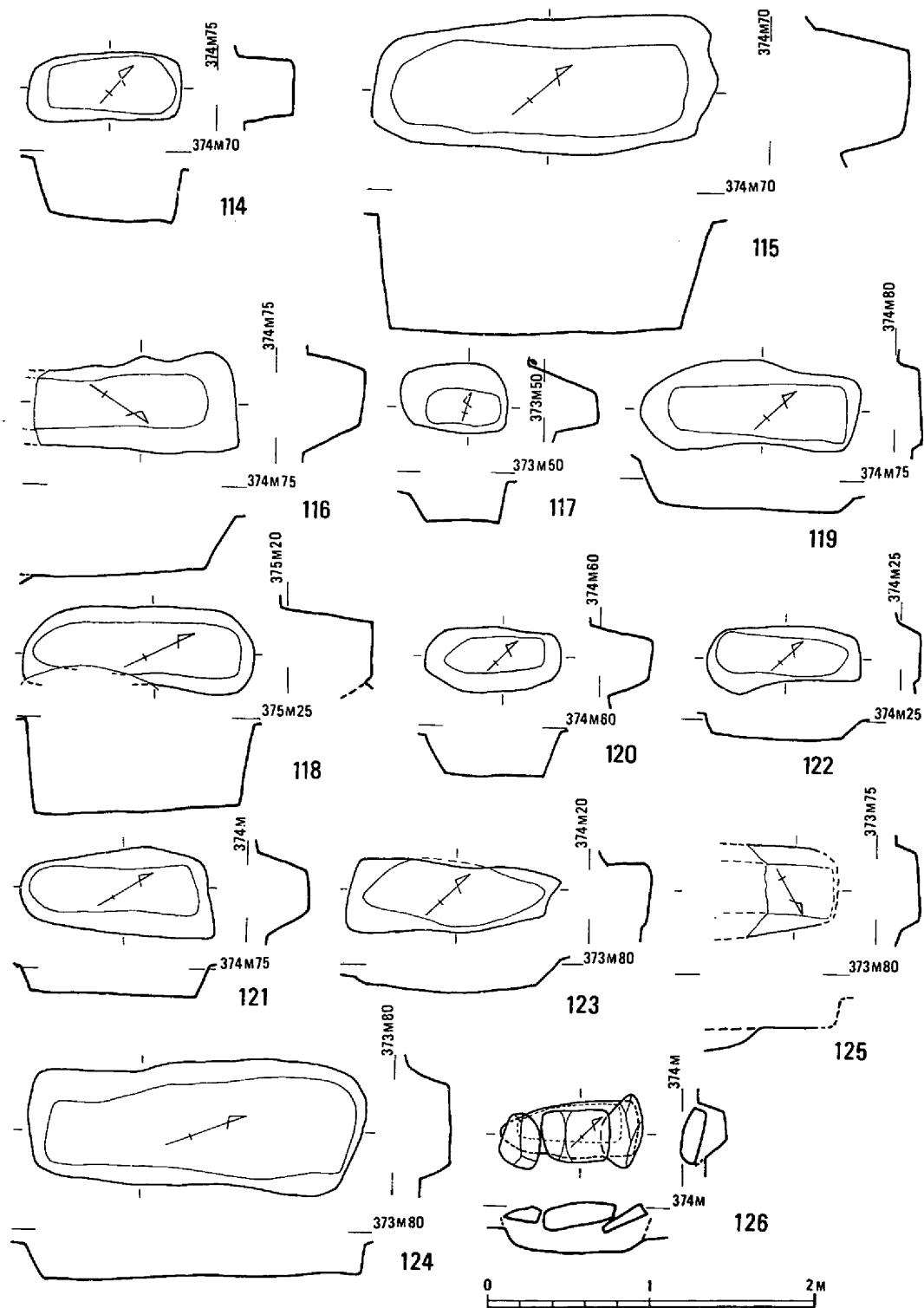
小口板痕のあるもの(101・103・127)、小口部分に集石のあるもの(103・111)、土壙の2辺に列石のあるもの(130)、石蓋のあるもの(126・127)、一方の側壁がオーバーハングして土壙を覆う状態のもの(105)などが見られ、遺物を伴うもの(113・127)もある。

西江道跡(58)



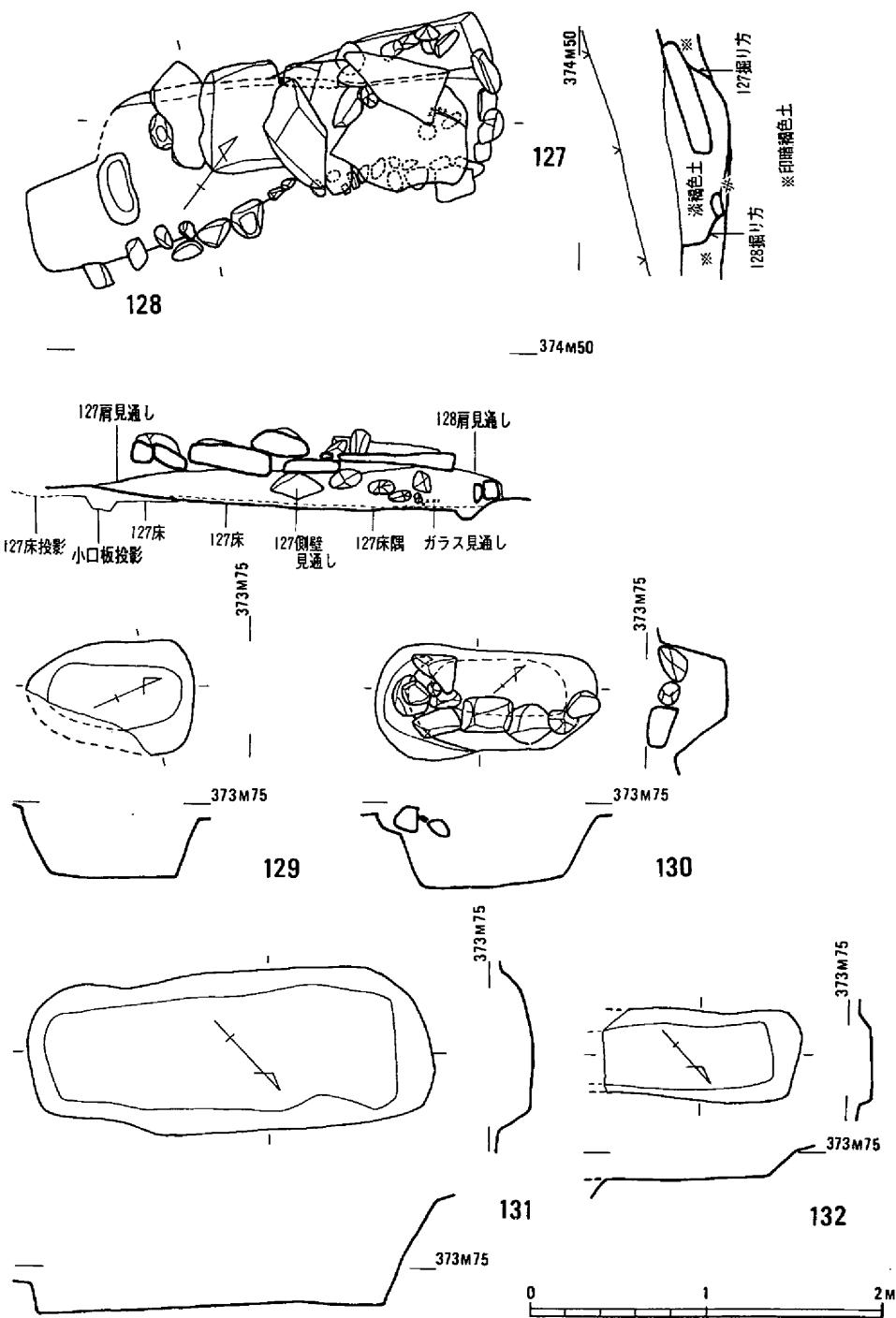
第159図 土壌墓実測図(101~113)

西江遺跡(58)



第160図 土壙墓実測図(114~126)

西江遺跡(58)



第161図 土壙墓実測図 (128~132)

西江遺跡(58)

第2表 土 壤 墓 計 測 表

番号	主軸方向	上端 最大長cm	上端 最大幅cm	底 最大長cm	底 最大幅cm	深さcm	土壤の主 軸と等高 線の関係	備 考
1	N 47°W	98	42	75	38	48	平行	丹塗りの壺1個体供獻
2	N 3.5°W	69	20+	57	18+	22	平行	
3	N 39°W	170+	65	155+	50	65	平行	南小口に石あり、北側は削られている 中央部に長径25cmの石あり。
4	N 3°W	225	55	207	50	64	平行	北側に人頭大の集石あり。
5	N 2.5°E	152+	58	145+	38	30	平行	南側が古墳の周溝で切られる。
6	N 8°E	195	49	177	36	58	平行	北の幅がやや広い。
7	N 15°W	229	73	180	47	48	平行	
8	N 11.5°W	278	107	215	47	76	平行	石蓋土壤、北の幅が広い。
9	N 1°E	205	66	175	47	20	平行	
10	N 88°W	196	75	190	57	45	直行	
11	N 70°E	95	50	73	23	30	直行	
12	N 63°W	33+	60	28+	45	76	平行	北側が削られている。
13	N 47.5°W	198+	55+	136+	43	48	平行	北東部が削られている。
14	N 22°W	121	68	68	32	49	平行	
15	N 5°W	200	70	155	42	32	平行	
16	N 0.5°E	216	90	76	40	54	平行	
17	N 20°W	133	70	129	65	25	平行	
18	N 21°W	138	53	122	40	51	平行	
19	N 8.5°E	153	53	127	43	45	平行	
20	N 27.5°W	70	47	57	30	48	平行	
21	N 6°E	77	45	55	23	25	平行	長楕円形
22	N 10°E	71	30	53	13	43	平行	
23	N 0°E	179	78	155	42	47	平行	長径25cmの石が中央よりやや北にあり。
24	N 8°E	117	62	103	45	36	平行	
25	N 5°W	104	55	74	30	49	平行	
26	N 7°E	217	90	198	55	56	平行	両方に小口板痕あり。
27	N 12°W	225	94	190	45	63	平行	石蓋土壤、長径40cmの石が北端上にある。
28	N 1°E	108	51	92	30	43	平行	
29	N 6°E	188	60	121	30	37	平行	
30	N 11°E	135	81	110	58	34	平行	
31	N 11°E	221	118	190	71	61	平行	両方に小口板痕あり。
32	N 16°E	209	92	181	64	51	平行	南側に小口板痕あり。
33	N 67.5°W	136+	95	107+	58	35	直行	
34	N 23°E	95	39	75	18	37	平行	
35	N 16°E	150	57	126	47	40	平行	
36	N 23°W	59	50	40	26	42	平行	小型
37	N 16°E	140	66	115	39	50	平行	正方形に近い。
38	N 55°W	95	82	60	48	47		
39	N 84°W	83	80	60	58	45		正方形に近い。
40	N 86°W	71+	87	59+	71	30		正方形に近い。
41	N 88.5°W	69+	68	53+	51	36		正方形に近い。
42	N 18.5°E	240	90	204+	65	64	平行	
43	N 26°E	278	75	255	70	33	平行	

西江遺跡(58)

番号	主軸方向	上端 最大長cm	上端 最大幅cm	底 最大長cm	底 最大幅cm	深さcm	土壤の主軸と等高線の関係	備考
44	N 2°W	100	47	78	35	44	平行	43を切っている。
45	N 81°E	175	94	151	57	38	直行	
46	N 75°E	174+	105	165+	92	39	直行	西側の小口板痕あり。 東側が削られている。
47	N 20°W	210	75	180	60	35	平行	38を切る。
48	N 10.5°W	102	43	92	30	38	平行	
49	N 20°W	203	78	185	55	33	平行	中央よりやや南に長径55cmの平板な石 あり。
50	N 29°W	70	30	54	13	20	平行	
51	N 88°E	124	71	102	45	39	直行	
52	N 16°E	78	43	68	27	37	平行	
53	N 15°W	98	33	83	25	33	平行	
54	N 0°E	50	38	17	23	41	平行	小型、北側半分が深い。
55	N 8°W	113	61	80	32	53	平行	北側に長径24cmの石あり。
56	N 83°E	86+	100	70+	78	20	直行	西側に小口板痕あり。 東側が削られている。
57	N 4°W	162	60	148	45	39	平行	中央よりやや北に長径33cmの石あり。
58	N 6.5°W	95	48	88	30	40	平行	数個の石あり。
59	N 6°E	93	48	75	33	32	平行	
60	N 3°E	199	96	184	75	42	平行	
61	N 3.5°E	192	73	186	62	20	平行	北の幅が広い。
62	N 19.5°W	186	76	153	51	47	平行	
63	N 11°W	158	60+	146	50+	41	平行	東側不明確。
64	N 3.5°W	238	70	225	65	25	平行	南に小口板痕。
65	N 73°W	238	85	217	66	38	平行	北に小口板痕。
66	N 70°E	110	68	95	52	32	直行	両端に小口板痕あり。
67	N 85°W	157	50	140	29	14	直行	
68	N 30°E	159+	74	150+	57	10	平行	
69	N 24°E	85	38	78	25	28	平行	68を切る。
70	N 24°E	73	46	52	23	31	平行	長径38cmの石が土壤の横にある。
71	N 76.5°W	160+	63	160+	47	17	直行	両端に小口板痕あり。
72	N 21.5°E	109	45	94	25	33	平行	75に切られる。
73	N 65°E	56+	53	41+	37	30	直行	75に切られる。
74	N 71°W	178	58	160	38	64	直行	75に切られる。西端に詰石あり。
75	N 17°E	205	69	191	55	27	平行	77に切られる。
76	N 15°E	219	93	203	65	26	平行	
77	N 13.5°E	181+	62	173+	47	24	平行	76を切る。
78	N 8°E	105	42+	80	39+	31	平行	
79	N 4°E	227	78	190	49	47	平行	
80	N 74°W	139+	79	127+	63	30	直行	
81	N 39.5°E	203	90	170	66	46	平行	
82	N 1.5°W	222	70	193	46	57	平行	北端に詰石あり。中央よりやや北に長 径40cmの石あり。木棺痕跡あり。
83	N 5°E	235	58	220	40	42	平行	北端に詰石あり。枕石あり。
84	N 28°E	144	48+	138	43+	18	平行	
85	N 4°W	189	83	167	58	52	平行	

西江遺跡(58)

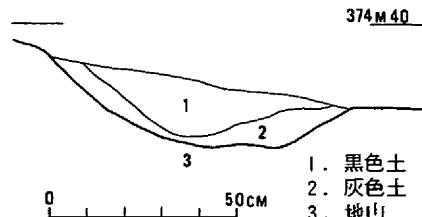
番号	主軸方向	上端 最大長cm	上端 最大幅cm	底 最大長cm	底 最大幅cm	深さcm	土壙の主 軸と等高 線の関係	備 考
86	N 5°E	212	85	192	60	61	平行	
87	N 4°E	160+	75	140+	35	14	平行	
88	N 6°W	153	84	135	48	60	平行	南端に長さ47cmの長方形の石あり。
89	N 1°E	86	49	69	32	42	平行	
90	N 6°E	233	94	210	74	43	平行	
91	N 69°W	183+	114	173+	86	24	直行	
92	N71.5°W	88	50	75	41	32	直行	
93	N 16°E	98	49	85	39	14	平行	
94	N 75°W	173+	85	162+	56	50	直行	
95	N 15.5°E	224+	86	210+	33	15	平行	
96	N 20°E	206	56	179	44	40	平行	
97	N 25.5°E	102	38	91	24	50	平行	石蓋土壙
98	N 19.5°E	259	112+	236	107+	57	平行	
99	N 21.5°E	102	60	68	41	30	平行	
100	N 17°E	130+	45+	117+	43+	18	平行	
101	N 38.5°W	54+	80	58+	46	28	平行	
102	N 41.6°E	80	53	66	36	38	平行	
103	N 43°E	30	53	185	47	35	平行	南西に小口板痕あり。北東に詰石あり。
104	N 48.6°E	62+	36+	36+	23+	20	平行	
105	N 49.5°E			60	27	55	平行	
106	N 57°E	62	27	46	18	20	平行	
107	N 23.8°E	195?	58+	180+	53+	20	平行	
108	N 32°E	82	38	69	25	20	平行	
109	N 55.5°W	45+	45	18+	25	30	直行	
110	N 32.7°E	168?	58	138	35	45	平行	
111	N 27.3°E	210	60	166	46	60	平行	両端に集石あり。
112	N 40.5°E	176+	59	149	35	15	平行	
113	N 31.8°E	208	110	186	65	21	平行	上面に壺、甕等供献。
114	N 51.8°E	93	40	81	35	35	平行	
115	N 43.5°E	208	80	182	55	60	平行	
116	N 33.7°W	123+	60	105	34	38	直行	
117	N 73.3°E	63	42	46	20	28	平行	
118	N 29.5°E	140	47	127	34	55	平行	
119	N 43.5°E	134	52	109	36	40	平行	
120	N 44°E	85	40	62	30	38	平行	
121	N 32.7°E	114	54	102	32	30	平行	
122	N 46°E	94	39	80	30	15	平行	
123	N 44.7°E	123	44	110	38	65	平行	
124	N 30°E	204	80	188	62	23	平行	
125	N 35°W	110+	55	37+	32	20	直行	
126	N 41°E	84	49	66	24	20	平行	石蓋土壙
127	N 31.5°E	278	70	270	50	25	平行	東辺に小石を並べる。
128	N 43.3°E	232	70	215	45	35	平行	石蓋土壙。ガラス玉数個。
129	N 25.5°E	140?	64	75	37	38	平行	2辺に石を置き並べる。
130	N 45°E	125	63	77	30	40	平行	
131	N 45.8°W	237	90	198	66	60	直行	
132	N 45.1°W	110+	50	97+	38	15	直行	

安信調査区の南端の帶状テラスが埋葬の地として利用されはじめたのは、遺物を伴う土壙墓がないので定かではないが、弥生時代後期後半と思われ、その終末は113号主体に伴う土器から見て弥生時代後期末と考えられる。

(4) 土壙墓周辺の土器 (第169図)

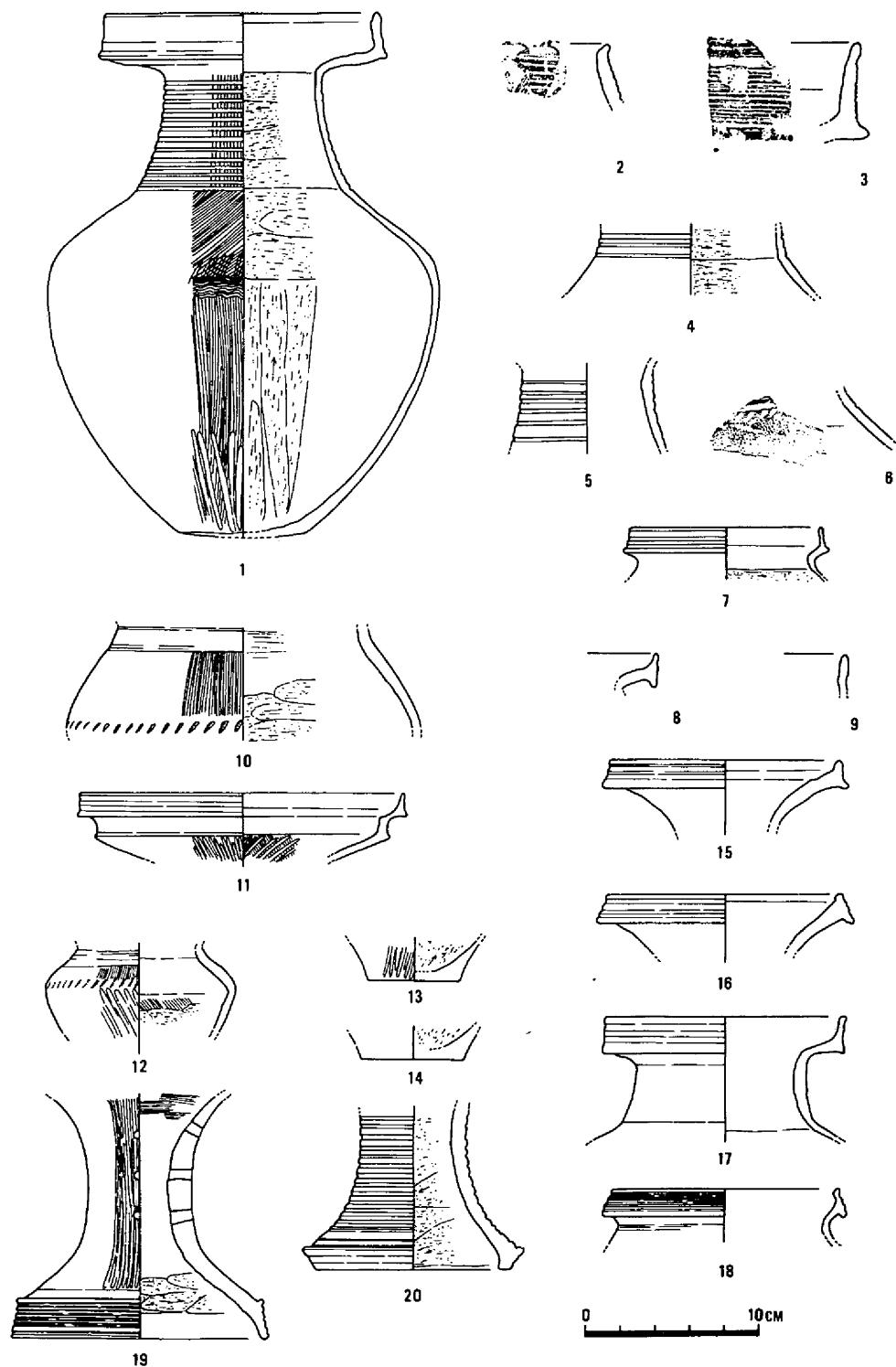
土壙墓及びその周辺で検出された遺物について述べる。1は3号土壙墓の上面から検出されたものである。器形は長頸壺でやや短かい頸部から口

縁部は横にひろがり、端部では屈曲して上方へのびる。頸部には縦位のハケメの上から横位の沈線を配している。胴部はやや肩が張っている。底部はやや外湾ぎみの不安定なものである。口縁部内面から口縁拡張部外面には丹塗りされている。口縁部の受部の下には丹塗りが行われていない。頸部から胴部中央よりやや下まで丹塗りされている。下部付近には丹塗りはない。胴部の肩の最大径の部分に波状文を施し、その上には斜位のハケメを施し、若干のヘラ磨きを施している。下方には縦位のハケメを施し、その後下部にはヘラ磨きを施している。内面には頸部までヘラ削りが行われている。頸部と胴部上半は横位で、胴部下半が縦位のヘラ削りである。胎土には雲母を含み、やや茶褐色を呈する。全体に器壁は薄い。2, 3は特殊壺の口縁部の小破片で、置き並べられた特殊器台の周辺で検出された。外面には擬凹線文が施され、2では鋸歯文を配している。全体に丹塗りが施され、胎土には雲母、微砂を含み茶褐色を呈する。4は長頸壺の頸部から肩部にかけての破片である。頸部には横位の沈線が配され、外面には丹塗りが施されている。内面には横位のヘラ削りが施されている。5は特殊器台の周辺で検出された長頸壺の頸部である。ヘラ描きの沈線は無造作に施されている。頸部内面には横位のヘラ削りが施されている。6は長頸壺の肩部の破片で、頸部から胴部へ移る部分に刺突文と鋸歯文を配している。7は甕の口縁部で頸部から折れ曲がって外方へ拡張し、さらに上方へ立ちあがる。口縁部内外面に丹塗りが施され、その後頸部直下の内面を横位のヘラ削りしている。4～7には胎土に雲母を含み、茶褐色を呈する。8, 9は北側の道路に面したところで検出されたものである。8は甕の口縁部で、口縁端部は上下に拡張する。9は甕の口縁部の拡張部分らしい。8, 9とも丹塗りされている。9には雲母を含み、茶褐色を呈する。10は甕の肩部の破片で、北端部の道に面したところで検出された。外面では肩部に縦位のハケメを施し、最大径の部分に刺突文を配している。胎土には微砂を含み、色調は内・外・断面とも黄褐色を呈する。11は10と同じところで検出された。高杯の杯部で脚部を欠失している。口縁部は角ばった2段の稜があり、口縁端部は直立ぎみに立ちあがり、うすくなる。口縁部は横なでが行われ、杯部外面には縦位のヘラ磨きを施し、内面では斜位のハケメのうえから交差する方向で間をあけたヘラ磨きが施されている。内外面とも丹塗りが施され、胎土には雲母が含まれている。断面の色調は茶褐色を呈する。12は南側のテラスで検出された壺片である。肩が張った形で、肩部にはハケメの上から刺突文を配している。胴部下半は斜位のヘラ磨きが施され、内面ではハケメのあと横位のヘラ削りが施されている。13, 14は平底の底部である。外



第162図 溝断面図

西江遺跡(58)



第163図 弥生・土師器実測図 ($\frac{1}{4}$)

面には縦位のヘラ磨きが施され、内面には縦位のヘラ削りが施されている。13は南側のテラスで、14は北側の道路に近いところで検出された。15、16も北側の道路に近い部分で検出されたものである。小破片のため器形が明瞭でないがいずれも朝顔形にひらき、端部は肥厚して上下に拡張する。胎土には微砂を含み、色調は内外面とも黄褐色を呈する。15だけは断面が黒色を呈する。17も15と同じところで検出された。短かい頸部がほぼ直立し、屈曲して横に拡張し、端部は上方へ立ちあがる。胎土には微砂を含み、外面には丹塗りが施されている。18は甕の口縁部で2号方形台状墓の北で検出された。頸部から緩やかに外反し、端部で上下に拡張する。外面には凹線文が施されている。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。19は南側のテラスで検出されたもので、山陰地方ではよくみられる鼓形器台である。口縁部を欠失している。胴部は長く筒状にのびて、緩やかに上下にひろがる。中央部には縦に3個が並んだ円孔を4方向に配している。脚の部裾はくびれてほぼ立ちあがり、外面には凹線文を配している。筒状部の外面には縦位のヘラ磨きが施され、内面では上部に横位のハケメを施し、下部には横位のヘラ削りが施されている。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。20は高杯の脚部で緩やかに裾がひろがり、端部は肥厚して立ちあがる。外面には沈線が密に配され、内面には横位のヘラ削りが施されている。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。

他に、1号方形台状墓周辺から出土したものに青木遺跡で器台B型とした中央部が空洞にならず中実で上下が同じような稜線をもつ皿状部が付いたものが出土している(註16)。充分復原ができないが、上下とも皿状部内面はヘラ削りが施され、口縁端部の断面は丸い。柱状部の外面には縦位のハケメが施され、その後丹塗りが施されている。胎土には微砂を含む。

1～18はほぼ弥生後期後葉に属するものである。19は岡山県側ではかつて発見されたことがなく、他にも例がないことから移入された可能性もある。山陰では「九重式」に比定される。20は弥生中期末～後期初頭のものである。

南土壤墓群に伴う遺物

南土壤墓群のうち遺物の伴う土壤墓は、113号主体と127号主体の2基のみである。

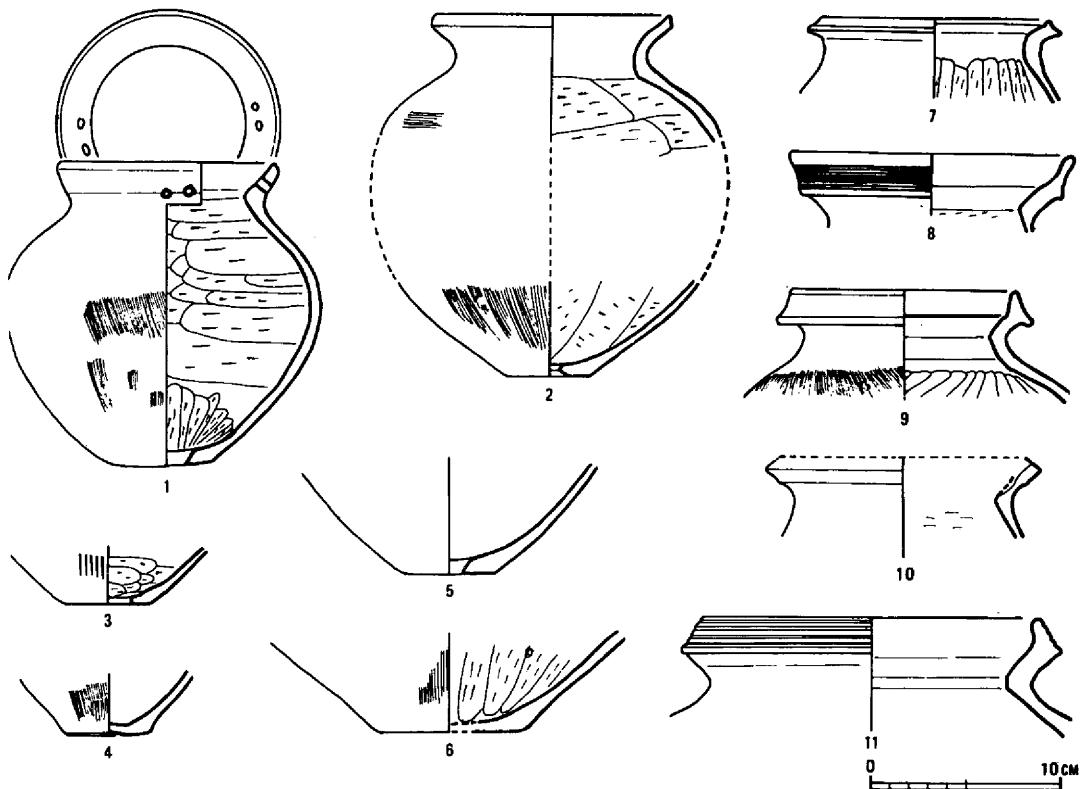
113号主体では、土壤の中に遺体を安置し、この土壤を土砂で埋めた後に小さな凹みをこしらえてその上に数個の土器を置いていた。「供献用」として底部穿孔したものも見られる。127号主体では、数個のガラス玉を検出したが、いずれも割れて微細片となっており、実数を数えることも実測することも不可能な状態であった。

113号主体に伴う土器(第164図)

壺(1～3・5・6・8・9)と甕(4・7・10)だけで、高杯等他の器形のものは存在しない。11は壺であるが、西方の斜面からの転落による混入と思われる。

1は口縁径11.0cm・高さ16.0cm・胴の最大径17.5cmを測る。胴の最大径は下から9cmの所にあり、球形に近い形をしている。頸部は外反し斜め上方にのびている。頸部には焼成後に2個の小孔が対面する形で2カ所に穿たれている。また、孔をあけかけて途中でやめた痕跡が1つみられる。この土器には、蓋がつけられていたのであろう。底部にも焼成後の穿孔がある。外面の胴下半の一部はたて方向のくしなでを行っており、内面は底部近くはたて方向に、胴から頸までは横方向に削っている。

西江遺跡(58)



第164図 113号土壙墓供献土器実測図 ($\frac{1}{4}$)

外面は丹塗りである。

2は1よりやや大きくより球形に近い形をしている。この土器は本来完形となるものであるが、胴部が微細片となっていたため胴部は復原しえなかった。外面肩部分はよこ方向の、胴下半はたて方向のはけによる整形がみられる。内面は、1より粗いけずりを行っている。1と同様に底部に焼成後穿孔がみられるが、丹は塗られていない。

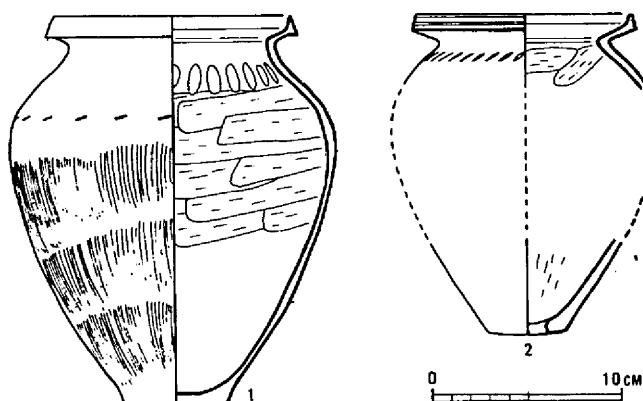
3・5はともに壺の底部で、共に焼成後穿孔されている。3の外面はたて方向のくしなでであり、内面はよこ方向に削っている。6は、内面はたて方向の削りを行っており、焼成後穿孔された可能性が強い。8・9は壺の口縁部で、8は、二重口縁の外面に6本の凹線を施しており、山陰地方に関連の深い土器である。9は、口縁端部が内傾して上下に肥厚するもので、やや大型の壺形土器となるものである。外面はたて方向にはけで整形しており、内面は頸部の下までたて方向に削っている。

7・10は壺の口縁部で、7では内面頸部までたて方向に削り、10ではよこ方向に削っている。4は壺の底部で、やや上げ底となり、外面はたて方向にはけでなでている。

113号主体に伴う土器のうち、壺はすべて焼成後穿孔されたものばかりで、供献という特別な意味をもたせたもので、113号主体の埋葬は弥生時代末期に行われたといえよう。

(5) 南端テラスの溝状遺構

南土壙墓群の存在する南端の帶状テラスは、岩盤が削平されて二段になっている。土壙墓群が形成

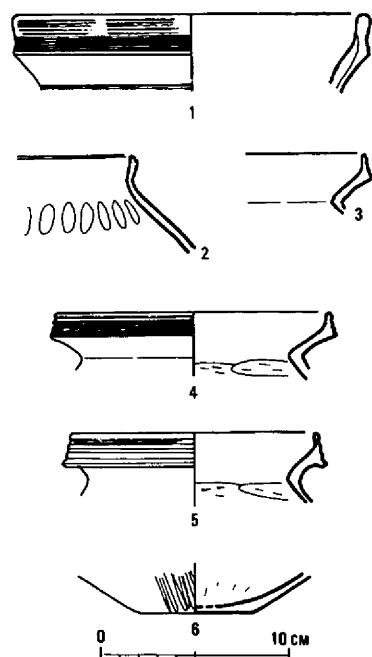
第165図 南土壤墓群溝肩出土土器実測図 ($\frac{1}{4}$)

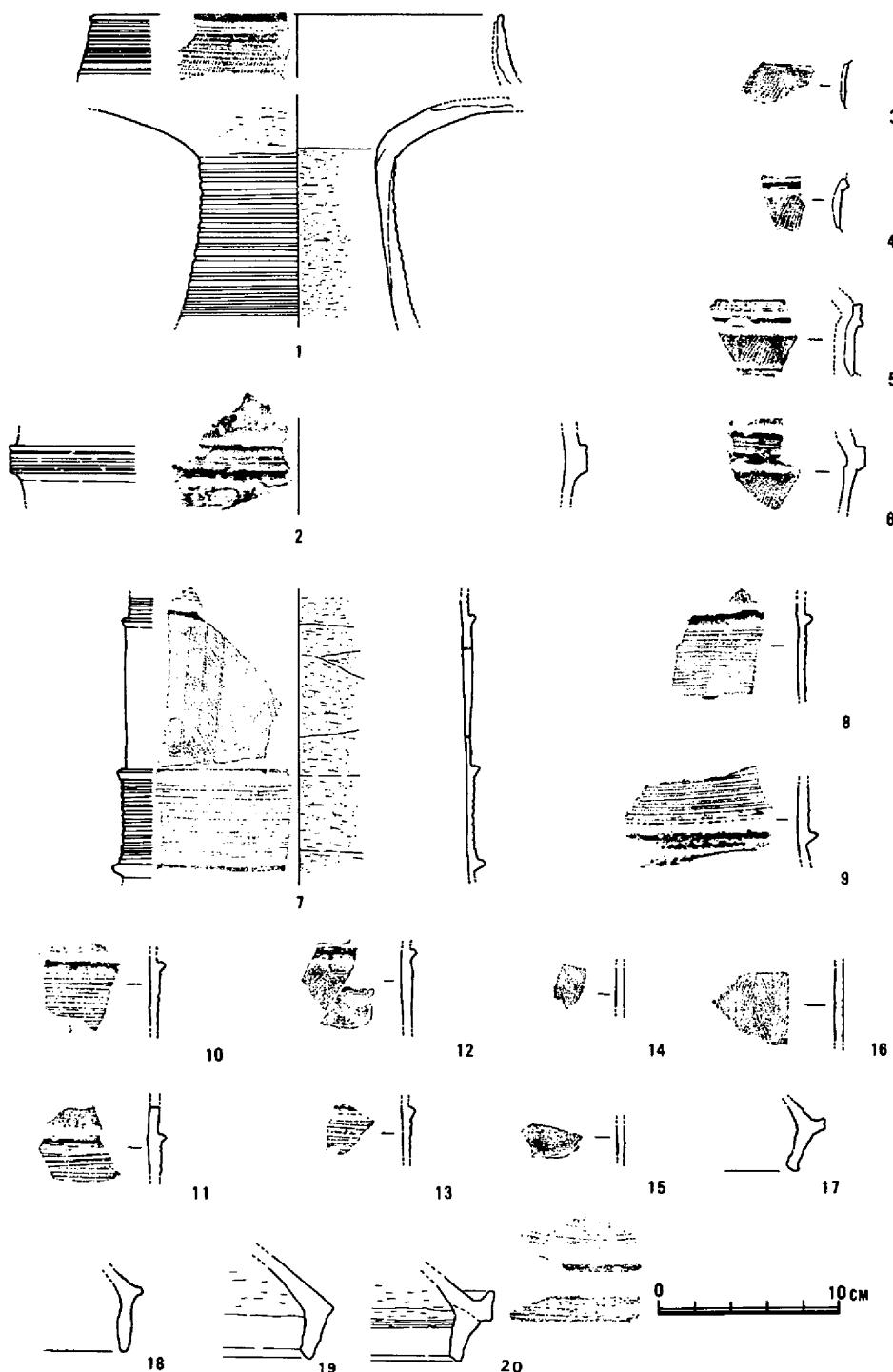
される以前にこの削平は行われており、上の段に幅 1.5m ・深さ $0.3\sim0.5\text{m}$ を測る溝状遺構が存在する。方形台状墓と南土壤墓群の間の大きな露岩のところでやや東にまがっている。この溝状遺構の性格は不明であるが、溝状遺構の南端近くの溝の肩部において2個の甕が検出された。

溝肩出土の土器(第165図)のうち、1は、口縁径 12.2cm ・胴の最大径 17.0cm ・高さ 20.8cm を測るもので、外面はたて方向にはけでなでられており、胴部にはヘラ先による刺突文が施こされ、内面は胴中ほどから頸部までよこ方向に削られ頸部には指頭圧痕がみられる。なお、外面には煤が付着している。2は、口縁径 11.6cm ・胴の最大径推定 14.0cm ・高さ推定 21.0cm を測るもので、口縁端部に2条の凹線が施されており、外面頸部にヘラ先による刺突文がみられる。内面は頸部まで削られている。底部は焼成後穿孔されているが、外面には煤の付着は認められない。1が煮沸具で、2が甕として使用されていたものと思われる。弥生時代後期後葉に属する土器であり、これらの土器が置かれた後に溝が埋まり、その後、この二段のテラスが墓地として利用されたものである。

(6) 北端部出土の特殊器台・特殊壺(第167図、図版46—2)

土壤墓群の北端部に所在した方形台状墓の周辺部から検出された特殊器台、特殊壺の破片がある。ほとんど北側の道路部分へのくずれた土の中で検出された。1は特殊壺の口縁部から頸部へかけての破片である。口縁部と頸部は直接接合することはできないが、同一個体であることがわかる。口縁部は屈曲して大きくひらいた受部から立ちあがりがみられる。口縁部外面には擬凹線文が施され、その上にヘラ描きによる鋸歯文を配している。鋸歯文の中には斜線を配している。頸部は長頸になっていて、外面にはハケメの上から横位の太いヘラ描き沈線を密に配している。断面の観察では粘土を重ねるにあたって幅広く重なるようにつくられているのがわかる。破片から復原した口縁部の直径は 22cm である。2~6は胴部の破片である。2の破片から復原した胴部の直径は 32cm を測る。胴部には断面方形の凸帯が2条あって、その間に鋸歯文を配している。丹塗りは外面に施されているが、口縁

第166図 南端テラス出土土器実測図 ($\frac{1}{4}$)



第167図 特殊器台・特殊壺実測図 (1/4)

の受部には施されていない。胴部内面はヘラ削りが施され薄くなっているが、颈部はあまり削らず器壁が厚い。口縁の受部下面では丹塗り後ヘラ削りをかるく行っている。底部の破片は検出されていない。胎土には雲母、微砂を含み、茶褐色を呈する。

7～15は特殊器台片である。円筒部には断面三角形様の凸帯がみられる。間帯と文様帯では器壁の厚さが違っていて、間帯は文様帯よりもさらに粘土を貼り付けて、端を肥厚し拡張した如くみられる。文様帯は細かいハケメをうすく縦に施し、丹塗りをしたあと、細いヘラで描いた縦の綾杉文を施し、さらに縦の長方形の透しを配している。沈線は幅0.3mm、深さ0.5mm位である。綾杉文は16のように連続するものと7のように単独のものがある。7の場合は斜線の角度を変えただけで方向を変えている。描き方になっていていわゆる綾杉文ではない。間帯はきわめて細い縦位のハケメの上から太いヘラ描きの沈線を横位に施している。沈線は幅2mm、深さ0.5mm位である。外面には全体に丹塗りが施されている。口縁部と脚部を欠失している。内面には横位のヘラ削りが施されている。文様帯は厚さ3mm、間帯は約5mmを測る。7の破片から復原した円筒部の直径は21cmである。7では文様帯の幅7.7cm、間帯の幅5.8cmを測る。胎土には砂粒、黒雲母を含み、ややすくすんだ黄褐色～茶褐色を呈する。

17は特殊器台の脚部の小破片である。直立部の断面はやや角ばっている。屈折部の張り出しあは断面方形で外面に凹線がある。内面には横位のヘラ削りが施されている。丹塗りは屈折部の凸帯まで施されている。胎土には雲母、微砂を含み、帶黄茶褐色を呈する。断面は灰色を呈する。18は特殊器台の脚部の小破片である。直立部の断面はやや丸みをもっている。屈折部の張り出しあは小さく、断面はやや丸い。内面には横位のヘラ削りが施されている。丹塗りは屈折部の凸帯まで施されている。脚の直立部下端に丹が付着していて製作時についたものと推測される。胎土は17と同様である。19、20は南に寄った地点で検出されたものである。19は脚部の屈折部の張り出しあは小さい。丹塗りが内側の屈折部まで施されている。20は脚部の屈折部には凸帯を配している。凸帯の外面には「擬凹線文」を施している。脚端部はやや角ばる。

1～6の特殊壺と7～15の特殊器台はセットになるものと推定される。今までのところまったく同じものは出土していない。特殊器台のなかでは古い形態に属する。

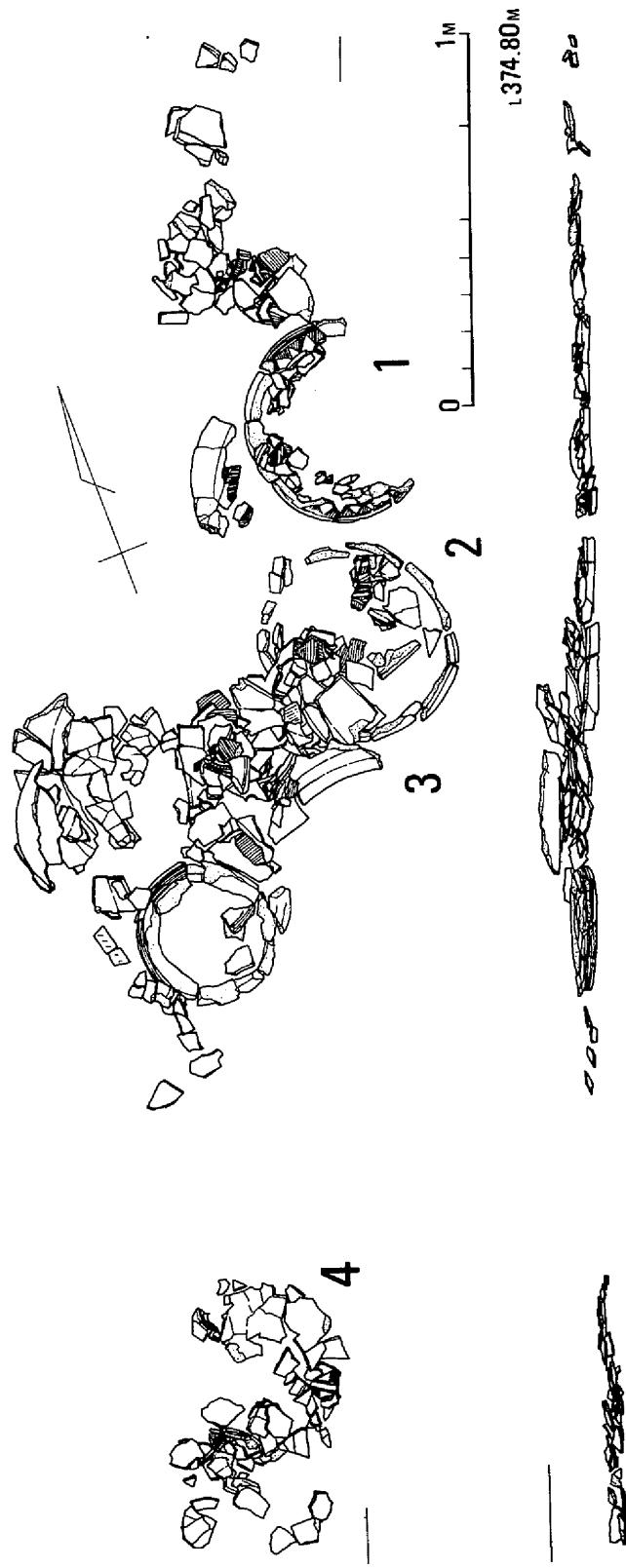
(7) 特殊器台と特殊壺の出土状況 (第168図、図版35)

特殊器台と特殊壺はそれぞれ4個体分と若干の別個体の破片がある。脚部は2基が固定されたまま残り、もう1基は大きな脚部の破片が他の器台に接して残っている。3基はそれぞれ接してほぼ南北に置き並べられている。北からそれぞれ1、2、3と番号を付けて説明する。先に日本考古学年報28で西江遺跡の概報を出した際、3個体分としたが、整理作業によって4個体分あることが判明した。少し南にずれて検出されたものを3の円筒部と考えていたが、脚部に接合するものは2の下敷について、南のものは別個体であることがわかり4としたい。

1は特殊器台の脚部がほぼ円形に残り、胴部および口縁部は北へ倒れている。特殊壺の破片は口縁部付近に若干と脚部の北に存在する。

2は特殊器台の脚部がほぼ円形に残り、西へ倒れている。倒漬した状況がほぼ残っている。器台の

西江遺跡(58)



第168図 特殊器台・特殊壺出土状況実測図

口縁部の上に特殊壺の胴部がのった状況で検出された。円筒部はかなり細片となり周囲へ散っている。

3は特殊器台の脚部が2へ倒れかかった状況で一部残り、円筒部及び口縁部は2の下敷になって存在する。特殊壺の破片もある。

4は南へずれて胴部の半周分位が文様を下にして張り付いた状況で出土している。口縁部及び脚部はまとまっていない。破片の中には特殊壺のものもある。

器台の所在するところは、ほぼ平坦な状況になっているが、東側は傾斜面になっていて多量の破片が流れている。特に1と4の破片が流れている。以上の状況から3基の特殊器台は南北に並んで立っていて、それぞれ特殊壺が上にのっていたと推定される。さらに移動しているが、4の出土状況は4基が置き並べられていたと考えることが妥当である。

(8) 特殊器台と特殊壺 (第169~175図、図版43~48)

特殊器台は並べて置かれていた4基と他に若干の破片があり、数基が存在したと推測される。並べられていた4基は形態が類似している。胴部から脚部へは大きくひらいて下方に拡張する直立部となる。裾部には鋸歯文を配している。胴部では円筒状を呈し、凸帯で区画し、文様帶と間帯を配している。文様帶には「巴形」と「三角形」の透し孔を配している。間帯は横位の「擬凹線状」を呈している。この「擬凹線状」のものは凹みの一方が深くだんだん浅くなって凸部に移る繰り返しになっていることから木目のあらい板目によるものと推測される。文様帶の幅は間帯よりやや広い。凸帯は断面が方形のものと半円形のものとがみられる。凸帯は胴部に沈線を引いてその上に貼り付けている。文様はヘラ描きされ幅0.5~0.7mm、深さ0.5mm位と比較的細い。口縁部は受部が拡張し、上方へ大きく立ちあがる。口縁立上部の外面には間帯と同じ「擬凹線状」の施文がある。大きさは脚部の直径約50cm高さ約1mを測る。外面には脚部の直立部をのぞいて丹塗りが行われている。文様の施文と透し孔は最終段階で行われている。内面は横位のヘラ削りが施され、器壁は厚さ7mm位になっている。胎土には砂粒を多く含み、黒雲母を含んで一般の土器よりもやや灰味をおびた黄褐色~茶褐色を呈する。それぞれに特殊壺が伴うが若干の違いがみられる。共通している点は大きく張った胴部に凸帯を配し、長い頸部から口縁部は大きく拡張して、立ちあがりがみられる。胴部の凸帯と凸帯の間には鋸歯文をめぐらしている。頸部と口縁立上部には器台の間帯に施されたのと同じ「擬凹線状」の施文がある。外面には丹塗りが施されている。器台にのせた場合、胴部下半で器台の口縁部によってかくれる部分は最終段階でヘラ削りされている。ヘラ削りと同時に底部に円形の穿孔をしているものもある。内面は頸部上端までヘラ削りされて、器壁はかなり薄い。

特殊器台と特殊壺はそれぞれ若干の違いがみられるので以下特徴点について述べる。

1の特殊器台(第169図、図版43)は脚部直立部分の高さが4.2cmを測り、端部の断面は丸みをもっているがやや方形を呈する。脚の裾部は断面がまぼこ形の凸帯から高さ4.5cm、幅5.6cmではり出し、脚のはり出し部の凸帯へ移る。裾部には7本の擬凹線文が施され、その後に大きな鋸歯文を配し、鋸歯文に関係なく4方向へ巴形の透しを配している。文様帶の文様は巴形の透しから次の巴形の透しまでS字状にヘラ描きし、中央部に斜線を施し、両側を2本の線で縁どっている。斜線部分は中央部分

が幅広く、両端がほそくなっている。上と下に2個の三角形の透しを配し、2辺にヘラ描き沈線を数本配している。この文様の繰返しがみられる。受部直下には大きな鋸歯文を配している。鋸歯文の個々には左下がりの斜線を施している。口縁部の立上部は9.5cmを測り、受部の厚さは1.1cmを測る。屈折部から受部の張り出しあは4.5cmである。器台の大きさは口縁部の直径48cm、胴部の直径約43.5cm、脚端部の復原直径49.6cm、復原高約86cmである。

1の特殊壺(第174図、図版47)の残存は余りよくないが、口縁部では3分の1位復原できる。口縁部の直立部は6.7cmを測る。外面には浅い「擬凹線文」が施されている。口縁端部の上面には1条の沈線が施されている。口縁部受部の外面には縦位のハケメが施されているが、丹塗りされていない。立上部の内面は指圧痕が多い。立上部から受部へかけて横位のハケメが施され、立上部には後で若干左方向へヘラ削りしている。胴部はそろばん玉形に張って、2条の凸帯を配する。凸帯には凹線文を配し、上位の凸帯の直上には「擬凹線文」を施している。凸帯の間には鋸歯文を配している。胴部下半には若干交差するが縦位のハケメを施している。胴部内面は横位のヘラ削りが施されている。外面には全体に丹塗りされたあと底部周辺はヘラ削りが施されている。胴部の復原最大径は57cmを測る。

2の特殊器台(第170図、図版44)は脚部の直立部分で高さ5cmを測り、端部断面はやや丸みをもっている。脚の裾部は断面がかまぼこ形の凸帯から高さ3.5cm、幅5.3cmではり出し、脚の張り出し部の凸帯へうつる。裾部は横なでされているだけで施文はない。脚の直立部には丹塗りされていない。文様帶の文様は巴形の透しからS字文が幅広くめぐり、左下りの斜線を施した中央部に1本のヘラ描き沈線を配している。巴形の透しとS字文にあわせて、数本の沈線をめぐらす。ところによっては両方の沈線がそれぞれ1本ずつあうようになって直弧文に近いものと、一方の線が平行して並び、他は外方の1本線へつきあたるようになった部分がある。S字文と巴形の曲線にあわせてひずんだ三角形の透しを上下に配している。S字文の斜線部の中央へ配する1本のヘラ描きがされていない部分もある。間帯は他のものと同様である。凸帯は幅約9mm、高さ6mmで、断面はかまぼこ形を呈している。胴部の内面は横位のヘラ削りが施されていて、厚さは約5mmとうすい。口縁受部直下には小さな鋸歯文を配し、文様にあわせて三角形の透しを配している。鋸歯文はかなり大きさが異り、左下がりの斜線が施されている。受部は若干斜めになるが外方へ4.3cmはり出す。受部外面にも丹塗りされている。口縁部の立上部は9.5cmを測り、受部の厚さは7mmを測る。口縁立上部の外面は他のものと同じで「擬凹線文」を施している。口縁端部は若干張り出し、断面が方形で、上面はわずかな凹みがめぐる。口縁部の内面の状況、接合等は1と同じである。受部の内面下半には横位のヘラ削りが施されている。胎土には直径2~3mmの砂粒を含んでいる。器台の大きさは口縁部の復原直径48.8cm、胴部の復原直径約41cm、脚端部の復原直径49.6cm、復原高85cmである。

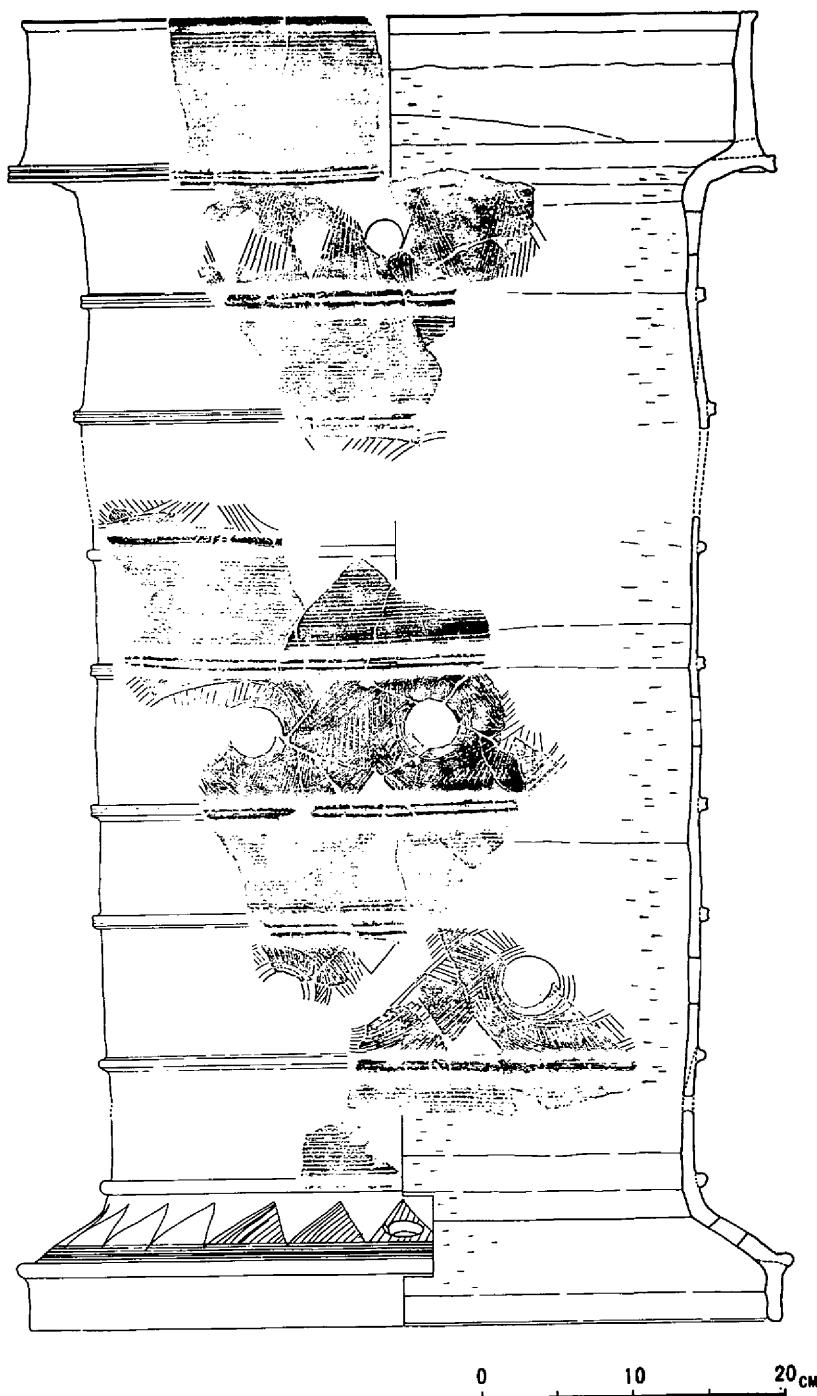
2の特殊壺(第174図)と推定されるものは、口縁部が約半分復原できる。口縁はほぼ直立し、立ちあがりが7cm、受部は厚さ9mmである。口縁端部の断面はやや外方へ張り出し、丸みをもっている。立上部の外面には「擬凹線文」が施されている。受部はほぼ水平に7cm広がる。外面には薄く丹塗りされているが、後で縦位のヘラ削りをかるく行っているため削りとられている。口縁立上部は受部へのせる形で接合されていて、接合部の内面には指圧痕が残っている。内面は左方向に横なでされ、う

すぐ丹塗りされている。受部の内面は丹塗りされていない。受部の接合は6cm位の重なりをもつようふかく重っている。受部の口縁直下では重なりが浅い。合計3個の接合で受部をつくっている。頸部上端の直径は小さく、頸部は長くて、下方へひろがる形を呈する。頸部の外面には何段かにわたって「擬凹線文」が施されている。内面は上部に縦位、下半部には横位のヘラ削りが施されている。胴部は器台の口縁にのった状況で検出された。胴の形はそろばん玉形を呈し、胴部中央には自然にくらませたような凸帯を2条配している。凸帯の間には横位のなでが施されているだけで施文はない。凸帯の外面には器台の間帯と同じ「擬凹線文」を横位に施している。上の凸帯の上側にも同じ施文があり、その上位には小さな列点文をめぐらしている。肩部では上半部が右下がりのハケメを施し、その後で下半分に左下がりのハケメを施している。胴部下半部は斜位のハケメが施されている。丹塗りは粘土をつみあげるごとに行っていて、断面にはうすく斜めに丹がみとめられる。胴部の底部周辺は丹塗り後ヘラ削りされている。また、口縁部へのついた痕跡がみられる。下部の凸帯の約2cm下方に幅1cm位の磨滅した部分が輪状にめぐる。内面は横位のヘラ削りが施されて、器壁は薄い。大きさは胴部の復原直径52.6cm、口縁部の復原直径33.8cmを測る。胴部には黒斑がある。

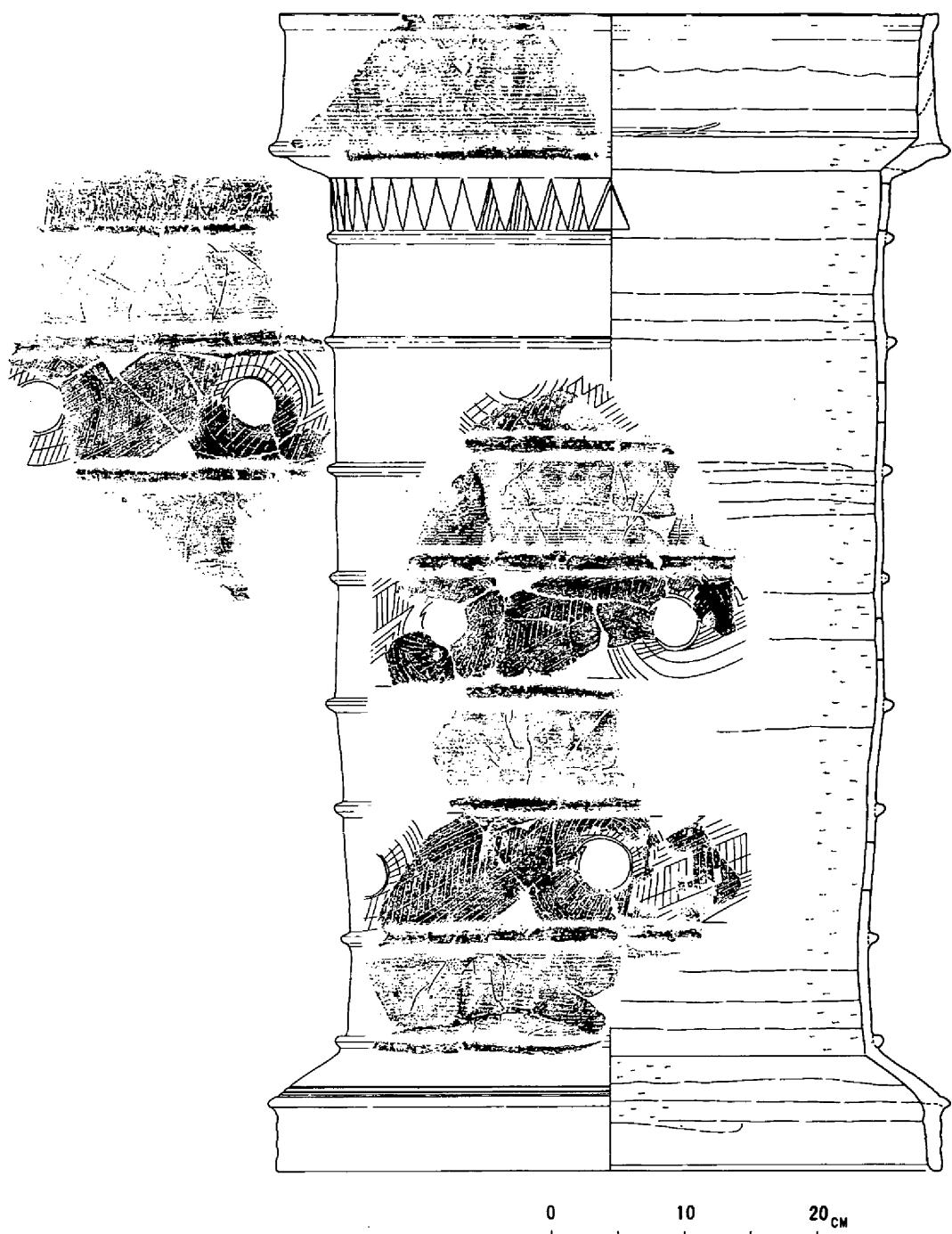
3の特殊器台(第171図、図版45)は脚部の直立部の高さが5.3cmを測り、端部の断面は内側に若干丸みをもっているがやや方形を呈する。屈折部には、1、2とも断面がかまぼこ形の凸帯を配するが、3では断面方形の凸帯を配している。外面には太い凹みがめぐる。凸帯の上位には4条の凹線をめぐらしている。裾部には大きな鋸歯文を配していて透しはない。ヘラ描きの線は他のものに比較して細い。胴部へうつるくびれ部には断面がかまぼこ形の凸帯を配している。内面には裾部まで横位のヘラ削りが施されている。丹塗りは裾部端の凸帯まで施されている。文様は巴形の透しの間にS字文を配している。S字文の中央に2本の線を配して、その上下へ各々異った方向の斜線を配している。中央の2本線にかこまれた間は無文である。S字状文と巴形の曲線にあわせてひずんだ形の三角形の透しを上下へ配している。間帯は他のものと同様である。凸帯の断面は丸みがやや三角形に近い。受部の直下には大きな鋸歯文を配している。また、円形の透しも配されている。受部は横に3cm張り出す。口縁部の立上部は8.7cmを測り、受部の厚さは8mmを測る。立上部の外面は他のものと同じで「擬凹線文」を施している。口縁端部は若干張り出す。口縁上面には1本の沈線がめぐる。受部の端は外方へはり出し凸帯状を呈している。この断面がかまぼこ形である。立上部の内面は横なでされ、受部の内面は横位のヘラ削りが施されている。胴部には横位のヘラ削りが施されている。丹塗りは口縁端部内面に少しかかる程度まで施されているが内面には及んでいない。胴部の器壁は5mmとうすい。胎土には直径2mm位の砂粒を含んでいる。器台の大きさは口縁部の復原直径49.9cm、胴部の復原直径約43.5cm、脚端部の復原直径47cmである。

3と推定される特殊壺(第175図、図版48)は口縁部が完全に復原され、頸部、胴部もかなりそろっている。口縁はわずかに外方へひらき、端部は外方へ若干はり出す。上面には1本の凹線がめぐる。立上部の外面には「擬凹線文」が施されている。受部の端は外方へはり出し、やや薄くなる。立上部の高さ7.2cm、受部の厚さ7cmを測る。受部は頸部から11.5cm外方へ張り出している。立上部の内面には指圧痕が残り、下半部から受部内面へかけてはヘラ削りされている。そのあと受部には横位

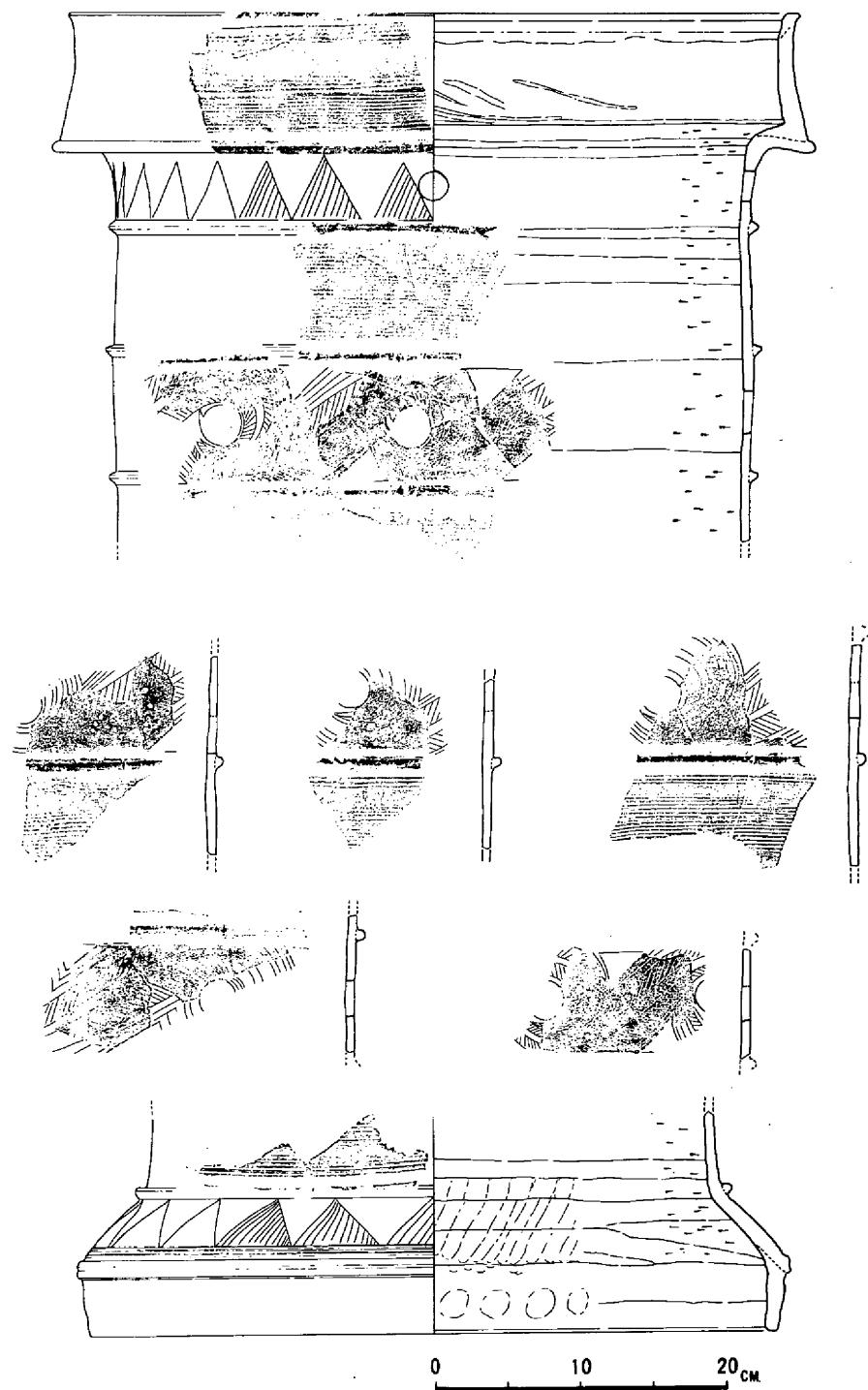
西江遺跡(58)



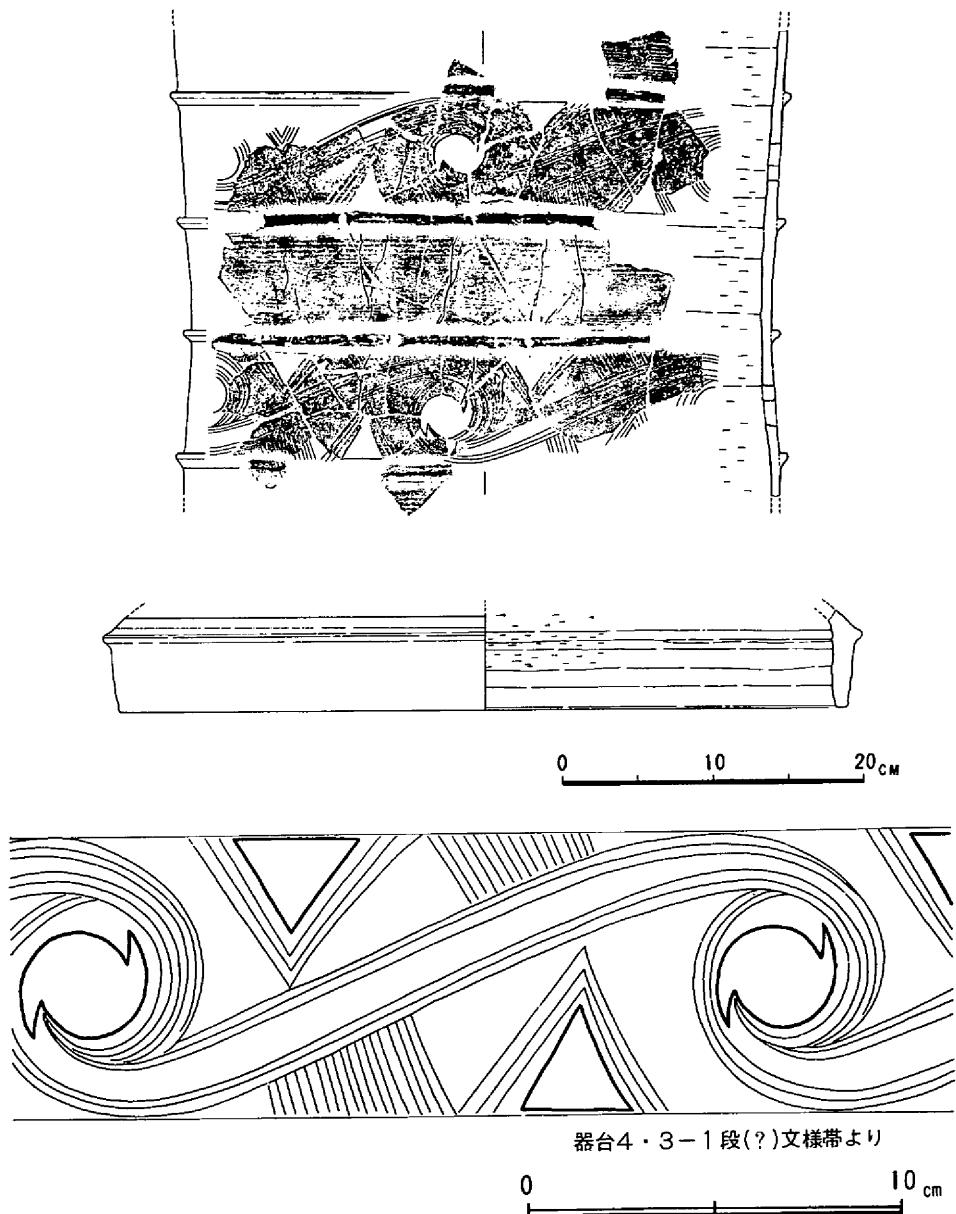
第169図 特殊器台1実測図 ($\frac{1}{5}$)



第170図 特殊器台2実測図 ($\frac{1}{5}$)

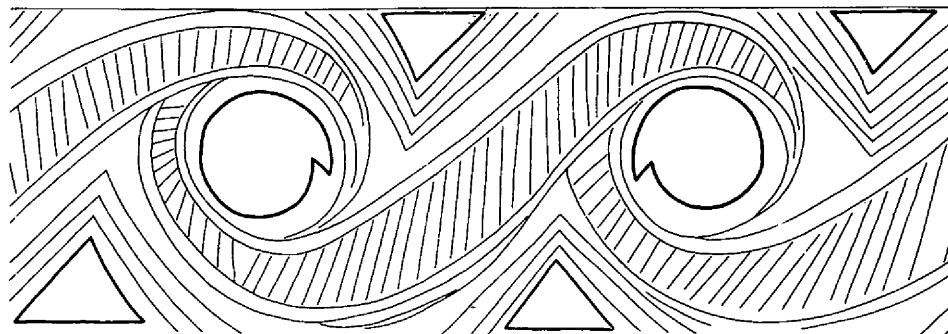


第171図 特殊器台3実測図 ($\frac{1}{5}$)

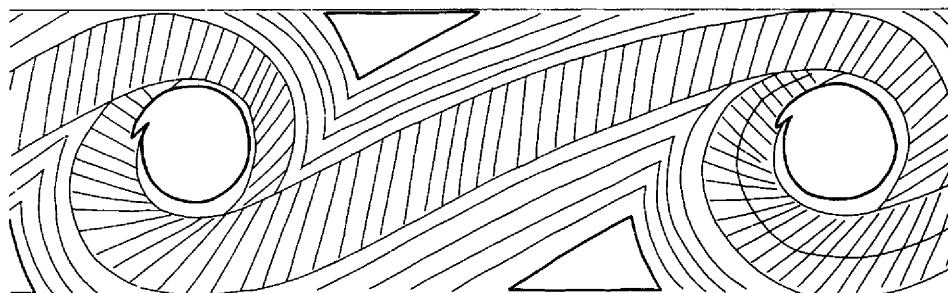


第172図 (上) 特殊器台4実測図
(下) 特殊器台胴部文様帶連続「S」字状文展図(その1)

西江遺跡(58)

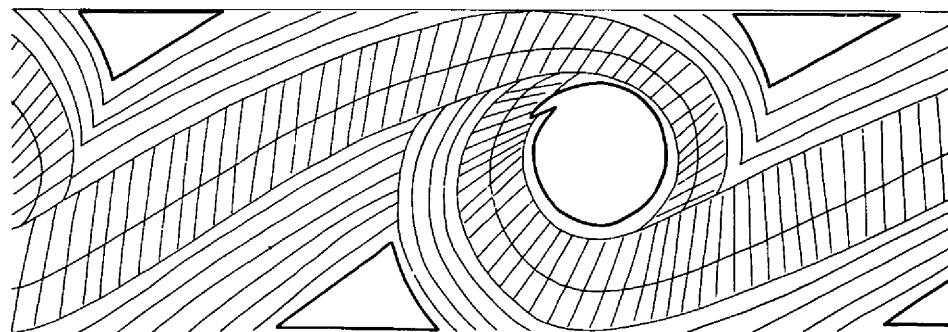


器台1 第2段文様帶より



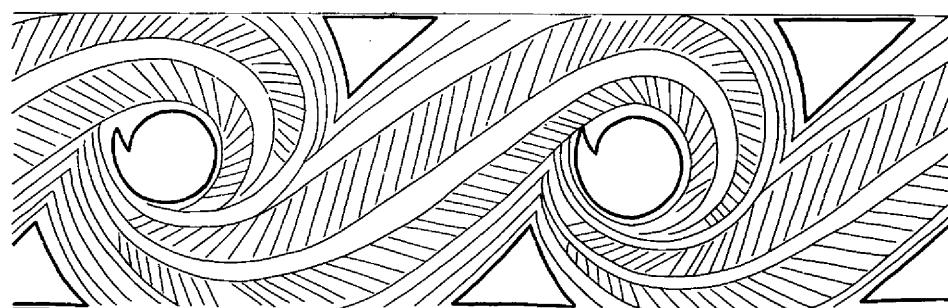
2

器台2 第2段文様帶より



同上 第1段文様帶より

3



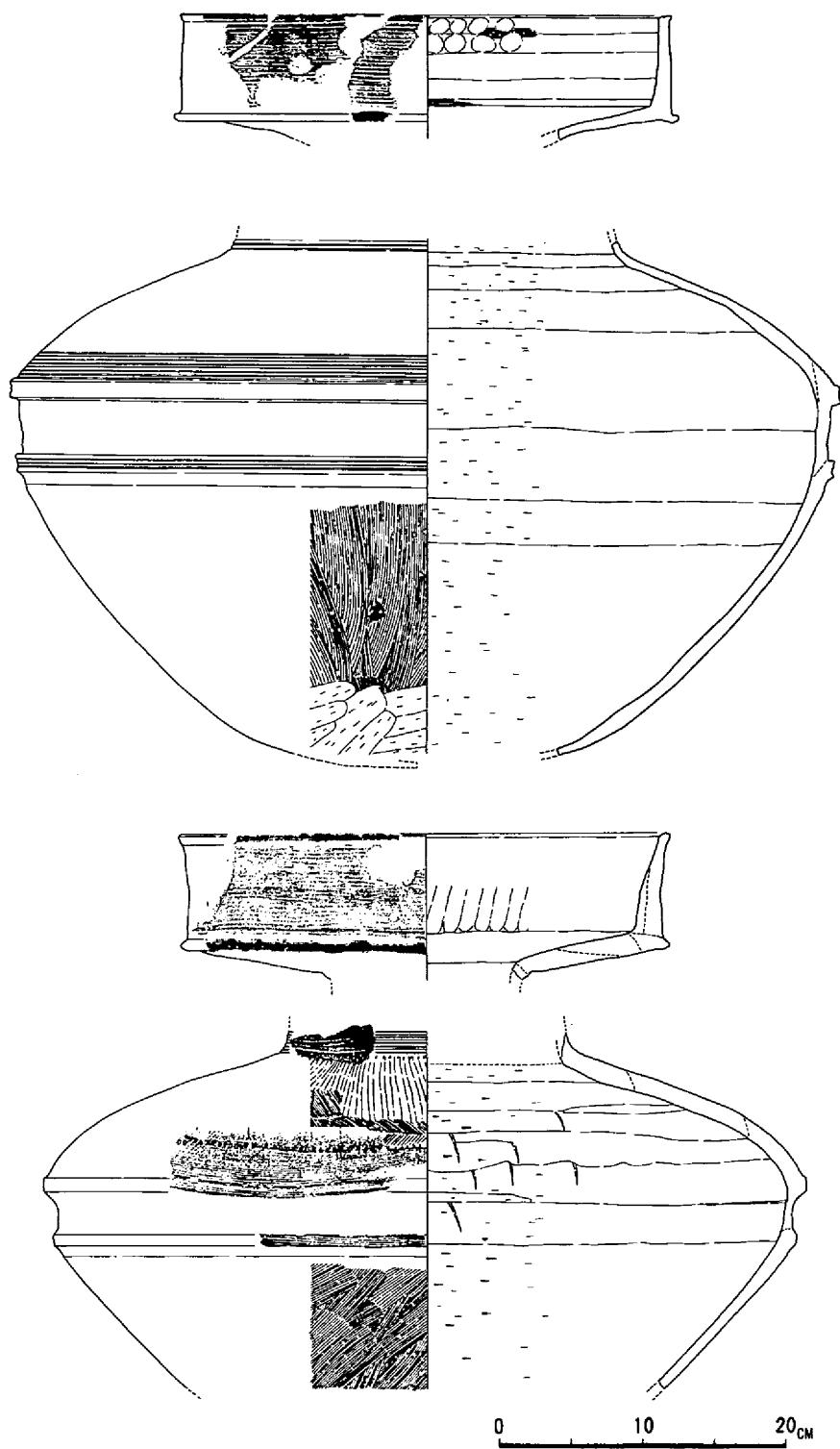
0

10 cm

器台3 第3段文様帶より

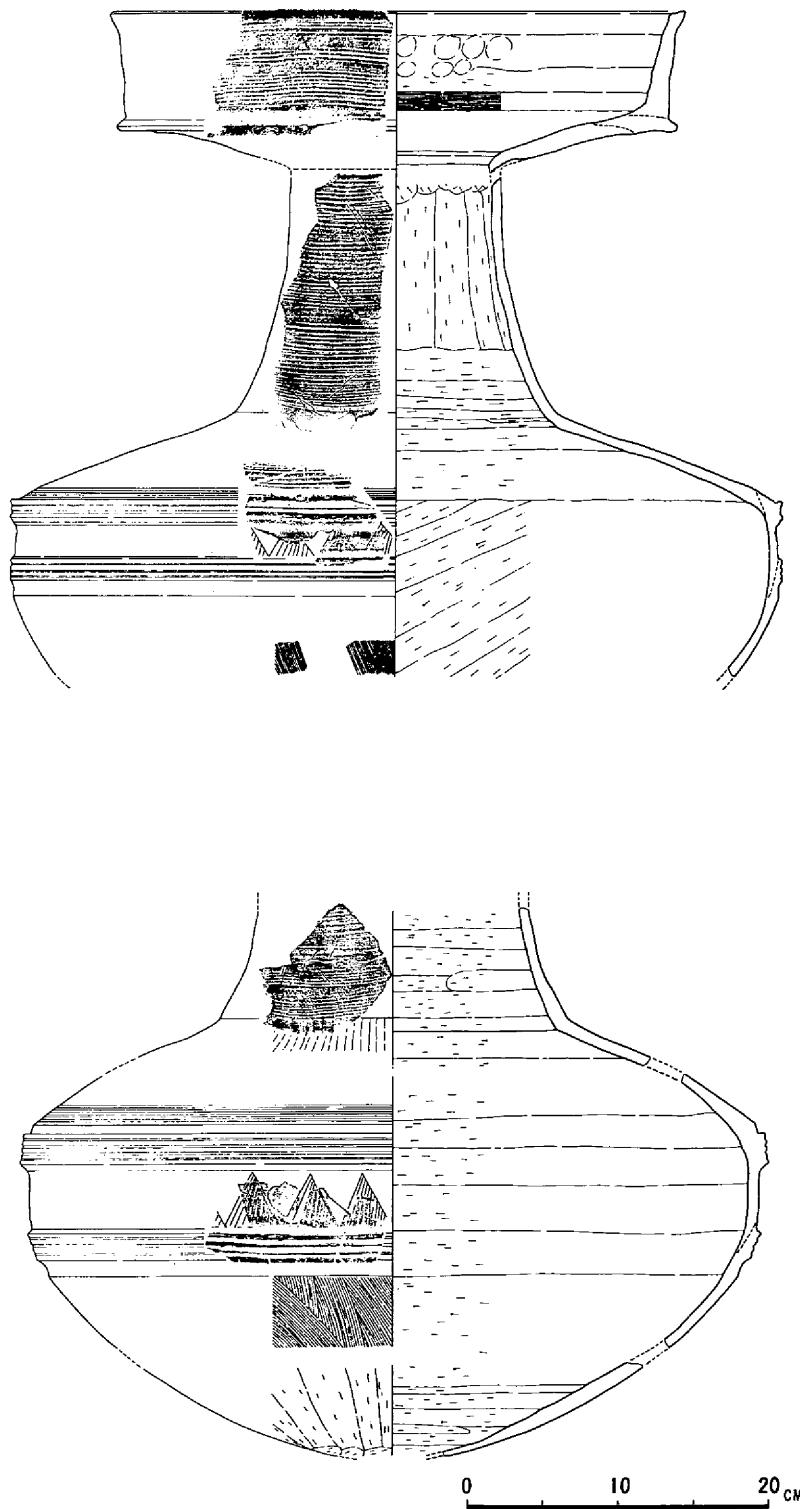
第173図 特殊器台胴部文様帶連続「S」字状文展開図(その2)

西江遺跡(58)



第174図 特殊壺1(上)・同2(下) 実測図 ($\frac{1}{5}$)

西江遺跡(58)



第175図 特殊壺3(上)・同4(下) 実測図($\frac{1}{5}$)

のハケメを施している。受部の外面では横位のヘラ削りを施したあとうすく丹塗りされている。受部の上端は細く、長い頸部の下はひろがる。頸部には「擬凹線文」が施されている。内面は縦位のヘラ削りが施されている。胴部付近では横位のヘラ削りである。そのため、器壁は5mmとうすい。胴部の形はそろばん玉形を呈し、胴部には高さの低い断面方形の凸帯を2条配している。凸帯の外面には2～3条の凹線をめぐらしている。凸帯の間には鋸歯文を配している。上の凸帯の上位には約5本の「擬凹線文」を配している。肩部は平らに整形されている。胴部下半にはハケメを施し、丹塗りされている。その後で底部付近はヘラ削りが施されている。また、この個体では底部に直径約4.5cmの円形の穿孔がヘラ削りと同時に行われている。内面はすべて横位のヘラ削りが施されている。大きさは口縁部の直径約38cm、胴部の復原直径51cmを測る。

4の特殊器台(第172図、図版46-1)はかなりながれていて胴部の破片が中心となり、他の破片は少ない。文様帶の文様は他の3基とはかなりことなっている。巴形の透しの間にS字文を配しているが、他と違って3本線2組をもって描き、上と下に2個の三角形の透しを配している。三角形の2方には3本の線で縁どりされている。三角形の透しの横には上位のものは右、下位のものは左へS字文の外面の線から凸帯まで斜線を配している。間帯のものと同様である。巴形には2個の尾部が存在し、他のものとは異っている。内面は横位のヘラ削りが施されている。凸帯は断面がかまぼこ形を呈する。器台の大きさは胴部の復原直径38～40cmである。4に伴うと推定される脚部の破片がある(第172図中段)。

4に伴うと推定される特殊壺(第175図)は胴部の形がそろばん玉形を呈し、胴部には高さの低い凸帯を2条めぐらす。凸帯は幅が広く、外面には上段が4条、下段が3条の太い凹線を配している。凸帯の間には大きな鋸歯文を配している。鋸歯文には左下がりの斜線を施している。胴部下半は斜位のハケメを施している。胴部へ丹塗りが行われたあと、底部周辺はヘラ削りされている。内面は横位のヘラ削りが行われて薄くなっている。

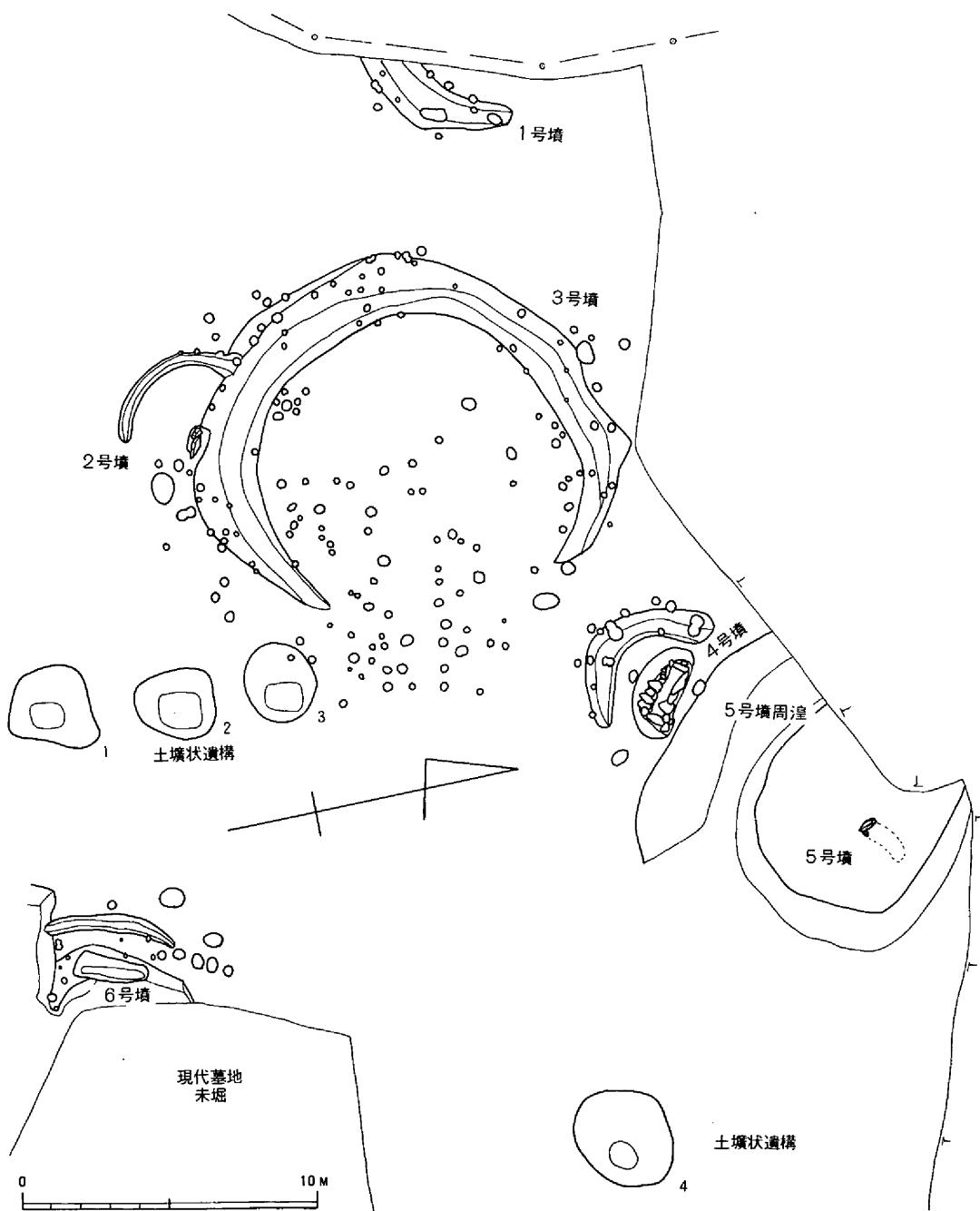
4基の特殊器台と特殊壺は並べて立てられていたものであり、同時期のものと推測されるが文様などにそれぞれ違いがみとめられた。1～3は向木見遺跡出土のもの(註17)に類似している。4は宮山遺跡出土のもの(註18)に類似している点も多いが柳坪遺跡出土のものにより類似点がみられる。以上の状況から同時期の諸類型を把握することができる。

(9) 安信丘陵部調査区の古墳群(第176図)

安信丘陵部調査区は西から東へのびる尾根上にあり、この尾根の稜線上において6基の古墳を検出した。いずれもあまり急な斜面ではないけれども封土はほとんど流失しており、調査前の表面観察では確認しえなかつたのである。3・5号墳はトレンチ掘り下げ中にその周溝の一部を検出したものであり、1・2・4・6号墳は表土を全面にわたって削除したのちに初めて検出したものである。

この尾根の上方へ行った所(用地幅杭から西へ50m)には、横穴式石室をもつ古墳があり、東へ行くと尾根頂部(東幅杭から東へ50m)には2基の円墳(径15～20m)が現存している。他にも牧舎の建設の際箱式石棺が5基確認されている。

西江遺跡(58)



第176図 安信丘陵部調査区遺構配置図(古墳及び土壤状遺構)

1号墳(第180図)

安信調査区の西端にあり、その周溝の一部が用地内にかかっている。墳丘は全く残存していない。周溝も斜面の下方の部分は消失して三日月状に残るのみである。周溝から推定して径10mの墳丘がかつて存在していたものと思われる。この古墳に伴う遺物は存在しないが、後述の3号墳と同規模のものであり、相前後する時期につくられたものであろう。

2号墳(第177図)

1号墳の南東17mの所にあるが、墳丘は残存していなかった。墳丘径は5mで、幅0.5m・深さは最深部で0.4mの周溝がめぐっている古墳であるが、1号墳同様三日月形の周溝が残存し、内部主体は箱式石棺であったと思われるが、その大部分は周溝の一部と共に3号墳の周溝によって切られている。内部主体の箱式石棺の主軸方向は、NWW—S E Eであろう。遺物は存在しないが、3号墳より古い時期につくられた古墳である。

3号墳(第177図)

1号墳の南17mの所にあり、墳丘の大部分・内部主体および周溝の一部は流失していた。墳丘盛土の一部が残っており、その高さは約0.6mを測る。墳丘径は10.5m・周溝幅2m・周溝最深部は約0.6mを測る。墳丘盛土中には、縄文時代晩期と弥生時代前期の土器片および特殊器台の破片が含まれていた。縄文時代晩期・弥生時代前期の遺構は安信調査区では検出していない。特殊器台片は、3号墳の東下方につくられていた弥生時代の北土墳墓群に伴う特殊器台の破片で、盛土を行うのに斜面の下方からも土を集めたときに混入したものであろう。

第183図の1～4は、墳丘の西側の周溝底にかためて置かれていた土師器である。

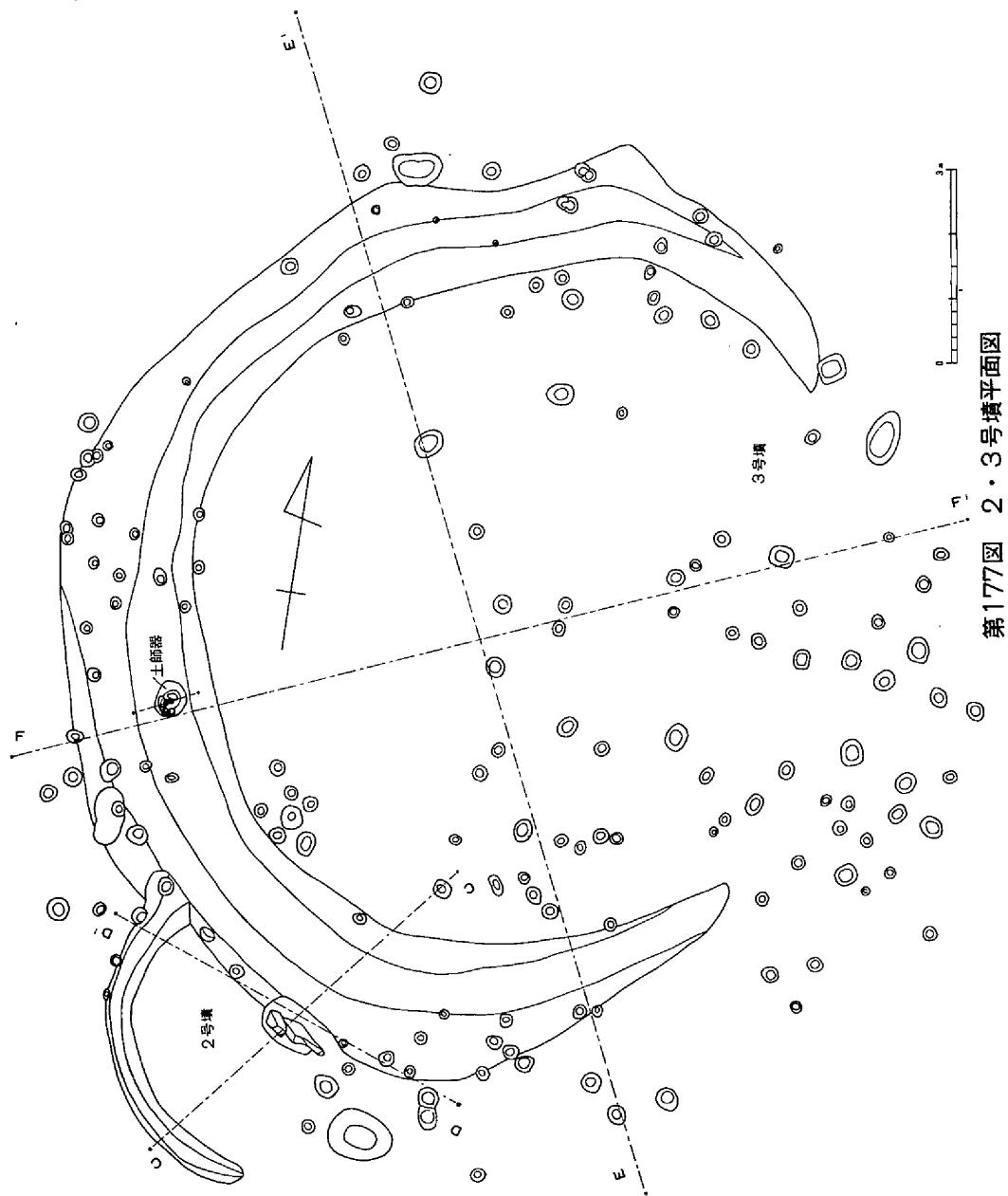
1は、杯部の径15.6cm・高さ6.4cm・脚部の高さ0.6cm・裾径9.6cmを測る高杯である。杯部は椀状になっていて、内面はきれいに仕上げられているが、放射状にヘラ磨きされた痕が残っている。外面は肩に段を設け、この段の直上はヘラで削っており杯部の底面もヘラ削りで、段の直下には横位のハケメがみられる。脚部はやや開きながら下降し、端部は「へ」字状に曲って大きく外に開いている。脚部に指頭圧痕がみられ、透し孔はない。

2は、口縁径14.6cm・杯部の高さ5cm・脚の高さ4.4cm・裾径9.2cmを測る高杯である。1に比して、焼成が少し悪く、整形もやや粗である。杯部は椀状をなし、内面はよこ方向にくいでなでている。外面(杯部・脚部とも)粘土張り合せ部分に指頭圧痕がみられる。脚部は、やや柱状部分が長く裾を大きく開き、端部が少し上方にそっている。

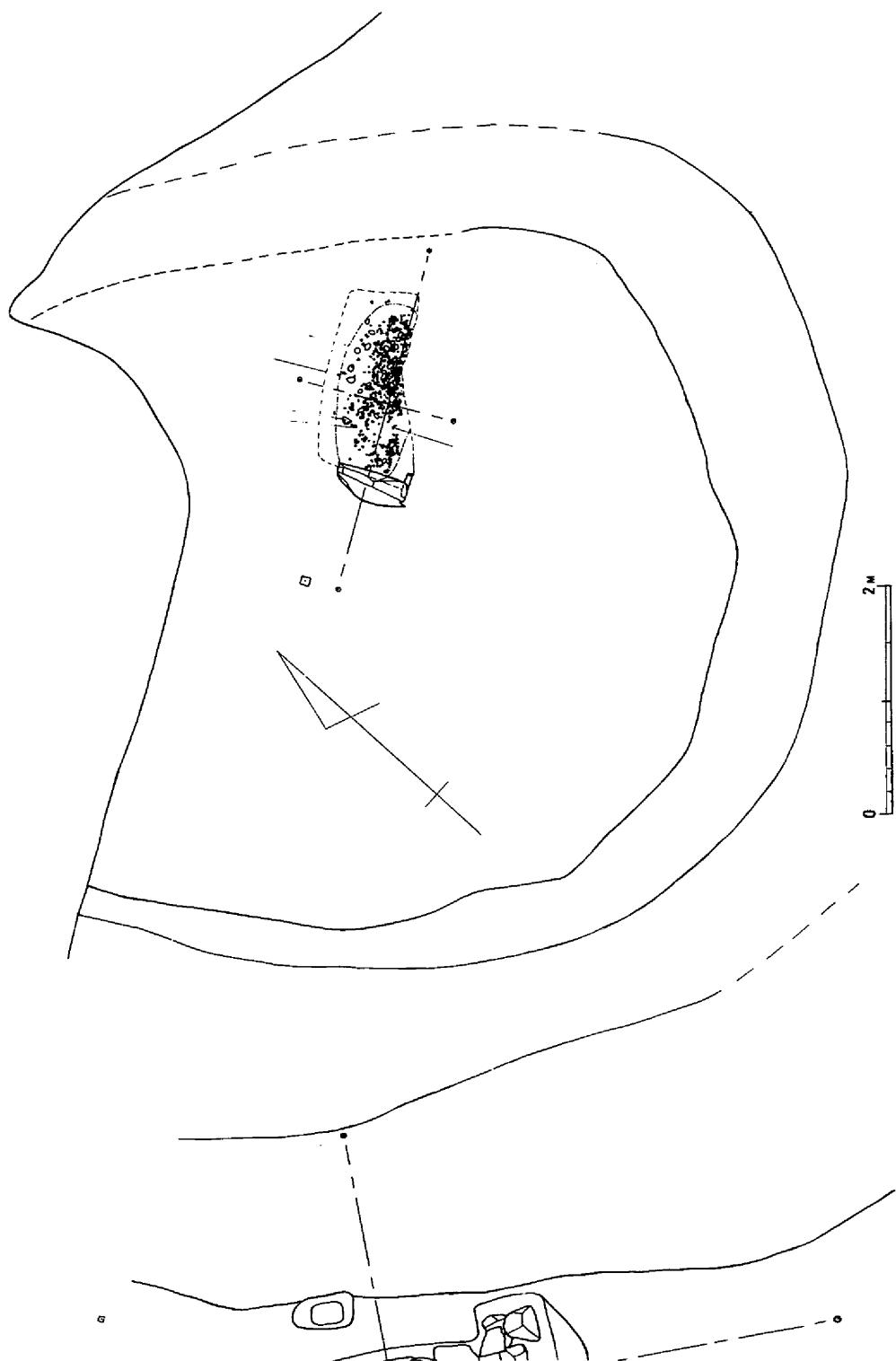
3は、口縁径11.4cm・高さ6.6cmを測る小型の鉢である。内面はなめらかに仕上げられており、外面はたて方向にくいでなでた後にかなり荒く削っている。底は丸底である。

4は、口縁径20.4cm・高さ10.4cmを測るかなり大型の鉢である。整形はかなり粗であり、焼成も2の高杯同様少し悪い。外面の上3分の1はヘラでひっかくように斜め下方に向かって削った後に指で無難作に押えていて、下半分は荒く削っている。内面は外面よりもきれいに仕上げているが下半分は互いに交差するように数本の削りがみられる。

これらの土師器は、5世紀後半の時期のものであり、3号墳の築造の時期を示すものである。

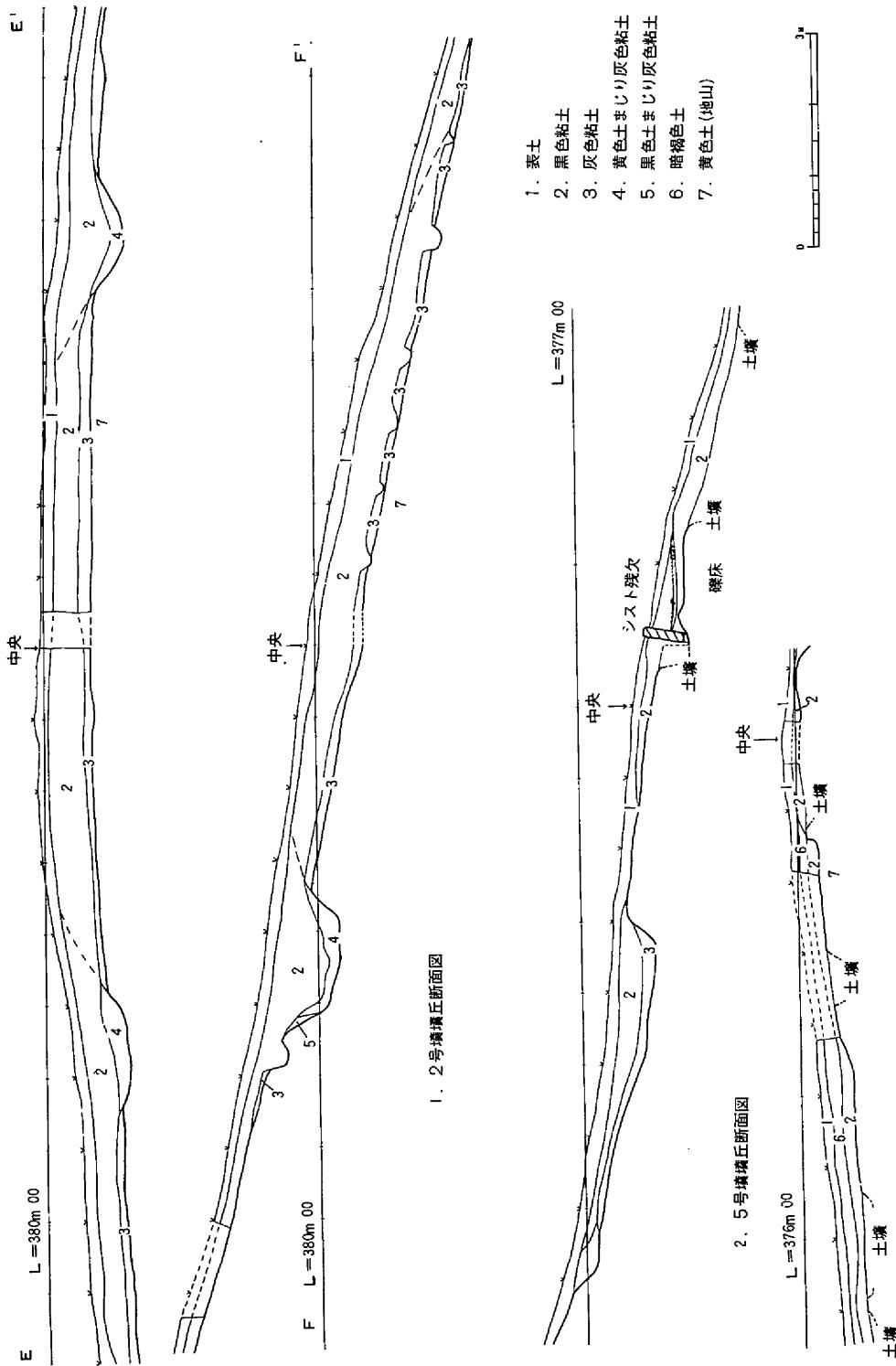


西江遺跡(58)



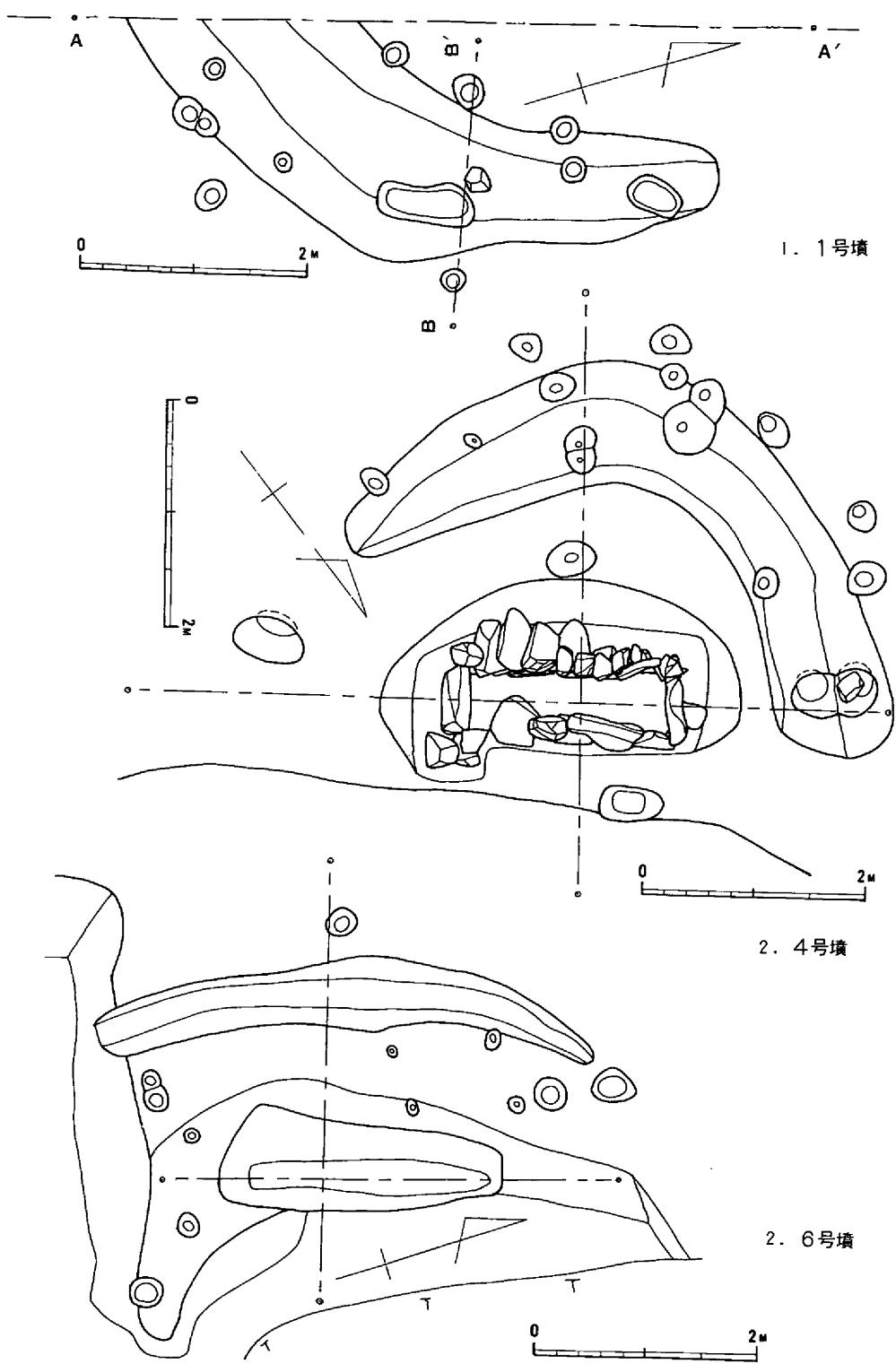
第178図 5号墳実測図

西江遺跡(58)



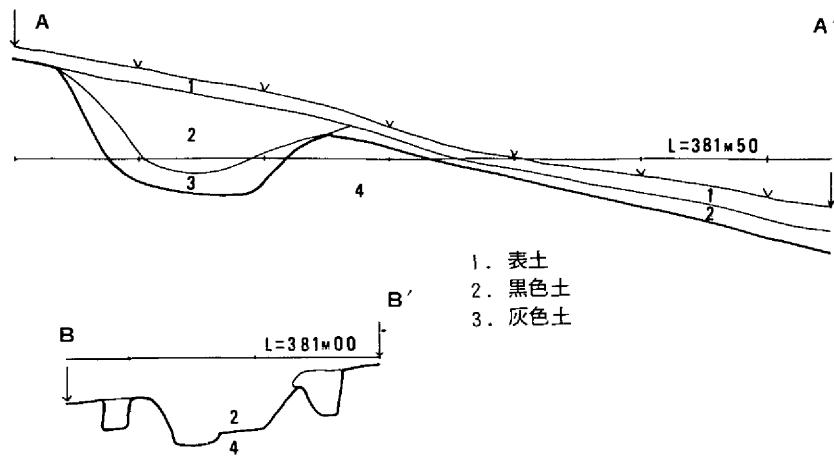
第179図 2・5号墳構造断面図

西江遺跡(58)

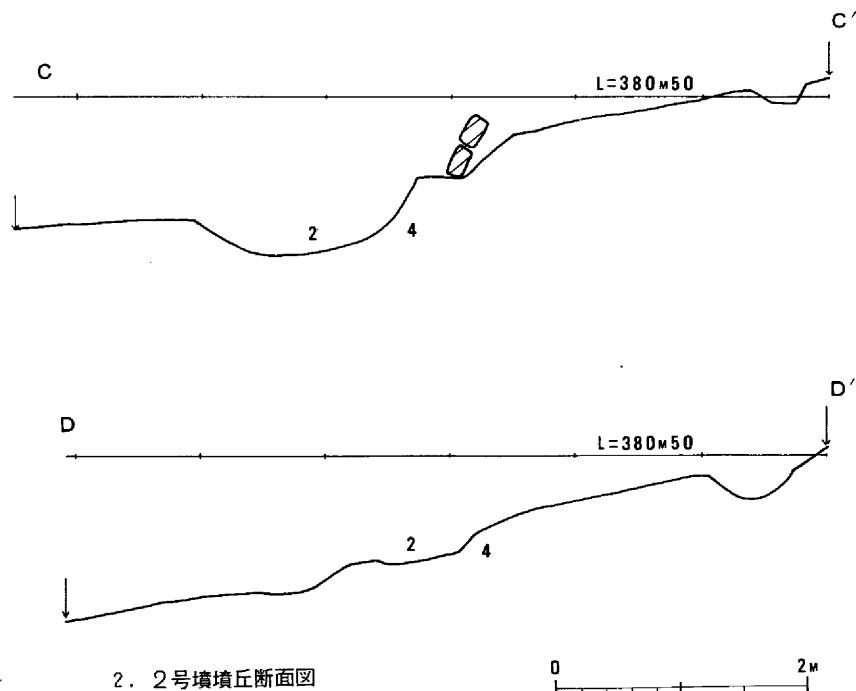


第180図 1・4・6号墳実測図

西江遺跡(58)

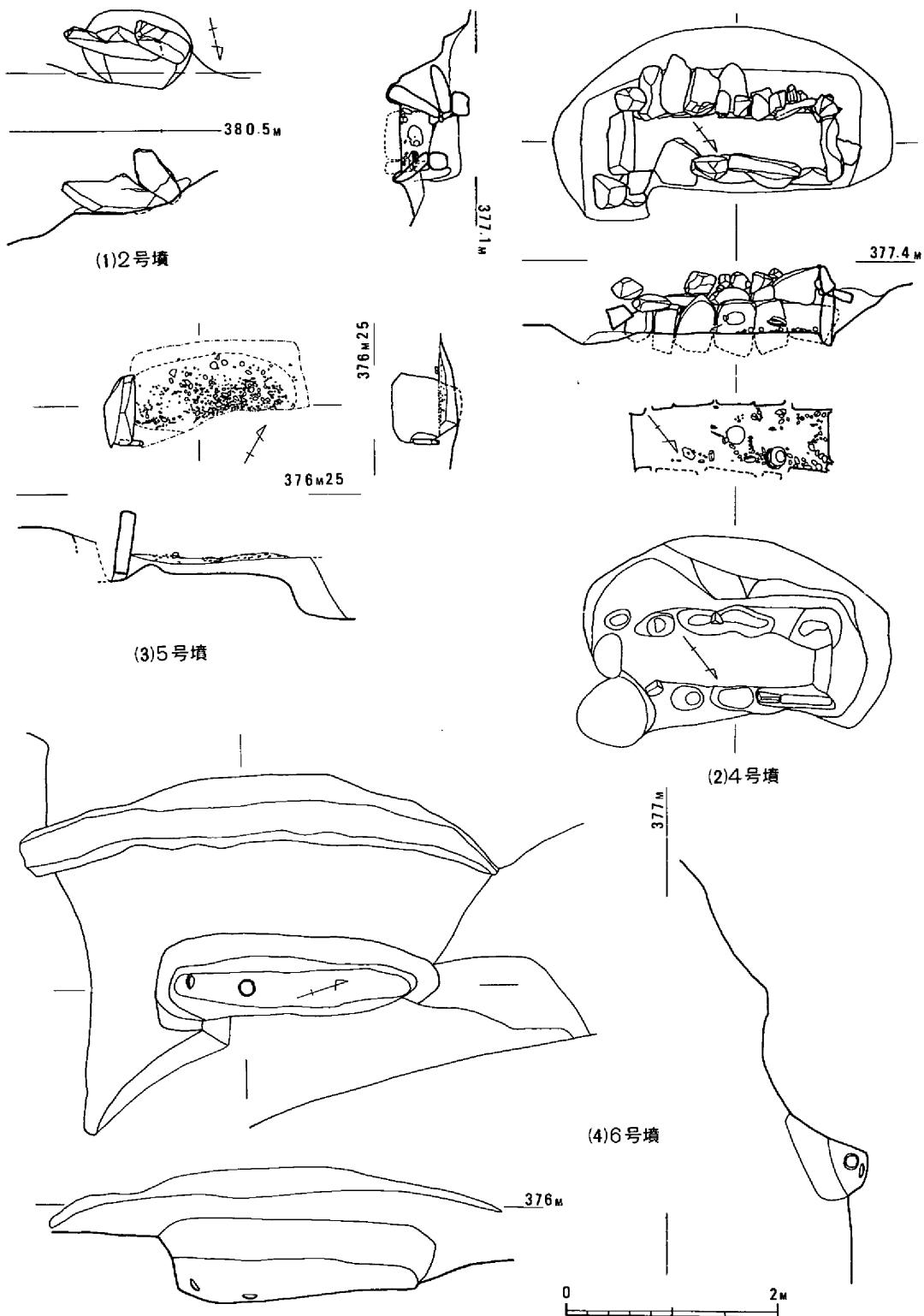


1. 1号墳墳丘断面図



第181図 1・2号墳墳丘実測図

西江遺跡(58)



第182図 2・4・5・6号墳主体部実測図

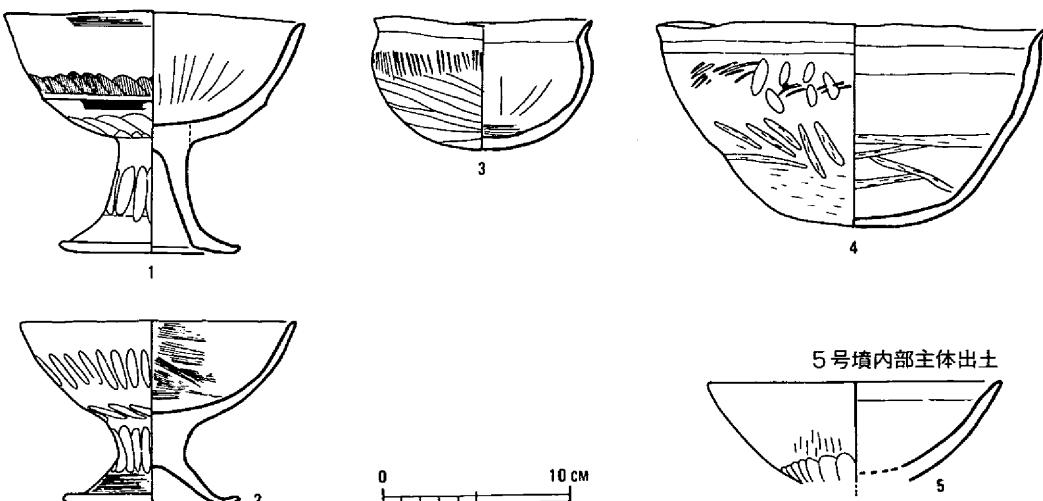
4号墳(第180図)

3号墳の北東の位置にあり、周溝の一部と内部主体のみを検出し、封土はまったく残存していなかった。墳丘は径4.0mであったと思われる。周溝は幅1.0m・深さは最深部で0.2mを測り、三日月状に残存していた。

内部主体は、箱式石棺であったが蓋は残存していなかった。内部主体は、長径3.0m・短径1.5mの梢円形の土壙を掘り、箱式石棺をつくっている。土壙の底に石を安定させるために凹みをつくって石棺の石材をすえている。石材はすべて川原石であるが、大部分は角の磨滅がほとんど進んでいないものである。最も広い面を石棺の内面に使っている部分と小口積みした部分がある。石棺の内規は、長さ1.84m・幅0.52m・深さ0.60mを測る。床面の北西側半分には、径が1~3cmの円碟が敷かれていた。北西側に頭を、南東側に足を向けて遺体を安置したものであろう。副葬品として頭のあったと考えられる付近から17個の小玉および1個の勾玉(共にガラス製)が出土して、石棺内中央部より提瓶1および刀子1が、石棺の北東壁に接して杯(蓋・身)1セットおよび高杯1が検出された。これら副葬遺物は、第184図に示す通りである。

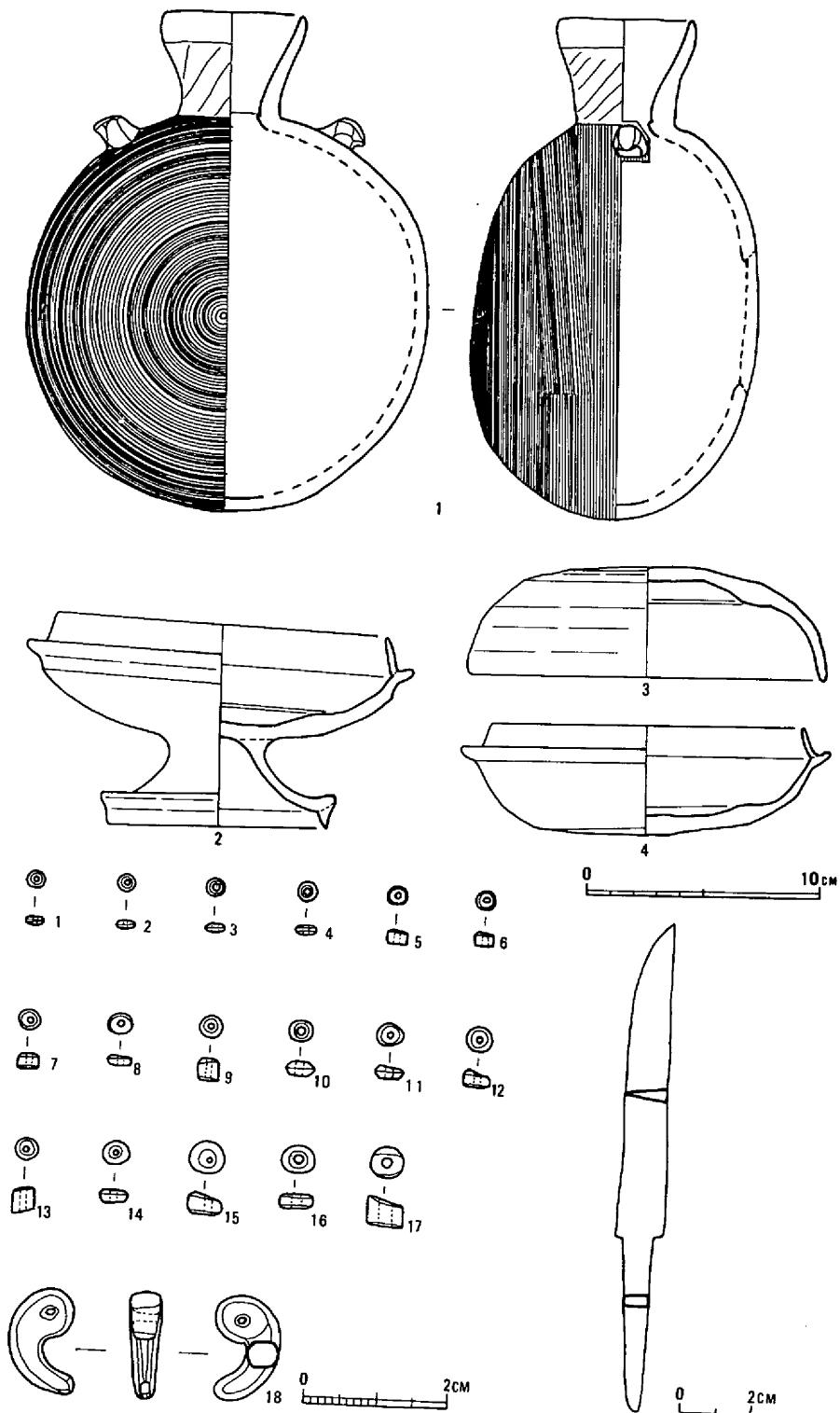
須恵器1(提瓶)は、胴の径16.5cm・胴の厚さ12.0cm・口縁部の高さ4.5cmを測り、高さ1.2cmの取手が2個ついている。胴部は回転させくしながらを行い、おおむね同心円を描いている。口縁部は、ねじりながら胴部に張りつけている。整形・焼成共に良好で、胎土も精選された粘土を利用している。他地方からの移入品と考えられる。

須恵器2は、蓋受部についている高杯で、本来は有蓋高杯として使われたものであろうが、これに伴う蓋は副葬されていない。口縁径13.8cm・杯部最大径16.2cm・杯の高さ4.8cm・脚部の高さ3.9cm・脚部最大径9.7cm・裾径9.0cmを測り、脚部には透し孔はない。全体にきれいに仕上げられているが、脚部に杯部を張りつけるときに傾けてつけられており、砂粒を多く含む粘土が使われており、全体にざらっとした感じのするものである。



第183図 3号墳周溝出土土師器実測図(5は5号墳内部主体出土)($\frac{1}{4}$)

西江遺跡(58)



第184図 4号墳出土遺物実測図

須恵器3・4はセットで焼かれ、セットとして使用されたものである。これらは須恵器2(高杯)と同質で、同じ窯で焼成されたものである。3は、口縁径15.0cm・高さ4.7cmを測る。4は、口縁径13.2cm・最大径15.6cm・高さ4.7cmを測る。3と4は、蓋をした状態で焼成され、蓋の一部が杯の蓋受部に焼けついている。2~4は、窯跡は未だ確認されていないが、備中北部のいずれかの地の窯で焼成されたものと思われる。

ガラス玉は、小玉17・勾玉1の計18個が副葬されていた(第184図)。小玉は最小径2.4mmから最大径4.8mmまでさまざまな大きさのものがあり、形も一定ではない。これにくらべて勾玉はきれいにつくられている。長さ1.5cm・幅0.9cm・厚さ0.4cmを測る。ガラス玉を全部つなぐとその長さは39.5mmとなる。

刀子は、全長13.7cm・刃の長さ8.8cm・刃幅1.3~1.1cm・背の厚さ0.4cm・茎の長さ4.9cm・茎幅0.8~0.5cm・茎の厚さ0.3cmを測り、茎には目釘穴は存在しない。外装については確認できなかった(第184図)。

須恵器から見て、4号墳は6世紀末ごろの築造と考えられる。

5号墳(第178図)

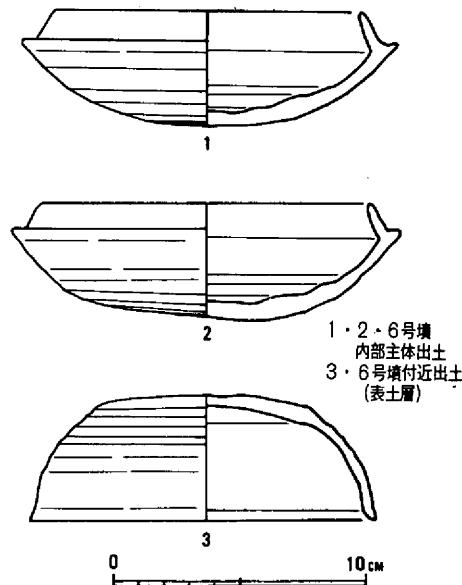
この古墳は弥生時代の土壙墓群の一部(1~13号主体)の上につくられており、4号墳の北東の位置にある。墳丘の径は約6m・周溝の幅3.5mを測る円墳である。墳丘径にくらべて周溝の幅がかなり広いものである。盛土の大部分は流失していてその高さは不明であるが、内部主体の一部が残存していた。

内部主体は礫床をもつ箱式石棺で、その主軸方向はN60°Eで、礫床の大部分と石棺の小口石1枚が残存していた。石棺の幅は約0.4m・礫床残存長は1.6mである。この礫床面から第183図の5に示す土師器を、周溝の中から若干の土師器片が出土した。第183図の5に示すものは、高杯の杯部の破片であり、杯底部にヘラ削りがみられる。これら土師器は3号墳周溝出土の土師器と同時期のものであり、この古墳が3号墳とほとんど時期をへだてないころに築造されたものであることを示している。

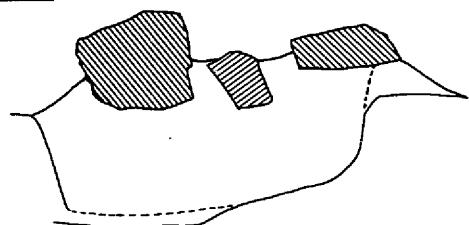
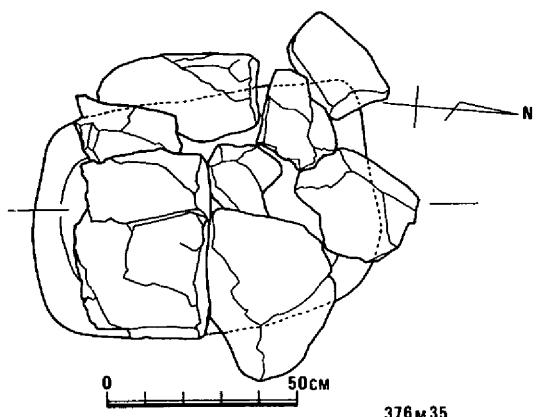
6号墳(第180図)

弥生時代の土壙墓群の南端部つまり2号方形台状墓の北につくられている。盛土はまったく残存していないが、幅0.5mの周溝の一部および内部主体(土壙墓1)が確認された。内部主体は、長さ2.6m・幅0.8m・深さ0.55m(底の長さ2.15m・幅0.35m)を測る土壙で、須恵器杯身2個を副葬していた。墳丘の径や内部主体の数は、古墳の大部分が現代墓地造成時に掘りさげられており不明である。

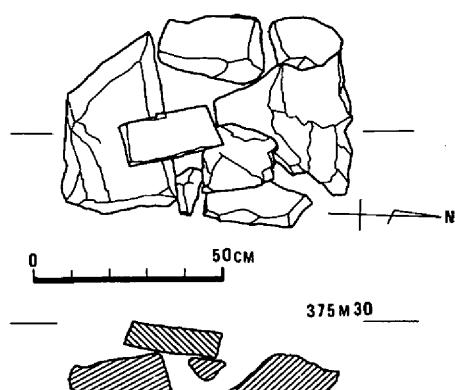
須恵器杯身1(第185図の1)は、口縁径12.0cm・最大径14.6cm・高さ4.5cmを測り、杯身2(第185



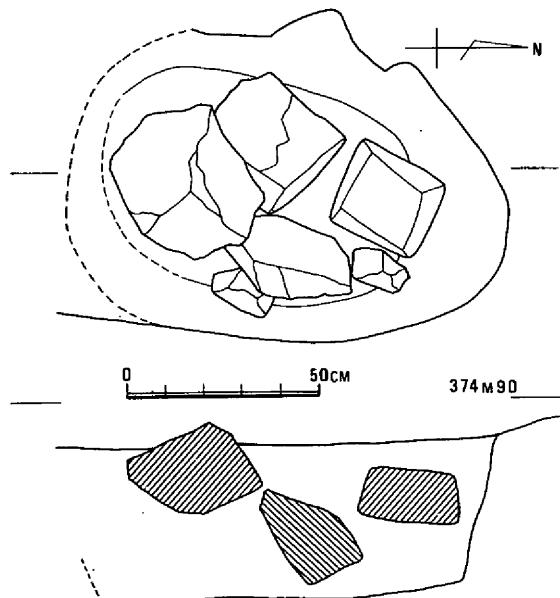
第185図 6号墳出土須恵器実測図



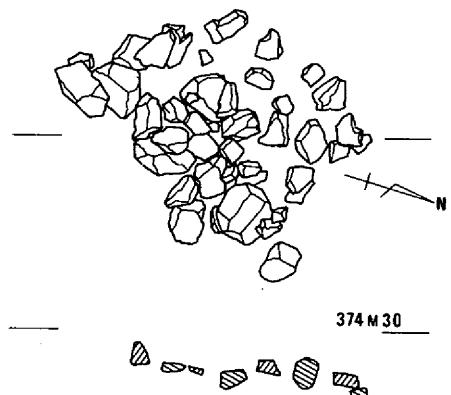
第186図 集石遺構1実測図



第187図 集石遺構2実測図



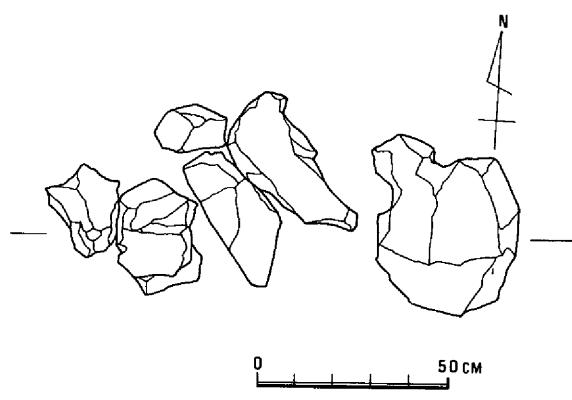
第188図 集石遺構3実測図



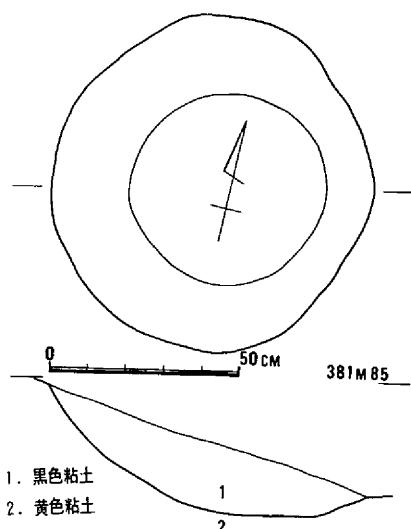
第189図 集石遺構4実測図

図の2)は、口縁径12.9cm・最大径15.3cm・高さ4.5cmを測る。1・2共に胎土・整形・焼成は良好で、4号墳出土の提瓶と同じ窯で焼成されたものと思われる。このことから、6号墳は4号墳と同じころ築造された可能性がある。なお、第185図の3は、須恵器の杯蓋で、6号墳付近の表土層除去中に出土したもので、4号墳出土の高杯と土質焼成が類似しており、同一窯焼成と思われる。

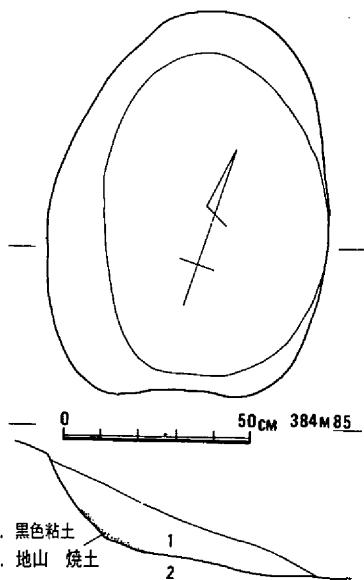
西江遺跡(58)



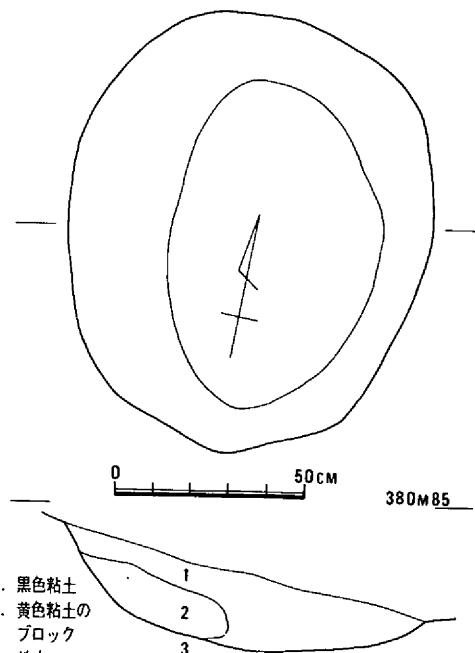
第190図 集石遺構5実測図



第191図 土壌1実測図



第192図 土壌2実測図



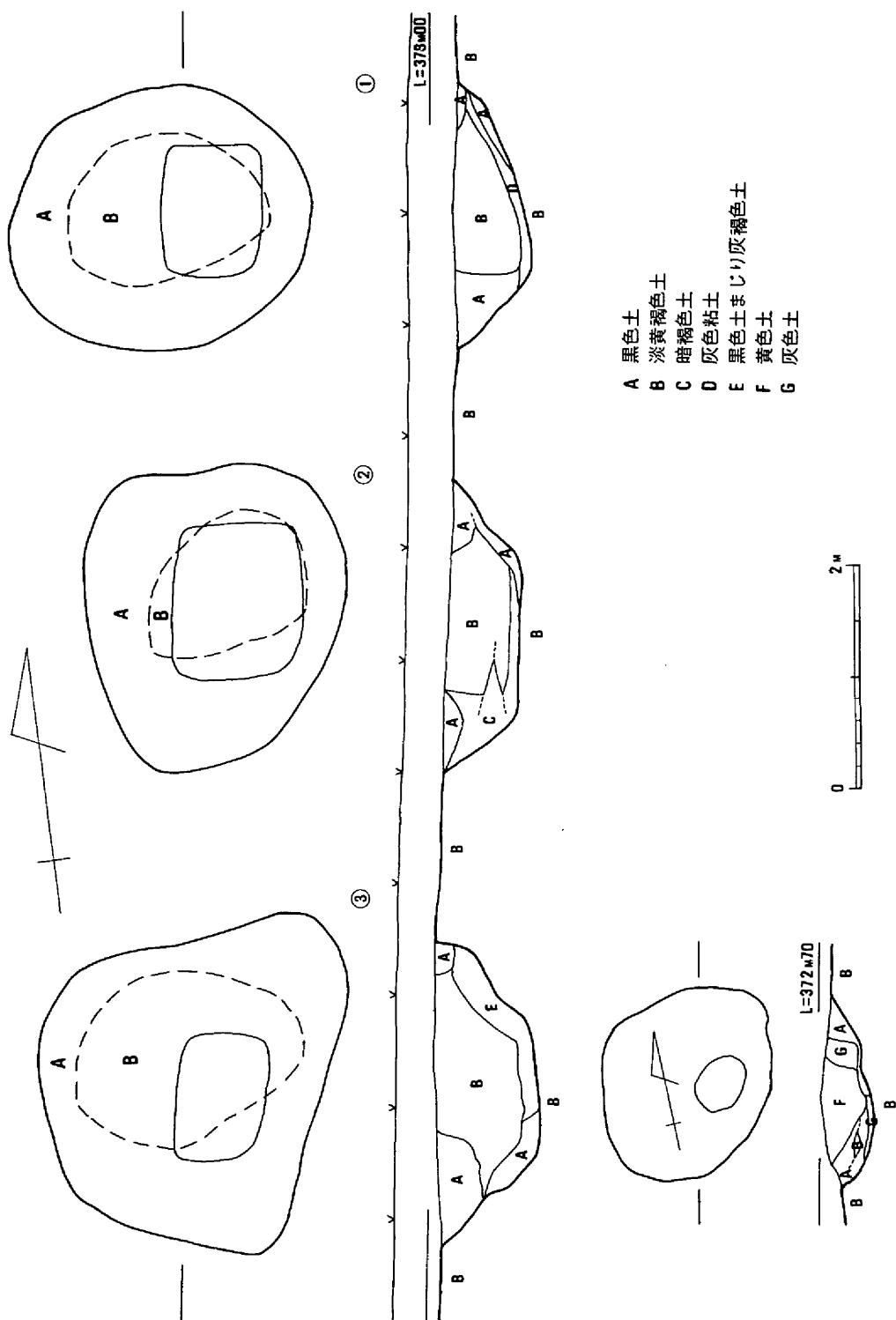
第193図 土壌3実測図

(10) 集石遺構(第186~190図)

丘陵上には石を積みあげたものがいくつか露出

していたり、表土除去の途中で検出された。全部で5カ所あり、すべて北土壙墓群の範囲内にある。集石1(第186図)は5号墳の上に位置して、はじめから露出していた。長径30~40cmの石を積みあげてあり、この下からは方形の土壙が確認された。この土壙は5号土壙墓を切ってつくられている。大きさは長さ90cm、幅62cm、地表面からの深さ30cmを測る。内部から何も検出されていない。集石2

西江遺跡(58)



第194図 土壌状遺構実測図

西江遺跡(58)

(第187図)は64号土壙墓の上位に位置し、表土を若干掘り下げた段階で検出された。黒ボクの堆積が比較的厚い地点である。石の集石の仕方は集石1と同様で、あるいは黒ボクの中で検出できなかつた土壙が存在したと推定される。集石3(第118図)は79号主体と切り合っている。土壙墓の検出中に集石がみとめられた。石の中にはこごめ石製の方形を呈する石が含まれている。これは五輪石の一部と推定される。床面は土壙墓と同じレベルである。土壙の大きさは長さ約114cm、幅80cm、地山からの掘り込み40cmを測る。以上の3基は近世頃の墓壙と推定される。集石4(第189図)は先の3基と異って、小さな角礫をまとめている。49号主体の上位に位置している。地山までの深さは浅くて土壙を推定しがたい。集石5(第190図)は東端部の斜面に位置し、数個の石があるだけで、周辺および下にも何ら遺構が検出されず、性格は明らかでない。

(11) 火どころのある土壙(第191~193図)

丘陵の表土除去をしたところ楕円形をした浅い掘り込みがあり、床面とその周辺が焼けた土壙が4基検出された。そのうち3基は3号墳の南西から上方に位置し、他の1基は94号主体の上位に位置する。いずれも若干の炭がある以外遺物が含まれていないため、年代等は明らかでない。高い方から大きさを記すとNo.1は長径88cm、短径84cm、深さ35cm、No.2は長径100cm、短径74cm、深さ32cm、No.3は長径116cm、短径94cm、深さ36cm、No.4は長径110cm、短径108cm、深さ24cmである。

(12) 土壙状遺構(第194図)

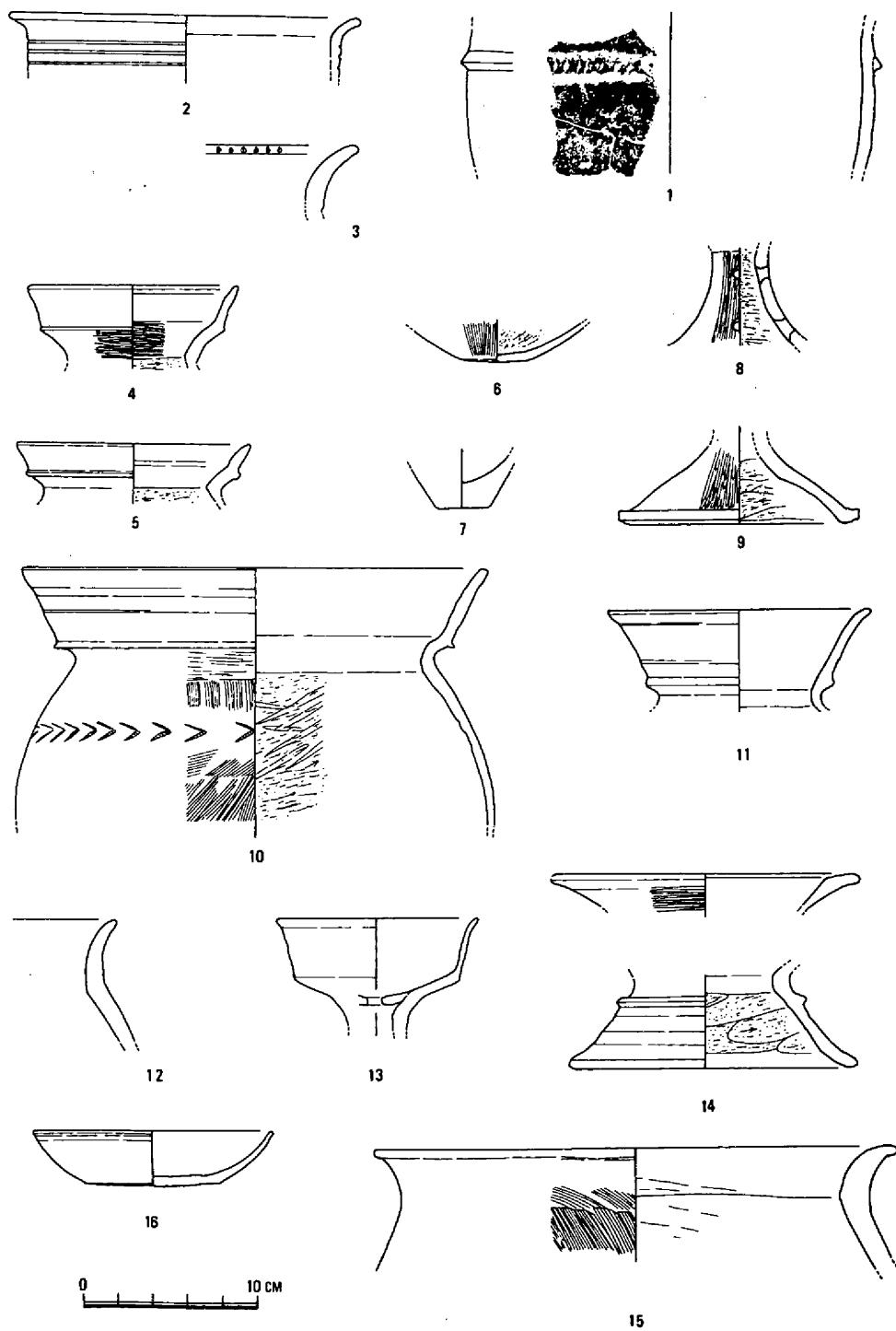
安信丘陵部調査区において、その東端部で1基、3号墳と6号墳の間ににおいて3基の大型土壙を検出した。

表土を除去したのち検出したこれらの土壙は、径2.5~3.0mを測る。No.1~3は同一等高線に沿ってほぼ等間隔に並んで存在し、No.4はNo.1~3に比し垂直距離6m・水平距離20mの少し北東へ下がった位置にある。いずれも、土壙墓群(弥生時代)および古墳群検出面と同一面上において検出した。検出時においてこれら土壙は、第194図に示すように黄色土の地山に掘り込まれ、中央に黄色土(地山の土)がありそのまわりに黒色土がドーナツ状に存在していた。土壙が掘られた後に黒色土(一部灰色土)でもって埋められ、その中央が小型の土壙状に凹み、この凹み部分が地山の土(黄色土)で埋められている。同様の土壙は、西江遺跡では、安信調査区の他にも田代調査区(3基)・国信調査区(5基)でも検出されている。西江遺跡以外では、縦貫道用地内に限っても、東から平遺跡(註19)・備中平遺跡(註20)・忠田山遺跡(註21)などで確認されている。備中平遺跡のものから縄文土器片が出土している他は、いずれも遺物はまったく伴っていない。このため時期は不明であり、性格についても明確にしえないものである。自然木が風で倒れ、その根の浮いたところへまわりから黒色土が流入したとする考え方もある。

(13) その他の遺物 縄文式土器・弥生式土器・土師器(第195図)

安信の丘陵上で検出された遺物は量的には多くないが縄文晩期から中世のものである。縄文晩期の土器はいずれも甕の破片(1)で、2号墳の封土下から検出された。量は少なく、口縁部及び底部の破片はない。図示したものは胴部付近の破片で、きざみ目を施した断面三角形の凸帯を配している。内面には横なでが施されているが外面には凹凸が多い。凸部より下には煤が付着している。胎土には直

径1～2mmの砂粒を含み、色調は内・外・断面とも暗灰褐色を呈する。他に凸縁をもつ破片が2点あるが同一個体のものと推測される。弥生前期の甕(2, 3)の破片もある。いずれも1号墳の封土下から検出された。2は口縁部が「く」字状に折れ曲がり、端部にはきざみめを施している。頸部には3本の沈線が配されている。外面には煤が付着している。胎土には微砂を含み、色調は灰褐色を呈する。3は口縁部が緩やかに外反し、端部にはきざみを施している。頸部には段がみられる。胎土には微砂を含み、色調は黄褐色を呈する。4は壺の口縁部であろう。5号墳の南裾部から検出されたものである。頸部から緩やかに外反し、くびれて立ち上がり、端部はうすくなる。内外面とも横位のヘラ磨きが施されている。内面は頸部より下で横位のヘラ削りが施されている。内外面とも丹塗りが施され、朱色を呈する。断面は灰白色を呈する。胎土には微砂を含む。5は甕の口縁部で北端部の道路側のくずれた部分から検出された。頸部から短かく外反し、くびれてさらに拡張する。端部は薄くなつて丸みをもっている。内面は頸部まで横位のヘラ削りが施されている。胎土には微砂を含み、外面には丹塗りが施されている。6, 7は底部である。6は緩やかに湾曲しながら底に近づき、底部は直径4cmで外に湾曲している。外面には縦位のハケメが施され、内面は縦位のヘラ削りが施され、器壁は薄い。胎土には微砂を含み、外面には丹塗りを施している。内面は灰白色を呈する。7は器壁が厚く、胴部への立ち上がりはきつい。胎土には微砂を含み、色調は外面では橙色を呈し、内面では黄褐色を呈する。8は高杯の脚部で緩やかに裾がひろがり、縦に円孔を配する。外面には縦位のヘラ磨きを施し、内面には横位のヘラ削りを施している。胎土には微砂を含んでいる。外面は丹塗りが施されて朱色を呈する。9も脚部で細くしまった柱状部から緩やかに裾が拡がる。端部は肥厚し、端が横に拡張する。外面には縦位のヘラ磨きを施し、内面には横位のヘラ削りが施されている。胎土には微砂を含んでいる。外面には丹塗りが施され、内面は黄褐色を呈する。7, 8とも北端部の道路側で検出された。10はやや大きい甕の口縁部から胴部へかけてのもので底部はない。胴部は肩が張らず、下方へ移行する。肩部には横位の「ハ」字状にヘラ先の刺突文を配している。口縁部は頸部から短かく湾曲しながら外方に拡張し、くびれて外方へ小さな張り出しをもって上方へ大きく拡張する。端部はやや方形を呈する。内外面とも横なでが施されている。胴部では外面に斜位のハケメを施し、内面には斜位のヘラ削りを施している。胴部下半は煤が付着していて黒色を呈し、上部と内面は灰白色を呈する。断面は灰色を呈する。胎土には微砂を含む。この土器は置き並べられた特殊器台の西側で検出された。11は甕の口縁部であろう。頸部から短かく外反し、くびれて湾曲しながら斜め上方へ大きくひらく。端部はやや丸みをもっている。内面は頸部直下からヘラ削りが施されている。胎土には微砂を含み、色調は灰白色を呈する。13は高杯で杯部から脚部へかけて一体造りである。細くなった柱状部から急にひろがり、くびれてやや直立きみに立ちあがる。端部はやや外反し、うすくなる。杯部の底は円板貼り付けであるが、中央に焼成前の穿孔がある。表面が剥離していて不明瞭であるが、外面にはヘラ磨きをして丹塗りを施しているらしい。胎土には直径2～4mmの砂粒を含む。14は鼓形器台で全体の破片があるが小破片のため完全には復元できない。全体に高さは余り高くなく、基部の直径は17.8cmを測る。口縁部は緩やかにひろがり、端部はやや丸い。胴部は短かく、脚に移る部分には外面に断面三角形の張り出しがあり、あと緩やかにひろがる。端部は丸くなっている。内面は上部、下部



第195図 土器実測図 ($\frac{1}{3}$)

ともヘラ削りが施されているが、上部はヘラ削りのあと平滑にヘラ磨きを施している。外面は胴部の端部を除いて横位のヘラ磨きが施されている。外面の全部と内面の胴部より上位には丹塗りが施されている。胎土には微砂を含む。11, 13, 14は北側の方形台状墓の南西側周辺部で検出された。12, 15は甕の口縁部である。12はきめの細かい胎土で橙色を呈する。内面にはヘラ削りを施している。15は器壁が厚く、胎土には微砂を含む。外面にはハケメを施し、内面はなで仕上げている。色調は黄褐色を呈する。16は完形の皿で、南側の台状墓北側にある柱穴状の穴から検出された。底部は平底でヘラ切りの痕がみられる。胴部は内湾しながら拡張し、端部にわずかなくびれがみられる。胎土には赤褐色の砂粒を含む。色調は灰白色を呈する。

4~11, 14はほぼ古式土師器に属する。13は弥生後期のもので、12, 15は古墳時代後期~奈良時代の甕である。16は平安時代のものと推定される。

石器(第196図)

石器としては91号主体の埋土中からサヌカイト製の石鎌1点が出土している。ほぼ三角形を呈した平基式のものである。先端部を欠失しているが現存長1.6cm、幅1.7cmを測る。

3. 小 結

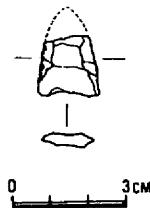
安信丘陵部には狭い範囲に縄文晩期から古墳時代に至る時期を中心として多数の遺構がある。縄文、弥生時代の住居址については保存状況が良好でなく詳細な点は明らかでない。弥生中期後半における丘陵傾斜面の造成は細長く続く特色などがみられる。また、弥生中期後半の土器は「前山Ⅱ式」と呼ばなるものの一括資料として貴重である。土壙墓はきわめて限定された範囲内に整然として配置されていて、規制があったことが推測される。普通の土壙と小型の土壙が混在している。普通の土壙には木棺の痕跡がみられるものが多く、石蓋土壙のものと小型の土壙には木棺の使用はみとめられない。

特殊器台が直線的に3基または4基置き並べられ、それぞれ、特殊壺が伴って存し、二次的な移動がない。倒潰した状況で検出されたため、特に貴重な資料である。特殊器台の上に特殊壺がのっていたことも出土状況で確認できている。また、4個体は大きさや文様の基本は同じであり同一時期のものであることが判明しているが、各々異っていて、同一人の製作にかかるものではないことが推定される。器台の周辺には特色のある埋葬主体がみられないととも注目される。

方形台状墓は2基確認され、2号では南と北に貼り石が配置されている。1号は大部分が消滅しているため不明だが、2号では明瞭な中心主体が存しない。土壙墓群は検出された土器等によると弥生後期後半から古墳時代前半へ継続したものである。付近の古墳とは年代的な隔りがある。

安信丘陵部調査の古墳群について

西江遺跡において調査した古墳は、安信丘陵部調査区の6基である。そのうちの1基は周辺の一部が縦貫道の用地内にあり、残りの大部分は用地外に存在し、この用地外の部分は未調査である。6基



第196図 石鎌実測図 ($\frac{1}{2}$)

西江遺跡(58)

とも墳丘は流失していてほとんど高まりは認められなかった。内部主体の確認できたのは、2・4～6号墳の4基であり、2・4・5号墳は箱式石棺、6号は土壙であった。竪穴式石室や横穴式石室は存在しない。

埋葬（古墳の築造）の時期は、

I期——2号墳

II期——1・3・5号墳

III期——4・6号墳

の3時期に分けることができる。I期は5世紀後半よりも古い時期であり、II期は5世紀後半、III期は6世紀後半ごろである。

なお、この古墳群の存在する尾根上の縦貫道用地外には、西方に横穴式石室をもつ円墳1基、東方に円墳2基が現存している。これらはいずれも墳丘がよく残っているものであるが、用地内で調査した古墳のように封土の流失したものについてはその実数は不明である。

石室が露出していたり、墳丘の残っているものは一見して古墳とわかるが、安信丘陵部調査区の古墳群のように墳丘のまったく流失してしまったものについては表面観察だけでは確認はできにくい。現に、この調査区も事前の分布調査においては、1基の古墳も確認できなかった地点の一つであり、本調査に先だって設定したトレントにおいて、はじめて周溝の一部を偶然確認したにすぎない。

第3章 西江遺跡の特質

第1節 西江遺跡の調査概要

西江遺跡は1975年7月1日から1976年10月10日まで15ヵ月余りの期間を要し、全長約1Km、幅40～50mの範囲を調査したものである。遺構、遺物は小さな丘陵と山裾がひろがる台地部分に位置している。縄文時代晚期から現代に至るまでのものが検出されている。

縄文時代晚期では若干の土器片と黒曜石が出土している。土器片は西江平、北井、実政、藤安、安信平地部、安信丘陵部の各調査区で検出されている。いずれも甕の小破片である。黒曜石は実政、田代の各調査区で検出されている。黒曜石の石器は検出されていない。

弥生時代では各時期の遺構・遺物が検出されている。弥生前期前半の土器は西江平調査区で数個体分検出されているが、遺構との共伴関係はわからない。前期後半の遺物は北井、実政、田代、安信丘陵部の各調査区において土器片が出土している。遺構との関係はわからないが、田代調査区では以後継続的に遺物が検出される。弥生中期ではその初期の土器片が北井、国信、実政、田代の各調査区で検出されている。中期中頃の土器は国信、実政、田代の調査区で検出されているが、田代調査区では住居址の床面から甕が検出されている。弥生中期後半の土器は各調査区で検出されている。住居址、土壌などに伴うものもある。安信丘陵部調査区では丘陵の傾斜面をカットして帯状の平坦面をつくり、利用しているものもある。一方の傾斜面はかなり急になり、低位面と40～50mの高低差がある。石器の出土もある。石槍、石鎚、石匙、石斧があるが、弥生中期のものであろう。特異なものでは簾状文を施した小破片が出土している。これは近畿地方から搬入されたものであろう。

弥生時代後期前葉の土器も北井、国信、実政、田代、安信丘陵部の各調査区で検出された。田代調査区では円形の竪穴住居址が検出された。住居址の中央には土壌が配されている。安信丘陵部調査区では露岩の前面で壺、甕、高杯、細頸壺、脚の付いた注口付鉢が検出されている。この土器はすべて胎土に雲母を含み茶褐色を呈する。外面は丹塗りされている。祭祀に用いられた遺物であろう。居住区域で出土する土器にも同種のものが多数存在する。後期中頃の土器片は検出されていない、調査区より外れた地点あるいは他の地域に居住していたと推定される。

後期後半では各調査区で遺物を出土している。北井、国信、田代の各調査区では円形の竪穴住居址が検出された。田代調査区の住居址中から鉄製の刀子、凹基式の鉄鎌が出土している。安信丘陵部では弥生後期後半から古墳時代前半に至る土壌墓群がある。検出された土壌墓は132基にのぼり、2基の方形台状墓が所在する。そのうち1基には貼り石を配したものもある。副葬品ではガラス玉を検出したものが2基存在するが、他はない。供献土器を伴うものも少ない。石蓋土壌墓は5基あり、他の大型の土壌墓には木棺の痕跡のみられるものもあるが、特に大型のもの、複雑なものは存在しない。特記すべき点としては、4基の特殊壺がそれぞれ特殊器台を伴って直線的に置き並べられていた

点である。出土の状況から特殊壺は特殊器台の上にのせられていたことがわかる。この4個体以外にも若干の特殊器台、特殊壺の破片がある。弥生後期後半からは山陰系の土器が含まれるようになり、弥生後期終末からは西江遺跡の土器組成として定着している。このことから山陰地方との密接な関係が想定される。

古墳時代前半期の遺物は北井、国信、実政、安信丘陵部の各調査区で検出されている。安信丘陵部は墓に伴うものであり、これを除くと3調査区とも比較的広い台地状を呈するところへ位置するようになる特色がある。

古墳時代後期の遺物は国信、実政、田代、安信平地部、安信丘陵部の各調査区で検出されている。安信丘陵部は古墳に伴う遺物である。古墳は縦貫道予定地内には5基存在する。横穴式石室を内部主体とするものではなく、箱式石棺、土壙等であり、墳形は円墳である。古墳を除くとすべて台地状を呈する部分に位置する。その後も一貫して同地区に居住している。特記すべき遺物には師楽式土器片が数百点検出されている。長方形の土壙中から須恵器、土師器を伴って完形のものが2点とその他に破片が多数出土していて、年代的な位置づけが県南部のものと同一であることがわかる。県北部のまさに山間部に位置することからその関連性が重視される。方形の竪穴式住居址も検出されている。須恵器、土師器の量も多い。須恵器には古式の須恵器が検出されている。

奈良時代の遺物も多く、特に国信、実政、田代の各調査区では、建物あるいは柵列があり、この時期に属すると推定されるものもある。また円面硯も1点あり、倉庫等に関連して利用されていたと推定される。文字を使用する人の存在が推定されることから、古代の哲多郡における位置づけも考えねばならないであろう。西江遺跡から近い位置にある二野遺跡（註22）でも奈良～平安時代の建物が6棟確認されていて、その関連が重視される。

平安時代の遺構、遺物はきわめて少ない。

中世の遺構・遺物はかなり多い。鍛冶炉が北井、国信、藤安、田代の各調査区で検出され、実政調査区でも鉄滓が多数検出されている。遺物には備前焼、亀山焼、鉄器、土製品等がある。鉄器には鉄鎌もある。

近世の遺構には墓地があり、遺物には備前焼、伊万里焼等が出土している。

以下、西江遺跡の特質を考えるために「西江遺跡出土の弥生式土器、古式土師器について」「土壙墓群と特殊器台・特殊壺について」「西江遺跡出土の師楽式土器について」の項目で若干の整理を行った。

第2節 西江遺跡出土の弥生式土器・古式土師器について

西江遺跡では各調査区ごとに述べたごとく、縄文時代晚期以後現代に至る遺物が検出されている。土器には時代と種別による特色もある。以下は西江遺跡の調査対象となった範囲内において検出された弥生式土器と古式土師器の特色について概要を述べる。（第197～199図参照）

弥生時代前期では、西江平、北井、田代、安信丘陵部の各調査区から検出されている。前半の遺物

西江遺跡(58)

では西江平の丘陵上から壺、甕の破片が検出されている。壺は破片が小さく詳細はわからないが、肩部に細いヘラ描きによる無軸の木葉文、綾杉文を施している。甕は口縁部を「く」字状に曲げただけで沈線がみられない。以上、壺2点、甕1点に相当するだけのわずかな量にすぎない。前期前半の遺物としては県内に於いては津島遺跡などで検出されているもの(註23)があるが、県北部において発見されたのは初めてであり、弥生時代初期から県北部の地域にも弥生時代人の行動の跡をみいだすことができる。木葉文の用いられた壺は同じ中国縦貫道の建設に伴う事前調査で哲西町内の大倉遺跡(註24)、二本松遺跡(註25)においても認められている。ただこれらのは有軸木葉文、または太いヘラ描き沈線文で、若干後出のものである。前期中葉の遺物と明確に判断できるものはないが、田代調査区で出土した甕には2種類あり、口縁を「く」字状に曲げて、ヘラ描き沈線の少ないもの、口縁を逆「L」字状に曲げるものがあり、前後関係とみることができる。量が少ないとから判断したいが、前者は中葉に属する可能性がある。前期後半のものは若干遺物が多くなる。量的に多かったのは田代調査区である。甕の口縁部を逆「L」字状にするもの他「く」字状のものを含め、壺は頸部ヘラ描き沈線を施すだけのものなどがある。これらは一般に門田式(註26)と呼ばれるものに相当する。以上の前期の遺物のあり方は次の中期前葉を含めて、哲西町、神郷町、新見市周辺、また県境をこえて広島県北東部にも及んでいる。これは縄文晩期の遺跡も同様で、しばしば弥生前期の遺物も同時に検出される。遺物の量が少なく、立地では平坦地が狭い。縄文時代以来の小集団の移動した生活跡と推定されるようである。これらの大ままとして、広島県北東部から岡山県北西部が考えられる。このことは弥生中期の遺物にもその特色がみられる。

第3表 西江遺跡各調査区時期別土器量

調査区 年代	西江平	北井	国信	実政	藤安	田代	安信平地部	安信丘陵部
縄文晩期	1	1		1	1		1	1
弥生前期	1	4						
	2						1	
	3		1		2		5	2
同中期	1		2	1	1		22	
	2			15	1		5	
	3	6	1	12	13		3	8
同後期	1		1	1	3		16	
	2							
	3	2	4	11	4			
	4	1	5	52			4	1
古式土師	1		3	26	6			5
	2		8	2	7			3

弥生中期の前葉は大きく2つに区分される。その初期は土器の胎土その他は前期末と変わることろがないが、くし書き文を施す特色がみられる。田代調査区でまとまっているが、壺では口縁の内外面に断面三角形の凸帯を貼り付け、頸部から肩部へくし書き文を施している。甕では口縁が逆「L」字状を呈し、断面が三角形となり、頸部へは櫛書き文を配している。内面はヘラ磨きを施す。3の高杯は胎土焼成等からこの時期の高杯と考えられる。前期の高杯は西江では検出されていない。以上の遺物は岡山県南部では「門田上層」(註27)と呼ばれるもので、「高田式」(註28)の一部、「船山遺跡第2類」等がこれにあたる。山陰側では「亀嵩式」(註29)と呼ばれるものである。この時期の直後には中期的な胎土をもつものがあらわれる。胎土には粗い砂粒を含まなくなるものの出現である。10の壺と12の甕を並べたが、10についてはその後に入れるべきかもしれない。壺には無頸壺があり、外面には櫛書きの直線文、波状文のくりかえしがみられる。甕は小破片であきらかでないが、「く」字状に外反する口縁の上面と内面にはヘラ描きが施されている。一般的には頸部に櫛書き文を施すものが想定されるが検出されていない。

中期前葉の後半の土器は北井、実政、田代の各調査区で検出される。田代調査区が比較的まとまっている。壺は破片が小さく、器形が完全に復原できないが、肩部へ直線と波状の櫛書き文を配している。甕は口縁部が上方へ湾曲しながら「く」字状に外反し、端部はほぼ丸くなっている。頸部には指で横になでた凹みなどで痕がのこり、肩部には縦位のハケメを施す。櫛書き文を配していない。内面では口縁から胴部にヘラ磨きするが、横位ないし斜位のハケメを施すものがあらわれる。高杯は検出されていない。この時期は岡山南部で「南方Ⅱ式」(註30)と呼ばれるもので、「雄町3類」にあたるこの時期の終末から中期中葉の時期にかけては、若干遺物がまとまって検出されるようになる。近くでは二野遺跡においても同様である。

中期中葉の時期は3つに区分して述べる。

この時期の初頭にあたる時期の土器は従来公表されているのは少ないが、二野遺跡(註31)の調査で多量の遺物が出土した。この時期に相当する遺物は田代調査区で検出されている。各器種はまとまっているが、甕がある。口縁は屈曲して横に張り出す。口縁部の上面が横なでされ、屈曲部は角ばり端部も角ばるものが多い。18のように頸部に凸帯を配するものがあるが、一般的ではない。胴部の内面にはハケメを施すものが多い。この時期の中頃にあたるものは国信調査区で若干まとまっている。従来、「菰池式」(註32)と呼ばれている時期のものである。壺には口縁部が朝顔形にひらいて端部外面に凹線文を施すものと口縁部外面に三角形の凸帯を都するものがある。甕は小型のものもあるが、口縁部が「く」字状にひらき、端部が若干肥厚するものもある。高杯は杯部が比較的深く、口縁端部が肥厚して、上面に櫛書き等の施文のあるものが多い。この時期の終末(註33)では、遺物の量が少なく、全器種が揃わないが、23の壺では口縁端部が肥厚し、上下に若干張り出す特徴がありこの時期へ入れた。西江遺跡で確認していないが、この時期の甕から胴部下半の内面ヘラ削りが施されるようになる。高杯は杯部が若干浅く、端部が肥厚するものが多い。25は前後の時期にもあるが、口縁部に縁をつけたものがある。

中期後半についても3つに区分して述べる。この時期の初頭のものは西江平調査区で数点出土して

いる。壺には頸部が長くなり、口縁部は朝顔形にひらいて、端部が肥厚し、端部外面に凹線文を配している。頸部には断面三角形の凸帯を配している。指頭圧痕を施した凸帯の場合もある。甕は口縁が「く」字状に外反し、端部は肥厚して、上方へ拡張するものがある。口縁端部の外面には凹線文が施される。中形以上の甕では頸部にきざみめのある凸帯を配するものが多い。肩部が張るようになり、胴部上半は先行するものと同様に縦位のハケメが施される。内面も胴部上半はハケメが施されている。西江遺跡では高杯の口縁部が検出されていないが、他の遺跡では口縁部が直立ぎみになり、外面には凹線文を施している。脚部は緩やかに裾がひろがり、端部は肥厚して下方と横に張り出す。透しは三角形のものが配される。この時期のものは従来も出土しているが、まとまつた資料としては、川入遺跡法万寺調査区301号土壙出土(註34)のものが量的にもまとまっていて一括資料として比較しやすい。

この時期の中頃のものとしては安信調査区の南側テラスでまとめて検出されたものがある。壺では、頸部が長くなる一般的なものがないが、口縁が直立する30の壺がある。甕は口縁部が「く」字状に外反し、端部は上方へ拡張する。下方へ張り出しのみられるものもある。肩部は張って胴部は長い。外面では上半部に縦位のハケメを施し、下半部は縦位のヘラ磨きを施している。内面は上半部はハケメを施し、下半部は縦位のヘラ削りが施されている。高杯は杯部の好例がないが、脚部では裾が緩やかにひろがり、端部は肥厚して下方及び横位に張り出す。横位のヘラ描き沈線と三角形の透しを配している。33は直口壺に高い脚部の付いたものである。一般的には低い脚になるものが多い。この時期は従来「前山Ⅱ式」と呼称されていたもので、「雄町5類」(註35)に相当する。

中期後葉のうちの終末期は「仁伍式」(註36)と呼ばれる時期にあたる。この時期の壺では、口縁部が頸部から緩やかにひろがり、端部は肥厚して上下へ拡張する。口縁の外面には凹線文が施されている。頸部には縦位のハケメを施したあと横位の太い沈線を配する。甕では好例のものがないが、胴部下半には縦位のヘラ削りが施される。高杯は口縁部が直立し、外面には上下に沈線を配し、その間が無文のものと波状文を配するものがある。器台は脚部しか検出されていないが、2点ある。脚部の裾は緩やかにひろがり、端部は肥厚して横への張り出しがみられる。裾部へは沈線が配され、長方形～三角形の透しを配している。県北西部で器台が用いられるようになるのはこの時期頃からである。西江遺跡では検出されなかつたが、近くの善光院裏山遺跡(註37)で出土した高杯の脚部には矢の羽形の透しを配したものがあり、これは三次盆地でも発見されることからその関連性が考えられる。

弥生時代後期も3つに区分して説明する。後期前葉ではその前半期の明瞭な資料がない。その後半期の資料としては田代調査区の住居址の埋土中で多数検出されている。器種は少ないとともあり、安信丘陵部調査区の祭祀に使用されたと推定される土器をもって補う。壺は好例のものがない。38は長頸、39は直口の壺になるものであろう。甕の口縁はやや湾曲しながら外反し、端部は肥厚して外面には凹線文を施す。胴部は肩が張って、胴部は長い。内面は頸部まで横位のヘラ削りが施されている。高杯は杯部が浅く、口縁部は外方へ張り出す。杯部の底は円板貼り付けになっている。脚部は裾部がわずかにくびれてひろがる。端部は肥厚して若干立ちあがる。42では円孔を配し、43ではヘラ描き沈線を縦位に配している。器台は口縁が朝顔形にひろがり、端部は肥厚して、上方へ拡張する。外面に

は凹線文を配している。胴部には縦位のハケメを施したあと、太い沈線と円孔及び三角形の透しを配している。46、47のような台の付いた注口付鉢や48～50の細頸の壺もあるが、集落では一般的でない。鉢も内面は上位まで横位のヘラ削りが施されている。胎土では祭祀に使用されたと推定される38、39、41、42、45～50は雲母を含み茶褐色を呈する。後期とするものは胎土に比較的大きな砂粒を含むようになる。

弥生後期中葉のものは明瞭なものがない。

弥生後期後葉としたものは「酒津式」(註38)まで含めている。詳細に区分するだけの資料がなく、2つに区分して述べる。この前半の資料は少ない。51の壺、52の鉢を置いたが、他に高杯の小片などはある。53の壺は土壙墓に供獻されていたものであるが、頸部が長く、口縁は横に張り出し、端部は上方へ立ちあがる。胴部はやや長さが短かくなり、底部は小さく丸みをもっている。内面は頸部まで横位のヘラ削りが施されている。県南部では頸部が短くなるのが一般的だが、県北西部では長頸で、頸部上端までヘラ削りされるものがある(註39)。甕は頸部から短かく拡張し、端部は上方へ拡張する。内面は頸部直下まで横位のヘラ削りを施している。高杯は2段の稜線をもつ杯部のものがあり、脚部は裾が少しきびれて緩やかに広がり、端部は肥厚して下方に張り出すものがある。この高杯は後期後葉の前半に属し、その後半まで継続する可能性もある。他の高杯の好例はないが、端部が薄くなるものもある。県南部では脚の端部が肥厚せず、うすくなる傾向がみられるが、県北西部においては弥生後期後半期まで継続している。また、後期後半からは山陰系の遺物がみられるようになる。量が少なく、他の遺跡においてもほとんど検出されず、山陰地方から搬入されたものも多いと推定される。

山陰系の土器として特徴的なものには鼓形器台がある。57～69までが鼓形器台であるが、西江遺跡では他にも若干出土例がある。年代順に並べたが時期的に間のある時期がある。57は柱状部が長く、下半では屈折してやや直立する部分があり、外面には凹線文を施している。柱状部には縦に小さな円孔を配する。これは「九重式」(註40)にみられる器形である。58、59は小破片であるが、口縁部が拡張し幅広く、外面には凹線文を施す。外面には丹塗りが行われている。60、62は脚部で幅広く、外面には凹線文を施している。端部では60が角ばり、62は肥厚して先端部がやや丸みをもつ。58～62は「鍵尾I式」(註41)と呼称されるものである。胴部に凸帯を2条配した壺がある。62の鼓形器台と同じ住居址の埋土中で検出されたものである。墓地群に伴うことが多い。甕では口縁部が大きくひらき、外面に凹線文を施すもの(66)と小型で口縁部の拡張の小さいものもある(64、65)。この時期の共伴関係については西江遺跡では明確にできていない。

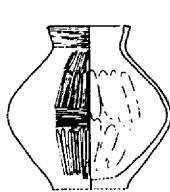
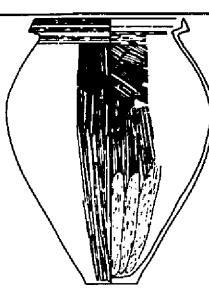
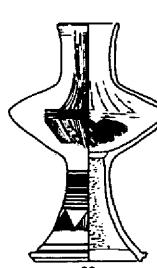
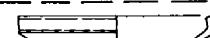
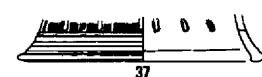
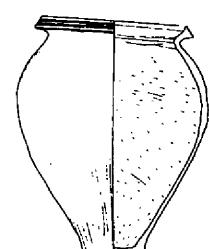
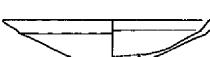
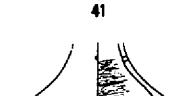
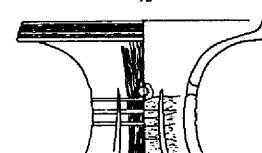
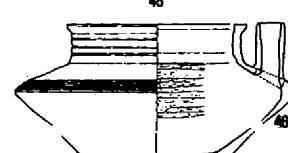
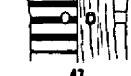
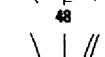
古式土師器としたものは、県南部では「王泊6層」(註42)あるいは「雄町13、14類」(註43)とした時期に相当する。器種が揃っていない点もあり、県南部と類似する器形が明瞭でない。大まかにみて前半と後半に区分できる。前半においては甕の口縁が1度屈曲して外反し、端部は丸みをもっている。口縁の内外面ともよこなでによる整形が行われている。内面は頸部以下がヘラ削りされている。国信調査区の包含層中で検出されたのはほとんどこの形態であることから、地域的な特色か、年代的な特色と考えられる。鼓形器台は安信丘陵部調査区出土のものであるが、中央部が短かく、口縁部及

西江遺跡(58)

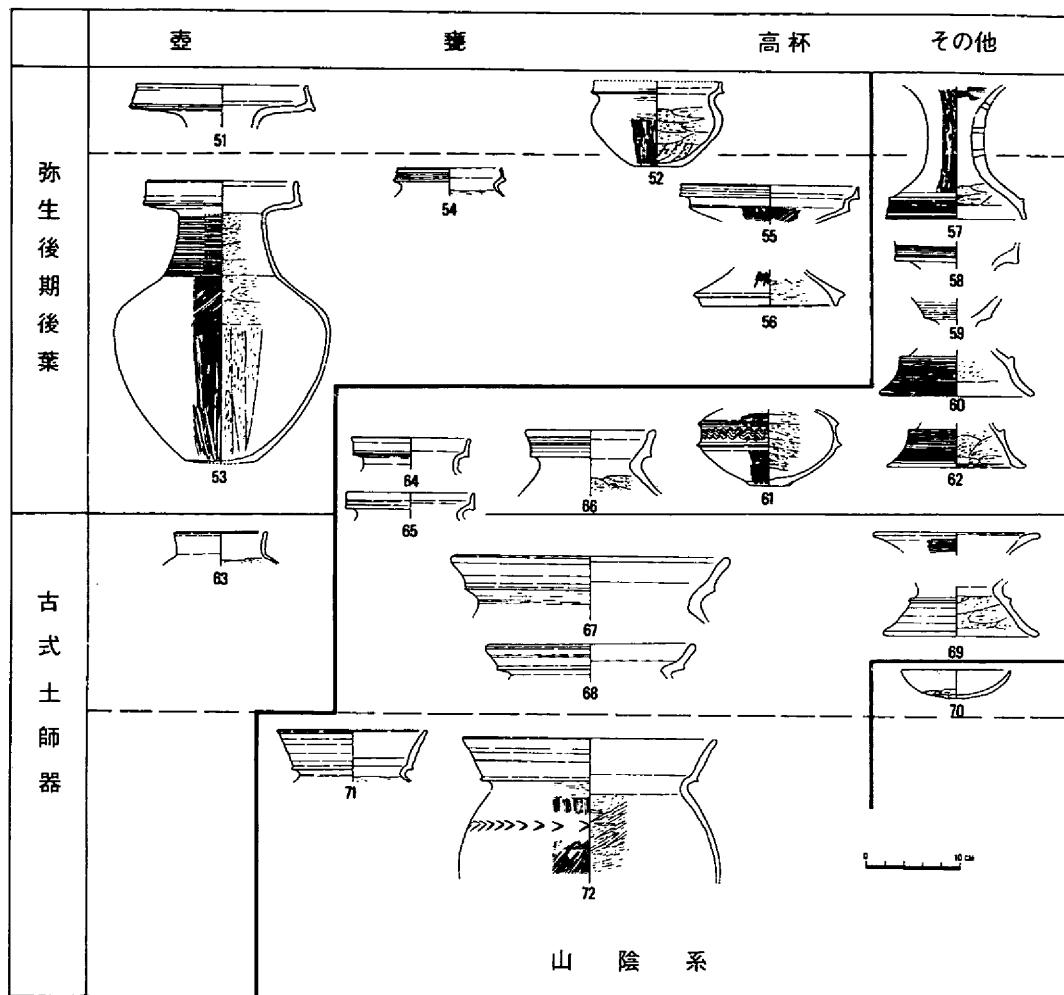
	壺	甕	高杯
弥生前期前葉	1 2 3	4	
前期中葉		5	
前期後葉	6 7	8	
中期前葉	9 10 11 12 13	14 15	
中期中葉	16 17	18	19 20 21 22 23 24 25
中期後葉	26	27 28	29

第197図 西江遺跡出土弥生式土器・土師器編年表(1)

西江遺跡(58)

	壺	甕	高杯	その他
中期後葉	30 	31 	32 	33 
後期前葉	34 	35 	36 	37 
中後葉		38 	39 	40 
		41 	42 	43 
		44 	45 	46 
		47 	48 	49 
		50 		

第198図 西江遺跡出土弥生式土器・土師器編年表(2)



第199図 西江遺跡出土弥生式土器・土師器編年表(3)

1~4・26~29・60西江平・11・12・63・70・71北井・
18~24・56・58・59・61・62・64・67・68国信・35・37
43実政・5~10・13~17・34・36・40・44田代・25・66
安信平地部・30~33・38・39・41・42・45~50・53~55
57・69・72安信丘陵部

び脚部が大きくひらく。端部の断面は丸い。この鼓形器台の出現する以前に新市谷遺跡出土（註44）の鼓形器台が系譜として入れればその継続性が理解しやすい。70の皿形土器は底部周辺の外面がヘラ削りされていて、「雄町13, 14類」に伴う器形である。南部で多く出土するものである。山陰系の土器としては、弥生後期後葉の後半から西江遺跡においてもつくられるようになり、県北西部地域の土器組成が大きく変っている。

この時期の後半の壺では、口縁部が頸部から湾曲しながら短かく外反し、くびれて斜上方へ大きく外反する。端部は角ばっている。肩部にはヘラ先の刺突による「ハ」字を横にした形の文様を配するものがある。この時期のものは神原神社古墳の墳丘で検出された土器（註45）と同じ形態のものがあ

る。この時期は「鍵尾Ⅱ式」(註46)と呼ばれる時期に相当するであろう。

西江遺跡の遺物などからみる特色としては、弥生後期から丹塗りを施された土器が多く、胎土にも雲母を含んで茶褐色を呈するものがある。これらの土器は祭祀遺構ばかりでなく居住区域においても多数みられる。また、長頸壺の系譜などでは県南部では短かくなつたあと長頸が継続し、高杯の器形でも脚部が肥厚したものが多数残っているといった地域色がみられる。これらの特徴は大きくみると岡山県南部の沖積平野部周辺と違つて、備中山間部に広がつてゐる。西江遺跡など県北西部では弥生終末頃から山陰系の土器が土器組成のなかにとり入れられるようになる。

第3節 土壙墓群と特殊器台・特殊壺について

安信丘陵部で検出された土壙墓は132基にのぼる。かつて丘陵の北側傾斜面の一部が道路のため削られていることから、さらに20~30基が存在したと推定される。したがつてその全体の数は約150基であったと考えるのが妥当であろう。そのうち、38~41号土壙墓の平面形が正方形に近い形を呈して他のものと異つてゐる点が気にかかる。他に近世墓が数例重なつてゐることから考えて、この時期に下降する可能性がないとは断定できない。ただ、同丘陵の近世墓の場合には集石がともなつていて先の土壙と異なる。いずれにしても多数の土壙墓が一定の範囲内に整然とつくられてゐる点が指摘される。分布範囲については弥生中期につくられた南へのびる平坦面上と東へのびる丘陵上にかぎられている。西側の丘陵部は広い面が存在するにもかかわらず、土壙墓がつくられていない。このことは土壙墓群をつくるにあたつて明確な範囲の規制が行つれていたことがわかる。また土壙墓の方位であるが、全体図及び一覧表をみてもわかるように土壙墓の主軸は等高線に平行するものと直行するものと2種類からなつてゐる。大部分のものは等高線に平行、すなわち尾根に直交している。等高線に直行するものもあるが、この場合、等高線に平行するものによって切られてしまつてある。この関係から時期の前後関係を示してゐるものと考えられるものが多い。同じ平行関係にあるもの場合にはほとんど切り合つてない。わずかに離れていて掘り方の上端部では若干の切りあいを考えねばならないものが多いにもかかわらず、床面において切り合うことはほとんどない。この点から埋葬された位置の示す目標物が存在したと推測される。土壙墓の埋土の中には中央部又は一方に寄つたところに人頭大からさらに大きな石を1個置いたのが6例確認された。この他に集石を1方あるいは2方に配したものもあり、石をもつて目標物としたことがわかる。この石が検出されたのはほとんど埋土中であり、中央部の陥没によつて上に置かれたものが沈下したものと考えられる。したがつて他の土壙で石の存在しないものについても流失等が考えられるが、石以外の目標物が存在した可能性がある。

土壙墓と総称したが石蓋土壙墓も5基検出され、かつて土取りの際に発見された「箱式石棺」もこれにあたると考えられるため、少なくとも6基以上存在したことになる。大きさの点では長さ2m位のものと長さ1m以下の小さなものの2種類があり、大人を埋葬したものと子供を埋葬したものとの区別とも考えられるものもある。石蓋土壙墓と特に小型の土壙では床面に木棺痕跡等をみとめることができず、木棺が使用されていなかつたと推定される。大型のものでは断面及び床面付近の平面観察

によると小口板の痕跡のあるもの、長方形に土質の異なるものなどが確認された。また長辺または短辺に詰石のみられるものもあり、木棺そのものは組合式であったと推測される。

土壙墓のつくられた年代については供献遺物の出土があり、いくつか限定して判断することができる。土壙墓内に副葬されていた土器はないが、土壙墓の上面に供献されていたもの、周辺へ流れた状態で検出されたものがある。

南土壙墓群の位置する中央部に露岩があり、その前面から丹塗りを施した弥生後期前葉の土器群がある。この土器群が土壙墓群に伴うかどうかについては、周辺の土壙墓からは弥生後期後葉の土器が土壙墓の上面から検出されるなど時期がかなりへだたっている。また、8個体分にあたる土器群はすべて同一時期のもので1度に用いられたものと推定される。弥生後期中葉の土器検出はなく、土壙墓群がつくられる以前に露岩の前面において何らかの儀式が行われ、これに用いられたもののように判断される。以上のものを除くと弥生後期後葉の土器が検出されている。供献された土器を伴う土壙はわずかの数しか存しない。土器には壺、甕、高杯などがあり、穿孔の行われているものがある。年代の下降するものは2、3点しか検出されていないが「鍵尾Ⅱ式」(註47)に相当する甕がある。したがってこの時期まで埋葬が行われていたと推定される。

土壙墓の調査では人骨がまったく検出されず、埋葬された人の性別、年令といったことはまったく判断できない。

土壙墓群の中に方形台状墓が2基検出されている。1基は北端部に位置し、既に道路によって大部分が削られているため、その主体部等についても明らかでない。ただ1基だけ周辺部分にあたる位置において、方形の一辺に平行し、半分残存した土壙墓を検出した。

この周辺部と道路へくずれた土の中から古い形式の特殊器台、特殊壺とそれ以外に高杯、鼓形器台壺、甕等の土器片が検出された。周辺西側の高みにも多数の土壙墓があって、東側に位置する方形台状に伴う土器群であるとの判断はかなり難しいが、その可能性は高い。もう1例の方形台状墓は南土壙墓群の北側に位置している。弥生中期につくられた平坦面を利用し、三方を削ってその土を盛りあげたらしい。北と東に貼り石を用いているのが検出された。さらに東にあたる傾斜面にも貼り石が存在したと推定されるが、現在その痕跡を確認できない。この方形台状墓には10基の主体が検出された。主軸の方向は等高線に平行するものと直交するものがある。大きさも長さ2m位のものと長さ1m以下の小さなもの両方が存在する。副葬品では、大きな土壙を切ってつくられた小型の土壙から水色のガラス玉17点が検出されただけで供献の土器群なども検出されなかった。水色のガラス玉はこの方形台状墓の南に位置する127号石蓋土壙墓においても数点検出されている。土壙墓全体についてみても、この2例以外からは副葬品が検出されなかった。

方形の台状を呈する墳墓は中西部瀬戸内沿岸部から一部山陰北陸地方等にひろがっていることが明らかになってきた。岡山県で従来南部に多数確認されていたが、中国縦貫道にかかる調査によって横見墳墓群(註48)が明確となり、西江のものも含めると県北の山間部においても一般的な葬制であったことが判断される。1基には高い方の側に浅い溝が掘られているが丘陵上に位置することや溝の深さが浅いことから方形周溝墓と区別される。2号方形台状墓には貼り石が用いられている。山陰の四

隅突出形方墳や県南の方形台状墓にみられる。どちらと関連が深かったかについては判断するのが難しい。

特殊器台と特殊壺は方形台状墓の近くで検出された古い形式のもの以外に70号土墳の上面付近で4基検出された。出土状況や個々については先に述べたが、そのあり方などについてみたい。特殊器台の脚部は2個が完全に原位置を保ち、1基は脚の一部が倒れかかっていた。さらに原位置を移動しているが、1基の胴部があり、合計4基の特殊器台と特殊壺が存在する。しかも、3基は直線的に並び、他の1基も含めて直線的に置き並べられていたものであろう。特殊器台と特殊壺の関係からすると2において特殊器台の口縁部の上に特殊壺の胴部がのった状態で倒漬したまま検出された。このことから、特殊壺は特殊器台の上にのせられていたものであることが確認される。また、特殊壺の胴部凸帯の直下には特殊器台の口縁部と接触することによって磨滅した状況が残っていて、1度のせられてすぐはずされたものではなく、しばらくの間は少なくとも上にのっていたと考えられる。特殊壺の底部には製作の最終段階で外面をヘラ削りしている。また、1例しか確認できていないが、このヘラ削りの際底部へ円形の穿孔を行っているものがある。おそらくは他の3個の壺もそれぞれ同様の円孔が配されていたものであろう。底部周辺のヘラ削りも特殊器台の上にのせることを意識してなされたものであることを示している。特殊器台の形態は一般的にみとめられるものであり、従来の発見例と異なるものはない。特殊器台の配置の状況が直線的に3~4基並べられていて、しかも文様帶の文様が細部に違いがみとめられる。これは重要な意味をもっていると考える。特殊壺も4例とも異っている。文様は「S」字状文等の基本は変らず、細部に違いがみられる。このことから同時にたて並べられた4個体はそれぞれ別の人によってつくられた可能性がある。近年、県内の特殊器台を出土する墳墓の調査が相次いで行われた(註49)。その結果、いくつかの違った形のものが同じ墓域で出土している。年代的に継続しているものも多い(註50)。また、同時期のものが多数存在していることも推定される。

西江遺跡で検出された特殊器台、特殊壺についてみると、1号方形台状墓の周辺で検出されたものは現在までまったく同じものは出土していないが間帯にヘラ描き沈線文、文様帶に綾杉文を配するなどの形態は芋岡山遺跡(註51)に類似するものがある。狐塚氏の区分する第Ⅱ段階第1型式に相当するものである(註52)。並べて置かれた4基は近藤氏の言う向木見型(註53)、狐塚氏の区分では第Ⅱ段階第3型式(註54)に相当する。以上の4個体以外にも若干の破片が存在する。特殊器台の下には土壙墓が存在し、この土壙墓よりのちに置かれたことは確かだが、隣接するところには他と異った埋葬主体は検出されていない。

以上の事実から考えられることは、特殊器台を用いて行われた埋葬に伴う儀式は同一墓域において何度か時間をことにして行われたことがわかる。また、同じ儀式に対して複数の特殊器台、特殊壺が用いられたこともわかる。そして、これらの特殊器台は岡山の県南、県北を通じて同じ形態、同じ文様変化、同じような胎土を用いる等の状況から特定の人達によって製作されたと推定される。西江遺跡においては少なくとも4人以上の製作者がこの製作に加わったものと推定される。なぜ複数の特殊器台、特殊壺の並置が必要であったのかについても考えてみなければならない。製作者の集団はど

の地域の共同体に属していたのかについても疑問である。これらの儀式が岡山を中心とする地域で行われていることについて、狐塚氏は「吉備を一円とする集団群によって承認された各地域の首長権の継承儀礼」であると見解を述べている(註55)。

西江遺跡の特殊器台は土壙墓群の一角へ直線的に樹立されていたが、このことの意味はどのように考えるべきであろうか。いうまでもなく、古墳は定型化し、埴輪が普及すると、埋葬主体のある上部に方形区画をつくるように配置されているものがある。調査が行われて公表された資料によると特殊器台及び初期の埴輪あるいは狐塚氏のいう第Ⅲ段階の特殊器台は埋葬主体を囲むように配置されたものではなく、前方後円墳では前方部の一画へまとまっていたもの(註56)や後円部の一部にたてられたものが検出されている。方形台状墓等に伴って出土した特殊器台の配置の状態については近年の調査にかかる報告が公表された後にその関連を考えてみたい。

西江遺跡周辺には弥生後期の集落遺跡がいくつか分布しているが、今までに特殊器台を検出した遺跡はない。地形的な観察からすると哲西中学校が所在する横田遺跡から北の佐藤遺跡の周辺まで細長く谷及び台地状の地形が続く。このことはこの範囲の首長がある時期に西江遺跡の一角の墓地に埋葬されたと考えることもできる。この南方では横田遺跡の南から広島県境の岸本城、岸本下遺跡(註57)まで先と同種の地形が続く。この地域では岸本城及び岸本下遺跡で土壙墓群が検出されているが、特殊器台の出土はない。他の遺跡において出土する可能性もある。北方では古坊遺跡の土壙群に伴って特殊器台・特殊壺が出土している。以上の状況は神郷町の南部を1つの範囲とした集団領域を示し、西江遺跡の含まれる上神代を一つの集団領域とし、さらに南に1つの集団領域を想定できる。より広い範囲についてみると、その他にも谷や台地を含む地域があって、集落跡が存在する。西江の安信土壙墓群には「鍵尾Ⅱ式」の時期まで少なくとも一部が継続していることが確認される。特殊器台そのものは、これより古い時期のものまでしか存しない。谷をはさんだ前の光坊寺古墳群は11基から成っている。報告書(註58)によるとその初期と考えられる1号墳は5基の主体部があり、2段の葺石を外表にめぐらした直径約14mの円墳である。その1号主体からは高杯、埴輪が出土し、4号主体からは低脚杯と鉢、5号主体からは珠文鏡とガラス製小玉を出土している。この古墳以降10基が同丘陵上に並びその継続が推定される。大型の古墳ではなく、方形ないし円形を呈している。内部主体に横穴式石室をもつものが多く、前期から中期にかけての古墳群と考えられる。先に述べた安信土壙墓群の終末と光坊寺古墳群の開始の時期が一致していることは、その関係が偶然とは考えがたい。光坊寺1号墳築造の直前と考えられる特異な埋葬主体が検出されていないため、厳密に首長の墓地の継続性を確認するには至らない。しかし、光坊寺古墳群へ埋葬された首長グループへひきつづいたと考えるのはあながち不当ではなかろう。

光坊寺古墳群は調査された限りでは共同墓地がなく、西江の安信土壙墓群にも時代の下降する土壙墓は存在しない。共同墓地としては新たな地点が定められたと考えられる。周辺の別の集団領域に前期古墳が発見されていないことからすると、あるいは周辺の特殊器台を樹立するような集団をいくつか兼ねた首長であった可能性もある。西江の安信土壙墓群に樹立された特殊器台の最終時期から集落で用いられる土器組成の中に山陰系の土器が多量に用いられるようになることが指摘できる。光坊寺

1号墳から検出された土器に低脚杯があり、副葬品にも山陰系の要素がうかがわれる。古墳の成立をはじめその文化的要素の中に山陰との関連による点が存在していたことが想定され、今後広域な検討の必要を感じている。

第4節 西江遺跡出土の師楽式土器について

岡山県西北端の山間部に位置している西江遺跡から師楽式土器がかなり多量出土したことは、いろいろの問題を提起するものである。

第1に考えられる点は、西江遺跡出土の「師楽式土器」がはたして瀬戸内沿岸のいわゆる製塩土器(師楽式土器)と同じであるか否かという点である。岡山県北部においてタタキを施している土器は畿内から伝わった弥生時代後期のものが知られているが、それ以外にも、この「師楽式土器」がある。師楽式土器を含む土壙は6世紀後半の須恵器も併存しているので、まずこの時期に属するものとしておさえられる。技法的にみても、器壁に認められる剝離現象からみても、この時期に瀬戸内沿岸でさかんにつくられた製塩土器とまったく同一とすることができる。つまり西江遺跡出土のものは瀬戸内沿岸における師楽式土器そのものである。

第2の問題点は、なぜ山間部のこの遺跡から多量の師楽式土器が出土するのか。最近、山間部に存在する遺跡から少量ずつではあるが師楽式土器の出土が知られている(縦貫道関係に限れば、上房郡北房町谷尻遺跡・新見市宗金遺跡・阿哲郡神郷町新市谷遺跡、哲西町大倉遺跡をあげることができる)。これらの遺跡から出土は1~数片であるのに対して、西江遺跡では400片近く出土し、さらに完形品も出土している。このことは、まず、西江遺跡へ塩が集められ、その上でこの地方一帯に分配されていったと考えられる。

第3にどのようにして塩が運ばれたのか。塩の運搬には川すじと陸路を利用したと考えられる。少し時代が下がる(平安時代初期)が真庭郡落合町下市瀬遺跡(註59)では、川舟として完成した形の舟のミニチュアが出土しており、6世紀後半にも川舟を利用していたと考えることは困難ではない。また、各地の後期古墳から多くの馬具が出土している。この馬具は、一般的には乗用に供されたとされているが、馬を乗用するのみでなく、荷物の運搬用として利用したと考えることもできよう。川舟あるいは馬を利用したとする考えが許されるならば、山間部へ大量の塩を運ぶ手段は解決されよう。

第4に、運搬するための入れ物は何を使ったか。師楽式土器だけをわざわざ運ぶ必要はないので、当然この土器の中へ塩を入れて持ってきたものである。製塩のための土器を運搬具として転用したものである。にがりを含んだ塩であろうと焼塩であろうとなぜこわれやすい土器を運搬用器として利用したのか疑問が残る。

今後の問題として、西江遺跡に集められた塩がどのような形で各地に分配されていったか解決していく必要があろう。

(註)

- (1) 高畠、福田「二野遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」15、岡山県教育委員会、1977。
- (2) 哲西町「哲西史」1963。
- (3) 高畠他「谷尻遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」11、岡山県教育委員会、1976。
- (4) 田仲、福田、二宮、竹田「桃山遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」12、岡山県教育委員会、1976。
- (5) 井上、竹田「新市谷遺跡の調査」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」15、岡山県教育委員会、1977。
- (6) 橋本、岡田、山磨「官尾遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」5、岡山県教育委員会、1974。
- (7) 前島巳基「出雲における古墳文化の生成」「季刊文化財」第18号、島根県文化財保護協会、1972。
- (8) 東森市良「九重式土器について」「考古学雑誌」第57巻第1号、1972。
- (9) 田辺昭三「陶邑古窯址群I」平安学園考古学クラブ、1966。
- (10) 高橋、中力、葛原、伊藤、泉本、栗野、正岡「雄町遺跡」「埋蔵文化財発掘調査報告」岡山県教育委員会、1972。
- (11) 田辺昭三「陶邑古窯址群I」前掲。
- (12) 高橋他「雄町遺跡」前掲。
- (13) 伊藤、柳瀬、池畠、藤田「上東遺跡の調査」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書」第2集、岡山県教育委員会、1974。
- (14) 末永雅雄「日本鉄鎌形式分類図」「古代学」第16巻、財団法人古代学協会、p. 290。
- (15) 井上、竹田「古坊遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」15、岡山県教育委員会、1977。
- (16) 「青木遺跡出土土器編年表」の33の土器出土遺構名はH S I 45とある。鳥取県教育委員会「青木遺跡発掘調査報告書I」1976。
- (17) 高橋 譲「児島市向木見遺跡発見の二・三の遺物」「考古学手帖」1960。
- (18) 高橋 譲「宮山墳墓群出土の土器」「土師式土器集成」2、東京堂出版、1972。
- (19) 井上、田仲「平遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」5、岡山県教育委員会、1975。
- (20) 岡田、井上、栗野「備中平遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」7、岡山県教育委員会、1976。
- (21) 中国縦貫道建設に伴い岡山県教育委員会が発掘調査を実施した遺跡で1977年度において報告書の刊行が予定されている。
- (22) 高畠、福田「二野遺跡」前掲。
- (23) 鎌木義昌「山陽地方II」「弥生式土器集成」本編、1964。
- (24) 松本、友成「大倉遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」20、岡山県教育委員会、1977。
- (25) 中国縦貫道建設に伴い県教育委員会の事前調査によって出土した。
- (26) 鎌木義昌「門田貝塚の文化遺物について」「吉備考古」84号、1947。
- (27) 同 上
- (28) 鎌木義昌、近藤義郎「岡山県高田遺跡」「日本農耕文化の生成」1961。
- (29) 山本 清「山陰地方II」「弥生式土器集成本編」1964。
- (30) 出宮徳尚「南方遺跡発掘調査概報」岡山市教育委員会、1971。
- (31) 高畠、福田「二野遺跡」前掲。
- (32) 鎌木義昌「山陽地方II」前掲。
- (33) 正岡「岡山市乙多見における溝改修工事に伴う出土品」「岡山県埋蔵文化財報告」3、岡山県教育委員会、1973。
- (34) 枝川、正岡、大谷「川入遺跡の調査」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」第2集、岡山県教育委員会、1974。
- (35) 高橋他「雄町遺跡」前掲。
- (36) 高橋 譲「郷内村小学校裏貝塚出土の弥生式土器の編年的位置について」「遺跡」23号、瀬戸内考古学会、1955。
- (37) 藤田 等「備中哲西町の弥生式遺跡」「古代吉備」第4集、1961。

西江遺跡(58)

- (38) 鎌木義昌「岡山県倉敷市酒津遺跡の土器」「弥生式土器集成」資料編 1968.
- (39) 上房郡北房町桃山遺跡、阿哲郡神郷町新市谷遺跡で出土している。
- (40) 東森市良「九重式土器について」前掲。
- (41) 近藤、前島「島根県松江市の塙土壙墓」「考古学雑誌」第57巻4号、1972.
- (42) 坪井清足「岡山県笠岡市高島遺跡調査報告」1951.
- (43) 高橋他「雄町遺跡」前掲。
- (44) 井上、竹田「新市谷遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」15、岡山県教育委員会、1977.
- (45) 前島己基、松本岩雄「島根県神原神社古墳出土の土器」「考古学雑誌」第62巻第3号、1977.
- (46) 近藤、前島「島根県松江市の塙土壙墓」前掲、前注の文献では「小谷式」を設定し、かつて「鍵尾Ⅱ式」としたものとの新しい部分を区分する見解も出されている。
- (47) 同上
- (48) 下沢、友成「横見墳墓群」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」15、岡山県教育委員会、1977.
- (49) 真庭郡落合町中山遺跡(調査者落合町教委他)、高梁市本郷遺跡(鎌木義昌)、阿哲郡神郷町古坊遺跡(県教委)、倉敷市橋築山遺跡(近藤義郎)、吉備郡真備町黒宮古墳(間壁忠彦他)等の調査が行われた。
- (50) 狐塚省蔵「吉備型器台論(下)」「異貌」5、1976.
- (51) 間壁忠彦、間壁葭子「岡山県芋岡山遺跡」「倉敷考古館研究集報」第3号、1967.
- (52) 狐塚省蔵「吉備型器台論(下)」前掲。
- (53) 近藤義郎、春成秀爾「埴輪の起源」「考古学研究」51号、1967.
- (54) 狐塚省蔵「吉備型器台論(下)」前掲。
- (55) 同上 「 」中の要約は筆者による。
- (56) 京都府向日市元稻荷古墳では前方部でまとまって検出された。京都大学文学部「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」「史林」第54巻6号、1971.
- (57) 中国縦貫道の建設に伴い県教委による発掘調査が実施された。
- (58) 高畠、福田「光坊寺古墳群」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」15、岡山県教育委員会、1977. なお、光坊寺古墳群との関連については福田正継氏らとの討議による。
- (59) 新東、田仲「下市瀬遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」3、岡山県教育委員会、1973.



1. 西江遺跡全景（東から）



2. 西江遺跡全景（東から）

図版2



1. 西江平調査区柱穴群（南東から）



2. 大型堅穴住居址（南から）



1. 北井調査区（北）全景（北から）



2. 北井調査区（南）全景（北から）

図版4



1. 1.2号住居址（北から）



2. 井戸（東から）



1. 国信調査区(北)全景 (南から)



2. 1号住居址 (南から)

図版6



1. 国信調査区(南) (東から)



2. 国信調査区(南) (北東から)



1. 3号建物（南東から）



2. 7号住居址（南から）

図版8



1. 9. 10号住居址（南から）



2. 縄文式土器出土の土壤（南から）



1. 国信調査区(南区東) (北から)



2. 1.2号住居址 (北から)

図版 10



1. 縄文式土器



2. 弥生式土器



3. 石 器



4. 鉄 器



1. 実政調査区 1号住居址（南から）



2. 大型土壌周辺（南から）

図版 12



1. 中央部住居址・土壤検出状況（北から）



2. 5号住居址、土壤1~3（北から）



1. 土壌 3. 師楽式土器出土状況（南から）



2. 土壌 3. 師楽式土器出土状況（東から）

図版 14



1. 4号住居址遺物出土状況（東から）



2. 3.4号建物周辺（北から）



1. 1号建物・6号住居址（西から）



2. 7号住居址（北から）

図版 16



1. 5号建物周辺部（北から）



2. 2号建物（南から）



1



2



3



4



5



6



7



8

土師器・須恵器・師楽式土器

図版 18



1. 師楽式土器



2. 鉄 器



3. 石 斧



1. 藤安調査区(南)全景 (北から)



2. 錫冶炉 (東から)

図版20



1. 田代調査区(北)全景(1) (北から)



2. 田代調査区(北)全景(2) (北から)



1. 田代調査区(北)全景(3) (南から)



2. 田代調査区(北)全景(4) (南から)

図版22



1. 11号住居址（東から）



2. 6号住居址（南から）



1. 10号住居址周辺（北東から）



2. 9号住居址（東から）

図版24



1. 12号住居址（東から）



2. 13号住居址（東から）



1. 田代調査区(南)全景 (北から)



2. 3号住居址 (東から)

図版26



1. 2号土壤墓（東から）



2. 3号土壤墓（東から）



1



2



12



3



4



13



5



6

7

8

9



14



10



11



15



16

住居址出土遺物 (1~11—9号住居、12~10号住居
(13~14—11号住居、15~16—12号住居)

図版28



1



2



4



3



5

6

須恵器・鉄器



1. 亀山焼擂鉢



2. 釜形土器

図版30



1. 安信平地部調査区全景 (東から)



2. 安信平地部調査区北東部 (南東から)



1. 安信丘陵部調査区北土壤墓群(1) (南から)



2. 北土壤墓群(2) (東から)

図版32



1. 南土壤墓群（南から）



2. 2号方形台状墓（北から）



1. 2号方形台状墓南側貼石（南から）



2. 113号土壤墓供献土器出土状況（東から）

図版34



1. 127号石蓋土壙墓（東から）



2. 115号土壙墓（東から）



1. 特殊器台出土状況(1) (西から)



2. 特殊器台出土状況(2) (東から)



3. 特殊器台出土状況(3) (南から)

図版36



1. 2, 3号墳全景 (南から)



2. 2, 3号墳全景 (掘りあげ後)



1. 3号墳周辺遺物出土状況



2. 5号墳全景（南から）

図版38



1. 4号墳全景（東から）



2. 4号墳遺物出土状況（東から）

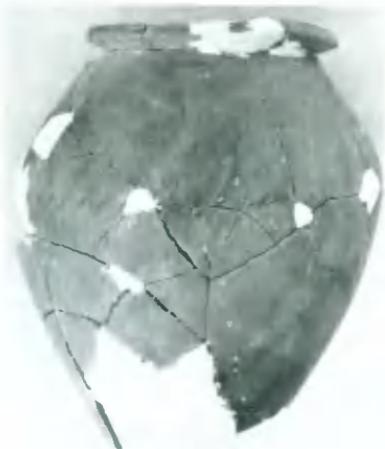


1. 1号墳全景（東から）



2. 6号墳全景（北から）

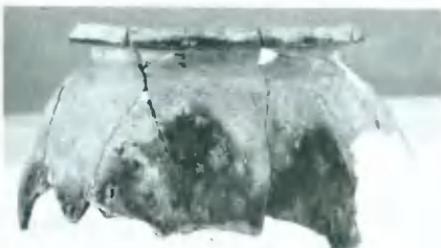
図版40



1



2



3



5



4

弥生式土器（中期）



1



2



3



4

弥生式土器（後期）

図版42



1



2



3



4



5



6

土壤墓群周辺出土の土器

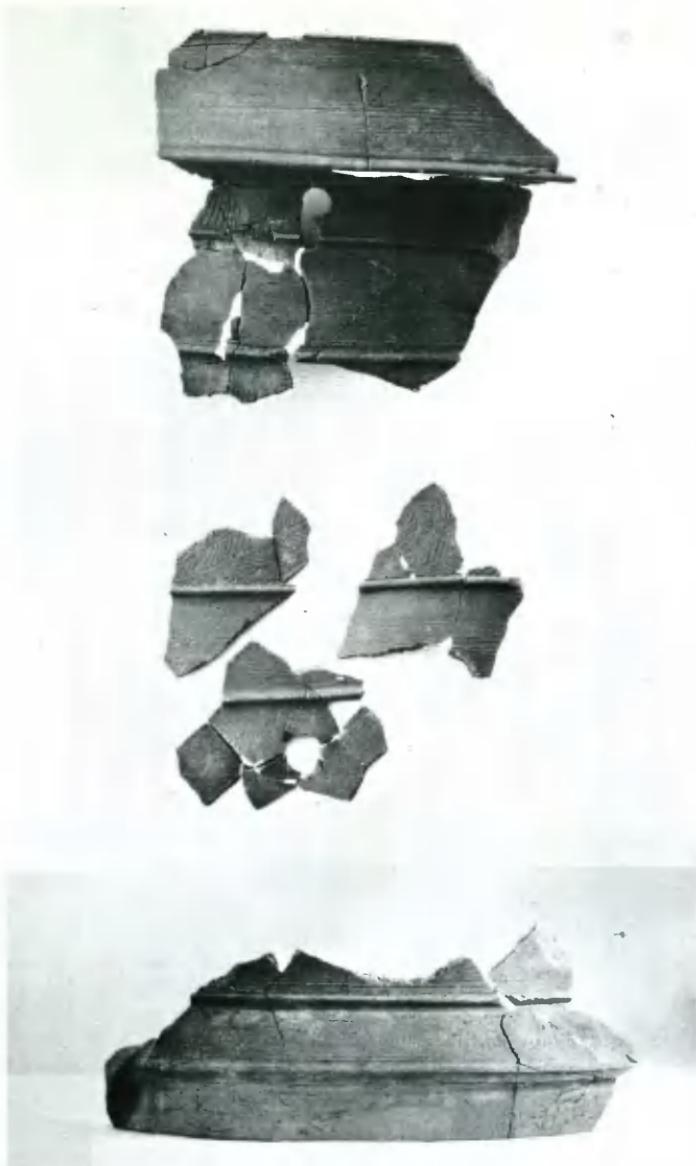


特殊器台1

図版44



特殊器台2



特殊器台3

図版46



1. 特殊器台4



2. 1号方形台状墓周辺出土の特殊器台



1



2



3



4

特殊壺 1 (1.2)、特殊壺 2 (3.4)

図版48



1



2



3



4



5

特殊壺3(1~3)、特殊壺4(4.5)



1



2



3



4



5



6

3号墳出土土器(1~4), 4号墳出土(5.6)

図版50



1



4



2



5



6



3



7

古墳出土須恵器

土 井 遺 跡 (61)

土井遺跡(61)

総 目 次

執筆者

第1章	はじめに	(福田正継)	468
第2章	調査の経過	(福田)	471
第3章	遺跡の概要	(福田)	472
第4章	各遺構について	(福田)	475
第5章	遺構に伴わない遺物	(福田)	498
第6章	まとめにかえて	(福田)	509

表 目 次

表1	土井遺跡発掘調査記録(作成:福田)	468
表2	土井遺跡検出建物規模一覧表(作成:福田)	478
表3	土井遺跡遺構一覧表(作成:福田)	497

図 目 次

第1図	土井遺跡周辺地形図(作成:福田)	469
第2図	土井遺跡調査区および地形図(作成:福田)	470
第3図	土井遺跡遺構全体図(作成:福田)	473
第4図	1区東西トレンチ土層断面図(1)(実測・製図:高畠知功)	474
第5図	2区南北トレンチ土層断面図(実測・製図:高畠)	474
第6図	1区東西トレンチ土層断面図(2)(実測・製図:高畠)	475
第7図	2区東西トレンチ土層断面図(実測・製図:高畠)	475
第8図	1区遺構配置図(作成:福田)	476
第9図	2区遺構配置図(作成:高畠)	477
第10図	No.1建物(実測・製図:高畠)	479
第11図	No.2建物(実測・製図:高畠)	479
第12図	No.3建物(実測・製図:高畠)	480
第13図	No.4建物(実測・製図:高畠)	480
第14図	No.5建物(実測・製図:高畠)	482
第15図	No.6建物(実測・製図:高畠)	482
第16図	No.7建物(実測・製図:高畠)	484
第17図	No.8建物(実測・製図:高畠)	484
第18図	No.9建物(実測・製図:高畠)	484
第19図	No.16建物(実測・製図:高畠)	484

土 井 遺 跡 (61)

第20図	No.10建物（実測・製図：福田）	486
第21図	No.11建物（実測・製図：福田）	486
第22図	No.12建物（実測・製図：福田）	487
第23図	No.13建物（実測・製図：福田）	487
第24図	No.15建物（実測・製図：福田）	489
第25図	No.14柱列（実測・製図：福田）	490
第26図	No.17建物（実測・製図：高畠）	490
第27図	No.18建物（実測・製図：高畠）	490
第28図	No.19柱列（実測・製図：高畠）	492
第29図	No.20建物（実測・製図：福田）	493
第30図	No.21建物（実測・製図：福田）	493
第31図	No.22建物（実測・製図：福田）	494
第32図	No.25土壤（実測・製図：高畠）	496
第33図	No.25土壤出土土師器（実測・製図：福田）	496
第34図	弥生式土器（実測・製図：福田）	499
第35図	奈良時代～鎌倉時代の土器（実測・製図：福田）	502
第36図	須恵器片・須恵系瓦質土器（亀山焼）片の拓本（実測・製図：福田）	504
第37図	備前焼播鉢形土器・壺形土器（実測・製図：福田）	505
第38図	陶磁器（実測・製図：福田）	508
第39図	石鋸（実測・製図：福田）	508

図 版 目 次

- 図版 1—1 1区東西トレンチ土層断面（北西より）(撮影：高畠)
 　　2 1区東西トレンチ土層断面（南東より）(撮影：高畠)
- 図版 2—1 2区 No.1 建物（南々東より）(撮影：高畠)
 　　2 2区 No.2 建物・No.19・23・24溝（南西より）(撮影：高畠)
- 図版 3—1 2区 No.1・2・3・4・5・6・7・8・9・16建物（南西より）
 　　(撮影：高畠)
 　　2 2区 No.5・6・16・17建物（南西より）(撮影：高畠)
- 図版 4—1 2区 No.3・4・5・7・9建物（北東より）(撮影：高畠)
 　　2 2区 No.3・4・5・7・8・9建物（北東より）(撮影：高畠)
- 図版 5—1 2区 No.19柱列（南東より）(撮影：高畠)
 　　2 2区 No.19・23・24溝（北東より）(撮影：高畠)
- 図版 6—1 2区調査後全景（南西より）(撮影：高畠)
 　　2 土井遺跡調査後全景（南より）(撮影：高畠)

土 井 遺 跡 (61)

- 図版 7—1 1 区 №22 建物土層断面（北より）（撮影：高畠）
2 1 区 №10・22 建物（南より）（撮影：高畠）
- 図版 8—1 土井遺跡出土須恵器片（撮影：福田）
2 土井遺跡出土弥生式土器片（撮影・福田）
- 図版 9—1 須恵器片・須恵系瓦質土器片外面（撮影：福田）
2 須恵器片・須恵系瓦質土器片内面（撮影：福田）
- 図版 10—1 №25 土壙出土土師器（撮影：福田）
2 2 区出土石鎚（撮影：福田）
3 №16 建物柱穴内出土古錢（景祐元寶）（撮影：福田）
4 土井遺跡出土鉄滓（撮影：福田）
- 図版 11—1 備前焼擂鉢外面（撮影：福田）
2 備前焼擂鉢内面（撮影：福田）
- 図版 12—1 備前焼擂鉢片外面（撮影：福田）
2 備前焼擂鉢片内面（撮影：福田）
- 図版 13—1 土井遺跡出土陶磁器片外面（撮影：福田）
2 土井遺跡出土陶磁器片内面（撮影：福田）
- 図版 14—1 土井遺跡出土染付土器内面（撮影：福田）
2 土井遺跡出土染付土器内面（撮影：福田）

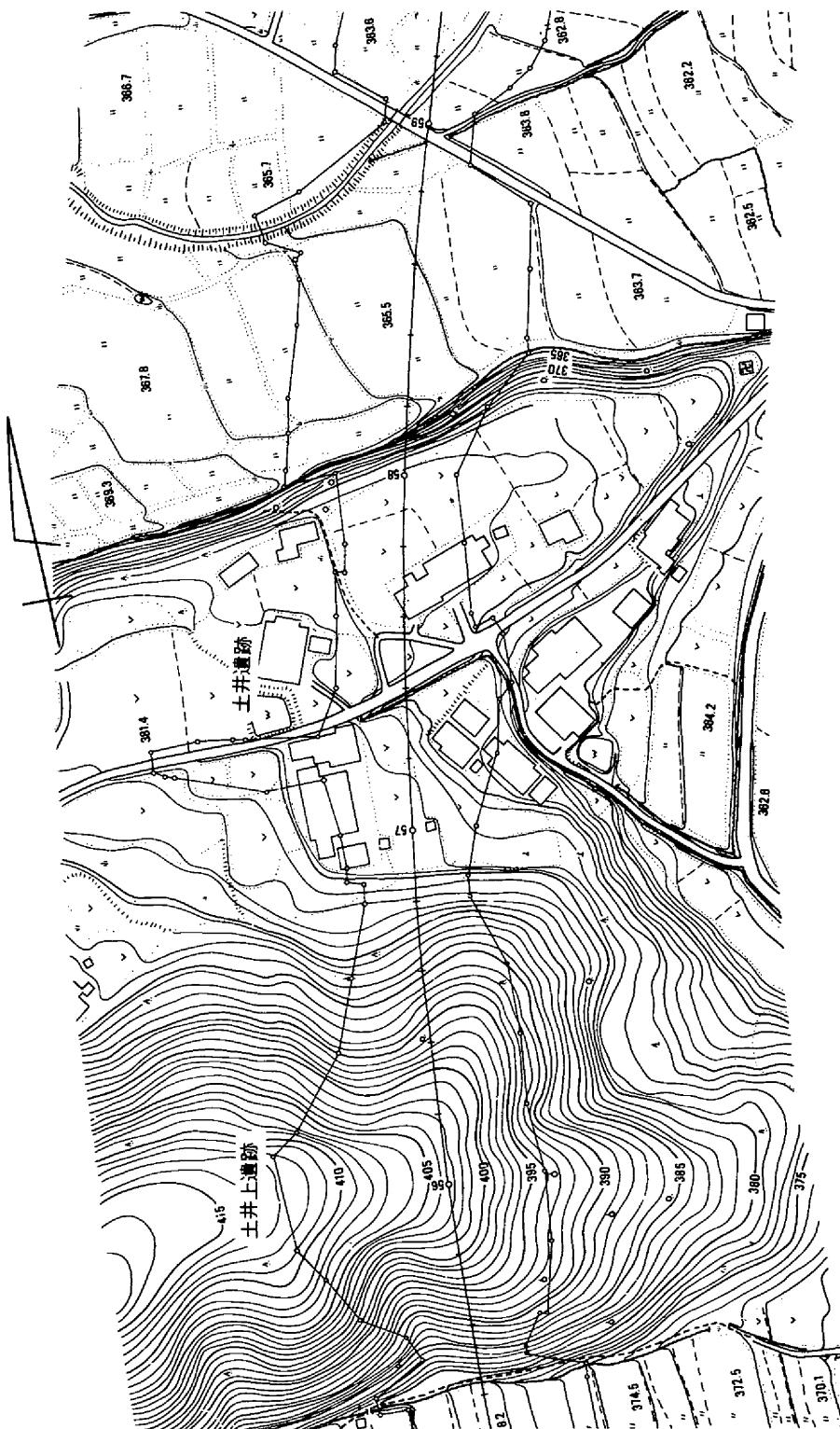
第1章 はじめに

本報告書は中国縦貫自動車道路建設に伴い、記録保存を目的として行った埋蔵文化財発掘調査概要である。

土井遺跡発掘調査記録（表1）

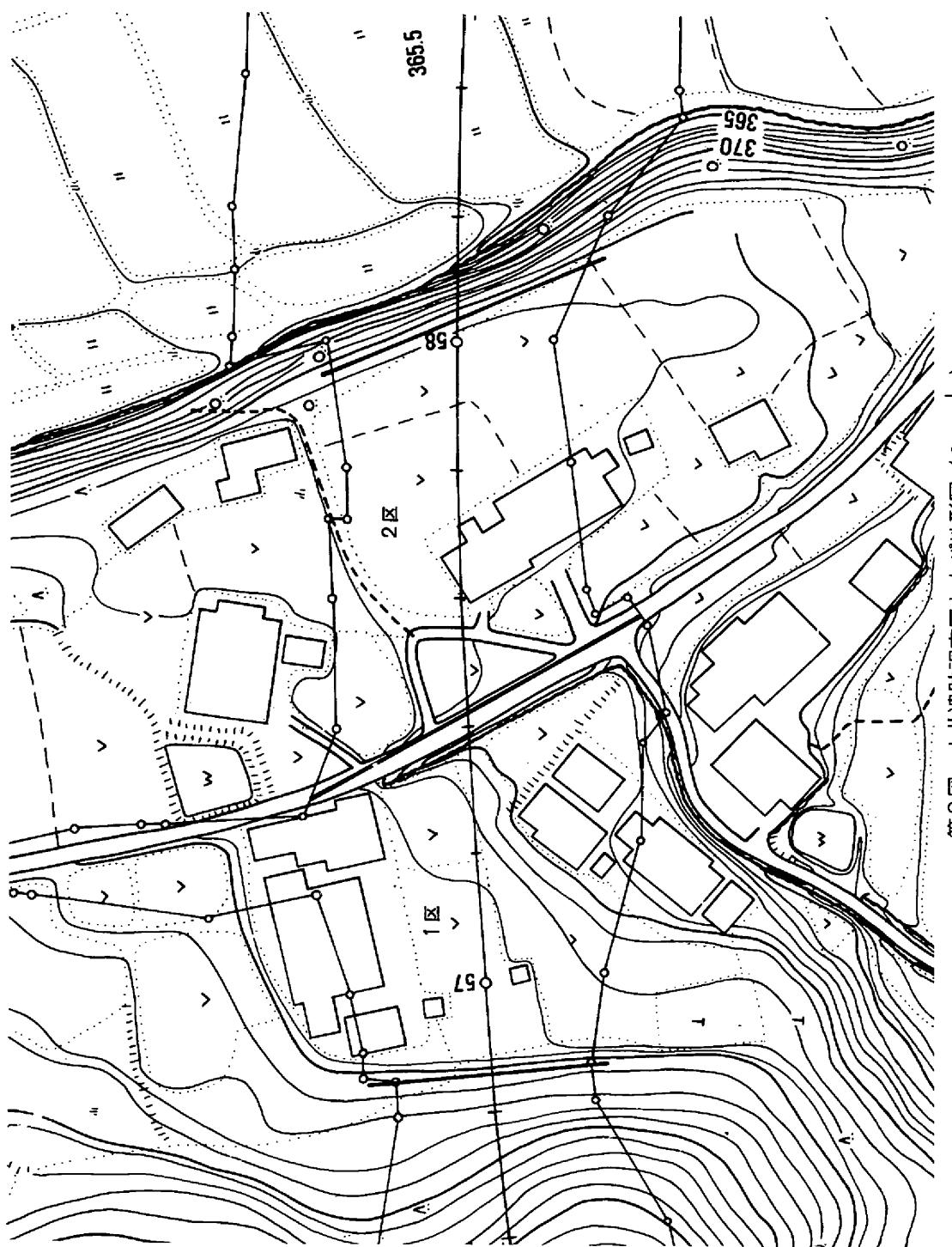
遺跡名	土井遺跡 (阿哲郡哲西町大字矢田小字土井)	合計	備考
発掘期間	昭和50年10月1日より 11月30日まで2ヶ月 (実働日数 38日) 1ヶ月平均 19日実働	2ヶ月 (38日)	◦ 10, 11の2ヶ月を調査予定に行ったが前半は二野遺跡、後半は野田畠遺跡と並行して調査を進めた。
発掘作業員	男 - 316人 計 - 778人 女 - 462人 1日平均 - 20.5人	778人	◦ 哲西町内の農家の人が主体となる。 ◦ 哲西町内の農繁期は6・10月である。
調査担当者	高畠知功 昭和50年10月1日より 福田正継 昭和50年11月30日まで 昭和50年10月1日より 昭和50年11年30日まで	94人	◦ このパーティの担当遺跡は二野遺跡、光坊寺古墳群、土井遺跡、野田畠遺跡、塚の峯遺跡である。
発掘面積	1区 1516m ² 2区 1641m ² (STA57+00~58+20)	3157m ² (延長120m)	◦ 町道部分は調査を行っていない。 ◦ 1区の表土除去はブルトーラーを使用した。
遺構	1区 9遺構(建物9棟) 2区 18遺構(建物11棟)	27遺構 (建物20棟)	◦ 遺構一覧表参照。
遺物	弥生式土器片・石鐵・須恵器片・土師器片・須恵系瓦質土器片・古錢・備前焼片・陶磁器片・鉄滓・染付け容器片	コンテナ 6箱	◦ 岡山市西古松265文化課分室にて保管。
写真	白黒 4×5判 - 48枚 (12枚×4本) 35mm - 36枚 (36枚×1本) カラー 35mm - 180枚 (36枚×5本)	264枚	◦ 遺構写真撮影は高畠が担当した。 ◦ 遺物写真撮影は福田が担当した。
報告書作成	高畠知功 報告書作成期間なし。 福田正継 2区担当 昭和52年3月21日より 昭和52年6月20日まで 1区担当	3ヶ月	◦ 高畠は津山市二宮遺跡の発掘調査を担当しており、それと並行しての作成となった。 ◦ 福田が岡山市の文化課分室で作成を行った。

土 井 遺 跡 (61)



第1図 土井遺跡周辺地形図 ($S = \frac{1}{2000}$)

土井遺跡(61)



第2図 土井遺跡調査区および地形図 ($S = \frac{1}{1000}$)

第 2 章 調 査 の 経 過

この調査は中国縦貫自動車道路建設に伴うものである。発掘調査実施以前に行われていた分布調査で『舌状に延びる台地上で須恵器を採集したが、遺跡の存在は明らかでない。トレンチ調査が必要である』という結果が示され、道路用地内センター杭のSTA57+40~58+20までの延長80mを対象に遺跡の存在の有無を確認することを当面の目的として発掘調査が計画された。この調査は高畠知功と福田正継が担当することになった。

調査範囲の下草刈りを行った後に、STA47+80のセンター杭を起点に、磁北を基準としてグリッドを設定し、トレンチ調査を実施した。その結果、掘開したどの位置にも柱穴が存在し、建物群が全面に存在することが予想されたので、調査範囲内の全面発掘調査を行うことにした。また調査範囲が台地上を東西に縦断する町道までに線引きされていたが、町道より南側の道路用地で調査予定地外になっていた位置も、トレンチ調査を行った場所とほぼ同じような状態の延長部分になっていたので、建物群が統一して存在する可能性が考えられた。そこで町道より南側の調査予定地外の範囲については、とりあえずトレンチ調査を行うことになった。

町道より南側の位置は、水田と畑になっていた。グリッドの基準線に沿って東西方向に幅5mのトレンチを2本掘削した。その結果、柱穴をトレンチの壁面で検出し(第4図、図版7-1)、トレンチの中央部分では柱根が残存する柱穴が存在した。また水田部分は表土から遺構面まで土砂の堆積が厚く、人力で調査を進めることは困難であると判断された。

このように土井遺跡では、最初にトレンチ調査を主体にして遺跡の存在の確認を行ったところ、建物群の存在することが判明し、遺跡の広がりも当初の調査予定範囲よりも拡大することを把握した。そこで、文化課と高梁教育事務所は日本道路公団と協議を行い、調査範囲を道路用地の南側に60m追加し、STA56+80~58+20の延長140mまでの範囲となった。

なお町道から南側の追加された調査範囲は、遺構面までの土砂の堆積が厚いので重機による排土作業を行った。町道部分は発掘調査を行っていない。発掘作業は、当初の調査範囲である町道より北側部分から行い、町道南側の追加範囲へ進めた。

報告書作成にあたっては、発掘を担当した調査員が、その遺構をまとめることを原則として進めたが、調査員の一人高畠知功文化財保護主事は、他の事業である国道179号バイパス関連の諸遺跡にたずさわらざるをえないという現状があり、やむなく福田がとりまとめを行った。

第3章 遺跡の概要

遺跡は、岡山県阿哲郡哲西町大字矢田小字土井に存在する。国鉄芸備線矢田駅の西方向に位置し、舌状に張り出したなだらかな台地になっている。この土井遺跡の北方向の山陵の尾根には光坊寺古墳群（註1）が存在し、そのうち3基の古墳は中国縦貫自動車道路建設に伴って発掘調査が実施された。南方向の山陵は土井上遺跡（註2）で縄文時代早期の土器片が採集されている。

遺跡のほぼ中央には、幅約5mの町道が東西方向に存在していたので、この町道を境に南側を1区北側を2区とした。発掘調査実施前の遺跡の位置は畠と水田になっており、一部は民家の敷地であった。この調査の範囲は道路用地内に限定されたが、土井遺跡の広がりは台地上全体に及ぶと考えられる。

1 区

1区は町道から土井上遺跡が存在する山陵のふもとまでの中間部分である。西から東に下降する緩斜面になっていた。東側は畠地で、立退いた家の基礎が残存していた。西側は水田で、道路用地との境界付近は立退いた家の敷地になっていた。緩斜面に水田を造成していたので、遺構面までの土砂の堆積が厚かった。また1区全体に湧水があったので、発掘作業では水の処理に苦労した。検出した遺構は、建物8、柱列1であった。遺構の実測・製図は福田が担当した。

2 区

2区は町道から北側の台地上の範囲である。この部分は水田と畠地になっていた。東側には立退いた家の基礎が残存していた。現在の地表から遺構面までは浅く、湧水もなかったので、1区よりも作業条件に恵まれていた。検出した遺構は、建物12、柱列1、溝2、土壙2であった。遺構の実測・製図は高畠が担当した。

調査参加者

調査には哲西町内の多数の人々にお世話になった。ここに氏名を記して感謝の微意を表したい。

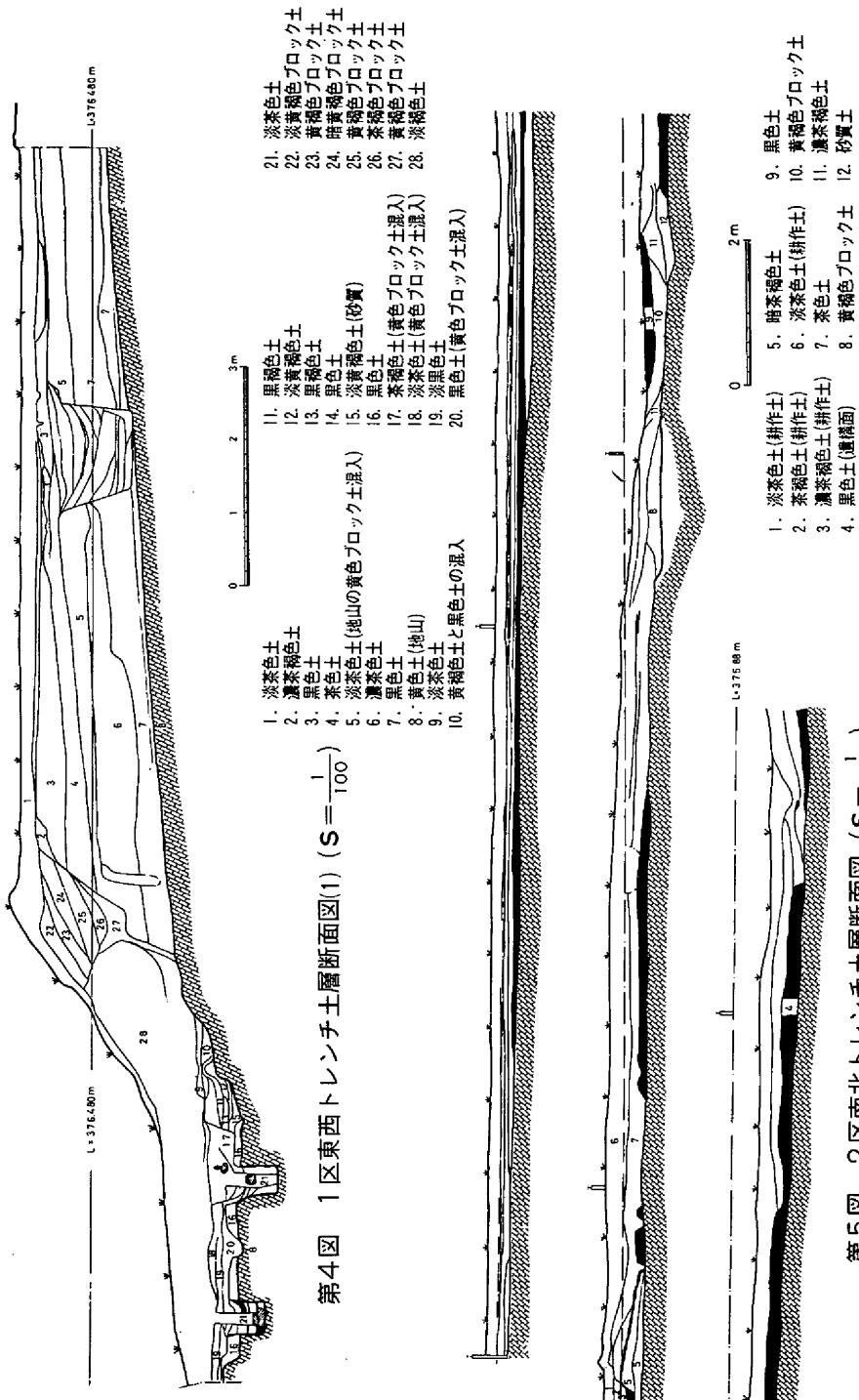
麻月千代 井上和夫 井上嘉弥代 入江保雄 小川恒雄 小田艶子 川上好友 川上初子 佐々木久二郎 佐々木文一 佐々木貞代 沢田晴夫 渋川雅雄 竹本久人（京都産業大学学生）立川一重 立川照美 田辺淨二 津田正志 土屋トヨ子 南部誠吉 前田昌彦（東城高校学生）三上愛恵 村上高代 森島幹子 安田一之 安田三四子 山本美夫 横田愛子 横田益代 横山勲恵 横山正美 横山道子

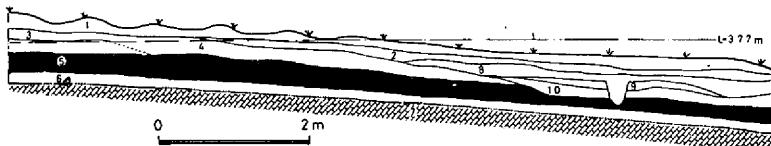
土井遺跡(61)

第3図 土井遺跡遺構全図 ($S = \frac{1}{800}$)



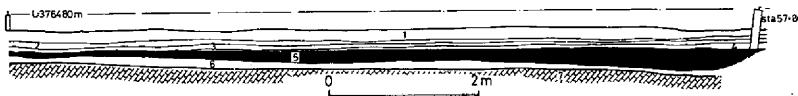
土井溝跡(61)



第6図 1区東西トレンチ土層断面図(2) ($S=\frac{1}{100}$)

1. 淡茶色土(耕作土)
2. 淡黄茶色土(砂を多く含む)
3. 淡茶褐色土
4. 淡黒色土
5. 黒色土(遺構面)
6. 淡黄褐色土(軟かい地山)
7. 黄褐色土(地山)
8. 淡黒色土(黄褐色ブロック土含む)
9. 黒色土(硬質)

- | | |
|---------------|-------------|
| 1. 淡茶色土(耕作土) | } 水田
に利用 |
| 2. 条褐色土(耕作土) | |
| 3. 濃茶褐色土(耕作土) | |
| 4. 暗茶褐色土(床土) | |
5. 黒色土(遺構面)
6. 黄褐色土(地山)

第7図 2区東西トレンチ土層断面図 ($S=\frac{1}{100}$)

第4章 各遺構について

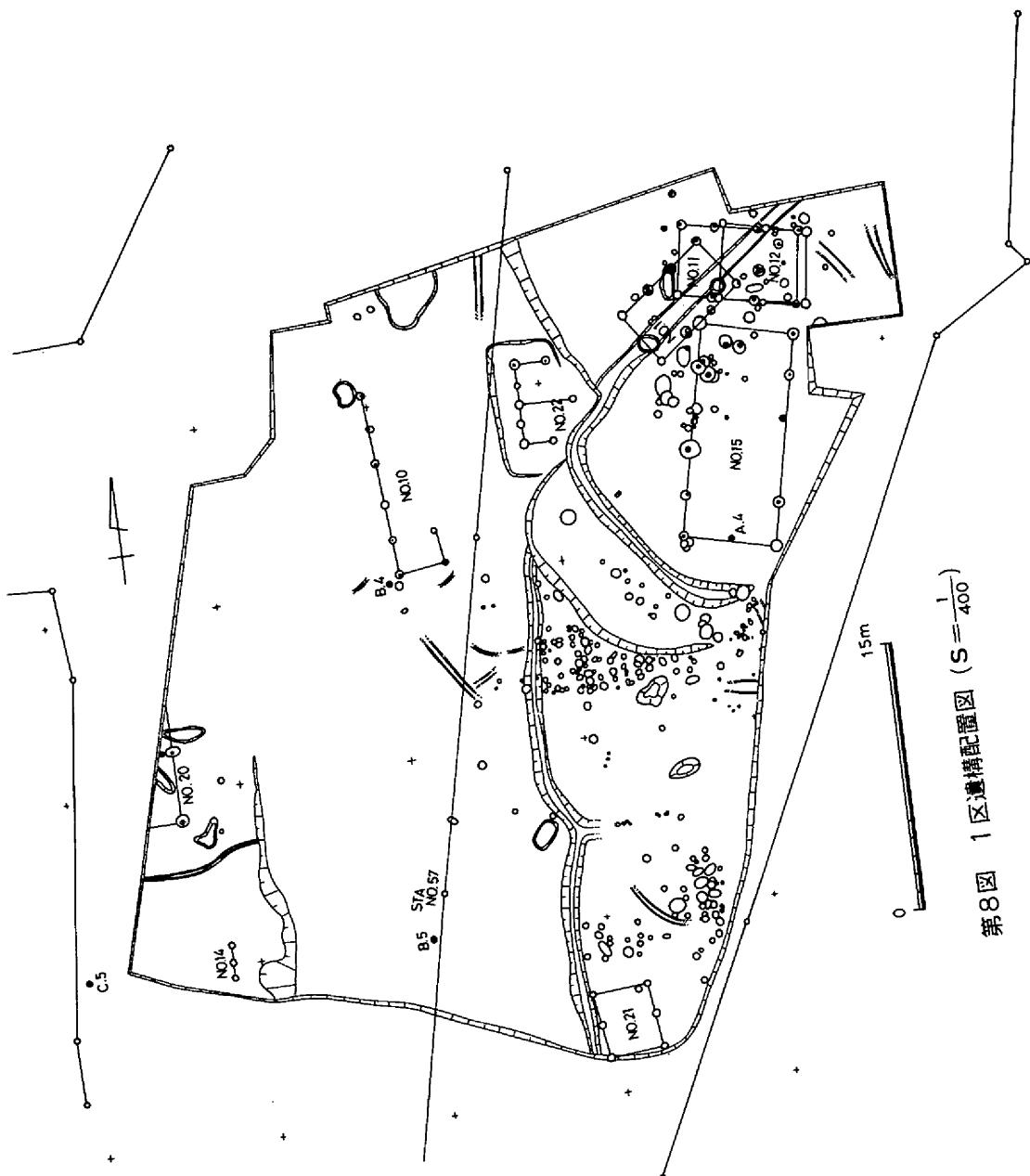
No. 1 建物(第9・10図、図版2-1・3-1)

2区の北西端に存在する建物である。柱穴1は道路用地外になるので未確認である。6×2間の建物で棟方向がN-19.5°—Wになる。桁行は9.80mになるが、梁行は場所によって異なり平均値で5.18mを測る。柱穴は径が約40cmで深く掘り込まれたものと、径が約30cmで比較的浅く掘り込まれたものとが、交互に配置されている。柱根は存在しなかったが、柱の痕跡が残存していた。大きい柱穴には径が約20cmの円柱形の柱を使用し、小さい柱穴には径が約15cmの円柱形の柱を使用していた。桁行の柱間寸法は不揃いで、最小幅1.30m・最大幅1.90mを測り平均値が1.63mになる。またこの建物の特徴は、棟持柱が梁行よりも外に張り出した位置に存在していることである。このような形態の建物は出雲大社本殿の構造に類似する(註3)。

No. 2 建物(第9・11図、図版2-2・3-1)

2区の北側に存在する建物で、火山灰性土壤の黒ボク土上に建てている。2×2間の建物で棟方向がN-75.0°—Eになる。桁行は柱穴の中心を結んで測ると4.70mになるが、柱の痕跡が柱穴の中心から片寄った位置にあるところでは4.80mになる。梁行は2.30m'を測るが、西側では棟持柱の柱穴が

土井遺跡(61)



土井遺跡(61)



第9図 2区遺構配置図 ($S = \frac{1}{400}$)

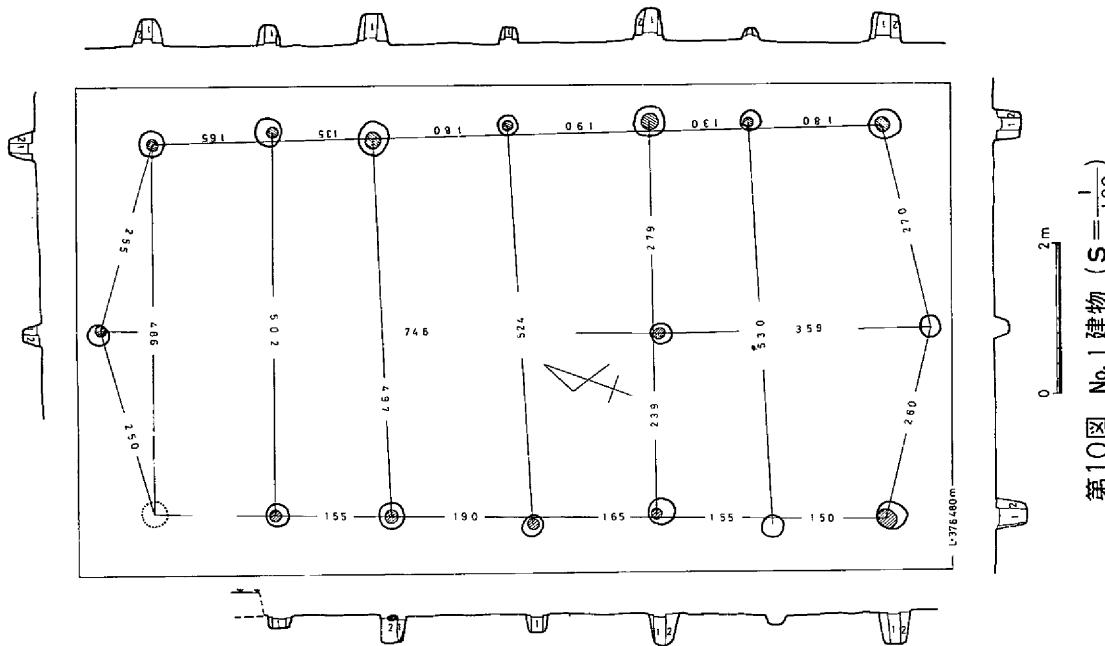
土井遺跡(61)

土井遺跡検出建物規模一覧表(表2)

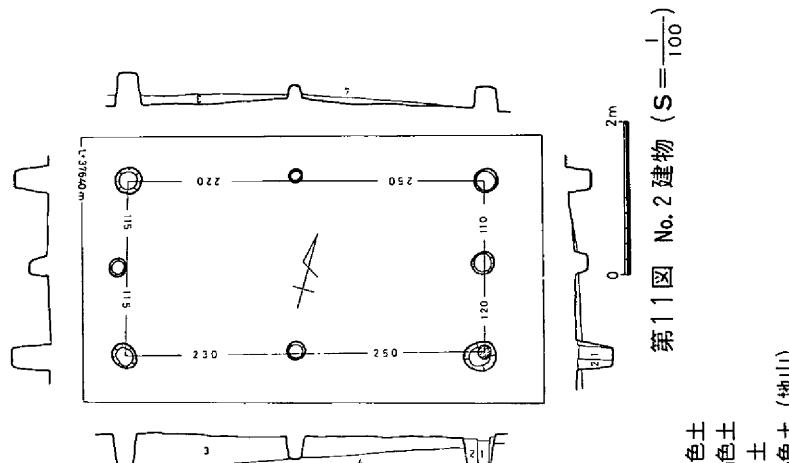
遺構番号	規模	棟方向	規模		柱穴	柱間寸法		備考
			桁行	梁行		桁行	梁行	
1	6×2	N-19.5°-W	9.80	5.18	0.30 0.40	1.63	2.59	棟持柱が外に張り出す。
2	2×2	N-75.0°-E	4.80	2.30	0.25 0.35	2.40	1.15	黒ボク土上に位置する。
3	8×?	N-1.0°-E	7.76	—	0.35 0.45	1.00	1.00	柱間寸法が短かい。
4	4×2?	N-1.5°-E	8.18	9.29	0.40 0.50	2.04	4.64	No.3建物と重複する。
5	5×2	N-11.0°-W	10.31	5.26	0.45	2.06	2.73	No.18建物と重複する。
6	3×1	N-16.0°-W	9.00	5.84	0.50	3.00	5.84	No.18建物と並ぶ。
7	1×1	N-81.0°-E	2.51	2.01	0.45	2.51	2.01	建て替えている。
8	?×1	N-29.5°-W	—	3.98	0.6×0.8	1.78	3.98	未調査部分がある。
9	2×1	N-47.5°-E	3.68	3.08	0.45	1.84	3.08	小規模の建物である。
10	5×1?	N-4.0°-W	10.49	2.65	0.40	2.10	2.65	詳細は不明である。
11	3×1	N-79.0°-W	6.86	4.00	0.45	2.28	4.00	柱根が存在する。
12	2×1	N-77.0°-W	4.94	4.18	0.45	2.47	4.18	No.11建物と重複する。
13	3×1	N-53.0°-E	6.23	3.38	0.50	2.07	3.38	柱穴に石が存在する。
15	5×1	N-13.0°-E	12.17	5.26	0.60 0.70	2.43	5.26	柱根が存在する。
16	?×1	N-82.5°-E	—	5.02	0.85	2.45	5.02	柱穴より古銭が出土している。
17	?×2?	N-59.5°-W	—	4.12	0.4×0.6	2.45	2.06	No.16建物と重複する。
18	3×1	N-15.5°-W	9.30	4.90	0.40	2.80 3.80	4.90	No.6建物と並ぶ。
20	—	0.0°	—	—	0.70	—	4.00	未調査部分がある。
21	2×1	N-6.0°-W	3.71	3.16	0.38	1.86	3.16	南端の位置に存在する。
22	4×?	N-2.0°-E	4.60	3.14	0.40 0.60	1.10 1.20	1.77	竪穴式住居状の面を有する。

単位:m

土 井 遺 跡 (61)



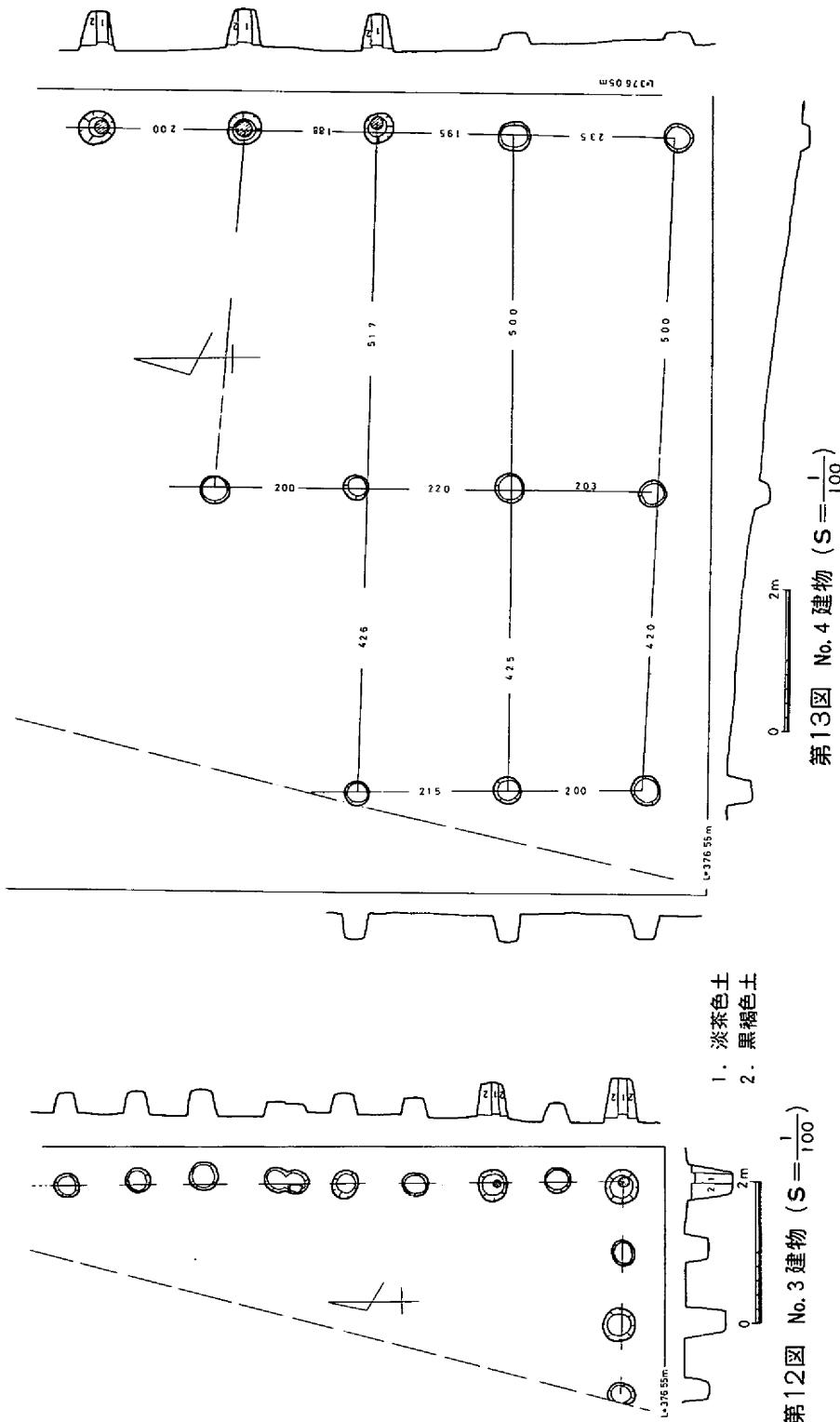
第10図 No. 1 建物 ($S = \frac{1}{100}$)



第11図 No. 2 建物 ($S = \frac{1}{100}$)

- 1. 淡茶色土
- 2. 黒褐色土
- 3. 黑色土
- 4. 黄褐色土 (地山)

土井遺跡(61)



第13図 No.4 建物 ($S = \frac{1}{100}$)

第12図 No.3 建物 ($S = \frac{1}{100}$)

土 井 遺 跡 (61)

等分の位置に存在していたけれども、東側ではやや片方にずれた位置になっていた。四隅の柱穴は、径が約35cmで比較的深く掘り込まれ、直徑17cm前後の円柱形の柱を使用していたと考えられるが、それ以外の中間に存在する柱穴は、径が約25cmと規模が小さくなり、掘り込みも浅くなっていた。この建物は小規模であるが、均整がとれた形を呈している。

No. 3 建物（第9・12図、図版3-1, 4）

2区の南西端に存在する建物であるが、用地外になる範囲があるために詳細については不明である。桁行が8間になるということは確認されたが、梁行については3間まで検出しただけで、それ以上のことは不明である。桁行は片方で7.76mを測るが、柱間寸法が短かく、最も長い地点で1.20mになるとはいえる、ほとんどが1.00m前後の数値になっている。梁行の規模は不明であるが、柱間寸法は桁行の柱間寸法と同じく1.00m前後を測る。棟方向はN-1.0°-EでNo.4建物と重複している。柱穴は径が約45cmで深く掘り込まれたものと、径が約35cmで比較的浅く掘り込まれたものとが交互に配置されている。柱の痕跡が2穴の柱穴で確認されているが、径が15cmのものと10cmのものとがあり、太さが一定でなく細い柱であると考えられる。柱間寸法が短かいために、柱が不揃いで細いものでも機能に耐えることができたのであろうか。いずれにしてもこの遺跡で検出した建物では、最も柱間寸法の短かいものである。

No. 4 建物（第9・13図、図版3-1, 4）

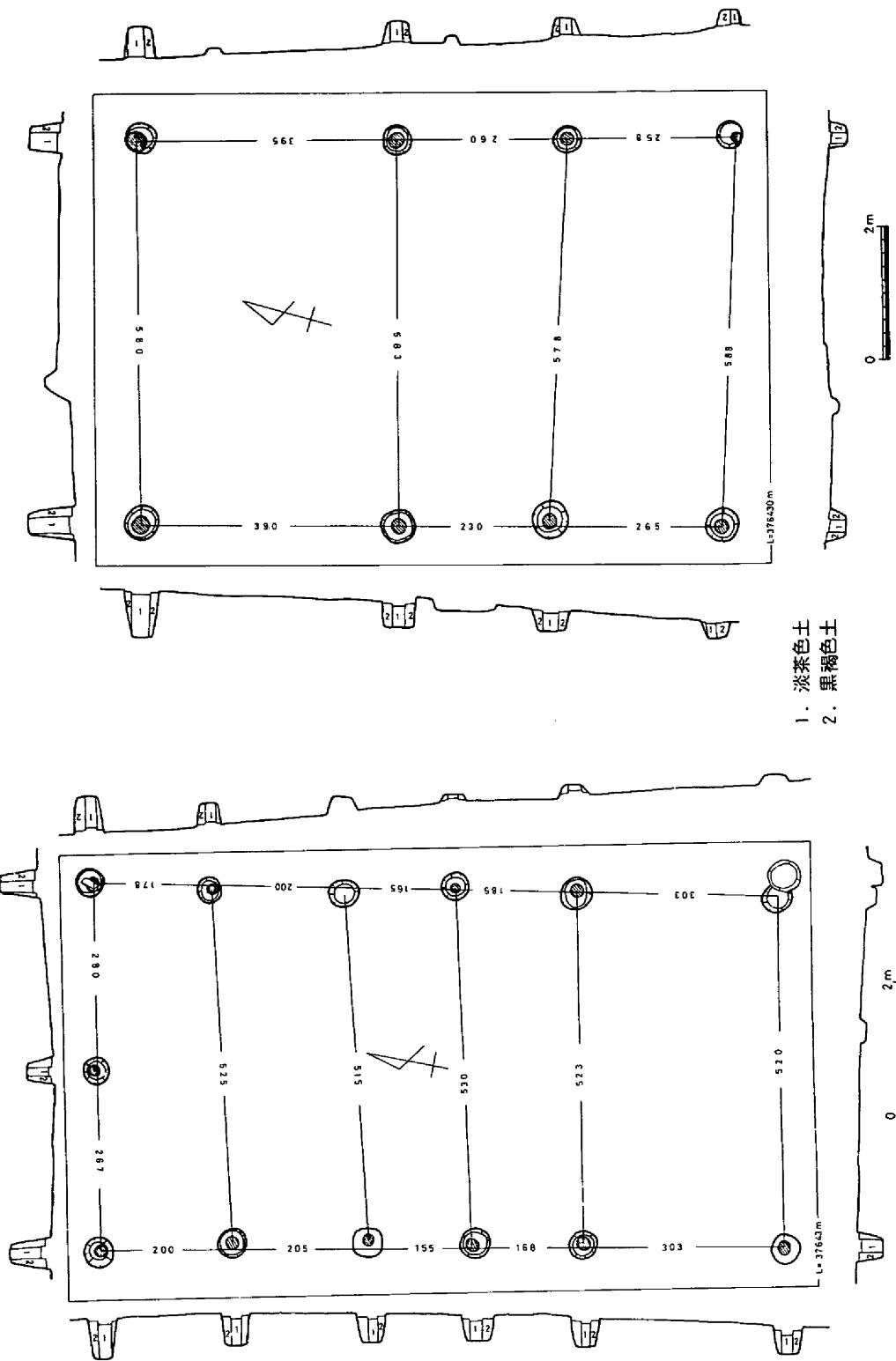
2区の南西端にNo.3建物と重複する形で存在する建物である。現地の発掘調査の段階では棟方向がN-1.5°-Eになる4×2間の建物と考えられたが、建物の一部が用地外の未調査範囲になるために、全体を把握することができなかった。もしかすると2棟の建物が並列して存在していたのかもしれない。なぜならば、柱穴が直線的に並んでいるとはいえ、梁行の柱間寸法が東と西では約80cmも相違しているからである。2棟の建物が存在していたとするならば、1棟は規模が4×1間になり、もう1棟は用地外にほとんどの部分が存在していることになる。いずれにしてもはっきりしたことは不明であるので、ここでは1棟の建物として記述したい。

この建物の桁行は8.18mを測り、柱間寸法は最小幅1.88m・最大幅2.35mと不揃いで一定していない。平均値では2.04mになる。梁行の柱間寸法は、東側では5.00~5.17mを測るが西側では4.20~4.26mになる。またどちらも南よりも北が徐々に長くなっていた。柱穴は径が約40cmになるものと約50cmになるものとが混在し、深さも一定でない。それに柱の痕跡を有する柱穴が3穴存在していたが、柱はどれも円柱形で径が約15cmのものと約20cmのものとが認められ、同じ太さの柱を使用するという配慮はなかったようである。このようにNo.4建物は柱穴が直線的に並んでいるけれども統一した規則性は認められず、不明な点が多い。

No. 5 建物（第9・14図、図版3・4）

2区の道路用地センター杭STA57+60付近に、No.18建物と重複して存在する建物である。5×2間の建物で棟方向がN-11.0°-Wになる。桁行は10.31mになるが、梁行は場所によって異なり平均値で5.26mを測る。北では棟持柱の柱穴を検出したとはいえる、南では精査したにもかかわらず棟持柱の柱穴と考えられるものは確認することができなかった。建物を建てた当初から南の位置には棟持

土井遺跡(61)



第15図 No. 6 建物 ($S = \frac{1}{100}$)

第14図 No. 5 建物 ($S = \frac{1}{100}$)

土 井 遺 跡 (61)

柱が存在しなかったのか、あるいは棟持柱が存在していたけれども柱穴を掘り込まなかったのか、はっきりしたことは不明である。桁行の柱間寸法は1.55～3.03mまで不揃いであるが、それぞれに対応する柱間寸法は似た数値を測る。中央の桁行の柱間寸法1.55mと1.65mで最も短かく、南端が両方とも3.03mで最も長くなっていた。北の棟持柱の柱穴が存在する位置では、梁行の柱間寸法が2.67mと2.80mになり、柱穴が西にやや片寄っていた。柱穴の大きさは平均値で45cmを測るが、深さは一定でない。北端の梁の柱穴2が最も深く掘り込まれていた。この建物に伴う柱穴が13穴存在していたが、そのうち柱の痕跡を有するものが11穴認められた。それによると柱はすべて円柱形で、径が約20cmを測るものとやや細くて約15cmを測るものとが存在した。

No. 6 建物（第9・15図、図版3）

後述するNo.18建物と並んで存在する建物である。3×1間の建物で棟方向がN—16.0°—Wになる。桁行は東が9.13mで西が8.85mになっていた。梁行は5.78～5.88mと一定の数値になっていないが、平均値では5.84mを測る。桁行の柱間寸法はばらばらの数値になっており、北側の柱間ではほかの柱間寸法の約1.5倍の幅になっていた。柱穴の径は約50cmでほぼ均一の大きさになっているが、深さは一定でない。すべての柱穴に柱の痕跡を有するが、径が約15～30cmと一定の大きさになっていない。しかし径が約20cmになるのが多いところから、この建物では径が約20cmの円柱形の柱を基準に使用していたと考えられる。

この建物のほぼ中央の位置に棟方向と一致して径が約0.70～1.00mの大形ピット4が直線的に並んで検出されたが、この場所は立退いた家の敷地内であり、またピット内の土層も異なっていたので、遺構に伴うものとは考えられなかった。^{*}

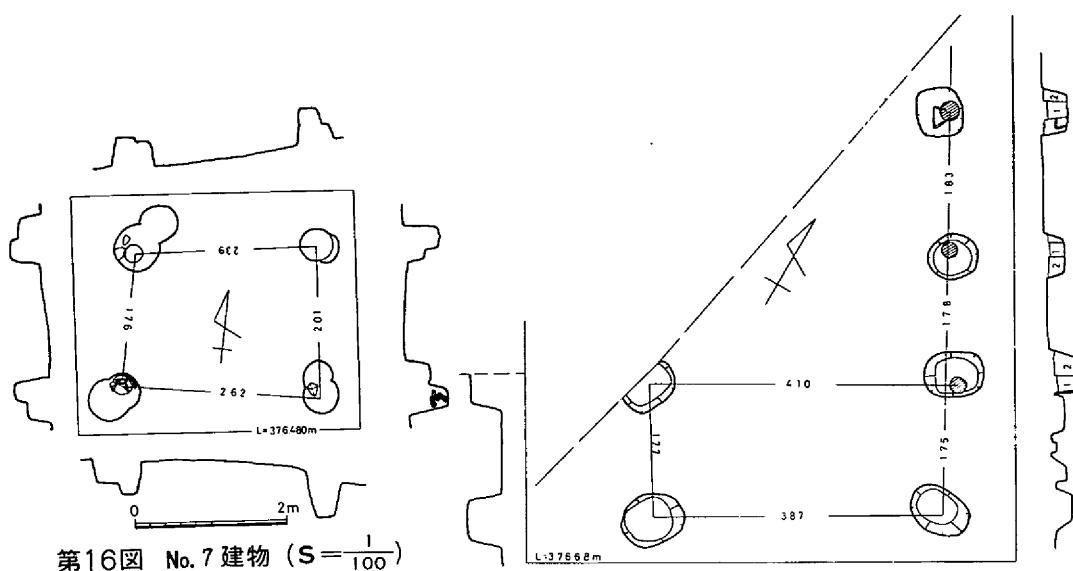
No. 7 建物（第9・16図、図版3—1, 4）

2区のNo.4建物に接して存在する規模が小さい建物である。1×1間の建物で棟方向がN—81.0°—Eになる。どの柱穴も2段になっており、建て替えていることが考えられる。柱穴の配置は歪んだ平面形を呈し、桁行が約2.50m、梁行が約2.00mになる。柱穴の径は新旧とも約45cmを測り、新しく建て替えた建物の柱穴が以前のものより深く掘り込まれていた。なお柱穴内に礫を有するものが認められた。

No. 8 建物（第9・17図、図版3—1, 4—2）

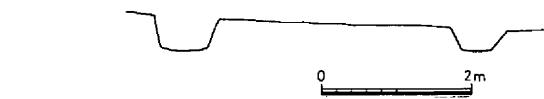
2区の西端に存在する建物で、半分以上の範囲が用地外の未調査地に残っているため、詳細については不明である。梁行は1間だけであるが、桁行は3間まで確認したものとのれだけの規模になるのか不明である。桁行の柱間寸法は最小幅1.75m・最大幅1.83mを測り、北西に向うにしたがって幅が広くなる。梁行の柱間寸法も3.87mと4.10mを測り、北西に向うにしたがって幅が広くなっているようである。柱穴の平面形は橢円形を呈し、検出した地山面で約60×80cmになる。深さは一定でない。柱の痕跡を有する柱穴を3穴確認したが、それによると柱は径約20cmの円柱形になったものを使用していた。また拳大よりやや大きい石を使用して柱を支えていたと考えられる柱穴が認められた。この建物のようにほとんどの柱穴が橢円形を呈するものは、No.17建物にも認められる。

土井遺跡(61)

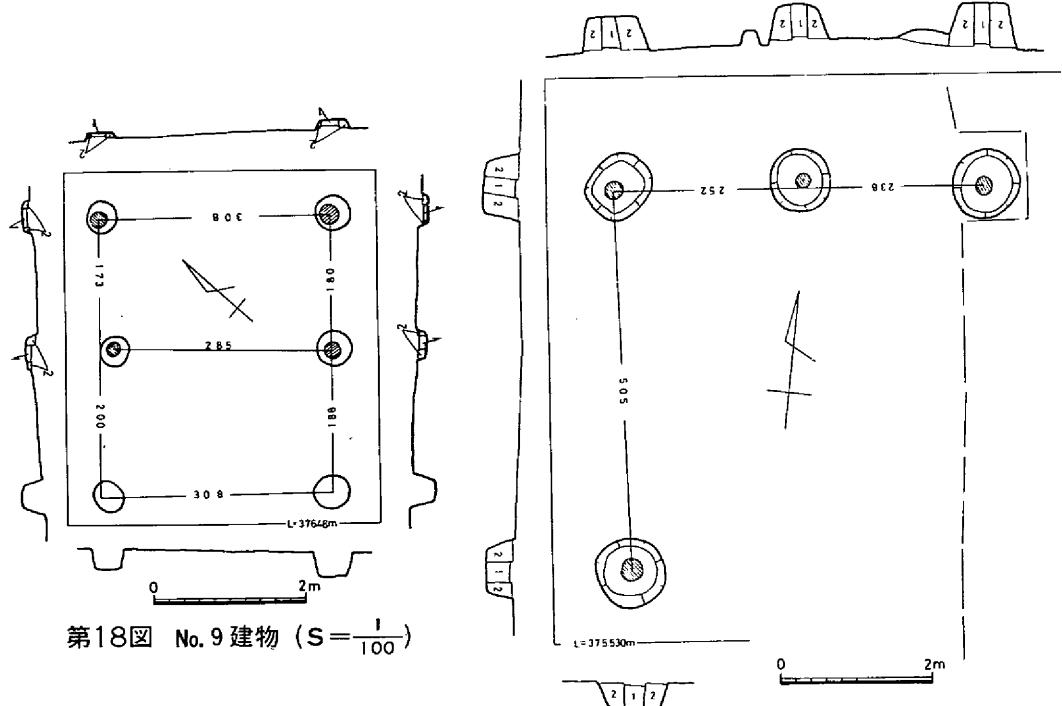


第16図 No.7建物 ($S=\frac{1}{100}$)

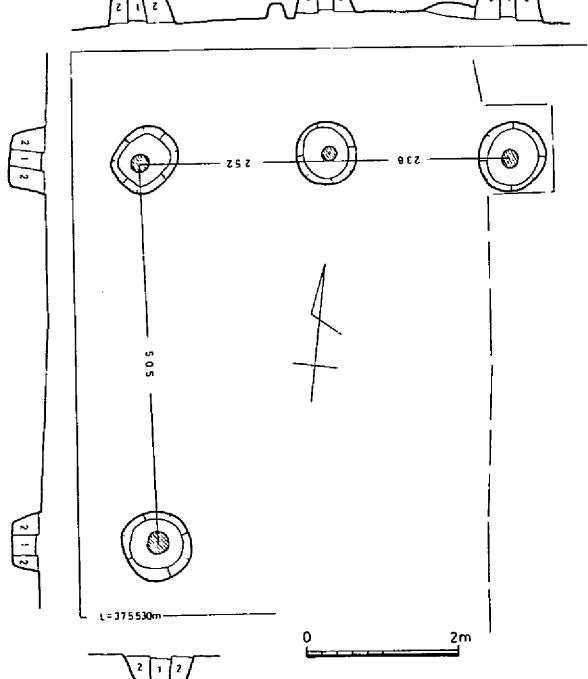
- 1. 淡茶色土
- 2. 黒褐色土



第17図 No.8建物 ($S=\frac{1}{100}$)



第18図 No.9建物 ($S=\frac{1}{100}$)



第19図 No.16建物 ($S=\frac{1}{100}$)

土 井 遺 跡 (61)

No. 9 建物 (第 9・18図, 図版 3-1, 4)

2 区の西端の位置で №8 建物に接して存在する建物である。2 × 1 間の建物で棟方向が N—47.5°—E になる。桁行は 3.68m と 3.73m を測り、柱間寸法が最小幅 1.73m・最大幅 2.00m で一定になっていない。しかし桁行は西端が 3.08m に均一した数値になり、中央がやや狭くて 2.85m を測る。柱穴の径は約 45cm で、検出した面が北東方向に傾斜しているが、底部のレベルはほとんど同じになっていた。

No. 10 建物 (第 8・20図, 図版 7-2)

1 区の緩斜面に存在する建物である。桁行は 5 間で 10.49m を測る長大な建物であるが、梁行は 1 間だけ検出することができただけで詳細については不明である。この建物が 5 × 1 間の建物であるならば、東側の桁行方向にも柱穴が直線的に並ばなければならないのに、現地で精査したにもかかわらず、2 穴を確認しただけである。それに内側の柱穴の位置は梁行の柱間寸法が狭くなっている、整然とした形の建物が建たないことになる。確認した 2 穴の位置以外の地点には、建物が建てられた当初から柱穴が存在していないかったのか、それとも斜面になっているので削平されて消滅してしまったのか詳しいことはわからない。桁行の柱間寸法は最小幅 1.95m・最大幅 2.40m を測り、幅が均一にならない。その柱間寸法の平均値は 2.10m になっている。柱穴の径は約 40cm で、底のレベルはほぼ同じになっている。柱の痕跡が認められたが、径が約 15cm の比較的細い円柱形の柱を使用していた。

この建物の周辺には幅の狭い溝状の痕跡がいくつも確認されたが、その方向に規則性がなく、両端がはっきりしない痕跡であるため、遺構に伴うものとは考えられなかった。

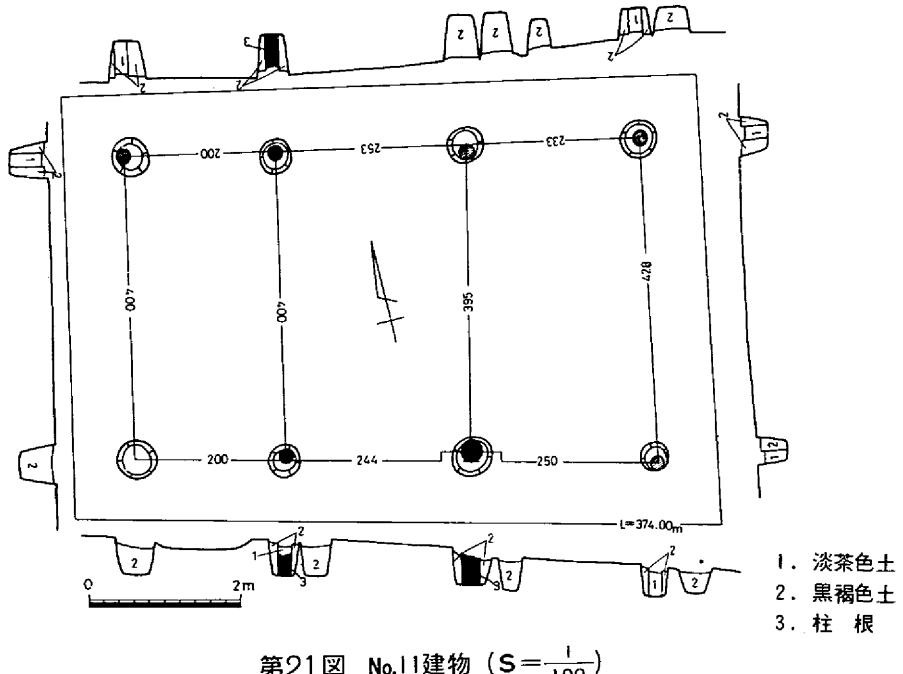
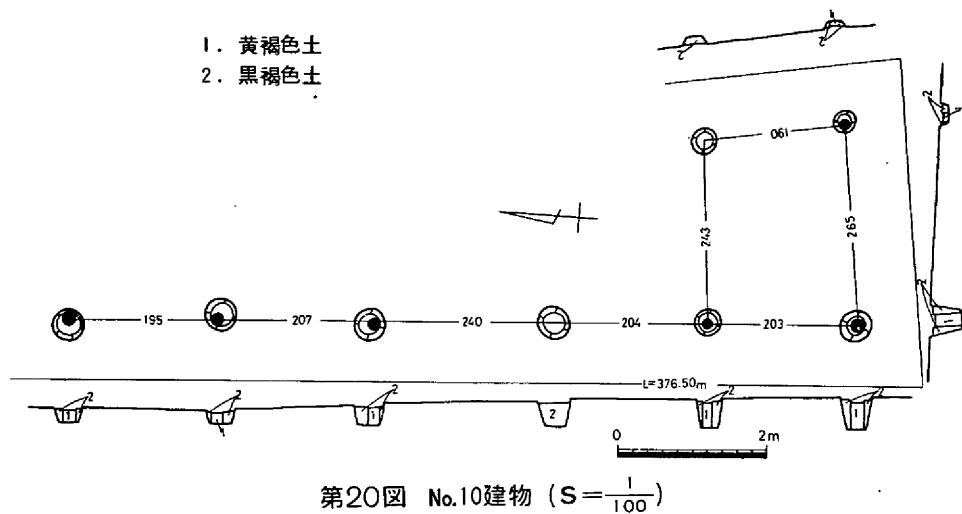
No. 11 建物 (第 8・21図)

1 区の北東端に存在する建物である。3 × 1 間の建物で棟方向が N—79.0°—W になる。この建物の柱穴内には柱根が 3 本残存していた。1 区の地形は西から東に向って緩斜面になって、№11 建物周辺が浅い谷地形を形成していた。それで湧水がたえず流れしており、発掘作業では水の処理に最も苦労した。このような自然条件によって、柱根が残存する結果になったと考える。この建物の桁行は 6.86m と 6.94m を測り、桁行の柱間寸法も最小幅 2.00m・最大幅 2.53m で幅が一定の数値になっていない。梁行は 4.00~4.28m を測り、平均値が 4.00m になる。柱穴の径は最小径 35cm を測るものから最大径 55cm のものまで、規模が不揃いである。柱穴の深さはほぼ同じになっていると考えられた。柱穴内には柱根が 3 本残存していたことを先に記したが、その材質はケヤキ、スダジイ、ミズナラで、3 本の材質とも異なっていた（註 4）。柱は円柱形で径が約 20cm のものを使用していたが、径が 38cm もある柱根も 1 本だけ検出した。

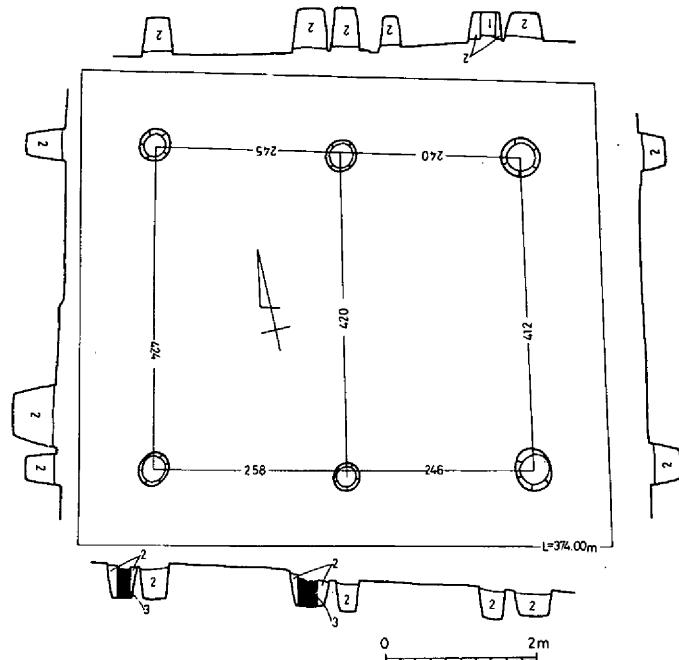
No. 12 建物 (第 8・22図)

1 区の北東端で №11 建物と重複して存在する建物である。2 × 1 間の建物で棟方向が N—77.0°—W になって、№11 建物より 2.0°だけ方向を異にしている。桁行は 2.84m と 2.85m でほぼ同じ距離になっているが、梁行は 4.12m, 4.20m, 4.24m と若干の相違を示していた。桁行の柱間寸法は最小幅 2.40m・最大幅 2.58m で幅が一定でない。柱穴の径は四隅に存在する柱穴が約 45cm を測り、それの中間に存在する柱穴はやや小規模になっていた。この建物は緩斜面に存在していたにもかかわらず、柱穴の底のレベルはほぼ同じになっていた。柱穴内に柱根や柱の痕跡は検出できなかった。

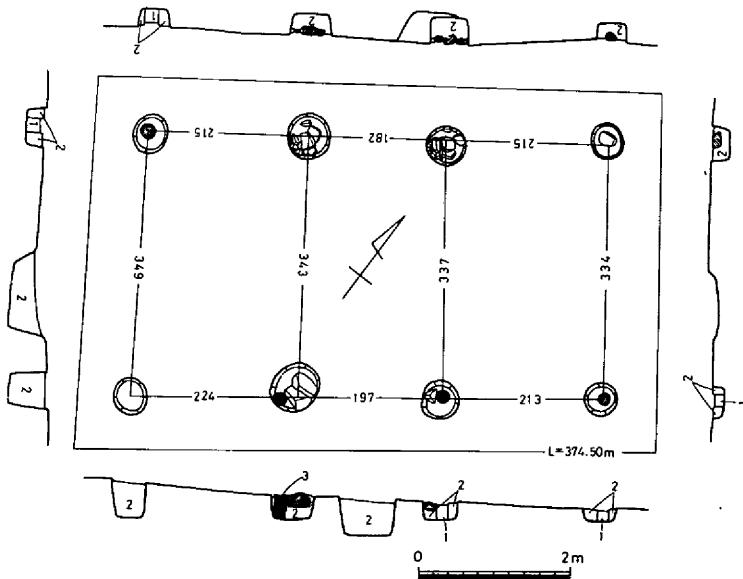
土井遺跡(61)



土 井 遺 跡 (61)



1. 淡茶色土
2. 黒褐色土
3. 柱 根
第22図 No.12建物 ($S = \frac{1}{100}$)



第23図 No.13建物 ($S = \frac{1}{100}$)

土 井 遺 跡 (61)

この建物は№11建物と重複して存在し、棟方向が 2.0° ずれるだけである。しかも2棟の建物の柱間寸法が、ほぼ近い数値を示していた。このことから、同じ規模の建物を建て替えている可能性を考えられた。しかしながら、№11建物は 3×1 間であったが、精査したにもかかわらず№12建物は 2×1 間で完結していた。したがって2棟の建物は同じ規模ではないことが判明したが、存在した時期の前後関係がわからなかったので、規模を縮小して建て替えたのか、あるいは逆に規模を拡大して建て替えたのか確認できなかった。また建て替えられたのではなくて、どちらか1棟の建物が消滅した後にたまたまその建物が存在していた位置に、以前の建物と柱間寸法が近い数値を示す建物を建てたかも知れない。いずれにしても詳細については不明である。

No. 13 建物（第8・23図）

1区の北東端に№11・12建物と重複して存在する建物である。 3×1 間の建物で棟方向がN— 53.0° —Eになる。桁行は $6.12m$ と $6.32m$ になり、桁行の柱間寸法が最小幅 $1.82m$ ・最大幅 $2.24m$ を測り、不揃いになっていた。しかし北西側の桁行の柱間寸法では、両端が $2.15m$ 、中央が $1.82m$ を測り、形が整っていた。梁行は最小幅 $3.34m$ ・最大幅 $3.49m$ で一方にやや開いていた。柱穴の径は $40\sim60cm$ で一定の大きさになっていない。柱穴の底のレベルはほぼ同じ高さになっていた。この建物の柱穴内には、人頭大から拳大の石が存在した。この石は周辺のものが流入したのではなくて、建物を建てた当初に人為的に詰められていたと考えられる。柱穴内に1本の柱根が残存した。この柱根の材質はウラミズザクラであった（註4）。柱根は柱穴の端に寄った位置に存在し、石で支えられていた。この柱根以外の柱の痕跡を有する柱穴を3穴だけ検出できた。この建物の柱は円柱形で、径が約 $15cm$ のものを使用していた。

この建物の棟方向に溝が存在したが、この建物に伴うものとは考えられなかった。

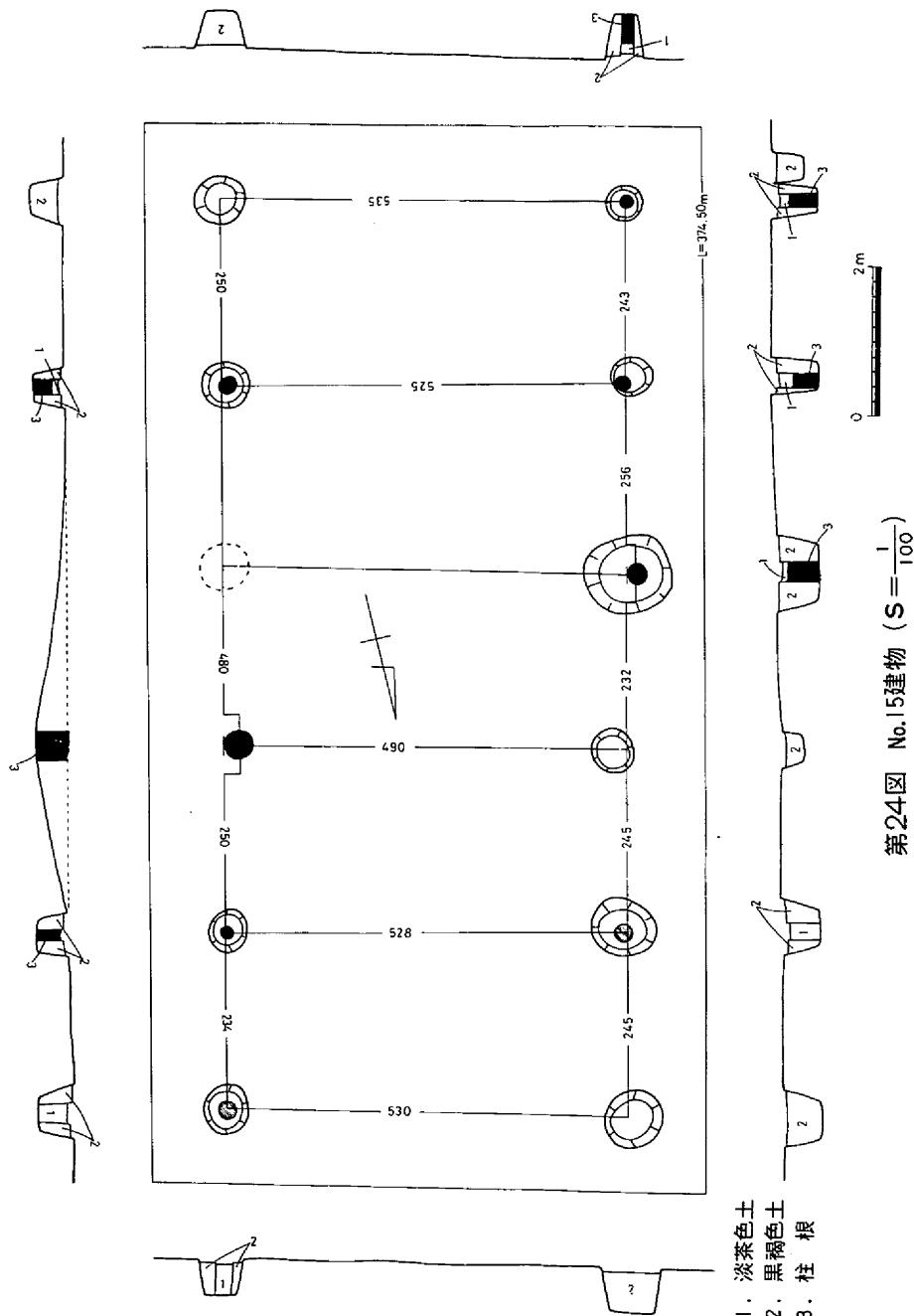
No. 14 柱列（第8・25図）

1区の南西端に存在する。磁北方向に一致して柱穴3が直線的に並ぶ。柱間寸法は $0.90m$ と $1.00m$ であった。柱穴の径は約 $35cm$ で中央の柱穴がやや大きい。柱穴の底のレベルは同じであった。柱穴内に柱の痕跡は存在しなかった。柱穴内の埋土はこれまでに記述した建物のものとは異なっていた。この柱列の周辺を精査したが、ほかの柱穴は検出できなかったので、建物に伴うものではないと判断した。1区では、この遺構以外にはっきりした柱列を確認していない。

No. 15 建物（第8・24図）

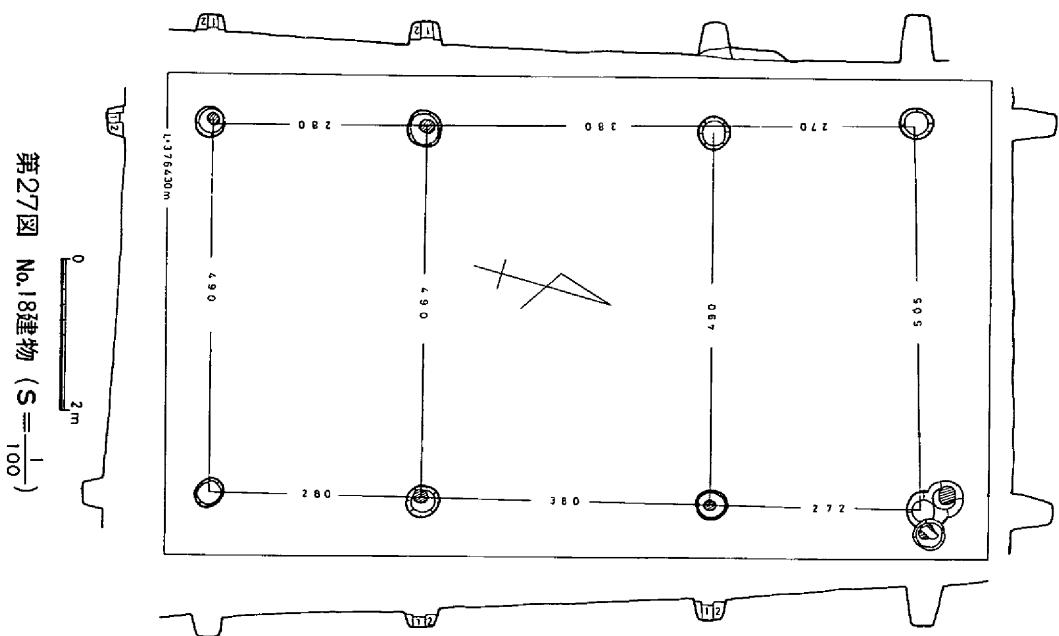
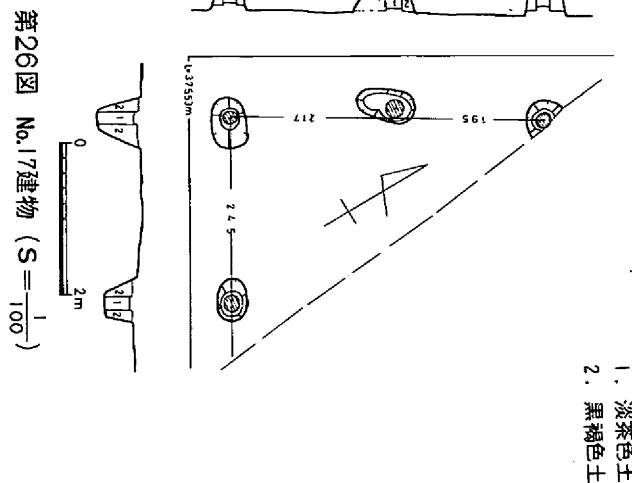
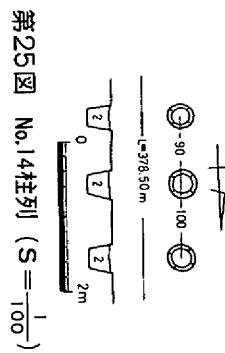
1区の東端に№13建物と接して存在するこの遺跡で最も規模の大きい建物である。 5×1 間の建物で棟方向がN— 13.0° —Eになるから、№12建物と直交する方向になっていた。桁行は $12.14m$ と $12.21m$ で、桁行の柱間寸法が最小幅 $2.32m$ ・最大幅 $2.56m$ となり、幅が一定でない。梁行も $4.90\sim5.35m$ まで不揃いである。この建物の柱穴内には柱根が残存しているのが多い。建物の位置が深い谷状の地形になって、たえず湧水が流れていたので、柱根が残存する自然条件がそろっていたと考える。柱穴の径は一定でなく、最小が約 $50cm$ 、最大が約 $100cm$ とばらつきがある。最大の柱根は、谷状地形の最も深い地点で検出したもので、柱穴の痕跡は確認できなかったが、基底部は地山面に到達していた。地形的に不安定な位置であったため、意識的に太い柱を使用したと考えたい。この柱の南の地点

土井遺跡(61)



第24図 No.15建物 ($S = \frac{1}{100}$)

土井遺跡(61)



土井遺跡(61)

で、本来柱が存在すると考えられる位置には、精査したにもかかわらず、痕跡が検出できなかった。浅い谷状地形の肩部になるので、建物が建てられていた当時には存在していたものが、後世に流失してしまったと考えられる。この建物の位置は起伏のある地形であったが、柱穴の底部のレベルはほぼ削っていた。残存していた柱根と柱の痕跡は円柱形であったが、径は18~40cmと不揃いの柱を使用していた。柱の材質はノグルミ、ウワミズザクラ、アラカシ、ハルニレ、アベマキと多種多様で、同じ材質の柱はアラカシだけであった(註4)。したがってNo.15建物を建てるのに材質を厳選したのではなく、近くの山林に生育する雑木を、適宜に伐採して柱材に使用したのであろう。

この建物の周辺には、柱根または柱の痕跡を有する柱穴をほかに検出している。建物の形にまとまらないかと現地で努力したが、新しい建物を確認することはできなかった。しかしほかに建物が存在する可能性は残されている。

No. 16 建物(第9・19図、図版3)

2区の南西端に位置する建物であるが、半分以上の範囲が用地外の未調査地点に存在するため、詳細は不明である。桁行は柱穴3まで確認している。桁行の柱間寸法は2.38mと2.52mであった。梁行は5.05mで、桁行の柱間寸法の約2倍の数値になっている。調査した範囲内で棟方向はN-82.5°-Eになっていた。柱穴の径は約90cmを測り比較的大きい。柱穴の深さはほぼ同じであった。すべての柱穴内で柱の痕跡を検出した。それによると柱は円柱形で、径が25~30cmのものを使用していた。桁行の中間に位置する柱は、やや規模が小さいようである。南側の桁行では、No.26風倒木痕が存在していたので、この建物に確実に伴う柱穴であると断定できるものは検出できなかった。この建物の柱穴内から古銭(景祐元寶)が出土した。

No. 16 建物柱穴内出土古銭(図版10-3)

北西端の柱穴内に含まれている土層の検出作業中に出土した。腐食が著しく破損していた。北宋銭の「景祐元寶」で、景祐元年(1034年)鑄造である。この古銭は、土井遺跡の建物に伴う唯一の資料である。

No. 17 建物(第9・26図、図版3-2)

2区の南東端にNo.16建物と重複して存在する建物である。ほとんどの範囲が用地外の未調査部分に位置するため、詳細は不明である。柱穴の平面形が楕円形を呈し、検出した地山面で約40×60cmになる。北西の位置に存在する柱穴だけが、楕円形の方向が異なり、柱穴の底部のレベルもほかの柱穴より高い位置なので、棟持柱と考えた。すると棟方向がN-59.5°-Wで梁行が2間になる。棟持柱以外の柱穴の底部はほぼ同じレベルになっていた。桁行の柱間寸法を計測できるのは1箇所だけで、2.45mであった。梁行は4.15mを測り、柱間寸法が1.95mと2.17mであった。すべての柱穴内に柱の痕跡を確認した。柱は円柱形で、径が約20cmになっていた。

No. 18 建物(第9・27図)

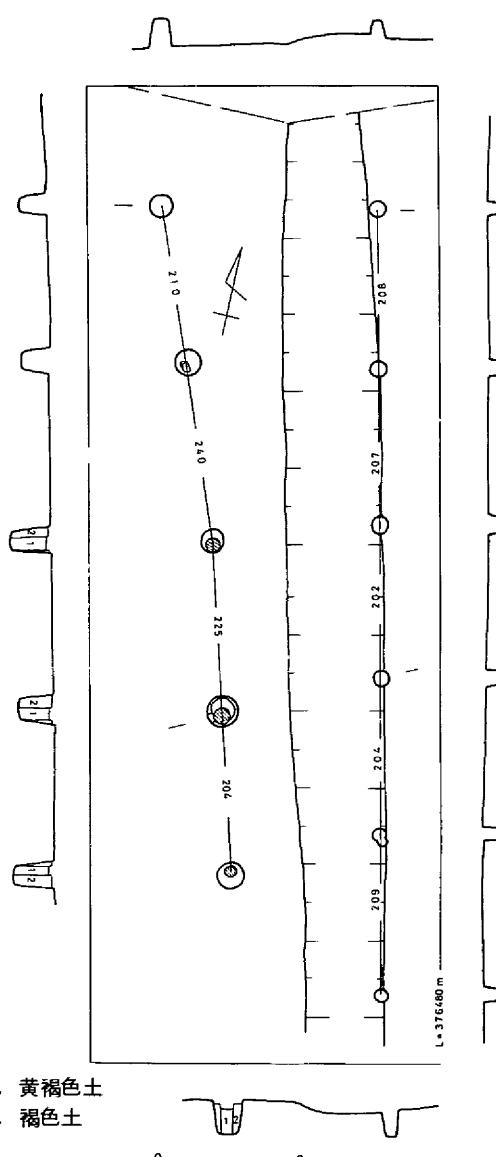
2区の中央にNo.5建物と重複して存在する建物である。3×1間の建物で棟方向がN-15.5°-Wになる。No.6とほぼ平行の向きになる。桁行は9.30mと9.32mを測り、ほぼ同じ距離になる。梁行は柱の痕跡を有する位置で計測すると4.90mになり、ほかの位置でも均一の数値を示していた。梁行は

土井遺跡(61)

北側で2.70mと2.72mを測り、若干異なるが、中央の位置は3.80m、南側は2.80mと同一の数値であった。柱穴の径は約45cmで、底部のレベルはほぼ同じであった。柱の痕跡が4箇所で認められた。柱は円柱形で径約20cmのものを使用していた。

No.18建物とNo.5建物が重複している位置に、延長約5mまで確認できた浅い溝が存在したが、遺構に伴うとは考えられなかった。

No.19 柱列(第9・28図、図版2-2, 5)



第28図 No.19柱列 ($S = \frac{1}{100}$)

2区の北側に存在する溝を含む2列の柱列である。

溝は幅約1mの浅いもので、後述するNo.23 24溝とほぼ平行になっていた。

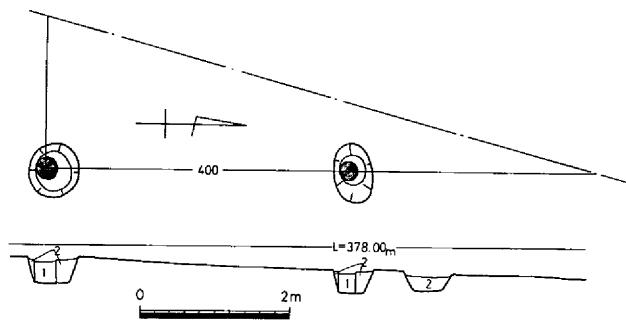
2列の柱列のうち東側に存在するものは、柱間寸法が2.02~2.09mになる。柱穴は径約20cm、深さ約40cmを測る。柱穴内には現在の表土と同じ土が含まれていた。近所の古の話によると、以前はこの地点で稻作を行っていたという。哲西町では稻の刈取りを行うと、その場所に稻木を建てて稻穂を乾燥させている。東側の柱列は、おそらく稻木の痕跡であろう。2区の北側にNo.2建物と重複して、3列の杭列が存在したが、これらも稻木の痕跡と考えた。

西側の柱列のうち、柱の痕跡を有する柱穴3は直線的に並ぶが、その北に位置する柱穴2は西に屈曲している。前者の柱穴3はNo.2建物の梁行の方向と一致し、柱の痕跡も有るので、建物にまとまることが想定されたが、周辺に適当な柱穴が検出できなかった。後者の柱穴2は前者の柱穴に連続するのか、全く別の柱穴であるのか不明である。ただこの柱列が溝に伴うとは考えられなかった。柱間寸法は2.04~2.40mを測り、柱穴の径が約30~40cmで、柱は径15~20cmの円柱形のものを使用していた。

No.20 建物(第8・29図)

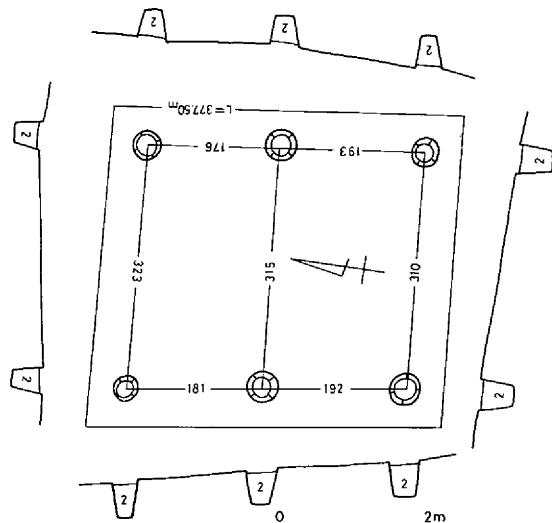
柱穴2が1区の西端に存在する。用地外の

土 井 遺 跡 (61)



第29図 No.20建物 ($S = \frac{1}{100}$)

- 1. 黄褐色土
- 2. 黒褐色土



第30図 No.21建物 ($S = \frac{1}{100}$)

土 井 遺 跡 (61)

未調査範囲にほかの柱穴が存在すると考えられるので、詳細は不明である。南の柱穴は円形を呈し、径約70cmを測る。北の柱穴は東西に長い楕円形を呈し、径約50×75cmを測る。柱間寸法が4.00mであった。柱穴内には柱の痕跡を有し、柱は円柱形で径約27cmを測る。この柱穴が存在する地点の西側には、高さ約5mの石垣が南北方向に構築されていて、棟方向が東西になる建物を建てる空間はない。それでこの柱穴は、棟方向が南北になる建物になるとえた。しかし検出できたのが柱穴2だけであるから詳細は不明である。柱列になるかもしれない。

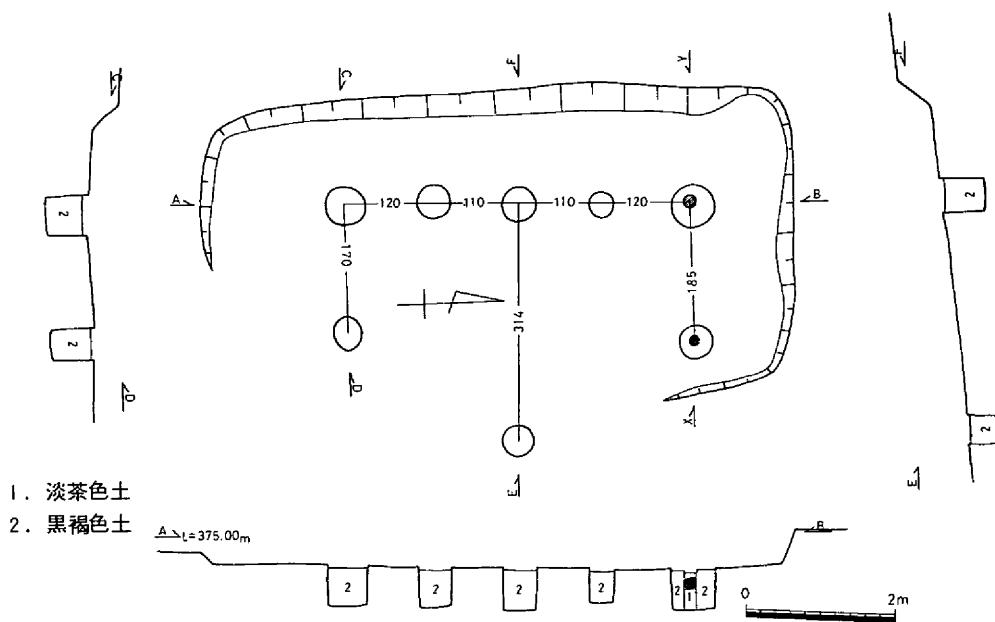
この柱穴の周辺には不整形なピットが存在したが、内部に火山灰性土壤の黒ボク土が認められただけで、遺物は存在しなかった。人為的な遺構ではなく、自然の凹みと考えた。

No. 21 建物（第8・30図）

1区の南東端に存在する建物である。2×1間で棟方向がN-6.0°-Wになる。桁行は3.69mと3.73mになり、桁行の柱間寸法の最小幅1.76m、最大幅1.93mを測る。梁行は最小幅3.10m、最大幅3.23mで北に向うにしたがって開いている。この建物の柱間寸法は不揃いで、柱穴の配置によると歪んだ形になっていた。柱穴の径は約40cmを測るが、北西隅の柱穴はやや小規模であった。この建物の位置が南から北に下降する緩斜面になっていたので、底部のレベルは一定でないが、地山面からの深さはほぼ同じになっていた。No.21建物の存在する位置は南側に舌状に張り出した山陵がせまり、直射日光をうけるのは短時間であるから、人間が生活する環境としては悪い場所である。

No. 22 建物（第4・8・31図、図版7）

1区のNo.10建物の東に存在する建物である。1区の予備調査で、東西方向に幅5mのトレンチを掘



第31図 No.22建物 ($S = \frac{1}{100}$)

土井遺跡(61)

開したときに、壁面に柱穴を検出して存在を確認した。この建物の特徴は豎穴住居状に1段掘り下げて、水平な面を形成していることである。東側の部分は削平されて肩部分が明確でないが、平面形は南北方向が約7.50m・東西方向が4.00mを測る隅丸長方形を呈する。建物の棟方向はN-2.0°-Eになり、桁行が西側で4間になっていた。この桁行の柱間寸法は、外が1.20m・内が1.10mの一定の数値を示していたが、東側の桁行の柱穴は精査したにもかかわらず、後世の溝や法面で削平されはっきりしなかった。しかも東の隅丸長方形プランの外に張り出す位置に柱穴が存在するので、梁行が何間になるのか、またどのような形の建物になるのかはっきりしない。梁行の柱間寸法が計測できる位置では、1.70mと1.85mになっていた。桁行の柱穴には径が約60cmで深く掘り込まれたものと、径が約40cmで比較的浅く掘り込まれたものとが交互に配置されていた。この建物が大小の柱穴を交互に配置することを原則にしていたならば、四隅の柱穴は規模が大きいもののが存在していたと考えられるから、4×2間の建物になる。ところが隅丸長方形プランが建物と交叉して、建物が水平な面から張り出してしまうことになる。予備調査のトレンチで検出した柱穴2に柱の痕跡を確認している(第4図、図版7-1)。それによると、柱は円柱形で径が約15cmのものを使用していた。いずれにしてもこのNo.22建物は、土井遺跡の建物では特異な存在であった。

No. 23 溝(第9図、図版2-2・5-2)

No.19柱列に接する溝とNo.24溝の中間に存在する浅い溝である。検出した地山面で幅0.80~1.40mを測り、北に向うにしたがって幅が狭い。No.25土壙と交叉していたが、この溝が新しい。溝内に遺物は存在しなかった。

No. 24 溝(第9図、図版5-2)

No.23溝の東に存在する浅い溝である。検出した地山面で幅約0.80mを測る。先に記したNo.19柱列の位置に存在する溝やNo.23溝とほぼ平行する方向であった。溝内に遺物が存在しなかったので、時期は不明であるが、平行する2本の溝とともに存在していたと考える。

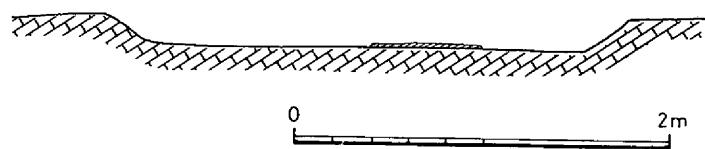
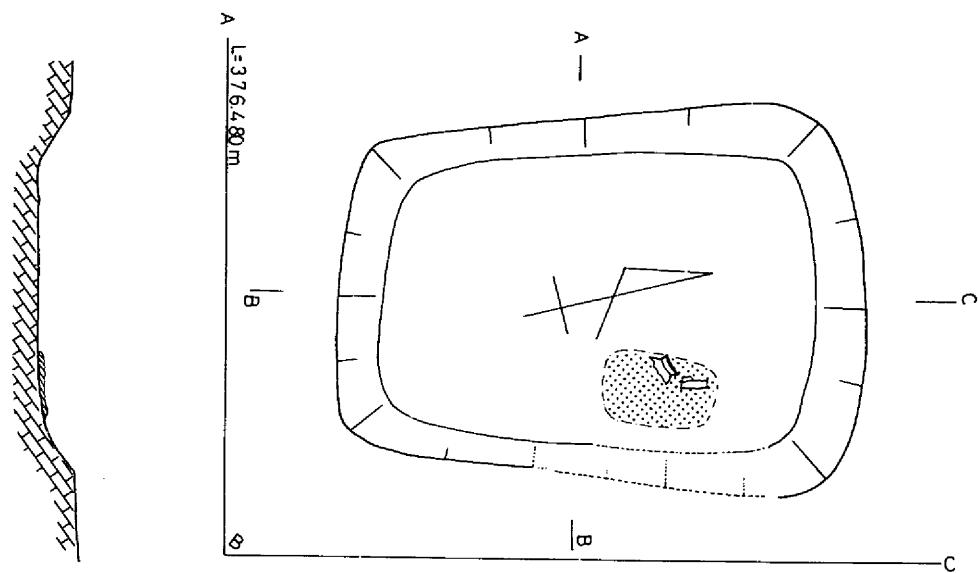
No. 25 土壙(第9・32図)

2区の北東にNo.23溝に交叉して存在する土壙である。この土壙の東脇には大木の根があって、土壙の一部を破壊していた。平面形は南北に長い隅丸長方形を呈する。検出した上面の長軸が2.80mになり、短軸では南が1.63m、中央が1.89m、北が2.08mになっていた。内法は長軸が2.29mになり、短軸では南が1.23m、中央が1.53m、北が1.52mになっていた。土壙の床面は水平で、焼土と土師器片を検出した。この土壙の性格は不明である。

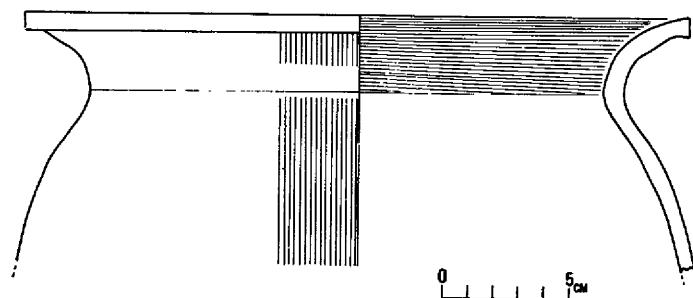
No. 25 土壙出土土器(第33図、図版10-1)

口縁から胴部にかけての破片である。口縁は「く」字状に外反し、端部に面を有する。外面は口縁から胴部にかけて、縦方向に櫛状工具の痕跡を施している。頸部は横ナデを行っている。内面の口縁は横方向に外面と同じ櫛状工具の痕跡を有する。頸部から胴部にかけては不規則なナデを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で明るい褐色を呈する。この土器は古墳時代後期に属すると考える。

土井遺跡(61)



第32図 No.25土壤 ($S = \frac{1}{40}$)



第33図 No.25土壤出土土師器 ($S = \frac{1}{3}$)

土 井 遺 跡 (61)

No. 26 風倒木痕 (第 9 図)

2 区の No.16 建物と No.17 建物が重複している位置に存在する。平面形は地山面に火山灰性土壤の黒ボク土が、約 40cm の幅で円を描いている。円の内側には地山の土を含んでいた。断面形は黒ボク土が U 字を描いて存在した。したがって人為的な遺構ではなく、風倒木痕であると考えた。

No. 27 土 壤 (第 9 図)

2 区の南に町道に接して存在した。長軸約 4.0m・短軸約 0.6m の不整形な土壙である。内部には火山灰性土壤の黒ボク土を含み、遺物は存在しなかった。土壙墓に似た形を呈するが、長軸がやや長すぎ、この遺跡の調査範囲内に土壙墓が存在しなかったので、はっきりしたことは不明である。

土 井 遺 跡 遺 構 一 覧 表 (表 3)

遺構番号	種類	地区	発掘担当者	図番号	図版番号	備考	
1	建 物	2	高 畑	9・10	2-1・3-1	6×2間	棟持柱が外に張り出す。
2	建 物	2	高 畑	9・11	2-2・3-1	2×2間	黒ボク土上に位置する。
3	建 物	2	高 畑	9・12	3-1・4	8×?間	柱間寸法が短かい。
4	建 物	2	高 畑	9・13	3-1・4	4×2間?	No.3 建物と重複する。
5	建 物	2	高 畑	9・14	3・4	5×2間	No.18 建物と重複する。
6	建 物	2	高 畑	9・15	3	3×1間	No.18 建物と並ぶ。
7	建 物	2	高 畑	9・16	3-1・4	1×1間	建て替えている。
8	建 物	2	高 畑	9・17	3-1・4-2	?×1間	未調査部分がある。
9	建 物	2	高 畑	9・18	3-1・4	2×1間	小規模の建物である。
10	建 物	1	福 田	8・20	7-2	5×1間?	詳細は不明である。
11	建 物	1	福 田	8・21	—	3×1間	柱根が存在する。
12	建 物	1	福 田	8・22	—	2×1間	No.11 建物と重複する。
13	建 物	1	福 田	8・23	—	3×1間	柱穴に石が存在する。
14	柱 列	1	福 田	8・25	—		柱穴 3 が直線に並ぶ。
15	建 物	1	福 田	8・24	—	5×1間	柱根が存在する。
16	建 物	2	高 畑	9・19	3	?×1間	柱穴より古銭が出土している。
17	建 物	2	高 畑	9・26	3-2	?×2間?	No.16 建物と重複する。
18	建 物	2	高 畑	9・27	—	3×1間	No.6 建物と並ぶ。
19	柱 列	2	高 畑	9・28	2-2・5		溝の方向に 2 列の柱穴が並ぶ。
20	建 物	1	福 田	8・29	—		未調査部分がある。
21	建 物	1	福 田	8・30	—	2×1間	南端の位置に存在する。
22	建 物	1	福 田	4・8・31	7	?×4間	豎穴住居状の面を有する。
23	溝	2	高 畑	9	2-2・5-2		断面 U 字形の浅い溝である。
24	溝	2	高 畑	9	5-2		No.23 溝と平行する。
25	土 壙	2	高 畑	9・32	—		土師器片が出土している。
26	風倒木痕	2	高 畑	9	—		遺物は存在しない。
27	土 壙	2	高 畑	9	—		不整形な土壙である。

第 5 章 遺構に伴わない遺物

弥生式土器（第34図、図版8—2）

土井遺跡から図化できる弥生式土器片が、17個出土している。いずれも表土または火山灰性土壤の黒ボク土中から採集したもので、遺構に伴うものは存在しない。

1は甕形土器の口縁部である。口縁端部は逆「L」字状に外反し、外面の頸部直下には、櫛状工具で横方向に櫛描き直線文を施している。器壁は厚く、内外面とも横ナデ仕上げを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色を呈する。2は前述した甕形土器の底部である。外面の上位には、横方向に短かい単位のヘラ磨きを施している。外面の下位には、指頭圧痕がみられる。内面は不規則なナデ仕上げを行っている。この甕形土器は、弥生時代中期初頭に属すると考える。弥生時代中期初頭の土器は、中国縦貫自動車道建設に伴う調査において、各地の遺跡から破片が出土している（註2）が、遺構の存在は確認されていない。中国縦貫自動車道の路線は、舌状に張り出した尾根を縫うように計画されているので、弥生時代中期の遺構が存在する中心部分の地点を調査しなかった結果によるのかも知れない。

3は高壺形土器の壺部である。口縁端部の上面には浅い凹みを有し、内外面への張り出しありはみられない。内外面とも横ナデを施している。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で灰褐色を呈する。この高壺形土器は二野遺跡（註5）に、類似のものが出土しており、弥生時代中期前半に属するを考える。

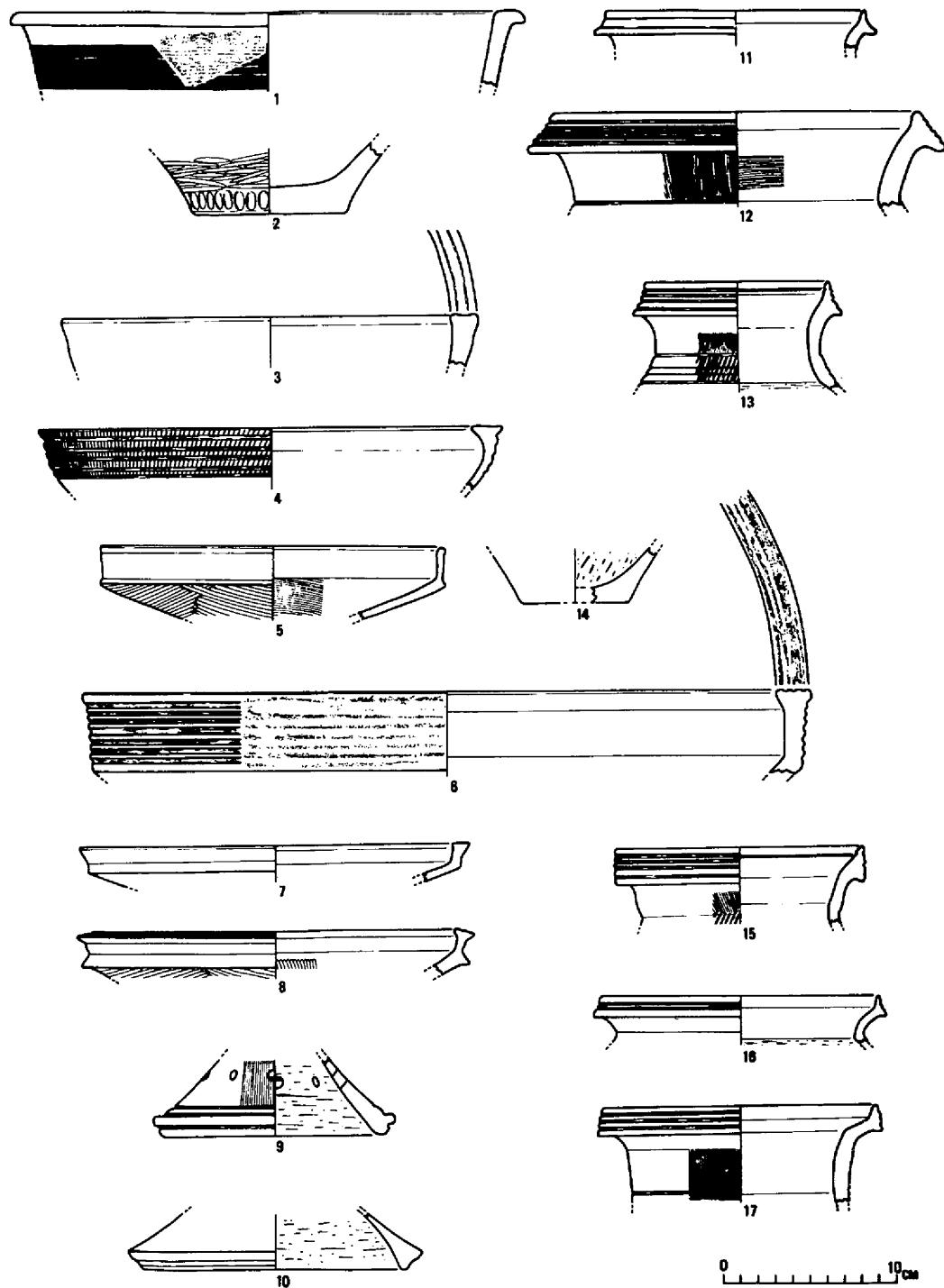
4も高壺形土器の壺部である。口縁端部は内側に張り出し、上位に面を有するけれども文様を施していない。外面には横方向に5条の凹線を有し、凹線の間に存在する高まり部分に斜め方向の刺突を全体にめぐらせていている。内外面とも横ナデ仕上げを施している。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で明るい褐色を呈する。この土器は弥生時代中期中葉に属すると考える。

5も高壺形土器の壺部である。口縁端部は直立して丸く仕上げている。口縁の外面は横ナデ仕上げを施しているが、外面の下位は、ヘラ磨きを行っている。口縁の内面は横ナデを施しているが、内面の下位は横方向の刷毛目を施した後に、横ナデ仕上げを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で明るい褐色を呈する。口縁の外面にはススの付着が認められる。この土器は弥生時代中期後半に属すると考える。

6は台付鉢形土器の口縁部である。外面には7条の凹線を有し、口縁端部の上面にも3条の凹線を施している。内外面とも横ナデ仕上げを行い、器壁は厚い。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色を呈する。この土器は弥生時代中期末～後期初頭に属すると考える。

7は高壺形土器の壺部である。口縁は斜め上方に立ち上がり、端部は肥厚する。内外面とも丹塗りを施し、横ナデ仕上げを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、金雲母の粒子も認められる。いわゆる特殊器台や特殊壺の胎土に類似する。焼成は良好で全体に丹塗りを施しているため赤褐

土井遺跡(61)



第34図 弥生式土器 ($S = \frac{1}{4}$)

色を呈する。この土器は弥生時代後期初頭に属すると考える。

8も高壺形土器の壺部である。口縁は斜め上方に立ち上がり、端部は内外面に張り出して上位に面を有する。この部分には浅い凹線状のものを2条有する。口縁部の内外面とも横ナデを施しているが、下位の内外面はヘラ磨きを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で明るい褐色を呈する。この土器は弥生時代後期前半に属すると考える。

9は高壺形土器の脚部である。裾部がゆるやかに開き、端部が肥厚して立ち上がり、1条の凹線を施している。外面の筒部上位には縦方向の刷毛目を施し、外面から内面方向に刺突した透し穴を10個有する。筒部の下位には横方向に2条の凹線を施している。内面は横方向のヘラ削りを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で明るい褐色を呈する。この土器は弥生時代中期後半に属すると考える。

10も高壺形土器の脚部である。裾部の端部は肥厚して立ち上がり、1条の凹線状のものを施している。外面は横ナデを行ない、全体に丹塗りを施している。内面は横方向のヘラ削りを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、金雲母の粒子も認められる。いわゆる特殊器台や特殊壺の胎土に類似する。焼成は良好で、外面は丹塗りのために赤褐色を呈するが、内面は褐色を呈する。この土器は弥生時代後期前半に属すると考える。

11は壺形土器とも甕形土器とも決しがたい器形の土器である。口縁部はゆるやかに外反し、端部が上下に張り出す。内外面とも横ナデ仕上げを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で明るい褐色を呈する。外面には有機物の付着が認められる。この土器は弥生時代後期前半に属すると考える。

12は「く」字状に外反する短かい頸部を有する壺形土器である。口縁端部は下方に張り出し、5条の凹線を有する。外面には縦方向の刷毛目を施し、下位に1条の凹線を有する。内面に横方向の刷毛目を施している。口縁端部の内外面とも横ナデを施し、器壁は厚い。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色を呈する。この土器は弥生時代後期前半～中葉にかけての時期に属すると考える。

13は壺形土器の口縁部である。口縁はゆるやかに外反し、端部は上下に張り出す。口縁端部の外面には4条の凹線を有し、内面にも1条の凹線を有する。頸部の外面には、図化できる範囲内で4条の凹線を施している。その凹線の間には、斜め方向に刷毛または櫛状工具の先端による刺突痕を、全体にめぐらせている。頸部の上位には、斜め方向に交叉する刷毛目を施している。内面の口縁部から頸部にかけては、横ナデ仕上げを行っているが、胴部は横方向のヘラ削りを施している。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で明るい褐色を呈する。この土器は弥生時代後期前半に属すると考える。

14は壺形土器または甕形土器の底部である。外面は縦ナデ仕上げを行っているが、内面は縦方向のヘラ削りを施している。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で明るい褐色を呈する。この土器は弥生時代後期に属すると考える。

15は壺形土器の口縁部である。口縁はゆるやかに外反し、端部は上下に張り出す。口縁端部の外面

土井遺跡(61)

には4条の凹線を有し、内面にも1条の凹線が認められる。頸部外面の上位には斜め方向の刷毛目を施し、下位には刷毛または櫛状工具の先端による刺突痕を全体にめぐらしている。内外面とも横ナデ仕上げを施している。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で明るい褐色を呈する。この土器は弥生時代後期前半に属すると考える。

16は壺形土器の口縁部である。口縁部は「く」字状に外反し、端部が上方に張り出す。口縁端部の外面には2条の細い凹線を有する。口縁部の内外面とも横ナデ仕上げを行っているが、頸部直下の内面は横方向のヘラ削りを施している。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色を呈する。この土器は弥生時代後期前半に属すると考える。

17は壺形土器である。長頸壺に属すると考える。ほぼ直立した頸部が上位で屈曲して口縁部を形成している。口縁端部は上方に張り出し、外面に3条の凹線を有する。口縁部の内外面とも横ナデを施している。頸部の外面には縦方向の刷毛目を施し、下位に図化できる範囲内で1条の凹線を有する。頸部の内面は横ナデを施している。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。この土器は弥生時代後期前半に属すると考える。

以上に説明したのが土井遺跡出土の弥生式土器であるが、中期から後期まで各時期の土器が含まれている。器形では壺形土器・甕形土器・高坏形土器・鉢形土器と各種のものが存在する。しかし調査範囲内を精査したにもかかわらず、弥生時代に属するはっきりした遺構は確認できなかった。

石鎌（第39図、図版10—2）

サヌカイト製の打製石鎌である。基辺の形状が凹む「凹基無茎式石鎌」である（註6）。基辺1.3cm・長さ2.5cm・厚さ0.3cm・重さ0.6gを測る。正面では剥片を石鎌の形になるように2次加工を加えた後に、周囲に細かい調整剝離を行っている。背面は母岩からの剝離面をそのまま利用して、細かい調整剝離を行っている。この石鎌は剥片の剝離面を利用した精巧な仕上げになっている。弥生時代に属すると考える。

奈良時代～鎌倉時代の土器（第35図、図版8—1）

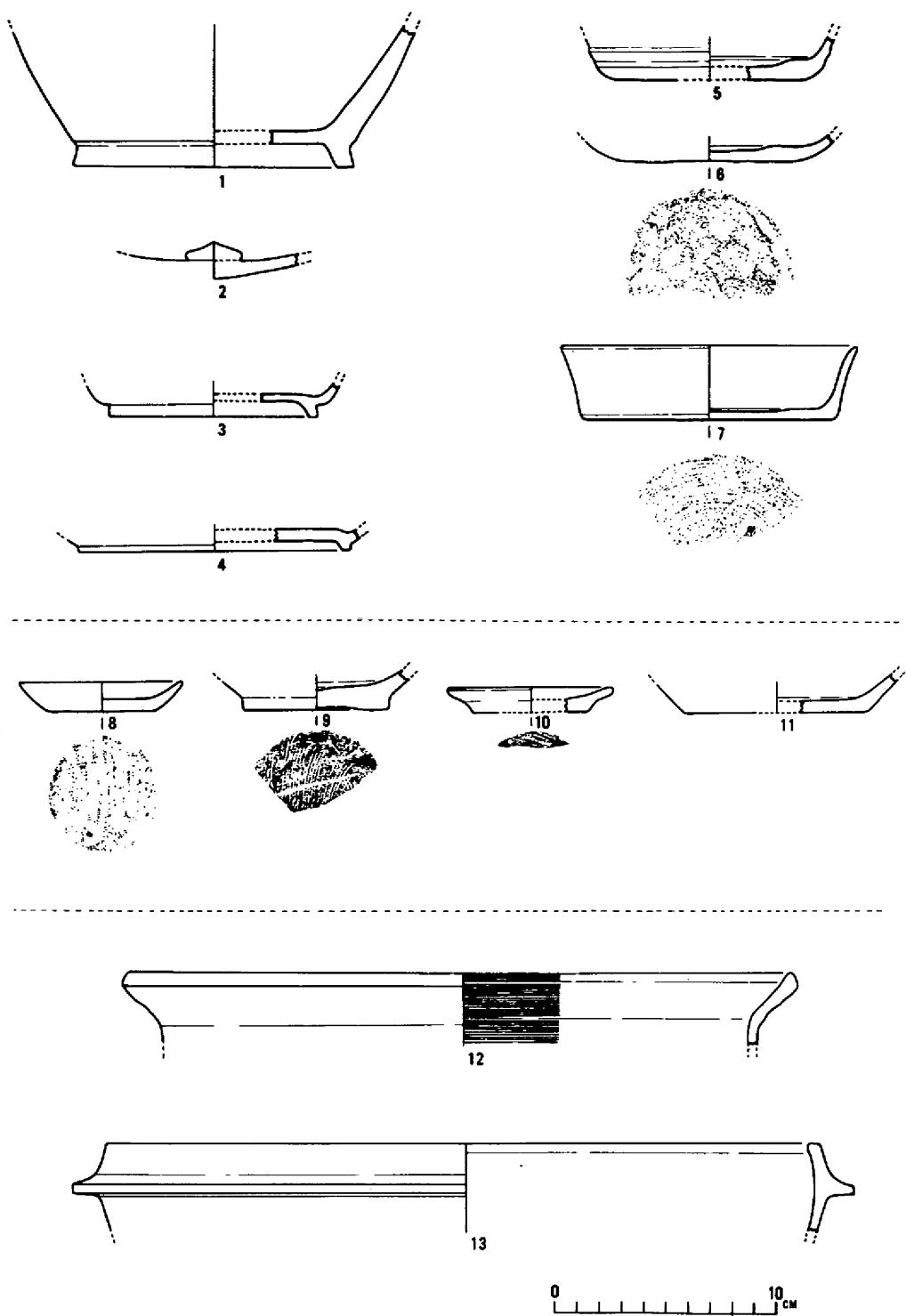
土井遺跡の建物群の時期を判断する資料になるものである。調査範囲が比較的広い面積であったにもかかわらず、出土した遺物の量が少ない。須恵器片の図化できるものが7点出土している。

1は貼り付け高台を有する壺形土器または瓶形土器の底部である。高台はやや高く外方に張り出し、外面の接続部分は指頭でナデで整形を行っている。外面は叩き目の上を不規則なナデを行っている。内面は青海波文の上をナデた後に部分的にスプーン状の工具で削り上げている。外面の底部はナデ仕上げを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で灰黒色を呈する。

2は宝珠形の「つまみ」を有する坏蓋の破片であるが、中心から周囲に反り上がった変形のものである。「つまみ」は貼り付けており、外面全体に自然釉が認められる。内面はナデ仕上げを施し、胎土中には砂粒が少なく、焼成は良好で灰色を呈する。

3と4は貼り付け高台を有する坏身底部の破片である。どちらも高台の立ち上がりは少ない。底部の外面はヘラ切りを行った後に、刷毛による軽いナデの痕跡が認められるもの（3）と、ヘラ切りを行った後にナデで仕上げているもの（4）とがある。内面は刷毛目が認められるもの（3）と、ナデ

土 井 遺 跡 (61)



第35図 奈良時代～鎌倉時代の土器 ($S = \frac{1}{3}$)

土 井 遺 跡 (61)

仕上げを行っているもの（4）とがある。どちらも胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で灰色を呈する。

高台を有しない坏身（5～6）には、底部から口縁部の立ち上がりの境が湾曲するもの（5，6）と屈曲するもの（7）とがある。前者の底部はヘラ切りを行っているが、ヘラ切りを行った後にナデを加えているもの（5）と、ヘラ切りのままで痕跡が残っているもの（6）との相違が認められる。後者の底部外面は糸切りを行っている。これらの土器の胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で灰色を呈する。

以上に記した須恵器の坏身には、高台を有するもの（3，4）と高台を有しないもの（5～7）とが存在する。底部外面の整形では、前者のものはヘラ切りを行っているが、後者のものはヘラ切り（5，6）と糸切り（7）が認められる。糸切りはヘラ切りよりも後出の手法であると指摘されている（註7）ので、7の坏身は時期が新しくなると考える。そのほかの土器については形や整形技法が類似しているので、ほぼ同時期の奈良時代～平安時代に属すると考える。

次に土師質土器について記述したい。8は口径7.2cm・器高1.3cmを測る小皿である。口縁は斜め上方に内湾するように立ち上がる。底部の外面には叩き目と糸切り痕跡を有し、内外面とも横ナデ仕上げを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で白味がかった褐色を呈する。

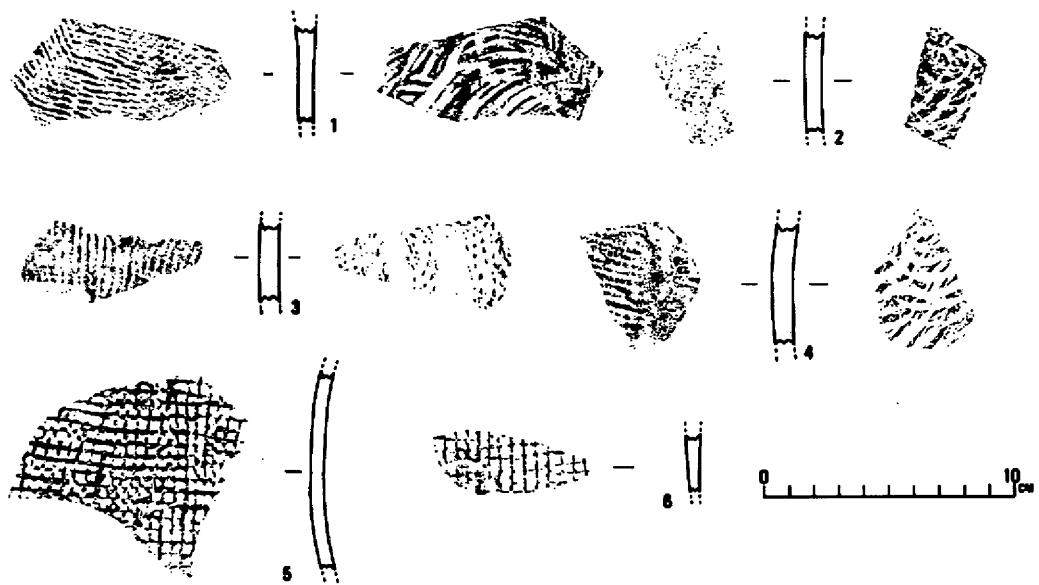
9は坏身の底部と考える。底部は低い立ち上がりを有し、器壁が厚くなっている。底部の外面には糸切り痕跡を有し、内面は横ナデ仕上げを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で白味がかった褐色を呈する。

10は推定の口径7.4cm・器高1.1cmを測る小皿である。口縁は斜め上方に外反するように立ち上がり、端部は丸くなる。底部の外面には糸切り痕跡を有し、内外面とも横ナデ仕上げを行っている。底部の器壁は8の小皿に比較して厚い。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は普通で白味がかった褐色を呈する。

11は坏身の底部と考える。底部の外面は切り取った後に粗いナデ仕上げを施している。内面は横ナデを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で白味がかった褐色を呈する。

以上の土師質土器の胎土中には細かい砂粒を多く含み、白味がかった褐色を呈するという共通性が認められる。平安時代末～鎌倉時代初頭に属するものと考えられている（註8）。

そのほかに土鍋（12）と釜（13）の破片が出土している。前者は「く」字状の口縁を有し、端部に丸くなった面が存在する。外側は横ナデを施しているが、内面は全体に横方向の櫛目が認められる。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で白味がかった褐色を呈する。この土器の出土する集落や生活址の調査が皆無に近い状態であるので、はっきりしたことは不明であるが、平安時代末～鎌倉時代初頭以後の中世土器と考えられている（註8）。後者の釜はいわゆる羽釜と呼ばれるもので、カマドとセットになると見える。内湾した口縁の下位に水平なヒレがめぐる。ヒレの接合部分には指頭圧痕が認められる。内外面とも横ナデ仕上げを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で白味がかった褐色を呈する。この土器も前者の土鍋と同様に調査例が皆無に近い状態であるので、はっきりしたことは不明である。一応奈良時代前半以後のものと考えておきたい。

第36図 須恵器片・須恵系瓦質土器(亀山焼)片の拓本 ($S = \frac{1}{3}$)

須恵器片・須恵系瓦質土器(亀山焼)片の拓本(第36図、図版9)

須恵器片(1～4)は、いずれも大形の甕形土器の破片と考える。外面には短かい単位である条痕の叩き目を有する。斜め(1, 2, 4)・横(1)・縦(3)と方向は不規則で一致していない。内面はいずれも同心円状の青海波文を有する。青海波文の上からスプーン状の工具で縦方向に削り上げているもの(3)が存在する。外面に自然釉の認められるもの(2, 4)もある。これらの土器は奈良時代～平安時代に属するものと考える。

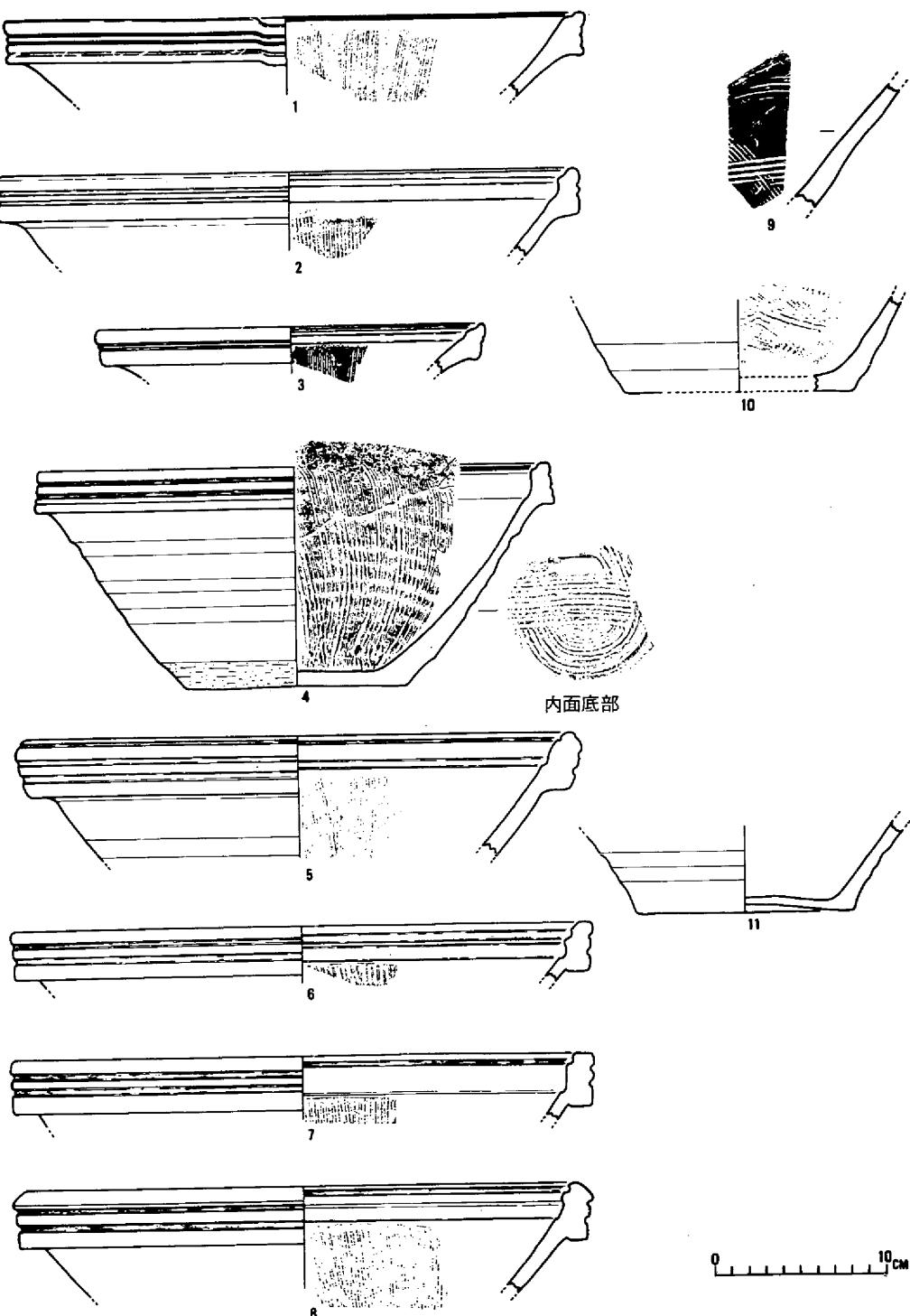
須恵系瓦質土器片(5, 6)は前記の須恵器片に比して器壁が薄い。どちらも大形の甕形土器の破片と考える。外面には格子の叩き目が施され、内面には粗い刷毛目が認められる。この瓦質土器は倉敷市玉島の亀山焼と考えられているもので、鎌倉時代～室町時代に属するという(註9)。

備前焼擂鉢土器・壺形土器(第37図、図版11・12)

図化した口縁は、ほとんどのものが推定口径30cm強・高さ12～15cmの擂鉢形土器である(3を除く)。口縁の外面には2～3条の凹線または凹線状のものを有し、内面には櫛状工具による縦方向の条線が認められる。破片ばかりで完形品が出土していないが、すべてのものに1と同様の片口を有すると考える。

1の口縁は斜め上方に立ち上がり、端部がわずかに上下に張り出す。口縁の上端には1条の凹状線のものを有し、外面には2条の凹線と1条の凹線状のものが存在し、片口になっている。胴部の内面には櫛状工具による縦方向の条線が、8条を単位で認められる。器壁は0.7cmを測り、器面に光沢を有する焼成良好なものである。

土井遺跡(61)



第37図 備前焼擂鉢形土器・壺形土器 ($S = \frac{1}{4}$)

土 井 遺 跡 (61)

2の口縁も斜め上方に立ち上がる。口縁の外面には幅の広い2条の凹線状のものを有し、外面には2条の凹線が存在する。胴部の内面には、櫛状工具の条線が11条を単位で認められる。器壁は0.7～0.8cmを測り、焼成の良好なものである。

3は推定口径23.0cmを測る小形のものである。口縁は2と同様の形状を呈する。胴部の内面には、7条単位の条線を有する焼成良好なものである。

4は口径30.0cm・器高12.6cmを測る。口縁は斜め上方に立ち上がり、端部が肥厚して断面が縦方向に長い長方形を呈する。口縁の上端には1条の凹線状のものを有し、内面には幅の広い凹みがめぐる。外面には2条の凹線と1条の沈線を有する。胴部の外面には凹凸が著しく、器壁は口縁部直下から底部にかけて厚くなる。底部に接する部分は、横方向のヘラ削り痕跡を残している。胴部の内面には櫛状工具による縦方向の条線が、17条を単位で認められる。前述のもの(1～3)に比して櫛状工具の単位の幅が密になっている。底部の内面にも櫛状工具による条線を施している。底部外面はヘラ削りを行っているだけである。この擂鉢の焼成は良好であるが、器面に光沢は認められない。

5は口縁端部の肥厚が著しいものである。口縁の外面には3条の凹線を有し、内面には2条の凹線が存在する。胴部の内面には櫛状工具による10条を単位とした条線が認められる。

6～8の擂鉢はほぼ同様の形状を呈するものである。口縁の端部が肥厚して断面が縦方向に長い長方形を呈する。口縁の外面直下には上方に抉り込んだ沈線状のものが認められる。口縁を肥厚させるのに、貼り付けた粘土の痕跡が残っているのかもしれない。口縁の外面には2条の凹線を有し、内面には2条の凹線または凹線状のものが存在する。胴部の内面には、全体に櫛状工具による縦方向の条線をめぐらせている。いずれも焼成は良好であるが、器面の光沢は顕著でない。

鉢形土器または壺形土器の底部付近の破片と考えられるもの(9～11)が出土した。胎土・焼成・色調は前記した擂鉢形土器と同じである。

9の外面はなめらかで凹凸が認められない。内面には櫛状工具による横または斜め方向の条線が認められる。10の外面には凹凸が認められ、内面には不規則な条線が複雑に存在する。11の外面にも凹凸が認められるが、底部の器壁は薄く、内面には条線が存在しない。

以上に記した備前焼擂鉢形土器と壺形土器の時期を考えてみたい。備前焼の研究では倉敷考古館のすぐれた報文がある(註10)。その報文では、備前焼の成立から推移の過程を5期に分類して編年が行われている。擂鉢形土器だけに限定すると、土井遺跡出土の土器のように、口縁の外面に凹線または凹線状のものを有するものは、報文によると、室町時代のIV期には存在していない。したがってそれ以後の時期になることが考えられるが、口縁の外面に凹線または凹線状のものが施されるようになるまでには、相当の時間的経過を考慮しなければならないと考える。ここでは、はっきりしたことは不明のままに、江戸時代に属するとしておきたい。

図化した土井遺跡出土の擂鉢形土器のうちでも、1～3は胴部の内面に認められる条線が、櫛状工具で描いた条線の単位が明瞭な間隔を有し、口縁の形状も古い要素を呈するので、若干の時期差が存在すると考えている。

土井遺跡(61)

陶磁器（第38図、図版13・14）

土井遺跡から出土した土器片で、釉薬が認められるものを一括して、陶磁器でまとめることにした。なお染付土器は図版を掲載しておいたので参考にされたい（図版14）。

1は鉢の口縁であるが、端部は外面に張り出しを有し、丸くおさめている。内外面とも釉薬が施され、ガラス質になっている。色調は黄褐色を呈する部分と、緑褐色を呈する部分が、まだらになっている。

2も鉢の口縁である。上端は面をなし、外面に2段の張り出しを有する。内外面とも半透明の釉薬が施され、ガラス質になって黄緑色を呈する。

3は壺の破片である。口縁は内外面に張り出して丸く仕上げている。胴部外面の中位には2条の凹線が存在する。内外面とも釉薬が施され、外面の口縁から頸部にかけてと内面は黒褐色を呈するが、外面の胴部は茶褐色を呈する。部分的には上位の黒褐色を呈する釉薬の流れが認められる。

4は縦に長い建水状の容器である。口縁端部は内面に張り出し、黄緑色を呈する釉薬が外面と口縁の上端に施され、ガラス質になっている。

5は小形の燈明皿であろうか。口縁は屈曲して斜め上方に立ち上がり、端部が丸くなっている。外面の底部には釉薬が認められないが、それ以外の部分には、青褐色を呈する釉薬が施されている。

6は小形の壺であろうか。胴部から口縁にかけては「く」字状に屈曲し、端部が丸くなっている。この容器には蓋とセットで使用されていたと考える。口縁の内面と外面全体に、黄緑色の釉薬が施されてガラス質になっている。

7は高台を有する皿である。高台は厚手のもので、立ち上がりが低い重厚な容器である。外面の底部には釉薬が認められないが、それ以外の内外面とも緑色の釉薬が施されている。内面の釉薬は外面のものに比して濃い色調を呈する。内面には釉薬が円状に欠除している。おそらく焼成の際に重ね焼きを行ったときに生じた痕跡であろう。

8は口径12.0cm・器高2.9cmを測る高台を有する皿である。底部は周辺を削り取って高台をつくりだし、中央に円錐形の突起を残している。口縁は外反し、丸くおさめている。内面の全体に釉薬を施しているが、重ね焼きを行った痕跡も認められる。外面の釉薬は口縁部分だけで底部には認められない。釉薬の色調は灰緑褐色を呈する。

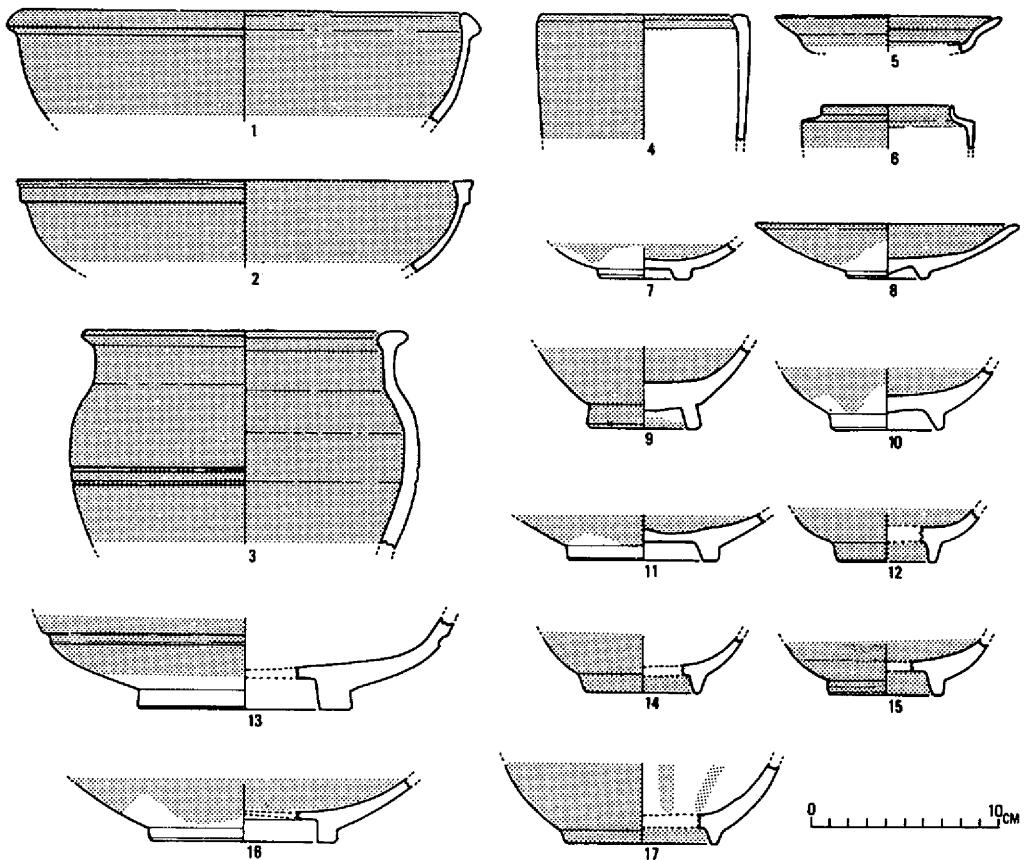
9は比較的高い高台を有する碗である。内外面とも全体に緑褐色の釉薬が施されてガラス質になっている。口縁に近い部分では縦方向に不規則な間隔で線が認められる。焼成は非常に良好で硬質の容器である。

10は断面が三角形に近い形の比較的高い高台を有する碗である。外面の底部には素焼き部分を残すが、それ以外には黄緑褐色の釉薬を施している。

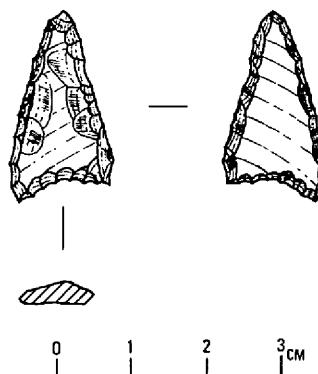
11は厚手の高台を有する皿と考えられる容器である。外面の底部を除いて灰黄褐色の釉薬を施している。底部だけの破片なのではっきりしたことは不明であるが、大形の容器に属するものであろう。

12, 14, 15, 17はいずれも高台を有する碗である。高台の比較的高いもの（12, 14, 15）と低いもの（17）の相違はあるけれども、高台は外に張り出さずにはほぼ垂直に立ち上がっている。釉薬は灰白

土井遺跡(61)



第38図 陶磁器 ($S = \frac{1}{4}$)



第39図 石鏃 ($S = \frac{1}{1}$)

色を呈し、外面全体に施されている。内面の釉薬は全体に施されているもの(12, 15),部分的に縦方向へ流れたようになっているもの(17),釉薬を施していないもの(14)がある。

13は底部だけの破片であるからはっきりしたことは不明であるが、碗に似た形の容器になると考える。大形の外面の底部近くには1条の凹線を有している。高台は斜め方向にふんばった厚手のものを有する。外面の釉薬は底部を除いて黄緑褐色を呈するものが施され、内面は底部に霧状の痕跡をとどめるだけである。

16はほぼ垂直方向に立ち上がる高台を有する、大形の皿になると見える。大形の容器であるにもかかわらず底部の器壁は薄い。釉薬は黄褐色を呈し、外面の底部には施されていないが、内面は全体に認められる。内面に重ね焼きの痕跡が存在しないので、皿以外の容器になるのかもしれない。

以上に記した陶磁器の釉薬は種々の色調を呈し、外面の底部には釉薬を施すものと施さないものとが存在する。また釉薬の表面が光沢を有し、ガラス質になっているものが認められる。器種も鉢・壺・碗・皿と種々の様相を呈し、用途に応じた容器の多様性が考えられる。これらの容器が使用されていた時期も、古い時代を想起させる要素はなく、江戸時代後半以後の近世に属するものであろう。

第6章 まとめにかえて

土井遺跡で検出した建物について、若干の考察を行い、まとめにかえたい。

遺跡の所在する地点が舌状に張り出した台地上に位置するけれども、町道を境にして南側の1区と北側の2区では地形が異なっている。1区は西から東にかけて緩斜面で、南側に土井上遺跡が所在する山陵がせまっている。その裾部から町道にかけて浅い谷を形成しており、湧水がたえず流れて湿潤な地形になっていた。また昼間の日光が南側の山陵に遮られて、人間が生活する環境としては悪い。2区は台地上のほぼ水平な位置にあたるため、1区よりも建物が存在するには恵まれた地形になっていた。1区よりも2区で検出した建物が多かったという事実からも考えられることである。

調査で検出した建物の配置を概観すると、計画的に建てられているとは考えられない。個々の建物の行方向は不揃いで、規模も異なる。1区のNo.12建物とNo.15建物がほぼ直交する方向に存在するのと、2区のNo.6建物とNo.18建物がほぼ平行する位置に並んで存在するのが確認できるだけである。それ以外の建物は重複して検出されたものか、周辺の建物と全く方向を異にする状態で存在する建物である。

柱穴から測定した柱間寸法は、一定の数値の距離を呈する建物が1棟も存在しない。平均値で柱間寸法を推定することはできるが、数値のばらつき幅が大きい。この状態が土井遺跡で検出した建物の特徴でもある。それではなぜ柱穴間の距離が、一定の幅になっていないのか考えてみたい。この遺跡で検出した建物は、赤磐郡山陽町馬屋に所在する備前国分寺(註11)の建物のように礎石を有する大規模な建物は存在しないし、久米郡久米町大字唐臼に所在する久米廃寺(註12)の建物や、久米郡久米町宮尾に所在する宮尾遺跡(註13)の建物のように、直交する方向に建物が整然と配置されてい

土 井 遺 跡 (16)

る状態でもない。これらの遺跡の建物は規模が大きいので、柱の位置が本来の位置から逸れると、建物の上部構造を支えることができなくなる。ところが土井遺跡で検出した建物の柱穴の径は50cm前後のものがほとんどで、柱は径20cm前後の丸太を使用し、建物の規模も小さい。このような建物を建てるには、柱穴を掘り込む段階で、柱穴の間の距離を一定数値に統一しておく必要が生じなかったのであろう。つまり一定の数値に統一して柱穴を配置していても、柱を設置して建物を建てはじめると種種の矛盾が生じて、建物が建たない結果になるのであろう。1区の建物に残存していた柱根を、岡山大学農学部教授畔柳 鎮氏に材質鑑定していただいた結果によると、多種類の材質を使用しており、周辺の山林に生育する雑木を適宜に伐採して柱材に使用したと考えられる。同じ材質の柱でも、雑木であれば不揃いになる可能性があるのに、材質が一定でなければ、柱の役目にならないような曲った丸太を使用していたことも考えられる。しかも建て替えを行っている建物が、No. 5・18建物、No.7建物、No. 11・12建物に認められたから、建物が永久的に存続できるような配慮はなく、ただ柱が安定している期間に、上部構造を支えることができればよかっただのであろう。そしてその建物が使用不能の状態になってしまってもなお同じ位置にその建物が必要であった場合に、建て替えた痕跡が認められたと考える。このように柱材に周辺の山林で生育する雑木を使用し、建物を永久的に維持しなくても、必要があれば建て替えを行う小規模の建物であるから、適材を適所に使用して建物を建てているようである。したがって柱穴の位置が同じ距離に直線的に配置されなくて、柱穴間の距離に多少の長短が生じても、建てようと意図する目的の建物の仕上がりに障害がなかったのであろう。水平な地形で検出した建物の柱穴の底のレベルは、ほぼ同じになっていたが、1区の緩斜面に建てられていた建物の柱穴は、検出した地山面からの深さがほぼ同じに掘り込んでいるけれども、底のレベルは不揃いである。この状態は現在の家を建てるときのように、柱の下部の位置を同じレベルにしておいて、同じ長さに決められた柱を使用する方法とは異なるようである。1区の緩斜面で検出した建物の柱穴を検討すると、どの柱も建物の上部構造の重量が加わっても、沈まないだけの安定する深さにおさめているので、湧水のある軟弱な地点の柱は、より深い位置になっていた。柱を立てるには、重量が加わっても沈まないように、底部を安定した地盤へ到達させることに重点が置かれている。柱と掘り方の隙間には、柱穴を掘り込んだときの土砂を埋めもどしたが、柱が不安定な状態では、拳大から人頭大の石を詰めたと考える。小規模の建物では、柱を柱穴内におさめてのちに、上部構造を組む段階で、柱の上端の桁や梁が、使用する材料に応じて都合よくおさまるように切断したのであろう。したがって柱をあらかじめ同じ長さに揃えて切断しておくと、不都合が生じ建物が建たないようになる。このように建物を建てる位置の地形や地面の土質に左右され、使用する材料にも適合させなければならないので、建物の柱穴の位置をあらかじめ均一な数値に統一して配置していても、ほとんどその効果がない。むしろ柱を柱穴内におさめて上部構造を構築する段階で、使用する材料に応じて柱間寸法が補整されたり、切断する材料の寸法が決められたりすると考える。

No. 1・2・3・16・17・22建物では、比較的径が大きくて深く掘り込まれた柱穴と、径がやや小さくて浅い柱穴を交互に配しているのが認められる。そして四隅の柱穴は、比較的径が大きくて深く掘り込まれた柱穴になっていた。この状態は建物の上部構造に起因すると考える。つまり前者の柱穴

の柱は、上部構造の重量を直接支える位置で、後者の柱は、上部構造の重量があまり加わらない位置になるのであろう。

次にこの遺跡で検出した建物で、特徴を有するものについて記したい。

No. 1 建物は、棟持柱が外に張り出す「大社造」の形態を呈する。柱穴間の距離にばらつきが認められるが、比較的形の整った大規模な建物である。この建物は桁行の柱穴間の距離がやや短かいので、かなりの重量にも耐える配置を呈している。しかも棟持柱が張り出した位置に存在しているから、屋根の荷重が周囲の壁に加わるのを軽減する構造になっている。したがって人間が居住していた建物ではなく、物を備蓄する倉庫が考えられるが、はっきりしたことは不明である。

No. 2 建物は、 2×2 間の形が整った小規模な建物である。四隅には比較的径が大きくて深く掘り込まれた柱穴を配しているが、中間には径がやや小さくて浅い柱穴になっている。しかも梁行 1 に対して桁行 2 の比率になっている。この建物は小規模な倉庫と考えたい。

No. 3 建物は、未調査部分を道路用地外に残すため、全貌を明らかにできなかったが、土井遺跡で検出した建物のうちで、最も柱穴間の距離を短かくして柱穴を数多く配しているのは、やはり建物が相当の重量に耐えるように配慮していると考える。したがってこの No. 3 建物は、重量のある穀物の備蓄に使用した倉庫と考えたい。

No. 15 建物は、柱穴の径が最大を測る建物である。 5×1 間の規模を呈し、柱根が残存した。この建物は二野遺跡の No. 8 建物に類似する(註 5)。二野遺跡の No. 8 建物は桁行・梁行とも柱穴間の距離がほぼ一定の数値を呈する、均整のとれた長方形のプランになっていたが、この No. 15 建物では不揃いになっている。残存した柱根の木質鑑定結果によると、二野遺跡の No. 8 建物はネムノキ 1, アラカシ 1, アベマキ 4 とアベマキを主体に柱材を揃えているが、この No. 15 建物では多種類が存在して、周辺の山林に生育する雑木を適宜に伐採して柱材に使用したと考えられ、柱材の選択に特別の配慮は認められない。二野遺跡の No. 8 建物は、柱穴列を伴っていたが、この建物に伴う遺構は、調査範囲内では何も検出できなかった。No. 15 建物は二野遺跡の No. 8 建物よりも後出要素が多い。この建物の周辺から須恵器片(第35図 1~7)が出土している。建物に直接伴うものとは言えないが、建物の時期を知る手掛りになると見える。

No. 16 建物の柱穴からは古銭(景祐元寶)が出土した(図版10—3)。古銭は北宋銭で、1034年鋳造である。この古銭が日本に持ち込まれるまでの年数を考えると、No. 16 建物は平安時代末から鎌倉時代初期に建てられていたと考えられる。この建物の柱穴の平面形は No. 8 建物に類似する。桁行の柱間寸法は異なるが、約30cmを1尺にすると No. 16 建物は 8 尺間、No. 8 建物は 6 尺間になっている。したがって建物の方向が相違するものの、No. 8 建物は No. 16 建物とほぼ同時期に建てられたと考える。

No. 22 建物は特異な存在である。柱穴を取り囲むように水平な面を有する。この建物はほかの建物と異なり、水平な地表面を使用するために建てられていたと考える。人間が居住するには不適当であり、倉庫に使用するならば、地面からの湿気を直接に浴びるので、物を保存することができない。したがってほかの用途に使用した建物と考えなければいけない。この遺跡の調査範囲内には、鉄滓(図

土 井 遺 跡 (61)

版10—4)が少量ではあるが出土した。哲西町内の山間部にも製鉄遺跡が分布している(註2)ことが知られている。このような状況から製鉄遺跡に関連した作業場と考えたいが、建物内に炉跡が存在しないし、遺物の存在も確認できなかったので、はっきりしたことは不明である。

これまでこの遺跡で検出した建物について記したが、土井遺跡の性格についても考えてみたい。

南側の山陵には、縄文時代早期の土器片を採集した土井上遺跡が所存するが、この土井遺跡では、縄文時代に属する遺構・遺物は存在しなかった。弥生時代になると中期前半からの遺物が出土しているが、遺構は確認できなかった。古墳時代の遺構として、焼土と土師器が伴うNo. 25土壙を検出したが、土壙の性格が不明であるため、詳しいことはわからない。この土井遺跡で人間が本格的に活動するようになったのは、No. 15建物を建てた時期からである。そして中世の時代になっても引き続いて建物が建てられ、この傾向は備前焼播鉢や陶磁器が出土しているので、現在の状況に継続されている。したがって土井遺跡は、ある時期のまとまった建物群の状況を呈するのではなく、近接した地に所在する二野遺跡の大規模な建物群が存在した直後の時期から、現在に至るまでの村落形態の推移を示していると考える。

註

- (1) 岡山県教育委員会「光坊寺古墳群」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告15」1976年
- (2) 岡山県教育委員会「阿哲郡哲西町の地理的歴史的環境」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告15」1976年
- (3) 伊藤延男編「住居(すまい)」「日本の美術No.38」至文堂 1969年
- (4) 岡山大学農学部教授畔柳 鎮氏の鑑定結果による。
- (5) 岡山県教育委員会「二野遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告15」1976年
- (6) 小林行雄・佐原 真「紫雲出」詫間町文化財保護委員会 1964年
- (7) 田辺昭三「陶邑古窯址群I」「平安学園創立90周年記念研究論集第10号」1966年
- (8) 岡山市教育委員会「幡多廢寺発掘調査報告」1975年
- (9) 間壁葭子「倉敷市酒津一水江遺跡」「倉敷考古館研究集報第8号」1973年
- (10) 間壁忠彦・間壁葭子「備前焼研究ノート(1)―備前焼の成立―」「倉敷考古館研究集報第1号」1966年
間壁忠彦・間壁葭子「備前焼研究ノート(2)―中世備前焼の推移―」「倉敷考古館研究集報第2号」1966年
間壁忠彦・間壁葭子「備前焼研究ノート(3)―備前焼窯址の分布とその性格―」「倉敷考古館研究集報第5号」1968年
- (11) 岡山県教育委員会「備前国分寺跡緊急発掘調査概報」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告10」1975年
- (12) 岡山県教育委員会「久米庵寺」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4」1973年
- (13) 岡山県教育委員会「宮尾遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4」1973年



1. 1区東西トレンチ土層断面（北西より）



2. 1区東西トレンチ土層断面（南東より）

図版2

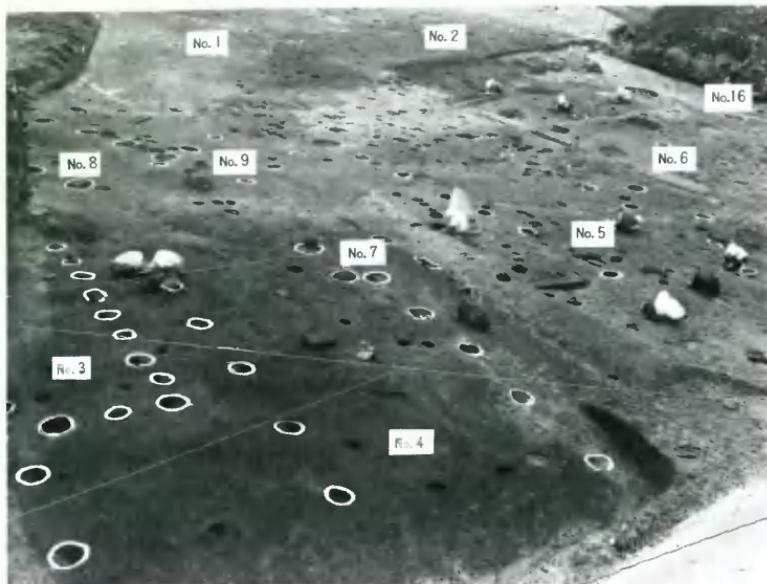


1. 2区No.1 建物 (南南東より)



2. 2区No.2 建物・No.19・23・24溝 (南西より)

図版3



1. 2区No.1・2・3・4・5・6・7・8・9・16建物 (南西より)



2. 2区No.5・6・16・17建物 (南西より)

図版4



1. 2区No.3・4・5・7・9建物 (北東より)



2. 2区No.3・4・5・7・8・9建物 (北東より)



1. 2区No.19柱列（南東より）



2. 2区No.19・23・24溝（北東より）

図版6



1. 2区調査後全景（南西より）



2. 土井遺跡調査後全景（南より）



1. 1区No.22建物土層断面（北より）



2. 1区No.10・22建物（南より）

図版8



1. 土井遺跡出土須惠器片



2. 土井遺跡出土弥生式土器片



1. 須恵器片・須恵系瓦質土器片外面

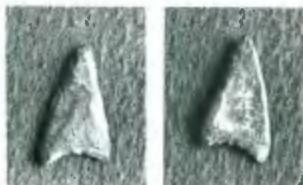


2. 須恵器片・須恵系瓦質土器片内面

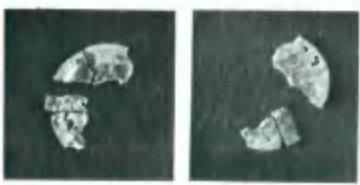
図版 10



1. No.25土壤出土土師器



2. 2区出土石鏃



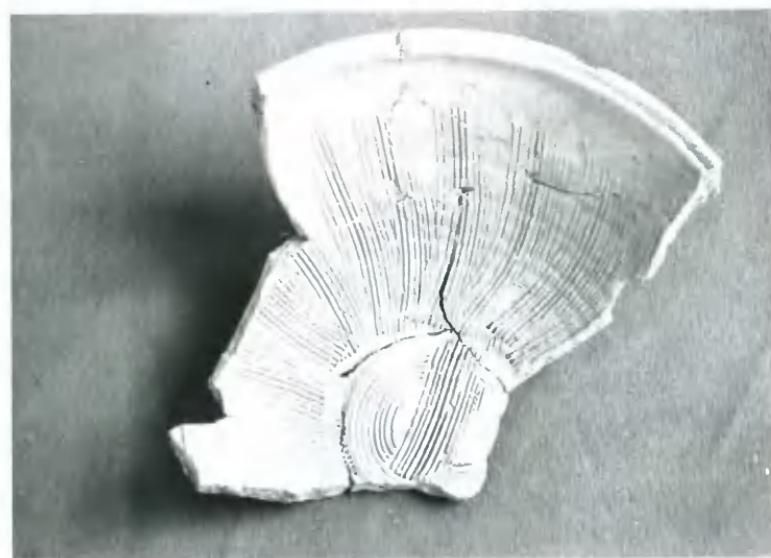
3. No.16建物柱穴内出土古錢
(景祐元寶)



4. 土井遺跡出土鉄滓



1. 備前焼擂鉢外面



2. 備前焼擂鉢内面

図版 12



1. 備前焼擂鉢外面



2. 備前焼擂鉢片内面



1. 土井遺跡出土陶磁器片外面



2. 土井遺跡出土陶磁器片内面

図版 14



1. 土井遺跡出土染付土器内面



2. 土井遺跡出土染付土器外面

大 倉 遺 跡 (67)

本文目次

第1章 調査の経過.....	531
第1節 調査の経緯.....	531
1. 遺跡の立地.....	531
2. 調査の経過.....	531
3. 発掘調査日誌抄.....	535
第2章 調査の概要.....	537
第1節 遺構.....	537
第2節 遺構に伴わない遺物.....	546
第3章 まとめ.....	553

図 目 次

第1図 大倉遺跡周辺地形図(50,000分の1)	531
第2図 大倉遺跡地形図(3,000分の1)(製図:松本).....	532
第3図 大倉遺跡トレンチ及びグリッド設定図(1,000分の1)(作成・製図:松本)	533
第4図 大倉遺跡地形図(300分の1)(実測:友成・松本, 製図:松本)	534
第5図 1区と2区の境界断面図(120分の1)(実測:友成, 松本, 製図:松本)	538
第6図 3区と4区の境界断面図(80分の1)(実測, 製図:松本).....	538
第7図 遺構全体図(200分の1)(実測:友成・松本, 製図:松本)	538~539
第8図 1号住居址実測図(60分の1)(実測:友成, 製図:松本).....	539
第9図 1号住居址内出土土器(実測, 製図:松本, 手拓:佐々木)	540
第10図 土壙1(実測:友成, 製図:松本)	541
第11図 石組溝(実測:友成, 製図:松本)	541
第12図 溝全体図(実測:友成, 製図:松本)	542
第13図 黒色土層, 溝上面出土須恵器(実測, 製図:松本)	543
第14図 溝内出土, 溝上面出土土器(実測, 製図:松本)	544
第15図 溝下層出土土器(実測, 製図:松本, 手拓:佐々木)	545
第16図 溝下層出土土器(実測, 製図:松本)	545
第17図 表面採集土器(実測:松本, 手拓:佐々木)	547
第18図 表土層出土貨幣(手拓:佐々木)	547
第19図 トレンチ(1), (2)内出土擂鉢(実測:松本, 手拓:佐々木)	547
第20図 灰黒色土層出土土器(実測, 製図:松本, 手拓:佐々木)	547
第21図 灰黒色土層, 黒色土層内出土須恵器(実測, 製図:松本)	548
第22図 黒色土層出土土器(実測, 製図:松本, 手拓:佐々木)	550

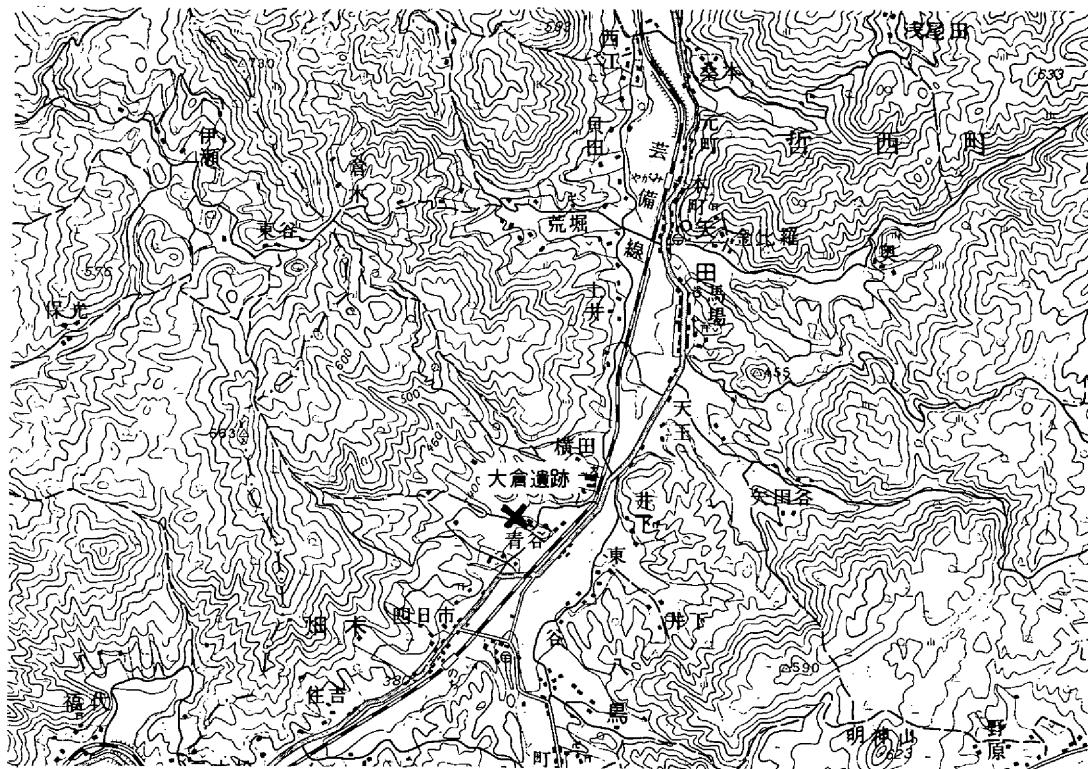
大倉遺跡(67)

第23図 黒色土層出土のふいごの羽口(実測、製図:松本) 551

図版目次

- 図版 1—1 大倉遺跡全景(北側より)(撮影:友成)
2 溝断面(1区と2区の境界断面)(撮影:松本)
- 図版 2—1 溝断面(撮影:友成)
2 1, 2, 3区全景(北西より)(撮影:友成)
- 図版 3—1 溝全景(東より)(撮影:友成)
2 溝完掘全景(北西より)(撮影:友成)
- 図版 4—1 土壙全景写真(撮影:友成)
2 石組溝全景写真(撮影:友成)
- 図版 5—1 1号住居址全景(撮影:友成)
2 1号住居址断面(撮影:友成)
- 図版 6—1 4区全景写真(南西より)(撮影:友成)
2 4区全景写真(北東より)(撮影:松本)
- 図版 7—1 溝内出土状態(土器)(撮影:友成)
2 ふいごの羽口出土状態(撮影:松本)
- 図版 8 出土遺物写真(撮影:松本)
- 図版 9 出土遺物写真(撮影:松本)
- 図版10 出土遺物写真(撮影:松本)

第1章 調査の経過



第1図 大倉遺跡周辺地形図 ($\frac{1}{50000}$)

第1節 調査の経緯

1. 遺跡の立地

大倉遺跡は岡山県阿哲郡哲西町大字畠木字青谷に所在する。(第1図、2図)(図版1-1) 遺跡は哲西町を南西から北東に流れる神代川の左岸、南東に面する日当りのよい低丘陵に位置する。

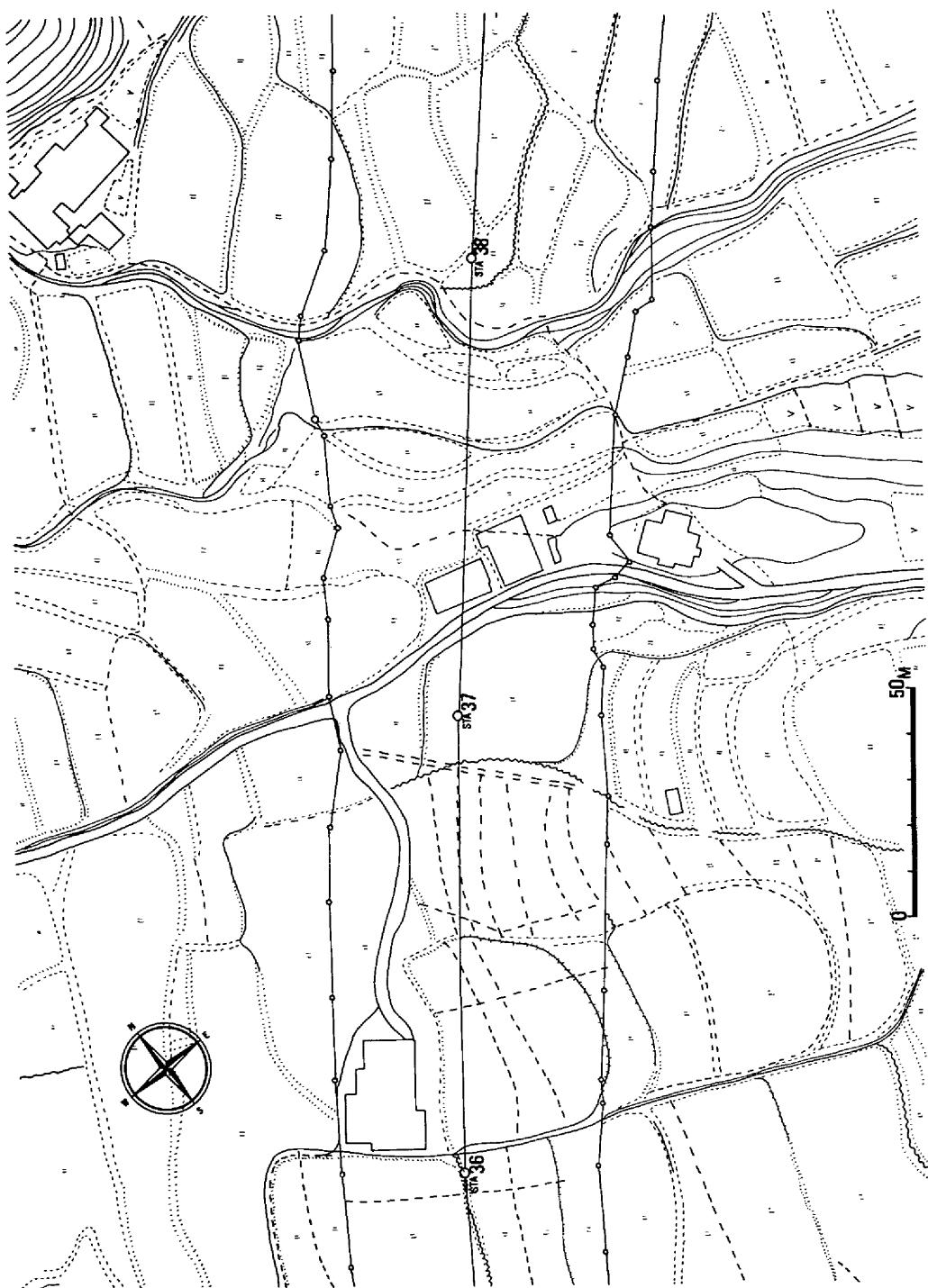
現在この地域一帯は比較的に平野面積が広く、丘陵上や谷間も水田化し農業を営んでいる。恐らく古代においても今日同様に可耕しやすい土地であったと思われる。

2. 調査の経過

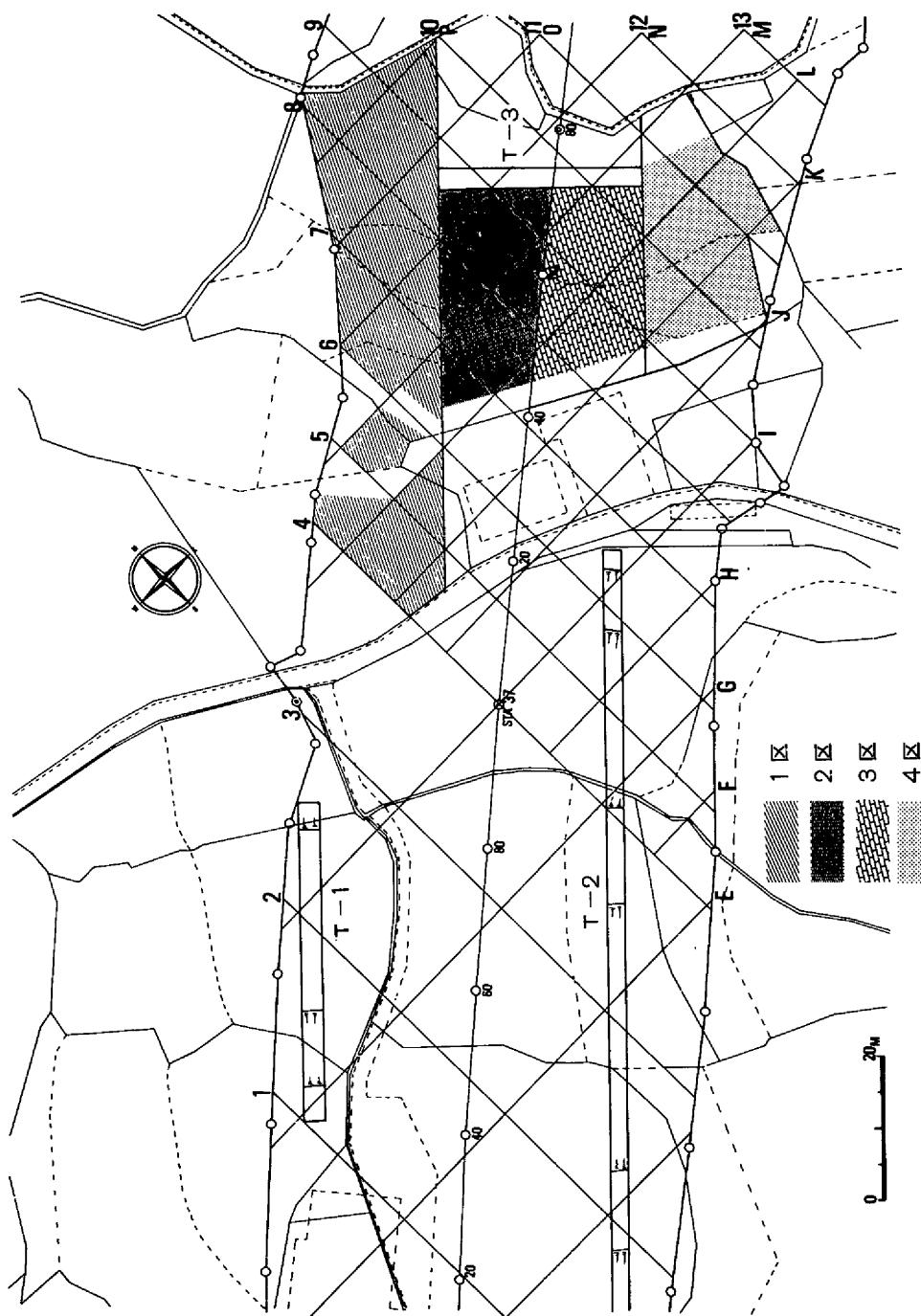
大倉遺跡は中国縦貫自道車道建設に伴う埋蔵文化財分布調査において、「低丘陵の平坦部に須恵器、土師器の散布」がみられたことから、遺跡範囲を延長200m、面積4,000㎡とした。調査員は2名とし

大倉遺跡(67)

第2図 大倉遺跡地形図 ($\frac{1}{3000}$)

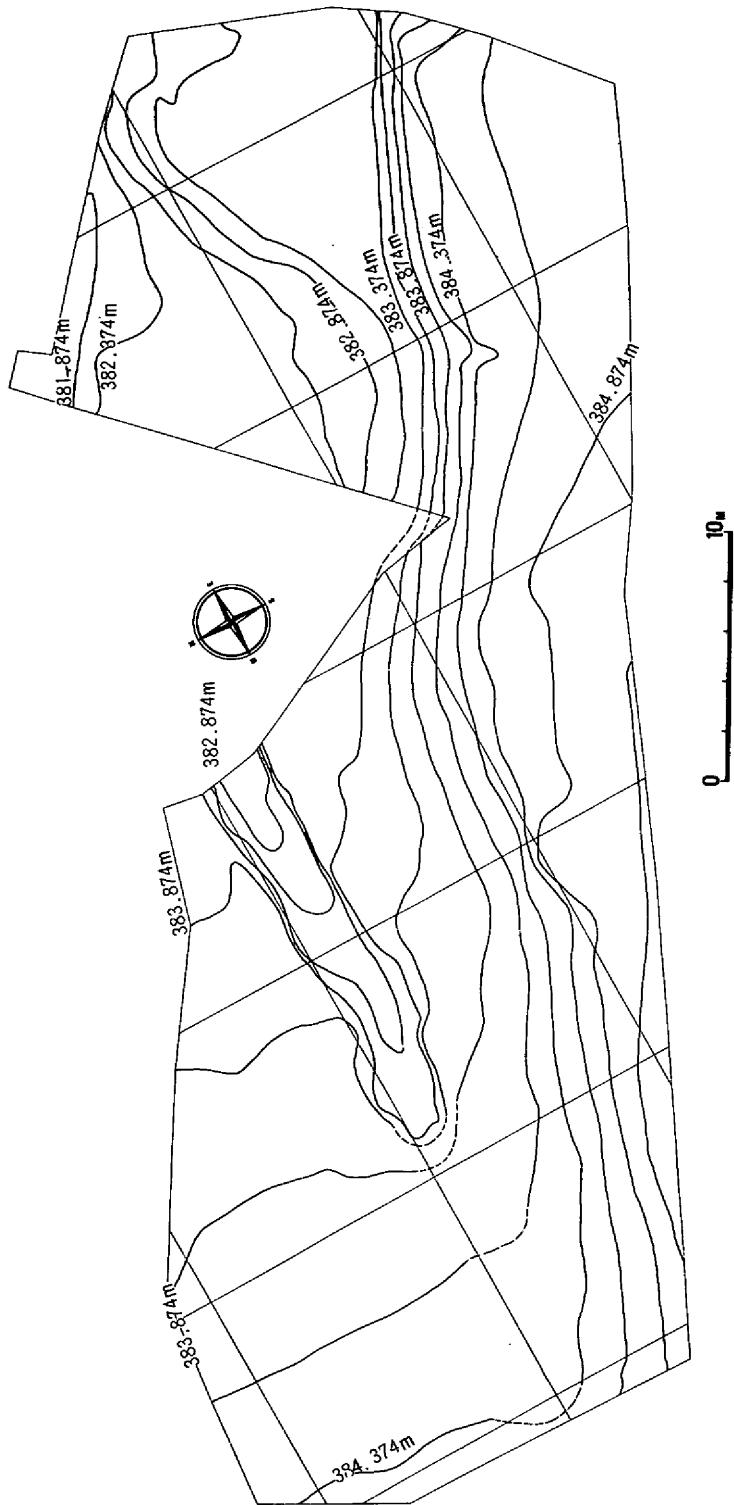


大倉遺跡(67)



第3図 大倉遺跡トレンチ及びグリッド設定図 (1/1000)

大倉遺跡(67)



第4図 大倉遺跡地形図 ($\frac{1}{300}$)

大倉遺跡(67)

発掘作業の開始を昭和51年4月7日を目標に機材の確保を行った。しかし、51年度の中国縦貫自動車道に伴う発掘調査は新見市、神郷町、哲西町に集中したことと、縦貫道建設工事がこの地域一帯においても着工されたため、過疎化の著しいこの地域では労働力の需要と供給のバランスが崩れ、作業員不足になった。したがって、新たに編成された発掘調査パーティーでは作業員確保が困難となった。そのため、中国縦貫自動車道の発掘調査では最初の試みとして、日本道路公団から建設工事を請負った工区担当の建設業者が岡山県教育委員会に作業員を斡旋するという方法を本遺跡で初めて実施した。

発掘調査の準備は完了したが、希望する作業員数の確保は建設業者の努力にもかかわらず難しく、また天候不順の日が多く、本格的な発掘調査は昭和51年4月16日からであった。しかし、作業員数は流動的であり、我々はこの問題で調査終了まで悩むことにもなった。

仮設作業終了後、遺構確認のため、STA36~37+20の間に2本のトレントを設定した。(第3図)トレント調査の結果、表土層の下には水田化のための造成が谷全域にみられ、30~100cmにおよぶ盛土がみられ、地表面までは相当に深いことが判明した。水田造成盛土が時期的に新しく、遺物がほとんどないこと、そして縦横に埋設された暗渠からの出水が激しく調査が困難であったため、この区域に重機を導入した。最終的には2ヶ所に深い谷を確認した。(第3図)

昭和51年4月22日から、町道より北側(正確には北東斜面)の表土排除作業を開始した。分布調査において土器片を多数採集した地点でもあり、全面発掘調査を前提として調査を実施した。しかし、丘陵平坦部はかって、地山をかなり削平して敷地を造成していたことが表面観察でもうかがわれた。そのため、この部分を除く範囲を調査対象地とし、北西から1区、2区、3区、4区とした。(第3図)発掘調査は梅雨期であり、なかなか進行しなかった。さらに、最後の段階にきて、第一次整備区間で発掘調査した遺物を岡山市西古松の収蔵庫に移管するため、調査員が1名現場を約1週間離れたため、残った調査員に大きな負担がかかった。このことは報告書作成にも大きな影響を与えた。こうして、発掘調査は溝、石組溝、土壙、住居址、柱穴等を確認して(第7図)、昭和51年7月5日に終了した。なお、本工事区を請負った清水建設株式会社には2~4区の排土除去のための仮設橋を設置していただき、発掘調査の便宜を計っていただいた。

発掘調査担当者

松本和男(文化財保護主事)

友成誠司(主事)

なお、報告書作成は友成誠司氏が退職したため、友成の意見を参考にして松本が執筆した。報告書作成にあたっては、佐々木裕子氏に拓本の作成をお願した。記して謝意を表します。

3. 発掘調査日誌抄

昭和51年4月8日~15日 現地の草刈り作業。遺跡の全景写真撮影。発掘機材の点検と測量会社によるグリッド設定作業の確認を行う。

4月16日~23日 作業員休憩小屋、道具小屋の仮設作業。第1トレント、第2トレントの発掘調

大倉遺跡(67)

査。

4月24日～5月1日 第3トレンチの設定。第1、第2トレンチは暗渠が非常に多く、出水が激しいため重機の導入による断面観察を行う。1区、2区の表土排除。

5月2日～9日 1区、2区の表土排除作業。

5月10日～17日 1区、2区の表土、包含層の発掘調査。1区の遺構検出と第3トレンチの発掘。
御供川遺跡の草刈りとグリッド設定。

5月18日～25日 1区、2区の遺構検出作業。3区、4区の表土排除作業。3区と4区の境界断面実測。

5月26日～6月2日 大溝の遺物検出及び実測作業。1区、2区、3区の全景写真撮影及び遺構検出作業。1号住居址の発掘。御供川遺跡の地形測量。

6月3日～10日 2区、3区の遺構検出及び柱穴、溝の発掘調査。2区の土壌掘り下げ。4区の遺構検出及び発掘。

6月11日～18日 2区の土壌、石組溝の写真撮影及び実測作業。4区の遺構実測と地形測量。御供川遺跡のトレンチ調査。

6月19日～26日 溝の発掘調査。御供川遺跡のトレンチ調査。

6月27日～7月5日 溝の全景写真撮影及び断面、平面実測作業。1号住居址写真撮影及び実測。
補足調査。仮設小屋の解体。

第2章 調査の概要

第1節 遺構

遺構は全域に確認できたが、特に1区～3区に多く検出された。主な遺構は溝、土壙、石組溝、住居址などである。以下順次記述することにする。

1. 1号住居址(第8図)(図版5—1, 2, 8—1～3)

この住居址は3区の耕作土直下で検出された。北東の緩斜面にあり、現存する壁高は床面より20cmあり、幅10～15cm、深さ5～10cmの周溝が1辺のみ残っていた。1辺が約6.5m、柱間間隔4mと考えられる方形住居址であろう。床面には5cm程の貼り床が認められた。また、中央部には焼土帯がみられることから、カマドの使用はなかったと推察される。

出土遺物は周溝の肩部より土製紡錘車、ピット内より平行叩目の施された椀形土器、床面上より甕形土器の破片が1点出土した。

土製紡錘車

直径(最大径)5cm、高さ2.6cm、孔径0.7cmを測る台形状の土製紡錘車である。色調は赤褐色を呈し、胎土は良好な粘土を使用し、焼成も固い。また、ヘラ状工具による面取り痕跡も認められる。

椀形土器

口径10cm、器高約7.5cmを推測させる小形椀形土器である。器外面は平行叩目が口縁から施され、上から下までむらなく凸凹がみられる。内面上部は指頭によるつまみ痕跡がみられ、下部から上部に向けてかきナデ整形をしている。色調は黄褐色を呈し、胎土は粒子の荒い粘土を使用し、砂の混入も認められる。焼成はわるい。

甕形土器

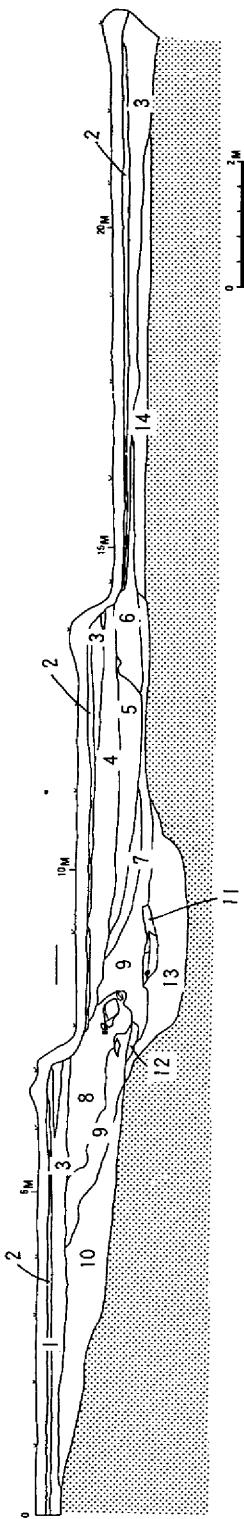
頸部から胴部にかかる部分の破片である。器外面は櫛状工具による整形痕がみられ、内面は胴部上位から下に横位のヘラケズリが認められた。色調は赤褐色を呈し、胎土、焼成ともふつうである。

2. 2号住居址(第7図)

1号住居址の西隣りに位置する。遺構は後世の削平のため、ほとんど検出できなかったが、柱穴や焼土帯を床面と考えられるところで確認できた。規模、時期は不明である。

3. 土壙(第10図)(図版4—1)

1区の北に長軸をほぼ東西にむけて検出された。土壙の掘り方上面は灰黒色土層と暗茶褐色土層(第5図の5, 6)において検出された。平面は楕円形を呈するが、南中央においてくびれがみられ



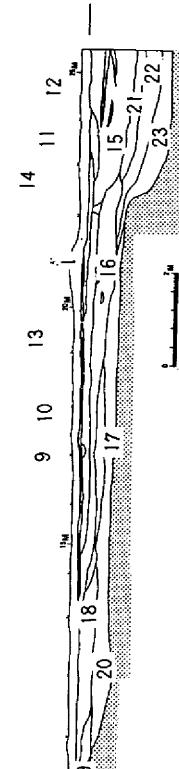
第5図 1区と2区の境界断面図 ($\frac{1}{120}$)

- 1. 耕作土層
- 5. 灰黒色土層
- 9. 黒色土層
- 13. 暗黒色粘質土層
- 2. 黄褐色マンガン層
- 6. 暗茶褐色土層
- 10. 黒色粘質土層
- 14. 暗茶褐色土層
- 3. 灰褐色マンガン層
- 7. 灰黒色土層
- 11. 黑灰色粘質土層
- 4. 灰褐色土層
- 8. 灰黒色砂質土層
- 12. 黄色砂質土層



第6図 3区と4区の境界断面図 ($\frac{1}{80}$)

- 10. 灰色粘質ブロック土層
- 14. 灰黒色粘質土層
- 17. 黒色造成土層
- 19. 暗灰色粘質土層
- 11. 淡灰色土層
- 15. 暗褐色造成土層
- 18. 黒色粘質土層
- 20. 暗黄色壤土層
- 12. 暗茶褐色造成土層
- 16. 淡暗灰色造成土層
- 13. 暗灰色造成土層



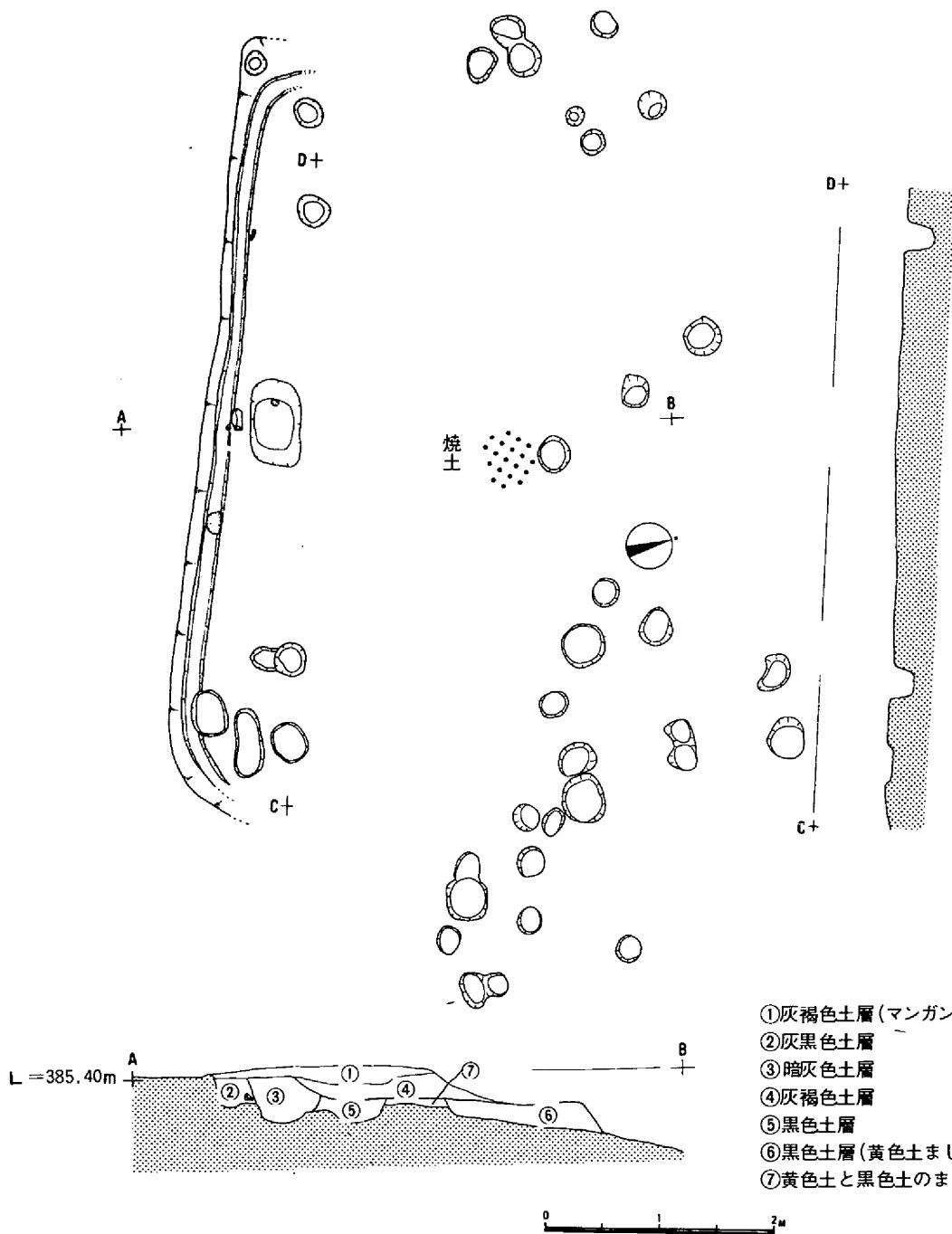
第5図 1区と2区の境界断面図 ($\frac{1}{120}$)

- 1. 耕作土層
- 5. 黒色土層
- 9. 黑灰色土層
- 13. 暗黒色粘質土層
- 2. 黄褐色マンガン層
- 6. 黑灰色粘質土層
- 10. 黒色粘質土層
- 14. 暗茶褐色土層
- 3. 灰色土層
- 7. 黄色ブロック土層
- 11. 黑灰色粘質土層
- 4. 灰褐色土層
- 8. 暗黄色粘質土層
- 12. 黄色マンガン層



第7図 大倉遺跡全体図（遺構）

大倉遺跡(67)



第8図 1号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$)

る。長径3.6m、短径1.9mである。底には礫がはいっていた。出土遺物は無く、時期決定はむずかしいが、掘り方が古墳時代後期の遺物包含層であることから、古墳時代後期と推察される。

4. 石組溝(第11図)(図版4-2)

土壇の南隣りに、ほぼ東西にのびる形で検出された。遺構は長さ約2.6m、幅は外側で50cm、内側で約20cmあった。東端は3枚の石によって閉塞されている。構築は角礫を横に並べ、閉塞石は縦に使用している。現存する西端よりもう少し石組が西にのびていた痕跡がみられたので、もう少し長いと思われる。石組溝としては漏水に対する配慮が欠けており、機能しないと思われるが、一応ここでは溝としてとらえておく。なお、この石組溝には灰黒色土が詰まっており(砂など底面ではない)、遺構も灰黒色土層上に構築されていたことから土壇と同時期のものと推察される。出土遺物はない。

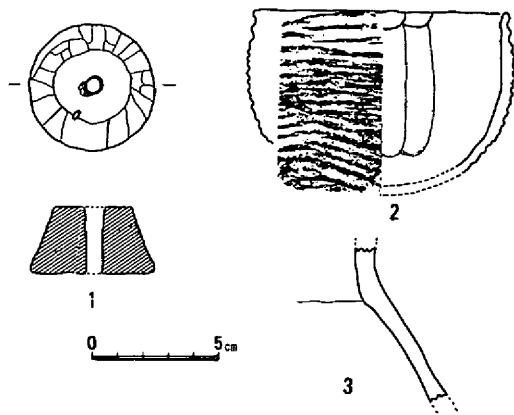
5. 溝(第12図)(図版2~4)

溝は西から東にはば直線に流路をとり、幅約3m、深さ約60~80cmを測る。溝掘り方は黄色の地山土を掘削したものであり、上層には黒色土層や灰黒色土層が堆積していた。(第5図)

溝内には大小さまざまな角礫が散乱しており、これら角礫の一部は護岸にも使用されていたものと推察される。この溝は丘陵斜面を斜めに走行しており、末端は谷川に接続するものと考えられる。なお、この溝の埋土上面には多量の土器が包含していた。以上順次述べる。

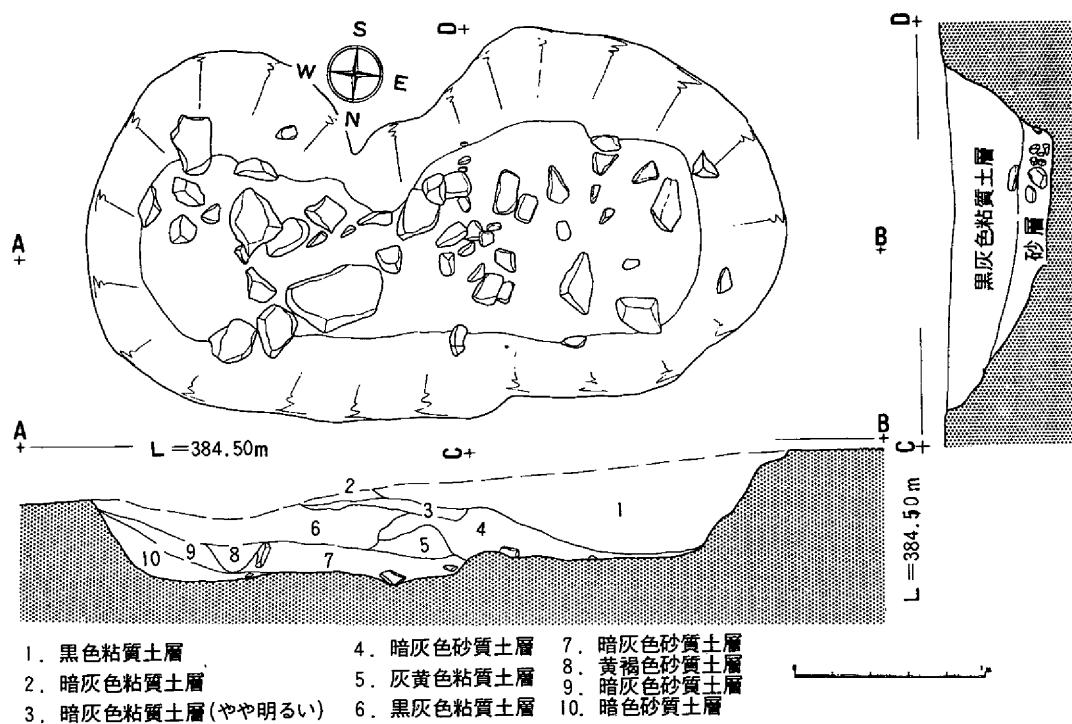
a. 溝上面出土須恵器(第13図2~10)(図版8-4~6)

2, 3は杯蓋である。2の器外面にはヨコナデがみられ、天井部外面にはヘラケズリがみとめられる。色調は暗灰色を呈し、胎土に石英の混入がみられ、焼成は普通である。3は天井部と体部を区画するにぶい稜線がみられる。天井部外面にはヘラケズリがみられ、口縁端部には刻み痕がある。内面には段を有する。色調は灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。4, 7~10は杯身である。4はタチアガリが内傾し、先端部は鋭い。受部は外上方にのび、端部はやや鋭い。底部の約1/2はヘラケズリと推測される。色調は暗灰色を呈し、胎土は石英などを含むが、精製粘土を使用している。焼成は普通である。7はタチアガリが内傾し、受部との間に浅い沈線がめぐる。受部はやや水平にのびるが、端部はやや鋭い。口縁端部、内側にも段を有する。底部の約1/3はヘラケズリと推測される。色調は灰青色を呈し、胎土には石英などを含み、焼成は普通である。8はタチアガリが内傾し、受部との間に沈線がめぐる。受部は水平にのび、端部は鋭い。底部の約1/2はヘラケズリがみられる。なお、口縁内側には段を有する。色調は灰青色を呈し、胎土には石英や大粒の石を混入している。焼成は普通であ

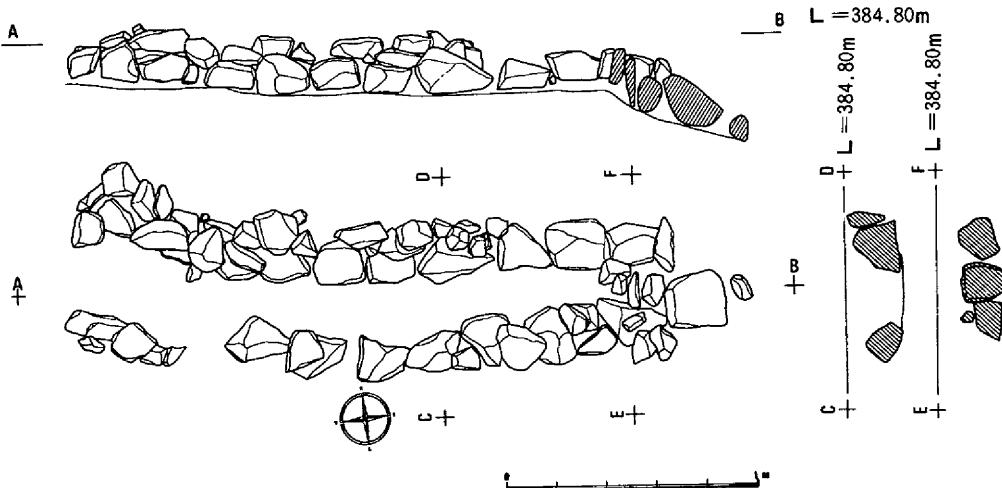


第9図 1号住居址出土遺物

大倉遺跡(67)



第10図 土壌1 ($\frac{1}{40}$)



第11図 石組溝 ($\frac{1}{30}$)

大倉遺跡(67)

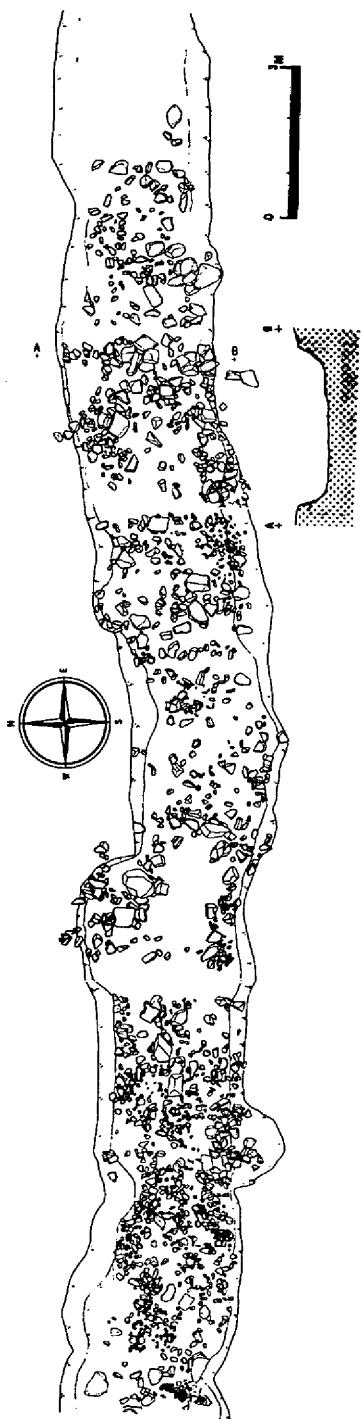


図
大
倉
遺
跡
図
版
第
12

る。9はタチアガリが内傾するが、先端部は鋭い。受部は水平にのびるが、端部は少し垂れ下がっていて、鋭い。底部の約 $\frac{1}{2}$ はヘラケズリと推測される。色調は灰青色を呈し、胎土、焼成ともあまりよくない。10はタチアガリが内傾し、受部は水平にのび、端部はやや丸い。口縁内側には段を有する。色調は灰青色を呈し、胎土は精製粘土を使用している。焼成は普通である。頸は胴部のみ出土している(5)。ほぼ球形を呈し、中心より少し上に穿孔がみられる。頸部はやや細くなるようである。孔の中央から底部にかけてはヘラケズリがみられる。色調は灰黒色を呈し、胎土、焼成とも良好である。6は短頸壺である。口縁は内傾するが、頸部から胴部は直線的である。口縁外面には2本の沈線が施され、胴部上位にも1本の沈線がみられる。器外面にはヨコナデがみられるが、胴部の沈線から下位にはヘラケズリがみられる。色調は暗灰色を呈し、胎土、焼成とも普通である。これらの遺物は古墳時代後期に属し、陶邑の時期区分(註1)ではⅡ期に相当する。

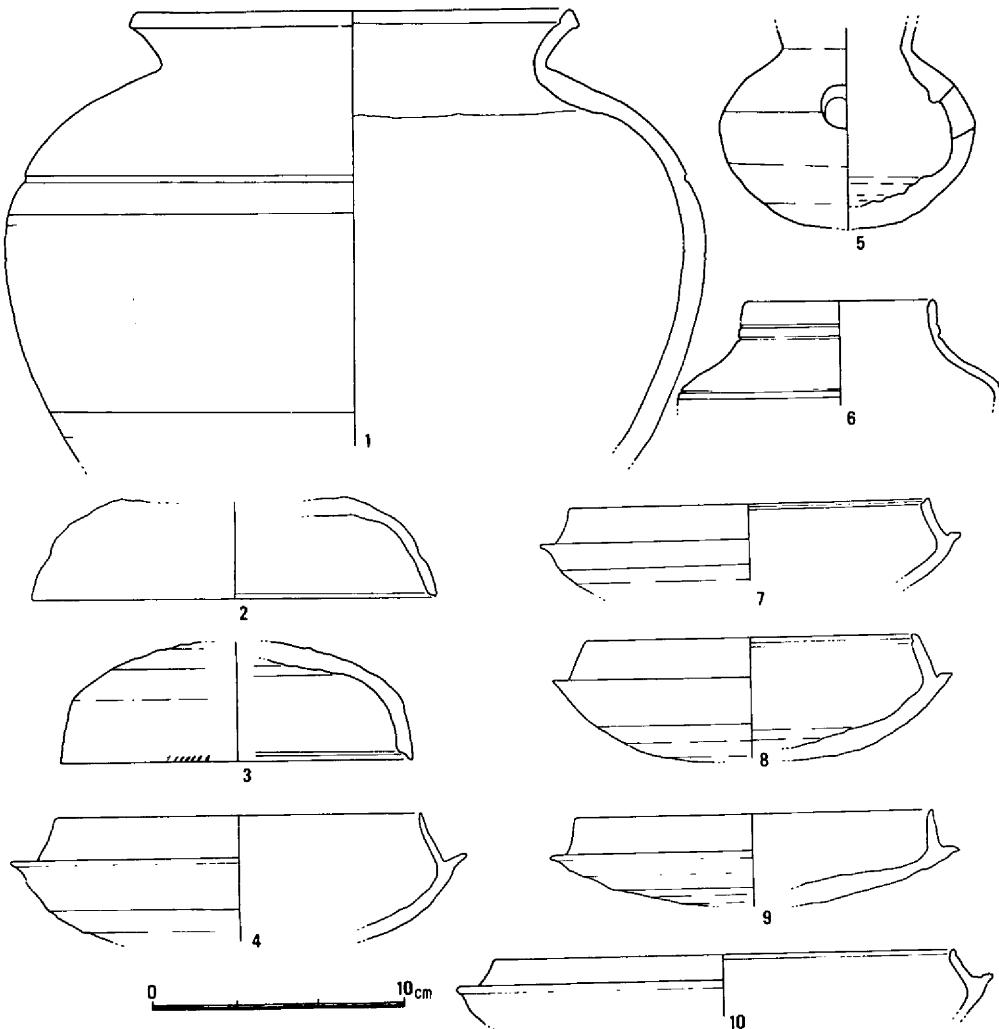
b. 溝上面出土土器

(第14図2~14)(図版8~9~11, 9~1)

溝上面より壺形土器、甕形土器、高杯形土器、椀形土器など土師器が多量に出土した。ここに図示したものは、残存状態のよいものである。

2, 13, 14は甕形土器である。2は口縁が大きく「く」の字を呈し、端部が少し内傾する。器外面は刷毛状工具でヨコナデされ、胴部内面にはヘラケズリがみられる。色調は黄褐色を呈するが、器内外面に丹塗りが所々みられる。胎土は精製粘土を使用し、焼成は普通である。13は口縁がゆるやかに外反し、端部は肥厚している。胴部外面には縦に刷毛状工具による整形がみられ、内面は縦と横のヘラケズリがみられる。色調は赤褐色を呈し、胎土は粗製粘土を使用し、1cm弱の石英粒などを含む。焼成は悪い。14は口径32cm、残存器高18cmを測る大形の甕である。口縁はゆるやかに外反し、胴部もゆるやかなカーブを描くものである。器外面には櫛状工具で口縁か

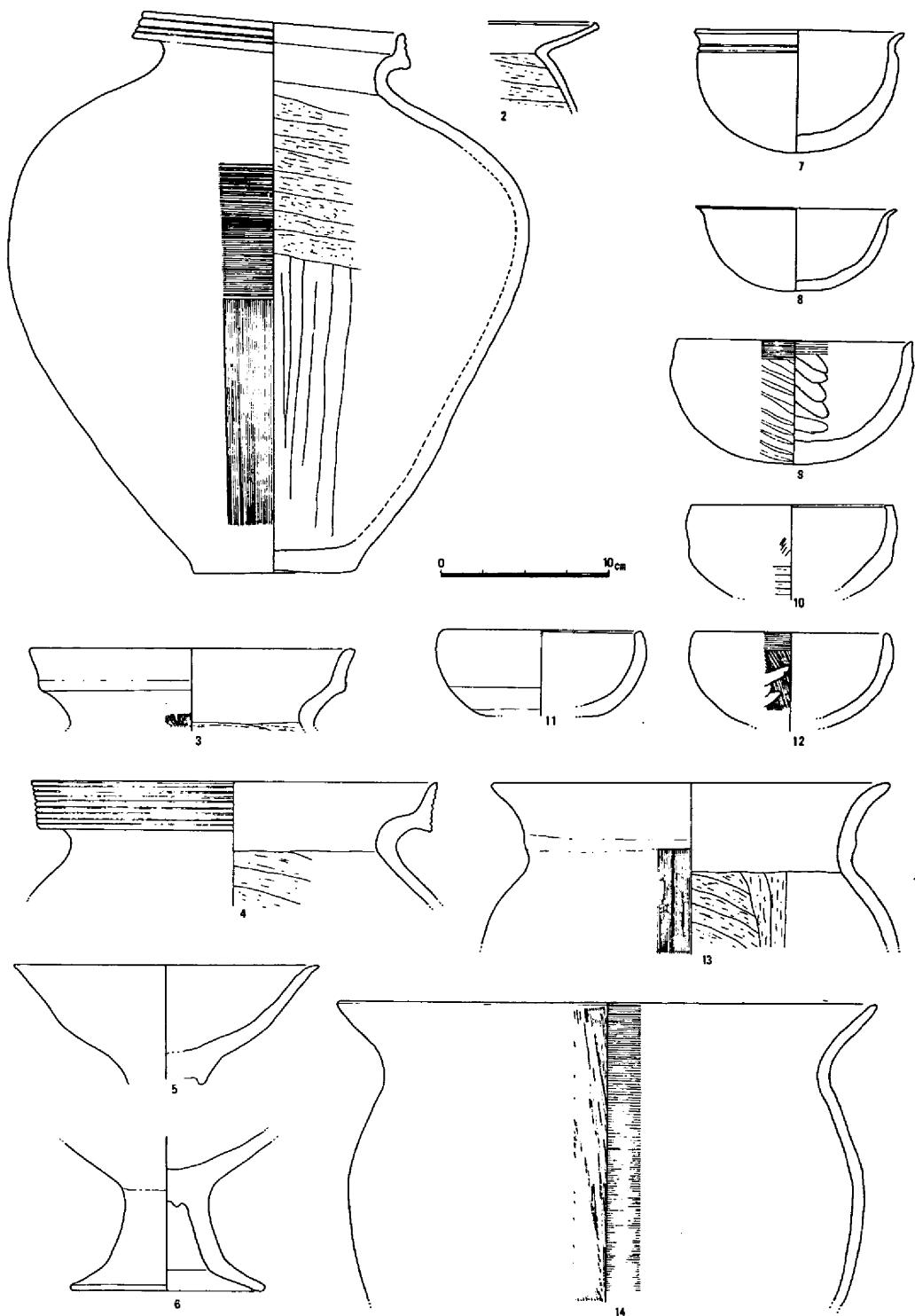
大倉遺跡(67)



第13図 黒色土層(1)、溝上面(2~10)出土須恵器

ら縦位の整形痕がみられ、内面には横位の整形痕がみられる。色調は黄褐色を呈し、胎土は粗い粘土に砂の混入がみられる。焼成は悪い。3, 4は壺形土器である。3は口縁部が外反し、端部がさらに上に拡張する。所謂二重口縁を呈するものである。頸部には刷毛状工具による整形がみられる。器内外面とも丹塗りが施され、胎土には 0.3mm の石英粒が混入している。焼成は普通である。4は口縁が外反するが、端部は上に鋭く拡張している。外面には9本の沈線が施され、胴部内面にはヘラケズリがみられる。色調は赤褐色を呈し、胎土には砂が多く混入され、焼成も悪い。5, 6は高杯形土器である。5は杯部のみである。口縁はゆるやかに外反し、端部は鋭い。器内外面にはヨコナデがみられる。色調は赤褐色を呈し、胎土は精製粘土を使用している。焼成は普通である。6は杯部上半が欠け

大倉遺跡(67)



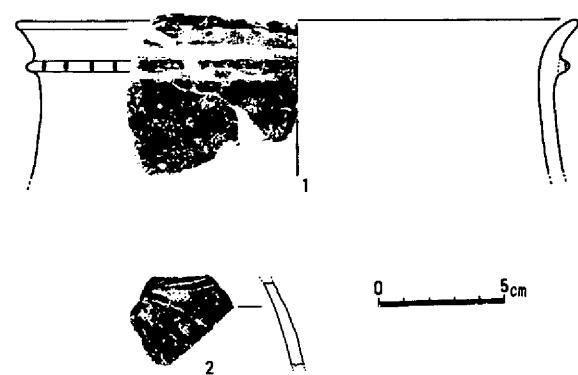
第14図 溝内(1)出土・溝上面(2~14)出土土器

ている。脚端部はラッパ状に開く。器外面はヨコナデ、脚部内面はヘラケズリ、裾内面にはヨコナデがみられる。色調は赤褐色を呈し、胎土、焼成とも比較的に良い。7～12は楕形土器である。口径は11.6cm～12.4cm、器高は5～7.5cmの間を測るものばかりである。器形は口縁が外反するもの(7～9)と、やや内傾するもの(10～12)に分類される。器外面は刷毛状工具で整形されるが、大部分の

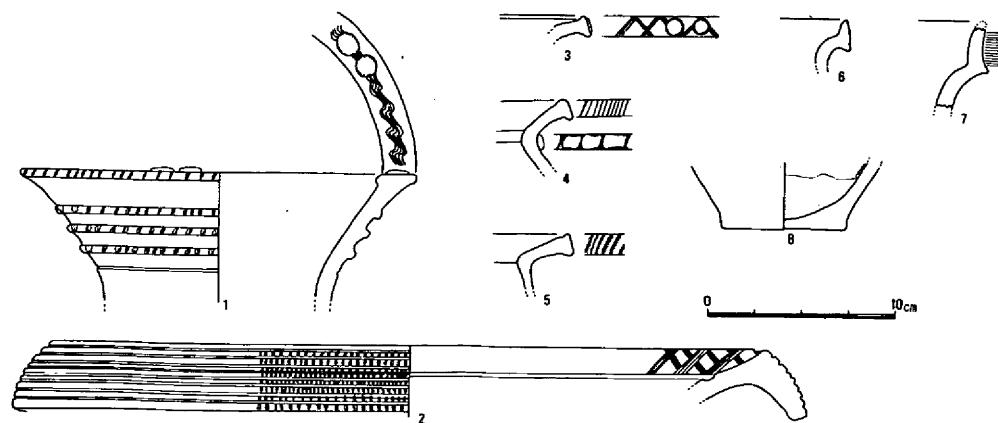
胴下半部はヘラケズリがみられる。9は刷毛状工具で整形した後ヘラケズリしている。色調は赤褐色を呈し、胎土は7、9が粗い粘土を使用しているが、他は比較的よい粘土である。焼成はいずれも普通である。3、4は古式土師器に属する。5～14は6世紀中葉～後葉に属するものである。特に4は山陰地方と関連をもつものである。

c. 溝内出土土器(第14図1)(図版8～7)

この土器は口縁部が溝上面近くに、底部が溝の中位に位置し、溝の肩部にもたれかかる状態で出土した。溝の時期決定に1つの目安を与えるものである。口径は15.4cm、器高34cmを測る楕形土器である。口縁部は外反し、端部が上に拡張する。胴部最大径は胴部上半にあり、球形を呈する。口縁外面には浅い3本の沈線が施され、胴部上位には横、下部は縦位のハケナデがみられる。内面上部は横位下部には縦位のヘラケズリがみられる。なお、器外面全体と口縁内面には丹塗りが施されている。胎



第15図 溝下層出土土器



第16図 溝下層出土土器

土は精製粘土を使用し、焼成も良い。弥生時代後葉に属する。

d. 溝下層出土土器（第15図、16図）（図版9—2～11）

溝全体には礫が入っていたが（第12図、図版2—2、3—1）、その礫を除去し、溝の清掃を行った時に土器が底より出土した。この土器を溝下層出土土器と呼称している。

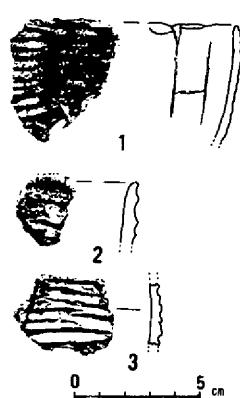
縄文式土器（15図1）が1点出土している。口径22cm、残存器高6.3cmを測る深鉢形土器である。口縁はゆるやかに外反し、端部は丸い。外面には1条の貼りつけ突帯がめぐり、刻目が施されている。色調は黄褐色を呈し、胎土には石英粒を含む、あまり良くない粘土を使用している。焼成は悪い。黒土BⅡ式（註2）に属するものである。

弥生式土器は壺形土器（15図2、16図1～3）と甕形土器（16図4～6、8）が出土している。15図2はヘラにて木葉文を施文している。文様は上方向に3本、下方向に3本の沈線がみえる。色調は赤褐色を呈し、胎土、焼成とも普通である。弥生時代前期中葉～後葉に属する。16図1は口径21cm、残存器高7cmを測る。口縁はゆるやかに外反し、端部は水平に左右に拡張する。外面には3本の突帯と1条の沈線がみられる。口縁端部と突帯にはヘラによる刻目が施されている。なお、平坦にした端部上面には4本の櫛描波状文がつけられ、後に円形貼文がつけられている。内面はヨコナデである。色調は赤褐色を呈し、胎土には砂、石英粒が目立つ。焼成は普通である。弥生時代中期中葉に属する。2は推定口径38cm、残存器高2.6cmを測る。口縁端部は下方に拡張して垂れ下るものである。外面には8本の凹線が施され、その間にはヘラによる刻目がつけられている。内面には格子目になる櫛描が施されている。色調は黄褐色を呈し、胎土には砂を混入している。焼成は悪い。弥生時代中期後葉に属する。3は口縁部が外反し、外面に斜行沈線を施文した後、円形貼文をつけている。弥生時代中期中葉に属する。4～5は口縁が外反し、外面に斜行沈線を描き、頸部に貼りつけ凸帯をつけたのち、指頭圧痕をつけるものである。弥生時代中期中葉に属する。6は口縁が上方に拡張する後期中葉のものである。8は底部である。内面には炭化した植物が附着している。中期中葉のものである。7は二重口縁を呈する古式土師器である。3～8については、3を除いて焼成、胎土とも普通である。

第2節 遺構に伴わない遺物

1. 表面採集土器（第17図）（図版9—12～14）

発掘調査前に3区の耕作土中より採集した。1は口径、器高とも不明である。器外面には平行叩目が口縁から施され、上下とも同じ凸凹がみられる。叩目を施した後、ナデることによって一部叩目を消している。内面は下部から上部に向けてカキアゲをしている。色調は暗褐色を呈し、強火を受けた痕跡がある。胎土はあまり良くない粘土を使用し、焼成もよくない。2は口径、器高とも不明である。器外面には平行叩目がみられ、指で消している痕跡がある。色調は外面は灰黄色、内面は赤褐色を呈し、胎土・焼成ともわるい。3は碗形土器の胴部である。器外面には平行叩目がみられ、内面はナデ整形がみられる。色調は赤褐色を呈し、胎土、焼成ともわるい。いづれも、古墳時代後期に属す



第17図 表面採集土器

るものである。

2. 古 錢 (第18図)

1区耕作土層より「洪武通宝」「明錢」(1368年～1398年)が1枚出土している。

3. トレンチ(1), (2)内出土 擂鉢 (第19図) (図版9— 16, 17)

1はトレンチ(1)の水田造成土層より出土した。推定口径29cmを測る。器形は口縁が「く」の字を呈するが、上下とも拡張している。内面には5～7本の条線が櫛状工具によって描かれている。色調は赤褐色を呈する。備前焼である。室町時代所産(註3)のものである。

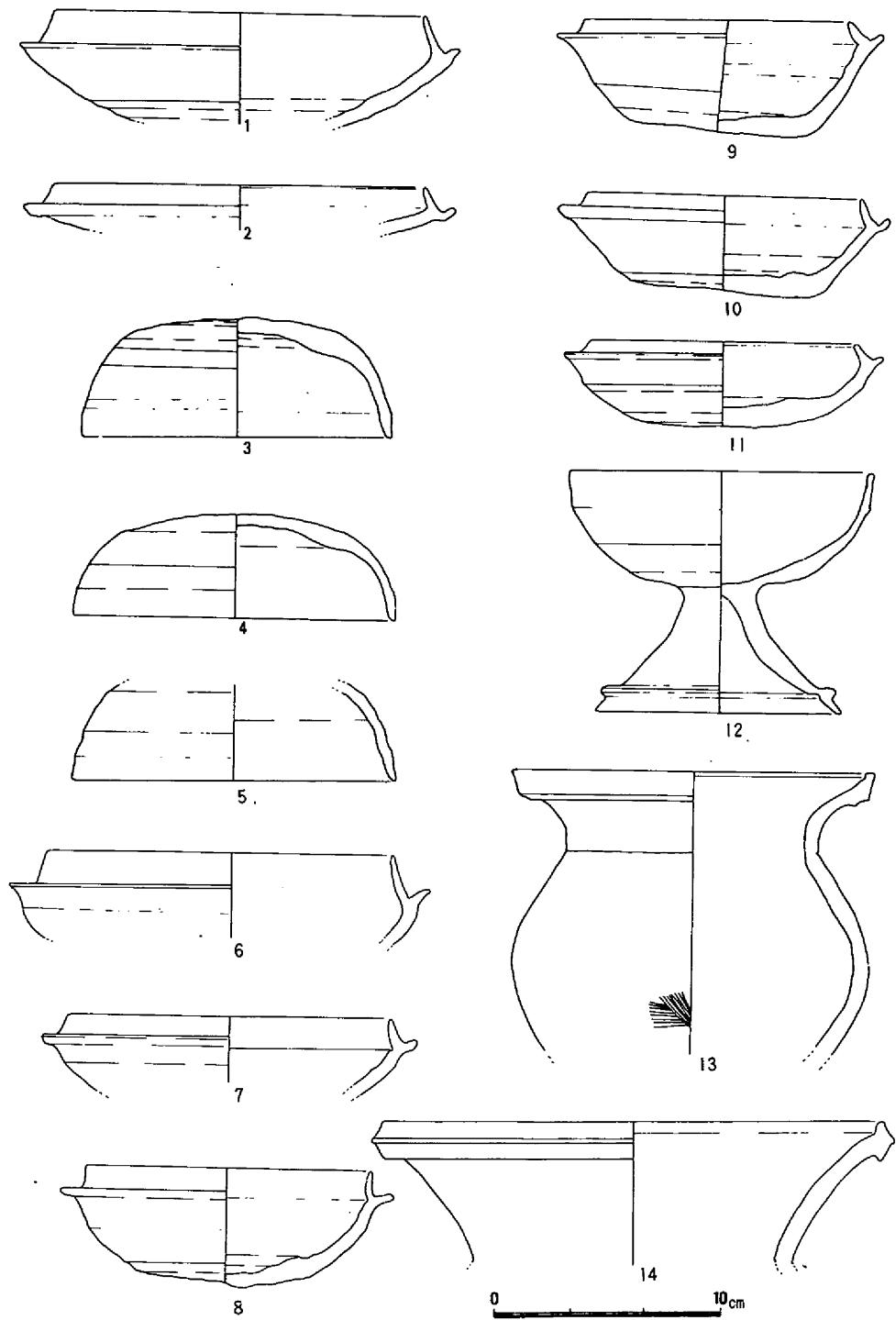
2はトレンチ(2)の水田造成土層より出土した。推定口径29cmを測る。口縁は上に著しく厚く、拡張し、外面には太い沈線を2本めぐらしている。内面には条線が胴部全面に施されている。色調は赤褐色を呈する。備前焼である。近世のものである。

4. 灰黒色土層出土土器

灰黒色土層内より、土師器、須恵器が出土した。ここに図示したものは、比較的に残存状態がよいものである。

土師器 (第20図)

大倉遺跡(67)



第21図 灰黒色土層(1, 2) 黒色土層(3~14) 出土須恵器

大倉遺跡(67)

1, 2は高杯形土器である。1は杯部で、口径18cmを測る。端部はゆるやかに外反する。杯部中央に稜をもつ。器内外面ともヨコナデである。色調は赤褐色を呈し、胎土・焼成ともわるい。2は脚部である。器外面はヨコナデ、内面はヘラケズリとヨコナデがみられる。色調は黄褐色を呈し、胎土・焼成とも普通である。3～5は手摃土器である。口径は4～5cm、器高は4.5～5cmを測る。口縁端部には指頭圧痕がみられるが、外面はナデ整形である。内面はいづれも下から上にカキアゲがみられる。色調は灰褐色あるいは灰黒色を呈し、胎土、焼成とも普通である。6～8は椀形土器である。いづれも胴部片で、平行叩目をもつ。凸凹はあまり顯著でない。6には一部ナデがみられる。色調は灰黒色を呈し、胎土、焼成ともわるい。1～8はいづれも、古墳時代後期に属するものである。

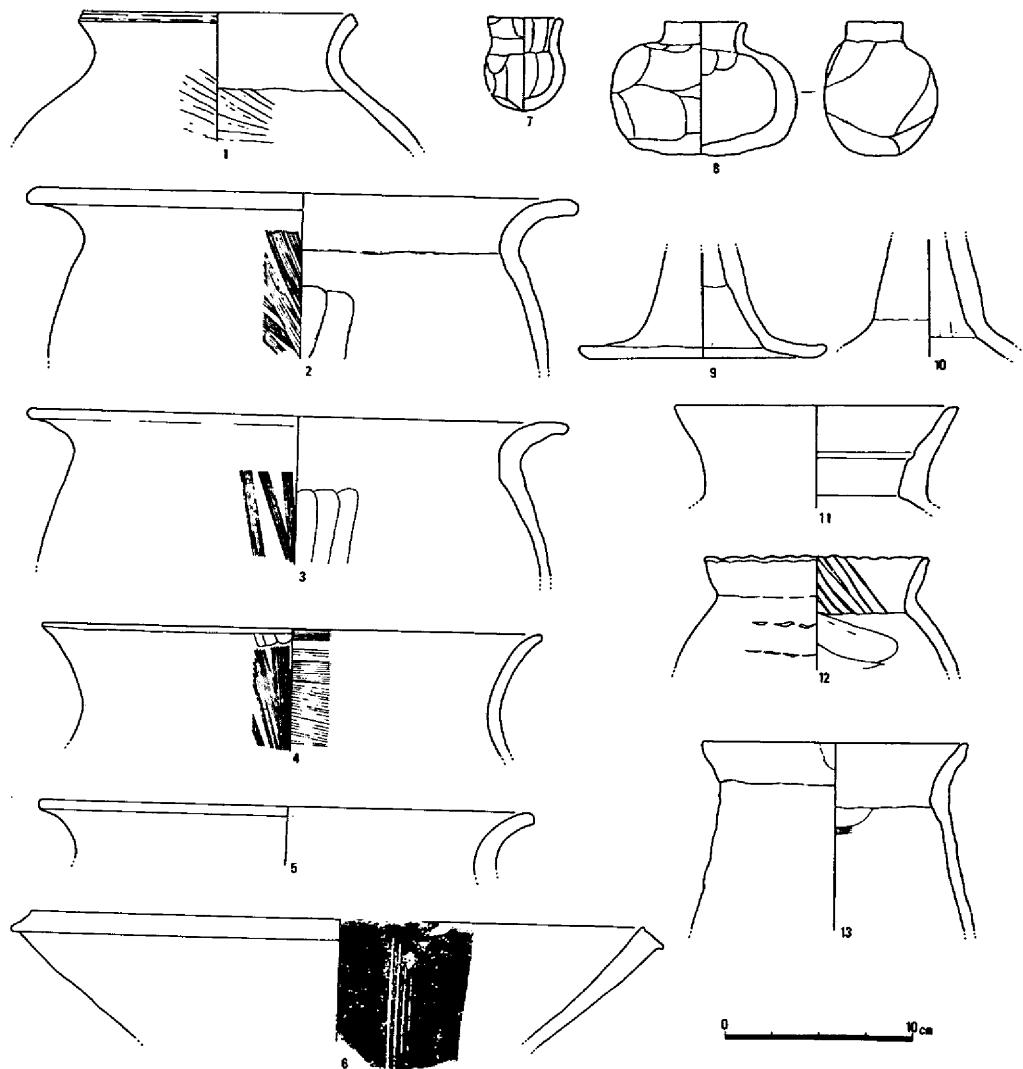
須恵器(第21図1, 2)

1, 2は杯身である。1はタチアガリは内傾する。受部とタチアガリの間には浅い沈線がみられる。受部は上外方にのび、端部はやや鋭い。外面にはヘラケズリが底部から $\frac{1}{3}$ までなされている。色調は灰色を呈し、胎土・焼成ともよくない。2はタチアガリは内傾し、受部は上外方へのび、端部は丸い。色調は暗灰色を呈し、胎土は石英などを混入した粗製粘土を使用している。焼成は普通である。古墳時代後期に属し、陶邑の時期区分(註4)ではⅡ期に相当する。

5. 黒色土層出土の須恵器(第13図1, 21図3～14)(図版9—18～21, 10—1～4)

1は壺形土器である。口縁は外反し、端部が三角形の断面を呈する。頸部から胴部にかけては球形を呈し、最大径は27.5cmを測る。胴部外面には1条の沈線がみられ、口縁端部内面にも1条の沈線がみられる。器外面にはヨコナデがみられるが、底部近くにはヘラケズリがみえる。内面はヨコナデである。色調は外面に自然釉がかかっているため黄緑色、内面は暗灰色を呈する。胎土には砂など混入物が多い。焼成は堅緻。杯蓋は第21図3～5である。3は天井部と口縁部を区画するにぶい稜線をもち、天井部はほとんど平坦になっている。口縁部はやや外反する。天井部外面にはヘラケズリがみられる。色調は灰黒色を呈し、胎土には石英などを含んでいる。焼成は普通である。4は天井部と口縁部の境からヘラケズリがみられる。色調は灰色を呈し、胎土、焼成とも普通である。5は天井部と口縁部には浅い沈線によって区画されている。内外面ともヨコナデがみられる。色調は黒色を呈し、胎土は粗製粘土を使用している。焼成は普通である。6～11は杯身である。6はタチアガリが内傾し、受部との間には浅い沈線がめぐっている。受部は外上方にのび、端部はやや丸みをもつ。器内外面にはヨコナデがみられる。色調は暗灰色を呈し、胎土、焼成とも普通である。7はタチアガリが短く内傾し、受部は少し外上方にあり、端部はやや角ばっている。器内外面にはヨコナデがみられる。色調は灰白色を呈し、胎土、焼成ともよくない。8はタチアガリがやや内傾するが、受部は水平に近い。少し外上方である。端部はやや角ばっている。底部 $\frac{1}{4}$ はヘラケズリがみられるが、切り離し後の整形がよくない。色調は暗灰色を呈し、胎土には石英粒などを混入している。焼成は普通である。9はタチアガリが短く内傾し、受部との間に浅い沈線がみられる。受部は外上方にのび、端部はやや丸みをもつ。底部の約 $\frac{1}{6}$ はヘラケズリがみられるが、切り離し後の整形がよくない。10はタチアガリが内傾し、受部は外上方にのび、端部は丸い。ヘラケズリは底部の $\frac{1}{6}$ 程にみられるが、切り離し後の整形が

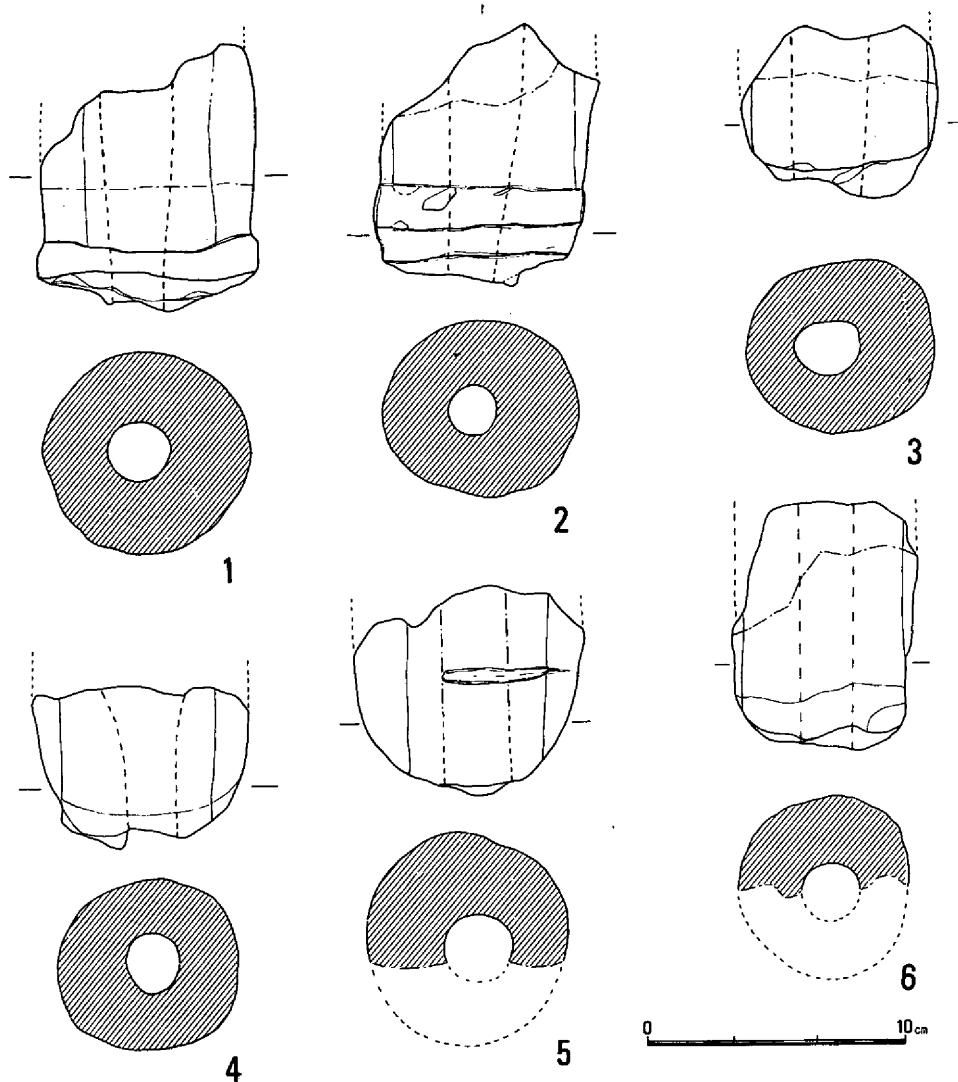
大倉遺跡(67)



第22図 黒色土層出土土器

よくない。色調は灰色を呈し、胎土はあまりよくない。焼成は普通である。11はタチアガリが短く、内傾している。受部はやや外方にのびており、端部は丸い。ヘラケズリは底部の $\frac{1}{2}$ が行われている。色調は灰青色を呈し、胎土、焼成とも普通である。12は高杯形土器である。口径は13.2cm、器高10.4cmを測る。杯部はゆるやかなカーブで外反し、口縁端部は平坦に近い。脚部はラッパ状に開き、稜が一段つく。杯部 $\frac{1}{3}$ にはヘラケズリがみられる。色調は灰青色を呈し、胎土、焼成とも普通である。13、14は壺形土器である。13は口縁が外反し、端部がほぼ直立する。頸部から胴部にかけてはゆるやかなカーブを描き底部に至るもので、胴部最大径は口径と同じである。器外面はヨコナデがみえ、胴部下半は櫛による整形が行われている。色調は灰黒色を呈し、胎土には比較的大きな石英粒を含

大倉遺跡(67)



第23図 黒色土層出土のふいごの羽口

む。焼成は普通である。14は口縁がゆるやかに外反し、端部は直立する。器外面は刷毛状工具によるヨコナデがみられる。色調は灰白色を呈し、胎土には石英粒を含んでいる。焼成はやや軟。いづれも古墳時代後期に属し、陶邑の時期区分ではⅡ期に（註5）相当する。

6. 黒色土層出土土器（第22図）（図版9—15, 10—5, 6）

甕形土器（1～5, 12, 13）は口径が12～14cmのものと28cm前後の2種類がある。口縁部はゆるやかに外反するものと、「く」の字状を呈するものがみられる。端部は丸くおさめている。器外面は1のように斜位のヘラ整形をするものと櫛、刷毛状工具によって整形するものの2種類がある。内面は

大倉遺跡(67)

ヘラケズリをするもの(1, 12), 下部から上部にむけてカキアゲするもの(2, 3), 刷毛状工具によるヨコナデ(4, 5, 13)の3種類がみられる。色調は赤褐色ないし茶褐色を呈し, 胎土にはかなり大きな石英粒や砂を混入しており, 粗い。焼成も悪い。壺形土器(11)は口径15cm, 残存器高5mを測る。口縁は外反し, 端部はやや丸みをもつ。内面には1条の浅い凹線がみられる。器内外面は刷毛状工具によるヨコナデがみられるが, 脊部にはヘラケズリがみられる。色調は茶褐色を呈し, 胎土, 焼成は普通である。手摃土器(8)は口径4.3cm, 器高7cm, 最大径9.8cmを測り, 俵形を呈する。色調は赤褐色, 胎土, 焼成とも悪い。擂鉢(6)は口径32cm, 残存器高6.6cmを測る。口縁下端部には折りかえしがみられる。内面には4本の条線が下部から上部にむけて施されている。色調は黒色を呈し, 焼成は焼が甘い。瓦質である。鎌倉時代後半に属するものであろう(註6)。1~5, 7~13は古墳時代後期に属するもの(6世紀代)であろう。なお, 手摃土器は1区に集中して出土した。特に俵形を呈する手摃土器の出土は注目すべきであろう。

7. ふいごの羽口(第23図)(図版10—7~12)

ふいごの羽口は1区において検出された溝の肩部, 黒色土層中(第5図9)より散乱した状態で出土した。量的には細片も含めて多量に出土したが, 比較的に残存状態のよいものを図示した。直径は7~8cm, 孔径は2~2.8cmの間にあり, 残存長は5~10cmの間を計測するものばかりである。1は先端部から約2cmまで炉に挿入された痕跡がみられ, 約5cmのところまで高温による色調変化がみられた。2は先端部から約3.5cmまで炉に挿入された痕跡があり, 約7.5cmのところまで高温による色調変化がみられた。3は先端部から約4.5cmのところまで炉に挿入された痕跡がみられる。6は先端部から約8cmのところまで炉に深く挿入された痕跡がみとめられる。これらの羽口にはいづれも, 先端部分に鉛滓が附着し, 黒色ないし暗緑色を呈している。羽口以外の鍛冶道具等の出土も無く, 炉跡も検出できなかった。古墳時代後期の包含層から出土したことからみて, ほぼ同時期のものと考えられる。この地方は近世において盛んに製鉄が行われていた。(註7)古代においても, この地方は製鉄が盛んに行われていたことが考えられる。

第3章 まとめ

大倉遺跡では住居址、土壙、石組溝、溝、柱穴等の遺構が検出された。以下、本遺跡の概要をまとめてみる。

1. 年代について

住居址は2棟検出したが、破壊が著しく、不明な点が多いが、年代については次のように考えられる。1号住居址は遺物が3点（土製紡錘車、甕、楕形土器片）出土した。形態からみて古墳時代後期、6世紀前葉～中葉のものであろう。2号住居址は遺物が無いが、恐らく1号住居址と同時期のものと考えられる。土壙、石組溝は古墳時代後期の遺物を包含する土層において検出、あるいは構築されていたことから、古墳時代後期、6世紀後葉頃のものと考えられる。溝は幅約3m、深さ60～80cmを測り、溝と称するより、人工の河道と称する方が適している。溝の埋土上面より土器が多量に出土し、底面からも少量の土器が出土した。溝の掘削時期を決めるものとして、溝下層出土土器が有力な手掛けとなるが、下層からは前述した如く、縄文時代から古式土師器まで含まれ、かなりの年代幅をもっている。むしろ、下層出土土器は流れ込みの可能性が強いことを指摘したい。黄色の地山土をいつの時期に掘削したかを決めるものとして、第14図1の土器出土状態がこの溝の時期を知るうえで最も参考になる。（図版7-1）この甕形土器の出土状態は前述したので省略する。溝が使用されている時期に落ち込んだものであり、この土器より新しい時期に掘削したものではない。したがって、この溝は弥生時代後期にはつくられた可能性があり、その使用期間は弥生時代後期から古墳時代前期頃まで利用されたと考えられる。4区には柱穴と礫の散布がみられた。柱穴は不規則で、まとまらず、時期についても不明である。礫は谷に面する丘陵端部に流れ込むような状態で出土した。おそらく近世における水田造成の際に端部に置いたものであろう。位置は下部水田造成土層である。

2. 遺物について

縄文式土器、弥生時代前期の土器片が各1点出土したが、備中山間部におけるこの時期の遺物も少しづつ増加してきている（註8）。その実態は散発的に出土しているのが実情であり、1つの地域内において継続して生活が営まれた痕跡はない。おそらく、この周辺に母胎となる集団が存在していたと思われる。いづれにせよ、山間部における縄文時代晚期（註9）、弥生時代前期という時期は、当時の人々がどのようにして水稻農耕文化を受容していくかを知るうえにおいて、土器の散発的な出土状況は注目すべきであろう。

溝上面、灰黒色土層、黒色土層中より須恵器、土師器などが出土し、その概要是前述したが、特に須恵器、平行叩目をもつ土器について述べてみたい。

須恵器

杯(蓋), 杯(身), 壺, 瓢などが出土したが, 最も多く, かつ形態に変化がみられるものは杯(身)である。したがって, ここでは杯(身)を中心に述べてみたい。

杯(身)は大きくⅡ類に分類できる。そのうち, Ⅱ類はさらにa, bに細分できる。

I類 (第13図7, 4, 8, 第21図1, 6)

口径は14~15cmを測る。タチアガリは高く, 内傾する。端部はやや鋭い。底部にヘラケズリがみられる。

II類a (第13図10, 9, 21図11, 2)

口径は11.5~18cmの間, 器高は低く4cm前後を測る。全体として小型化の傾向がみられる。タチアガリは低く, 内傾している。端部は丸みをもつものと鋭いものがみられる。底部にはヘラケズリが $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{1}{3}$ 程みられる。

II類b (第21図7~10)

口径は11.5~14cm, 器高は4~5cmを測る。全体として小型化の傾向がみられる。タチアガリは短く, 内傾する。端部はやや角ばるものと丸みをもつものがある。底部にはヘラケズリが $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{1}{5}$ 程みられるが, 底面を切り離したあとの整形が雑であり, 一見して粗雑な須恵器とわかる。

このようにⅡ類3形態に分類されたが, これら須恵器は陶邑の時期区分(註10)によれば, Ⅱ期に相当するものと考えられる。そして, 型式的には本遺跡で分類したI類はTK10に, Ⅱ類aはTK209に, Ⅱ類bも同じくTK209の範疇に属するものであろう。I類は6世紀前葉, Ⅱ類aは6世紀後葉, Ⅱ類bは6世紀末~7世紀初頭に位置づけられるものであろう。特にⅡ類bに分類した1群(第21図8~10)は阿哲郡神郷町の安信古墳群の4号墳, 6号墳, 1号土壙墓, 塚谷古墳(註11), 迫三方塚古墳, 二野No21横穴式石室(註12)など神郷町, 哲西町内の古墳から出土するものと酷似する。このタイプの須恵器は当地域の工人による製作が指摘されているが(註13), Ⅱ類bもこれらと同じ窯で焼成された可能性をもつものである。

平行叩目をもつ土器

表面採集, 灰黒色土層, 1号住居址において平行叩目を施した土器が7点出土した。このうち, 第17図1は外面が強火を受けており, 製塩土器(師楽式土器)と呼ばれているものである(註14)。1号住居址出土のもの(第9図2)は師楽式土器ではないが(註15), 第17図2, 3, 第20図6~8は製塩土器の製作技法, 胎土等に酷似するが断定できない。師楽式土器は西江遺跡(註16)において多量に出土し, そのほか宗金遺跡, 新市谷遺跡附近でも発見されており(註17), 山間部における製塩土器の在り方があらためて問題となってきた。本遺跡出土の師楽式土器は古墳時代後期(6世紀中葉)に属するものであり, 他の平行叩目をもつ土器もほぼ同時期のものであろう。

3. 総括

土壙, 石組溝, 溝は時期を決定する遺物がないため問題が残るが, その用途について述べ総括にかえたい。

土壤は砂、砂質土が堆積しており、水がたえず湧くことから利用方法が限定されるであろう。浅い素掘りの井戸のような機能をもっていたと考えられる。石組溝は前述したように、溝としての機能に問題があり検討が必要である。溝は丘陵斜面を斜めに走行する形をとっている。この丘陵は削平を受けているため低く、平坦になり、丘陵の面影を残していないが、比高差のある西から東に延びる丘陵であったことが、東側の用地外でも容易に想像できる。このような丘陵端部付近を走行する溝はどのような機能をもつであろうか。

溝の検出状態からみれば、集落をめぐる環溝よりも灌漑用水路としてとらえる方が妥当である。なお、溝の両側には、しばしば護岸用の杭がみられるが、本遺跡では検出できなかった。

溝の規模からみて幹線用水路の1つであり、この近辺には谷水田が存在したと考えられる。本遺跡では水田層が検出できなかったが、弥生時代後期における丘陵と谷水田の関係を知るうえにおいて、このような溝の在り方はさらに検討する必要があろう。

註

- (1) 田辺昭三 「陶邑古窯址群1」平安学園考古学クラブ 1966年
- (2) 坪井清足 「岡山県笠岡市高島遺跡調査報告」 1956年
鎌木義昌編 「日本の考古学II 縄文時代」河出書房 1965年
- (3) 間壁忠彦、間壁葭子 「備前焼研究ノート(2), (3)」「倉敷考古館研究集報第2号(1966年), 5号(1968年)」
- (4) 註(1)と同じ。
- (5) 註(1)と同じ。
- (6) 間壁忠彦、間壁葭子 「備前焼研究ノート(1), (2), (3)」「倉敷考古館研究集報第1号(1966年), 第2号(1966年), 第5号(1968年)」のⅢ期に編年されるものに類似するが、胎土、焼成等が異なる。岡山県教育委員会「赤野遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(3)」1973年で出土した擂鉢(大溝出土)に類似する。
- (7) 哲西町 「哲西史」 1963年
- (8) 岡山県教育委員会 「資料、中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実施遺跡一覧表」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(4)」を参照のこと。
- (9) ほとんど黒土BⅡ式土器である。
- (10) 註(1)と同じ。
- (11) 岡山県教育委員会 「下神代の古墳」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(4)」 1977年
- (12) 岡山県教育委員会 「追三方塚古墳」「二野遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(5)」 1977年。
(13) 同一整形技法が考えられる。註(11)と同じ。
- (14) 近藤義郎編 「日本の考古学V 古墳時代下」 河出書房 1966年。
- (15) 近藤義郎氏の御教示による。
- (16) 岡山県教育委員会 「西江遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(6)」 1977年。
- (17) 井上弘、竹田勝氏の御教示による。



(1) 大倉遺跡全景（北側より）



(2) 溝断面（1区と2区の境界断面）

図版2



(1) 溝断面



(2) 1・2・3区全景 (北西より)



(1) 溝全景 (東より)



(2) 溝完掘全景 (北西より)

図版4



(1) 土壌全景写真



(2) 石組溝全景写真



(1) 1号住居址全景



2) 1号住居址断面

図版6



(1) 4区全景（南西より）



(2) 4区全景（北東より）



(1) 溝内出土状態（土器）



(2) ふいごの羽口出土状態

図版8



1



2



3



4



6



8



5



9



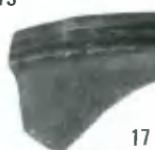
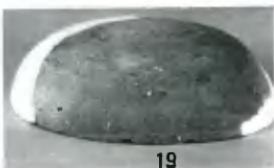
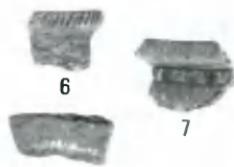
7



10



11



図版 10



1



6



2



7



8



3



4



9



10



5



11



12

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（20）

中國縦貫自動車道
建設に伴う発掘調査 10

昭52年6月印刷

昭52年6月発行

発行 岡山県教育委員会

印刷 岡山県出納局用度課